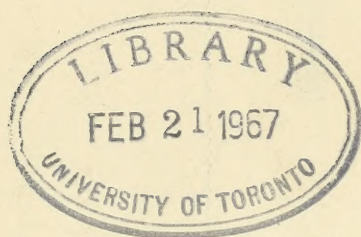
# 國文注釋全書

東宮侍講 本居豐頴
文學博士 木村正辭 校訂
文學博士 井上賴圀

# 國文註釋全書

東京
國學院大學出版部刊行

## 目録

# 緒言

一古今餘材抄ハ僧契仲ノ著ニシテ寫本三十卷アリ、古今和歌集ヲ詳解シタルモノ、著者嘗テ万葉代匠記ヲ著シ、數多ノ珍書ヲ集メ參考應用ニ供シタル、其ノ材料ノ餘レルヲ利用シテ編纂シ、彼ノ工匠ノ家ヲ作リテ木材ノ餘リアルニタトヘテ餘材抄ト名付ケタル由自序ニ見エタリ、本書ハ内閣文庫所藏ノ續群書類從中ノモノヲ底本トシ、宮内省圖書寮本、本大學本等ヲ以テ校合セリ、

一尾張乃家苞ハ石原止明ノ著ニシテ五卷ナリ、本居宣長翁ノ美濃乃家苞ノ説ヲ評論シ、新古今集ノ歌ヲ詳論註釋シタルモノナリ、本書ハ内國文庫所藏本ニ據レリ、

明治四十二年五月

編者識ス

# 古今餘材抄

全

國學院大學出版部

# 古今和歌餘材抄卷一

これをしも餘材抄となつくることはさきにゆゑありておもひかけす萬葉集の代匠記つくれることありそれつくるとて文の苑に入り筆の林をわけて山といへは白雲のかゝらぬ山なく杣といへはまさきのつなはへぬ杣なくして引來れる木は高砂の松まきもくの檜原泊瀬の川邊のふたもとの杉しのたの森のちゝの楠をよひなき月のかつら星の楡に至るまて心をすみなはにかけ思ひを斧にめくらさすといふ事なくしてちひきの石かたきしるしをするまきはしらふとしきことわりをたてゝことすてになりにしかはしらつちをけつるたくみにあらすして鼻をそこなはす石をあてとせしひた人にあらすして斧をからさることをおもふに心ひとつによろこほひてすくふつはめの飛たちぬへくあさるすゝめのおとりぬへし家をつくるには必あまりの木ありかしこをあかくしてこゝを山をなしかしこをかふろにしてこゝを林となすゆゑにしかはあれとたゝなほやはくたすへきとてさらにみつはよつはなるものつくることあるになすらへてかくは名付たるなり又いはく友とせしもとの下河邊のなにかしか菅家萬葉集紀氏六帖これらにある此集の歌のたかへるをかたはらにかきつゝけおけるをすてしと思ふより又ものゝはしにしるしおけることゝもをすてしとおもふよりは事のおこりて玉たすきこなたかなたをかけたれはそのあまりの木いつとなく歌の源よりなかれてこの詞の海に出つるなめり

やまとうたは人〔ひとつイ〕のこゝろをたねとしてよろつのことのはとそなれりける

これはまつ和歌の根本の心を述たり眞名序に夫和歌者託其根於心地發其花於詞林者也といへるこれにあたれり顯昭法橋の抄には一篇のうち皆眞名序を引合せて註せられたりけにもたすくる事おほしされとも章句の釣鎖次第おなしからす又こゝにみえぬ事もあれは彼は後に註する故にこゝに引へき事ともゝおほくはかなたにゆつれり心を得て引合て見るへしやまとはもとは和州の別名なるを嘉號なるをもて此國の惣名に用たりもとよりの名は大八洲國とも豐葦原國ともいへり別名なりといふ故は日本紀第一云然後同宮共住而生兒號大日本豐秋津洲次淡路洲云々又淡路洲を胞として大日本豐秋津洲を生給ふともあり第三云及至饒

速日命乘天磐船而翔行大虚也睨是郷而降之
故因目之曰虚空見日本國又云三十一年夏四月
乙酉朔皇輿巡幸因登腋上而丘而廻望國状
曰妍哉乎國之獲矣雖内木綿之眞近國猶如蜻蛉
之臀呫焉由是始有秋津洲之號也これによれはや
まとも秋津島もみな別名なるを惣名とすることは
たとへはひとつといふはふたつみつに對する數の
初にて別なれともよろつあらゆる數も皆是にふ
くみ仁は五常のひとつなれと仁者といふに五常も
れさるか如くなれはなるへし根本は惣名をもてつ
けたる別名にても有へけれとも其義は物にみえぬ
事なれはいひかたし日本をも倭をも義訓してやま
とゝはよめとも實には山路の義なり萬葉集第四云
難波天皇妹奉上在山跡皇兄御歌歌にはあまた
山跡とかけれとそれは猶かりてかけるにやとも見
へしこれにまさしう名のよし顯はれたり日本紀私
記に頭號に付て注て云天地剖判泥濕未燥是以
棲山往來因多蹤跡故曰山跡山謂之耶麻跡
謂之止又古語謂居住爲止言止住於山也是
は二義をもて釋すれとも惣名と定むる上に釋すれ

は幷に嘉號の心を得すさきにいふことく別名なれ
は洲壤初て成時に和訓に限りて泥濕のかはるへき
にあらねは我此義をとらす又文に入て後大日本豐
秋津洲の下釋に云可爲我國之惣名歟而大八洲
之專一也此爲何國哉答代々講書之時不見此問
答但先師相傳云此今大倭也國陰陽二神最初依
生此國以我國之總名號之今いはく此義當文
なしいはれさる事上に引ける文をもて知へし神武
紀云抑又聞於鹽土翁曰東有美地青山四周云々
景行紀天皇思邦歌曰夜摩苦波區珥能摩倶羅摩多々
儺豆久阿烏伽枳夜摩許莽例屢夜摩苦之于漏破試云
々是等和州をのたまへり和州は四面まことに皆山
なれは往來の跡山におほかるへきことわりなり跡
は足止の心也上略すれは只止なり又山城は奈良山
の北にあたれはもと山背と書て山のうしろの義な
り河おほけれは河内とつけ難波の大津によりて津
國の名あれは和州も山處の義にても名付たる歟鹿
のたちとなといふともしは處也私記に古語謂居住
爲止といへりとゝまりとゝまるところあと皆止の
心を具せり山に動きなきをもて其德とす論語に仁

者樂山といふも此心なり五常を五方に配する時に仁は東にあたる故にもろこしに四夷を釋するにも東夷には仁をあたへたり釋名に山は產なり產生物なりと註して萬物を化產するも山の德なれは千世萬世を經ても仁君の寶位動くことなくしてよろつのもの化產して富みゆたかなる所といふは殊に嘉號なれはあまたある名の中にやまとをおほく用ひ來れり然るに私記に臆說をして嘉號をかへりて醜名となせるを世こそりてわきまふることなくして此說によりて來れる事おほつかなし元明天皇の御世に郡鄕等の名さへよき字をもて名つけよと勅したまへるに况や天下の惣名に不吉の名をよはんやよく〳〵思ふへしうたは釋名云人聲曰レ歌々柯也如三草木有二柯葉一也これにふたつの心あるへし柯葉を見テ元來其草と知ことく歌によりて心さしの顯はれて知らるゝ心歟又柯葉の草木をかさるとく聲の曲折高下は詞のかさりとなる心歟所詮二義を兼て心得へし歌は此國の詩也子夏か詩序云詩者志之所レ之也在レ心爲レ志發レ言爲レ詩情動二於中一而形二於言一言レ之不レ足故嗟二歎之一嗟二歎之一不レ足故永二歌之一永二歌之一不レ足不レ知二手之舞足之蹈一レ之也心さしの言に顯はるゝを詩といひ詩をは詠歌すれはうたといふ名は始終のことなる事あれと其心はおなしよりて續日本後紀幷萬葉集には歌を詩といへり人の心をたねとしては顯昭の古今抄にはひとつ心をたねとしてと有ひとつ心よろつのことの葉かんなにかける物なから對する心さもあるへきにや下に忠岑か長歌にもひとつ心そほこらしきとよめりたねといふは種子は勿論にて根ともいへるにや神代紀上云原二其物根一云々これ根の字をたねとよめり眞名序には託二其根於心地一といへり種より生するも根より生するも同し心なり此集のもとの名續萬葉集なれはよろつのことのははそれを思はへたるにやたねより葉のあらはるゝことく心さし歌となりてまことといつはりさかしきおろかなる人いつくにかかくすことを得む家より國におよひ國より天か下にいたるまて用をなすことすくなからす世のさかへおとろふるも歌とゝもなりいはんや此歌は神のはしめたまへる道にて我朝におきては双ひなき事なり此故に藤原敦光朝臣和歌序云我朝風俗相歌爲二本生二於志一形二於言一記二一事一詠二一物一誠爲二

諷諭之端ニ長著ハス二君臣之美一

世の中にある人ことわさしけき物なれは心におもふことをみるものきくものにつけていひいたせるなり

是は上にいへる事を委しくことわる也ことわさは事業なり諺にはあらす定家卿の和歌無師匠とのたまへる公言もこゝもとより出たるなるへし

花になくうくひす水にすむかはつの聲をきけはいきとしいけるものいつれかうたをよまさりける

是は猶はしめの心をひろめて只人のみに限らす禽獸に至るまで聲あるものはおの〳〵それらか歌なりといふ心なりわろく心得て鶯蛙のよめる歌なといふことは用へからす眞名序には春鶯秋蟬といへり聲あるものひとつふたつをいたして餘をこれになすらふるなり今の對句長明か無名抄にほめたりまことに末の世にかける物にある對句は詩文の對句を假名にかきたらんやうなるをこれらは耳にたゝすして假名めきたり

ちからをもいれすしてあめつちをうこかしめにみえぬおに神をもあはれとおもはせをとこ女の中をもやわらけたけきものゝふの心をもなくさむるはうたなり

以上は歌の徳用を擧たりあめつちをうこかしは感動なりうこかしといはむとて詞につきてちからをもいれすしてといへりめにみえぬおに神は淮南子云象肉之味不知於口鬼神之形不形於目能因か天河苗しろ水にせきくたせと讀みて雨をふらせ伊勢物語にきしの姫松幾世へぬらんとよめるに住吉の神けぎやうしたまひ貫之のありとほしの神に歌を奉りて馬のやまひたちところになほれるはおに神をあはれとおもはするなり奥義抄序云貞盛の妻のとらはれて陣に有りときゝて將門か衣をおくる時の歌

　よそにても風のたよりに我そとふ
　　枝はなれたる花のなけきを

たけきものゝふもしれりとかゝれてこなたよりなくさむるにはあらねとやはらひたる心あれはなくさみぬへし

此歌あめつちのひらけはしまりける時よりいてきにけり（あまのうき橋のしたにて女神を神となりたまへる事をいへる歌なり）

これは上をうけて歌のはしまれる事をあかせりあ

めつちのひらけはしまるとは神代紀云開闢之初洲壌浮漂猶游魚之浮水上也此時をいへるにあらす古語拾遺云一開闢之初伊弉諾伊弉冊二神共爲夫婦生大八洲國及山川草木此心なり神代紀云伊弉諾伊弉冊尊立於天浮橋之上共計曰底下豈無國歟廼以天之瓊矛指下而探之是獲滄溟其矛鋒滴瀝之潮凝成一島名之曰磤馭盧島二神於是降居彼島因欲共爲夫婦産生洲國便以磤馭盧島爲國中之柱而陽神左旋陰神右旋分巡國柱同會一面時陰神先唱曰憙哉遇可美少男焉陽神不悦曰吾是男子理當先唱如何婦人反先言乎事既不祥宜以改旋於是二神却更相遇是行也陽神先唱曰憙哉遇可美少女焉　このおなうれしやうましをとめうましをとこにあひぬとかたみにのたまへるを歌といへりこれより下にいたるまてある細注を古注といふ又は小注といふ一説につらゆきなりといへともしからす下に六義にいたりて貫之をもとけりもしさきより此六義をさためたらんを出して貫之のもとかれん事はさも有へしみつからさためてみつからもとくことあらんや又兼盛か歌を出せり兼盛は貫之より後天暦の比の作者なり又公任卿なりといへともしからす顯昭抄に公任注とてひかれたるは別に眞名なりしかれはたゝ天暦の比より後の或人の註と心得へし心敬僧都私語といふ書にも貫之にあらすといふ下のいはひ歌の所に引へし此註にあまのうきはしのしたといへるは必しも常の橋の下といふかことくにはあらす初天浮橋の上にたたして國をもとめ後に天くたりて磤馭盧島をめくりてめ神を神となりたまへはうき橋の下にてとはいへり

しかはあれとも世につたはることはひさかたのあめにしては下てるひめにはしまり（下てるひめとはあめわかみこのめなりせうとの神のかたちをかたにうつりてかゝやくをよめるえひすうたなるへしこれらはもしのかすもさたまらすうたのやうにもあらぬことゝもなり）

ひさかたはあめともそらともつゝくる枕詞なり萬葉に久堅とも久方ともかけり日本紀に開闢の初をいふに天先成而地後定といへり淸陽なる物は健剛なる物なれはたなひきのはりて天となれるを地にくらふれは久しく堅しとも久しき方ともいふへし下照姫は地神大己貴命の女なれども天にありて

よめはあめにしてはといへり注にあめわかみことゝいへるはおほつかなし日本紀に天稚彦なり舊事本紀古事記共にこれにおなし比と美と五音通といへとも時により事によるへし

神代紀下云天照大神勅天稚彦曰豐葦原中國是吾子可王之地也然慮有殘賊强暴横惡之神者故汝先往平之乃賜天鹿兒弓及天眞鹿兒矢遣之天稚彦受勅來降則多娶國神女子經八年無以報命故天照太神乃召思兼神問其不來之狀時思兼神思而告曰宜且遣雉問之於是從彼神謀乃使雉往候之其雉飛下居于天稚彦門前湯津杜樹之杪而鳴之曰天稚彦何故八年之間未有復命時有國神號天探女見其雉曰鳴聲惡鳥在此樹上可射之天稚彦乃取天神所賜天鹿兒弓天眞鹿兒矢便射之則矢達雉胸遂至天神所處時天神見其矢曰此昔我賜天稚彦之矢也今何故來乃取矢而呪之曰若以惡心射者則天稚彦必當遭害若以平心射者則當無恙因還投之即其矢落下中于天稚彦之高胸因以立死此世人所謂返矢可畏之緣也時天稚彦之妻子從天降來持柩上去而於天作喪屋殯哭之先是天稚彦與味耜高彦根神友善故味耜高彦根神登天弔喪大臨焉時此神形貌自與天稚彦恰然相似故天稚彦妻子等見而喜之曰吾君猶在則攀持衣帶不可排離時味耜高彦根神忿曰朋友喪亡故吾即來弔如何誤死人於我耶乃拔十握劒斫倒喪屋其屋墮而成山此則美濃國喪山是也世人惡以死者誤己此其緣也時味耜高彦根神光儀華艶映于二丘二谷之間故喪會者歌之曰或云味耜高彦根神之妹下照媛欲令衆人知映丘谷者是味耜高彦根神故歌之曰阿妹奈屢夜乙登多奈波多廼汚奈餓勢屢多磨廼彌素磨屢阿奈陀磨波夜彌多爾輔施和拖邏須阿泥素企多伽避顧禰又歌之曰阿磨佐箇屢避奈菟謎廼以和多邏素西渡以嗣箇播箇拖輔智箇多輔智爾阿彌播利和拖嗣妹慮豫嗣爾豫嗣豫利據禰以嗣箇播箇拖輔智此兩首歌辭今號夷曲　これによるに喪につとへる人のうたにて或は下照姫のうたともいふとあるを今は或人の説につきて下照姫の歌とさたむ下照姫は天稚彦妻の此國に天降り來ての妻なり上に引文に天稚彦妻子なとといへる妻は天降らぬさきの妻なり日本紀

古事記等に此所に異説あり委は披きて考ふへし夷曲といへるによりて注にえひすうたといへる歟但初の一首は濱成式に句こそ少違ひたれと雅躰十種のうち第五長歌に出されたり日本紀萬葉等にも句の數字の數の定まらぬ歌おほしいかてこれを歌のやうにもあらぬとはいへるにかおほつかなし此二首幷に古事記にある八千矛神の歌沼河姫の歌酢芹姫の歌は長歌の濫觴といふへし

あらかねのつちにしてはすさのをのみことよりそおこりける

あらかねはつちの枕詞なり荒金眞金といふ時荒金はまたふかぬさきにてたゝつちにてあれはそれによせていふなり菅家萬葉集に

あらかねのつちのしたにてへしものを
けふのうらてにあふをみなへし

ふるき物にはこれらならてはみえぬにやすさのをのみことの御歌は下照姫の歌よりさきなれと此國にてよませたまへはつちにしてはといふ

ちにやふる神世には歌のもしもさたまらすすなほにしてことのこゝろわきかたかりけらし

ちはやふるは神の詞言なり欽明紀云瀬河浦神嚴忌人不敢近之云々　延喜式第八鎭火祭祝詞云皇御孫乃朝廷爾御心一速比給波志止爲天進物波云々此いちはやひも上略したる詞也いちはやひは俗にたゝはしきといふ心なり古事記幷に萬葉に知波夜夫流とかき又万葉に千石破千劔破なと書たれは昔はふを濁て讀けるも此故なり神代紀殘賊強暴横惡之神と書ちはやふるあしきかみとよめるによれは邪神にのみいふへきに似たれとそれは多分にこそあれ神は何れも觸穢なとをいみてたゝはしくこそおはすなれは善神にもかよひていふ也只神のみにもあらすちはや人ちはやふる人ともよめりたけきものゝふにもあしき人にもいへりすなほは質朴なりこれはさきの下照姫の歌古事記にみえたる八千矛神の御歌なとの事なり

人の世となりてすさのをのみことよりそみそもしあまりひともしはよみける　すさのをのみことはあまてるおほん神のこのかみなり女とすみたまはんとていつもの國に宮つくりし給ふ時にそのところにいろのくものたつをみてよみ給へるなりやくもたついつもやへかきつまこめにやへかきつくるそのやへかきを

或說に素盞鳴尊は地神なれは天神に對して人の世といふと思へるは誤なり天神七代には歌なし喜哉遇可美少男なといふとこは濫觴といふはかりにて歌としもなし上に神代にはうたもしの數もさたまらすなといひ眞名序には素盞鳴尊の御歌豐玉姫の歌の事なとをいひて其次に爰及人代此風大興とあれは地神をも神代とせりしかれは人の世となりて後すさのをのみことの御歌にならひて三十一字に定めてよむといへる心也注に素盞鳴尊は天照太神の御弟なるをこのかみといへる事不審なり顯昭抄にも不審をのこされたり日本紀云古者不レ言二兄弟長幼一以レ男稱レ兄以レ女稱レ妹といへる事はあれと是はみつからいへには別義なり古事記上云爾須佐之男命詔二詔其老夫一是汝之女者奉二於吾一哉答曰恐亦不レ覺二御名一爾答詔吾天照太神之伊呂勢者也自伊下三字以音故今自天降坐也　此いろせは弟の字なり母の字をいろとよめは同母弟といふ心なり兄の字をせとよめはまきるゝやうなれと弟の字をもまたせとよめはことはりに任するに弟の字なり和名集に備中下道郡に弟勢といふ郷の名あり翳はせのひゝきをそへたる字なり紀伊の伊のことしこれ弟の字をせとよむ證なり其上舊事本紀云素盞鳴尊詔曰吾者天照太神之弟也今自天降焉これ上の古事記の文と同しけれは爭ひなし或註に源氏夢浮橋にあこかうせしいもうとゝかき系圖に女子を末にかく事なとをいひてすくへともそれは別義なり今はかく注せされともくるしからぬ所に注するは事を明らかにせんためなりまきるへくは注なからんにはしかし

神代紀上云是時素盞鳴尊自レ天而降至二於出雲國簸川上一時聞二川上有二啼哭之聲一故尋レ聲覓往者有二一老翁與一老婆一中間置二一少女一撫而哭レ之素盞鳴尊問曰汝等誰也何爲哭之如レ此耶對曰吾是國神號二脚摩乳一我妻號手摩乳此童女是吾兒也號二奇稻田姫一所二以哭一者往時吾兒有二八箇少女一每レ年爲二八岐大蛇所一レ呑今此少童且臨レ被レ呑無レ由二脱免一故以哀傷素盞鳴尊勅曰若然者汝當以レ女奉レ吾耶對曰隨レ勅奉矣云々然後行覓二將婚之處一遂到二出雲之清地一焉清地此云素鵝乃言曰吾心清々之此今呼此地曰清於彼處建レ宮或云時武素戔鳴尊歌之曰夜句茂多莵伊都毛夜覇餓岐莵摩語昧爾夜覇餓枳莵倶盧贈迺夜覇餓岐袁

乃相與遘合而生ニ兒大己貴神ニ　これにはくものたちたることをしるされず舊事本紀云素盞嗚尊行覓ニ將婚之處ニ遂到ニ出雲之清地ニ亦云須賀須賀新乃詔曰吾心清々之於ニ彼處ニ建ツ宮之時自ニ其地ニ雲立騰矣因作ニ御歌ニ曰これは雲のたてる事はあれと御歌を略せらる　古事記云茲大神初作ニ須賀宮ニ之時自ニ其地ニ雲立騰爾作御歌其歌曰夜久毛多都伊豆毛夜幣賀岐都麻碁微爾夜幣賀岐都久流會能夜幣賀岐袁　これは雲のたてる事も歌もそなはれり雲の立出たる事はあれと八色雲とはなきを今やいろといへるはやくもたつとあるを八色と心得たる歟おほつかなし八雲とは八は數のおほきにいへは八雲は八重雲也八重櫻八重山吹なとかならす八重ならねとおほくかさなれるをいひならへるかことし出雲とは國の名には此御歌によりて後に付たるなるへけれは此時はまた出雲の枕言に八雲たつとのたまへるにはあるへからす上の八雲を重ねて出る雲とのたまへる詞なりとしるへし顯宗紀賓壽御詞にも出雲者新墾新墾之十握稻云々此出雲はにひはりの國に稻のしけくて雲の出くるやうにさかゆるをのたまへは今も垣いすみやかに出來る事雲のことくなるによそへて出る雲の八重垣とはつゝけさせ給ふ歟つまこめには稻田姬をこめおきたまはんとて作り給ふ宮のための八重垣なれはのたまふ歟萬葉につまこもるやかみの山ともつまこもるやのゝ神山ともつゝけたり又稻田姬とゝもにとやつくらんかくやつくらんとて作らせ給ふ心歟萬葉第三に

妹としてふたり作りし我山は　木たかくしけくなりにけるかも

これはふたりいひあはせて作る證なり

萬十七
我宿の花橘をはなこめに　玉にそあかぬくまたはくるしみ

後撰
けふ櫻しつくにわか身いさぬれん　香こめにさそふ風のこぬまに

同
垣こしに散來る花をみるよりは　ねこめに風の吹もこさなん

此三首は妻こめには妻とゝもにといふ心の證なり清少納言にむくろこめにといへるも身とゝもにといふ詞なり古事記に都麻碁微爾とあるは殊につまとも

にの方に近し若は出雲八重垣とは霧のまかきなといふとく雲の立めくるをすかの宮のために八重垣つくるとよませたまへる歟其時は妻こめは妻をこむるなりふたゝひその八重垣をとあるはあつき詞なり佛經に偈頌ありて重て其義をのへ毛詩にもおなしことを文字をすこしかへて三四章にもわたりていへるたくひおほし此國にも此御歌を初て上古の歌にかやうによめることおほきは三國自然に符を合せたるかとし上句のやへかきをはすみてよむへきよしいふ說は清濁を陰陽に配する後人の心なり日本紀には三の垣皆濁の字をかゝせたまひ古事記にも皆賀の字をかゝれてともに濁音の字を用ひられたれは聞よくにこりてよむへしもし清濁をわかちて陰陽に配せはいつものつつまこめのこも皆すむへくや抑此御歌五七五七七皆陽の數なるを三句を上とす三も陽數也二十七字もまた陽數なり是を天にかたとる二句を下とす二は陰數なり十四字もまた陰數なり是を地にかたとる陰數なくして陰數有五句にあはせ三十一字にあはすれは又陽數となる天はたふとく地はいやしけれは上は長く下は短し五行五常等の配當盡る則あるへからす神慮より出たる事なれは造作もなくして自然に甚深の理趣侍るへし

かくてそ花をめて

日本紀に感をめつとよめり花に草木をかさねたり

鳥をうらやみ

鳥をうらやむこと時につけ事によりておほかるへし此鳥といふに禽獸蟲魚あり

萬葉　世の中をうしとやさしと思へとも　飛立かねつ鳥にしあらねは

同　かるの池の入江めくれる鴨すらも　玉ものうへにひとりねなくに

同　朝な〳〵あかるひはりになりてしか　都にゆきてはや歸りこん

伊勢集　鶯に身をあひかへはちるまても　我物にして花はみてまし

かすみをあはれひ

あはれふは憐憫の字なりこれをおもしろしともかなしともうましともよめり皆同し心なり霞に雲霧等をかねたり

露をかなしふこゝろことはおほくさま〳〵になりにける

かなしふもあはれふなり物を愛する事きはまれはあはれにもかなしくもなれは常のあはれもかなしも末はひとつなり露に雨霰霜雪等をかねたり

とほき所もいてたつあしもとよりはしまりて年月をわたりたかき山もふもとのちりひちよりなりてあま雲たなひくまておひのほれることくに此歌もかくのことくなるへし

樂天座右銘云千里始ニ足下一高山起ニ微塵一吾道亦如レ此行レ之貴ニ日新一本朝は昔より樂天の詩文をたふとへはこれをもてかゝれたるにや禮記中庸云君子之道譬如ニ行レ遠必自レ邇譬如ニ登レ高必自レ卑老子曰千里之行始ニ足下一莊子曰丘山積レ卑而爲レ高江河合レ水而爲レ大荀卿子云土積成レ山風雨興焉文選李斯上ニ書始皇一云泰山不レ讓ニ土壤一故能爲ニ其大一河海不レ厭ニ細流一故能成ニ其深一ちりひちは顯昭は塵泥なりと申されたれとまさしくは塵土とかくへし和名集に遠江國城飼郡に土形(ヒヂカタ)あり又應神紀に大山守皇子の裔にも土形氏あり共に土をひちとよめり

萬葉
　ちりひちの數にもあらぬ我ゆへに
　　思ひわふらん妹かかなしさ

一條禪閤の御説に二條家にはちりいちとよみ冷泉家にはちりひちとよむひの字を下においてはいとよむことはこひおもひなと勿論なるに上においてはいとよむこと不審なりたゝちりひちなるへきなりとのたまへり御説いはれたれとも音便にいといへるをもさのみは難すましき歟萬葉に見之欲(ミカホシ)といへるは見る事のあかすほしきなりこれを見果石見容之見親石なと借字にかけるを見れはほををとよめりこれも上にあるほををといへるなれは例證とすへし此おひのほれるは生の字をおふともなるともよめは山のなりのほるなり

なにはつのうたはみかとのおほんはしめなり「おほさゝきのみかとのなにはつにてみことゝきこえける時に東宮をたかひにゆつりてくらゐにつきたまはて三とせになりにけれは王仁といふ人のいふかりおもひてよみて奉りける歌なりこの花はうめの花をいふなるへし」

これより歌のおほやけにもわたくしにも用ひあり

けることを舉たり今は王仁か歌にいさめられさせたまひて仁德天皇の御位につかせたまへることをいへはみかとの御はしめとはかゝれたる歟注に東宮をたかひにゆつりてといへる事おほつかなし應神紀云四十年春正月辛丑朔甲子立菟道稚郎子爲嗣即日任大山守命令掌山川林野以大鷦鷯尊爲太子輔之令知國事かゝれは菟道稚郎子太子に立たまへる事は紛なし應神天皇崩御の後御位につかせ給はん事をこそ互にゆつらせたまひつれ又宇治皇子の御事を申さすしてたかへにゆつると云るもおほつかなしもしうちのみこと東宮をたかひにゆつりてといへるをうちのみことといふ事の落たる歟又王仁か歌を出さすしてこの花はなと注せるもいかにそや若末に出れはかねてこゝに註しおく歟そこにこそ註すへきことわりなれは之も云れす推諸するに下のうねめかことをいへる註に冷泉家の本にはあさか山の歌ありといへはこゝにもなにはつの歌を出して註しけんを下にそへ歌の所に出れはこゝなるをは後人わつらはしとおもひてまぬきて註を殘したるにや或註云あさか山の歌は人のあまねく知たる事なれはなきをよしとすとあれとそれはいはれすあまねく知れるをもて歌を出すましくは注する事無用なり又いつも八重垣の神詠は猶あまねく知れる事なれと出もせるをや

大鷦鷯皇子と申御名のよしは日本紀云初天皇私云仁德生日木菟入于産殿明旦譽田天皇喚大臣武内宿禰語之曰是何瑞也大臣對言吉祥也復當昨日臣妻產時鷦鷯入于産屋是亦異焉天皇曰今朕之子與大臣之子同日共産並有瑞是天之表焉以爲取其鳥名各相易名子爲後葉之契也則取鷦鷯名以名太子曰大鷦鷯皇子取木菟名號大臣之子曰木菟宿禰或注に此みかとかたちのちいさくまし〳〵けるにやといへるは國史をも見すして御名に付てのおしはかりなり日本紀に大皇者風姿岐嶷これ宇治皇子の仁德天皇の玉躰をほめ奉り給へる御詞なり太子を東宮と申故は　左傳正義云四時東爲春萬物生長在東西爲秋萬物成熟在西以此君在西宮太子常處東宮或可據見象西北爲乾乾爲君父故君在西東方爲震震爲長男故太子在東也春宮と書て本朝のならひにとうくうと

よむも初の義によりてなり位につきたまはて三とせになりにけれはとは舊事紀曰四十一年春二月譽田天皇崩時皇太子菟道稚郎子皇子讓位于大鷦鷯尊各相讓之間以久不即皇位皇位空之既三載ゆつりあひ給へるよしは日本紀にくはし今略之

王仁は應神紀十六年春二月百濟人王仁來之則太子菟道稚郎子師之習諸曲籍於王仁莫不通達古事記中應神天皇段云又科賜百濟國若有賢人者貢上故受命以貢上人名和邇吉師即論語十卷千字文一卷并十一卷付是一人即貢進（此和邇吉師者文首等祖）此和邇といへるは王仁の音の轉せる歟吉師は嘉號歟　續日本紀云延曆十年四月戊戌左大史正六位上文忌寸最弟播磨少目正八位上武生連眞象等言文忌寸等元有二家東文稱直西文號首相比行事其來遠焉今東文擧家既登宿禰西文漏恩猶沈忌寸最弟等幸逢明時不蒙曲察歷代之後申理無由伏望同賜榮號永貽孫謀有勅責其本系最弟等言漢高帝之後曰鸞々之後王狗轉至百濟久素王時聖朝遣使徵召文人久素王即以狗孫王仁貢焉是又武生等之祖也於是最弟及眞象等八人賜姓宿禰かゝれは王仁は東西文氏の先祖なり延曆九年七月左中辨正五位上兼木工頭百濟王仁貞等か奉れる表には異義あり紀を披て見るへしいふかり思ひてとは久しく位を空しくせさせ給ひては世の中いかゝあらむとあやふみ思ふなり之は宇治皇子かくれ給ひて後も猶しはし位につかせ給はぬ時によみて奉れる歟今は春へとそへたる所宇治皇子のましましたるはとには有へからす仁德紀云元年春正月丁丑朔己卯大鷦鷯尊即天皇位宇治皇子いつかくれ給ひたる月日は紀に見えねと正月三日に御位につかへ玉へは此まへに奉りける歟この花は顯昭抄云歌論議云此花とは大根の花か而古今註相違歟但孫嬺式云浪花津之蘆菔送二三冬而春二月舊枯野之本柏因新交而恨故人云々順和名云蘆菔（大根也）醫書云蘆菔同之以上顯注也孫嬺式の說は何のよれる所ありてか蘆菔とは定けん何の花とさゝねは只すへて花にてもあるへきをことやうの事なり萬葉第二十に家持卿

　　櫻花今さかりなりなにはの海
　　　　おしてる宮にきこしめすなへ

此歌今の王仁か歌をおもへるにやさらすとも引合せて心得へし今梅かのよし注せるは冬こもり今は

春へとさくといへる所さも待るへしよりて昔より此說により來て難波の梅といへり或抄に木の花といふ說有其說也明疑抄にも此說ありいかゝといへり明疑抄は爲家卿作なり　今案木の花を用へし神代紀下云妾是大山祇神之子名木花開耶姫はさくやこの花といへる此御名のことし又云其生兒必如ニ木華一之移落云々

あさか山のことのははうねめのたはふれよりよみてかつらきのおほきみをみちのおくへつかはしたりける時にくにのつかさことおろそかなりとてまうけなとしたりけれとすさましかりけれはうねめなりける女のかはらけとりてよめるなりこれにそおほきみのこゝろとけにける

うねめのたはふれよりよみてとは萬葉集第十六云安積香山影副所見山井之淺心乎吾念莫國右傳云葛城王遣ニ于陸奥國一之時國司祗承緩怠異甚於時王意不レ悅怒色顯レ面雖レ設ニ飲饌一不レ肯ニ宴樂一於レ是有ニ前采女風流娘子一左手捧レ觴右手持レ水擊ニ之王膝一而詠ニ斯歌一爾乃王意解脫樂飲終日　水をもて膝をうつをたはふれといへり葛城王は橘左大臣諸兄を初葛城王といひけれは古來此人なりといへりしからす日本紀第二十九云天武紀下云八年秋七月己卯朔乙未葛城王卒といへり此人なるへしこれも又かくいふ故は文武紀云大寶二年四月壬子命ニ筑紫七國及越後國一簡ニ點采女兵衛一貢レ之但陸奥勿レ貢かくのことく定させたまへるに元明天皇の和銅三年正月聖武天皇の神龜三年九月に采女の事に付て定めらるゝ例有れば改て陸奥より采女をめさるゝよしみえねは諸兄を葛城王といひける時前采女といふもの有ましきによりてなりこれかふたつの間わきまへかたしまうけは饗應なりことおろそかなりとては日本紀に輕易をおろそかとよめりおろそかもおなしかろしむる心なりすさましかりけれはとは王意不悅怒色顯面といへる心なり采女なりける女はこれは昔諸國より采女を奉りければ陸奥より奉りける采女の後に歸りて國にありけるを前采女と云るにや國司のもとに采女と云もの有へからすこのふた歌はうたの父母のやうにてそてならふ人のはしめにもしける

ちゝはゝのやうにとは源氏繪合にまつ物かたりのいてきはしめのおやなるたけとりのおきなにうつほのとしかけをあはせてあらそふといへるもおや

ははしめの心なれはこれより歌の出來る心歟父此歌は共に德ありける歌なれは歌の中にも父母の恩有やうにおもひてといへる歟難波津の歌は王仁かよめはちゝのやうに淺香山の歌は采女かよめは母のやうなる歟ちゝはゝといふよりてならふ人とをさなき子をいへるつき〳〵し曾丹集に淺香山をかうふりにしなにはつをくつにしてよめる歌あり源氏若紫になにはつをたにはか〳〵しうつゝけ侍らさんめれはかひなくなん淸少納言に御すゝり取おろしてとく〳〵たゝおもひまはさてなにはつもなにもふとおほえむことをとせめ給ふに云々

そも〳〵歌のさまむつなりからの歌にもかくそ有へき

これより歌に六義有事をいへりそも〳〵は上をおさへ下を興す詞なり子夏か詩序によりて歌にも六義を立らるれと歌にもとより此理あれはからの歌にもかくそ有へきとはなすらへていふ心なり但もろこしの六義と此國の六義と名おなしくしてかはれる事有下にあらはるへし

そのむくさのひとつにはそへうたおほさゝきのみかとをそへたてまつれるうた

そへ歌は風なりよそへていふ事也　日本紀第三云諷歌子夏詩序云上以レ風化レ下下以レ風刺レ上主文而譎諫言レ之者無レ罪聞レ之者足二以自戒一故曰レ風注呂向曰主文謂立レ詞文雅也譎誘也言誘二人君之意一微以爲レ諫也李善曰風化風刺皆謂二譬喩不一レ斥言一也主文主與樂宮商相應也譎諫詠歌依違不二直諫一也之によれはそへ歌といふ名も風によく叶はぬなり奥義抄云そふといふは題をあらはにいはすして義をさとらするなり又云風比興みな譬喩歌なりたゝしすこしの分別有故六義にわかつか風は題をあらはさすして物を取てひとへにそれになしていふなり今案風化風刺の心にて風の名を得たり題をあらはにいはすして義をさとらしむるをのみは風とはいふへからす下にはかそへ歌なそらへうたといへるにこれのみおほさゝきのみかとをそへたてまつれる歌といふにて知へし

なにはつにさくやこのはな冬こもりいまははるへとさくやこの花といへるなるへし

霜雪の時は冬こもりゐて春をうれは咲出ることく今時いたりぬれは位につかせたまふへきよしを花によそへていへり表はたゝ花のうへなり但此歌も花にそへたるはさる事なれと風喩の心にあらねは只此國のそへ歌にしてもろこしの風によく叶へるにはあらぬにや御位につかせたまふへき時なりといふ事は直諫すとも罪をうへき事にあらすこれより下は撰者の心にて歌をあてらるゝゆゑに歌ことにといへるなるへしと注せらるゝなり

萬葉 うちあくるさほの河原の青柳は
　　今ははるへとなりにけるかも

同 冬木なりはるへをこひてうゑし木の
　　みになる時をはた待我そ

いかなれは此王仁か歌日本紀萬葉集等に載せす子孫文氏の者とも延暦年中宿禰姓を望ける申文にも申さゝりけんかへす〳〵不審のことなり

ふたつにはかそへうた

賦なり詩正義云賦之言鋪也直鋪二陳今之政教善惡一釋名敷二布其義一謂二之賦一　たとへは物のおほかるをひとつふたつと數をよみゆくやうにて有のまゝなるをかそへうたといふなるへしたゝこと歌は有のまゝにひとすちによみて物をかそふるやうにはいはぬをかはれりとすようせすはまきるへし

さく花におもひつく身のあちきなさ身にいたつきのいるもしらすてといへるなるへし　「これはたゝことにいひて物にたとへなともせぬものなり此歌いかにいへるにかあらんその心えかたしいつらにたゝことうたといへるなんこれにはかなふへき」

此歌は拾遺集物名につくみ　大伴黒主
　我心あやしくあたに春くれは
　　花につくみといかてなりけむ

此次にある同しぬしか歌なり鶫をかくしてすなはちつくみかうへをよめりと見ゆさく花におもひつくみとは花故に來居る心なり　あちきなさは日本紀に無端無狀無賴ともにあちきなしとよめり　史記匈奴列傳に無爲伍子胥列傳に無益文選古詩に無爲みなあちきなしと點せりことにしたかひてすこし心かはるへし今は無益とかけるにつきてやすく心得へしいたつきは苦勞なり勞の字をいたつかは

しとよめり伊勢物語にかくてねんころにいたつきけりといへるもいたはるなり又矢の名にいたつき有　和名集云平題箭(イタツキ)楊雄方言云鏃(ヤサキ)不レ鋭(トガラ)者謂二之平題箭一和名以太都岐郭璞曰題猶レ頭也今之戯射箭也いたつきの矢さきはまろなる故に小鳥などに疵をつけすしてとらむとては今もこれにて射る事なりと申すしかれは勞の身に入と云をいたつきの矢の身に入とそへてつくみの花にたはふれをりて人のねらひよりて射るをもしらぬかあちきなき事とよめる歟又つくみをかくしたるのみにて人の花を愛する心ならはまつにも惜むにも身に勞の入來るをはしらて花に思ひつきて貪愛するかあちきなきとよめる歟

清輔朝臣家集に

あつさ弓はるの山へに入ぬれは
　身のいたつきもしられさりけり

これ今の歌の矢の名を勞にかけたりと存して取られたり今是をこゝにとれるは物の名によめるかたにはあらす只歌のさまの物をかそふるやうにいへるをとれるなりこれ貫之の心なり　注にたゝこととは直言にて有のまゝに云心なり土佐日記に行舟のつなての長き春の日をよそかいかまて我はへにけり聞人のおもへるやうなりたゝことなると云々これことはをいたはらす舟中にて四十五日まてゐたる事をよそかいかまてといへるをよのつねのたゝのことそと云心なり　此歌いかにいへるにかあらんその心得かたしとはこれをかそへ歌に出せるか心得かたしといふ心にて歌を心得すといふにはあらさるか下のたゝこと歌に出せるいつはりのなき世なりせはといふ歌をこゝにおかはかなふへしといふ故なりもしは歌なから心得かたしといふ歟今案するにいつはりのなき世なりせはといふ歌はたゝことのみにして敷布の心なしいかてかかそへ歌にかなはん此賦もと屈原宋玉よりこのかた長篇の賦を作れるにてかそへ歌とたゝこと歌とかはれるほとをもなすらへ知へし此注より下皆貫之をもとけり

みつにはなすらへうた

比なり比者方也并(ヘ)也類也取レ類言レ矢似レ有レ所レ擢詩正義云比是以二一物一比(ヲ)二一物一所レ指之事常在二言外一釋名云事類相似謂二之比一かれになすらへてこ

れを知らすれはなすらへ歌なり
君にけさあしたの霜のおきていなは戀しきことに消やわたらむといへるなるへし　「これは物にもなすらへてそれかやうにもなんあるとやうにいふなり此歌よくかなへりともみえすたらちめのおやのかふこのまゆこもりいふせくもあるかいもにあはすてかやうなるなりこれにかなふへからん
君にけさは君をけさの心なりけさといひてあしたの霜といへるは萬葉にけさのあさけにとよめるつヽきなりおきていなはヽ霜のおくといふに君を殘し置てと又起出てといふ事をなすらへたり消やわたらんも思ひに玉しゐのきゆる心ちするを霜の縁にいへり

後撰　おきてゆく人の心をしら露の
　　我こそまつはおもひきえぬれ

下にちさとか歌に
　　けさはしもおきけんかたもしらさりつ
　　思ひ出るそ消てかなしき

注に物にもなすらへてとはさきのかそへ歌に物にたとへなともせぬ物なりといふをふめり歌は萬葉第十二に有たらちねのはヽかかふこのといへり拾遺戀四にはたらちねのおやのかふこのとて人丸の歌とせりたらちねは母の枕言なり垂乳根と書たれは乳味の恩のたれて子を人となす故か又垂乳爲ともあり乳味の恩をたるヽことをする人なれは乳垂爲と躰にいひなすか母を後におやとよみて兩親にかよはし或はちヽをはたらちを母をは今のことくたらちめとさへいひわけたりもし母をおやとよみて兩親にかよはすへくは萬葉に垂乳根の父とも親ともかくへきを毎度母の字をかき或はたらちねのはヽと假名にかきたれはたらちねのおやとよめるは誤なり萬葉第三に父母と書てはおやとよみたれはいつれにても一字をおやとよめる事またくなしされとも菅家萬葉集にも
　　たらちねのおやもつらしなかくはかり
　　思ひにまよふ世にとヽめたる
これをはしめて此集にも後々の集にもよめる事なれはたヽことのもとを知おくへきなり捜神紀云漢禮皇后親採ㇾ桑祀ニ蠶神ニ曰寓氏公主今世或謂蠶

為二女兒一者是古之遺言也　女のかふものにてむすめに似たる事あれに母の手におりて相見かたき女を蠶のまゆにこもれるになすらへていふせくもあるかなといふなりいふせきは萬葉に欝悒とかきていふせくともおほつかなしともゆかしともよめりいつれもおなし心なり誠に此歌はなすらへときこゆ君にけさの歌はなすらへの心おほつかなきに似たり

よつにはたとへうた

興なり　釋名云興物而作謂之興詩正義云見二今之美一嫌二於媚諛一取二善事一以喩二勸之一　文鏡秘府論云三曰比皎曰皎僧皎然也比者全取二外象一以レ興之西北有二浮雲一之類是也王曰（王也玉賦）比者直比二其身一謂二之比一假二如闗々雎鳩之類一是也四曰興皎曰興者立二象於前後一以二人事一諭レ之闗雎之類是也王曰興者指レ物及比二其身一說レ之為レ興蓋託喩謂二之興一也これは闗雎を比と興とに心得たること兩人の所存ことなれは比興隨て異義有へきなり　字彙云興虛陵切音馨作也起也盛也舉也善也又姓又去聲許應切象也又比興比者方二於物一興者託二事於物一興是譬喩之名意有レ不レ盡故題曰興又興說意思也漢儒は此興の字を側聲によめり字彙に去聲許應切にて興者といふより曰レ興といふまてこれに當れり　宋儒は平聲にこれをよむ虛陵切音馨起也といへる是に當れり物に感して心を起して作れはなり　興是借二彼一物一引二起此事一而其事常在二下句一此心也　今たとへ歌となつくるは漢儒の心なり

わかこひはよむともつきしありそ海の
　濱のまさこはよみつくすとも

といへるなるへし「これはよろつの草木鳥けた物につけて心をみするなり此歌かくれたる所なんなきされとはしめのそへ歌とおなしやうなれはすこしさまをかへたるなるへしすまのあまのしほやく煙風をいたみおもはぬかたにたなひきにけり此歌なとやかなふへからん」

戀のかきりなきをもて濱の眞砂とたとへたるをもてたとへ歌とする歟もろこしの興には叶はすありそ海は萬葉に荒磯とかきてありそとよめり良以反里なる故にあらいそをつゝめたる詞なり萬葉第十七にこしの海のありその浪とよめる事ある故にや越中の名所とすれと彼集に數もなくよみてたゝあ

らき磯をいひて名所にあらす又萬葉に只ありそとのみよみてありそ海とはよめる事なし數のおほかるを眞砂にたとふるは經にも恒河砂と說るかとし

萬葉　やほかゆく濱の眞砂も我戀に
　　　あにまさらめや興津島守

後撰　わか戀の數にしとらは白妙の
　　　濱のまさこもつきぬへらなり

注にこれはよろつの草木鳥獸につけて心をみするなりとはつけては託の字なり鳥獸草木に託てたとふるを心をみするなりといへりこの歌はかくれたる所なんなきとは注者の心たとへ歌にはかくれたる所あるへきことわりなるにしからねはかなはすといふ心なりされとはしめのそへ歌とおなしやうなれはすこしさまをかへたるなるへしとはされともかくれたる所ありてはそへ歌と同しやうになれはすこしさまのかはりたる歌を出せるなるへしと貫之の心をくみてみつからたすくるなり下に小町か歌をいふ所につよからぬは女の歌なれはなるへしといへるかことしそへ歌と同しやうなれはといへる心得かたしそへ歌の所にいへることし歌は此集の歌なり此歌はまことにかなふへくみえたり

いつゝにはたゝことうた

雅なり詩序云言二天下之事一形二四方之風一謂二之雅一雅者正也政有二小大一故有二小雅一焉有二大雅一焉　釋名云言二王政事一謂二之雅一　秘府論云雅者正也言其雅言典切爲二之雅一也　これはもろこしの雅なり奥義抄云今案に雅はまさしきなりたゝしくまさしきはありのまゝなるなりたゝしき也物にもそへすたとへをもとらぬなり故に雅をたゝこと歌といふ今いはゝ此淸輔朝臣の說は貫之の心にて此國の雅なり物にもそへす喩をもとらすして有のまゝにいふのみはもろこしにては賦なり雅にはあらすまつりことにつきて雅正にいふを雅とする事詩序を引かことしたゝことゝいへる心はかそへ歌の下に注せしかは今いはす

いつはりのなき世なりせはいかはかり人の言の葉うれしからましといへるなるへし　「これはことのとゝのほりたゝしきをいふなりこの歌の心さらにかなはすとめうたとやいふへからん山櫻あくまて色をみつるかな花ちるへくも風ふかぬ代に」

歌は此集の歌なり事のとゝのほりたゝしきをいふなりとは是はもろこしの雅の心をもて貫之の出されたるをかなはすといはんためなり出すうたをかなはすといふは貫之の雅を心得られたるやうもかなはすといはすしていふ心なりとめ歌或注に覓歌也もとめたる歌といふとあれとも心得かたし此歌にいつはりのなからんことをもとむるやうによめれはいへるにや　又或注に曩なとのうすきを筆にてとむるやうの心なり家の注同しとあれといかに心得ていへることゝも知かたし歌は兼盛か作なり家集にをのゝ宮のおとゝの櫻の花御覧しにおはしましたりしにと有續古今集春下には淸愼公月輪寺の花見侍りける時よみ侍りける平兼盛とあり下句の心風たにあらくはふかぬ世といふはまつりことのよくをさまれる心あれはかなへるとおもへるにや王充論衡云太平之世五日一風十日一雨風不鳴條雨不破塊此心をもてよめる歟　或注に爲家卿明疑抄にも貫之古注なり山櫻の歌兼盛云々おほつかなき事なりさきにはかやうなるにやこれにはかなふへからんを歌なとやかなふへからんといへるに今は歌のみを出してさもいはぬは上になすらふる歟もし
はおちたる事ある歟

むつにはいはひうた

頌也奧義抄云祝はほむる心なりかるか故に頌をいはひ歌といふ詩序云頌者美二盛德之形容一以二其成功一告二於神明一者也正義云頌言誦也容也今之德廣以美レ之釋名云稱二頌成功一謂二之頌一秘府論云古人云頌者鋪陳似レ賦而不二華侈一恭愼如レ銘而異二規誡一

此殿はむへもとみけりさき草のみつはよつはにとのつくりけりといへるなるへし

「これは世をほめて神につくるなりこの歌いはひうたとはみえすなんあるかすか野にわかなつみつゝ萬代をいはふこゝろは神そしるらんこれらやすこしかなふへからんおほよそむくさにわかれんことはえあるましき事になん

歌は催馬樂呂歌也源氏初音に此殿うち出たるはうしいとはなやかなりおとゝもとき〳〵聲うちそへたまへるさき草のすゑつかたいとなつかしうめてたくきこゆといへりむへもとみけりは諸の字宜の字なとをむへとよめりけにも聞つることく富け

りの心なりさき草はみつといふへき枕言なり
和名集云文字集略云葛（音娘和名佐木久佐日本紀私記云福草）草枝々相値葉々相當也延喜式治部省式云福草瑞草也朱草別名也生二宗廟中一此草枝々葉々かたたかへならねは中をそへてはみつ有故にみつはとつゝけたり又令義解神祇令云三枝祭（謂率川社祭也以二三枝花一飾酒樽祭故曰二三枝一也）これは三枝の花を福草になすらへて酒樽を飾りて神に祭る故にさいくさ祭と名付る歟　和名集に飛騨國大野郡加賀國江沼郡に三枝とかきて佐以久佐といふ郷ありきといと通すれはさいくさはさきくさなり萬葉第五長歌にさきくさの中にをねんとゝあるもみつ有物にはかならす中ある故につゝけたり同し集に三栗の中といへるかことし

春されはまつさき草のさきくあれは
◎　後もあひみんなこひそわきも

ともよめりしかるを後の人の此歌によりて檜の木の異名なりと思へり神代紀上云素戔嗚尊又拔二散胸毛一是成檜檜可三以爲二瑞宮之材一　かく檜の木は宮殿を作る良材なる故に推量していへるなり枕草子にひの木人ちかゝらぬ物なれとみつはよつはのとのつくりもおかしとかけるも此歌にていへはさき草をひのきとおもへる歟只詞をのみ取ていへるにも有へしみつはよつはとは軒の三端四端にかさなれるなり重閣の三層四層にも又こなたかなたに作れる殿の軒の一所に集りて重なる心にも有へし
拾遺に山さくらを見侍りて

み山木のふたはみつはにもゆるまて
消せぬ雪とみえもする哉

此二葉三葉といふになすらへは三葉四葉といふにそへてもよめるにや　小注にこれは世をほめて神につくるなりとは上に引詩序によれり此歌いはひ歌とは見えすなんあるとは神につけねはなり詩序にのみよりていはゝかなふはすくなかるへしいはんやさきに引正義釋名等には告於神明といはぬをや此國の六義またくもろこしにおなしからすと心得はたかふましくや基俊は榮花は祝にあらす以二遐齡一爲レ祝也と申されたりけにも此集よりはしめて賀歌は遐齡をよみたれとそれとても頌には叶はぬなり又此今のつらゆきの心にもそむけりこゝに

此集の素性の歌を出してこれらやすこしかなふへからんといへるは神そ知らんといへる所告於神明といふに似たる故歟心敬僧都のかける私語の下に歌に准らへて連歌の發句にも六義を出して其第六云頌いはひ歌の心

花椿みかける玉のみきりかな　　成阿

ほめ祝ひたる心なるへし頌の句なり古今集のかな序の小注には頌の歌に神祇の心有へしといへり此小注は後にある人の書入たる詞といへる義ありされは六義ともに心得すとて難をそへたり作者口傳ある事なり然間本註を引て此發句共はしるし侍るなり以上此中に作者口傳有事也といふを除きてはこれ正義也とおほし又此素性歌は延喜十四年二月の歌なり賀部に躬恒集を引て證するを待へし後人の注なる故なりむくさにわかれんことはえあるましき事になんとは六義をよくわかつ事はかたかるへしとなり白樂天か元愼に贈れる書に六義の久しくすたれたる事を憤れるよしみえたり彼文集に諷諭を初における此意なり詩變して騷となるよりもろこしにもすてに六義は廢れり詩序に六義を擧なから風雅頌をのみいへる事は緯の經によるかことくなれはなり賦比興のみつは緯のことくこれをつらぬきて其躰なき故なり尋常の詩は賦比興の間を出す歌ももろこしの心によらはしかるへし貫之の心ならは只そへ歌のみまれなるへし奥義抄に或書を引ていはく風雅頌者異レ躰賦比興者異レ詞以二彼三詞一成二此二形一云々秘府論云以二六義一爲レ本散二乎情性一有二君臣諷刺之道一焉有二父子兄弟朋友規正之義一焉降及二遊覽答贈之例一各於二一道一全二其雅正一

今の世の中色につき人の心花になりにけるよりあたなる歌はかなきことのみいてくれは色このみの家にうもれ木の人しれぬことゝなりてまめなるところには花すゝきほにいたすへき事にもあらすなりにたり

これは上のことく歌は六義ありて家をとゝのへ世を治むる用有物なるに世の末になりて益なきこととなれるを歎きていへりはかなきことははかなき言なり事にはあらすうもれ木は人しれぬ花すゝきはほにいたすへきといはん料なり埋木は土に埋れていたつらに朽る木なれは男女の中にしのひに讀

かはす歌にたとふまめなる所とは眞實なる人の前なり薄は實ならぬ物なる故にこゝに取よせたり後撰集に

花すゝきほにいたすへき草なれと
みにならんとはたのまれなくに

そのはしめをおもへはかゝるへくなんあらぬいにしへのよゝのみかと春の花のあした秋の月の夜ことにさふらふ人々をめしてことにつけつゝ歌をたてまつらしめ給ふ

これは昔の今のやうならさりしことを立歸りいふ也いにしへのよゝのみかとは眞名序の心大底天智天皇の比より平城天皇以前をさすとみえたり秋の月の夜ことにを或注にことには殊になり當流用之來るなり但置字のやうに心得へしよみやうに故實あり毎夜と用ゆる說有不用也今いはく是は春の花の朝ことに秋の月の夜ことにといふをひとつに毎の字にてかねたるなり眞名序に毎良辰美景といへるにおなしことわりもなき事をいひて故實として正義を用ひすといふ何事そや

あるは花をそふとてたよりなきところにまとひあるは月をおもふとてしるへなきやみにたとれる心々を見たまひてさかしおろかなりとしろしめしけん

花をそふとてを或注に尋る心なりといへともそふといへる故をいはねは推量の義なり又或注にそふとは風の字をよめは花をそふるとてといふ心といへとこれ又心得かたし今按袖中抄に躬恒か子日序を引ていはくこまつをひきわかなをそへさせたまふこのもかのもにゆきかひ行かへり云々此そへさせたまふといへる今のそふとてといへるに似たりそふとは賞する心とにやかゝるそふといふ詞これらの外いまた見及はす但子日には松をひきわかなをもつめは彼は松をひくか上にわかなを摘添させたまふといへる歟しからは今のそふとはことなりもしは萬葉第九に

大瀧を過て夏箕にそひてゐて
清き河瀬をみるかさやけき

又宋の程明道か詩に傍レ花隨レ柳過ニ前川一といへることく花に立そふをいへる歟さらは花にそふとてとこそいふへけれと古歌にはにといふへきををといひをといふへきをにといへる事おほし又もしは

花をこふとてとありけんを昔の能書のかけるかん
なはことになたらかなれはそふと見まかへて今の
ことくうつしなしける歟萬葉に
足引の山櫻花日ならへて
かくしさけらはわかこひめやも
皆人のこふるみよし野けふみれは
むへも戀けり山川きよみ
櫻花時は過ねと見る人の
戀のさかりと今しちるらん
秋萩にこひつくさしと思へとも
しゐやあたらし又あはめやも
ますらをの心はなくて秋萩の
戀にのみやもなつみてありなん
白露と秋の萩とはこひ亂れ
わくことかたきわか心かも
かやうに山川草木をも人をこふることくよめる歌
おほし月をおもふとてといふに對もよけれはこれ
にても有へきにや花のあるましき所にたつねまと
ひ月のなきやみに見んとたとるはおろかなる人の
歌よむとてあらぬかたに心をめくらすさまなり花
を吉野にたつね月ををはすてになかむるはかしこ
き人なり今はおろかなる方をあけてさかしきかた
を顯はす也いにしへもろこしに採詩官ありて國々
の詩を取て天子に奉りけるも後に詩賦を試て及第
にあつかれるも皆此心なりしるへは日本紀に導者
をよめり菅萬には指南とかゝせたまへり
しかあるのみにあらすさゝれ石にたとへつくは山に
かけて君をねかひ
たゝ遊宴の次によましめて賢愚をしろしめすため
のみならすよろつの事につけてよむ心をいへりこ
れより集中の歌の心詞を取てことはをつくれり
わか君はちよにやちよにさゝれ石の
岩ほと成て苔のむすまて
つくはねのこのもかのもに陰はあれと
君かみかけにます陰はなし
よろこひ身にすきたのしひこゝろにあまり
うれしさを何につゝまんから衣
袂ゆたかにたてといはましを
ふしのけふりによそへて人をこひ
人しれぬおもひを常にするかなる

ふしの山こそ我身なりけれ

君といへは見まれみすまれふしのねの
めつらしけなくもゆる我こひ

ふしのねのならぬ思ひにもえはもえ
神たにけたぬむなし煙を

松むしのねに友をしのひ

君しのふ草にやつるゝふる郷は
まつ虫の音そ悲しかりける

たかさこすみのえの松もあひおひのやうにおほえ

高砂は山の惣名をもいへとこれは播磨の高砂の尾上の里といふ所にふるき松の有けるそれをいへり高砂すみのえの松は久しき物のためしに引を我よはひの老ぬる事はそれとあひおひのやうにおほゆると老人の述懷をかけり或注にあひおひとは相逐なりたかひにおひすかひなるやうにとなり山に海の名所を對するは高下平等に思ふ理なり名木を愛する心なり歌人の心物々によせておもひをのふるよしなり以下可工夫云々師說侍りし以上或注なり

いかなる心ともえきゝわき侍らす

かくしつゝ世をやつくさん高砂の
尾上にたてる松ならなくに

誰をかも知人にせん高砂の
松もむかしの友ならなくに

われみても久しく成ぬすみのえの
岸のひめ松いくよへぬらん

住よしのきしのひめ松人ならは
いくよかへしとゝはまし物を

あひおひは相生なり俗にも常にいふ事なり惠慶家集に屏風に子日の所

二葉よりあひおひしても見てしかな
けふ契りつる野への小松に

新古今大貳三位
相生の小鹽の山の小松原
今よりちよのかけをまたなん

をとこ山のむかしをおもひ出てをみなへしのひとゝきをくねるにも歌をいひてそなくさめける

おもひ出てゝのてもしはそひたれと下へつゝけたるにはあらす

今こそあれ我も昔は男山
さかゆく時もありこし物を

をみなへしは女になして上の男山にむかへて

秋の野になまめきたてる女郎花
　あなかしかまし花も一時

此歌にてかけりくねるはくね〳〵しき女の本性を
あなかしかましといふよりかけり源氏紅葉賀にま
つくね〳〵しくうらむる人の心やふらしとおもひ
て云々紅梅にうるはしうもあらぬ心はへうちまし
りなからくね〳〵しきことも出くるとき〳〵あれ
と云々以上惣して事とある時は歌をもて心をなく
さむる事をいへり

また春のあしたに花のちるを見秋の夕くれにこのは
のおつるをきゝ

上にいひはてすしてつゝけてもかくへきを結ひを
はりてまたことおこしてかけるはあまりにことの
おほけれはうるさき故に端をあらためて轉せるな
るへし曾丹か集の序に花ちる春のあしたこのはの
落る秋のゆふへ月のあきらけき夏の夜風のさひし
き冬のあかつきまてにとかけるはこゝをうつせる
にや

あるは年ことに鏡のかけに見ゆる雪と浪とをなけき
　うは玉のわか黒髪やかはるらん
　　鏡の影にふれるしら雪

忠岑長歌云なにはのうらにたつ波のなみのしわ
にやおほゝれん

草の露水のあはをみて我身をおとろき

文選古詩云年命如二朝露一人生忽如レ寄　同魏武帝
短歌行云人生幾何譬如二朝露一　維摩經云是身如レ泡
不レ得二久立一

露をなとあたなる物と思ひけむ
　我身も草におかぬはかりを

うきなからけぬるあはともなりなゝん
　なかれてとたに賴れぬ身は

水のあはのきえてうき身といひなから
　流れても猶たのまるゝ哉

あるはきのふはさかえおこりて時をうしなひ

樂天詩云官途堪レ笑不レ勝レ怨昨日榮華今日衰時な
りける人のにはかに時なくなりて歎くをみてみつ
からのなけきもなくよろこひもなきことを思ひて
よめる

光なき谷には春もよそなれは
　咲てとくちる物思ひもなし

世にわひしたしかりしもうとくなり
史記孟甞君傳云馮驩曰富貴多レ士貧賤寡レ友事之固
然也文選左太仲詠史詩外望無二寸祿一内顧無二斗儲一
親戚還相蔑朋友日夜疎曹顔遠詩富貴他人合貧賤親
戚離
わひぬれは身をうき草の根を絶て
さそふ水あらはいなんとそ思ふ
あるは松山の浪をかけ
君を置てあたし心を我もたは
末の松山浪もこえなん
野中の水をくみ
いにしへの野中の清水ぬるけれと
もとの心をしる人そくむ
秋萩の下葉をなかめ
秋はきの下葉色つく今よりや
獨ある人のいねかてにする
あかつきのしきの羽かきをかそへ
曉のしきの羽かきもゝはかき
君かこぬよは我そ數かく
あるはくれ竹のうきふしを人にいひ

よにふれはことの葉しけきくれ竹の
うきふしことに鶯のなく
よしの川を引て世中をうらみきつるに
なかれてはいもせの山の中に落る
よしのゝ川のよしや世の中
今はふしの山もけふりたゝすなりなからの橋もつく
るなりときく人は歌にのみそ心をなくさめける
ふしの山こそ我身なりけれとよそへし烟も今はた
えて我のみおもひにもえ世の中にふりぬる物はと
思ひよそへしなからの橋もあらたにつくれはふる
されてかよふ人もなきはわか身ひとつになりて
なにはなるなからの橋もつくるなり
今は我身を何にたとへん
と獨こちていよ〳〵今は歌をよみてのみいきとま
る心をなくさむとなり富士の煙いつより絶たりと
はしらす都良香の富士山記にも斷たりとはなけれ
は其後にて此集よりさきにたえけるにや平家物語
に文覺上人彼山にものほられしよしあるは山もも
えす煙も絶たる故なるへし今現に煙なし猶たつよ
しによむは昔になすらへて也或注に後拾遺集に和

泉式部
さひしさに煙をたにもたゝしとて
柴折くふる冬の山里
といふを引て不斷といふ義なりと證すれと彼は人のたえしとするにて煙のみつからたゝすといふ義ならねは證とならす拾遺集に僧正遍昭の歌に
から錦えたに一むら殘れるは
秋のかたみをたゝぬなりけり
これも紅葉の秋のかたみをたゝしめぬを錦の縁にたゝぬといひたれはみつからたゝぬをたゝぬといふ證はなきなりふしの山も烟をたゝすなりといふへし煙のみつから不斷なりといふことはもとよりあるましきことはりよく思ひて知へし新葉集に
誰故にふしの煙もたゝすなり
あさまのたけももゆとかはしる
此歌はよくよめれとあやまれる説につきてよめるなりもし不斷なりといふを用ゆる義ならはさきにふしの烟によそへて人をこひといへるをふみて今はとかはれるよしをいへるをはいかにかはれるとかせん又案するにたとひふしの山はかはらすもゆともさもいふへきにや忘らるゝ身をうち橋の中たえて人もかよはぬ年そへにけるといふ歌はうち橋のかけられてより絶たる事はなけれと身をうち橋とよするより心を得て中たえてとたとへたることくふしのねのことくおもひにもえてこふるといひし人の引かへてさもあらねはそこを煙もたゝすなりといへる歟橋も煙もたゆる事ある物なれは中たえてともたゝすなりともよせていふ歟

古へよりかく傳はるうちにもならの御時よりそ廣まりにけるかの御世や歌の心をしろしめしたりけん
これは歌の盛におこれる時をいへり　眞名序云自大津皇子之初作詩賦民業一改和歌漸衰然猶有先師柿本太夫者云々此集の所存人丸赤人はならの御時の人なるにかくいへるは兩序の間に其義たかへる歟此ならの御時よりといふにつきて古來異義まちまちなり互に是非すといへともいつれも正義にあたらす其もとを尋ぬれは此集の撰者萬葉集をいかにみられけるにかおほつかなき事おほき故也是私にいふにあらす京極黄門も大きに不審のよしのたまへり下に引へし延喜の聖代に四天王とも

いふへき人々勅を承てえらひ世にも人おほき比なれはうきたる事は有へからすと深く信するより後の先達ひたすら此序を證として奈良の帝萬葉出來の時代人丸赤人等の事を沙汰せらるゝ故に首尾相叶はぬ事少なからす撰者の心ならのみかととは大同天子をさして申奉れり顯昭此義を用られたり但人丸赤人の時代等に至りては疑をのこされさるにあらすされとも今先此集の心によりて平城天皇とさためて後に愚案を申すへしそも〳〵ならのみかとは文武天皇を申すといふ說は人丸持統文武の朝に仕へ奉られけるを執して也然れとも寧樂は元明天皇和銅三年に藤原より初て遷らせたまひて都となりたれは文武天皇を申奉るへきよしなし續日本紀の文武紀にも其よしかつてみえたる事なし又奈良の帝の御時萬葉をえらはせ給ふとあるに文武天皇の比までの歌はすくなくしてもはら聖武孝謙兩朝の歌あるはいかゝ又文武天皇元年より延喜五年までは十九代二百九年なれは此兩集に千世百年といへるにかなはすかた〳〵文武天皇にあらぬ事明らかなり又清輔の袋草子仙覺の萬葉抄なとにはしきりに證文をかんかへて聖武天皇を申すよし申されたれとならの帝とは平城天皇を申奉りてかたく其他にわたらぬ御名なり仙覺等寧樂宮御宇といひ聖武の御世を平城朝廷といへる同し事と存せられたり大きにしからす平城朝とも寧樂宮御宇ともいふは廣く元明天皇より光仁天皇までに渡りてかたく平城天皇にはわたらす朝廷御宇は世をしろしめすに付て申せはなり平城天皇平城天子ゝ玉體につきて申せは又他にわたる事なし先平城朝廷七代にわたる事は續日本紀云寶字四年六月乙丑天平應眞仁正皇太后崩姓藤原氏近江朝大職冠內大臣鎌足之孫平城朝贈正一位太政大臣不比等之女也令義解の初に載る奏狀云平城朝廷養老年中間太政大臣復奉レ勅修二令律一各爲二十卷一これはともに元正天皇の御時を平城朝廷といへり聖武天皇の御時を申は續日本紀云寶字七年十月丙戌參議永部卿從三位藤原朝臣弟貞薨平城朝左大臣正二位長屋王子也長屋王は神龜元年二月に左大臣正二位に至りたまひけれはこれ平城朝は聖武の御時をいへるなり此外仙覺證をあまた引かれたり寧樂宮御宇といふ事の七代に

わたる事は萬葉の第一第二に寧楽宮と表し一其下
に元明天皇元正天皇兩代の歌有聖武孝謙は撰者の
當代なれは云に及はす延喜式の諸陵寮式には元明
天皇より光仁天皇までの陵の下に皆平城宮御宇と
注せりかゝれはいつれを取分て申奉るへきに非す
大同帝を申奉る事は日本後紀第三十二云天長元年
秋七月甲寅平城天皇崩己未葬於楊梅陵云々御治世
の次第をかそへ奉る時も此御事也兩序共に十世百
年といへる世の數年の數もあたれり亦眞名序に數
過百年といひて其後和歌棄不レ被レ採雖下風流如二野
宰相一輕情如二在納言上而皆以二他才一聞不上以二斯道一
顯上と云はこれ平城天皇御位の後嵯峨天皇もはら
詩文をのみ好ませたまひてより歌の道すたれてた
ま〳〵篁行平のことくなる堪能あれとこれをかた
はらにして歌をもて名を顯はさぬ事を惜めるなり
これによりてみれは自三大津皇子之初作二詩賦一云
々和歌漸蕃然猶有先師柿本大夫者云々これ平城天
皇の御時の事なり大津皇子より文武天皇御代まて
はわつかに十年はかりなれは僅に歌のすたるへき
にあらす文武天皇は詩をも能作らせたまへり懐風
藻に載たる御製秀句云月舟移霧渚楓檝泛霞濱懐風
藻序云龍潜王子翔二雲鶴於風筆一鳳翥天皇泛二月舟於
霧渚一とは大津皇子の天紙風筆畫二雲鶴一山機霜杼
織二葉錦一といふ一聯に對してこれをいへり文人
をめして詩を作らしめ給へる事も文武紀に見えた
りたとひ聖武天皇をならのみかとゝ申奉とも孝謙
天皇の御時まて猶歌を盛によみたれは漸衰といふ
へきにあらす又其後も人おほきを何そ僅に篁行平
を擧て其よしを證せんよく〳〵おもふへし又此集
春下にならのみかとの御歌とてふるさとゝなりに
しならのとよめるは何れの先達も大同天子の御製
と定めらるゝ事相違なし然れは秋上下に左になら
のみかとゝ注せる二首も同し御歌なり或人異義を
存すといへともひとつの御名ほかのみかとにわた
らぬことわり上にいふかことし右にかけると左に
注せるとはたしかなるとたしかならぬとによれり
春の歌上に忠仁公の御歌右に名をかき雜歌上に限
りなき君か爲にと折花はといふ歌には或人のいは
く此歌はさきのおほひもうちきみのなりと左に注
すこれたしかなるとたしかならぬとのゆゑなり安

倍仲麻呂はふるき人なれともみかさの山の月あきらかにその人の歌なれは右にかけり賀部の歌に右に在原しけはると名を出して又左に此歌は或人在原のときはるかともいふと注す黑主か名は右にかけとも左に注したるもあるを思ふへしこれ同人にも他人にも新舊をいはす左注はたしかならぬに付てしたり又嵯峨天皇のまた太子にまし〳〵て藤はかまを奉りたまへる時の御歌の御かへしは六帖にも大和物語にもならのみかと丶あれは大和物語に段々ならのみかと丶いへるも皆大同天子也

かのおほん時におほきみつのくらゐ柿本のひとまろなん歌のひしりなりけるこれは君もひとも身をあはせたりといふなるへし

これより此序のおほつかなき事をいふへし萬葉第二に日並皇子かくれさせたまへる時人丸のいたみ奉りてよまれたる歌有持統天皇朱鳥三年四月なりこれよりさき石見より妻に別て都へのほらるゝ時の長歌二首有藤原宮といふ下にある歌にもみちはのちりのまかひにとあれは朱鳥元年二年の間の九月の比なり天武の朝に石見守の屬官なとにて下られけるにや大寶の比は都にありて其後又石見へ下りて死せられたれは持統文武兩朝の人に紛なし死せられて後平城天皇の御世まては百年に及ふ事なるに彼御時にといへることおほつかなし凡そ人丸の事日本紀續日本紀等にみえす萬葉にも先祖官位等はみえすといへとも第二卷に柿本朝臣人丸在二石見國一臨レ死之時自傷作歌とあるをみれは官位等しるすにたらすとみえたり其故は令に三位以上の死を薨といひ四位五位を卒といひ六位以下庶人までを死といふにて知れり正三位ならは薨といふへしやかて眞名序に大夫とかきたれはこれまた官位の貴賤兩序の間にたかへり又忠岑か長歌にあはれいにしへ有きてふ人まろこそはうれしけれ身はしもなからことのはをあまつ空まてきこえあけ云々正三位ならは身はしもなからといふへからす顯昭抄に或人これをたすけてむとみと通すれはおほきむつのくらゐなりといへるを破られたり誠にいふに足さる事なり古事記を考るに柿本氏の先祖は孝昭天皇の皇子天足彦國押人命也粟田小野等のあまたの氏同しくこれよりわかれたり天武天皇十三年

十一月に五十氏に姓を朝臣と賜ひける時柿本臣も朝臣となれり其比柿本猨といふ人あり天武紀云十年十二月乙丑朔癸巳柿本臣猨等并拾人授小錦下位元明紀云和銅元年四月壬午從四位下柿本朝臣佐留卒此人の親族なるへし同名の人なと委は別に注す歌のひしりとは仙の字をひしりとよめり君も人も身をあはせたりとは君臣合躰して歌の道のあひにあふなり尚書に元首明哉股肱良哉といへるか如し秋のゆふへたつたの河になかるゝもみちはみかとのおほんめにはにしきとみたまひ春のあしたよしのゝ山のさくらは人まろかこゝろには雲かとのみなんおほえける

大和物語にならのみかと立田河のもみちいとおも白きを御らんしける日識知下柿本人丸識知下人丸の歌によし野の山の櫻を雲にまかへたるはなけれと上に對していはんとてあるましきことならねはかくはかけるなり身をあはせたりといふをうけて心のかなへるよしにいへり春のあしたよしのゝ山のさくらをはみかとのおほん心には雲かとのみなんおほえたまひ秋のゆふへ立田川に流るゝもみちをは人まろかめには錦かとこそみまかひけれの心知へし

また山のへのあか人といふ人有けり歌にあやしくたへなりけり

これは人丸赤人を同時といへり赤人の歌は萬葉第六に神龜元年より天平八年まての作見えたり人丸とは其あはひ廿年に近く隔たれり赤人も又續日本紀等に見えす官位又いふにたらぬほとにや万葉にも見えたることなし先祖は古事記を考るに垂仁天皇の皇子大中津日子命より出て顯宗紀に播磨國司來目部小楯といふ人を山官にめして山部連の氏を給ひけるよし妹にあらはれて天武天皇十三年十二月に山部宿禰の姓を給へり

人まろは赤人かかみにたゝんことかたくあか人は人丸かしもにたゝむことかたくなん有ける

世說曰陳元方難爲兄季方難爲弟これに似たり

「ならのみかとの御うた　龍田川もみちみたれてなかるめりわたらはにしき中や絶えなん　人丸　櫻花それともみえすひさかたのあまきる雪のなへてふれゝはほの〴〵とあかしのうらのあさきりにしまかくれゆくふねをしそおもふ　赤人　春の野にすみれつ

みにとこしわれそ野をなつかしみひとよねにける
わかのうらにしほみちくれはかたをなみ蘆へをさしてたつなきわたる」
ならのみかとの御歌と兩歌仙の歌とをこゝに至りて一所に注する事は同時に仕へ奉るよしにいへるによりてなり初の三首は此集にあり皆左に注せるを今たしかに定めたるも後の人の注ゆへなるへし
赤人の歌初めのは萬葉第八に後のは第六に有かたをなみは萬葉に潟乎無（カタチナミ）とかけり鹽みちてたつの遊へきひかたのなき也或注に當流方をなみと用なり其中に潟の心もあるへしといへるは萬葉をもかんかへみさる私の説也萬葉第二人丸の長歌にも石見の海角の浦わをうらなみと人こそみらめかたなみとと人こそみらめよしゑやしうらはなくともよしゑやしかたはなくともといへるにもみな潟の字をこそかきたれ
この人々をおきてまたすくれたる人もくれ竹の世々にきこえかた糸のより〳〵にたえすそ有ける
平城天皇以前の事なり
これよりさきのうたをあつめてなん万えふしふとなつけられたりける
これよりさきとは平城天皇以前なり此心は平城天皇の御宇人丸赤人にみことのり有て万えふしふをえらはしめたまへりとしるへし其故はならのみかとと人丸とは君臣合躰なるに赤人もまた同時にて人丸と同等なる作者のやうにかゝれたれは兩人に勅したまへるよしはなけれと此時撰はせ給はんにては此二人をおきては誰かあらんなれは勅をくたしてえらはしめ給へりと思はれたる事いはすして知へし其上忠岑か長歌に云くれ竹のよゝのふることなかりせはいかほのぬまのいかにして思ふ心をのはへましこれ万葉の故事によりて此集の事を仰せ下されてふる歌奉る時の歌なれは先萬葉の事よりいふなりよゝのふることとは故事なりあか末かならの葉の名におふ宮のふることゝいへるにおなし古言にはあらす代々の故事なくは何によりてか末代の今に至りて思ふ心をのへむと也あはれいにしへ有きてふ人丸こそはうれしけれ身はしもなからことのはをあまつ空まて聞えあけ今もおほせのくたれるは塵につけとやちりの身につもれることをと

はるらんとは人丸といふ人のありて名高く聞えあけたる故に勅をくたして萬葉を撰はしめたまへるによりて芳躅をのこされたるかうれしきとなり塵につけとやとは人丸の跡を追て其風を繼て此集をえらへとおほしめしてや塵につけとやといふによりて數ならぬ身の心に塵の身とつゝけ塵の身といふによりてつもれることをとはるらんといへりつもれる事とは萬葉にいらぬ古歌なとを奉れとおほせらるゝなりこれをおもへはけたものゝ雲にほえけんこゝちしてちゝのなさけも思ほえすひとつ心そほこらしきとは人丸の跡は及ひなき事なれとも今かゝるおほせの有てその跡をつくことはたとへは淮南王の登仙の後殘れる藥器を舐れる犬の藥力に助けられて雲中に吠けんこゝちして歌の道のちゝのなさけはしらて只心ひとつにほこらしう思ふとなり只人丸の歌をまなひてよむといふにはあらぬ事心をつけて知へし此序の末に人丸なくなりにたれと歌のことゝとゝまれるかなとかゝれたる歌の事といふもたゝ人丸の歌をいふにあらす撰集の事なり

京極黄門萬時云萬葉集時代事云々又云古今序かくつたはるうちにもならの御時よりそひろまりにける 私云如上 赤人は人丸かしもにたゝむことかたくなん有ける又云これよりさきのうたをあつめてなん萬葉集となつけられたりけるかの御時よりこのかた年にもゝとせあまり世はとつきになんなりにける如二此序一者 文武天皇御世柿本山部列座之由 歟見二萬葉集一柿本人麿所レ詠之歌皆藤原宮之由注レ之山部赤人歌神龜元年以後天平年中之由注レ之雖二其年月不一レ遠相並之由無レ所レ見自二文武大寳元年一至二于延喜五年一二百五年 文武以後延喜十八代歟縱奈良御時雖レ存二聖武天皇御世一其前後廿四年三代 元明元正 也以二此序一爲二平城天皇證據一付之 顯昭 大同年中無レ可撰二和歌一之人一不レ載二稱德天皇以後歌一於二平城之說一者勿論不レ足レ言事歟

これよりさきの歌をあつむる文又以不審多强不勘時代年限課文章所書歟 天平勝寶年中歌これよりさきの歌と 書尤無其理歟 道因之所レ載勘文不レ注二是等子細一

古今序此等事頗不レ似下披二見萬葉集一之人上如何

右京極黄門の勘文なり又拾芥抄云萬葉廿巻云々京極中納言入道抄云時代事近代歌仙等多雖有喧嘩相論事粗伺集之所載自第十七巻似註付當時出來歌事體見集第十七巻自天平二年至于廿年第十八自天平廿年三月廿三日至于同勝寶二年正月二日第十九自同年三月一日至同五年正月廿五日第廿自同五年五月至天平寶字三年正月一日凡和漢書籍多以所注載為其時代書何拋本集之所見徒勘他集之序詞哉頗似先其謂撰者亦無憒説世繼物語云萬葉集高野御時諸兄大臣奉之云々但件集橘大臣薨之後歌多書之似家持卿之所注尤以不審　これも萬時の中にあり但すこしたかひ有他家の序詞とは此序の事なりさきの勘文の中には道理あり又すこしはおほつかなき事なきにもあらす後の勘文は今少深く勘へそへたまはゝ時代撰者等疑なかるへきを惜むへき事なり定家卿のみならす他の先達も此序に付て傾らへる事なりされとも諺にいへるかたきぬを夜の物とする風情にてつゐに上下をおほへる説なし此集雑下云貞觀御時萬葉集はいつはかりつくれるそとゝはせたまひけれは讀て奉りける

文屋ありすゑ

神無月時雨ふりおけるならのはの　名におふ宮のふることそこれ

そのかみはやう和歌のすたれてつたふる人もなかりけるにや清和天皇の御時さへかく尋ねさせ給へる事なり點さへ天暦の御時にいたりて梨壺の五人におほせてくはへさせたまへる事なれはそれよりさきはよく見る人もなかりける故に彷彿なりけるなるへしならの葉の名におふ宮とよめるも大同天子をさせるなり其故は此集にいれたるに集の心とたかふましけれはなり貫之の新撰和歌序云抑夫上代之篇義漸幽而文猶質下流之作文偏巧而義漸疎故抽始自弘仁至延長詞人之作花實相兼而已これと今の序とを引合するに平城天皇の比までを古風とし弘仁の比よりこなたを新體とする意なりかくのことくにて萬葉集の出來たる時代等をよく勘られたるなり今萬葉を委しくかんかへ見るに勅撰にもあらす撰者は橘左大臣にもあらすして家持卿の私に記せるなり其中に十六巻まては天平十六七年まで

に撰ひ十七巻の初に遺たるを拾ひ同巻天平十八年七月越中守となりて下られけるより十九巻に勝寶二年八月五日彼任はてゝ歸り上らるゝまては都にての歌なとも皆越中にての聞書なりおほよそ十七巻より第廿の末に至るまては次第をたてす日記のことく記されたるなり勅撰にあらす撰者橘左大臣にあらぬ證集中に至りて多しといへとも今その要ひとつふたつを出さん第六云天皇賜酒節度使卿等御歌一首并短歌々後注云右御歌者或云太上天皇御製也此天皇は聖武太上は元正の御事也勅撰ならはかゝる注あるへきやうなし第八云天平八年冬十一月左大辨葛城王等賜姓橘氏之時御製歌一首歌後注云或云此歌一首太上天皇御歌也但天皇皇后御歌各有一首者其歌遺落未得探求焉これ勅撰にあらす諸兄公撰者にあらぬかたき證也次に家持卿の私に撰はれたる證は父祖の名をかゝさるこれひとつの證なり彼集の例他姓の人にも大納言以上には名をかゝす旅人卿中納言の時にも中納言大伴卿とのみある是私の家に父を尊ふ故なり勅撰ならは家持たとへ勅を奉はるとも父祖の名をさゝる事を得し是公私のかはれるなり第十九云為家婦贈在原（京イ）尊母所誂作歌これ家持の妻坂上大嬢か母の坂上郎女に贈らむとて家持によませたるを坂上郎女を尊母といへる私の家にての詞なり更に公界にての詞にあらす同巻云十一日大雪落積尺有二寸因述拙懷歌三首後注云但此巻中不稱作者名字徒録年月所々緣起者皆大伴宿禰家持裁作歌詞なり第二十にも家持の歌のことに拙懷とかける事兩所ありみつから撰せるにあらすはたれか家持のために謙退せん又注に此巻中といへり餘の巻も准へて知へし委は別に注す是等の道理證文に依れは諸説皆廢る爭ひをやむへし

こゝにいにしへのことをも歌のこゝろをもしれる人わつかにひとりふたりなりきしかあれとこれかれえたるところえぬところたかひになんある

ならの御時歌さかりにて萬葉集えらはれたるよしいひておとろへたるゆゑをもいはすにはかにかくいへる事おほつかなしひとりふたりとは下にあくる人々をいへり

かの御時よりこのかた年はもゝとせあまり世はとつきになんなりにける

これは此間に歌のおとろへたるをいふ心なりとつきは十世なし世の字をつきとよめり父子相繼心也史記云軒轅之時神農氏世衰同魏世家云畢萬之世彌大　平城天皇より醍醐天皇まて十代大同元年より延喜五年まて百年なるをもゝとせあまりといへるは文勢なり今年集なりて奏覽のやうにも見ゆれと延喜五年卯月十八日に大内記きのとものりにおほせられて萬葉集にいらぬふるきうたみつからのをもたてまつらしめてなんそれか中にも梅(櫻イ)をかさすよりはしめてくさ／＼の歌をなんえらはせたまひけるといひたるはさらぬにやともみゆ上に引新撰和歌序にあはせて集中を見るに延喜十四年までの歌みえたり其後の歌も有にや至于延長といふは延長の比の歌を入といふにはあらて其比まてある人の歌を入る心か五年にえらひをはるといはゝ其後の歌は追て入らるゝ歟たしかならす

いにしへの事をも歌をもしれる人よむ人おほからす

上にいにしへの事をもうたの心をもしれる人わつかにひとりふたりなりきといひて今またかさねてかやうにいへる事おほつかなし下に到りて又歌のさまをもしりことの心をも得たらん人はといへりあまりに重疊せるは若今は衍文なとにや語脈の連續をいはゝかの御時より此かた年はもゝとせあまりよはとつきになんなりにけるこゝにいにしへのことをも歌の心をもしれる人よむ人おほからすわつかにひとりふたりなりきしかあれとこれかれえたる所得ぬところたかひになんある今このことをいふにとありぬへきやうにおほゆるにや

今此ことをいふにつかさくらゐたかき人をはたやすきやうなれはいれす

官位高き人にも上手なるあれと憚て評判せぬは然るへきことなり

そのほかちかき世にその名きこえたる人はすなはち

僧正へんせうは歌のさまはえたれともまことすくなしたとへはゑにかけるをうなをみていたつらに心をうこかすかことし「淺みとりいとよりかけて白露を玉にもぬけるはるの柳か　はちすはのにこりにしまぬこゝろもて何かは露を玉とあさむく　さか野にて馬よりおちてよめる　名にめてゝをれるはかりそをみなへしわれおちにきと人にかたるな」

ゑにかける女は詞の花やかにて歌のさまを得たるにたとふそれに心をうこかすはまことすくなき喩なり注の歌は皆集中にあり

ありはらのなりひらは心あまりてことはたらすしほめる花の色なくてにほひのこれるかことし「月やあらぬ春やむかしのはるならぬわか身ひとつはもとの身にして　おほかたは月をもめてしこれそこのつもれは人の老となるもの　ねぬる夜の夢をはかなみまとろめはいやはかなにもなりまさるかな」

しほめる花の色なきをことはたらぬにたとへにほひ殘れるを心のあまれるにたとふ注の歌皆此集にあり

ふんやのやすひてはことはたくみにてそのさま身におはすいはゝあき人のよきゝぬきたらんかことし「吹からに野邊の草木のしほるれはむへ山風をあらしといふらん　ふかくさのみかとの御國忌に草ふかきかすみの谷にかけかくしてる日のくれしけふにやはあらぬ」

よきゝぬは詞のたくみなるにたとふあき人を歌さまの俗にちかくて詞のたくみなるに叶はぬにたとへたり注の歌はともに此集にあり野への草木下には秋の草木とあり

うち山の僧きせんはことはかすかにしてはしめをはりたしかならすいはゝ秋の月をみるにあかつきの雲にあへるかことし「わか庵はみやこのたつみしかそすむよをうち山と人はいふなり」

かすかは幽玄也はしめをはりたしかならすとはをはりのたしかならてはしめによくもかなはぬをいへりはしめもをはりもたしかならすといふにはあらす秋の月をみるはことはのかすかなるたとへあかつきの雲にあふはをはりのたしかならぬ喩也初あきらかなる月の曉の雲にいるは結句にあたれり

揚子雲長楊賦云僕嘗倦レ談不レ能レ一二其詳一請略擧二其凡一而客自覽二其切一焉　魏文帝典論文云劉楨壯而不レ密

萬葉
雨はれてきよく照せる此月夜　また更にして雲なたなびき

源氏夕顏にいさよふ月にゆくりなくあくかれんことを女はおもひやすらひとかくのたまふほとにはかに雲かくれて明行そらのいとおかし

よめる歌おほくきこえねはかれこれをかよはしてよくしらす

これははしめをはりたしかならすと定むることをあまたの歌をかよはしみねはよくしらねとまつよをうち山の一首につきて評定するそとなり後難をうけしかためなりおほくきこえねはとはもとよりよめる歌のすくなきをいふかあれとも多分世にきこえぬをいふ歟今の集に載たるは此一首のみにて後撰以來の集に一首もみえす貫之なとの評議にあひて六人の中にとられたる事名譽なり千載集序云いにしへより勅を奉りて集をえらふ[illegible]松のとほそにのかれ苔のたもとにしほれたるものこれをえらへるあとなんなかりけれと宇治山の喜撰といひけるなんすめらきのみことのりをうけたまはりてやまと歌の式をつくりけるしきをつくり集をえらふかのむかしのあとにより今このなすらへあるかうへに云々これ又高名なり是はいつれの帝の勅を承はりて作れるにか彼式いまたとゝのへたるをみされはしらす

孫姫式に基泉か歌

木のまよりみゆるは谷のほたるかも
　いさりのあまの海へ行かも

玉葉集にはいさりのあまのおきに行かもとて喜撰か歌としていれり基泉と喜撰と文字のたかへる古來かゝる事おほし續古今集撰はれける時入へき歟の沙汰ありけるを爲家卿同心なかりけるによりていらさりけるとかや

樹下集に喜撰

けかれたるたふさはふれしこくらくの
　西の風ふく秋のはつ花

をのゝこまちはいにしへのそとをりひめの流なり

衣通姫は應神天皇の皇子稚渟毛二派皇子の女忍坂大中津姫の妹にて允恭天皇の妃寵姫なり本名弟姫允恭紀云弟姫容姿絶妙其艶色徹レ衣而晃之是以時人名曰二衣通郎姫一古事記云若野毛二俣王女藤原之琴節郎女云々　衣通姫をは帝藤原に宮をたてゝ居おかせたまへはこれもまた衣通姫の名なり古事記に衣通の名には異説あり　允恭天皇段云次輕大郎女亦名衣通郎女御名所三以負二衣通王一者其身之光自衣通出也」一流はたくひとよめは衣通姫の歌に相並

ふへしとなり

あはれなるやうにてつよからすいはゝよきをうなのなやめるところあるにゝたりつよからぬはをうなの歌なれはなるへし「おもひつゝぬれはや人の見えつらん夢としりせはさめさらましを　色みえてうつろふものはよの中の人のこゝろの花にそありける　わひぬれは身をうきくさの根をたえてさそふ水あらはいなんとそおもふ　そとほりひめのうた　わかせこかくへきよひなりさゝかにのくものふるまひかねてしるしも」

よきをうなはあはれなるやうなるたとへなやむはつよからぬ喩なりつよからぬはをうなのうたなれはなるへしとは人からにとかをゆるすなれは六人の中には難なきにや　班固妹班昭女誡云陰陽殊レ性男女異レ行陽以レ剛為レ徳陰以レ柔為レ用男以レ強為レ貴女以レ弱為レ美故諺有云生レ男如レ狼猶恐二其尫一生レ女如レ鼠猶恐二其彪一

おほとものくろぬしはそのさまいやしいはゝたきゝおへる山人の花のかけにやすめるかことし「おもひいてゝこひしき時ははつかりのなきてわたると人はしらすや　かゝみ山いさ立よりてみてゆかん年へぬる身はおいやしぬると」

たきゝおへる山人は歌のさまいやしきにたとふ花の蔭にやすめるは眞名序に頗有逸興而躰甚鄙とある逸興にたとふ今そのさまいやしといへはわろくのみあらんやうに聞ゆれとも六人にとれる所によき方はあるなり　史記滑稽傳云楚相孫叔敖居數年其子窮困負レ薪源氏夕顔に物のなさけしらぬ山かつも花のかけには猶やすらはまほしきにや云々

このほかの人々その名きこゆる野へにおふるかつらのはひゝろこりはやしにしけき木の葉のことくにおほかれと歌とのみ思ひてそのさましらぬなるへし

野へにおふるかつらとは詩周南云葛之覃兮施二於中谷一維葉萋々眞名序に其大底皆以レ艶為レ基不レ知二歌之趣一者也とあれは艶にのみよむ事と思ひて六義にわかれ變態萬狀なるへき事をしらぬをそのさましらぬといへり

かゝるに今すへらきのあめの下しろしめすことよつの時こゝのかへりになんなりにける

醍醐天皇諱敦仁宇多天皇第一皇子母藤原胤子内大

臣高藤女よつの時こゝのかへりは昌泰四年延喜五
年あはせて九年なり
あまねきおほむうつくしみの波やしまの外まで流れ
やしまは日本紀第一云於是陰陽始遘合爲二夫婦一及
レ至二產時一先以二淡路洲一爲レ胞意所レ不レ快故名之
曰二淡路洲一廼生二大日本豊秋津洲一次生二伊豫二名
洲一次生二筑紫洲一次雙二生隱岐洲與二佐渡洲一世人或
有二双生一者象レ此也次生二越洲一次生二大洲一次生二吉
備子洲一由レ是始起二大八洲國之號一焉　文選丘希範
詩肅穆恩波被源氏物語明石にふかき御うつくしみ
おほやしまにあまねくしつめるともからをこそお
ほくうかへたまひしかと云々
ひろきおほんめくみのかけつくは山のふもとよりも
しけくおはしまして
袖中抄云公任卿注云此山繁茂之由見常陸國風俗歌
中
　つくは山は山しけ山茂きをそ
　　たかこもかよふ下にかよへる我妻はしたに
此集常陸歌に
　つくはねのこのもかのもにかけはあれと

　　君かみかけにますかけはなし
よろつのまつりことをきこしめすいとまもろ〳〵の
ことをすてたまはぬあまりに
菅家文章云我君一日之澤萬機之餘云々
いにしへのことをもわすれしふりにしことをもおこ
し給ふとていまもみそなはし後の世にもつたはれと
て
班固西都賦序云以興レ廢繼レ絕潤二色鴻業一みそなは
すは見視等の字いつれも神の照覽君の御覽にいふ
詞なりふたつのとてはわさといふなり
延喜五年う月十八日に
貫之集云延喜御時やまと歌しれる人をめしてむか
しいまの人のうたたてまつらせたまひしに承香殿
のひんかしなる所にて歌えらせたまふ夜のふくる
まてとかういふ程に仁壽殿のもとの櫻の木にほと
ときすのなくをきこしめして四月六日のよなりけ
れはめつらしかりおかしからせたまひてめし出て
よませたまふにたてまつる
　こと夏はいかゝなきけん郭公
　　こよひ計はあらしとそきく

此六日を清輔なとは十八日をかきあやまれるにや
とうたかはれたれと只此十八日よりさきの六日な
るへきは夏入にていくかもあらねはめつらしから
せたまふなり
大内記きのとものり
職原抄云大内記一人相當正六位上近代五位唐名柱
下起居郎
御書のところのあつかりきのつらゆき
和名集云蘭林房(在式乾門内東今分爲御書所是也)
拾芥抄云在侍從所南有公卿別當預幷書手云々
さきのかひのさう官おほしかふちのみつね
さう官はさくわんなり甲斐は上國大目少目あり眞
名序に少目とあり
右衛門の府生みふのたゝみねらにおほせられて
右衛門府督佐權佐尉大小府生四人　父祖等不詳
萬えふしふにいらぬふるき歌みつからのをもたてま
つらしめたまひてなん
眞名序云各獻家集幷古來舊歌曰續萬葉集新撰和歌
序云昔延喜御宇屬二世之無爲一因二人之有一慶令レ撰二
集萬葉集外古今和歌一千篇一云々　あやまりて萬葉

の歌も數首入たり
それか中にも梅をかさすよりはしめてほとゝきすを
きゝもみちを折雪を見るにいたるまて
それか中には續萬葉の中なり梅をといふより四季な
り鶯の笠にぬふてふ郭公初聲きけは紅葉はゝ袖に
こき入て朝ほらけ有明の月とみるまてに
又つるかめにつけて君をおもひ人をもいはひ
賀なり君をおもひとはちよにましませとねかふな
り人とは君より外の人にて臣なり
鶴龜と千とせの後はしらなくに　あかぬ心にまかせはてゝん
萬代を松にそ君をいはひつる　ちとせの陰にすまむと思へは
秋はき夏草をみてつまをこひ
吹まよふ野風を寒み秋萩の　うつりも行か人の心の
かれはてん後をはしらて夏草の　深くも人のおもほゆるかな
あふさか山にいたりてたむけをいのり
離別に羇旅をかねたむけを祈るとはたむけの神を

祈りて旅のほとつゝかなからんことを申すなり
和名集云道祖(佐倍乃加美)道神(太無介乃加美)風
俗通曰共工氏之子曰レ修好ニ遠游一故祀爲ニ祖神一萬
葉に齋禮又祈の字をもたむけとよめり手向とかく
常のことなりぬさなとたむくる神なる故に名付る
なり又山のたうけと俗にいふは手向なりたうけは
おほく兩國の堺なれはこなたかなたよりこゆる人
たむけする故なり相坂は東海道東山道皆是をこゆ
れは尤手向する所なれはやかて手向の山ともいふ
萬葉第三に坂上郎女か逢坂山にてよめる歌
ゆふたゝみ手向の山をけふこえて
　　いつれの野へにいほりせんこら
後撰
あた人の手向にをれる櫻花
　　あふ坂まてはちらすもあらなん
此集
かつこえてわかれもゆくかあふ坂は
　　人たのめなる名にこそ有けれ
あるは春夏秋冬にもいらぬくさ〳〵の歌をなんえら
はせたまひける
くさ〳〵に雜の字をくさとよめは雜々なりこれに
物名哀傷雜體大歌所御歌をかねていへり

すへて千歌はた卷なつけて古今わかしふといふ
新撰和歌序にも一千篇とあれはもとは千首にかき
れる歟但後にくはへたる歟又大數をあけていへる
歟古今の名は古往今來聞えたるまゝの義なから新
撰和歌序の心大同以前をいにしへとし弘仁以後を
今とするなり
かくこのたひあつめえらはれて山下水のたえす濱の
まさこのかすおほくつもりぬれは今はあすか川のせ
になるうらみもきこえすさゝれ石のいはほとなるよ
ろこひのみそ有へき
是は集のなれるにつきての祝言なり
足引の山下水のこかくれて
　　たきつ心をせきそかねつる
ありそ海の濱のまさことたのめしは
　　忘るゝことの數にそ有ける
世中に何か常なるあすか川
　　きのふのふちそけふはせになる
我君はちよにやちよにさゝれ石の
　　いはほと成て苔のむすまて
それまくらことは春の花にほひすくなくしてむなし

き名のみ秋の夜のなかきをかこてれは
まくらは文選孔融薦ニ禰衡一表に臣等をまくらと點せりことは言者也　今案むなしき名のみといふに隔句に對すれは猶此上にたとへはかなきつたなきなとやうの詞のあるへきを落たるにやにほひは香にあらすいろのにほふなり萬葉に艶の字をよめり眞名序に詞少春花之艶といへるこれなりかこてれはゝ白氏文集に託の字をかこつとよめり　後撰に
　夏の夜の月はほとなく明ぬれと
　　朝のまをそかこちよせつる
これも朝に猶月の殘りて有るを夜に思ひよせてみるをかくはよめる歟　惠慶家集に
　しら雪のふるとしなから庭の梅は
　　花とかこちてにほひやはせぬ
これもおなし心とみゆ和歌に長したる山の名を秋の夜にことよせて人にいはるれはの心なるへし長短をよしあしにあつる時は長はよく短はあしきなり才のすくなきを短才といへは長きは才のおほきなり眞名序に名竊秋夜之長とあれは短才にして秋の夜の長きにことよせていはれてあるは名をぬすむなり

かつは人のみゝにおそりかつは歌の心にはちおもへと
おそりはおそれなり土佐日記に此わたり海賊おそりありといへは神ほとけをいのる　後拾遺に太神宮のいつきに託して輔親にたまへる御歌
・さか月にさやけき影のみえつれは
　塵のおそりはあらしとそ思ふ
歌の心にはち思へとゝは年のおもはんことそやさしきとよめるかことく歌を心あるものになしていへるなり

たなひく雲のたちゐなくしかのおきふしはつらゆきらかこのよにおなしくうまれて此ことの時にあへるをなんよろこひぬる
たな引雲はたちゐる鳴鹿はおきふしといはんためなりたちゐおきふしに聖代に生れて歌の道のおこれる時にあへる事をよろこふとなり撰者の名をつらぬる時は官位によりて次第すれとも集を撰ふ事は貫之上首なりけれは今はつらゆきらかといひ眞名

序にも臣貫之等謹序といへり

人まろなくなりにたれと歌のことゝまれるかな

なくなりにたれとはにはやすめたる詞なり曹子建三良詩云既沒同憂患人丸なくなりては歌の道も絶へきやうにおもへと其跡猶世にとゝまりて此集をえらはる事なり論語に文王既沒文不在玆乎といへるよりかゝれたり天神地祇の猶此道をすて給はぬ心なり或註に人丸なくなりたれと貫之此世に有て歌のことゝまるとまへの卑下にかはりて自稱したる也常の人のかくいひたらはにくかるへきなりといへりこれは論語に孔子のゝたまへるこゝろと貫之の心と同しとみたるにや詞は論語によりて意は同しからす此說用へからす

たとひ時うつりたのしひかなしひゆきかふとも

陳鴻長恨歌傳云時移事去樂盡悲來たのしひはゆきかなしひは來る故にゆきかふといへり

此うたのもしあるをや

上の歌の事とゝまれるかなといふを蹈てたとひ今より後うつりかはる事ありとも猶此歌といふ事のもしあらんかきりをやといへる心歟又歌の文字にて歌といふ名のといふ心歟これはひろく歌のことをいひて今の集の事にはあらす其故はこれより下鳥の跡久しくとゝまれらはといふに至るまで此集の事なれはなり又何を隔てたれと心はつゝきたれは歌の事とゝまれるかな此歌の文字のあるをやこれにておもへはたとひうつりかはること有とも此集も行末久しく傳はるへしといふにや

青柳のいとたえす松の葉のちりうせすしてまさきのかつらなかくつたはり鳥のあと久しくとゝまれらは

あをあきのいとはたえす松の葉はちりうせすまさきのかつらはなかく鳥のあとはとゝまるといはん料なり淮南子注許愼曰蒼頡始視二鳥跡之文一造二書契一秘府論載魏秘書常景四聲讚曰龍圖寫レ象鳥跡摛レ光

歌のさまをもしりことの心をえたらん人は大そらの月をみるかことくにいにしへをあふきて今をこひさらめかも

大そらによせていにしへをあふくといひ月を愛し見るによせて今をこふといへり古今と名つくる事をもていひをさめたり同し人の大井川序云此こと

のは世の末までのこゝ今をむかしにくらへて後のけふをきかん人あまのたくなはくり返ししのふ草のしのはさらめやこれもこゝに似たり榮花物語にいはくこきんにはつらゆきじよいとおかしうつくりてつかうまつれりこせんしふにもさやうにやとおほしめしけれとかれはその時のつらゆき此かたのしやうすにていにしへをひきいまをおもひゆくする氣をかねておもしろくつくりたるにいまはさやうのことにたへたる人なくてくちをしうおほしめしけり此序のほとこれにて知へし

# 古今和歌餘材抄卷一　　六十八首

## 春歌上

ふるとしに春たちける日よめる

おほよそ立春とは年の內にもあれ正月にもあれ正月の節をいひて元日とはかはれるを本朝には元日を春たつ日といひならひて歌にもしかよめるにより堀河院御時後度百首には舊年立春を冬の題とす六帖には春たつ日とついたちの日とをわかちて此元方の歌を春たつ日の歌の初に載たり禮記月令云立春之日天子親帥㆓三公九卿諸侯大夫㆒以迎㆓春於東郊㆒還以賞㆓公卿大夫於朝㆒是月也天子乃以㆓元日㆒祈㆓穀於上帝㆒云々史記天官書云正月旦王者歲首立春日四時之卒始也（索隱曰謂立春日去年四時之終卒今年之始也）これら立春と元日とをわかてり今四時の卒始をはしめとして王者の歲首をこれにつくは天を先にして人を後にすることはり也されともふるとしに春たちける日といひて次のこと書にむ月ついたちの日よめるとはかゝすして春たちける日とかけるは元日を賞し來る故也正月になりての立春は賞するにたらさ

れはにや古來よます萬葉集第廿に寶字元年十二月十八日に三形王のよまれたる歌

み雪ふる冬はけふのみ鶯の　なかん春へはあすにしあるらし

十九日立春なりけるにやおなし廿三日に家持

月よめはいまた冬なりしかすかに　霞たなひく春たちぬとか

これらその日に當りてはよまねと舊年立春の歌の濫觴とすへし

貫之集云ありはらのもとかたかもとにおくる　在原元方拾芥抄云棟梁男官位不見

白雲のたなひきいたるくらはしの　山のまつとも君はしらすや

倉梯山大和國十市郡に有そこもとに宅地のありけるにや

年のうちに春は來にけりひとゝせをこそとやいはん（六帖朗詠）
ことしとやいはん

古來風躰抄に此歌まことにことはりつよく又をかしくも聞えて有かたくよめる歌也といへり或抄にこの歌に古今兩字の心こもれりといへるは用へからす歌の心あきらかなる故に顯注密勘にも出されす業平朝臣の孫にて歌も上手なれは此集の卷頭に載られてわらはへに至るまてしらさるはなく後の歌人年内立春とたにいへはいかによめとも此歌の面かけをたにかる事はいたれる面目なり後撰集にみつね

ひるなれやみそまかへつる月影を　けふとやいはん昨日とやいはん

六帖に落句をこよひとやいはんとありこれは同時の人の歌なりいつれかさきにて侍けん詞花集に赤染衛門

秋の野の花見るほとの心をは　行とやいはんとまるとやいはん

これは今の歌をしたひてよめるなるへし沙石集に論議よくする法師に弟子の僧歌をすゝめけれはいかさまによむものそといひける時此歌をかたりけれはこれをさへ論議にこゝろ得て御房とはれたりどいひけるよしかけりまことにふとはこたへかぬへし

春たちける日よめる　紀貫之拾芥抄云古傳先祖不見木工頭從五位下至老天慶比在

世大内記
六帖朗詠
袖ひちてむすひし水のこほれるを春立けふの風やとくらん

風躰抄云此うた又古今に取て心も詞もめてたく聞ゆる歌なりひちてといふことはや今の世となりてはふりにてはべらんつもかもへらなりなとはさることにてそれよりつき〳〵すこしかやうなる詞ともの侍なるへし　月令に孟春之月東風解凍といへり袖ひちてむすひし水とは袖をひたしてくみし水なり萬葉に漬の字濕の字をひつとよめりむすふは掬の字也顯注にむすふ袖をひたさねとせめて水になれさふ心なりといへり或説に夏よりの事をかけていへるはあまりにふかき心をいひつけんとて後の人のしわさ也かほをあらひ手をすゝくには冬も水をむすはぬことなは土佐日記に

手をひてゝ寒もしらぬ泉にそくむとはなしに日比へにける

これは二月五日の歌也もし夏をかけてよめる歌ならは顯昭のさも釋せられさりけれは定家卿注しそへ給ふへきを此歌の心ことにこもれる所なし不可有自他之説をのみかゝれたるにて心うへし

以上二首立春

題しらす　　　よみ人しらす

後撰には題しらすよみ人もたくみにもかけり題しらすは誠にしらぬも又しれともかゝすしてまさる時かゝぬも有へし讀人しらすは是もまことにしらぬもあり又はゝかる事有て名をいはぬもあり下に君やこし我やゆきけんの齋宮の歌によみ人しらすとかけり此たくひ也又卑賤のものは名をいふへからねは必これに入る後の集には朝覲の人をも此中にいれたれと此集には菅家の御歌をもてなすらへみるに然るへからすその人の歌といへとたしかならぬをはまつよみ人しらすとかきて後にある人たか歌といふなと注せり

六帖
春霞たてるやいつこみよしのゝよしのゝ山に雪はふりつゝ

風躰にはたゝるやいつこと有てさていはく此歌はたてると書たる本も侍れとよき本には皆たゝるやとかけり歌たけすかたなといみしく侍を今の世にはたゝるの詞ふりにたるなるへしたてるにては又

あまりにつよくてしなのをくるゝなるへしと云り
かくはあれと後の集ともに此歌を取て讀るは今の
本のことくたてるやといふにつけり春のきて霞の
たちたるといふはいつくそよしの山には雪のふる
物をと也常に春霞といふは只霞をいひて春には用
なきをこれは初春の歌なれは春は主にてかへりて
霞は伴なりみよしのゝよしのゝ山とかさねていへ
るを或説に吉野郡にある吉野やまなれはとおもへ
るは誤也萬葉第五に眞玉手の玉手さしかへとよめ
るは玉手を眞玉手とほめていへり又萬葉に眞熊野
とかきてみくまのとよみ眞草とかきてみくさとよ
めるはまとみと同し五音なれはなりこれになすら
ふるによし野を眞吉野とほめてみよしのとは云な
り

萬五大伴百代
梅の花ちらくはいつくしかすかに
　　　此木の山に雪はふりつゝ

新拾遺春上大中臣能宣
雪もふり霞もたてるよしの山
　　　いつかたをかは春と頼まん

貫之集
山みれは雪そまたふる春霞
　　　いつとさためて立わたるらん

二條のきさきの春のはしめの御歌

二條后諱高子贈太政大臣藤原長良公女清和天皇后
陽成院御母貞觀八年十二月廿七日爲二女御一元慶元
年正月三日立爲二中宮一六年正月七日爲二皇太后一東
光寺の僧善祐法師密通の事によりて寛平八年に后
位を停られさせ給ひ善祐は伊豆講師に流しつかは
さる　後撰離別善祐法師の伊豆の國に流され侍り
けるに伊勢
　　別れてはいつあひみんと思ふらん
　　　　　限りある世の命ともなし
拾遺集五善祐法師流されて侍りける時母のいひつ
かはしける
　　なく涙世はみな海となりなゝん
　　　　　同しなきさになかれよるへく
伊勢か歌は彼家集にもあり后は延喜十年にかくれ
させたまへるを朱雀院天慶六年五月廿七日に勅あ
りて本位に復したまふ其詔文本朝文粹第二にあり
菅三品作也かゝれは今二條の后とは天慶以後の人
のかける歟若は勅ありて別儀による歟然らすは先

勅に違背するにあらすや又下に二條の后のまた東宮のみやすん所と聞えける時といへるによりて思ふに此御歌は元慶元年以後によませ給ひけるなるへし

　雪のうちに春はきにけり鶯の氷れる涙いまやとくらん

ふる年の雪はいまた消ぬに日數は春になりにけれは涙もこほり雪にとちられて過つる鶯も今はをのか時待出て花にこつたふ心もつきぬらんのよしとそ聞え侍りしと定家卿釋したまへり鶯に涙あるにもあらすこほるへきにもあらねと鳴物なれは涙といひ涙あれはこほるといふは歌の常也雁虫鹿なと皆涙をよめり菅家萬葉集に

　いつのまにかは花になれけん
　こそなきし聲にさもはた似たるかな

といふ鶯の歌にそへて作らせ給へる詩の第三の句に恆吟鳴眼涙無由と作らせ給へるによれは涙あるましく聞ゆれと詩歌は心のよりくるまゝにいかにもいふ事也蟬の歌につけても盡日終夕鳴不涙と作らせたまへと蟬にも涙をよむ事也但涅槃經云青雀飲雄雀涙而便得レ身（ハラムコトヲ）これになすらへは鶯も涙あるへき歟猶さきの心なるへきにやこれは道濟十躰第八比興歌なり

已上二首も立春の類也

題しらす　よみ人しらす

　梅かえにきゐる鶯春かけてなけともいまた雪はふりつゝ

風躰抄に右二首を出して是等は今の世にもいみしくおほゆといへりこれは催馬樂の梅枝の歌也顯注云春になり梅か枝に鶯はなけとも猶冬のやうに雪はふるとよめる也春かけてとは冬のちかきにむかへていふ也春ふかくなりなは春かけてなとはいふへからす密勘云春かけての心此說にみゆ　今按いかにおもへとも此釋のみにては春かけての詞心得かたし伊勢物語に秋かけていひしなからもあらなくにとよめるは夏にていへは勿論也拾遺集に一春かけてきかんともこそ思ひしか山郭公おそくなくらん」これは夏なくものをもしは春より聞こともあらんかと思ひしことをいへり源氏物語に曉かけて月出る頃なれはといひ匡房卿の歌に曉かけて霜

や置らんなとは例おほく又きこえやすしかゝるか
けては類をもとむるにいまた見及ひ侍らす今按梅
が枝にきゐる鶯とは冬よりきゐるにて春かけてな
けともといへるも冬よりなけるによりてよめる歟
かく心得されは冬のちかきにむかひても春になり
て梅かえにきゐる鶯ならは春かけての詞心得られ
ぬ也うくひすは春を告といふは常の事なれと立春
のはやくあたゝかにもある冬は春をまたてなくも
また常の事也されは後撰に

春をたにまたて鳴ぬる鶯は
　　ふるすにかりの心なりけり

とよめるを思ふへし又は梅かえにきゐる鶯なけと
も春かけていまた雪はふりつゝとよめる歟是は春
かけての詞の置所おほつかなきやうなれとさる例
もある也拾遺に

秋風によもの山よりおのかしゝ
　　吹にちりぬる紅葉かなしな

これは輔相か物名に四十九日といふかたき事をか
くしてよめれは常の歌にはかはるへくやともいふ
へけれとさりとていかてことわりのわかぬことは
よむへきなれは此三四句のつゝきになすらふへく
や萬葉十九に

みそのふの竹の林に鶯は
　　しは鳴にしを雪はふりつゝ

道濟十躰には第九花躰也これより下五首は殘雪の
歌也中にも此歌と次の歌とは殘雪に鶯を讀合たれ
は上の二條后の御歌につらねたり

雪の木にふりかゝれるをよめる　素性法師 拾芥抄云宗貞男權律師

歌集六帖 春たては花とや見らん白雪のかゝれる枝にうくひす
の鳴

風躰に是又いみしくをかしきを見らんのことは今
の世にはすこしもちゐかたき也わさとよめると見
ゆるはをかしくも見ゆるにや源頼政と申作者もよ
みて侍りきと有此歌菅家萬葉集に載させ給へり彼
序の意寛平御時后宮歌合歌とも也今のこと書を引
合せて會釋せはもとは木に春の雪のふりかゝれる
を見てよまれたるを彼歌合の時出されけるにや見
らんは見るらんの古語也萬葉にあまたよめり古本
に見えんとかけるも有けるよし顯注にあれと見え
んはことわりもかなはぬかうへに菅萬に見覧とか

ゝせたまひ家集も六帖も一同に見らんとのみあれは沙汰に及ふましき事なり

題しらす　　よみ人しらす

こゝろさしふかくそめてしをりけれは消あへぬ雪の花とみゆらん

落句を顯注には花とみゆるかと有てみゆるかなといふ詞のなもしを捨たる詞なりといへり奥義抄も同し密勘にともかくもいはれぬは古本はいつれもさありて同し心歟春のくるより花にふかくこゝろさしのしみていつかさかんと思ひ居たれは消あへぬまてはかなき雪も我心からや花と見ゆらんとなり腰句顯注云居けれはに折けれはともそへたり密勘云居詞はうけられす折ければを用へし今按顯注の説はふたつなから失なはしとてひとつをも得すもし折けれはと意得は花と見ゆらんといふ花はかならす梅にかきるへし其故は右のつゝきなれは是も雪の木にふりかゝれるをよめるなるへきにいかにはかなくよむならひなれはとて梅とまかひては折ましけれは也しかるに梅と雪とのまかふ歌は此集には冬にのみあれはかれこれを思ひあはすへし

をりけれははまことに今よまんにはよき詞にあらねとも物思ひをれはともうらふれをれはともいとひしもをるともよめれは只同じ事也

後撰躬恒　春たつと聞つるからに春日山

消あへぬ雪の花とみゆらん

或人のいはくさきのおほきおほいまうちきみの歌也

忠仁公也天安元年二月十九日太政大臣五十一四月九日從一位二年十一月攝政貞觀十四年九月二日薨六十五謚忠仁公以美濃國封之當官なれともさきといへるは後に昭宣公も太政大臣となりたまへるに習ひてなるへし風躰抄にこれさきのおほきまうちきみの歌なりとかきけり此集の歌には心詞いみしくをかしこれより後はやう〳〵略して申へし

二條の后のとう宮のみやすん所ときこえける時正月三日おまへにめしておほせことあるあひたに日はてりなから雪のかしらにふりかゝりけるをよませ給ける

ふんやのやすひて

三代實錄第十六云貞觀十一年二月己丑朔天皇臨軒

立貞明親王爲皇太子かゝれはかたへの御息所あまた有故に此後東宮の御息所とはわきて云り二條后とかける事は上にいへるかことし或抄に淸和天皇の東宮にてまし〳〵ける時のみやす所といへるは大きに誤れり

春の日の光にあたる我なれとかしらの雪となるそわひしき

東宮の御めくみをかうふるを春の日の光にあたるとはそへたり猶行末も御めくみにあふへきをかしらの雪としろくなりたれは久しく恩光にあたるほとも有ましき事をわふる也悉陀太子を相せし相人のなけきしに似たり

後拾遺伊勢大輔
年つもるかしらの雪は大空の　光にあたるけふそ嬉しき

これは今の歌をとりて心をよみかへたり

雪のふりけるをよめる　きのつらゆき

六帖
霞たち木のめもはるの雪ふれは花なき里も花そちりける

木の芽のめくむをはるといへはこのめも春のとはつゝけたり春をはるといふも心は張にて草木の目のみならすよろつの冬こもりし物ゆへおける弓をはれるやうになれはなつけたるなるへし下句は君の御めくみのあまねきをそへたるにや

春の始によめる　ふちはらのことなほ　六帖藤原言直

六帖風躰
春やとき花やおそきと聞わかむ鶯たにもなかすも有かな

奥義抄云春の立ぬるに花の今まてさかぬは春のときか花の遲きか鶯にて事をきかんと思ふになかぬかなといふ也顯注も同し心にて年内にて正月にも春立日をは告たれはとしおそしともいふへきにあらねと歌はかやうにはかなくよむことのいみしきにこそ　定家卿云あさくいふかひなき事をのみこのみおもふ說にはまことに歌ははかなくよむ事のいみしきとのみひとみちに心得侍るなり

後撰
花たにもまたさかなくに鶯の　なく一こゑを春と思はん

これより下七首は鶯の歌也

春の始のうた　みふのたゝみね

おなしこと書なれと同時の歌にあらねは別に書り
此二首今すこし上にも有へけれと共に鶯をよめれ
は下につゝけんとてこゝに置なるへし

春きぬと人はいへとも鶯のなかぬかきりはあらしと
そおもふ

六帖
落句の意鶯のなかぬほとはさはあらしと思ふと也
公任卿和歌九品の中に此歌を出してすくれたる所
もなくわろき所もなくてあるへきさまをしれるな
りといへり

晉升集
冬きぬと人はいへとも朝こほり
むすはぬほとはあらしとぞ思ふ

昔はかやうに取てもよめり

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

后の宮は七條后温子なり昭宣公女袋草紙云仁和四
年十月六日入内菅家萬葉集序に寛平五年とあれは
歌合はそれよりさきなるへし立后は九年なれは初
に廻らして后の宮とはいへり

源まさすみ 當純近院右大臣男

菅萬六帖朗詠風榛
谷風にとくる氷のひまことにうち出る浪や春のはつ
はな

六帖幷朗詠集には山風にとくる氷と有菅家萬葉集
には谷風にと書て詩にも溪風催春解凍半とつくら
せたまへは今の本とまたく同し詩云習々谷風以陰
以雨 注曰習々和舒也東風謂之谷風 爾雅云東風謂之谷風

紀とものり

六帖
花の香を風のたよりにたくへてそ鶯さそふしるへに
はやる

菅萬には腰句交倍手曾とかゝせたまへはましへて
そなりたくふはそふる也萬葉集には副の字をかけ
り增一阿含經云香爲佛使故須燒香遍請これにな
すらふるに花の香を風のたよりにたくへてさそひ
たらんにいかなる鶯かさそはれこす侍らん

大江千里 參議音人男 兵部大輔

大江はもとは大枝なりしを貞観年中音人卿奏聞を
經て大江に改められたり其意趣三代實錄に見えた
り

六帖
鶯の谷よりいつる聲なくは春くることを誰かしらま
し

菅萬には第四句春はくるとも六帖には第五句たれ
かつけましと有毛詩云伐木丁々鳥鳴嚶々出自幽谷

遷于喬木といへり

拾遺中務（イ朝忠）

鶯の聲なかりせは雪きえぬ

山里いかて春をしらまし

在原棟梁業平朝臣男

拾芥抄云左兵衛佐筑前守從五位上名の下の注は後人のくはへたるをやかてかきつけたるなるへし

春たてと花も匂はぬ山さとは物うかるねにうくひすそなく

菅萬には尾句鶯やなくとあり顯昭云物うかるねとはものうきこゑといふなり世俗にはものくるしといふことはなり文集云花寒懶發鳥慵啼

貫之集

花鳥の色をも音をもいたつらに

ものうかる身は過すなりけり

重之

梅かえにものうきほとにちる雪を

花ともいはし春のなたてに

好忠集

山里は柴の立枝に吹風の

音きく時そ冬はものうき

題しらす　よみ人しらす

野へちかく家居しをれは鶯のなくなるこゑは朝な〳〵きく

家居しをれはとはしはやすめたる詞にて家住すれはと云なり朝な〳〵きくを顯昭はひるも夕にも鶯はなけとも曉鶯とて朝にはめつらしくとくなけはつとめてことに鳴ことを悦てよめるなりと注せられたれと只日ことにといふ心也萬葉第十に

梓弓ゐる山ちかく家居して

つきて聞らん鶯のこゑ

梅花さけるをかへに家居せは

ともしくもあらし鶯のこゑ

これらにて心得あはすへし此歌往古の姿也

春日野はけふはなやきそわか草のつまもこもれり我もこもれり

夫婦たかひにつまといふことは古事記に八千戈神と我妻須勢理姫とよみかはし給ふ御歌に都麻とのたまへり日本紀第十五仁賢天皇紀云弱草吾夫(ワカクサアカツマ)怇怜(コ)矣（言吾夫恫怜矣此云阿我圖麼播耶言弱草謂古者以弱草喩夫婦故以弱草爲夫）歌には万葉集をはしめて互に讀る事數をしらすわか草にたとふるは

わか草のもえ出るはつや丶かにてめつらしければ
也萬葉集第三人丸の歌にわか草のましめつらしき
わか大君ともよみ神樂歌には若草の妹ともいひ伊
勢物語にははつ草のなとめつらしきことの葉とも
よめりもろ共に春日野に出てあそひてかくはよめ
るなるへし若草の妻は所からと折ふしともに緣あ
る詞也此歌伊勢物語には發句武藏野はとあるにつ
けて顯昭のか丶れたる事あれと定家卿不及他沙汰
と判せらる彼段は作物語にて此歌を作りかへて所
にかなへたる歟又伊勢物語にては女の歌也こ丶に
ては夫婦いつれにてもあるへきをさきにいふ神樂
歌にしなか鳥ゐなの湊にあひそへる舟のかちよく
まかせかたふくな若草のいも丶のりたりやあひそ
へ我ものゝりたりや舟かたふくな〳〵とうたふも此
歌の心に似たれは夫のよめるにや或說に三四句を
漸草の下もえ初るかいまたあらはにはあらて下に
ほのみゆる頃の心なりといへるは用へからす

かすか野のとふ火の野守出てみよ今いくか有てわか
なつみてん

とふ火の野守とは春日野に昔烽をおかれける故に
とふ火野といひ飛火の原ともよめり元明紀云和銅
五年正月壬辰廢河內國高安烽始置高見烽及大倭國
春日烽以通平城也万葉集第六長歌に射釣山飛火賀
塊に秋はきをしからみちらしさをしかは妻こひと
よめり此射釣山をいこまやまとよみきたれるは駒
を釣にあやまれる歟さらすは春日野にいかこ山と
いふか有てそこにとふ火おかれたる歟伊駒山にと
ふひおかれたる事もみえす又彼歌はならの都を恭
仁都へうつさる丶時故鄕となることを惜みてよめる
歌にて都のよきことをほめたてたるに遠きいこま山
は取出へくもなししかれは春日野の一所にいかこ
山といふ小山なとのあるにとふひはおかれて其す
そ野をとぶ火野とぶひか原なとはよめるなるへし
とふひといふはもし事出來る時その所にあくれは
それをみて次第にあくる故に遠き所の事もほとな
くしらる丶故の名なり使のはやきを飛脚といふか
ことし日本紀に烽をす丶みとよめるはす丶む心に
や次第に進て告るゆゑなり野守とは野をもる人な
りその野守に出て見よいくかはかり有て若菜はつ
むほとになるへきとよめる也わかなは後の題には
七日をむねとすれとわかなつまんとこし物を散か

ふ花に道はまとひぬと下にもよみて春野に出てつむをはいつまでもわかなといへは今いくかありてともよめるなりこれより下五首は若菜の歌なり

後撰　かすかのゝ飛火の野守みし物をなきなといはゝつみも社うれ

風躰　み山には松の雪たにきえなくに都は野へのわかなつみけり

顯昭云松とさせることはうちきゝすかたのよろしき也木に降かゝる雪は土にたまれるよりはとくきゆれはまつの雪たにとよめるなり定家卿云遠山雪以松爲眺望之興和漢之流例也滿山松雪属詠人なと作れる心也杉の雪とは申さす今按源氏末摘花に雪のふれる朝をいへるに松ひとりあたゝかけにてとかけれはこゝに松の雪たにといへるはすこし心有へきにや奥義抄の心上の句のはしめにみ山にはといひ下の句はしめに都はといひたれと髄腦にも別事なる故に病とせすといへり

梓弓おして春雨けふふりぬあすさへふらはわかなつみてん

顯昭云弓をはおしてはれはかくつゝけたり梓は百木王といふ殊に弓の良材也續日本紀云大寶二年二月戊戌朔己未歌斐國献梓弓五百張延喜式兵庫式云梓弓一張長七尺六寸槻柘擬准此

仁和のみかとみこにおまし〳〵ける時に人にわかな給ひける御うた

仁和のみかとは光孝天皇なり又號小松天皇諱時康仁明天皇第二子母皇太后藤原澤子贈太政大臣總繼女也卽位三年　おまし〳〵けるをおはしましけると書る本も有

君か爲春の野に出てわかなつむ我か衣手に雪はふりつゝ

これは人にわかな給はせんとてみつから野に出て摘せ給ふに折ふし雪ふりかゝりて御袖も寒けれともそこのためと思へはしひてしのきて摘ためたりとある心也みこにましします時よりかやうに人をめくませたまふ仁德おはしけれは陽成院位をすへらせ給ふ時諸皇子あまたおはしけれとも此みこ帝王の相におなはせ給ふとて昭宣公のはからひにて位にはつかせ給ひけるなり其御年五十四歲それよりさきにたゝ人にならせ給ひて中將に任しひたちの

大守なとにもならせたまへり中々位につかせたまはんとはおほえさせ給はさりけれとも德のまし〳〵ける故にかくはなし奉られける也御子にて人ひとりをめくませたまふ御心に位につかせたまはヽ萬民に及ふへきことこもれり

萬葉十
君かため山田のさはにゑくつむと
雪消の水にものすそぬれぬ

うつほ
君かため春日の野への雪間わけ
けふの若なを獨つみつる

六帖
朝露にしとゝに袖をぬらしつゝ
君かためとてわかなつみつる

大和物語良岑宗貞にある女の母のよみて出せる歌
君かため衣のすそをぬらしつゝ
春の野に出てつめるわかなそ

歌たてまつれとおほせられしときよみてたてまつりける

或注に當集撰せらるヽ時歌をめす事也いつれもこれに同しとあれと然らす秋下に興風か歌の詞書に寛平御時ふるき歌たてまつれとおほせられければ立田川もみち葉なかるといふ歌を書てそのおなし心をよめりけると有又雜下に千里か歌の詞書にも寛平御時歌奉りけるついてに奉りけると有又貫之集に櫻ちることの下風とよめる歌のこと書に春歌合せさせ給ふに歌ひとつたてまつれとおほせられしにともあれは撰集の時にかきらす其上家集奉る時に述懷の歌一首なとは當時よみてそへても奉るへしめしあるにのそみてかゝる歌いくらも讀て奉るへきにあらすよくおもふへし

つらゆき

六帖風體
春日野のわかなつみにや白妙の袖ふりはへて人のゆくらん

顯注袖ふりはへてとは袖打ふりてといふ事也打はへてなといふ詞也密擲打振て心强不可違數多人のわかなつみにと通行景氣野外眺望春興となるかまことに打はへてなと申詞にかよはして心得へし今按下にふりはへていさふるさとの花みんと云々土佐日記にくすしふりはへて屠蘇白散酒くはへてもてきたり六帖に

春雨のふりはへて行人よりは
われまつゝまんやせ河のせり

源氏若菜にゆくての事はさても侍るなるをかくふりはへさせたまへる云々これらは袖ふりはへてといはされはもとよりふりはへてといふ詞に今は袖を打ふるとそへてつゝけたり源氏の心ふりはへはわさとの心ときこゆれは今も此こゝろをもてみるへし

題しらす　　在原行平朝臣

行平は阿保親王一男天長三年行平等賜姓在原朝臣元慶六年中納言 六十五 八年正三位仁和三年四月十三日致仕寛平五年薨

春のきる霞の衣ぬきをうすみ山風にこそみたるへらなれ

顯注霞の衣とは霞の立わたるを衣にたとへたり雲の衣ともよめり同事也ぬきをうすみとはもろ〳〵のおり物にはきぬにもぬのにもたてぬきとて有ぬきうすきをはよはき事にいひならはしたれはぬきのうすくみたるゝよし也今按へらなれはへきなれなり此詞天暦の頃よりやうやくよますとみえたり

此一首は霞也

寛平御時きさいの宮の歌合によめる

源むねゆきの朝臣 光孝天皇孫是忠親王男

拾芥抄云右京大夫正四位上兵部大輔天慶二年卒

風体 常磐なる松のみとりも春くれは今ひとしほの色まさりけり

ときはとは常磐とかけりとこいはといふへきを古以反幾なれはつゝめてときはといふ世上に常にありて久しき物はいはほなれはよろつの變せぬ事久しき事の喩にはときはといへり松のときはなり緑も春の色のそひて今ひとしほまさると也富める人の奢らぬかうへに禮を好み貧しき人の諂らはぬか上にたのしふかことし

歌たてまつれとおほせられし時よみてたてまつれる

つらゆき

我せこか衣はる雨ふることに野へのみとりそ色まさりける

腰句六帖にはふるからにと有せこも妻のことく夫婦に通する故に神代紀上には吾妹をあかなせのみことゝよみ和名集には備中國賀夜郡庭妹 爾比世 有此鄉の名もせといふ詞女に通する證也萬葉集には夫婦に通するのみならす親族朋友にもよめり今は女

をさせり但萬葉に我妹子とあるはわきもこなるを六帖にはわかせことかける事おほけれは此集の此も我妹子をかくよめるにや又萬葉第八に坂上郎女か妹か目を見そめか崎とよめるはをとこに成てよめれは今は女になりて夫をさしてわかせことい へるにやいつれにてもくるしからす衣はる雨は衣を張とつヽけたり色まさりけるは衣をはりてはあらたにそめ又色をもあくれは緑の詞也淮南子云春雨之灌萬物無地不澍無物不生といへりこれは春雨の歌なり下句をもて右の歌につらねたり

青柳の糸よりかくる春しもそ亂れて花のほころひにける

糸よりかくる春しもそといふてにをはの心は糸によりかけてはほころひたる物をもぬふとにてこそあるにかへりて花はほころふといへるなり花のひらくも衣のほころふるに似たれはいふ綻の字也詩にも欸冬誤綻暮春風と作れり源氏乙女には人々みなほころひてわらひぬともいへり

西大寺のほとりの柳をよめる

稱德天皇天平神護元年建之家集には西寺の柳をと有大の字落たる歟林氏か一人一首第三に石上大納言宅嗣の三月三日於西大寺侍宴應詔七言律詩第五六句云青糸柳陌鶯歌足紅絮桃蹊蝶舞新此第五句に柳陌と有に依れは西大寺のほとりには柳を並木なとに植られたるか遍昭の頃まてもありけるをみてよまれけるにや

僧正遍昭

桓武天皇孫大納言良岑安世男俗名宗貞嘉祥三年三月廿一日仁明天皇崩廿九日出家元慶三年任權僧正天台宗僧正の始也仁和元年任僧正二年聽輦車元亨釋書云常誇（ホコッテ）曰慈覺之資安然之師也人品可見歌のさまを得てまことすくなきは此詞にかなへり

あさ緑糸よりかけてしら露を玉にもぬける春のやなきか

柳かはかなりこと書にたヽ柳をみてよめるとかきてもさもあるへきに西大寺のほとりの柳といへるにつきておもふに柳か枝もまことの糸ならす白露も誠の玉ならぬになとかくはいつはりなかるへき寺のほとりに玉の緒をぬきて人をあさむくかとよめる也其心をあらはさんとてこと書をくはしく

かけるにや夏の歌に蓮をよまれたる歌の心おもひ
あはすへし

題しらす　よみ人しらす

もゝちとりさへつる春はものことにあらたまれとも
我そふりゆく

顯注にもゝちとりとはうくひすをいふと云々春立てうらゝかなるに諸の鳥のやはらきなけは百千鳥とは申にこそ萬葉に

我宿のえのみもりはむ百千鳥
千鳥はくれと君は來まさぬ

とあれはもろ〳〵の鳥ときこゆもゝとりとも萬葉にあれは惣してあまたの鳥とは聞ゆるなり古今にも後拾遺にも鶯の歌をははなれて入たりうたかひ有へからす月令の反舌百舌なとはもすといふ又百舌を鵯鳥によせて鶯歟と申すへけれとそれはとかく申つへし不定　密勘云非鶯とも難一决又不可限鶯百鳥といふひとつ先鶯歟百花も柳櫻をのそくへからすこれはすこし定家卿の説もことはりの盡さる歟百花といふ中に柳櫻をのそかすとて柳櫻をさして百花とはいはねはさては百千の鳥の中に鶯ありとて鶯をおしてもゝ千鳥とはいひかたかるへきにや榮花物語第五つほみ花に日のけしきうらゝかにひかりさやけくみえもゝちとりもさへつりまさりといひて又谷の鶯も行末はるかなる聲に聞えてみゝとまると書けれは別なりときこえたり　顯注にひかれたる歌百千鳥といひてそれをかさねていふ時千鳥はくれともかへしたれは定まれる名にあらぬ事明らけし八雲御抄鶯の下にえのみをはむ鳥のよししるさせ給へるは此もゝちとりを鶯とさためておほしめされけるなるへし萬葉にもゝ鳥とよめる歌は第五に

梅の花今さかりなりもゝ鳥の
聲のとほしき春きたるらし

第六長歌にさく花の色めつらしくもゝ鳥の聲なつかしく云々

第十八長歌に百鳥のきゐてなく聲春されはきゝのかなしもとよめり

第十七には朝かりにいほつ鳥たて夕かりにちとりふみたてともよめり

又夫木抄第十七に和泉式部家集を引ていはく水の
ほとりに千鳥のたゝひとつたてるを見て

　友をなみ河瀬にのみそ立ゐける
　　百千鳥とは誰かいひけん

又廿四に題しらすよみ人しらす

　百千とりやすのかはらにむれゐつゝ
　　友よひかはす心あるらし

後の歌もふるき歌とみゆるにこれらは千鳥をとも
に百千鳥とよめるは千鳥といふにつけておほかる
心に百の字をくはへていへり韓退之送孟東野序に
以鳥鳴春といへることく春はよろつの鳥のさへつり
かはせはもゝちとりさへつるはるとはいへる歟さ
れとも昔より鶯をもゝちとりとよめりとおほゆる
ことあり文集牡丹芳に花開花落二十日一城之人皆
如狂といへるより牡丹の異名を此國にはつか草
いふことく宮鶯百囀とも作りたれはしきりに文集
を翫ふ頃にてもとよりもゝちとりとよめる事の
有をやかて鶯にいひなしけるにや源氏の若菜の上
にあさほらけのたゝならぬ空にもゝちとりの聲も
いとうらゝかなり又御注にもゝちとりのさへつる
もふえのねにおとらぬこゝちしてといへりこれは
春鶯囀の曲をかけて鶯をいへるにやとおほし貫之
集に

　百千とりこつたひちらすさくら花
　　いつれの春かきつゝみさらん
　百千とりなく時あれと君をのみ
　　こふるわかれはいつとわかれす
　み山には月もさためす百千鳥
　　時そともなく鳴わたるなり

是らはいつれにもいひなしてん後拾遺に藤原長能

　聲絶すさへつれ野への百千鳥
　　殘りすくなき春にやはあらぬ

これはまことに鶯をはなれて蛙の下呼子鳥の上に
入られたり

萬十　冬過て春しきぬれは年月は
　　あらたまれとも人はふりゆく

拾遺　あたらしき年はくれともいたつらに
　　我身のみこそふりまさりけれ

貫之集　から衣あたらしくたつ春なれと

人はかくこそふりまさりけれ、

猿丸集
をちこちのたつきもしらぬ山中におほつかなくもよ
ふこ鳥かな

をちこちのは俗にあちこちといふにおなし萬葉に
彼此と書りたつきもしらぬは萬葉にたときともい
へりたよりもしらぬ心也呼子鳥は和名集にも載て
萬葉をはひかれたれとももろこしの文を引てその
鳥のことなりとも釋せられねは只此國にのみ有鳥
にや後拾遺下に法輪に道命法師の侍けるとふらひ
にまかりわたるによふこ鳥のなき侍りけれはよめ
る法圓法師

我ひとりきく物ならはよふこ鳥
ふた聲まてはなかせさらまし

康資王母家集にもの思ひみたれたるによふこ鳥の
鳴を

よの中をなそやといふもよふこ鳥
わかなく聲をこたふとやきく

かく此頃まては人のしれりけるをいつよりこれか
かれかとまとふ事にはなり侍りけん萬葉におほく
よめり常になく鳥なり第八に坂上郎女春の歌に

よのつねに聞はくるしきよふこ鳥
聲なつかしき時にはなりぬ

かくよめれは鶯時鳥なとのやうにきかまほしき聲
にはあらさる也夜も鳴鳥也第十に

わかせこをなこせの山の呼子鳥
君よひかへせ夜のふけぬとに

夜のふけぬとにはふけぬ時に也集中に猶有同卷夏
部にも載せたり

朝霞八重山こえてよふこ鳥
鳴やなかくる家もあらなくに

六帖には六月にもよめり

六月のなこしの山のよふこ鳥
おほぬさにのみ聲のきこゆる

里にもなく鳥也後撰集によふこ鳥を聞てとなりの
家におくり侍りける春道つらき

我宿の花になゝきそよふこ鳥
よふかひ有て君もこなくに

同し集戀五に寛湛法師母

なかめつゝ人まつ宵のよふこ鳥
いつかたにとか鳴わたるらん

夫木抄第十五云紅葉に鳥のやとりたるを惠慶法師

紅葉みて歸らん方もおほえぬを

よふこ鳥さへ鳴山ちかな

これは秋によめり兼好法師かつれ〳〵草に呼子鳥は春の物なりとはかりいひていかなる鳥ともさたかにしるせる物なしといへる所に羅序子(切紙イ)か野槌云長谷川式部少輔守尙か家にて常緣宗祇基綱相傳の書を見侍りしに呼子鳥は人をもいふ猿をもいふとあれと猿といふかよき也と記せり近代の歌人此事を秘して口外に出さすされとも此草子に揚名介呼子鳥なとをも書のすれは兼好の頃まてはさほとに秘せさるとみえたりといへり世の儒宗とする人所持の家書をさへ顯はしたれは髓成事也是呼子鳥相傳の至極と知へし心敬法師の櫻井基佐に語られたるも此定なり又或抄に裏書云東野州古今傳授箱內切紙の說呼子鳥かつほう〳〵と鳴鳥の事也と云々東野州は常緣也羅浮子の見る所と相違如何いつれにもあれ疑を殘す事あり上に勘ふるか如し或人の申けるは萬葉集に鵼をぬえ子鳥ともよみたれはよふこ鳥もよひ鳥といふ心にて子はそへたる字にや又萬葉にぬえ鳥の喉よひせるにと讀るはのと聲につふやくやうになくをいへは呼こ鳥もさる體なる聲にてなけは名付たる歟といへり今按曾丹か集に

我身をは皆人すへてすさめぬを

哀にもまたよふこ鳥かな

是は身を木の實によせたりとおほし源中正歌に

足引の山鳩のみそすさめける

散にし花のしへになる身を

是もまた身を實に寄たり世にとしよりこよと鳴とてやかてしか名付たる鳩はけにもしか聞ゆれは昔よりかくはよめり西行上人歌に

山はたのそはのたつ木にゐる鳩の

友よふ聲のすこき夕暮

雨鳩呼婦ともいへり和名集に鳩(夜萬八止)鴿(以倍八止)此外に呼子鳥をは出されたれと野王按鳩此鳥種類甚多鳩は惣名也といふをも引たれは仲正か歌をもて曾丹か歌に引合て證するに彼としよりこよといふはとにや但かくいへはとて是なんそれとさためて申すにはあらす見及へる事を注し置はかり也或抄云よふこ鳥の事たゝよふこ鳥といふとりの春あるにてこ

そあらめ何鳥と知て其異名をよむことなければ詮なき事也口傳ありともかく心得て有なん一禪の口說もこれにおなし是は正直なる注也これらならて歌によむ鳥獸草木にもたゝの詞にもしれぬ事もありたしかならぬ事もあれは大かたさそとおしはかりてよむ常の事也此一首はよふこ鳥也右の歌と類をもてつらねたり

曾丹集　打かすみたつ木も見えぬ春の野に
聲をやしれと鶯のなく

鴈の聲を聞てこしへまかりける人をおもひてよめる

離別部におなし躬恒か歌の詞書にあひしれりける人のこしのくにゝまかりて年へて京にまうてきて又歸りける時によめる又こしのくにへまかりける人に讀てつかはしけるともありその人をおもひてよめるにや雜下にむねをかのおほよりかこしよりまうてきたりける時にとて躬恒か歌大頼か返し有大頼は名を出したれはこれはこと人なるへし

凡河内躬恒

父祖見えす甲斐少目淡路掾なとを經たる人也凡河內は神代紀云次天津彥根命（是凡河內直山代直等祖也）又日本紀に大河內ともあれは凡河內をもむかしはおほかふちといひけるにや古事記云次天津日子根命（凡河內國造之祖也）これによれは凡河內はすなはち河內國の事也日本紀に此氏の人二三人を載らる宅地河內國にありとみえたり

風躰　春くれは鴈かへるなり白雲の道ゆきふりにことやつてまし

道ゆきふりはゆきふれ也萬葉第十一に
玉鉾の道ゆきふりにおもはすに
妹をあひみてこふる頃かも

みつれ集　ことさらに見にこそきつれ櫻花
道ゆきふりとおもはさらなん

玉鉾の道ゆきふりに山さくら
をるとや我を花のおもはん

ことやつてましとはことやつたへまし也これも鴈の使を下にもちていへるなり躬恒集にまた

歸る鴈雲井はるかに聞時は
たひの空なる人をしそ思ふ

歸る鴈をよめる　伊勢（伊勢守藤原繼蔭女 宇多帝御息所）

春霞たつを見捨てゝゆく鴈は花なき里にすみやなら

へる
鴈はとこよの國よりわたりくるといふ花さけはちる習なる故に常世には花有ましきことわりをもておさへて花なき里にといへりけにも花なき里にすみならひたれはにやちかく花も咲ぬへし春霞のたつを見捨てゝはいぬらんと也中務集に
藤の花さくを見捨て行春は
うしろめたくや思はさるらん
これは母か歌をうつしてよめる歟　右二首歸鴈

題しらす　よみ人しらす
伊勢集 折つれは袖こそ匂へうめの花ありとやこゝにうくひすのなく
風體抄に言直のこなた七首を出して以上此歌ともはいつれもすかた心いとをかしく侍るその中此歌梅を折ける袖ふかくにほひけるを愛には花のなけれともうくひすの香をたつね來てなくらん心めてたく侍るといへり此歌伊勢か集にあり此集に作者をしるさねはかれにはあやまりてましへたるにや梅花を折つれは我袖のかうはしきを梅の花こゝに有とや鶯の鳴らんと梅花もなき所によめり

是より梅の歌十六首
色よりも香こそ哀とおもほゆれたか袖ふれしやとの梅そも
拾遺 ふる雪に色はまかひぬ梅の花
香にこそ似たる物なかりけれ
やとちかく梅花うゑしあちきなくまつ人の香にあやまたれけり
あちきなくはせんかたなしといはんかことし日本紀に無端無狀無賴みなあちきなしとよめり文選古詩には無爲とかけるをよみ史記匈奴列傳には毋爲也とあるをよめり又史記伍子胥列傳に無益をあちきなしとよみたれはむやくなりといふ心にや
詞花花山院御製 宿ちかく花橘はほりうゑし
昔をしのふつまとなりけり
梅花立よる計有しより人のとかむる香にそしみける
此歌兼輔集にいとしのひたるうつり香の人しるはかり有けれはそのをんなにとていれりとてあれとこゝに讀人不知に入たれはおほつかなし立よる計有しよりは立よらんとする程の間のしはしの心也
後撰 梅花よそなからみむわきもこか

とかむ計の香にもこそしめ

同
梅花かを吹かくす春風に
衣をしめは人やとかめむ

後拾遺能宣
梅花匂ふあたりの夕暮は
あやなく人にあやめられつゝ

うめの花を折てよめる
東三條の左のおほいまうち君

源常嵯峨天皇御子左大臣左大將齊衡元年薨四十四

鶯の笠にぬふてふうめの花をりてかさゝむおいかく
るやと

これは催馬樂に
靑柳を片糸によりて鶯の
ぬふてふ笠は梅の花かさ
といふを取てよみ給へり　奥義抄にも顯注にも鳥
のこゝちよく枝につたひありくをはぬふといふ
也されはぬふといふ詞につきて笠をはぬふ物なれ
は柳の糸して梅の花笠をぬはせたる也定家卿の心
は枝につたふをぬふといふ義にもおよはすたゝ
花の姿の笠に似たるにつけて鶯や笠にぬひてきぬ
らんと思ひよせたるにても侍りなんやと有但本歌
は柳を糸によりてぬふといふ笠と讀つれは鶯のこ
なたかなた木つたふをぬふといふもしひてきらふ
ましきにや西行法師の歌に
糸薄ぬはれて鹿のふす野へに
ほころひやすき藤はかま哉
此ぬはれふすといふと顯昭のいへるぬふと同し詞
歟今の歌はたゝ本歌にすかりたれは其沙汰に及ふ
へからす後撰集に躬恒
かさせとも老もかくれぬ此春は
花のおもてもふせつへらなり
これは今の歌をとりてよめり又躬恒集に
老ぬれはかしらはしろくうの花を
折てかさゝむみもまかふかに

素性法師

題しらす
家集には梅の花を折て人のかりやるとてと有

よそにのみ哀とそみし梅花あかぬ色香はをりてなり
けり

物ことにかりそめにみれはなつかしくて常になる
れはさらぬ習なるを此梅の花はよそに哀とみつる
よりはまことにあかぬ色香とは折ての後しれりと

也
梅の花を折て人に送りける　とものり
君ならて誰にかみせんうめの花色をも香をも知人そしる
戰國策燕王賜樂間書曰世有下掩二寡人之邪一救中寡人之過上非レ君孰望レ之　萬葉第十七に家持
み冬つき春は來たれとうめの花
　君にしあらねは折人もなし
後拾遺集に中納言定頼かれ〲になり侍りにけるにきくの花にさしてつかはしける　大貳三位
つらからんかたこそあらめ君ならて
　たれにか見せんしら菊のはな
これは今の歌をとれり
くらふ山にてよめる　つらゆき
くらふ山は山城なり順集にくらふ山ふもとの野への女郎花といふ歌の判の詞にさかのを打過てくらふ山まてもとめありきけんもあちきなしといへり又天武紀に倉歷あり是は和名に近江國甲賀郡に藏部久良布ありこれは同名異處なり
六帖 梅花匂ふ春へはくらふ山やみにこゆれとしるくそありける
六帖には初二句梅花咲ぬる時はとありはるへは只春と心得へしやみにこゆれとゝは此時まことにかゝるにはあるましけれと梅かゝをほめんとてくらふ山の名よりかくはよまれたる歟但下のつゝき二首をもて思へはこと書には夜とは見えねと夜にかゝりてこえられけるにや源氏若紫にくらふ山にやとりもとらまほしけれとあやにくなるみしか夜にてあさましうなか〲也
六帖 くらふ山くらしと名にはたてれとも
　いもにといはゝ夜もこえなん
月夜に梅の花を折てと人のいひけれはをるとてよめる　みつね
月夜にはそれともみえす梅の花香をたつねてそしるへかりける
闇にこそ物はかくるれと月と梅とも見分かたければ此下の句はあるなり
春の夜うめの花をよめる
春の夜のやみはあやなしうめの花色こそ見えね香やはかくるゝ

あやなしは無文なり遊仙窟云女婿是婦家狗打殺無レ文　衣服に紋なければかれこれしりわきかたきかことくわけもなきこゝろなり梅をそねみてかくすとすれと色をはかくせとも香をはえかくさねはわきもなきことなりといふなり拾遺集におなし　躬恒

香をとめて誰をらさらん梅の花
あやなし霞立なかくしそ

はつせにまうつることにやとりける人の家に久しくやとらてほとへて後にいたれりけれはかの家のあるしかくさたかになんやとりはあるといひいたして侍りけれはそこにたてりける梅花を手折てよめる

つらゆき

三代實錄第二十八云貞觀十八年五月廿八日甲辰先是律師法橋上人位長朗申牒偁大和國長谷寺是長朗先祖川原寺修行法師位道明靈龜年中卒其同類奉爲國家所建立也靈像殊驗遐邇仰止云々又長谷寺壺坂寺の觀音の靈驗第一なるよしも有これによりていにしへは殊に長谷寺に參籠せしなり源氏枕草子なとにもみえたりそこにたてるは菅家の吹上にたてる白菊とよませたまへるたてるなり神代紀下云其雉飛降止二於天稚彦門前所レ植（植此云多底婁）湯津杜木之杪一云々

人はいさこゝろもしらすふる鄕は花そむかしの香ににほひける

初の二句は人は心もいさしらすといふことを詞をましへていへる也ふるさとゝは久しくなれこし所なれはいへりかくさたかになんやとりはあるといひ出せるはあるしの心むかしのまゝにかはる事なしといふよしなれはその詞にこそかはる心なしとはうけたまはれ人の心はことはの下に變する物なれはきくまゝにはたのみかたしまして年ころ有てあへるにはいよ／＼うたかひなきにあらすたゝこの宿の梅のみむかしのまゝに匂ひてさたかにおほゆるとよめる心也此時あるしのかへしあり貫之家集にあり

花たにも同し心にさく物を
うゑけん人のこゝろしらなん　伊勢

水のほとりに梅花のさけりけるをよめる

宋の林和靖か梅を作れる詩にも疎影橫斜水清淺と

いひて水邊の梅はおもしろき物なり家集には京極の院に亭子のみかとおはしまして花のえんをせさせ給ひまゐれとおほせられしにまゐりて池に花なとのちりたるを見てとて今の歌前後して二首ともにあり但なかるゝ川とよめるは池には有へからす

春ことになかるゝ川を花とみてをられぬ水に袖やぬれなん

發句を第二の句の下へうつして心得へし梅を愛するまゝになかるゝ水に影のうつれるをたゝことしのみならす猶行末の春ことに花とまかひてをらんとしてはかなく袖やぬれなんとよめる歟あるひは又春ことには今までの過こしかたをいひて猶こりすまに此春も折れぬ影故に袖やぬれなんとよめる歟

年をへて花のかゝみとなる水はちりかゝるをやくもるといふらん

散かゝるに塵をそへたり鏡は久しくなれは塵のかゝりてくもれは年をへて花の爲に鏡と成て影をうつす水も花の散かゝるをやくもるとはいふらんとなり

家にありける梅の花のちりけるをよめる　貫之

くるとあくとめかれぬ物を梅の花いつのひとまにうつろひぬらん

くるとあくとは日のくれ夜の明る也朝夕にといはんかこと　めかれぬはめもはなさぬなり萬葉集に離の字をかるとよめりひとまは日本紀に間の字をよめり人間にて人のなき間也後撰に

　あひ見てもつゝむ思ひのわひしきは
　　ひとまにのみそねはなかれける

竹取物語にある人の月かほみるはいむ事とせいしけれ共ともすれはひとまにも月を見てはいみしくなき給ふ源氏紅葉賀にひとまにさしよりて物かくしはこり給ひぬらんかしとて云々うつろひぬらんは色のかはるにしても意得らるれとこと書にちりけるを見てとかけるによるにちりぬらん也神代紀下云故其生子必如二木花一移落これ移は常にうつるとこそよむをちるとも點したれは散をうつろふともいふへき證明か也遷移遷變なといふ常の事也月の移ろふなとゝよむを花につきては色のかはるをうつろふとのみよみなれ聞なれてちるをうつらふといへは耳をおとろかすやうになれり後の習ひをわ

すれて昔の心にかへるへし此色の彼色にうつろふも枝より庭にちりて所をうつろふもたゝ同し心なり次の巻に心つからやうつろふと見ん又待しさくらもうつろひにけりともに詞書にちるを見てといへり又人の心そ風もふきあへぬといふも風もふきあへすうつろふといふ心なるにこと書に櫻のことくとくちるものはなしと人のいひけれはとあれはいひ殘したるうつろふは又散なり又後撰集に櫻の花のかめにさせりけるか散けるを見て中務につかはしける貫之

久しかれあたにちるなと櫻花
　かめにさせれとうつろひにけり

中務か返しに

千代ふへきかめにさせれと櫻花
　とまらぬことは常にやはあらぬ

是もうつろひにけるをちるとうけてとまらぬ事はといへる也又同し集におなし人

風をたに待てそ花の散なまし
　心つからにうつろふかうき

これらちるをうつろふとよめり新古今後鳥羽院の御製に

けふたにも庭をさかりとうつる花
　消すは有とも雪かともみよ

これも散をうつるとよませ給へり

新後拾遺　實房
くるとあくとみてもめかれす池水の
　花のかゝみの春の面影

又夫木三十六に太宰の任にてくたりける時月をみて太宰大貳高遠卿

ひまもなく物思ふ時の旅やとり
　いかなるまにか月のもるらん

歌の心かよへり

寛平御時きさいの宮の歌合のうた
　よみひとしらす

菅萬六帖
梅かゝを袖にうつしてとゝめては春はすくともかたみならまし

六帖には二三の句袖にこきいれてとめたらはとあり菅萬には落句かたみとおもはんとありとゝめてはのはもしにこりてよむへき歟にこれはとゝめたらはの心なり萬葉に

秋はきの匂へる我裳ぬれぬとも

君かみふねの綱し取ては

濁音の婆の字をかけり此類あまたあり今もこれに同しかるへし

素性法師

ちるとみてあるへき物を梅の花うたて匂の袖にとまれる

菅萬に此歌ありうたてを別様とかゝせたまへり又日本紀には奇偉をうたてあると讀り又古事記下雄略天皇段云忍歯王隨レ乘二御馬一到二立大長谷王假宮之傍一而詔夜既曙訖可レ幸二獵庭一侍二其大長谷王之御所一人等白宇多氏物云王子（宇多氏三字以音）貫之集云きのくにゝ下りてかへりのほりし道にて にはかにうまのしぬへくわつろふところにみちゆく人々たちとまりて云これはこゝにいますなる神のし給ふならむとしころやしろもなくしるしもみえねとうたてある神なりさき／＼かゝるにはいのりをなむ申すといふに云々おほよそうたてをはうたゝといひ又うたてしきといふ俗語にもいへは今引ところ皆ふたつにかなはす中にも菅萬にかゝせ給へるによるによのつねならぬ香の心なるへしちると見てさてあらてしひてたつさひてよのつねならぬ香の袖にとまりて忘れかたき心也形見こそ今はあたなれとよめる類なり右の歌に贈答せるやうにつらねたり

題しらす　讀人しらす

ちりぬとも香をたに殘せ梅花こひしき時の思ひてにせん

人の家にうゑたりける櫻の花さきはしめたりけるを見てよめる　つらゆき

此歌より次の卷に貫之の水なき空に浪そ立けるといふ歌まては櫻の歌也よりて歌に櫻とよめり歌に櫻とよまぬうたはこと書に櫻といへり其中に此卷には櫻のさけるほとをいひ次の卷はちるをよめり平城天皇の御歌より後貫之のみ山かくれの花を見ましやといふまては詞書にも櫻といはす歌にも只花とのみよみたれはよろつの花をよめり後に花といひては櫻そと心得るにはかはれり

ことしより春しりそむる櫻花ちるといふ事はならはさらなん

六帖には三四の句うめの花ちるてふことはとて梅にいれたり貫之のむすめの集たることの葉といへ

とかゝる事おほけれはおほつかなし或注にことしより春を知て植たる櫻といへるは誤なりいつにてもうゑれきたるかことし咲そむる也下句はいはふ心有新千載集春上云應和三年三月三日御前の櫻の花さきはしめたるを御覽してことしより春しりそむるといふ歌をおほしめしいてゝよませ給ひける

天暦の御製

咲そむる所からにも櫻花　あたにちるてふ名をたつなゆめ

詞花

春ことにみる花なれとことしより　咲はしめたる心ちこそすれ

よみ人しらす

題しらす

猿丸集

山高み人もすさめぬさくら花いたくなわひそ我みはやさむ

又は里遠み人もすさめぬ山さくら顯注にはいたくなわひそを物なおもひそと有密勘なし同心歟すさめぬは興せぬ心なり我見はやさんは我見てもてはやさん也後撰集に

何に菊色そめかへし匂ふらん　花もてはやす人もなき世に

注の上句は作者もとよりかやうに雨やうによめるも有へし又つたふるにかはれる説もあるへけれはならへてすてぬ也下にも此類あり

山櫻わか見にくれは春霞みねにもをにも立かくしつゝ

尾とは山のさきくたれる所を云戰國策云昔王季歷葬於楚山之尾又云燕王曰奉社稷西面而事秦獻當山之尾五城（補注曰尾猶末也）我見にくれは時しもあれ霞の立かくしてみせすと霞のあやにくなるを恨むる心あり

そめとのゝ后のおまへに花かめに櫻の花をさゝせ給へるをみてよめる　さきのおほきおほいまうちきみ

染殿后諱明子忠仁公女母潔姬嵯峨皇女天安元年十一月中宮貞觀六年正月七日皇太后元慶六年正月七日太皇太后少納言におもしろく咲たる櫻をなかくおし折ておほきなる花かめにさしたるこそをかしけれ又云かうらんのもとにあをきかめのおほきなるすゑて櫻のいみしくおもしろきえたの五尺はかりなるをいとおほくさしたれはかうらんのもとまてこほれさきたるに云々

年ふれはよはひはおいぬしかはあれと花をしみれは

物思ひもなし

大鏡云后を花にたとへ申させたまへるにこそなきさの院にてさくらを見てよめる

此歌よまれたる時の事は伊勢物語にくはし

在原業平朝臣

風體
よの中に絶て櫻のなかりせは春のこゝろはのとけからまし

土佐日記には腰句さかさらはと有咲を待ちるををしみさかりなるほとも雨をいとひ風をおそれなと愛するあまりに心のいとまなきよりなへての世に櫻といふもゝのたえてなくは春の心は中々長閑けからましとなり櫻をいとふにはあらす心にまかせぬ故にいへり心の餘れるにあはせてはすこしことはのたらぬかたなるへし朝忠の歌に

あふことの絶てしなくは中々に

人をも身をも恨さらまし

これあふ事の心にかなはぬまゝに絶てしなくはとよめる所今の心におなし拾遺に忠岑

春は猶我にてしりぬ花さかり

心のとけき人はあらしな

此下句今の歌をとれりとみゆ公任卿和歌九品に上下に出して心ふかゝらねとおもしろき所あるなりといへりたえてをにこりて不斷なりといふ俗説有いふにたらす

題しらす

よみ人しらす

猿丸集　六帖　家持集
石はしる瀧なくもかな櫻花手折てもこんみぬ人のため

たをりてもこんを六帖にはたをりもてこんと有風體抄云石はしるとおきて瀧なくもかなといへるもしつかひめてたく侍なりといへり萬葉第十五に伊波婆之流多鮎毛登抒呂爾鳴蟬乃云々石走とかける所も皆いはばしると點せり今の歌も古き姿なれはいはゝしる也けんやみなきり落る瀧に隔らるれはなくもかなといへり或説に云石はしる瀧のえもいはぬおもしろきに櫻の咲あひたるをなかめて櫻はかりを家人のために折て歸りては今見る瀧の興の
そはねは詮なけれはあはれ瀧のなくて櫻のはなのみならましかは折て歸るへき物をとよめる心にいへりかやうの說ゆめ／＼用ふへからす拾遺愚草に
これを取て

石はしる瀧ゐる花の契りにて
　さそはゝつらし春の山風
と戀の歌によまれたるを思ふへし又壬二集に
石はしる瀧なき花もかひそなき
　をれはこほるゝ山吹の露
萬葉
故郷の初もみちはを手折もて
　けふそ我くる見ぬ人のため
同
田子の浦の底さへ匂ふ藤浪を
　かさしてゆかんみぬ人のため
　　そせい法師
山のさくらをみてよめる
此集に山といへるふたつ有ひとつにはたゝ山也此歌又夏部に山に郭公の鳴けるを聞てよめるとあるこれなりふたつにはひえの山なり離別に山にのほりて歸りまうてきて人々わかれけるついてによめる又うりんゐんのみこの舍利會に山にのほりて歸りけるに櫻の花のもとにてよめるとあるこれなり
見てのみや人にかたらん櫻花手ことに折て家つとにせん
家つとは萬葉に裹の字をつとゝよめり所につけたる物をつゝみてくるを家つとゝいふゐなかより都へもてくるをは都のつとゝいひ萬葉には山つと濱つと道行つとなともよめり俗に藁なとにて物をつゝむやうにしたるをつとゝいふも此よし也それになすらへて花紅葉のたくひをも皆つとゝいふ也この歌は右の歌をふみてよめる歟詞花集に
櫻花手ことに折て歸るをは
　春のゆくとや人はみるらん
花さかりに京を見やりてよめる
見わたせは柳さくらをこきませてみやこそ春の錦なりける
こきませてはかきませてといはんかことし家持集に
　吹風にちるたにをしきさほ山の
　紅葉かきたれ時雨さへふる
これ此集にこきたれとよめるをかきたれといへはかとこと五音通して同し事也題注に亭子院歌合の歌
み雪ふる春日の野への櫻花
　えこそみわかねこきませにして
櫻の花の本にて年の老ぬることをなけきてよめる

きのとものり
六帖
いろもかもおなし昔にさくらめと年ふる人そあらたまりける

六帖には第二句むかしなからにと有さくらめとに櫻をもたせたる歟さらても有ぬへし上のもゝちとりさへつる春はといふ歌には引かへたる物から今は改まるといへるかふり行にておなし心となれり劉庭芝詩云年々歳々花相似歳々年々人不同

をれる櫻をよめる　つらゆき
誰しかもとめて折つる春霞たちかくすらん山のさくらを

發句のし文字は助語にて誰かなりとめてはもとめて也覓尋これらをとめてとよめりこれは折ておこせたる人の心さしをいたせる勞をいはんとてかくはよめる也伊勢集に櫻を人に送り侍るとて
花みよと尋てをれる山櫻　ふりにし色と思はさらなん

歌奉れと仰られし時によみて奉れる
櫻花咲にけらしも足曳の山のかひよりみゆるしらくも

風躰抄云けらしもといへる此歌にはかきりもなくめてたくきこゆといへりあし引は山の枕詞也日本紀第十三允恭紀輕太子歌云阿資臂紀能椰摩娜烏莬何利云々私記云言山行之時引足而歩也萬葉に足病とも足疾ともかける私記の説にかなへりかひは峽の字にて山のあひのせはき所なり萬葉には山かひともよめりかひはあひ也阿加同韻にて通す行平のわか世をはけふかあすかと待かひのとよめるかひもあひ也貫之集に
風躰春下
山のかひたなひきわたる白雲は　遠き櫻のみゆるなりけり

寛平の御時后宮の歌合の歌　とものり
みよしのゝ山邊にさける櫻花雪かとのみそあやまたれける

六帖には下句白雲とのみあやまたれつゝと有あやまたるゝは見あやまる也神代紀下云如何誤ニ死人於我ニ耶
後撰
みよしのゝよしのゝ山の櫻花　白雲とのみみえまかひつゝ

やよひにうるふ月のありける年よみける

此歌次の巻にいれすしてこゝにある事は櫻をむね
とよめる故也

伊　勢

櫻花春くはゝれる年たにも人の心にあかれやはせぬ　六帖朗詠

風躰抄云年たにもといひてあかれやはせぬといひ
はけましたる心すかたかきりなく侍りとあり顯注
には腰の句ことしたにとも兩樣に有落句を俊頼の
本にあかれやはすると有て俊惠の執せられけるを
は顯昭も定家もともにきらはれたり家集六帖とも
に今の本とおなしけれは尤可用之定家卿云これは
さきにけらしも足引のなとやうのさくら花のかき
やうにはあらす此歌は櫻花をよひてたとへはいら
へきたらんにむかひていはんやうにをしへたる詞
なれはかへす／＼もするとはいふへからすあかれ
やはせぬこそかなひて侍れ今いはくうるふ月のく
はゝりて春のひさしき年さへなとあかれはせぬあ
かれよとをしふるなりあくとは心のたる也顯注に
此下にある

郭公聲もきこえす山ひこは
外になくねをこたへやはせぬ

ことならはさかすやはあらぬ櫻花
みる我さへや靜心なし

ことならはおもはすとやはいひはてぬ
なそ世中の玉たすきなる

此三首を引あはされたりこの詞は物語なとにもか
けり竹取物語に翁かくや姫のいへるやうをともあ
れかくもあれ申さんとてかくなんきこゆるやうに
みたまへといへはみこたち上達部聞ておいらかに
あたりよりたになありきそとやはのたまはぬとい
ひてうむしてみな歸りぬ源氏若菜下に柏木女三の
宮に申さるゝ詞にさらはふようなめり身をいたつ
らにやはなしはてぬいと捨かたきによりてこそか
く迄も侍れ云々朗詠集にはあかれやはすると載
る春のくはゝれる年たにあかれやはするあかれね
はさてはいかなる時歟あきたらんと云心なれはす
るも無下に惡しとは云へからねとせぬといへるは
更に上手也

櫻の花のさかりに久しくとはさりける人のきたりけ
る時によみける

よみ人しらす

伊勢物語には年頃おとつれさりける人の櫻のさか

りに見にきたりけれはあるしと有歌に年にまれな
る人とよめるは今久しくとはさりける人といへる
よくかなへり此作者女には有へからす其故は年頃
音つれぬ女のもとへは櫻を見にのみは行ましきこ
とわりなり伊勢物語にも有常か夜の物なとおくれ
る次にあり
あたなりと名にこそたてれ櫻花年にまれなる人も待
けり
櫻をはあたなる物といへと花によりてこそ年にま
れなる人を待つなれはあたならすと也かくいふ中
に久しくとはぬを恨む心あり長谷なる人のかくさ
たかになんやとりはあると貫之にいひ出せる心に
おなし
貫之集拾遺
あたなれと櫻のみこそ故鄕の
むかしなからの物には有けれ
同
もみちはのなかるゝ時は白浪の
立にし名こそかはるへらなれ
此二首も戀ならねとあたなれとゝも立にし名とも
よまれたり
菅萬
あたなりと名にこそ立ぬるをみなへし

なと秋露におひそひにけん
なりひらの朝臣
返し
けふころすあすは雪とそ降なまし消すは有とも花と
みましや
けふ猶花の枝にある時に我きて見さらましかはあ
すは雪と庭にふりしきてたとひまことの雪ならね
は消すしては有ともありしなからの花と見ましや
花とは見しとなり下の心はけふきたれはこそもと
の心にて待つけたるやうにはのたまへ後にきたら
ましかは心のかはりてその人とも見しと也
題しらす　よみ人しらす
ちりぬれはこふれとしるしなき物をけふこそ櫻をら
はをりてめ
しるしなきは垂仁紀に何益をなにのしるしかあら
んとよみたれは無益なり下句は櫻を折らはけふこ
そをらめなり又は花のあるしのをらはをれとゆる
す心とも聞ゆ
六帖躬恒
櫻花よのま散なん後やいかに
けふこそ行てをらは折てめ
猿丸集　是則集
をりとらはをしけにも有か櫻はないさやとかりてち

るまてはみん

猿丸集にも是則集にも有猿丸集はうけかたき物なり是則集も此集によみ人しらすと有上はおほつかなしあるかはかな也これはおなし人の二首にて心をいひはてたるにや此躰萬葉におほし又上の歌にかへしてよめりともきこゆ

きのありとも

櫻色に衣はふかくそめてきん花のちりなん後のかたみに

顯注にきぬの色に櫻といふは表白くうらはなたなるをいふと有但今もふかくそめてきんとよみ後撰にも

櫻色にきたる衣の深けれは
過る月日の惜けくもなし

とよみたれは昔の櫻色は後のそめやうと同しからさりけるにや又後撰にをとこのもとにそうそくひとくたりてうしてつかはすとて櫻色の下かさねにそへて侍ける

我宿の櫻の色はうすくとも
花のさかりはきてもをらなん

これはうすくとももとよめりけにも櫻は白き花のすこしあかみて匂へるおほつかなき色なれはふかくとは色といふにつきて歌の習ひによめるなるへしひたふるに白からんを櫻といへるはいかにそや

櫻の花のさけりけるを見にまうてきたりける人によみておくりける　みつね

我宿の花見かてらにくる人は散なんのちそこひしかるへき

花見かてらにあるしをとひくる人なれはちりなはこしと思ふ心を散なん後そといへり或注に花をみにくる人はなれてむつましきに歸りたる後のいかに戀しかるへき花のちらぬほとこそとはめなと名殘を思ふよし也とあるは花見かてらといへるにかなはす新撰髓腦に貫之の思ひかね妹かりゆけは兼盛かかそふれは我身につもる今の歌これらをよき歌としるせりと奧義抄に見えたり道濟十躰には餘情に出せり

六帖貫之
かつみつゝあかす思へは櫻花
ちりなん後そかねてこひしき

亭子院歌合の時よめる　伊勢

本朝文粹第八云八月十五夜侍亭子院同賦月影滿秋
池應太上法皇製菅淳茂洛陽城内有一離宮竹樹泉石
如㆓仙洞㆒爾蓋世之所謂亭子院焉太上法皇雖㆘入㆓三
審之道㆒出㆗萬乘之家㆖猶未レ捨㆓此地風流㆒以助㆓彼
岸之寂静㆒云々拾芥抄云七條坊門北西洞院二町此
歌合は延喜十三年なりしかれに春上下の内此歌と
もに三首あるは後にくはへ入られたるなるへし
みる人もなき山里の櫻花外のちりなん後そさかまし
都の花さらぬ所もこゝより外の花のちりて後にさ
けさらは見はてたらん人の見にもそくると人め絶
たる山里の櫻にをしふる也此歌をもて源氏にも後
にとをしへし櫻ひと木ふた木とかけり

# 古今和歌餘材抄卷三　六十六首

春歌下

題しらす　よみ人しらす

春霞たなひく山の櫻花うつろはんとや色かはりゆく

六帖には人丸の歌とす今按上古の姿にはあらねと
いかさまにも弘仁の比の作者の歌なるへし顯註云
うつろふと云ことうちまかせては色變するなりう
つろふ菊といふも白菊の紫になるなり此歌にては
散といふへきかと見えたり下の歌には

春風は花のあたりをよきてふけ心つからやうつらふとみん

と讀り此歌もちる心と見えたり密勘云花のうつろ
ふ事は散にはあらすさかりなる時にかはりてちり
ぬへきけしきのつくを云なりいつのひまにうつろ
ひぬらん心つからやうつろふとみんみな同し心な
り菊の紫にうつろふにおなし梅も櫻もまことにう
つろふなり今按此定家卿の義につかは後撰集に
いつれをかわきてしのはん秋の野に

うつろはんとや色かはる草

これは荻淺茅なとのもみちせんとてやう〳〵色付を取わきていつれをか愛せんとよめりと聞ゆれは此歌もうつろはんとやは色の變する至極をいひ色かはりゆくはそのけしきのつきそむる心歟上の卷に櫻の咲そむるより盛のほとの歌をは載て今ちるをよめる歌をつらぬれは此一首は其あはひに先うつろひそむる歌を置る歟但草はやう〳〵色つきてのちもみちすれはうつろはんとて色かはると讀へし櫻はうつろへとさしも色かはらす散ての後も只同し色に見ゆれはうつろはんとや色かはり行とはいふへからぬにや又此歌一首のみ色の變するこゝろならは次に櫻の花のちるをみてよめると詞書ある歌を載てうつろふと散とをわきて後こそ此次の歌ともをは載らるへけれうつるとちると同し櫻なから心はかはれるに題しらすとてつゝけて載らるへきにはあらぬにやうつるといふに心あまた有色のうつろふ心のうつろふなとは變するなり都のうつろふなとは所のかはるなり又變するをもいふ月の水にうつろふなとは影をおとすなり又西にさせる影の夜ふけて東にさすなとをもいふ梅か香の袖にうつるなといふはそむなり花のちるをもいふ事上の卷に註せしかことし能おもへはもとはひとつ詞の末にてわかるゝなり後撰に山櫻を見て貫之

　　白雪と見えつる物をさくら花
　　　けふは散とや色ことになる

これは今の歌を取てよまれたりと見えたりけふは散とやは今のうつろはんとやなり色ことになるは今の色かはり行なりこれによれは櫻の散をよめる中にちらんとてや色の變しゆくとよめるを初におかるゝなり春霞たなひく山といひて色かはり行とは霞に映したる色のかはり行なり下の興風の歌に春霞いろの千くさに見えつるはとよめるを引合せて心得へしたな引は日本紀に薄靡をかき萬葉には霏霺とも輕引ともかけり皆うすき心なりまことにふかき霞ならは映すへからす

まてといふにちらてしとまる物ならは何を櫻におもひまさまし

此歌素性集にあれとうけかたし顯昭云まてはしはしまてといふ詞なり定家卿云まてといふはしはし

と云詞なりこの說におなしやよやまての心もこもれり
菅萬
散花のまてゝふことをしらませは　春は行とも戀さらましを
伊勢物語
行水と過るよはひと散花と　いつれまてゝふことを聞らん
新古今に寛平御時后宮歌合歌　　讀人不知
まてといふにとまらぬ物としりなからしひてそをしき春の別は
或註にまてといふにちらてしとまる物ならは何か花を思ふ心のまさらん散やすき故にこそ猶花を思ふ心一しほまされりといふ心也と有はかなはすまてといふ事を聞物ならは世界のうちに何をくらへ見るとも櫻に思ひます物はあらしとこそよめれ散ことのひとつを櫻のたらぬ事にするはかへりてほむる心なり　定家卿
山櫻まてともいはし散とても　おもひますへき花しなけれは
これ今の歌にかへすやうにとりたまへり
殘りなく散そめてたき櫻花ありて世中はてのうけれは
上の歌に問答の心有遊仙窟に可愛をめてたしとよめり世の中は物ことに有ての後ははてのうき物なれは櫻とてもちらすしてあらはうかる事有へきに惜めとも留らすして殘なく散そよく〳〵おもへはかへりてめてたき事なるとよめり八重櫻の中にしほみつきてうたてきか有もはてのうき類なり或註にはてのうけれはとはたとひ花はいつまてもちらすとも我身のとまるましけれはかくはいへるなりとあるはかなはす
いせ物語
ちれはこそいとゝ櫻はめてたけれ　うき世に何か久しかるへき
此里に旅ねしぬへし櫻花ちりのまかひに家路忘れてちゅのまかひは花の散まきれといふなり文選には繽紛をまかふとよみ萬葉には亂の字を書けり萬葉第二人丸の長歌に
大舟のわたりの山のもみちはのちりのまかひに　妹か袖さやにもみえす云々
又第十五に
足引の山下ひかる紅葉はの

ちりのまかひはけふにも有かも

六帖　散花に家路まとひて此里に

我はまれにそ長居しにける

かつ散にけり

うつせみの世にも似たるか花さくらさくと見しまに

菅萬には初二句鶯はむへも鳴くらんと有こゝに題しらすに入たれと菅萬は寛平の御時后宮の歌合の歌なれは其時の作なるへし顯註云空蟬の世とはうつせみは蟬のもぬけなりぬけからをいふなりうつとは虚とかきたりむなしといふ義なりうつせ貝といふもみもなき貝のからなりされはむなしき世にたとへたり花櫻とこそ常にはよめと又うちかへしてよめるなるへし菅家萬葉集幷拾遺にも入たり

淺緑野への霞はつゝめとも

こほれて匂ふはな櫻かな

但古今合題に花櫻と題に出して花櫻の花とよめりさる櫻のへちにあるにやおほつかなし但きぬの色に櫻と云は表白く裏はなたなるをいふそれを花櫻ともいへは花櫻櫻花同事歟密勘うつせみの世又おなし花櫻と申花有と執する人か侍りぬれと此説花櫻櫻花同事歟と侍殊叶愚意今案重之集百首の中に

花櫻つもれる庭に風ふけは

舟もかよはぬ浪そ立ける

これは櫻花を打返してよめりときこゆ花橘花蓮花薄なとの類なりされと又花櫻といふ一種の櫻も有と見えたるは上に出されたる菅萬の歌も霞につゝまれなからこほれて匂ふは常の櫻よりは色有花とみえたり源氏初音に末摘花の鼻のあかきをいふとて御はなの色はかり霞にもまきるましく花やかなるにといへるはこれを取用てかけるにあらすや又野分の卷に夕霧の紫の上を見たる事をいふにひさしのおましにゐたまへる人ものにまきるへくもあらすけたかくきよらにさとうちにほふ心ちして春の曙の霞のまよりおもしろきかは櫻の咲みたれたるをみるこゝちすとかけるも菅家の萬葉によりてかけるとみゆれは花櫻かは櫻同し物歟六帖には別に出せりうつほ物語に花櫻のいとおもしろき花ひらに

思ふことしらせてもかな花櫻

風たに君にみせすや有らむ

此花櫻のはなひらといへる一種と聞えたり貫之集
に
　雨ふれは色さりやすき花櫻
　　　うすき心もわかおもはなくに
色さりやすきといひて色によせてうすき心といへ
るは常の櫻にあらす六帖に花櫻の題かには櫻の下
山櫻の上に有て
　花櫻いかてか人の折てみぬ
　　　後こそまさるいろも出らめ
　花櫻をるに袂のひちぬれは
　　　露にかゝれる色にそ有ける
　花櫻今さかりなり思ひこし
　　　かさしにしてはちらはちるとも
初の一首はみつねなり彼家集にも有櫻の外に櫻に
附て出し後二首のやうも色ある櫻と見えたり詞花
集に京極前太政大臣の家に歌合し侍りけるによめ
る康資王母
　紅の薄花櫻匂はすはみな白雲と見てや過まし
此歌を判者大納言經信紅の櫻は詩につくれとも歌
にはよみたる事なんなきと申けれはあしたにかの
康資王母のもとにつかはしける京極前太政大臣
　白雲は立へたつれと紅の
　　　うす花櫻こゝろにそゝむ
返し康資王母
　白雲はさもたゝはたて紅の
　　　今ひとしほを君しそむれは
今此歌合をみるに康資王母は匡房卿につかひて右
なり判詞に紅の櫻を難せる詞なし只白雲とよめる
につきて山なといふもしのあらまほしきやうに判
せられたる不審の事なり紅の櫻を詩に作れるとは
文選沈休文詩に山櫻開欲燃と作れるなとにや文集
に梓亭雙櫻樹の詩あれと素花朱實といへるは櫻桃
の事と見えたり康資王母の紅のうす花櫻とよまれ
たるも花櫻なれは帶の櫻よりも今少くれなゐなる
櫻なるへし似たるかのかは哉也
萬葉 世中も常にしあらねは宿にある
　　　櫻の花のちれる比かも
六帖 さく花は年にかへねと空蟬の
　　　世のためしにも散るにさりける（イまさりける）
僧正遍昭によみておくりける　これたかのみこ

惟喬親王文德天皇第一皇子母正五位下紀靜子正四位下名虎女天安元年十二月元服授四品貞觀十四年七月依病出家法名箕延學密教宗叡僧正授東寺悉曇元慶寺安然阿闍梨

櫻花ちらはちらなんちらすともふる鄕人のきてもみなくに

風躰抄云此歌すかた此みこいかてかくはよみ給けるにかとありよき歌にあけられたれはほむる心なりかのみこのころほひまた歌のおこらぬほとなるにかくめてたきすかたなれはおとろくよしなるへしちらはちれとは故鄕人を見にこよともよほす下心也故鄕人とは遍昭なり

伊勢物語
白露はけなはけなゝん消すとて　玉にぬくへき人もあらしを

雲林院にて櫻の花のちりけるをみてよめる

國史云天長九年四月癸酉鑾駕幸紫野院御釣臺院司献物陪從文人賦詩御製和成賜祿有差新撰院名爲雲林亭承和十一年八月癸巳幸北野駐蹕於雲林院閑覽池塘錫宴群臣日暮還宮三代實錄第四十六云元慶八年九月十日丁卯權僧正法印大和尚位遍昭奏言雲林院者故無品常康親王之舊居也親王出家爲沙門貞觀十一年二月十六日以此院付囑遍昭曰深草天皇賜此居之天皇登遐常康落髮吳天罔極德猶難報恩欲永爲精舍令學天台之教伏思元慶寺永當年分度僧三人傳天台之法行試度之道請以爲元慶寺別院成親王之心願矣但院中雜事擇遍昭門徒之中堪幹事者令其勾當勅依請聽之海河抄云雲林院は淳和の離宮なり仁明天皇處分し奉り給ふ常康親王傳領本堂は彼親王堂なり其後御願寺として天暦に寶性僧都別當に補せられなとしてことに尊敬ありき御記にも本尊千手觀音有靈驗云々又謙德公康保元年二月廿二日補雲林院別當于時參議從四位上天暦七年正月八日於雲林院令轉大般若又康保四年五月十四日始從今日於眞言院東寺雲林院蓮臺寺寶相寺講仁王經限二十箇日讀之爲息災也なとあり云々小右記云定覺阿闍梨年來籠居雲林院云々或抄云雲林院は紫野にあり舟岡山の東からすきかはなの近所うちゐといふ所なりといへり

そう／＼法師 或抄貫之甥といへり未考

風躰
櫻ちる花の所は春なから雪そふりつゝ消かてにす

る
きえかてにするは消かたくするなり難の字を萬葉にかてとよめり此歌貫之の空にしられぬ雪とよめるとゝもに新撰和歌集に入たり

櫻の花の散侍りけるを見て讀ける　素性法師

花ちらす風のやどりも誰か志る我にをしへよ行てうらみん

花をゝしむあまりにかくはかなき事までを思ふなり

うりん院にて櫻の花をよめる　そうく法師

いさ櫻我もちりなんひとさかり有なは人にうきめみえなん

素性集に此歌あり六帖にもそせいと有不審の事なりけにも上に櫻ちるとよめるに所も同し雲林院作者もおなしそうくなれは一所にあるへきをこゝにあるは素性が歌にて上の名にてかねたるを後人あやまりてそうく法師とかき加へける歟或注云いさや櫻我も散なんひと盛ありなは人にうきめ見えなんすれはとなり花の人にをしまるゝを羨てなり此注は一盛有なはゝ花にはよせたれとたゝ我身の上をいふと心得たる歟又花の人にをしまるゝをうらやむまても有へからす又或注云ありて世の中のたくひなりとこれ此歌の心を得たり萬葉第十に

櫻花時は過ねと見る人の　花のさかりと今し散らん

今の歌はこれに似たり夫木抄第四に法輪百首寄櫻述懐　源仲正

春のうちの一さかりにはあひなまし　身のなけきたに櫻なりせは

これは今の歌をとれり

あひしれりける人のまうてきて歸りにける後に讀て花にさしてつかはしける　つらゆき

ひとめみし君もやくると櫻花けふは待みてちらはちらなん

わつかに一目見し人の又やみにくるとけふは待みてこぬ物ならはあすよりは花の心にまかせてちらはちれと花に向ひていふやうにて人をもよほすなり

山のさくらを見てよめる

春霞何かくすらん櫻花ちるまをたにもみるへきもの
を

ちるまをたにもとはちるほとの志はしたになり
心ちそこなひてわつらひける時に風にあたらしとて
おろしこめてのみ侍けるあひたにをれる櫻のちりか
たになれりけるをみてよめる

藤原よるかの朝臣

日本紀に得病をこゝちそこなふとよめり風にあた
らしとて孟子云々有寒疾不可以風うつほ物語に風
ひきたまひてんとてふさせたまひぬ源氏明石には
ま風をひきありく入道とかけりおろしこめては半
蔀なとなり三代實錄第三十四云元慶二年九月十六
日戊申以散事從五位下藤原朝臣因香爲權掌侍此末
は典侍とあり或抄に女も四品しつれは朝臣といふ
とあれと史傳には四品ならねと朝臣宿禰なとあり

たれこめて春の行へも志らぬまに待し櫻もうつろひ
にけり

たれこめては詞書のおろしこめてなり此うつろひ
にけりも上にいふかことく散なり詞書にちりかた
になれりけるとは色のうつろひて散なんとするを
いへるやうなれと下にやよひのつこもりをつこも
りかたといへるやうにちるをちりかたといへるな
り但し散はてたらはいふへからすやゝちるほとを
いへりおろしこめて春のふけゆくさまをも志らす
煩ひつるまにいつかさかんと待し櫻のかへりて散
にけるよとおとろきてよめるなりおろしこめたれ
はをれるさくらは風にもあたらねと時節にうつさ
れてちるをみて世のかきり遁れぬ事をなやめる女
の身にして思へるさま哀ふかきうたなり

東宮の雅院にて櫻の花のみかは水に散てなかれける
をみてよめる

菅野高世

東宮は保明親王也延喜四年三月十日太子雅院は待
賢門の內中御門の北壬生大路の東也東宮御座所也
所謂職御曹子也傍元服立太子即儲座於雅院會飲之
所みかは水は御溝水なり禁秘抄云近日東庭潺湲任
梵流上古或風流樣々也流非一脉且古石等在籬砌也
云々これは禁中の御溝水也八雲御抄云みかは水禁
中不可限これ此雅院にもみかは水といへる故なる
へし菅野氏は其始百濟國貴須王より出たり詳に續

日本紀の延暦九年に津連眞道等に菅野朝臣姓を賜はれる所にみえたり
枝よりもあたに散にし花なれはおちても水のあわとこそなれ
枝よりあたに散こし花にてあれはけにも落ても水のあわとなるとうかひ流るゝをいへり源氏竹川に
心有て池のみきはにおつる花　あわと成ても我かたによれ
これは今の歌をとりてよめり續後拾遺にみかは水に花のちりつもるを見てよみ待りける枇杷左大臣
ちる花をあたなる物といふなれは　かくてのみこそみるへかりけれ
さくらの花の散りけるをよめる　　つらゆき
ことならはさかすやはあらぬ櫻花見る我さへに玄つこゝろなし
顯注にことならはといふはおなしくはといふなりことはと同詞なりかきくらしことはふらなんともよめり密勘にかくのことくならはといふ詞なりとそ聞侍し今按萬葉第七に
ことさけはおきゆさけなむみなとより　へつかふ時にさくへきものか
又第十に
ことふらは袖さへぬれてとほるへく　ふらむを雪の空にけにつゝ
此ことに共に殊の字をかき又菅萬に
こひわひぬ影をたにみし玉椿　ことはねさへにほりて捨なん
此ことはをも殊者と書給ひたれは顯昭のおなしくはといふなりと注せられたるとは表裏のたかひなり又かくのことくならはといへるにもあらぬにや常にことならはの心歟諺にちかはゝとせんかうせんなといふに似たる詞なりふるき詞にはふと打きく所心得にくき事おほし後撰集に
ことならは折つくしてん梅花　わか待人のきてもみなくに
源氏柏木に
ことならはならしの枝にならさなん　葉守の神のゆるし有きと
下の此言をよめる歌とこれらとを見合せて心得へしさかすやはあらぬは落着はさかすしてあれの

心なり見る我さへにとはなのさきちることとのほとなきにかけたり玄つ心なしは靜なる心なしなり
拾遺集にう月ついたちによみ侍りける元輔
　春はをし郭公はたきかまほし
　　おもひわつらふ玄つ心かな
此玄つ心も靜なる心のうこきて思ひ煩ふとよめる歟但卑下していやしき心といへる歟
櫻のことくとく散ものはなしと人のいひけれはよめる
さくら花とくちりぬともおもほえす人の心そ風も吹あへぬ
或注に花は唉比さきちる比散物なれはとくちりぬともおもほえす櫻のことくとくちる物はなしと思へるは人の心そ風もふかぬにとなり風も吹あへぬとはふかぬなりこれは人の心そといふをも句と玄たり吹あへぬは不吹敢也吹く間をまたぬ心也只ふかぬといふにあらすすへて此注はいはれなし用へからす此心は花の散よりも惜む人の心の靜ならぬ事をいはんとて風も吹あへぬとはよめり人の心の靜ならぬは風による物ならねと花は猶風を待て吹あへたれはさていへるなりうつほ物語にこれを取て
　花よりも靜ならぬは君やさは
　　風も吹あへぬ心なるらん
前後玄つ心なしと讀る中に有て此うつほ物語の歌にもかく心得てとられたれは風も吹あへすうつろふといふにはあらぬなり後撰花のもとにてかれこれ程もなくちることなと申けるついてにとて同し貫之
　春くれはさくてふことをぬれきぬに
　　きする計の花にそ有ける
これはまた花のあたなる事をきはめてよまれ侍り
櫻の花のちるをよめる　紀とものり
久かたの光のとけき春の日に玄つ心なく花のちるらん
六帖にはのとけきをさやけきといへり萬葉に和の字をのと丶よめりすなはちのとかなり今連歌の法にのとかといひつれは春とするは心得ぬことなり
曾丹か歌に
　秋風の四方に吹くる音羽山

何の草木かのとけかるへき

かくのことくいつにかきらぬ詞なりのとかにて長き春の日には何わさするもののとかはしき心なるおりふし花はかりあはたゝしくちるをとかめていふなり永き日を時としてさく物なれはことに心長かるへきにみしかくちるかあやしとなり後撰に

打はへて春はさはかりのとけきを
花の心や何いそくらん

これ同し心なりうつほ物語國ゆつりの卷に今のうたを取て

ふく風に花はのとかに見ゆれとも
ちつ心なきわか身なにそも

春宮のたちはきのちんにて櫻の花のちるをよめる

帶刀は立春の初つかた近衛府の輩を分て春宮の警固し奉るなり左右の方に有其頭をは先生といふなりちんは戰國策曰美人充二下陳一注猶曰下堂

藤原よしかせ好風

春風は花のあたりをよきてふけ心つからやうつろふとみむ

顯注によきてとはのそきてと云詞なり又よきるといふ過とかけり此ひとえたはよきよといはましともよめり心つからとは心からといふなりつはやすめ字なりかみつしもつ天津輿津なと皆津の詞をくはへたるかことし密勘に心つからよきての詞は一同と有　今按萬葉に曲道とかきてよきみちとよめり物をよくるはすくに行へきをまはりて行やうの事なれは曲の字その心歟よきてのきにこりていへと昔はすみける歟菅萬によきすといふに斧㮶とかりてかゝせたまへり又曾丹集に

春山に木こる木こりの腰にさす
よきつゝきれや花のあたりは

玉たれのみすは戀しとおもはましやはとも白川のみつわくむまてともつゝけたれはたとひき文字にこるともかくはつゝくへけれは菅萬にあはせていよく〳〵すむ事しられたり心つからは手つから身つからの類なり後撰に

年毎に雲路まとはぬ雁金は
心つからや秋をしるらん

源氏花散里に人しれぬ御心つからの物おもはしきさ

は云々うつろふとみむは上にいふ如く散を云り
後撰貫之
風をたに待てそ花の散なまし
心つからにうつろふかうき
拾遺貫之
心してちらんたにこそ惜からめ
なとか紅葉に風の吹らん
ふく風そおもへはつらき櫻花
こゝろとちれる春しなければは
源氏若菜鞠の所にさくらはよきてこそなとのたま
ひつゝとあるに付て河海抄に
吹風も心しあらは此春は
櫻をよきてちらさゝらなん
さくらのちるをよめる　凡河内みつね
雪とのみふるたにあるを櫻花いかにちれとか風のふ
くらん
いかにちれとかは下の戀の歌におもふよりいかに
せよとかとよめることくこれより上いかにちれと
かの心なり
ひえにのほりてかへりまうてきてよめる
つらゆき
山高み見つゝわかこし櫻花風はこゝろにまかすへら
なり
六帖にはわかこしをわかゆくとあり今の詞書にか
なはす此山高みは山高み人もすさめぬといひ山高
み雲ゐにみゆるとおなし詞なからひえの山は名高
山なれはうやまふ心をこめて山の高くたふときに
おそれて我は思ひなからえをらて見つゝのみこし
櫻を風は山の高きを便に立やすき物なれはかへり
て心のまゝに吹つくしてこそ行らめとよめるなる
へし
題しらす　一本大伴くろぬし
一本とはつゝけて貫之の歌とせる本につきて或本
に大伴くろぬしと有をもて定家卿のおきなひて注
したまへる歟一本を證とすへし六帖にも黑主歌な
りそのうへ貫之の歌ならは次下の歌の下に名有へ
からす此理明らかなる事なり
春雨のふるは涙かさくら花ちるを惜まぬ人しなけ
れは
亭子院歌合のうた
つらゆき
櫻花ちりぬる風の名殘には水なきそらになみそたち
ける

なこりとは海に風はやみても猶浪のたつを云によ
り陳島か長恨歌傳には餘波をなこりとよみ左傳に
はたゝ波の一字をもよみ萬葉にはしほひのなこり
なとよめり此詞より下句は出たり

ならのみかとの御歌　風躰抄此下に註していはく大同帝

桓武天皇第一皇子諱安殿母皇太后藤原乙牟漏贈太
政大臣良繼之女也延暦二十五年五月十八日即位大
同四年四月朔日禪位於皇太弟還御平城舊都天長元
年七月五日崩年五十七　定家卿自筆本に平城天皇
大同天子と注せらるとある注に有これより下廿九
首は百花の歌なり菅萬に

霞立春の山へにちる花を　あかすちるとやうくひすのなく

菅家此左の御詩に山桃灼々自然燃

春霞あみにはりこめ花ちらは　うつろひぬへき鶯とめん

此左詩百花零所似焼香

吹風や春立過ぬと告つらん　枝にこもれる花咲にけり

此詩二三句云梅柳初萠自欲開上苑百花今已富

鶯のすみかの花や散ぬらん　わひしき聲に折はへてなく

此詩云殘春欲盡百花貧

散花のまててふことをしらませは　春は行とも惜まさらまし

此詩云毎處梅柳別家變おほよそかくのことく花と
のみよめる歌に付ては白花の心に作らせたまひ櫻
とよめる歌には櫻にかきりて作らせたまへるにて
昔のやうをなすらへ知へし

ふる郷となりにしならの都にも色はかはらす花はさ
きけり

六帖には都の題に石上ふりにしならの都にもとて
入れりならの都は古郷とあれてよろつの事かはり
はてたれと花の色のみ昔にかはらすさけりとよま
せたまふなり萬葉第六久邇の都のうつれるを惜め
る長歌の反歌に

咲花のいろはかはらす百敷の　大宮人そ立かはりぬる

拾遺
あたなれと櫻のみこそふるさとの　むかしなからの物には有けれ

春の歌とてよめる　　　よしみねのむねさた

此集に遍昭の俗名を出せる所三所有おの〳〵其故有二首はそこにいひ今は歌の後にいふへし

花の色は霞にこめてみせすとも香をたにぬすめ春の山風

香をたにぬすめとは香をたにひそかにさそひこよといふ心なりよろつの財をは藏にこめて人にたやすくはみせぬやうに山の花をも霞のこむれはかをたにぬすめとわりなくよめり下の冬部篁の歌に

花の色は雪にましりてみへすとも香をたに匂へ人のしるへく

此歌も六帖には香をたにぬすめと有奥義抄に古歌をぬすむ例に今の歌を出せるは此篁の歌を奪へるに似たる作なる故なりされと萬葉集の作者より貫之躬恒なとにいたるまていにしへの人今の人の歌に似たるをおほくよまれたるはおのつからよみ合せたるも有へし又後の人の壁をえり垣をこゆるに似たる心はなくてさきの歌を知なからも少さまをかへてよめる事もあるへけれはぬすむ例とはいふへからぬにや其上文德實錄を考るに遍昭は嘉祥三年に出家せられ篁は其後仁壽二年十二月に薨せらる二首の前後いかに知てか定めんされは此歌はたとひ遍昭とかきてもくるしかるましきを宗貞とかけるはまことに宗貞なりし時よめる歟上に遍昭とかくは篁の歌をぬすめる歟本歌とせる歟と後の人の思ふへきことをかねてはかりて其疑ひあらせしとなるへし後撰集に寛平御時花の色霞にこめてみせすといふ心を讀て奉れとおほせられけれは藤原興風

山風の花の香かこふ麓には　春の霞そほたしなりける

これは今の歌を題に出させたまひ歌に花の香かこふとよめるも香をたにぬすめをとれるなり

寛平御時后宮歌合の歌　　素性法師

花の木も今はほりうゑし春たてはうつろふ色に人ならひけり

菅萬には發句花の木はと有拾遺集には花の木はまかきちかくはうゑてみしとてよみ人しらすの歌なりもとより別の歌歟春たてはとは春くれはなり此詞春ふかくなりてもよめり春のふくれは花の色に

ならひて人の心もうつりてとはすなりゆけは今よりはほりうゐしと思ひなるなり

よみ人しらす

題しらす
春の色のいたりいたらぬ里はあらし咲けるさかさる花のみゆらむ

春は里わかすいつくもいたるへきをなとさける花とさかさる花とのみゆらんとなり下の心は君の恩光は春色のことくあまねかるへきを何とてなり出る人となり出ぬ人とのあるらんといふなるへし

六帖
わたつみのおきなも花をかさしけり
春のいたらぬ所なけれは

はるのうたとてよめる　つらめき
みわ山をしかも隠すか春霞人に知れぬ花やさくらん

六帖には山ことに立もかくすかと有しかもはさもなりかは讃也萬葉に
三わ山をしかもかくすか雲たにも
こゝろあらなんかくさふへしや
此歌をとりてよまれたる歟みわ山はすなはち神にてましませは人にしられぬ奇異の花なとのさきてそれをおほろけの人には見せしとて霞の立かくせるかの心によまれたる歟曾丹集に源順
霞立つみわの山へに咲花は
人しれすこそちりぬへらなれ
拾遺集に中務
よしの山たへす霞のたな引は
人にしられぬ花や咲らん

雲林院のみこのもとに花見にきた山のほとりにまかれりける時によめる　素性

雲林院親王は常康親王仁明第七皇子也北山は鹿園寺の邊をおしなへていふ平野の北に大北山小北山とて村もあり後撰雑四に十月はかりおもしろかりし所なれはとて北山のほとりにこれかれあそひ侍けるついてにとて兼輔是則の歌有ことなり新勅撰玉葉等にも見えたり此集下に至りても北山といへるはこゝに効ふへし都の北鞍馬の邊をさしていへるにはあらす

いさけふは春の山へにましりなん暮なはなけの花の陰かは

腰句奥義抄にも顯註にもまとひなんと有を密勘ま
しりなんを用らる後撰に
　春雨のふらは野山にましりなん
　　梅の花かさありといふなり
竹取物語にいまは昔竹取のおきなといふもの有け
り野山にましりて竹を取つゝよろつのことにつか
ひけりと有顯註になけとはなしといふ詞なりくれ
なは花のかけやはなきその陰にもねなんとよめる
なりといへり後撰に
　ひねもすに行はてすともくいもあらし
　　なけの紅葉の夜の光かも
ことのははなけなる物といひしかと
　　つらきか爲は君もしらなん
うつほ物語
まとゐする千年の陰の喜しきは
　　もるともなけの松の陰かは
習丹集
あれはありとなけらのよそにみし人を
　　秋風ふけはそれそ戀しき
春の歌とてよめる
いつまてか野邊に心のあくかれん花しちらすは千世
もへぬへし

あくかるゝはうかるゝに同し心なり
　をのゝえはこのもとにてや朽なまし
　　春を限らぬ櫻なりせは
題しらす　　よみ人しらす
春毎に花のさかりはありなめとあひみんことは命な
りけり
六帖に花の盛はを花の匂ひはと有て素性か歌とせ
りありなめとはあらんすらめとなり　文選陸士
衡歎逝賦云野每レ春其必華草無二朝遺一露　西行法
師歌に
　年たけて又こゆへしとおもひきや
　　命なりけりさよの中山
これ今の結句を取てよまれたり
花のこと世の常ならは過してし昔は又もかへりきな
まし
右の歌に問答するやうにつらねたり花のこと世の
常ならはとは春毎に咲かおなしやうなるをいへり
後撰に
　あたなりと我はみなくに紅葉はを
　　色のかはれる秋しなけれは

とよめり此心なり萬葉第十に

年のはに梅はさけともうつせみの
世の人きみし春なかりけり

吹風にあつらへつくる物ならは此ひともとはよきよといはまし

このひともとはを顯註に此一枝はと有密勘にもかくもなし同心歟これを素性集に載たるも六帖にも共に一えたと侍りあつらへつくるは誂附なり是は花ともいはて此一本といへり源氏抄に

吹風も心しあらは此春は
櫻をよきてちらさゝらなん

とあるは此歌をよみうつせり

待人もこぬ物故にうくひすの鳴つる花(枝イ)をゝりてけるかな

六帖にはこぬ物ゆゑにをこぬ物からにとて躬恒か歌とせり待人のきたらは見せんとて花の枝にこつたひて心ちよけに鳴つる鶯をおとろかしてせんなくも折けるかなと待人の來ぬ時によめる歟或註云我待人もこぬ物ゆへに鶯のひとくと鳴つるか空たのめなれは今はゝ花を折たるとなり

後撰に

ことならは折つくしてん梅の花
わか待人のきてもみなくに

とあり同し心なりといへりこれは人に見せんとて折にはあらて來てみねは詮なしとて折と心得たるなりひける歌のことく折盡してんともよむは歌の習なれとさりとて誠に折つくすことと有へきにあらす又人の來たらはみせんと思ひし花を鶯のひとくと鳴にはかられてこぬ物故に折つるとよめりとも注せりこれはさも侍るへし後撰に

ともにこそ花をもみめと待人の
こぬ物故に惜き春かな

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

藤原おきかせ

拾芥抄云參議濱成孫有成男號院藤太下總權大掾延喜十一相模掾從五位下

咲花は千種なからにあたなれと誰かは春をうらみはてたる

此歌素性集に載たるは不審なり顯注にさくらはなちくさなからにと有てちくさとは樣々の物をうた

にはよめと櫻ひとつに取てもかれこれをちくさと讀たるなり密勘に云家本にはさく花はと書たる上は不及不審何の證本をも用ひす家説はことわりのかなひ歌の聞よき説を執し侍るなり但彼崇德院御本ときこゆるにも墨はさく花はと書て朱にはさくら花とつけたり朱は僻事歟今案部立のやう上にいいふことくなる上菅萬にも折花者とかゝせたまひ此左詩にも千種折レ花尤春宜とあれは異義に及ふへからす或抄の心花といふ花は皆あたなれと春をしたふ心から恨みはてたる人はなきとなり人を思ふやうに花をあたなれとゝいひ春を恨みはてぬなと心をつくしていへりもしは花は千種なからあたなれと立かへり春毎に咲を誰か獨なからへはてゝそのあたなる事を恨みはてたるとよめる歟

春霞色の千くさにみえつるはたな引山の花のかけかも

菅萬此左詩云霞光片々錦千段未辨名花五彩班

又諸花なる事明かなり續拾遺に行家

みわたせは色の千種にうつろひて
　霞をそむる山さくらかな

是は櫻一種につきてよまれたりいかゝ

在原元方

霞たつはるの山へはとほけれと吹くる風は花の香そする

菅萬此左詩云花々數種一時開芬馥從風遠近來云々

萬花なる事知へし

みつね

うつろへる花をみてよめる

花みれは心さへにそうつりぬるいろには出し人もこそしれ

六帖には心さへこそうつりぬれいろには出しと思ひし物をと有うつろへる花は厭はしくて又盛なる花に心のつくはよのつねの習ひなれは思ひ返して色には出しといへる歟又はうつろへる花をみて無常を觀して世をも捨はやなと心の轉する時にさりとて背かれぬ物なるをなましひに色には出しといへる歟色には出しは花の縁なる詞也六帖に同躬恒

菊の花千種の色をみる人の
　心さへこそうつろひぬへき

又六帖に

花みれはうつる心は色に出て
　あたにはあやな人にしらるゝ

題しらす　　　よみ人しらす

鶯の鳴野へことにきてみれはうつろふ花に風そ吹ける

野へことに鶯の鳴けるもことはりにて有けるかうつろへる花に風さへふけはとなり

吹風を鳴てうらみよ鶯は我やは花に手たにふれたる

此歌は鶯といふより上へかへりて心得へしはの字おもしろし右の歌と問答の躰につらねたり

典侍治子（給イ）朝臣

三代實錄第十七云貞觀十二年二月十九日辛丑參議從三位春澄朝臣善繩薨云々長女治子（給イ）爲正四位下典侍同第三十云元慶元年二月廿二日甲子掌侍從五位上春澄朝臣高子改名治子（給イ）以觸中宮諱也糸所別當といふも此人なり内侍所御侍二人典侍四人掌侍四人典侍相當從四位掌同内侍唯不得奏請宣傳若無內侍者得奏請宣傳

ちる花の鳴にしとまる物ならはわれうくひすにおとらましやは

或抄の心はかなき鶯のなきことやちる花のなくによりてとまるへくはわれ汝におとるへきかはなくにとまるましき事を知故に汝かことくなかぬそとなりといへりこれしかるへからす只ちる花のなくによりてとまる物ならは我鶯におとらましやおとらす鳴てとゝめんと讀るなり拾遺物名なかむしろ　　　すけみ

鶯のなかむしろには我そなく
花の匂ひやしはしとまると

仁和の中將のみやすん所の家に歌合せんとてしける時によめる（よみけるイ）　　藤原俊陰（中納言有穗男 藏人右少將）

光孝天皇の御時中將御息所といふ家に歌合せんとて人々に歌よませけるなるへしさてはいかなる故とはしらす歌合はせすなりにけれはにや後の素性の歌に心は糸にとよめる詞書も今と同し歌合せんとてのてもしは後のことくなきをよしとすへしあやまりてそへたるにこそ若したらは歌合せんとてしけると用なくむつかしくいはんよりは歌合しけるといふへくや

花の散ことやわひしきはる霞立田の山のうくひすの聲

六帖には山鳥の題にわひしきをかなしき鶯を山鳥と有作者は今のことく載たり春霞は立田の山とつゝくる料なから折ふしにおひて歌の匂ひとなれり

萬昔 鶯のすみかの花や散ぬらん　わひしき聲に打はへて鳴

新古今 霞立春の山へにさくら花　あかす散とや鶯のなく　素性

これは落花の比なくを聞てよめるなり

こつたへはおのか羽風にちる花を誰におほせてこゝら鳴らん

鶯のなくをよめる

六帖に發句うくひすのと有萬葉歸雁の歌に春まけてかく歸るともとよめるをも雁歸るともと載たりことと書せねは何鳥ともきこえねは改たるなるへしおのか羽風にを顯注にはおのか羽ふきにと有てはふくといふ事を釋せらる密勘には家本には羽風にと有同し心なれと今少あらはなりと有六帖にも羽風也とこゝらは萬葉にこゝたとよめるに同し幾許とかけり巨々等とかくは後の人のしわさなりこゝはくそこはくそきたくそこら皆同し詞にておほき心なり或抄に非を他に讓る事を諷する歌なりといへり文選謝靈運遊東田詩魚戲新荷動鳥散餘花落

鶯の花の木にて鳴をよめる　みつね

しるしなきねをもなくかな鶯のことしのみちる花ならなくに

腰句を鳴かなの上へあけて心得へしいつの一年なき留たることもなきをことしのみちるらんやうに鶯の鳴とめかほにかひなきねをも鳴かなとなり

續後撰集におなし人

鳴とても花やはとまるはかなくも　暮れ行く春の鶯の聲

題しらす　よみ人しらす

こまなめていさみにゆかん古鄕は雪とのみこそ花は散らめ

駒なめてはならへてなり陪と女と同韻にて通すれはなへてともなめてともかく幷の字なり古鄕を思ひやれる感情ふかし

散花を何か恨みん世の中に我身も共にあらん物かは

花のちるをうらみて後かくはおもひかへせるなり

小野小町

小町は誰の子とも玄れぬ人なり小野貞樹と歌を讀かはせるは親族歟時代は康秀遍昭なとゝ歌をよみかはされたれは文德天皇の時の人なり清和天皇の比までもありけるにや未詳姉を小町かあね孫をも小町かむまことといへるにて其人なりと知へし

花の色はうつりにけりないたつらにわか身世にふる詠せしまに

花の盛は明くれ花になれぬへき身の世にふるならひはさもえなれすしていたつらに花の時を過しけるといふなりなかめとは心のなくさめかたき時は空をなかめて物思ふさまをいふそれを春の長雨にかけて世にふるといふ詞も兩方を兼たるなり春の物とてなかめくらしつ春のなかめそいとなかりけるなとよめる歌皆兩方を兼たりさて小町か歌におもてうらの說有なといふ事不用只花になくさむへき春をいたつらに花をはなかめすして世にふるなかめに過したりといふ義なり又霖雨に花のうつろふ心をそへたり爾雅曰三日以上曰霖後撰によみ

人玄らす

春立て我身ふりぬるなかめには

人の心の花も散けり

仁和の中將のみやすん所の家に歌合せむとしける時によめる

素　性

をしと思ふ心は糸によられなん散花ことにぬきてとゝめん

六帖には落句ぬきてとむへくと有心はいとにとは心緒なといふよりおもひよれる歟

伊勢

より合せてなくなる聲を糸にして

我淚をは玉にぬかなん

玄かの山越に女のおほくあへりけるに讀てつかはしける

つらゆき

顯昭云玄かの山越とは北白川の瀧の片はらより上りて如意か峯こえて志賀へ出る道なり經信卿紀經於瓜生山西步行と云々むかし志賀寺へまうつとて都の人の往來玄けかりし所なり志賀寺は崇福寺と號す天智天皇の大津の宮にまし〳〵ける時にたてられし御寺なり菅家文章第七崇福寺綵綿寶幢紀云勅近江崇福寺者天智天皇之創建也逢師感應得

地因縁誓念至心稱成細目辛未之年勅旨詳矣云々況乎本願天皇朕之遠祖大廟也云々非蒙聖靈福祚何以保安天下云々堀河院後度百首幷六百番歌合には志賀山越を春の題とせり秋冬まてもあれと花見かてらに春はことに往來しけるにこそ

梓弓春の山へをこえくれは道もさりあへす花そ散ける

道もさりあへすとは花をふましとすれともよくへき方もなくちりくるなりそれを女のおほくゆきあひてさくへき道のなきによせたり

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

春の野にわかなつまんとこし物をちりかふ花に道はまとひぬ

わかなは打任せては七日につむといへとひろくは春のうち野に出ておはきをつみ蕨を折るに至るまてをいふなり萬に

駒なへてめもはるの野にましりなん　わかなつみくる人も有やと

此左詩云綿々曠野乗驪行目見山花耳聽鶯駒犢纍々趁苜蓿春孃採蕨又盈嚢此詩を按して知へし

或抄に若なを摘にこし時は雪なとをかき分てそことなき道を尋出しに今は又散かふ花にたとるよしなりといへるは用へからす

山寺にまうてたりけるによめる

やとりして春の山へにねたる夜は夢の内にも花そ散ける

六夢の中の思夢は思ふことをやかて見れは春の山へのたひねにはさも有へき事なり

うつほ
ちる花も夢にみゆなる春の夜を　君ほかにてはいかにねよとそ

六帖
うつゝにはさらにもいはし櫻花　夢にもちるとみえはうからん

新古今みつね
いもやすくねられさりけり春の夜は　花の散のみ夢にみえつゝ

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

吹風と谷の水としなかりせはみ山かくれの花を見ましや

六帖には谷川の流れてこすはおもほえすと有いつくともしらぬ花の谷川になかれ出たるをみて風は

花にうき物なれと風のちらして水のさそひ出すは
み山隱の花をはいかてみんとなり

伊勢
春風の我宿にたに吹こすは　忘らぬ里なる花をみましや

躬恒
神無月もみちの色を吹風と　瀧の水とにおとしはてつる

志賀より歸りけるをうなともの花山にいりて藤の花
のもとに立よりて歸けるによみておくりける

僧正遍昭

よそにみて歸らん人にふちの花はひまつはれよ枝は
をるとも

六帖には枝はをるともをとかむまをたにと有萬葉
第十三の長歌に藤浪の思ひまつはし若草のおもひ
つきにし君によりなとよめり遍昭は器量ひろく諧
和なる人にておはしけるにや謹厚にかゝはらぬ歌
おほし苔の衣はたゝひとへかさねはうとしともを
みなへしわれおちにきと人にかたるなともよみ今
はひまつはれよなとよまれたるまことすくなしと
はこれよりや定めけん

家に藤の花さけりけるを人の立とまりてみけるをよ
める　　みつね

我やとに咲る藤浪立かへりすきかてにのみ人のみる
らん

藤浪とは藤の花は波に似たれはいふ或抄に藤並と
いへるは僻事なり萬葉集にも藤浪とかけり浪とい
ふより立歸りとはつゝけたり池川なとによせすは
ふちなみとはよむましきよしふるき沙汰なれとふ
ちを浪とみんからに此歌のやうにたち歸りなとつ
ゝけては今もよむへしいつくにかよまさらん萬葉
にはふち波の咲る崗邊とさへよめり右二首藤の歌
なり

拾遺源順
春ふかみ井手の川浪立歸り　みてこそゆかめ山吹の花

菅萬
まきもくのひはらの霞立歸り　みれとも花におとろかれつゝ

よみ人しらす

題しらす

猿丸集
今もかもさき匂ふらん橘のこしまのさきの山吹の花

家持集
さき匂ふらんは色のにほふなりこしまのさきは顯
註にこしまのはまといへり密勘に小島まことに名

所不分明いかによみたるにか但おもふ故侍りてこしまか崎と書たるを用侍るなりとかゝる萬葉に橘の島とよめるは大和國高市郡なり此歌は古歌の體なれは藤原の宮より奈良へ都をうつされて後古郷をおもひてよめるにや

春雨に匂へる色も飽なくに香さへなつかし山吹の花

初二句に或抄長恨歌の梨花一枝春帶雨といふを引てなすらへたり

山吹はあやなく咲そ花みんとうゑけん君かこよひこなくに

以上三首猿丸集に有彼集うけられぬ物なり萬葉集十に

かくしあらは何に植けん山吹の　やむ時もなくこふらく思へは

山吹はなてつゝおほさんありつゝも　君きましつゝかさしたりけり

後撰をとこの久しうまうてこさりけれは

何にきく色そめ返し匂ふらん　花もてはやす君もこなくに

よしの川のほとりに山ふきの咲けりけるをよめる

よしの川きしの山吹ふく風に底の影さへうつろひにけり　　つらゆき

やまふきをうけてふく風にとつゝけたり

題しらす　　よみ人しらす

かはつなくゐての山吹散にけり花のさかりにあはまし物を

此歌はある人のいはくたちはなのきよともか歌なり

六帖に山吹の歌には今のことく載せ今はかひなしの題には下句あはましものを花のさかりにとあり蛙なく井手は枕詞なからにほひとなれり萬葉第八に

君か家のはなたちはなはなりにけり　花の盛にあはまし物を

大和物語に少將季繩

ちりぬれはくやしき物を大井川　きしの山吹けふさかりなり

又六帖に

いかてわかあはんとおもひし山吹の

花の盛にあひにけるかな
きよともは贈太政大臣正一位橘朝臣清友なり檀林
皇后父仁明天皇外祖父なる故に位につかせ給ひて
後太政大臣正一位をは贈らせたまへるなり清友の
事文徳實錄第一に檀林皇后の事につきて委しくし
るされたり光仁の朝の人也橘諸兄公左大臣從一位
までのほり井手宅へは聖武天皇も行幸せさせ給ひ
て時にあひ給けるに其子奈良麿寳字二年に謀反の
事顯はれてより橘氏衰微せるにより全盛の折をこ
ひらるゝ心籠るへし又流布の印本にきよともをき
よかたとかける有此本然るへきか其故は太政大臣
正一位を贈らせ給へる人を下官の人のことく橘の
清友か歌とはいふへからす

春の歌とてよめる　　　　　　素　性
思ふとち春の山へにうちむれてそこともいはぬ旅ね
してしか
おもふとちは萬葉集に思共とかけりそこともいは
ぬを顯注にそこともしらぬと有密勘にとかくの沙
汰なし旅ねしてしかは旅ねをしてしかなゝりそこ
と定むるまことの旅ねはうき物なれはかくはいへ
り此歌上にいさけふは春の山邊にましりなんとよ
めるおなし心なりこれは花につき唯遊山の心なり

春のとく過るをよめる　　　　　　みつね
梓弓はるたちしより年月のいるかことくもおもほゆ
るかな
此歌拾遺六帖ともに歲暮の歌とせり家集をみるに
內の御屏風の歌とて子日よりはしめて十首あるに
此歌しはすとてはてにあれはもとより歲暮の心に
よみたれと取わきて春たちしよりといふ詞有につ
きてこの集にはこゝに入られたる歟　あつさ弓は
るとつゝけたる枕ことはをうけてやかているかこ
とくもとはいへり　文選陸士衡長歌行云年往迅勁
矢時來亮急絃　周興嗣千字文云年矢每催　矢とい
はねとも弓といひはるといふに年の矢の心きこえ
たり今のことく枕詞をうけて一首にわたしてよめ
る歌の例は萬葉集に
大舟のかとりの海にいかりおろし
いかなる人か物おもはさるらむ
大舟のかちとりといふ心につゝけ舟をうけていか

りおろしといへり又後撰に
あしひきのやまひはすともふみかよふ
あとをもみねはくるしかりけり
これも枕ことはを下まてうけたり
やよひにうくひすの聲久しうきこえさりけるをよめる　　　つらゆき
なきとむる花しなけれは鶯もはては物うくなりぬへらなり
詞書によれははては物うくなりにけらしもとあるへきを今のことくあるは今たにかゝり春もくれはてなはいとゝ物うくなりぬへしと行末をかけてよめる心なり
やよひのつこもりかたに山をこえけるに山川より花のなかれけるをよめる　　　ふかやふ
花ちれる水のまに／＼とめくれは山には春もなくなりにけり
六帖には道のまに／＼又春ものこらさりけりとて夏の歌とせり花のなかるゝ谷川の水のまに／＼そひて山にとめきてみれは青葉のみふかくしけりて殘れる花もなきをやよひのつこもりなれは花をかけて春もなくなりにけりといへり
春をゝしみてよめる　　　もとかた
をしめともとゝまらなくに春霞かへる道にし立ぬとおもへは
此春霞も上の春霞たてるやいつことよめる歌に注せしかことく春といふにことに用ありて霞は立ぬといはんためのみなりかへる道に今は立出ぬと春のおもへはをしめともとまらぬとなり
寛平御時きさいの宮の歌合のうた　　　おきかせ
聲たえすなけやうくひす一とせに二たひとたにくへき春かは
六帖には聲たてゝと有　家集も同しひとゝせにふたゝひとたに來るへき春かさぬる事なけれは限ある春の内をたに聲たえすなけとなりかならすしも鶯をのみ愛して絶すきかんの心にはあらす春を惜むよりかくはよめり
後撰　ひとゝせにかさなる春のあらはこそ
二たひ花を見んと賴まめ
やよひのつこもりの日花つみよりかへりける女とも

をみてよめる　　　　　　　　　　　　　みつね
花つみとは野山なとに出て花をつみて佛にたてまつり聖靈なとにもたむくるをいふ歟諸寺に花供とてする類歟みつね集に花つみ
鶯はいたくなゝきそうつり香に
めてゝ我つむ花ならなくに
是は袖に花の香のうつるを貪愛する故に鶯の來居て鳴を徒に摘にあらす功德のためにつめはいたくわひてなきそとよめる歟又順集に二月初午のところ
いかにして花をはつまし花の香を
袖につみつゝ罪もこそうれ
此花をはつましははつ午といふ事をかくしてよまん爲歟もしは此日も花をつむ事ある歟或抄云花つみとはもとめあひするをいふなり又昔は春の內にたかき人なと野に出て花の色々をつみたむけをして無緣の靈をとふらひ給ふ事有きそれをみるとて女共の出てかへるを見てよめるともいへり此事京極黃門本に自筆にて書付らると云々彼書今右京亮に有といへり今右に出す歌ともの心ならは花つみより歸るといふはみつから花つみしてそれより歸るなるへしよき人の花つみをみて歸るとはおほつかなし又或抄に春のなこりを惜みて花をたをりてくるなりといへるは猶推量なり
六帖
舟岡に花つむ人のつみはてゝ
さして行らんかたやいつこそ
人丸家集
春の野に花をくさ〳〵つまんとて
さもかたみをもつくりつる哉
とゝむへき物とはなしにはかなくも散花ことにたくふこゝろか
家集には初二句とまるへき物ならなくにとてへい中將の家の歌合にはての春の歌なり春のくれ過ると花つみの女とものの過行をとめんよしのなきをちる花ことによそへたりかはかな也女ともをこそ心みえすやと難する人からんか然らすは詞書に只花つみより歸りける女ともをみてよめるとて上の貫之の道もさりあへすといふ歌の前後に置てやよひのつこもりの日とことわるへからす
やよひのつこもりの日雨のふりけるに藤の花を折て

人につかはしける　　なりひらの朝臣
いせ物語大和物語
ぬれつゝそしひて折つる年のうちに春はいくかもあ
らしと思へは
やよひもけふはかゝりなれは春のわかれ花のなこり
取集めたれはぬれつゝしひて折つるといへりしひ
てといへるに心をつくへし雨とも藤ともいはぬは
皆目前にゆつれりつこもりなるを春はいくかもと
いへる歌はかやうにある事なり風體抄云しひてと
いふ詞すかたも詞もめてたく侍るなり歌は只ひと
ことはにいみしくもふかくもなる物なり
亭子院の歌合に春のはての歌　　みつね
けふのみと春をおもはぬ時たにもたつことやすき花
の陰かは
さらぬ時たに立やすからさりし花の陰なれは春は
けふのみと思ふ日は立歸りかたしとなり後撰集に
同しみつね
くれはまたあすとたになき春の日を
花の陰にてけふはくらさん
六帖につらゆき
花のもとたつことうくもなりぬるか
春はけふをし限と思へは
萬葉七
ちはや人うち川波を清みかも
旅行人のたちかてにする

# 古今和歌餘材抄巻四

三十四首

夏歌

題しらす　　よみ人しらす

我やとの池の藤浪咲にけり山ほとゝきすいつかきなかむ

この歌ある人のいはくかきのもとの人まろかなり

六帖には落句を今やきなかんと有藤は春夏をかけて咲花なれは萬葉には春の部にもいれ夏の部にも入たり郭公は先藤に來居て其後卯花橘にもなけは藤の咲をみて郭公を待心なり首夏の心ある故に初におけり

萬葉
朝霞たなひくのへにあし引の　　山ほとゝきすいつかきなかん

躬恒集
我宿の池の藤浪咲しより　　山ほとゝきすまたぬ日そなき

左注は或抄にいはく柿本人麿と歌おもてにのせすしてたゝある人のいはくと有は萬葉集にいりたる上古の人をは皆名を面にかゝさるなり今いはくこれ臆説也上古の人なれはとてたしかに其人の歌とたにしらはなんてうおもてに名をあらはさゝるへき但したしかなる證なけれは先讀人しらすとのせて或人の説をは注せるなり萬葉にいらぬ古人なれとみたりの翁か歌も注せり萬葉より後の人なれと清友か歌をも注せり萬葉にこそいらね安倍仲麿も古人なれと名をおもてにあらはしたり上にならのみかとの御歌とて載たれと下には注せる歌二首有忠仁公は古人ならねと春上と雜上と兩所まて注せり鏡山いさ立よりてといふ歌のひたりには黑主をも注せり木にもあらす草にもあらぬといふ歌には高津内親王をも注せり賀部には滋春か歌に時春かともいふと注せりこれらをもていはゝいにしへ今をいはすたしかならぬを注し異說有を注すと心得へし

うつきに咲る櫻をみてよめる　　紀としさた

哀てふことをあまたにやらしとや春におくれてひとり咲らん

花を見て人の哀とめつる詞をあまたの木にやらせすして我ひとりいはれんとてや春はさかて引さかりて夏になりて此木ひとりは咲ぬらんといふ心な

り花といふもしすゑぬはこと書にゆつれるなり此
一首は殘花の歌也
後撰　ちることのうきもわすれて哀てふ
　　　ことを櫻にやとしつる哉
伊勢集に卯月にさける櫻の花につけて院の殿上人
のもとへおはします御ともにえまゐらてとまれる
人のもとに
　とまりゐて春こひしとや思ふらん
　　　花もかくこそおくれたりけれ
題しらす　　　　　　よみ人しらす
五月まつ山郭公うちはふき今もなかなんこそのふる
こゑ
郭公なくや五月のとよみて五月をまさしき郭公の
時とすれはさつき待とはいへりはしめて鳴ことは
萬葉集第十七に霍公鳥者立夏之日來鳴必定とあれ
は春の内よりも鳴へきなりよりて拾遺には
　春かけてきかんともこそ思ひしか
　　　山ほとゝきすおそく鳴らん
うちはふきはうちはふりなり翥の字を和名集には
ふりとよめり羽振なり日本紀に揮の字をふくとよ
めるはふるにおなし萬葉集にやまふきの花に山振
とかりてかけるも此心也風のふくといふも物にふ
れてふる心なりさて鳥はいつれもなかんとては羽
を打ふるへは打はふき今もなかなんとはいへり
六帖貫之　郭公こそのふる聲聞からに
　　　あはれ昔のおもほゆるかな
　　　　　　　　　　　　伊勢
五月こは鳴もふりなん郭公またしきほとの聲をきか
はや
已上二首四月郭公の歌なり
　　　　　　　　　　讀人しらす
いせ物語六帖いせ　さつきまつ花たちはなのかをかけはむかしの人の袖
のかそする
六帖に此歌作者伊勢と有又伊勢物語にあり顯注に
それを引又垂仁天皇の御時田道間守か常世の國よ
り袖につゝみてもち來りしかはいふなとかゝれた
るを密勘に橘の香何の袖にても侍りなんとかゝる
これ顯注をうけ給はぬ詞なりまことに上に梅の歌
にもたか袖ふれしなとよみつれはたゝうちまかせ

て誰と志らぬ昔の袖の香にて感情ふかゝるへし

拾遺 たか袖におもひよそへて時鳥
　花橘の枝になくらん

曾丹集 かをかけはむかしの人の戀しさに
　花橘を袖に志めつる

さきに五月まつ山時鳥とよめるはう月にてよめり
このさ月まつは待えて花咲て後まちしほとの事を
いへり橘のたくひは早き年はやよひのすゑよりさ
き遲き年もう月は過し侍らぬを五月まつとよまれ
て今も仲夏の初の物とするは昔は花の遲かりける
にや只金柑といふ一種ありて是は引さかりて六月
に咲なり此一首橘の歌にて四月郭公と五月郭公と
のあはひを隔たり

いつのまにさ月きぬらん足曳の山ほとゝきす今そな
くなる

歌は明らかなりいつのまにといへるは時節のはや
くうつりかはるにおとろく詞なり下にきのふこそ
　さなへとりしかいつのまにともよめるかことし

いせ集 今朝きなきいまた旅なる郭公花たちはなに宿はから
なん

此歌伊勢集に有今よみ人志らすとあれはおほつか
なしみ山を出てまた里なれても住つかねはいまた
旅なるとはいへり旅にては志かるへき宿をかるを
詮とすれは花橘に宿はからなんとよめり鶯に梅郭
公に橘は又なき宿なりやとかれよとてかさまほし
ういふはやすらはせてきかんの心有

萬十 旅にしてつまこひすらし郭公
　かみなみ山にさよふけて鳴

後撰 郭公きけは旅とや鳴わたる
　我は別のをしき都を

うつほ物語 おく山のふるすを出て郭公
　たひねにあまた年そへにける

郭公花橘のやとかれて
　空にや草の枕ゆふらん

かくほとゝきすにはあまた旅とよめり

おとは山をこえける時に郭公のなくを聞てよめる
　きのとものり

おとは山今朝こえくれはほとゝきすこすゑはるかに
今そ鳴なる・

鳥の聲をふるくはおとゝもよみたれは音羽山とい
ふをはつねにいひなせり
鶯のおときくなへに梅の花
こすゑのそのに咲てちるみゆ
萬八
夏山のこすゑのゑのに郭公
鳴とよむなる聲のはるけさ
六帖
足曳の山の梢し高けれは
鳴ほとゝきす聲はるかなり
ほとゝきすのはしめて鳴けるをきゝてよめる
そせい
郭公初こゑきけはあちきなくぬし定らぬ戀せらるは
た
素性集に第二句なく聲きけはと有初聲まされり郭
公の初聲をきけは何となく物悲しく心すみてその
人を思ふとしもなけれと人なとこひしきなるへし
はたは將とも當とも書りまさにといふ心なり顯注
にほとゝきすならねと物につけて人を思ふ證に萬
葉集を引て出せる歌
神なひのいはせの杜のよふこ鳥
いたくなゝきそ我戀まさる

さ夜中に友よふ千鳥物思ふと
わひをる時に鳴つゝもとな
山吹を宿に植つゝみるからに
思ひはやます戀こそまされ
今按萬葉集第八に大伴坂上郎女
何しかもこゝはくこふる郭公
なく聲きけは戀こそまされ
萬葉十五に中臣朝臣宅守
旅にして物もふ時に郭公
もとなゝなきそあか戀まさる
物もふは物おもふ也もとなはよしなゝりあかはわ
かなり
後撰
あひみしもまたみぬ戀も郭公
月になく夜そよにまさりける
から衣きてかへりにしさよすから
哀とおもふを恨らんはた
ならのいそのかみ寺にて郭公のなくをよめる
袖中抄には三所まていそのかみの寺と有顯注にい
へることく奈良は添上郡石上は山邊郡なるを今か
く詞書をかゝれたるは下心侍るへし歌の後に釋し
てん又袖中抄に素性は石上良因院にすめるもの也

と有素性集にそせいかあさなをよしよりとつけさせ給ふにとて歌あるは此良因の二字なり初め遍昭のすまれけれは後に素性にゆつられけるなるへし

**石上ふるき都の郭公聲はかりこそむかしなりけれ**

石上ふるとつゝくる時も石上を枕言にいひならへり但それは片岡の朝の原なといふことく石上といふ所に布留とあれは梓弓とて春とも磯邊ともつゝくるにはかはるへし今ふるきとつゝくるは彼布留をかりていへはまきれなき枕言なり此いそのかみふるき都とつゝけよめるは安康天皇の石上穴穂宮仁賢天皇の石上廣島宮の昔を忍ふにあらすこれは奈良の京のあれての後の心なりされはその心をあらはさん爲にならのいそのかみ寺にてとは詞書をは玄たるなり春の櫻の歌に櫻といふもしすゑされは詞書にかならす櫻とかけるかことし元明天皇和銅三年に藤原の宮より平城へうつされて光仁天皇まて七代のみかとましく\て全盛なりける所なれはすへて玄たへる歌おほき都なりさて石上ならともよみ又奈良と布留と讀合たる歌も有六帖にふるさとゝなりにしならの都にもといふ平城天皇の御歌をも石上ふりにしならの都にもと載たり後撰に

石上ならの都のはしめより　ふりにけるともみゆる衣か

詞花集雜下又千載集神祇にふたゝひ入たる歌上東門院

みかさ山さしてきにけり石上　ふるきみゆきの跡を尋ねて

曾丹集
春雨のふるの都の花みると　三笠の山をさしてのみこそ

此曾丹か歌は奈良の都をすなはちふるの都とよめり日本紀の武烈紀に物部影媛か歌に

いそのかみふるを過てこも枕高橋すきものさはに大やけ過はるひのかすかを過

とよめり是石上よりならまての路次なりされとそのあひたいくはくもとほからすいはんや奈良の都の全盛の時は大かたつゝきても侍るへけれはならのいそのかみともいそのかみならともつゝけていふ事あやしむにたらす侍りけん菅万に鹿嶋なる筑波の山とよめり鹿嶋郡と筑波郡と隔たる所をたにかくよめれはましてちかき奈良と石上とをや奈良

には大同のみかとのすませおはしましけるに彼御末は衰微したれはふるさとの如くにて平城天皇と申御名のみ殘りて聞ゆれは郭公をかりてよせられける成へし

萬葉第十七に大伴家持

青によし奈良の都はふりぬれと
もと郭公なかすあらなくに

これは三香原にしはらく都をうつされたるほとの歌なり

ふるさとゝなりはてたるは桓武天皇の御時延暦十三年より後の事なりふるを布留とかけるにつけて昔ふる川に女の物あらひけるに川上より劍のながれきて布に留りける故に布留と名つけたりといふ説は例の好事のものゝ作れる事なり和語は神世より有て漢音は遙に後に至て傳はれり古き和語と新らしき漢音と音訓ましへて義をいふ事有へからすその上ふるは振といふ事を布留と假名にかけるなり舊事紀に天神饒速日命を天降したまふ時十種の神寶を賜りて若事あらん時は十種の神寶をもてひとつふたつといふよりこゝのつとをといひて振へゆら〳〵と振へと敎へ給へり其神寶石上宮に納まりて有故に振社といふよし委みえたりされは日本紀の顯宗紀にも石上振之神椙とかゝれ萬葉集にも同しく振の字をかけり正義をすてゝことなる説をもとむへからす

題しらす　よみ人しらす

夏山になく郭公心あらはものおもふ我に聲なきかせそ

これは郭公をいとふにあらす至りて聲の悲しきによりてなり

萬葉に
郭公なかぬ國にもいきてしか
その鳴聲をきけは悲しも

これは郭公のなき國にゆかはやとさへよめり躬恒集猿の歌に

心あらは三たひといふたひなく聲を
物思ふ人にきかせさらなん

郭公なく聲きけは別にしふる鄕さへそ戀しかりける

荊楚歳時記曰杜鵑初鳴先聞者主別離杜鵑をほとゝきすといへる慥成倭書はなけれとほとゝきすをよむやうたゝ詩に杜鵑を作れるにおなし

いせ物語猿丸太夫
時鳥なかなく里のあまたあれは猶うとまれぬおもふ
物から

伊勢物語にはほとゝきすのかたにかきつけて女の許へつかはせる業平の歌なり女のかへしも有今はたゝ郭公の歌なりなかなくとはなんちか鳴なり万葉第十五に

郭公あひた玄はしおけなかなけは
わか思ふ心いとゝすへなし

又第三にあふみの海夕浪千鳥なかなけはといふにもまたおうのうらの河原の千鳥なかなけはといふにも汝鳴者とかけりあまたの里に鳴わたるをそねみ怨たる心にて猶うとまれぬとはいへり此集末に至りて

かつみれとうとくも有かな月影の
いたらぬ里もあらしと思へは

菅萬に
うとみつゝとゝむる里のなけれはや
山郭公うかれてはなく

思ひ出るときはの山の時鳥からくれなゐのふり出てそなく

おもひ出る時はといふ心に常盤の山とつゝけたり下巻にも思ひ出るときはの山の岩つゝしとつゝけたるこれにおなし常盤山は山城にありから紅のふりてゝそなくとはふり出てはうち出てゝといふ詞のたくひなり後撰に

梅花ちるてふなへに春雨の
ふり出つゝなくうくひすの聲

とよめりそれに紅のふりてといふことのあれはそへてよむなり常には紅をおろしてきぬにそめたるをそれをおろして又そむるをふりてといふと顯註にかゝれたるを定家卿もさやうに聞侍りきと同心なり下に

紅にふり出つゝなく涙には
袂のみこそ色増りけれ

元眞集
秋の野はから紅になりにけり
鹿のふり出て鳴そめしより

大和物語檜垣嫗
鹿の音はいくらはかりの紅そ
ふり出るからに山のそむらん

これら紅のふりてにつきてよめる歌ともなり歌の心は時鳥は妻をこひ血になくともいふ鳥なれは妻

をこひしく思ひ出る時はおのか血の涙の紅をふり出て玄のひもあへす鳴とよめるにや

聲はして涙は見えぬ郭公わか衣手のひつをからなん

郭公は聲はかりして泪なく我は聲をたてねと涙のしけれは我袖のひつるをかりてなけとなり

足曳の山郭公をりはへてたれかまさるとねをのみそなく

をりはへては打はへてといふに心かよへり下卷にも蟬のをりはへなきくらしとよめりたれかまさるとゝは郭公の物思ふ人にくらふるやうになく心也

今さらに山へかへるな郭公聲のかきりはわかやとになけ

郭公の聲の限りをは聞あかぬ我宿に鳴はてゝ今更に山へは歸るなとなり山へかへるなとはこれは郭公を杜鵑と心得て杜鵑は不如歸となくによりて讀るとそ聞ゆる後撰集にも

常夏に鳴てもへなん郭公
しけきみ山に何かへるらん

みくにのまち

三國は氏町は名也仁明天皇更衣貞登(サダノボル)朝臣母也承登和之初賜姓源朝臣後依母過失被削屬籍仍出家入道

小町集

やよやまて山ほとゝきすことつてん我世中にすみわひぬとよ

六帖には落句すみわひぬへしと有やよやまてとはやゝとよひかけてしはしまてといふ心なりやよやとよめる歌は源氏に

いふせくも心に物をなやむかな
やよやいかにととふ人もなみ

思ふらん心のほとやゝよいかに
また見ぬ人の聞かなやまん

ことつてんとはことつてせんなり定家卿云郭公はしての田長といふにつけて此世に住わひ又今はさそへとあつらへたる心とそ聞侍る又或物にかきて侍しは三國町は仁明天皇の更衣なりしか崩御の後世に住わひて郭公は冥途にかよふといふ鳥なれは便なき事を此鳥にこと傳てみかとに申つかはさんとなりといへりもししからは下卷に

なき人の宿にかよはゝ郭公
かけてねにのみ鳴とけつなん

これと同し心也しかれとも過失あるによりて子さへ屬籍を削らるゝほとなれは誠に君恩をはわするへからねと山陵をしたひ奉るには侍らしかゝる事の後身をうんしたる折しも父母なとにおくれてよまれたるにや限なく哀なる歌なり

菅萬
寛平御時后宮の歌合のうた　きのとものり

五月雨に物おもひをれは郭公夜ふかくなきていつち行らん

菅萬に此さみたれを沙亂とかゝせ給ひ六帖に躬恒歌に

さみたれにみたれそめにし我なれは
人をこひちにぬれぬ日そなき

といふ歌もあれはみたれて物思ふとかねてよめるなり五月雨のふる夜物を思ひみたれてをる折しも郭公のかすかに聲するを夜ふかき雨にぬれ／＼ていつち行らんとそれをさへあはれひて思ひやれる心感ふかし

萬九
かきくらし雨のふる夜をほとゝきす
鳴てゆくなりあはれ其鳥

後撰
ひとりゐて物思ふ我を郭公
こゝにしもなく心あるらし

菅萬
夜やくらき道やまとへる郭公我宿をしも過かてになく

此初の二句夜のくらきによりて道やまとへるといふにはあらす其心ならは夜をくらみ道やまとへるなといふへしこれは夜のくらきにや思ひわつらふ又は行へき道をやまとへることもとをしも過かたきやうになくはおなしやうなれと上を二つにわかちていへるなり

大江千里

宿りせし花橘も枯なくになと郭公聲たへぬらん

六帖にはをはりの句きなかさるらんと有上にも花橘に宿はからなんとよみて橘は郭公のためにはさたかなる宿なるをなとかかるゝとなり宿りつる橘はかれぬを郭公は宿をなとかかるらんといふ心を上にかれなくにといひつれは詞をかへて聲たえぬらんとはいへるなり

きのつらゆき

菅萬
夏の夜のふすかとすれは郭公鳴一こゑに明るしのゝめ

夏の夜のいかに短けれはとて時鳥の一聲にあくる事有へきならねとみしかきよしをせめていへるなりしのゝめとは曉をいふ萬葉第十にはいなのめとも讀り其歌

あひみまくあきたらねともいなのめの
明行にけりふなてせん妹

神代紀云乃以二御手一細開二磐戸一窺之（ホソメニアケテイハトヲミソナハス）これしのゝめの縁なるへししのもいねもほそき物なれは戸のほそめなるをそれにたとへて山のはのほそくしらむを彼ほそめよりうつしていへる詞にや俗にも目のほそきを薄にてきれるはかりと申ならへり

後撰　郭公一聲に明る夏の夜の
曉かたやあふこなるらん

同　臥からにまつそわひしき時鳥
鳴も果ぬに明る夜なれは

六帖　同しくはいさとくねなん夏衣
ぬくかとすれは明ぬといふ夜を
みふのたゝみね

くるゝかと見れは明ぬる夏の夜をあかすとや鳴山ほとゝきす

あかすといふにあけすといふ心をかねたり

紀　秋岑

夏山にこひしき人やいりにけん聲ふりたてゝなくほとゝきす

戀しき人とは郭公のこひしき人なり此人とは一夏練行のために山こもりする僧の心行人なり菅家集萬に此左の御詩に一夏山中驚耳根郭公高響入禪門と作らせたまへり

題しらす　よみ人しらす

こその夏なきふるしてし郭公それかあらぬか聲のかはらぬ

菅萬　いくつ夏鳴かへるらん足引の
山ほとゝきす老もしなすて

つらゆき

郭公の啼をきゝてよめる

五月雨の空もとゝろに郭公何をうしとかよたゝなくらん

そらもとゝろとは空もうこきてといふなり萬葉には動の字響の字をとゝろとよめり奥義抄によたゝはよるさは啼といふこゝろにや人のよるのゝし（顯註密勘に夜たゝうきといふ心歟トアリ）るをはよたゝらきなと申めるは顯昭もおなし心に

て定家卿も同心なり
さふらひにてをのこどもの酒たうべけるにめして郭公まつ歌よめと有ければよめる　みつね

或抄にさふらひとは内殿上をいふなりとあり

郭公聲もきこえす山彦は外になくねをこたへやはせぬ

山ひこを顯注にはあまひことといひてあまひこは山彦なりこたまともいふと有こたへやはせぬはなとほかになくねをこたへぬそこたへよとなり詞花集に能因

山ひこのこたふる山の郭公
一聲なけは二聲そきく

これは今の歌をふみてよめるにや

山に郭公のなきけるを聞てよめる　つらゆき

郭公人まつ山になくなれは我うちつけに戀まさりけり

家持集には第二句ひとり山へに下句わかうちつけに戀まさるなりと有信しかたし松のおほかる山を人まつ山とつゝけたり詞書にて心得へし名所にはあらす大和物語にも

ひくらしに君まつ山の郭公
とはぬ時こそ聲もをしまぬ

六帖瀧部に

行水のわか心にしかなはねは
人まつ瀧となりやしぬらん

これは似たるつゝけやうなれと松瀧といふたきによせてよめりうつほ物語あて宮に

よそにのみかくなからふる袖よりは
人まつ瀧の落ぬ日そなき

返し

まつ瀧といかゝたのまむよゝをたに
ねをとゝめてしわかると思へは

これらにあはせて見るへし打つけとは人まつ山に鳴と聞よりやかての心なり後撰に

打つけに物そ悲しき木の葉散
秋のはしめをけふそと思へは

これも秋の初をけふそと思ふ心よりやかて悲しきといふ心なり人まつ山にしも郭公の鳴をきけは打つけに誰となく戀る心のまさるとなり上に素性の初聲きけはとよまれたる類なり

はやく住ける所にて郭公の鳴けるを聞てよめる

たゝみね

はやくはむかしの心なり

むかしへや今もこひしき郭公ふるさとにしもなきて來つらん

むかしへは昔なり春を春へといへるかことし下のおなし人の長歌にあはれいにしへ有きてふとよめるをも六帖にはむかしへとす萬葉に方の字をへとよみてすなはちかたの心なれはいにしへはいにしかたむかしへはむかしの方にておなし心なり

萬葉　いにしへにこふらん鳥は郭公
　　けたしや鳴し我こふること

菅萬　ふるさとゝ思ひやすらん郭公
　　こそのことくになれそ鳴なる

郭公の啼けるを聞てよめる

みつね

郭公われとはなしにうの花のうきよの中に鳴わたるらん

われとはなしにといふにてわかうき世になきわたる心あらはれたりうの花は郭公のきなく物なるを縁にてそれをうけてうきよとつゝけたる同しうき世なれはなれもうき事ありてやなきわたるらんの心有或抄に我とはなしにとはわれとともにはなしにといふ義なり心はひとり物を思ふも悲しきに郭公さへなけはいとゝうき世の思ひも切なるよしなりといへりかゝる說一向用へからす聲をわれとはと讀へし或抄のことくならは其聲われとはなしに如此なり

はちすの露をみてよめる　　僧正遍昭

はちすはのにこりにしまぬ心もて何かは露をたまとあさむく

にこりにしまぬとて法花經誦出品に不染世間法如蓮花在水と有心なり何かは露を玉とあさむくとはあさむくは欺の字誘の字なとにていつはりてすかす心なり愛する心なりと云人有吏に其心にあらねは用へからす下に忠岑の長歌にも此詞あり

菅家御歌　花と散玉と見へつゝあさむけは
　　雪ふる里そ夢にみへける

興風集　●鶯はあさむかるらん白雪の
　　花と見るまて枝にふれゝは

後撰　人しれすまつにねられぬ有明の

月にさへこそあさむかれけれ
これら皆心一同なり白氏文集に云草螢有輝終非火
荷露雖圓豈是珠
菅萬 夏の夜の露なと丶めそ蓮葉の
まことの玉となりしはてねは
六帖 蓮葉におきゐる露の玉水は
うかへる人のこ丶ろとそみる
蓮葉の清淨なる心を持なからなと露をは玉と見せ
て人をあさむくそとなり此一首蓮の歌なり貫之家
集に
行水の心は淸き物なれと
まこと丶おもはぬ月そみえける
是は今の歌の心をとる歟
月おもしろかりける夜あかつきかたによめる
ふかやふ
六帖風體 夏の夜はまたよひなから明ぬるを雲のいつこに月や
とるらん
夏の夜はもとより明やすきに月をおもしろく思へ
はいよ／＼みしかきによりてまたよひなからと
いへり萬葉に初夜と書てよひとよめり常はよひ夜

中曉と次第して明れは月も思ふま丶に空をわたり
て西のとまりにいたるを今宵の空はまたよひにて
明たれは月も常のとまりにはえいたらすして中空
にやとりてそいますらんとおもひやりてよめる心
なり雲のいつことは雲は物をへたてかくす物なれ
はいへりた丶いつこの空にかといふ心なり
みつね集 見るほとにいかにせよとか月影の
また宵のまに高く成らん
六帖 あくるまて有たにあかぬ夏のよを
また宵なからこしか侘しき
となりよりとこなつの花をこひにおこせたりけれは
をしみて此歌をよみてつかはしける　みつね
遊仙窟に遺の字をおこすとよめり
塵をたにすゑしとそ思ふ咲しよりいもとわかぬると
こなつの花
六帖幷朗詠には腰句うゑしよりと有塵をたにとは
下にいもと我ぬる床夏とつ丶くる縁なり塵をたに
すゑしとそおもふといへるに惜みてをらぬ心みえ
たり六帖に又躬恒か歌に
いもと我ぬる床なつの花なれは

なへて人には見せん物かは

拾遺集に家に咲て侍りけるなてしこを人のかりつかはしける伊勢

いつくにも咲はすらめとわかやとの
山となてしこ誰にみせまし

こはゐにおくるとこへとをしむと水と火とのことくたかひ侍るをとり〳〵にやさしきは心からなれと歌の德に侍り瞿麥をなてしことといふは本名にてとこなつといふは異名なり秋冬までもさけは常夏とはいへり夏をもとゝしてとこなつといふ詞は有歟と思ふに只つねにといふ心にや萬葉第十七家持の立山賦ににひ川のその立山にとこなつに雪ふりしきて云々秋よむはめつらしからす冬よめるは後撰に源たゝあきらの朝臣十月はかりにとこ夏を折ておくりて侍けれは讀人しらす

冬なれと君か垣ほに咲ぬれは
むへ常夏にこひしかりけり

定卿の歌に

霜さゆる朝の原の冬かれに
ひと花さける山となてしこ

大鏡裏書云染殿大后少之時容姿艶麗號瞿麥御殿美艶多改瞿麥稱常夏花蓋避諱也云々此説まことにやいまたしらす

みな月のつこもりの日よめる

躬恒
夏と秋とゆきかふ空の通路はかたへ凉しき風や吹らん

六帖には腰句かよひちにと有顯注にゆきかふ空とは行ちかふ空なりとかゝれたるは同し心なからこれはゆきかはるなり萬葉第十二に往反道とかきてゆきかふみちとよめりたとへはおなし道より行ものとくるものとはゆきかふなりゆきかへはゆきちかへとおさへてゆきちかふとはいはすかたへはかたはらにていはゝ半なり諸人とかきてかたへの人とよむとは心かはれり秋のくるかたをかたへ凉しき風や吹らんといへるなり枕草子に秋になりたれとかたへ凉しからぬ風のそらなめりとかけり曾丹か家の集に載たる源順歌に

夜はを分て春くれ夏はきにけらしと
思ふまもなくかはる衣手

又惠慶法師集に

ふる雪にかすみあひてやいたるらん

としゆきちかふよはの大空

これら下は此歌をおもへるなるへし

# 古今和歌餘材抄卷五　八十首

秋歌上

秋たつ日よめる　藤原敏行朝臣

拾芥抄云按察使富士丸男右兵衛督四位至延喜七

秋きぬとめにはさやかにみえねとも風の音にそ驚かれぬる

菅萬には第二句目庭朗丹とあれはめにはほからかに歟ほからかを略せる詞也下の戀部にしのゝめのほから／＼と明行けはとよめるに同し日本紀に寥亮をさやかとよめる萬葉集には清の字をもかけりさはやかといふ心なりさやとのみよめるも同し鏗鏘をさやかとよむは金鐵なとのさはやかなる聲にて別義なりされと和語の心は通へり文選阮籍詠懐詩云開秋兆㆓涼氣㆒

後撰　俄にも風の涼しくなりぬるか　秋立ほとはむへもいひけり

秋たつ日うへのをのこともかものかはらに川せうえうしけるともにまかりてよめる　つらゆき

うへのをのこは殿上人なり川せうようとは川へに

出て水をもてあそひ魚をつりなとしてあそふをいふせうえうは逍遙なり日本紀の應神紀には此字をあそふとよめり毛詩なとにも出たる字なれと莊子の逍遙遊の篇にて人のしれる詞なり伊勢物かたりにもむかしをとこみこたちのせうえうし給ふ所にまうてゝ立田川のほとりにてとかけり源氏須磨にその比大貳はのほりけるいかめしうるいひろくむすめかちにて所せかりけれは北方は舟にてのほる浦つたひにせうえうしつゝくるに云々重之集に云たんこにてふなせうえうにきしの藤の花を折てやかたにさせる云々

六帖風躰　川風の涼しくもあるか打よする浪とゝもにや秋は立らむ

あるかはあるかななり

題しらす　よみ人しらす

家持集　わかせこか衣のすそを吹返しうらめつらしき秋のはつ風

六帖にはみつねか歌とせりわかせこは女をさせりうらめつらしはうらさひしきうらかなしなといふたくひ也うらは心なり毛詩曰不レ屬二于毛一不レ離二于裏一心は身のうちにあれはたとへはきぬのうらのことくなるゆへに裏の字をこゝろとよみ心をうらといへり萬葉には裏の字をしたとよめり下うれしなといふ此心なりうらめつらしといはんとて上の句は序にはいへるものから歌のにほひとなりてまことにうちめつらしう聞ゆる歌なり文選嵇叔夜詩微風動レ袿

六帖　初風の涼しくふけはわかせこは衣のすそのうらそさひしき

六帖　きのふこそさなへとりしかいつの間にいなはそよきて秋風のふく

さなへはわさなへといふへきをわを略するなり早蕨早百合も同し心なり早の字音にあらすさなへをとるといふは田をうゑんとて苗代にあるを取をいふなりいなはそよきてを顯注にはいなはもそよきとありてそよきとはそよきてといふなり或本にはいなはもそよとゝありこれはそよきを猶略したりとかゝる六帖にもいなはもそよとゝ有職の字をそよ〳〵とよめりきのふとはまことのきのふにはあらす昨日の心ちするをいふ

菅萬
いつの間に秋穂たるらん草とみし
　　　ほといくはくもいまたへなくに
貫之集
うゑし袖またもひなくに秋の田を
　　　かりかねさへそ鳴わたるかな

萬葉集第八に赤人
きのふこそ年は暮しか春霞
　　　かすかの山にはや立にけり

これは今の歌に似たれときのふはまことのきのふなり　以上立秋の歌の類なり

秋風の吹にし日より久かたの天のかはらにたゝぬ日はなし

是は織女になりて讀りたゝぬ日はなしとはひこほしを立出て待を云七日の夜のみあふことなれは待かねて秋のくる日より天河原にたゝぬ日はなしと人問のならひをもちてよめり

萬八
秋風の吹にし日よりいつしかと
　　　わか待こひし君そきませる
同十
秋風の吹にし日より天河
　　　せに立出てまつとつけこそ

これより下九首は七夕の歌にて次第せりその中に後二首は七夕後朝なり

久かたのあまのかはらのわたし守君わたりなはかちかくしてよ

此歌もまた織女になりてよめり此かちといへるは櫓なり萬葉には大かた櫓をよめりかちかくしてよとは明なん時かへさしとなり前漢陳遵字孟公遵嗜レ酒毎ニ大飲一賓客滿レ堂輙開レ門取ニ客車轄一投ニ井中一雖レ有レ急終不レ得レ去　これにおなしこゝろなり萬葉第十に
　　わかゝくせるかちさをなくてわたし守
　　　　舟かさめやもしはしは有まて
今の歌はこれを本歌にてよめる歟兼輔集に
　　七夕を渡して後は天河
　　　　浪高きまて風もふかなん
これも心の似たる歌なり

六帖
天河もみちをはしにわたせはや七夕つめの秋をしもまつ

顯昭の本には紅葉を舟にと有て注云崇德院御本には橋にとかゝれたるに橋をなほして船とかゝれた

り但寶方集云

　天川かよふうき木にこと〻はん

　　紅葉の橋はちるやちらすや

然れは古今に紅葉の橋と有本に付て如此詠るとも覺たり隨近來人多橋と詠歟密勘云舟橋唯一說也船とも橋とも風情よりこん時共に可詠用也今按六帖もまた今の本におなしうつほ物語に

　秋淺みもみちもしらぬ天川

　　何を橋にてあひわたるらん

是も今の歌にてよみたれは古本は橋にて侍りけたしたなはたつめは和名集に織女とかけりつは天津國の津の類にて助たる詞なりたなはた妻なりといふはいはれす

こひ〳〵てあふ夜はこよひ天川霧たちわたり明すもあらなん

下戀部に　こひ〳〵てまれにこよひそあふ坂の

　　夕付鳥は鳴すもあらなん

心の似たる歌なり又家持集に

　あけぬやととふ物ならは天河

　　霧たちいまた晴すといはなん

寛平御時なぬかの夜うへにさふらふをのことも歌たてまつれと仰られける時人にかはりてよめる

　　とものり

天川あさせしらなみたとりつ〻渡りはてねは明そしにける

兼輔集他本歌に七月七日歌よみける所にいきてとて此歌ありて返し女

　こよひかすたなはたつめに身をかへは

　　あけはかへさむことをこそおもへ

とのかへし

　河霧の立しかくせは水底に

　　かけみる人もあらしとそ思ふ

淺瀨をしらぬといふ心にあさせしら波とはつ〻けたりたとるとはおほつかなくてこなたかなたにもとほるをいへり顯注にわたりはてねは明そしにけるといふ事は心得す年にひと夜を待つけてわたらん夕の河瀨をたとりてわたりはてさらん事極て本意なかるへしされは伊勢大輔か自筆本にはわたりはつれはとかけると申て隆縁はわたりはてねはといふ詞をうけす侍き隨て渡りはてねはと云詞いはれすさらはわたりはてすはとこそよまめと申侍し

かといかゝと覺ゆ一兩證本皆此定なり考萬葉

天川せをはやみかもむは玉の
夜はあけにつゝあはぬひこほし

と侍凡星合の歌一すちならす或はひこ星天河をわたるにむかへ船にのり或はたなはたかさゝきの橋よりわたる或はたなはた橋をわたす又かちわたり又或は天川わたりはてすして明ぬとよみ或は思ひのことくあひて歸るなとよめるたゝ風情に任する事なれはかくよむと聞えたりいはれすとうたかふへからす密勘云七夕歌いかにもおもひやりてよまむ風情難すへからす今按六帖に載たるも今と同し友則か集にはわたりはてぬにとあれはおなし心なり狹衣に

よしの川淺瀨しら波たとりつゝ
わたらぬ中となりにし物を

これは今の歌を取たるに渡らぬ中となりにし物をといへるにて古本わたりはてねはと有けんことしられたり

おなし御時后宮の歌合の歌　藤原おきかせ

六帖菅萬 契りけんこゝろそつらき七夕の年に一たひあふはあふかは

菅萬には戀の歌の中に有ひこほしの心をくみてたなはたの年に一夜を契りけんかつらしといふなり

なぬかの日よめる　凡河内みつね

六帖 年毎に逢とはすれと七夕のぬる夜の數そすくなかりける

萬葉集十に

玉かつらたえぬ物からさぬらくは
年のわたりに只ひとよのみ

七夕にかしつる糸の打はへて年のをなかく戀やわたらん

織女に糸をかすことは天寶遺事云唐宮中七夕結㆓綵縷㆒陳㆓瓜菓酒㆒祀㆓牛女㆒妃嬪各執㆓九孔針五色線㆒向レ月穿レ之者爲レ得レ巧　打はへては萬葉に延の字をはへてとよめり布を經る時に糸をのはへたることく綱繩かつらみち年月あるひはこひもおもひも長くて有事の絕ぬをいふ詞なり年の緒は顯注によろつの事に緒といふ字をそへたり心緒別緒愁緒なとかけりけれは此緒もたゝ年といふことに緒をそへたり定家卿云年緒所存同或抄に乞巧はたく

みをこふとよめはねかふことを乞やわたらんとなりといへるは用へからすたゝ戀やわたらんなりかしつるいとのといへるは打はへて年の緒のなかくといはんためなり

題しらす　　　　そせい

こよひこん人にはあはしたなはたの久しきほとに待もこそすれ

六帖幷に素性集には落句あへもこそすれと有あやかりもこそすれなり源氏にあへものといへるもあやかり物なり後撰集に

　あふことは七夕つめにひとしくて　たちぬふわさはあへすそ有ける

これもあやからすそ有けるなり拾遺集に平兼盛

　たなはたのあかぬ別もゆゝしきを　けふしもなとか君かきませる

なぬかの夜の曉によめる　　源むねゆきの朝臣

今はとてわかるゝ時は天川わたらぬさきに袖そひちぬる

やうかの日よめる　　みふのたゝみね

家集六帖みつね

けふよりは今こん年のきのふをそいつしかとのみ待わたるへき

六帖にはみつねか歌とす發句忠岑家集には今よりはと有

題しらす　　　　よみ人しらす

六帖

この間よりもりくる月の影みれは心つくしの秋はきにけり

木の間かくれの月の心盡しのみにはあらす秋の盛を月によせていへり潘岳秋興賦云月曈朧以含レ光兮注季善曰埤蒼曰曈朧欲レ明也劉良曰曈朧月初出

良

猿丸集

大かたの秋くるからに我身こそ悲しき物と思ひしりぬれ

わか爲にくる秋にしもあらなくに虫のねきけは先そかなしき

菅萬にあれは寛平后宮歌合の歌歟我をうかれとてくる秋にあらねと虫の音きけは人よりさきに先物の悲しけれはわかためにくるやうにおほゆる心なり

物ことに秋そかなしき紅葉つゝうつろひゆくをかきりと思へは

もみちつゝは初秋に入れたる歌なれは梢とものやう〳〵色つくをいひてかくてうつろひ行を限と思へは物ことにわたりて秋そかなしきとなり下のもみちの歌にもみちはゝ今はかきりのとよめる歌になそらふへきやうなれとかれはたゝもみちの歌なれはこゝろことなり

後撰 打つけに物そ悲しきこのは散
　秋のはしめをけふそと思へは

ひとりぬる床は草葉にあらねとも秋くるよひは露けかりけり

此歌清正集にあれはおほつかなし
　我袖は草の庵にあらねとも
　　くるれは露のやとりなりけり

これさたのみこの家の歌合の歌
仁和第二右中將母同寛平なり

いつはとは時はわかねと秋の夜そ物思ふことのかきりなりけり

宗于集には物思ふころひとりことにとて此歌あり
初の五もしの中のはもしは詞のたすけにていつとは時はわかねとなり

萬葉第十一に
　いつはとはこひぬ時とはあらねとも
　　夕かたまけて戀はすへなし

大和物語に此在次きみ又みのわのさとゝいふうまやにて
　いつはとはわかねとたえて秋の夜そ
　　みのわひしさは知まさりける

かんなりのつほに人々あつまりて秋の夜をしむ歌よみけるついてによめる　みつね

かんなりのつほは襲芳舍也凝花舍の北に有昔神のおちかゝりけるよりの名とかや

かくはかりをしと思ふ夜を徒にねてあかすらん人さへそうき

徒にぬるとはひとりぬるをいへり後撰にはいたつらいねともよめりおもふ人にあひてねてあかさんをはうしとはいふへからす或抄に秋はこよひはかりなるを名殘なくいたつらにねてあかす人さへうきと秋をゝしむ人の思へることわりとあるは誤なりさる心ならは秋の末にいるへし秋の夜をしむといふはいつにても有へし今はまつ秋の中比の心な

り　躬恒集に
あくるまて今夜の月をみてもあらて　ねて明すらん人の心よ
これは今の歌の心歟
伊勢集
人待て啼つゝあかすよな〳〵は　いたつらねにも成ぬへきかな
小町集に中たえたる男のしのひきてかくれてみけるに月のいとあはれなるをみてねんことこそいとくちをしけれとすのことになかむれはをとこいむなる物をといふをきかぬかほにて
ひとりねの侘しきまゝにおきゐつゝ　月を哀れといみそかねつる
題しらす　よみひとしらす
六帖萬葉
白雲にはね打かはし飛鴈のかすさへ見ゆる秋のよの月
初の二句は鴈の高く飛心なり或抄白雲とは只空のこゝろ遠くなくよしなりといはれたり忠岑か甲斐の左官にて下りける時の長歌といふ物にも白雲居なるかひかねにとよめり菅家萬葉集下に
常ならぬ身をあきぬれは白雲にとふ鳥さへそかりと鳴ける
此白雲にといへるも今の義とおなし萬葉には天雲にはね打つけてとふたつともよめり月にいとふほとなるをいふにはあらすかはすはましふるなり數さへみゆるを顯注に影さへ見ゆると有て影さへとは雲井はるかにとひ行鴈の影の庭にうつりてみえんは月のきはめてあかき心なり此歌につきてかつさへ見ゆると云說侍れと證本みな影さへと侍るめりいつれのまされるといふ論も侍れと影さへは月もあかく詞もやさしきか萬葉に
あさか山影さへみゆる山の井の　淺き心はわか思はなくに
といふ詞もおもひよられたり但故六條左京兆のの給ひしは世に山戶菟田集といふ文はもろ〳〵の一座會をかけるに秋の夜月と云題をよめる會に秋の夜の月と云句を末におきてひとつは影さへみゆるとよみひとつは數さへみゆるとよみて上三句此定めにて侍れは古今には數さへをまさりたりと思ひて入たるにや勝劣は人の心にまかすへしとそ仰られしか朗詠の注云此歌作者不ﾚ見而菟田集には伊

衡詠也　密勘云證本には數にて侍れとかつは一座兩首の歌なりけれは用捨人の心に可有歟淺香山影さへ實に優なれと數さへも俗にちかく聞にくき詞にはあらすたとへは此景氣無下にちかき人の作れる詩には左史闕文雲隱處右軍團扇月明程　秋の夜のすめる空なる鴈かねの啼わたるらん面影かやうにや侍るへき影の說につかは月にかけらんほとは遠くともせめてくまなきよしをいはゝなかめん庭のおもやとさむ袖のうへにも影みゆとも申なしてん白雲に羽打かはしと見ん影は雲中にへたゝりなは月のかけあかき心にたかふへし白雲に飛ひてかけ見えんことおほつかなけれは數さへみゆるにつき侍るなり昔も今も月を詠詩歌に物の影くまみえぬよしを先とし侍るにや是又後學心只可隨各所存好這歌事俊頼朝臣は影を執らせられけるにや基俊のかゝれたるは數に心ひけると見え侍りしかは古賢も各別々に思はれけり今案顯昭は數さへみゆるを俗にちかしと思はれけるか影さへは月もあかく詞もやさしといへるしか聞えたりこれしからす數さへ見ゆるといひて月あかゝらぬかは岸白還迷松上鶴潭融可レ筭藻中魚といふ一聯秀句有公忠集には

池水のもなかに出てあそふ魚の
　數さへみゆる秋の夜の月

ともあり又影さへ見ゆるといふを定家卿の難したまへるもことはりいまた盡さるか若此白雲といふを月にいとふほとの雲とみてそれに隔てたる鴈の影はみえしとの給はゝそこに執し給へるかすはいかてみたまはんやとこたへは勝負不定なるへし菅萬には影さへ見ゆる秋の月かなと有てこれに付て御詩の發句にも秋天飛翔雁影見と作らせたまへは顯昭の說かなひたれと影と數とかならすしも勝劣なかるへし又菅萬の序を見るに寛平后宮の歌合の歌を捨てあつめさせ給へりと見ゆれは山戸苑田集の說おほつかなしこれより下五首は秋の月の歌なり

萬九 さよなかと夜はふけぬらし雁かねのきこゆる空に月渡るみゆ

此歌は萬葉第九に有て全く同なれは誤て載たる也第十にも初をとこのよらはさよふけぬらしといひ

終を月立渡るといふ歌有

これさたのみこの家のうた合によめる

大江千里

六帖風躰
月みれはちゝに物こそかなしけれ我身ひとつの秋にはあらねと

文集云燕子樓中霜月夜秋來唯爲一人長いにしへ本朝には白氏か詩文を翫て文集とのみいふは白氏にかきることとなる上に千里は儒者にて文集の中の秀句を題としてよまれたる歌もおほくあれは此歌もひとりのためになかしといふを飜案せられたりと見えたり菅家の宰府にて此秋獨作我身秋と作らせ給へるも白氏か詞けにもとおなし心したまへるなり

たゝみね

久かたの月のかつらも秋は猶もみちすれはやてりまさるらん

家集には腰句秋くれはと有萬葉第十に

もみちする時になるらし月人の
かつらの枝に色つくみれは

是は本歌にてよめる歟後撰集に紀淑望朝臣

空遠み秋やよくらん久かたの
月のかつらの色もかはらぬ

これは今の歌と表裏にたかひたる作なり菅萬

秋くれは雲ゐまてにももみちぬを
空さへしるく何かみゆらん

これは今の歌と心同し月の桂の事兼名苑云月中有河々水上有桂樹高五百丈顯注に後撰集つらゆきのうた

春霞たなひきにけり久かたの
月の桂も花やさくらん

此等二首の心月桂は春花さき秋もみちすへきにや以言詩には桂花秋白とつくりたれは秋さくそと聞えたるはよのつねの花もみちになそらへてさき二首はよめる歟可尋密勘云月桂の花以言詩によりて秋はかりにも難一決桂花とは月の名なり歌にはさしもあらぬ事をも思ひあてをし侍るやうにのみこそ讀侍るめれ此密勘につき侍るへし文選曹子建朔風詩云桂樹冬榮かくもいへり又月中の桂はもとよりなき事なりとてうけぬ人さへ侍り歌は唯むかしにしたかふへし

月をよめる　　在原元方

秋の夜の月の光しきよけれはくらふの山もこえぬへらなり
六帖 秋の夜の月の光し淸けれは
箱根の山の月さへそてる

人のもとにまかれりける夜きり〳〵すの鳴けるを聞てよめる
藤原たゝふさ
拾芥抄云太宰大貳廣俊孫信濃守輿嗣男右京大夫從四位上

蛬いたくなゝきそ秋の夜の長き思ひはわれそまされる

朗詠集には第四句なかきうらみはとあり行末かくる長き思ひは我こそ増りたれはおほつかなく思ひな佗そと人にいふ心をきり〳〵すの只今なくにそへてよめる歟後撰集に
いせの海にはへてもあまるたく繩の
長き心は我そまされる

これより下十首は虫の歌の類なり

是貞のみこの家の歌合のうた　としゆきの朝臣
秋の夜のあくるもしらす鳴虫は我こと物やかなしかるらん

題しらす　よみ人しらす
猿丸集 秋はきもいろつきぬれは蛬わかねぬことやよるは悲しき

秋の夜は露こそことに寒からし草村ことにむしのわふれは
秋の虫何わひしらに音のする
たのみし陰に露やもりゆく

君忍ふ草にやつるゝふる鄕はまつ虫の音そかなしかりけり

君しのふ草とはしのふ草なりやつるゝは弊の字なり又神代紀に襤褸の二字をよめり是は衣裳なとのあかつきやつるゝかたに用れと何のやつれにも用へき歟松虫は待心にいへり

秋の野に道もまとひぬまつ虫の聲するかたに宿やからまし

初の二句は野遊の心なり松虫はこれも待といふを兼たり

秋の野に人まつ虫の聲すなり我かと行ていさとふらはん

紅葉はのちりてつもれる我宿に誰をまつ虫こゝら鳴らん

此落葉は秋暮て散にはあらす一葉つゝ散積れる也

後撰 秋の野にきやとる人もおもほえす
　誰をまつ虫こゝら鳴らん

日くらしの鳴つるなへに日はくれぬと思ふは山の陰にそ有ける

日くらしは和名集に茅蜩とかきてちひさき蟬なり顯注に夕つかた鳴なりとあれともそれはおほかたの事にて朝よりも鳴なり

拾遺右大將清時 朝ほらけひくらしの聲きこゆなり
　こやあけくれと人のいふらん

なきつるなへには鳴つるからになり顯注にはとみしは山のと有を密勘に家の本にはと思ふは山のとそかき侍ると有朗詠集には顯注の本のことく有陰にそ有けるとは誠にくれはてたるにはあらて山陰なれは暮たるやうなりとなりこゝにひくらしの歌の入たるは日くらしをも虫とする心なり源氏まほろしの巻に日くらしの聲はなやかなるに御前のなてしこの夕はへを獨のみ見給ふはけにそかひなかりける

つく〳〵とわかなき暮す夏の月を
　かことかましき虫のこゑかな

此歌もひくらしをむしとよめり

ひくらしのなく山里の夕くれは風より外にとふ人もなし

小町集には落句とふ人そなきとあり

後撰 八重むくらしけき宿には夏虫の
　聲より外にとふ人もなし

はつかりをよめる　在原元方

月令曰仲秋之月鴻雁來季秋之月鴻雁來賓これは八月にまつわたるを主とし九月に遲れていたるを賓とす萬葉に長月のその初鴈の使にもなとおほく九月の物によめり今渡りくるも大かたさることとなり

侍人にあらぬ物から初鴈のけさなく聲のめつらしき哉

これより下八首は鴈のうたなり

是貞のみこの家の歌合の歌　とものり

秋風にはつかりかねそきこゆなる誰か玉つきをかけてきつらん

菅萬にはなく鴈かねそひ丶くなる六帖には初かりかねそひ丶くなると有 漢書蘇武傳曰昭帝即位數年匈奴與レ漢和親漢求ニ武等匈奴ニ詭言 武死後 漢使復至ニ匈奴ニ常惠漢人請ニ其守者ニ與俱得ニ夜見ニ漢使ニ具自陳 道 敎ニ使 者謂ニ單于ニ言天子射ニ上林中ニ得レ雁足有レ係ニ帛書ニ言武等在ニ某澤中ニ使者大喜如ニ惠語ニ以讓ニ單于ニ單于視ニ左右ニ而 驚 謝ニ漢使ニ曰武等實在レ於レ是李陵置レ酒賀レ武曰今ニ足下ニ還歸ニ揚ニ名於匈奴ニ顯ニ功漢室ニこれ はまことに 玉つさをかけたるにてはあらねと雁の使雁の玉つさかくるなとはこれにてよみならへり又雁書といふことは飛の飛ひつらなるか文字に似たれはいふ詩にも 雁飛ニ碧落ニ書靑紙 共靑苔色紙ニ數行書とも水底模書雁度時とも作れり

題しらす　　よみ人しらす

わか門にいなおほせ鳥のなくなへに今朝ふく風に雁はきにけり

六帖にはわかやとにとていなおほせ鳥の題に人丸の歌とせり又わかかとのわさ田もいまたかりあけねはとて下句おなし歌もありいなおほせ鳥は奥義抄云古歌にもさま〲によめり或は秋田にむれはむと有或は秋立てくるよしあり俊子歌には

さ夜ふけていなおほせ鳥の鳴けるを　君かた丶くと思ひける哉

とあり又古歌に云

和泉式部歌集
逢ことをいなおほせ鳥の敎へすは　人をこひちにまとはましやは

とあり是につけて庭た丶きと申人もあれとも本草和名兼名苑なといふ文こそはよろつの物の異名かたちをさへあかしたるにみえたることもなし順か和名にはにはた丶きをも鶺鴒又鶺鴒なとかきて注には日本紀私記云とつきをしへ鳥とかけり又前に稲負鳥と書て註に其よみいなおほせ鳥とかきて萬葉集を引文にいたしたれはことへりとみえたり順しらさらんやは但彼古歌にてはにはた丶きとそみえはへれと順かわきまへさらんことを今の世には定かたし顯註にも此おもむきなる上にいはく或は山鳥といへり鳥のすかた稲を負たるに似たりといへりそれも山鷄の外にあけたれは別の物とみえたり和名序に山鳥有稲負名といへるは水獸有葦鹿號といふにむかへて山の鳥といふなり山鷄にはあ

らさる歟所詮稲負鳥といふものゝ侍歟本書に其名字不入鳥の我朝にその名許いひつたへて文字なき其數有歟といへり密勘に云いなおほせ鳥先人説是に同し愚意今按にそ猶庭たゝきにやと思ひ侍れと無差證同清輔朝臣今いはく三鳥一木なと相傳の事ありと世にことゝしけにいふもの有俊成定家他流の先達には清輔顯昭なともしられさることかく明らかなりさるを今に至てその鳥か申なといふことあらんや智あらん物誰かこれをうけん堀河院初度百首に公實卿

　板倉の橋をはたれもわたれとも
　　稲負鳥そ過かてにする

これは馬なりと心得てよまれたるとみえたりこれはもし古詩に胡馬依北風といへるにより此歌のけさ吹風にとよめるを鴈は北より來るなれは北風と心得て馬には稲をおほする物なれはよまれたるにや下の忠岑か歌に秋のかりほにおく露はいなおほせ鳥の涙とよみ山鳥有稲負名とて鳥部に順は載せられけるものか萬葉には稲負鳥はよまれさるを引文に出されたるは順の誤なり博覽の人はおほく隣記にまかす故にかへりてかゝる事有なり又順のたゝよみをのみ出して註せられたることのなきはその比たれ／＼もよく知たれともろこしの文にあはするにはそれ鳥となき事よふこ鳥のたくひなる故なり能宣集に九月ゐ中の家のいねをとるにかりける人のまうてきたる女共侍り

　かりにとてわかやとのへにくる人は
　　いなおほせ鳥にあはんとや思ふ

兼盛集に九月田かる所におきなあり

　からくしていそきかりける山田かな
　　稲負鳥のうしろめたさに

足引の山田の小すけあすまても
　　いなおほせ鳥のおふもねたまし

順集に九月小鷹かりの所

　里遠み暮なは野へにとまるへし
　　いなおほせ鳥に宿やからまし

狭衣にいなほの風もみえちかくは聞ならひ給はぬにいなおほせ鳥のおとなふもさま／＼さまかはりたるこゝちして心ほそけなり或抄云定家卿近年好士安藝國にまかれりけるに宿所より立出けるに庭

たゝきのおりゐて鳴けるを女の有けるか見ていなおほせ鳥よといひけるをきゝてなと此鳥をいなおほせ鳥とはいふそと問けれは此の鳥來たり鳴時田より稲をおひて家々にはこひおけは申なりといひける國々田舎の人はかやうの事をやすらかにいひ出すおかしく聞ゆ偏におしていはんよりは國々の土民の説用ゆへくや但人の心にしたかふへし源仲正歌に

しつのめかいなほこなくるからさをに
　　打そへてくる庭たゝきかな

鶺鴒を庭たゝきといへは右の説と此歌とかなひたれと兼盛集の歌は稲をはむ鳥ときこゆるに鶺鴒はさもなけれはこと鳥にや又或抄に秀能は水鶏といへりと有これは俊子か歌に君かたゝくといへるにおもひよれる歟夏と秋と時節相違せり菅家萬葉に下の忠岑の稲負鳥の涙といふ歌にそへさせ給へる詩には只田の事のみ有て稲負鳥の心見えす若第四句に野老扣角蕎謳通と有扣角といふにその心有歟是は俊子か歌よりおもひよれる推量なり小町集に

秋の田のかりほにきぬるいなかたの
　　いなとも人にいはまし物を

此いなかたも稲負鳥の一名歟

重之か百首に

白露のおくてのいねも出にけり
　　雁來る風はむへも吹けり

このうたを思ふにけさ吹風といへるも北風なるへし

六帖
いとはやも鳴ぬる雁か白露の色とる木々も紅葉あへなくに

いとはやもはいとはやくもなり雁かは雁かななり落句六帖には紅葉あへぬにと有萬葉にかやうになくにといへるは不の字なれはおなし事也又六帖に

いとはやも鳴ぬる雁かこかのもり
　　きにはふつたももみちあへなくに

いとはやも鳴ぬる雁かふる衣
　　あらためきせん妹もあらなくに

はるかすみかすみていにし雁かねは今そ鳴なる秋きりのうへに

六帖には人まろの歌とせり或抄云延喜の御時躬恒か子の小童をめす時は八月なり瀧口より參て竹臺

の本にさふらふに雁の鳴渡りたり勅ありて歌を奉れと有しに春霞と唱ふ人々嘲哢するに次をいへるを聞ておの〳〵感しあへりとなりかやうに秋の事をいふとて上句に春の事をいひ出したる用ゆへからすさるやうに近來の宗匠かゝれたり然るを喜撰か式には和歌に八の品を立たり其一には詠物者先始不表名色設對春山先可表冬山といへり今の歌の躰なり今案躬恒か子の歌といへるは袋草子の說によれり又古今著聞第五には寛平歌合に初雁を友則とて此歌をかきてとよめる左方にて有けるに五文字を詠したりける時右の方の人こゑ〳〵にわらひけりさて次句に雁みていにしといひけるにこそおともせすなりにけれおなしことにやと有同しことにやとは是よりかみにいはく花園左大臣秋のはしめにはたおりのなくを愛しておはしましけるにはじめて參りける侍のかうしおろしに參りたるに此はたおりをは聞や一首つかうまつれと仰られければ青柳のとはしめの句を申出したるをさふらひける女房たち折にあはすと思ひたりけにてわらひ出したりけれは物を聞はてすしてわらふやうや有と仰られてとくつかうまつれと有ければ

　青柳の緑の糸をくりおきて
　　　夏へては秋はた織そなく

とよみたりければおとゝ感し給ひて萩おりたる御ひたゝれおし出して給はせたりといへりこれに同じとなり

夜を寒み衣かりかね鳴なへに萩の下葉もうつろひにけり

此歌はある人のいはく柿もとの人まろかなりとこ此注不審あり其故は此歌菅萬上に有寛平皇后の歌合の歌なるへし萬葉第八に

　雲の上に嗁つる雁の寒きなへ萩の下葉はうつろはむかも

寛平御時きさいの宮の歌合の歌

　　　藤原菅根朝臣

文粹第八延喜格序云從四位上行式部大輔兼行侍從春宮亮備中守臣藤原朝臣菅根三代實錄第三十云元慶元年三月十日辛亥從四位上行右兵衞督兼相模守藤原朝臣良尙卒民尙者左京人常陸介從五位上春繼之子也云々長子菅根篤學經史百家畢該爲文章生對

策及第

菅萬六帖
秋風にこゑをほにあけてくる船は天の戸渡る雁にそ有ける

六帖には結句雁にさりけると有まてといふをまてゝふといふかことし同し事なり聲をほこあけてくるとは高く啼て聲をあらはにいたす心なり現形するをはほにあくといふ又物に隨てほに出ともいふ事なり雁の聲は櫓をおすに似たりよりて雁櫓といふされは船によそへて詩にも歌にもいふなり　本朝文粹第十一重陽後朝同賦秋雁櫓聲來應製菅贈大相國重陽之後翌日之夕秋雁者月令之賓也櫓聲者風窓之聽也觸物以感非來鏡湖之波馳心以思只望銀漢之岸云々秋雁似數人といふ詩にも風櫓瀟湘浪上舟を作れり空の青くてひろ〳〵とあるは海に似たれは萬葉に人丸の歌に天の海に雲の波たちとよめり又天戸といふこともあれは海の迫門によせてあまのとわたるとはいへり菅萬に此あまのとを天外とあるはかりてかゝせ給へる歟伊勢集長歌終に

やまひこのこたふはかりをわさにしてこゝろとはねはゆく舟のほに出てこそうらみられけれ

六帖
いそはなれ浦こく舟のほにあけて
いはてしもこそ戀しかりけれ

大和物語一條
玉さかにとふ人あらはわたの原
なけきほにあけていぬとこたへよ

雁の鳴けるを聞てよめる　みつね

うきことを思ひつらねてかりかねの啼こそわたれ秋のよな〳〵

思ひつらねては雁のつらにそへていへり

是貞のみこの家の歌合のうた　たゝみね

山里は秋こそことに佗しけれ鹿の鳴音にめをさましつゝ

萬葉第十
山ちかく家やすむへきさをしかの
聲を聞つゝいねかてぬかも

此かてぬは不勝とかきていねあへぬなりこれより下四首は鹿の歌なり蜻蛉日記に法興寺殿今の歌を取給ひて

鹿の音も聞えぬ里に住なから
　あやしくあはぬめをもみる哉
　　よみ人しらす

おく山に紅葉ふみわけ鳴鹿の聲きく時そ秋はかなしき

おく山は鹿の住所なり萬葉第十にも奥山にすむてふ鹿のとよめり紅葉ふみわけは　文粹第八源順沙門敬公集序云山鶯囀花之朝林鹿蹋葉之夕云々或注に外山の紅葉なと散過ては鹿も山深くこもる物なり深山の紅葉さへ散はつるをふみわけて物悲しく打鳴比秋はことに悲しきものなりとあるは心得かたし花は暖氣にもよほさるれは外山より咲て奥山の遅き紅葉は寒氣にもよほさるれは奥山は早く外山は遅きものなり其上此紅葉は上に虫の歌に付ていへることく一葉つゝ散つもりたるにて秋くれての落葉にあらす只外山奥山の沙汰なくて此おもてにて見るへし聲きく時そ秋は悲しきとは遊山の人の聞てかなしふなり此歌菅萬に入て此左の詩の菅家御詩に云秋山寂々葉零々麋鹿啼鳴音數處聆勝地尋遊宴處無明無酒意猶冷此詩にて心得へし此第三句によらは紅葉ふみ分は人のふみ分るにても有へし此歌を世に猿丸か歌とする事不審なり此集と菅萬とにて明らかなる上に猿丸か集は用ゆるにたらぬ物なれとそれにさへなく歌また上古の姿にあらすかた〴〵おほつかなし

題しらす

秋はきにうらひれをれは足引の山下とよみ鹿のなくらん

發句を奥義抄に普通本には秋風にとそ侍ると有れと次の歌にも秋萩をしからみふせてとあれは今の本を用へしうらひれをれはゝ顯注にはうらふれをれはと有て物おもひなつみてをるといふなりと注せらる此詞万葉におほし裏觸と借字にかけれはうらひれは誤なり離騷に帆々をうらふると點せり憂貞と注す萬葉に

　ますらをの心はなくて秋萩の
　　花にのみやはまつみて有なん
　秋山のもみち哀とうらふれて
　　入にし妹はまてときまさぬ

これらの歌によりて心得るにあまりに萩を愛する

によりてかへりてうらふるゝなり山下とよみは萬
葉に動の字響の字をとよむと讀り萩にさへうらふ
れをる折しも鹿さへなとか哀に鳴らんとなり古き
歌の姿なり六帖に
　妹にこひうらひれをれは足引の
　　山下とよみ鹿そ鳴なる
とあるはもし今の歌の轉せるにや
萬葉 君にこひうらふれをれはしきの野の
　　秋萩しのきさを鹿なくも
秋萩をしからみふせてなく鹿のめにはみえすて音の
さやけさ
しからみとは河にゐくひうちてそれに柴竹なとを
よこさまにあみつけて水をふせき岸なとのくつる
ゝをもさやうにしてつちをとゝむるなり鹿の萩の
枝を折ふせてふみしたきみたすかそれに似たれは
しからみふするといふなり萬葉第六の長歌にもい
こま山とふひかくれに萩か枝をしからみちらし棹
鹿は妻よひとよめ云々とよめり拾遺集に　みつね
　さをしかのしからみふする秋萩は
　　下葉やうへになりかへるらん
貫之集 さを鹿のつまにしからむ秋萩に
　　おける白露我もけぬへし
みつね集 天川ふねさしわたすさを鹿の
　　しからみふする秋萩の花
六帖 秋はきをしからみかけて鳴鹿の
　　聲きゝつゝや山田もるらん
同 秋萩の花のなかるゝ川瀬には
　　しからみかへる鹿の音もせぬ
めにはみえすてはめにはみえすしてなり鹿は人を
おそれてふかくかくるゝ故なりおとのさやけさは
聲のさやけさなり萬葉に鶯のねを鶯のおとゝよめ
りいつとなく聲は有情非情にわたれともおとゝは
非情にかきるやうになれり日本紀の仁徳紀に難波
の宮にして鹿のねをきこしめしけるかさやかなり
けるよし載られたる所に寥亮をさやかとよめり此
歌もふかき姿なり
これさたのみこの家の歌合によめる
　　藤原としゆきの朝臣

秋萩の花さきにけり高砂のをのへの鹿はいまやなくらん

菅萬には下句をのへに今や鹿のなくらんと有顯注に萩を鹿鳴草といひてしか鳴て花さくといへはかくよめるなり今いはく此高砂名所にあらす山の事なりこゝの萩をみて山には今や鹿の鳴らんと思ひやる心なりこれより下七首は萩の歌なり

拾遺
秋風のうちふくことに高砂の　尾上の鹿のなかぬ日そなき

みつね集
わか宿の秋はきの花咲時そ　尾上の鹿も聲たてゝなけ

平兼盛
月影に鹿の音きこゆ高砂の　尾上の萩の花やちるらん

此兼盛歌は今の歌を引かへてよめる歟蜻蛉日記に法興院攝政のうた

鹿の音も聞えぬ里に住なから　あやしくあはぬめをもみる哉

返し
高砂の尾上わたりにすまふとも　しかさめぬへきめとはきかぬを

むかしあひしりて侍ける人の秋の野にてあひて物かたりしけるついてによめる　みつね

秋萩のふるえに咲る花みれはもとのこゝろはわすれさりけり

六帖には落句かはらさりけりと有よろつの草は冬皆霜かるゝを萩はふる枝のかれやらすして春更にもえ出て秋に至りて花さくもあれはそれをふるえに咲る花とはいへり萬葉第八に　山邊赤人

くたら野の萩のふる枝に春待て　すみし鶯鳴にけんかも

ふるえの萩の秋をわすれすして更に花さけるによせて我もむかしの心はわすれすといへり顯注に萩と榛とをひとつにいへり萬葉に草のはきをは芽とも子ともかけり和名集を考ふるに芽は茅の字茅は萱の俗字なり芽と茅と似たるによりて皆あやまれり木のはきに榛の字をかけり榛ははりなるをはきといふははりの木といふへきをりもしを略する心なり俗にははんの木といふ日本紀に秦摺衣なと有萬葉に衣を染るとよめる事おほし今も田舍なとに萩を植おきて染具とするなり萩もまた萩か花すり

といふ事有故に顯昭にあやまられたり萩は全く芽子にあらすよく萬葉を見てわきまふへし

題しらす　　　　よみ人しらす

秋萩の下葉色つく今よりやひとり有人のいねかてにする

萩の下葉は先色つけはかくよめり下葉色つくといふを句としてもよみ又今よりやとつゝけても讀へき歟いねかては難寢にてねいりかたきなり

後撰集に

白露のうへはつれなくおきゐつゝ　萩の下葉の色をこそみれ

ひとりある人はやむをなり女の獨あるをやもめといふを男女通してやもめともいふなり　釋名云無妻曰鰥言鰥々然不寢如魚目恒不閉者さらぬたにかく物おもひてぬる夜なきを萩の下葉色つく比はいとゝ夜寒なれは旨のあひかたきなり六帖

秋萩の下葉はよそにみしかとも　獨ねんとは思はさりしを

秋風に萩の下葉のうつろへは　獨ぬる身そ戀まさりける

秋の野にねてのみあかす白露は　獨有人のなれるなるへし

鳴わたる鴈の涙やおちつらん物思ふやとの萩の上のつゆ

下に忠岑の歌に露をは露と置なからとよめるは此歌の心なり後撰に

秋風にさそはれわたるかりかねは　物思ふ人のやとをよかなん

夫木十三惟貞親王家歌合うた　　友則

かりの鳴くうはの空なる涙こそ　秋の袂の露そをくらん

萩の露玉にぬかんととれはけぬよしみん人は枝なからみよ

ある人の曰く此歌はならのみかとの御歌也と六帖には下句見む人は猶よそなからみよと有萬葉に

梅の花ふりおほふ雪をつゝみもて　君にみせんととれはきえつゝ

ゆふけとふわか衣手に置露を　君にみせんととれは消つゝ

新千載躬恒

よひ／＼に秋の草葉に置露を

玉にぬかんととれはきえつゝ

家持集
折てみは落そしぬへき秋萩の枝もたわゝにおけるしら露

これはさきの歌に贈答の體に載せたりたわゝをとををともあり同し事なり後撰に

秋萩の枝もとをゝになりゆくは
白露をもくおけはなりけり

家持集　猿丸集
萩か花ちるらん小野の露霜にぬれてをゆかんさよはふくとも

露霜は露と霜とふたつをもいへと是は秋のすゑやうゝ寒くなる比ちかく霜ともなりぬへきほとの露をいへは霜を濁るへし其證は萬葉第七に詠露

ぬは玉のわか黒髪にふりなつむ
あまの露霜とれはきえつゝ

第十におなし題

秋萩の枝もとをゝに露霜を
寒くも時はなりにけるかも

右二首露の題にて露霜とよめるにて知へし此外露霜寒みなとつゝけてよめるは是に同し和名集に三禮圖を引て八月節を白露といひ九月節を寒露といへる心同しぬれてをのをもしは助語なり猿丸か集にぬれてもと有ぬれてもゆかんといふ心は萩か花のちりはてぬまをよるもみんとなり此歌古歌の體也

萬十
秋萩の咲ちる野への夕露に
ぬれつゝきませ夜は更ぬとも

是貞のみこの家の歌合によめる　文屋あさやす
秋の野におく白露は玉なれやつらぬきかくる蜘のいとすち

菅萬にも六帖にも第二の句こりたる露はと有つらぬきかくるを六帖にはつらぬきとむるとせり下の物名に友則かをみなへしをよめる二首の中の初の歌もこれに似たり又後撰集に延喜御時歌めしけれはとておなし朝康

白露に風のふきしく秋の野は
つらぬきとめぬ玉そ散ける

後拾遺集藤原長能
さゝかにのすかくあさちの末ごとに
亂れてぬけるしら露の玉

此一首は露の歌なり草花をみなつゝけすして此歌をこゝへ入たるは萩に露はことに縁ある故なるへ

し

題しらす　　僧正遍昭

名にめてゝをれるはかりそをみなへしわれ落にきと人にかたるな

此歌は此集の序の注にさかのにて馬よりおちてよめると有にてよく心得られたり遍昭集にもさう〳〵しう侍りしかは馬にのりて物にまかりし道にをみなへしのみえ侍りしをよひて折しほとにむまよりおちてふしなからと有われおちにきとゝは女郎花を女になして馬よりおつるに女におつるを兼たりすこし俳諧なり後拾遺俳諧歌に法師の扇を落し侍りけるをかへすとて和泉式部

はかなくも忘られにける扇哉　おちたりけりと人もこそみれ

五雜組云宋石曼卿善レ謔嘗出御者失レ控馬驚曼卿墮二地從吏遽扶掖升レ鞍曼卿曰賴我是石學士若是瓦學士豈不二跌碎一乎　此僧正より後の人なれと氣象は相似たるへしをみなへしは萬葉集にも一所女郎花とかき又美姿ともかけり文集に題二木蘭花一詩云膩如二玉指一塗二朱粉一光似二金刀一剪二紫霞一從レ此時々春夢裡應レ添二一樹女郎花一これは女郎花といひたれと木蘭花のうるはしきをいひて別の事なり是より下十三首は女郎花の歌なり

僧正遍昭かもとへならへまかりける時にをとこ山にてをみなへしをみてよめる

　　ふるのいまみち

遍昭いそのかみ寺にすみて後に素性にゆつらる石上寺を夏部にならのいそのかみてらといひたれはかの寺にすまれける時なるへし布留もおなし處なり布留氏なれは故鄕なるへし春部に遍昭西大寺のほとりの柳をよまれたる歌もあれは石上寺ならすとも奈良にもすまれけるなるへし

三代實錄第四十七云仁和元年二月廿日散位從五位下布留宿禰今道爲二造酒正一

女郎花うしとみつゝそ行過る男山にしたてりとおもへは

うしとみつゝそ行過るとはをみなへしを女になしてひとりあらはわか妻ともせんをとこあれはかひなしとみてすくるをいふ也たてりとおもへはとは上の春部にそこにたてりける梅の花といへるたて

るにおなし或抄云此こと書に遍昭かもとにとかけるにかくよめる心はかく世をいとふ人も侍るに女郎花の此男山にたてるをうしとみつゝ過るの心なりといへり

是貞のみこの家の歌合の歌　　　としゆきの朝臣

秋の野にやとりはすへし女郎花なをむつましき旅ならなくに

旅にはあらねとも女郎花の名をむつましみ秋の野に一夜のやとりはすへしとなり

題しらす　　　　そのゝよしき美材

伊與介忠範男大内記高名能書也本朝文粹第一菅贈大相國傷二野大夫一詩云我今遠傷二野大夫一不レ親不レ疎不二門徒一聞昔老農歎二農廢一詩人亦歎二道荒蕪一沈思雖レ非レ入二神妙一如二大夫一者二三無二紀相公一應レ頌二劇務一自餘時輩惣鴻儒況復眞行草書勢絶而不レ繼痛哉乎同第八紀納言延喜以後詩序云至二昌泰末一菅丞相得レ罪左遷知レ文之士當時無二遺適一有二内史野大夫一雖レ云二託レ興不一レ幽然而早成稍過予深喜レ之延化二異物一丞相在二遷所一遙哭二内史一兼歎二文章已絶一延喜二年忽其一句云紀相公獨頌二劇務一自餘時輩盡鴻儒云々同卷七夕代二牛女一惜曉更應レ製序云二星適遇未レ叙二別緒依々之恨一五夜將レ明頻驚二涼風颯々聲一これ美材か秀句なり

女郎花おほかる野へにやとりせはあやなくあたの名をや立なん

菅萬には胸句にほへる野へと有朗詠集には落句名をたゝましと有右の歌に贈答のやうに次第せりあやなくとはをみなへしといふ名のみなれはなり

六帖をみなへし匂ひを袖にうつしては
　あやなくわれを人やとかめん

朱雀院のをみなへしあはせによみて奉りける
　左のおほいまうちきみ

朱雀院は寛平法皇なり左のおほいまうちきみは本院贈太政大臣時平なり

女郎花秋の野風に打なひき心ひとつをたれによすらん

女郎花の風に打なひくは二つなき心をたか方によすらんとなり

藤原定方朝臣三條右大臣

秋ならてあふことかたき女郎花天の川原におひぬ物

ゆゑ
發句は秋ならてはと文字をそへて心得へし秋咲て
をみなへしといへる花なれはたなはたつめによそ
ふるなり
躬恒後撰
たなはたに似たる物かな女郎花　秋より外にあふ時もなし
つらゆき
たか秋にあらぬ物ゆゑ女郎花なそ色に出てまたきう
つろふ
六帖には胸句あらぬ物からとあり見る人の心の秋
にはあらすわか秋なる物ゆゑになと心あさく色に
出て女郎花のかたよりはうつろひそむるそと戀に
よせてよめり
みつね
妻こふる鹿そ鳴なる女郎花おのかすむ野の花としら
すや
家集には落句花にはあらすやと有妻こひに鹿の鳴
はをみなへしをおのかあひすむ野への花妻としら
ぬにやとなり萩をこそ鹿の花妻といへと是はをみ
なへしの名によりてよめり

をみなへし吹過てくる秋風はめには見えねと香こそ
しるけれ
二三句菅萬にはゆき過てくる秋風のと有六帖には
第四句めにはみえすてと有香こそしるけれとは是
もをみなへしの香を女のたき物の追風によせてよ
めり又菅萬に
秋風に吹過てくるをみなへし　めにはみえねと風のしきれる
と云歌あり
たゝみね
人のみることやくるしき女郎花秋霧にのみ立かくる
らん
六帖には秋霧にのみを霧のまかきにとよめり菅萬
には
君にみえむことやゆかしき女郎花　霧の籬に立かくるらん
同し歌歟女は人のみることをはつるものなれはよ
そへてかくよめり又菅萬に
さやかにもけさはみえすやをみなへし　霧の籬に立かくれつゝ

ひとりのみなかむるよりは女郎花わかすむ宿にうゑてみましを

獨のみなかむるとは女郎花の野へに物思ひたるさまにてたてるを例の女によそへて人めなき野にひとりなかめてあらんよりはあれたるわかやとなからうつしうゑてあひすまゝし物をとなり奥義抄云是はたゝひとりわかなかめゐたるよりもをみなへしをそやとにうゑてみるへかりけるとよめりと有是は我住宿にといへるによくかなはす獨のみなかむるよりはといふか我上の事ならはをみなへしのある野にゆきてすまんとかねんとかいふへしよく吟味すへし元眞集に

我宿にうゑてたにみん女郎花
ひとはしたなる秋の野よりは

物へまかりけるに人の家に女郎花うゑたりけるをみてよめる　　　　兼　覽　王

三代實錄第四十九云仁和二年正月七日授二无位是行王兼覽王幷從四位下一拾芥抄云仁明天皇孫國康親王男宮內卿正四位下或云惟高親王男

女郎花うしろめたくもみゆる哉あれたる宿にひとりたてれは

うしろめたきは心もとなき心なり女はいかにもおやはらからなとのまもりてこそことなくはおひたつなれあれたる宿に獨たてれはいかならんと心もとなうみゆるとなり

寛平御時藏人所のをのこともさか野に花みんとてまかりたりける時かへるとて皆歌よみけるついてによめる　　　　平さたふむ

刑部卿茂世王子左中將好風弟左馬介左兵衛佐從五位下

花にあかて何かへるらん女郎花おほかる野へにねなましものを

ことかきによりてみるに君につかふる身なれは心にまかせぬなけきこもれりさきのよしきか歌はあやなくあたの名をや立なんと遠慮せるを貞文はきはめて好色の人なれはかへりてをみなへしおほかる野にねなましものをといへり

是貞のみこの家の歌合によめる

としゆきの朝臣
何人かきてぬきかけし藤袴くる秋ことに野へを匂はす

菅蒭には第四句秋くることにと有うつりかとてもしはしこそ殘らめいかなる人のぬきかけつるそとなり是より三首は蘭をよめり

ふちはかまを讀て人につかはしける　つらゆき
宿りせし人のかたみか蘭忘られかたき香に匂ひつゝ

五文字は我人のかたにゆきてとも人のわか方にきてとも聞ゆるを下の句の心に我宿にさけるふちはかまをよみたれはこなたにきてやとりせし人なりさること有けんをことかきは歌にゆつれるにや

ふちはかまをよめる　そせい
ぬししらぬかこそにほへれ秋の野に
たかぬきかけし藤はかまそも

朗詠には胸句香はにほひつゝと有

題しらす　平貞文
今よりはうゑてたにみし花すゝきほに出る秋はわひしかりけり

秋は四時の中に心をいたましむる時なるにすゝきのほに出たるに秋のけしきあらはれてなん物悲しきに今よりはうゑてみしとよめるなり秋のけしきの現形するを薄の穗に出るによそへたり顯註にうゑてたにみしといふ詞を心えすと申人ありたにといふ詞はふるくみなよめり後撰に

わすれ草名をもゆゝしきかりにても
おふてふ宿に行てたにみし

返し
うきことのしけき宿には忘れ草
うゑてたにみし秋そゆゝしき

此集に
吹風を鳴て恨よ鶯は
われやは花に手たにふれたる

行てたにみしは行てみしなりうゑてたにみしはうゑてみし也手たにふれたるは手ふれたるなり然は今の歌も今よりはうゑてみしとよめるなり密勘云たにといふ詞勿論事歟今いはくかくあれともこれはいまたことわり盡す侍る也およそ常にたにといふ詞はさへといふにかよひ又それをなりともといふ心をそれたにといへるやうの事おほし今此うゑ

てたにみしといふは俗語ならはうゑてはしみしと
いふにかよひてきこゆひかれたる歌も初の二首は
今の歌とおなし後の手たには手はしもといふにも
手をなりともといふにもかよひてきこゆ此歌九品
下中に出していはくことの心無下にしらぬにもあ
らす　次の二首はすゝきの歌なり

寛平の御時きさいの宮の歌合のうた

在原むねやな

秋の野の草のたもとか花すゝきほに出てまねく袖と
みゆらん

花薄は秋の野におほかる草のたもとにてあるか中
にもほに出てみにこよと人をまねく袖とみゆらん
となり　後鳥羽院の御時袖とたもとゝ一首によむ
へきかと定家卿に勅問有けるにたちまちに此歌を
引てくるしかるましきよし勅答申されけりといへ
り高名の事也それにつきて見及ふ中に袖と袂と一
首に讀合せたる歌を見出たるは萬葉第十五に

わか袖はたもとゝほりてぬれぬとも
戀はすれ貝とらすはやまし

拾遺集平兼盛

時雨ゆゑかつく袂をよそ人は
紅葉をはらふ袖かとやみん

和名集云釋名云袖（音岫和名曽天下二字同）所以受手也袂（音幣）開張
以レ臂屈伸也袪（音居）其中虚也　俗には袖をそてとよみ
袂をたもとゝよみて袖は惣にして別していへは手
をとほすほとをいへりたもとは袖の下のかたの別
名とせり釋名の袂の字の註にもすこし其心あり萬
葉の歌も俗説におなしそてとは衣の字をそとよめ
は衣かための手といふ心なれは衣手といふに同し
よりて萬葉には袖の字をころもてともよめりたも
とは手本なり手かためにも袖か為にも下はもとな
る故の名なり木の本のことしそてとたもとゝおな
し中にこまかにいへは別なきにあらす

六帖

つらきをもいはての杜の下に生る
草のたもとそ露けかりける

素性法師

我のみや哀とおもはんきり〳〵す鳴夕かけの山とな
てしこ

顯註に第二句を哀とおもふ第四句をなく夕くれの
と有管萬今と同しわれのみやあはれと思はんとは

誰かは哀と思はさらんとなりあはれは憐也萬葉に
　かけ草のおひたるやとの夕かけに
　　鳴きり〳〵すきけとあかぬかも
又友もなき宿にて我のみやあはれとおもはむと惜
む心も有へし　菅家萬葉集に
　秋の野のちくさのにほひ我のみは
　　みれとかひなし獨と思へは
家經朝臣和歌序云鍾愛抽ニ衆草一故曰撫子艶狀共
千年故曰ニ常夏一からなてしこはいろ〳〵にてませ
ゆひて前栽にうゝるをいふ是は夏咲はてゝ秋はさ
かす大和なてしこは皆紅梅色にて野にさくを云是
は夏秋かけて咲なり此一首はなてしこの歌なり
題しらす　　　　よみ人しらす
みとりなるひとつ草とそ春はみし秋は色々の花にそ
有ける
　上は別義なし下にはたとふる心あるへし
小町集
百草の花のひもとく秋の野に思ひたはれん人なとか
めそ
　百草とはあまたの草なり花のひもとくは花のひら
くるを人の紐とくによせてよめり花の下紐ともよ
めり思ひたはれんとは思ひたはふれんといふなり
人なとかめそとは人なあやしめそとなり行平のお
きなさひ人なとかめそとよまれたるに同し此一首
は名をさゝぬ草花の歌なり
月草に衣はすらん朝露にぬれての後はうつろひぬと
も
　此歌は萬葉第七に有て譬喩の歌也心今とかはれり
誤て此集に入られたり　拾遺雜歌にも人丸の歌と
ていれり六帖ならひに顯註にはぬれての色はと有
密勘には但此歌はぬれての後はと申す古今諸本萬
葉是同不可付此一本と有つき草は鴨頭草とかく歌
にはつきくさとよみ俗には露草といふものなり歌
にもまれに露草ともよめりうつりやすきはなゝり
　此一首鴨頭草をよめり
仁和のみかとみこにおはしましける時ふるの瀧御覽
せんとておはしましけるみちに遍昭かはゝの家にや
とりたまへりける時に庭を秋の野につくりておほん
物かたりのついてによみて奉りける　僧正遍昭
　清少納言にふるの瀧は法皇の御覽しにおはしまし
けんこそめてたけれとかけるは宇多法皇とおもひ

あやまれる歟法皇は吉野瀧布引瀧御覽しにおはしましたる事はあれとふるの瀧を御覽したる事は物にみえぬにや庭を秋の野に作りてとはみこをもてなし奉らんために時にあたりて作るなりもとより秋の野につくれる庭ならは秋の野に作れる庭につけてなと有へし源氏乙女にも中宮の御まちをはもとの山にもみちの色こかるへきうゑ木ともをうゑいつみの水とほくすましやり水の音さへまさるへきいはをたてくはへ瀧おとして秋の野をはるかに作りたるその比にあひてさかりに咲みたれたりとかけり

里はあれて人はふりにし宿なれや庭も籬も秋の野らなる

宿なれやはやとにあれやにて宿にてあれはにやといふ心なり父安世卿の故郷なれは里はあれてといひのこりすむ人は遍昭の母なれは人はふりにし宿と謙退していへりまかきは前垣を略せる詞なりすなはち萬葉第四には前垣とかけりひゝきをいふのらは只野なり　和名集には曠野をあらのらとよめり顯註に萬葉にはのらをは草ともかけりといはれたれと暗記のあやまりなりまたくさることなしあやまりをうくる人有故に今正しおくなり

# 古今和歌餘材抄巻六　六十五首

## 秋歌下

是貞のみこの家の歌合の歌　　文屋やすひて

是に三の不審有此歌并に次の歌共に菅萬に載させ給へり彼序をみるに寛平御時后宮の歌合の歌の中に御心にかなへるを集させたまへりとみゆ舉宮而方有レ事レ合レ歌云々此詞是也然るに此集後撰等に彼集の中の歌を是貞親王家歌合の歌とて入たる事有親王とても今のことく家とこそいふへけれ舉宮といへる詞別家を兼へしと聞えす是は今の歌に限らす何の集にもあれ菅萬に入たる歌を是貞親王家歌合歌といふに皆由れる疑なり是一春上に二條后また東宮のみやす所と申ける時奉りける歌にかしらの雪とよめりいつれの年とはしらされと貞觀十一年以後元慶元年以前の事也然るに菅萬の序を見るに近習の侍臣後進の詞人に歌を奉らせ給ひたりと見ゆれは康秀たとひ此歌合の時まて存命なりともみつはさすほとなるへければ人數に預るへからす是二六帖に此歌をは康秀か歌としたれとも次の歌をは朝康か歌とせりしかれは朝康か歌なるにひかれて此歌も朝康を誤て康秀とかける歟是三

吹からに秋の草木のしをるれはむへ山風をあらしといふらん

菅萬には吹からにを打吹丹(ウチフクニ)あらしといふらんをあらしなるらんと載させたまへり第二の句を此序には野への草木のといひ六帖にはなへて草木のとあり吹からには吹よりといふにおなし草木のしをるゝとは木葉はおちゝり草は色かはりおれふすさまをいふむへは諾の字宜の字をかけりまことにさりけりといふ心也あらき物の過る跡は物のやふれそこなはるゝならひなるに今山風の吹たる野をみれは草木こと〳〵くしをるれはあらしとはむべもいひたりといふ心也萬葉集に荒風飄また冬風と書てもあらしとよめり冬の風は烈しくあらきか故也和名集に孫愐云嵐山下出風也和名阿良之萬葉に下風とかきてあらしともおろしともよめるは孫愐か注にかなへり康秀が此歌につきて嵐をは先秋に用る也堀河院次郎百首にも秋の題に出せり或説に嵐をは海にはよますといへと萬葉に

大海にあらしなふきそしなかとり
　　ゐなのみなとに舟はつるまて
又新古今に賀茂の社午日うたひたる歌
やまとかも海にあらしの西ふかは
　　いつれの浦にみ舟とゝめん
又うつほ物語吹上の卷に
さもこそは嵐の風は吹たゝめ
　　つらきなこりにかゝる舟かな
玉篇には大風と注したれとあなかちいつれの時い
つれの所にはふかすともいふへからす又山風をあ
らしといへるに嵐の字を思ひてよめる歟友則歌に
雪ふれは木ことに花そ咲にけり
　　いつれを梅とわきてをらまし
これも梅の字に心をつけたるになすらふへし詩に
宜下將二愁字一作中秋心上と作たれはしからし共いふ
へからすおほよそ歌によみにくき物をはかくし題
によみ物によそへてやさしくよみなす事常の習也
しをるれは萬葉に梅の花雪にしをれてといふに之テレ
手禮氏とかき菅萬には芝折とかゝせたまへり袖を
しほるといふは絞の字にて別義なれは假名もこと
なり此一首は野分の心也

六帖朝康
草も木も色かはれともわたつみの波の花にそ秋なか
りける
菅萬には第二三句うつろひぬれとおほうみのと有
わたつみは海神をもいへと今は海の惣名なりつは
例のやすめ詞也或説に白波の立よるは綿をつみた
るに似たるによりてといふといへるは尤俗説也耳
にも聞入へからす秋の千草萬木は色のかはれとも
大海の浪の花はいつといふ事のなく不變に見ゆる
と也草木といふに對して浪の花にそとはいへり右
の歌にみつから問答して心をたつる心有此歌紅葉
にうつらむとする下地なり

貫之集
紅葉はのかけを移して行水は
　　波の花さへうつろひにけり
秋の歌合しける時によめる　　紀よしもち
もみちせぬときはの山は吹風の音にや秋をきゝわた
るらん
此歌拾遺集秋部に題しらすとて大中臣能宣歌とし
て次に
もみちせぬときはの山にすむ鹿は

おのれ鳴てや秋をしるらん

といふ歌をつらねたる下賀部に

秋くれと色もかはらぬときは山

よその紅葉を風そかしける

貫之集
なへてしも色かはらねはときはなる

山には秋もしられさりけり

これより十七首は紅葉の歌也

題しらず　　よみ人しらず

霧たちて鴈そ鳴なるかた岡の朝の原はもみちしぬらん

かた岡は大和國葛下郡にあり

神無月時雨もいまたふらなくにかねてうつろふ神なひの杜

神無月はしくれといはん料也神無月のと意得へし當時の事にはあらすかみなひのもり次の神なひ山ともに大和國高市郡に有下の離別部にあるとはこと也大穴持命の御子賀夜那流美命なり

家持集
わか門のわさ田もいまたかりあけねは（へぬにイ）

かねてうつろふ神なひの杜

ちはやふる神なひ山のもみちはに思ひはかけしうつろふものを

上の歌をうけて餘意を盡す心あり思ひはかけしとはふかく愛する心をかけしとなり下心は戀にもわたりよろつのことにもわたるへし或抄におもひはかけしを思ひの色はあかきをそふましきと也と有は用へからす

貞觀の御時綾綺殿のまへに梅の木ありけり西のかたにさけりける枝のもみちはしめたりけるをうへにさふらふをのこともものよみけるついてによめる

藤原かちおむ（阿波介發生男）

菅家萬葉集下に
もみちはゝたか手向とか秋の野に

ぬさと散つゝ吹みたるらん

此歌に付て作らせ給へる詩の第一句云乘節黄葉西初秋

綾綺殿は宜陽殿北麗景殿の南也三代實錄を見るに清和天皇の御代ことに綾綺殿にましくけるよしあまた見えたり中にも貞觀十七年四月十五日丁卯天皇遷自弘徽殿御綾綺殿と三代實錄にみえたれは其秋なとの歌にや續日本紀第十三云天平十年秋七月癸酉天皇御二大藏省一覽二相撲一晚以御二西池宮一因

指二殿前梅樹一勅二右衛士督下道朝臣眞備及諸才子一曰人皆有レ志所レ好不レ同朕去春欲レ翫二此樹一而未レ及二賞翫一花葉遽落意甚惜焉宜下各賦二春意一詠中此梅樹上文人三十八奉レ詔賦レ之因賜二五位以上絁三十疋六位已下各六疋一此詞書に似たる所ある故になつかしければ引之

おなしえをわきて木の葉のうつろふはにしこそ秋のはしめなりけれ

此うつろふとは紅葉するをいふ四季を四方に配する時西を秋のかたとすればけにも西こそ秋のはしめてくるかたなれとことわりをおもひとくなり

大和物語　おなしえをわきて霜をく秋なれは
　　ひかりもつらくおもほゆる哉

元輔家集に西の京にすみ侍りし人のとはぬ心はへの歌よみて侍し返事に

　草わかみ結ひし萩はほに出す
　　西なる人や秋をまつしる

いし山にまうでけるときおとは山の紅葉をみてよめる　　つらゆき

石山は良辨僧正草創せらる

秋風の吹きにし日より音羽山みねの梢も色つきにけり

秋風の吹そむるより音するといふ心につゝけたり

後撰　松虫のはつ聲さそふ秋風は
　　音羽山より吹そめにけり

是貞のみこの家の歌合によめる
　　としゆきの朝臣

白露の色はひとつをいかにして秋の木の葉をちゝに染らん

萬葉六帖には第四句秋の山へをとあり

類聚集　白露はわきてをかしを秋の山
　　やまのもみちの薄くこからん

後撰　おくからにちくさの色になる物を
　　白露とのみ人のいるらん

壬生忠岑

秋の夜の露をはつゆと置なから鴈の泪や野へをそむらん

家集には腰句おもひおきてと有朝ことにみるに露は只白くて有に草はのもみちゆくは鳴わたる鴈の

泪や落て別に野をそむらんとなり

後撰
鳴わたる鴈の泪や落つらん　物思ふやとの萩の上の露

伊勢集
置露に何あかすとか秋の夜の　泪をさへはかりてそむらん

題しらす　　よみ人しらす

秋の露いろ〳〵ことにおけはこそ山の木のはのちくさなるらめ

菅萬には第二句色こと〳〵に第四句山の紅葉もとあり六帖は今と一同也ことには異に也

もる山のほとりにてよめる　　つらゆき

もる山は近江也世にもり山といへり家集にちくふ島にまうつるにもる山といふ所にてと有もり山は美濃路へかゝる道にて竹生島の道にあらすもしは同名異所の近江にあるにや後撰秋下にもおなし人

もる山をこゆるとて

足引の山のやま守もる山も　紅葉せさする秋は來にけり

又六帖に貫之歌に

もる山の峯のもみちも散にけり　はかなき色のおしくも有哉

此歌玉葉雑三にのすることかきにもみちはをといふ五文字を句のかしらに置てよめると有れは是ももる山にてよまれたる歟

しら露も時雨もいたくもる山は下葉残らすいろ付にけり

貫之集には落句もみちしにけりと有六帖にもしかありて忠岑の歌とせり如何

秋の歌とて讀る　　ありはらのもとかた

雨ふれと露ももらしを笠取の山はいかてか紅葉そめけん

かさとり山は醍醐の邊也下に雨ふれは笠取山といへるやうに取きる心なり俗には卸寺を取といふたかへること也ともに名所をよみて露もゝらしをとよめるをもて右の歌につけり

神のやしろのあたりをまかりける時にいかきの内のもみちをみてよめる　　つらゆき

瑞籬を和名にみつかきともいかきともよめり

ちはやふる神のいかきにはふ葛も秋にはあへすうつろひにけり

秋にはあへすとは秋には不堪といふ也えこらへぬ也下の歌にも秋風にあへすちりぬる紅葉ともよめり神のいかきにかゝるとならはときはに久しかるへきに秋はよろつの草木もみちする時なれはたへかねておなしうもみちする心也神のいかきにはふ葛もといへる所に世の敎となる事多したとへば佛に三不能ある如く神を信し敬ふ人を神のえたすけ給はぬとありさる時に至りて信を捨てかへりて輕忽し奉る事有は大に迷へり秋にはあへすと吟せはうこく心やみてん清少納言に平野はいたつらなる屋のありしを何する所そととひしかはみこしやとりといひしもめてたしいかきにつたなとのおほくかゝりてもみちのいろ〳〵ありし秋にはあへすとつらゆきか歌おもひ出られてつく〳〵とひさしうたゝれたりしか夫木抄第十四に昌泰四年八月歌合よみ人しらす

いそのかみふるの社にはふくすも
秋にしあれは色かはりけり

たゝみね

是貞のみこの家の歌合によめる

雨ふれはかさとり山のもみちはゝ行かふ人の袖さへそてる

菅萬には腰句秋の色はとあり雨ふれはゝ枕詞也笠を取きるといふ心につゝけたり上の笠取山と一所におかすして中に神のいかきを隔たるは或抄に上の二首は心をあつかひ是は只景氣をさきとする故といへり

寛平御時きさいの宮の歌合の歌　讀人しらす

ちらねともかねてそをしきもみちはゝ今はかきりの色とみつれは

今はかきりの色とは千しほをつくすなり

やまとのくにゝまかりける時さほ山に霧のたてりけるをみてよめる　きのとものり

たか為の錦なれはか秋霧のさほの山へを立隱すらん

朗詠には腰句かはきりのと載らる錦なれはかはにしきにあれはにかといふ詞なり霧のたつに錦を裁を兼たり

是貞のみこの家の歌合の歌　よみ人しらす

秋霧は今朝はなたちそさほ山のはゝその紅葉よそにてもみん

けさはなたちそを六帖にはたゝすもあらなんと有

腰句菅萬にはたつた山なり

秋の歌とてよめる　　坂上是則拾芥抄云大内記五位至延長

さほ山のはゝその色はうすけれと秋は深くもなりにけるかな

秋はふかくもとはうすけれとに對して淺深の心によめり時節のうつれるををしむ歌也

人のさんさいに菊にむすひつけてうゑける歌　　在原なりひらの朝臣

大和物語には在中將にきさいの宮より菊めしけれはたてまつりけるついてにとて今の歌ありてとかいつけて奉りけるとあり朗詠菅三品の詩に多見ニ栽花悅レ目儔一先レ時豫養待レ開遊自ニ吾閑寂一家僮倦ニ春樹春栽秋草秋　此詩のことくならは時に先たちてこそうゝへけれと花のさける時に心にかなへる花を見てうつす時によみてつけたるなるへしうゑしうゑは秋なき時やさかさらん花こそちらめねさへかれめや

下卷旋頭歌に花まひなしとよめる歌の密勘にうゑしうゑはをもうゑしへはとかく本有といへり業平家集にはうつしうゑはと有書あやまれるにやうゑしのしもしは助語なからうゑたにうゑはといふ心有て常のやすめ字には少たかひてなくては何をなしかたし秋なき時やさかさらんとは心は秋なき時あるましけれはさかぬ年あるましとなり花こそちらめねさへかれめやとは今さきて有花こそはちりもせめ枝の霜かれすることくねさへかれんや根はかるましけれは年をへてこそみめといはひてよめる也花こそちらめといふにつけて菊はしほみてちらぬ物なるを散とよめるは大かたの花のちるになすらへしほむをちるとはいふと釋するはあまりのことにや菊はおほやうしほみつく物なれとまたちりもする常の事也離騷に朝飮木蘭之墜露兮夕餐秋菊之落英又日本後紀に桓武天皇の御製に

此頃のしくれの雨に菊の花　散そしぬへきあたらその香を

とあれは論すへからすこれより十三首は菊の歌也

寛平御時菊の花をよませ給ふける　　としゆきの朝臣

久かたの雲の上にて見る菊はあまつほしとぞあやまたれける

此歌はまた殿上ゆるされさりける時にめしあけられつかうまつるとなん　天子のましますす所なれは殿上を空になすらへて雲の上とはいふ也菊はさらても星にゝたるを所にあひ折にあひてよまれたり
菅萬 大空をとりかへすともきかなくに
　星かとみゆる秋の菊かな
六帖兼輔 けふ引て雲ゐにうつす菊の花
　あまつ星とやあすよりはみん
是さたのみこの家の歌合の歌　きのとものり
露なから折てかさゝむ菊の花老せぬ秋の久しかるへき
露なからといへるは菊水の心也荊州記曰酈縣北八里有菊水其源旁悉芳菊水極甘馨又中有三十家不復穿井即飲此水上壽百二十三十中壽百餘七十者猶以爲夭
寛平御時きさいの宮の歌合の歌　大江千里
うゑし時花まちとほに有し菊うつろふ秋にあはんとやみし
菅萬には下句うつろふ秋はあはれとそみると有

後撰兼輔 やとちかくうつしてうゑしかひもなく
　待遠にのみ匂ふ花かな
同し御時せられける菊合にすはまをつくりて菊の花うゑたりけるにくはへたりける歌ふきあけの濱のかたに菊うゑたりけるをよめる
くはへたりける歌といふまではこれより以下四首の惣ての詞書なりすはまをつくりてとは州濱の形を作りてそれに菊をうゑてそのすはまのやうに應して歌よむ也吹上濱は紀伊國也
六帖 ・きの國の吹上の濱も有物を
　しつみ果ぬと何なけくらん
　すかはらの朝臣
北野の御事也　續日本紀三十六云天應元年六月戊子朔壬子遠江介從五位下土師宿禰古人散位外從五位下土師宿禰道長等一十五人言土師之先出レ自二天穗日命一其十四世孫名曰二野見宿禰一云々望請因二居地名一改二土師一以爲二菅原姓一勅依レ請許レ之三十八云延暦四年十二月甲申故遠江介從五位下菅原宿禰古人男四人給二衣粮一令レ勤二學業一以二其父侍讀之勞一也四十云九年十二月壬辰朔辛酉勅二外從五位下菅

原宿禰道長秋篠宿禰安人等ニ並賜ニ姓朝臣ニ又正六位上土師宿禰諸士等賜ニ姓大枝朝臣ニ其土師氏總有ニ四腹ニ中宮母家者是毛受腹也故毛受腹者賜ニ大枝朝臣ニ自餘三腹者或從ニ秋篠朝臣ニ或屬ニ菅原朝臣ニ矣天穂日命は三輪明神の御子也儒家となれるは古人より也宇庭古人清公是善道眞（右大臣右大將從二位贈太政大臣聖廟）今氏と姓とのみかけるは太宰帥にくたりまいらせて配流の御身ゆゑなるへしさらすは官位を有のまゝに載奉らるへき也御諱をかゝれさるは初の官爵をたふとふ心歟或注云諱は深秘也雖累千金輙不可説輿也これはおろかなる事也其子孫なる人はたふとひていはす世にも此御事とて申さねはこそあれ何の深秘といふ事歟有へき三代實錄の序より初て所々に有を見さりけるなるへし

秋風の吹上にたてるしら菊は花かあらぬか浪のよするか

秋風は吹上といはんための枕詞にて浪のよするかの句是をうけたり花か花にてあらぬか浪のよするかとうたかひ給へるは見る所を賞してほめたまふ心なり下句にみつのかもし有此躰なるは伊勢物語に

君やこし我やゆきけんおもほえす　夢かうつゝかねてかさめてか

はるゝ夜の星か河邊の螢かも　わかすむかたのあまのたく火か

仙宮に菊をわけて人のいたれるかたをよめる　素性法師

ぬれてほす山路の菊の露のまにいつか千年を我はへにけん

六帖には第四句いかてちとせをといへり上句はこと書に菊をわけていたれるかたといふにかなへり露のまとはほとなき心也すへての心は王質か仙家に入て碁を見るあひたに斧の柯の朽たるにおとろけるほとの心也風躰抄云此歌はぬれてほすとおける五もしのまことにめてたく侍るに又山路の菊の露のまにといへるも有かたく侍るによりてするの句も何となくひかれて皆いみしく聞え侍なり

貫之集

一枝の菊折ほとにあら玉の　千とせをこゝにへぬへかりけり

菊の花のもとにて人のひとまてるかたをよめる

とものり
花みつゝ人まつ時は白妙の袖かとのみそあやまたれ
ける
唐李嶠百詠云今日黄花晩無復白衣來朗詠白詩云王
弘使立晩花前淵明か九月九日に酒なくて籬下に菊
を翫て居けるに大守王弘酒をもたせて贈りしその
使白衣をきたりし故にかくは作れり今此白妙の袖
といへるはその心にはあらす只ことかきの心に打
まかせてみるへし其故は淵明は王弘か使をまたす
又白菊は此國にこそことにもてあそへ月令にも季
秋之月菊有二黄花一としるされてもろこしには黄な
るを正色とする故にすなはち上にひける百詠にも
黄花晩と作りたれは白妙の袖にまかふよしもたか
へは也
おほさはの池のかたに菊うへたるをよめる
顯注云大澤の池とは廣澤の池なりふるくは大澤の
池とよめり大和物語に
　大澤の池の水くきみさりせは
　　いかてしらましさかのつらさを
是大澤はその里の名とそ申す嵯峨野にあり

ひともとゝ思ひし花をおほさはの池の底にも誰かう
へけん
友則家集にも六帖にも顯注にも胸句は思ひし菊を
と侍り池の底にもを家集には池の底まてと有誰か
植けんとは影をいへり上に貫之山吹の歌に底の影
さへ移ひにけりと云り又新古今集に坂上是則歌に
　影さへに今はと菊のうつろふは
　　波の底にも霜や置らん
世の中のはかなきことをおもひける折にきくの花を
みてよめる　　つらゆき
秋のきくにほふかきりはかさしてん花よりさきとし
らぬ我身を
花よりさきとしらぬ我身とは我世の限の花よりさ
きならんともしらぬとの心なり
拾遺集
けふかともあすともしらぬ白菊の
　しらすいく世をふへき我身そ
白菊の花をよめる　　凡河内みつね
心あてにをらはやをらん初霜の置まとはせるしらき
くの花
心あてはおしはかり也源氏箒木に心あてにそれか

かれかなと思ふ中に云々をらはやをらんといふを
誤てをらはやとねかへるやうにも心得る歟これは
何のやうもなくをらはをらんやとやもしの所をか
へてみれは心得やすき也されとをらはやをらんと
いへるにてこそ歌のこと葉なれをらはをらんやと
よまゝしかはつたなき事のかきりなるへし初霜は
禮記月令に季秋之月霜始降和名集に説文云霜早霜
也丁念切 和名八豆之毛 詞花集秋部に初霜をよめる大中臣
能宣朝臣

初しもも置にけらしな今朝みれは
野への淺茅も色付にけり

菊の花のはしめてさくゝ時また霜もはしめてふる物
なれは白き色のおなしく出あひてまきるゝ故心あ
てしてをらはやをらんといふ也菊と霜とまことに
見まかふまてにはなけれと似たる物は其似たる物を
まとはすことわりにてかくはよめり世上に人をま
とはす物は皆いつはりにせてまきらはすなり其時
おもひはからされはまとはさるゝ習なれは心せよ
とをしふる心も有へし

後撰 心あてに見はこそわかめ白雪の
いつれか花のちるにたかへる

これさたのみこの家の歌合の歌 よみ人しらす
色かはる秋の菊をはひとゝせに二たひにほふ花とこ
そみれ

菊はことはなにかはりてうつろひて後またひとさ
かりある物なれはふたゝひにほふといへり 文選
陸機短歌行時無重至華不再揚 後撰集に在原
元方

一とせにふたゝひさかぬ花なれは
むへちることを人はいひけり

仁和寺に菊の花めしける時に歌そへてたてまつれと
おほせられけれはよみて奉りける

花鳥餘情云新國史曰仁和四年八月十七日於新造
西山御願寺行先帝周忌御齋會云々今按西山な
る御寺とは仁和寺をいふ也光孝天皇の御願寺とし
て仁和年中に作られしによりて仁和寺とは號せり
則光孝天皇の一周忌の御齋會を彼寺にして行はる
又宇多天皇御出家の後延喜元年十二月に御室を仁
和寺にたてらる同四年圓堂を作らる供養有本尊は
金剛界會の三摩耶形也又承平帝天暦六年三月御出

家有て四月仁和寺に遷御あり云々

平さたふん

秋をゝきて時こそ有けれ菊の花うつろふからに色の
まされは

六帖には千里か歌とす伊勢物語に神無月のつごもりかた菊の花うつろひ盛なるにといへり源氏やとり木に御前のきくうつろひはてゝさかりなるころといへり又おなし巻に菊のまたよくもうつろひはてゝわさとつくろひたてさせ給へるは中々おそきにいかなるひともとにかあらんいとみところ有てうつろひたるを云々盛の秋を置て更にうつろひ盛の時こそ有けれと也下の心は位におはしまして世をよくをさめさせ給ひ御讓位の後引かへて更に佛の道をよくつとめおこなはせ給ふを秋をおきて時ありと菊によそへ奉りたる也或抄に初の二句を心得かねて是は殘菊と聞ゆ秋部に入といへとも秋の歌にはかくは詠すへからすといへるは用へからす重陽を時とする花なれはなとかかくもよまさらん上の歌に色かはる秋の菊を云々これを思ひ合すへしつらねたる心も是也

人の家なりける菊の花をうつし植たりけるを讀る

つらゆき

是も花を見て根なからこひてうつし植ける躬歌の心もしかみゆる也春うつしうゑたらは人の家なる菊をうつしうゑたりけるか花さきけるをみてよめるなるへし

咲初し宿しかはれは菊の花色さへにこそうつろひに
けれ

或注にうつろひは色のかはるにあらす移徙の心なりといへるは誤なり宿のかはれは色もかはるといふ事を詞をかへて咏していへり又宿のうつれは色もうつろふとよめりとみてもおなし事也

題しらす　よみ人しらす

さほ山のはゝそのもみちゝりぬへみよるさへみよと
てらす月影

六帖にははゝその題にならのみかとの御歌とて散ぬへみを散ぬへきと有

後撰　てる月の秋しもことにさやけきは　散もみちはをよるもみよとか

六帖　ちるもみち夜もみよとや月影の

梢のこらすてりわたるらん

萬十
わかせこかかざしの萩に置露を
さやかにみよと月はてるらし

上の紅葉の次に菊をおきてさて此歌より下の落葉の歌をのすることは夏の部の卯月の郭公と五月の郭公の中に橘の歌をましへてわかてるがことし萬葉と此集とは落葉を秋の部に入れたり

宮つかへひさしうつかうまつらて山里にこもり侍けるによめる

國史に關雄は才學ありて能書なりけるか閑居を好まれける故東山進士となつけたる由みえたり後に眞紹僧都彼山莊を求めて禪林寺を建らる今の永觀堂といふ所なりしかれは此歌そこにてよまれけるなるへし後に風體抄を見侍れは歌の左に關雄かすみける山里は今の禪林寺也とあり

藤原關雄

治部卿眞夏五男下野守兼齋院長官或注治部少輔五位

奥山の岩かき紅葉散ぬへしてる日の光みる時なくて

風體抄にはちりぬゝみ見る時なくにと有顯注にいは垣もみちとは石をつみて垣をしたる中にあるもみち也奥山のいは垣清水ともよめりおく山ならねと里にも石をつみて垣にしたるはおほかりてる日の光とはおほやけを日によせ奉れは深き山にこもりいてみえ奉らぬを日の影見る時なしとはよめるなり今按山里に石をつみて垣にしたるは勿論なれと今の歌は奥山の岩垣紅葉とよみたれはをのつからたてるいはほの墻壁のことくに有をいへる也いはかき沼岩垣清水なとよめるたゝをのつから石のかきのやうにてあるをいへり屈原九歌湘夫人に荃壁號紫壇文選に此壁の字をかきとよめり山のさかしきを峻壁とも壁立萬仞なともいへるを思ふへし

題しらす　　よみ人知らす

龍田川紅葉みたれて流るめりわたらは錦中や絶なん

此歌ある人ならのみかとの御歌なりとなん申す六帖には錦の題にもみちはおちてなかるなりと有或注に上の二句を古の字にあてゝ末二句のさまくはしくなるを今の字にとる古今一部は此歌より出る習有といへり今按此歌注によらは平城天皇の御歌なり右によれは作者をしらす此說用ゆへからす

六帖
秋風のふく〳〵龍田川紅葉はの
　　にしきを見つゝいかゝわたらん

龍田川紅葉はなかる神なひのみむろの山にしくれふるらし

又はあすか川もみちは流る此歌不注ニ人丸歌ー風體抄に此二首さきのはならの御かと聖武天皇の御歌次のは柿本人丸の歌也拾遺集に此歌をふたゝひ載られたるにはならのみかと立田川に紅葉御覽しにみゆきありける御ともにつかうまつりてとて柿本人丸と有又六帖に

飛鳥川紅葉はなかる葛木や
　　山には今そ時雨ふるらし

これ此注の歌の轉せる歟注はかく兩やうにつたへきけるなるへしそれにとりてあすか川といへるは不審なし龍田川といへるは大きに不審なり其故は神南備の三室の山は高市郡なり萬葉第十三云甘南備乃三諸乃神之帶爲明日香之河之水尾速云々又第三云登神岳山部宿禰赤人作歌三諸乃神名備山爾五百枝刺云々明日香能舊京師者云々此歌をみて知へし此外其證かぞふるにいとまなし題に神岳といふも三諸山なり日本紀の雄略天皇のみまきに故ありて彼山を雷岡と名を賜りけるによりて又は神岳とも神山ともいへり神とはなる神にていかつちなれは同し心也委は雄略紀を見るへし明日香川も同郡なれば三室山の時雨にちれる紅葉の明日香川になかれむ事勿論也立田川は平群郡に有て高市郡の北に忍海と葛下との二郡を隔て川のなかれもつゝかねはなかるへきことわりなしはかなき事をよむは歌のならひなれとさりとてことわりなき事をよむことなし此後の歌に見むろ山の紅葉を立田川によめるはみな此歌よりなかれ出たり源をよくきはめすは不審出來る人又有ぬへし此紅葉はといへるはは詞にして葉にあらすといふ說有ひかこと也萬葉第十に

あすか川もみちはなかるかつらきの
　　山のこのはゝ今し散らし

大坂を吾こえくれはふたかみに
　　もみちはなかるしくれ降つゝ

此二首のもみちはなかるを同しく黃葉流とかけう

歌さへ似て同し詞なれは今も准らへてもみち葉と
よむへし下にもみち葉のなかれてとまるみなとに
は又年ことにもみちはなかす立田川とよめり紅葉
にあらさる事知へし

こひしくは見てもしのはむ紅葉はを吹なちらしそ山
おろしの風

六帖には關雄か歌とすこひしくはとは紅葉の事也
見てもしのはむとはかたみを見て人をしのふとい
ふやうに後にしのふにあらす見る〳〵愛するやう
の心也萬葉集にかやうによめる事おほし

秋風にあへすちりぬるもみちはの行へさためぬ我そ
悲しき

秋風にもみちのちるをみて我身もかゝりとおもふ
心をあへすちりぬる紅葉はのとやかて序のやうに
よみなせり

秋はきぬもみちは宿にふりしきぬ道ふみわけてとふ
人もなし

此秋はきぬといふは立秋早秋のことにもあらす又
或注に秋はつきぬといふ上略といふ說しからす上
略のやうこそあるへけれつきぬをきぬとやはいふ
へき又紅葉は宿に散しきたる道ふみ分てとふ人は
なきにさひしき秋はきぬといふ說もしからすふた
つのぬはおなしう句絶なるを初をは句絶として後
をはちりしきたるみちふみ分てとつゝくるやうや
は有へきこれはこの折のたへかたき事を秋の暮は
來ぬ紅葉はちりぬとふ人はなしとかそへていかに
せんの心をふくみていへるなりなくさむかたなき
くれの秋はきぬと云心也下の物名に

秋ちかう野はなりにけり白露の
　をける草葉も色かはり行

これは夏の末によめる心にあらす草も木も霜かる
へき時をさして草葉もやゝ色つきそむる頃の秋ち
かうなりにけりとはよめるなりこれになすらへて
心得へし又貫之集に

草も木も紅葉散ぬとみるまでに
　秋の暮ぬるけふはきにけり

これも九月盡の日をさしてけふにきにけりとよめ
り古歌には今の人のえよまぬ事おほし

新古今曾根好忠
人はこす風にこのはゝちりはてゝ
　よな〳〵虫の聲よはるなり

ふみわけて更にやとはん紅葉はのふりかくしてし道とみなから

これは上の歌と問答せる歟おのつから問答せるに似たるをかく次第してあつめたる歟これに二つの心有へし一つには紅葉のふりかくしてし道とみなからふみわけてさらにやとはん更にはとはしなりふりかくしてし道とは人の跡をけつ心なりされはさやうに人をいとふと見なから更にとはん物かとなり二つには紅葉のふりかくしたる道と見なからもしれかたけれはふみわけて又更にやとはんと思ひかへす心也

秋の月山はさやかにてらせるはおつるもみちの散をみよとか

これは上のよるさへみよとよめる歌にならふへき歌なるをいかてかこゝにはおかれけん

後撰貫之
　秋の月ひかりさやけみ紅葉はの
　　おつる影さへみえわたる哉

吹風の色のちくさにみえつるは秋のこのはのちれはなりけり

風はめに見ゆるものにはあらぬを吹過る方に色々の紅葉のしたかひて散ゆくを風のすかたにいひなして色のちくさに見えつるはと讀る也春の歌に

　春霞色のちくさにみえつるは
　　たなひく山の花のかけかも

これは似たる歌なから花の影かとうたかひ今は了解したり

せきを

霜のたて露のぬきこそよはからし山の錦のおれはかつちる

六帖には腰句もろからしと有或抄に樂天の句とて染霜織露三秋錦といふをひけり文集にもしあらはこれよりよめるなるへしおれはかつちるは上に行平霞の衣ぬきをうすみ山風にこそ見たるやうなれとよまれたる心也懐風藻に載たる大津皇子詩に天紙風筆畫二雲鶴一山機霜杼織二葉錦一　又萬葉第十八におなし皇子

　たてもなくぬきもさためすをとめらか
　　おれる紅葉に霜なふりせね

拾遺貫之
　なかれくる瀧の糸こそよはからし
　　ぬけと亂れて落る白玉

うりん院の木の陰にたゝすみて讀る　僧正遍昭
わひ人のわきて立よるこのもとはたのむ陰なく紅葉ちりけり

世にすみわひたる人の陰とたのみて立よる木のもとは紅葉もわきてちるやうにてたのむかけなきと也諺にたのむ木のもとに雨たまらぬといふ心也侘人はしけき木陰のことくおもひてたのみてよる人も心のかはりてかねて思ひしに似すなれは遍昭の身にあたりてさる恨はあるましけれと木の陰にたゝすまれたるに折ふし風なとの吹て紅葉のなこりなく散をみて大かたの人の上におもひよせてよまれけるなるへし

大和物語宗于　時雨のみふる山里の木のしたは
　　をる人からやもりすきぬらん

兼盛集　天の原くもれはかなし人しれす
　　たのむこのもと雨もりしより

後撰　このもとにおらぬ錦のつもれるは
　　雲の林のもみちなりけり

二條の后の春宮のみやす所と申ける時に御屏風に龍田川に紅葉なかれたるかたをかけりけるを題にてよめる　　そせい

伊勢物語には次下の業平の歌にむかしたとこみこたちのせうえうし給ふ所にまうてゝたつた川のほとりにてとかけり此集を實録とすへし

紅葉はのなかれてとまる湊には紅ふかきなみやたつらん

六帖には落句浪そ立けると有浪は白き物なるより紅葉はのなかれてとまる湊には紅にそ立らんといへり立田川はゐにゆつれるを今はこと書にあらはしたり

なりひらの朝臣
千はやふる神代もきかす龍田川から紅に水くゝるとは

風躰抄に神代もきかすたつた川といへるわたりのめてたく侍る也といへり是は立田川に紅葉のみちてなかるゝさまひとへにから錦をなかせることくにして錦の中より水のくゝると見ゆるを奇異のことくみるゆゑ神の世までをたくらへていふなり神代にかはかりの奇異なる事なきにはあらねと是はたゝ立田川をほめんとて神代にもきかすとよめる

也川には錦あらふといふとの有故紅葉のなかるゝをかくいふ也華陽國志云蜀時濯二錦於流江中一則鮮明也譙周益州志成都織錦成濯二於江水一其文分明勝一於初成二池水濯之不レ如二江水一也文選左太沖蜀都賦云貝錦斐成二濯色江一波これらの心也

後撰
もみちはのなかるゝ秋は河ことに
錦あらふと人やみるらん

六帖
この葉みなからくれなゐにくゝるとて
霜の跡にも置まさる哉

新古今集に四月祭の日まて花散のこりて侍ける年その花を使少將のかさしに給ふ葉にかきつけ侍る

紫式部

神代には有もやしけむ櫻花
けふのかさしにをれるためしは

これ此歌をおもひてよめる也くゝるは日本紀に泳の字をよみ萬葉には潜の字をかけり史記河渠書云乃鑿レ井深者四十餘丈往々爲レ井々下相通行レ水々頽以絕二商顏一晉曰下流曰頽

これさたのみこの家の歌合のうた

としゆきの朝臣

我きつる方もしられすくらふ山木々のこの葉の散とまかふに・

散とまかふにはたゝ散まかふにや

たゝみね

神なひのみむろの山を秋ゆけは錦たちきる心ちこそすれ

朱買臣か故事次の歌に注すへしたちきるは裁て着る也裁剪にはあらす

きた山に紅葉をらんとてまかれる時によめる

つらゆき

みる人もなくてちりぬる奥山の紅葉はよるのにしき也けり

もみちをらんとて來りてみれはえもいはぬもみちともの散しきたるをみてかくみる人もなくて散はてたるおく山の紅葉こそまことに夜の錦なりけれと惜める心也　前漢朱買臣傳云會二邑子嚴助貴幸一薦二買臣一召見說二春秋一言二楚詞一武帝說レ之拜二中大夫一與二嚴助一倶侍レ中久之拜二會稽大守一上謂言富貴不レ歸二故鄕一如二衣レ繡夜行一今子何如買臣頓首謝唐中宗朝魏元忠右僕射兼二中書令一請二拜掃一乎勅曰

衣レ錦盡遊在ニ平茲日ニ散レ金敷レ惠諒屬ニ斯辰一

後撰 紅葉はをわけつゝゆけは錦きて
家に歸ると人やみるらん

貫之集 白なみのふるさとなれや紅葉はの
錦をきつゝ立かへるらん

元眞集 立田川ふかき紅葉も君こすは
よるの錦となほそくれまし

おもへともあやなしとのみいはるれは
よるの錦の心ちこそすれ

奥義抄に麗花集和泉式部

暮ぬまにいそきてゆかむ紅葉はは
よるの錦になりもこそすれ

秋のうた 此詞書に字の落ちたる歟
かねみのおほきみ

龍田姫たむくる神のあれはこそ秋のこの葉のぬさとゝ
ちるらめ

貫之集 紅葉はのぬさともちるか秋はつる
立田姫こそ歸るへらなれ

此歌に似たれは秋もくれて立田姫の歸る道に神の
上にも猶道の神たちに手向するとてぬさのやうに
は紅葉のちるらんと也

後撰 わたつみの神に手向る山ひめの
ぬさをそ人は紅葉といひける

菅萬 紅葉はは誰手向とか秋の野に
ぬさと散つゝ吹みたるらん

をのといふ所に住侍りける時紅葉をみてよめる
つらゆき

秋の山もみちをぬさとたむくれはすむ我さへそ旅心
ちする

秋山のもみちのぬさをたむくるやうに散をみれは
此山里にかりそめなから住我さへ旅にあるやうに
おほゆるとなり

癸輔集 こぬ人をまつ秋風のねさめには
我さへあやな旅心ちする

神なひの山を過てたつた川をわたりける時に紅葉の
なかれけるをよめる
清原ふかやふ

神なひの山を過ゆく秋なれは龍田川にそぬさは手向
る

歌によりて此こと書を見るに秋は西よりくれは西

に備ることとわりなれはみむろ山は立田川の東に當りて有歟しかるにみむろ山の事は上にいへることく高市郡なれは立田山よりは遥に東南なれは不審也但今の世には法隆寺の邊に立田といふ所のあるを本として其あたりに神南と晉にいふ所有これをかみなひ山といふと心得立田山をも立田川をも彼立田を本としていふにより本説にかなはぬ也萬葉第九に白雲の立田の山の瀧の上の小鞍の嶺とよめるは今の俗くらかりたうけといふ所なりをくらと云をくらきと云心になしてくらかりとは轉していふ也小倉といふ山寺有は此故也神代紀に龍田山越に大和國にせめいらせ給はんとおほしめしけれど山さかしく道せはくしてかなはすと有は此道也萬葉にわたつみのおきつしら波立田山此集に風ふけはおきつしらなみ立田山とよめる皆是也くらかりたうけより南葛下郡の北の嶺つゝきは皆立田山也然れは其山の麓に流るゝ川を立田川といふへし俗説にまがふへからす此歌紅葉をぬさとのみよめるはこと書にゆつれる也今來る道秋の歸る路次に同しけれは我行を秋のゆくになしてよめるにや

寛平御時きさいの宮の歌合の歌　　ふちはらのをきかせ

白波に秋のこの葉のうかへるをあまのなかせる船かとそみる

管蠡には腰句をうかへるは尾句を船にさりけると有六帖には落句を舟かとそ思ふとて深養父の歌とせり或抄に紅葉の波に映しておもしろきをみて秋の思ひ世の愁をもわするゝに山水のおしなかして行は心をなくさむ便を失ふ事あまは舟をもて世をわたるになかしたるにたとふる也といへるは下卷の伊勢か長歌におきつなみあれのみまさる宮のうちは年へてすみしいせのあまも船なかしたる心ちしてといへるとおなし心にみたる也此歌はしからす只眼前の心をよめり大井川の序に秋の水にうかひてなかるゝ木の葉とあやまたれ云々土佐日記にみな人々の舟いつこれをみれは春の海に秋の木の葉しも散やうにて有ける是らとおなしく見るへし

百詠桂詩云使客條爲馬仙人葉作舟

立田川のほとりにてよめる　　坂上是則

紅葉はのなかれさりせは龍田川水の秋をは誰かしら

まし
或抄に紅葉を惜みつゝる心を思ひ返してなくさむる心といへりこと書の心それまては有へからす此紅葉のなかれこすは水のうへの興にはいかてしらましと也下に伊勢か水の春とよめるも此水の秋といふにおなし

志賀の山こえにてよめる　はるみちのつらき

山川に風のかけたるしからみはなかれもあへぬ紅葉なりけり

なかれもあへぬはかりちりかゝるもみちを風のかけたるしからみとめつらしくもよまれて侍るかな江師歌に
山川に鹿のしからみかけてけり
うきてなかれぬ秋萩の花
これも此歌より鹿のしからみをは思ひかけられたる也

池のほとりにて紅葉のちるをよめる　みつね

風ふけはおつるもみちは水きよみちらぬ影さへ底にみえつゝ

ちらぬ影さへとは水の清きか故にちれる紅葉とゝもに影のうかへるをいへり

亭子院の御屏風の繪に川わたらんとする人の紅葉のちる木のもとにうまをひかへてたてるをよませたまひけれはつかうまつりける

立とまりみてをわたらん紅葉はは雨とふるとも水はまさらし

萬葉に徘徊をたちとまりとよめりみてをのをもしはことはのたすけ也此歌公任卿九品に中上とさためてことはとゝこほらすしておもしろき也といへり定頼卿歌に
水もなく見えこそわたれ大井川　きしの紅葉は雨とふれとも

已上落葉

これさたのみこの家の歌合の歌　たゝみね

山田もる秋のかりほにおく露はいなおほせ鳥の涙なりけり

菅萬には落句涙なるへしと有かりほはかりいほなり假廬とかけり稲をこなすかりいほ也密勘には此本にかゝねと又かりいほとかく本も有と注せらる

題しらす　よみ人しらす

ほにも出ぬ山田をもると藤衣いな葉の露にぬれぬ日はなし

六帖にも猿丸集にも腰句をから衣といへりいかて田なともる民のから衣をきるへき誤也ほにも出ぬ山田をもるとはまたほに出ぬ時よりもるをいふ萬葉に

いそのかみふるのわさ田をひてすとも
しめをははへよもりつゝをらん

藤衣とは人におくれてきる服衣をもいひ又あやしの賤か衣をもよめり萬葉に

大君のしほやくあまの藤衣
なれはすれともいやめつらしも

又あらたへの藤原か上ともあらたへの藤江か浦ともつゝけたるあらたへは布の總名にて藤とのみいひても藤衣といふ心也服をふち衣といふもなけきのあまりにうるはしき物をやつして藤を織たるをきる心也藤ならねと麻の衣をくろく染てきたる同し事なり但喪服は績の字をふちころもと讀て和語はひとつなれと今の藤衣といふにはかはれり此歌は民のしわさをあはれふ心也

かれる田におふるひつちのほに出ぬはよを今更にあきはてぬとか

ひつちとはかり田より又おひいつるいねをいふ和名集云穭音呂後漢書穭讀於路賀於比俗云比豆知　周易には反生をひつちとよめり今更にとは一度はほに出みのりてかられしものゝ後はほにいてねはいへり秋のくるゝを飽果るにかねていへり是はもし讒言なとによりて罪なきに勅勘をかふふれる人の後に恩赦におひてまぬかれたれと世をうんして出てつかへなともせすこもり居たるをたとへてよめるにや已上三首は秋の田の歌也

きた山に僧正遍照とたけかりにまかれりけるによめる

そせい法師

たけかりは松茸なとをもとむるをいふなり

紅葉はは袖にこきいれてもていなん秋はかきりとみん人のため

こきいれてはこきおろして袖にひろひいるゝ也萬葉第八に

引よせてをらはちるへし梅の花
袖にこきれつそまはそむとも

こきれつはこきいれつ也下の句の心は花の春紅葉の秋といへは紅葉の散はつるを秋の限といひて紅葉は皆散はてぬれは今は秋も限りと成ぬと思はん人にかゝる紅葉を見せていまた秋はかきりにあらすと思ひなくさませんとなり

寛平御時ふるき歌たてまつれとおほせられけれは立田川もみち葉なかるといふ歌をかきてその同し心をよめりける　　　　おきかせ

み山よりおちくる水の色みてそ秋は限とおもひしりぬる

　胸句六帖にはおちくる瀧にと有水の色といふは紅葉の心にして秋は限の詞これをたすけたり大かたの世こそ紅葉もちりはてゝ殘る秋もなけれは山深き所には猶盛なる紅葉も有て秋は殘りてあらんと思ふをみ山より落くる水の色のから紅なるをみて山の秋も今は限りなるよとはかり知心也發句は古歌の三四の句にあたり次の二句は古歌の一二の句にあたり下句は古歌の落句にあたれり

秋のはつる心を龍田川におもひやりてよめる

　　　　つらゆき

昔の人は後のことくゆゑなく遠き名所なと取出てさしあたりたる時節をよそけにはよまさりけれはかくは詞書をかゝれけるなり

年ことに紅葉はなかすたつた川みなとや秋のとまり成らん

　年ことに見るに立田川はよそよりもことに紅葉をなかす川なれはおもふに此もみちのなかれよるみなとや暮て行秋のとまりする所にてあるらんとなり

六帖 紅葉はのなかるゝ時は立田川　みなとよりこそ秋は行らめ

六帖 紅葉はのなかれてよとむみなとをそ　暮行秋のとまりとは見る

なか月のつこもりの日大井川にてよめる

夕月夜をくらの山は鳴鹿の聲のうちにや秋はくるらん

　朗詠には落句秋を知るらんと載らる夕月夜はをくらの山といはん爲の枕詞也上弦なと迄はをくらくほのかなれは也大井川序にも月のかつらのこなた春のゝ梅津より御舟よそひてわたしもりをめして

夕月夜をくら山のほとり行水のおほゐの川へにみゆきしたまへは云々萬葉に

夕されはをくらの山に鳴鹿の

こよひはなかすいねにけらしも

これも今のつゝけやうに同し此集下にいたりて夕つくよおほつかなきをとつゝけたるもをくらき故におほつかなけれは又今におなし文選に蒙籠ををくらしとよめり鳴聲は今日鳴鹿の聲也聲の內にや秋はくるらんとは鹿の音のひゝきもいまた消ぬほとにくるゝ心にて秋の惜みもあへすとく暮行心なり夏歌に郭公なくひと聲にあくるしのゝめといへるにおなし顯注に鳴鹿の聲の中に秋のくるゝとは冬になりなは鹿のなくましき心なりとかゝれたるは然るへくもなし

貫之集　くれぬとてなかすなりぬる鶯の

聲のうちにや春のへぬらん

おなしつこもりの日よめる　みつね

道しらはたつねもゆかむ紅葉はをぬさと手向て秋はいにけり

道とは秋の行道なり秋をゝしみてしたふ心ふかし

# 古今和歌餘材抄卷第七　二十九首

## 冬歌

題しらす　讀人しらす

龍田川錦おりかくかみな月しくれの雨をたてぬきにして

此歌六帖には發句を立田山と有家持集にはさほ山にと有錦を竿にかくる心につゝけたり但萬葉には竿は左乎なり和名集にもおなし家持集は信しかたきものなれは後のしわさにやさきに關雄か歌には霜のたて露のぬきとよめりこれは冬の歌なれはたてぬき共に時雨といへり經緯をきひしくは見るへからす或物に此歌延喜の御製といへるはおほつかなし新古今集序云抑於古今者不載當代之御製自後撰而初加其時之天章云々これによれはなき事明かなりもしよみ人しらすとあれはなきにおなしといはゝ新古今序に其よしことわるへし其上何の書に延喜御製とあるといはねは不審なり六帖にも作者を出さねは今のまゝに心得へし

冬の歌とてよめる　源宗于朝臣

山里は冬そさひしさ増りける人めも草もかれぬとおもへは

さひしきは萬葉に不怜とも不樂とも書てつれ〴〵なるをいふにかきらす心のおもしろからすたのしからぬにいへる詞なり今はつれ〴〵なるにのみいひならへり今の歌又下の山里は物のさひしき事こそあれとよめるも共に萬葉の心にも聞ゆれとつれ〴〵の方猶つよし山里のさひしきは四時にわたれと秋まては猶花紅葉のたよりにもおのつからまれの人めをたに見るを冬にいたれは何のことよせにとはるへき次もなけれはありしはかりの人めたに草とゝもにかれはてゝさひしさのいつよりもまさるとなり人めのかるゝは離の字なるを枯るゝによせていへり爲家卿の歌に

いつとてもかるゝ人めの山里は
草の原こそ冬を知ける

是は今の歌を人めは常にかるれと冬は草さへ枯ていとゝさひしくみゆれは草のかるゝによせて人めもかれぬとよめるやうに心得てとられたるに似たれと本歌をとることはさま〳〵なれはさには有へからす續後拾遺集に後宇多院御製

山里はちる紅葉に道絶て
冬は人めのかるゝなりけり

これは木の冬枯によせて冬に至りて人めのかるゝとあそはせり

題しらす　　よみ人しらす

大空の月のひかりし淸けれは影みし水そまつこほりける

菅萬には腰句さむけれはとあり朗詠集もおなしくて落句をまつは氷れるとせりさえたる空の月影の移りたる水を朝にみれはことわりにそ先氷りけると月は陰精なるを思へる心なり

夕されは衣手寒しみよしのゝよしのゝ山にみゆきふるらし

顯註には下句たかきの山にみゆきふるらんと有て萬葉云

みよしのゝたかきの山に白雲は
ゆきはゝかりてたな引てみゆ

常にはみよしのゝ深きみ山にとあれとも崇徳院の御本にたかきの山と侍りと註せられたり六帖には

夕暮はといひ高きみ山にと有家持集にはたかきの山にとあり夕されはとは萬葉に夕去者とも暮去者ともかけり夕のくれはといふ心なり其證は萬葉集第十に

風まぜに雪はふりつゝしかすかに
　霞たな引春去にけり

此落句を新古今には春はきにけりと改て入られたりこれをもて准らへ知へし彼集にかくのことくの證あけてかぞふへからす此義をもて彼集に假名にかける所にははの字に婆を多分かけり濁音なる故也されはさをすみはを濁れる心ことわり也今の世はこれにことなるは去の字の心をしらすなれる故なり彼集に當時をは春されは秋されはといひ末をかけていふ時は春さらば秋さらばとよめるにてよく心得へしみゆきは眞雪なり萬葉に眞草をみくさとよみ眞熊野とかきてみくまのとよめるに心おなし顯註に深山をみやまとよむよし申されたれと日本紀萬葉等にみえす勘へて知へし文選に岵の字をみやまとよめりみやまも眞山の心上にいふかことし眞山の心なりと知る上には深山をみやまとよまん事さも有へし此歌古き姿なれは奈良の都なりし時なとにことに寒き夕によし野をは思ひ出けるにやこれより春霞立なはといふまては雪の歌なり萬葉に

夕されは衣手寒し高まとの
　山の木ことに雪そ降たる

今よりはつきてふらなん我宿の薄おしなみふれるしら雪

つきてふらなんはつゝきて絶すふれと也萬葉に云

此里はつきて霜や置夏の野に
　わかみし草はもみちたりけり

めひの野の薄おしなみふる雪に
　やとかるけふし悲しくおほゆ

ふる雪はかつそけぬらしあし引の山の瀧つせ音増るなり

六帖には落句こゑまさるなりと有かつそけぬらしはかつ／＼そきえぬらしなり顯註にはけぬらんと有たきつ瀬はたきる瀬なり萬葉に沸の字をたきつとよめりたきつながるゝともよめり瀧といふもたきりて落る物なれはたきるといふことを體にいひ

なしたるなり清濁は通せり
此川にもみち葉なかるおく山の雪けの水そ今まさる
らし
雪けにふたつのやう有雪ふりぬへきけしきになる
をいふは雪氣なりこれは雪消なり幾延反計なる故
に雪けといふ萬葉に
筑波根をよそのみ見つヽ有かねて
　雪消の道をなつみくるかも
君かため山田の澤にゑくつむと
　雪消の水にものすそぬれぬ
拾遺 わたつみも雪けの水はまさりけり
　をちの島々みえすなり行
六帖 苔の袖雪消の水にすヽきつヽ
　おこなふ身にも戀は盡せす
此川に時過て今しも紅葉のなかるヽは奥山の雪消
の水のまさるにさそはれて岩間なとにせかれてと
まりたるかなかれ出るなるへしといふ心なり
故里はよしのヽ山し近ければひと日もみ雪ふらぬ日
はなし
ふる里とは下に是則かふる里さむくとよめるはな
らの京なれと是は吉野宮は行宮にて定まれる皇居
にはあらねと昔はたひ〳〵みゆきなと侍しか後は
さる事もたえてたヽあれにあれたれはいへり下の
躬恒か長歌にもふる里の吉野の山の山あらしも寒
く日毎になりゆけはとよめり又兼盛歌に
故郷は春めきにけりみよしのヽ
　みかさか原を霞こめたり
なとよむも此心なり此歌を六帖に行幸の題に入た
る事不審なり
みゆきとか世にはふらせて今はたヽ
　梢の櫻ちらすなりけり
小鹽山梢もみえすふりつみし
　こやすへらきのみゆきなりけん
かやうによめるみゆきこそ兼たれこれをはいかて
いれたるにか
我宿は雪ふりしきて道もなしふみわけてとふ人しな
ければ
萬葉に 我宿は雪ふりこめて道もなし
　いつこはるとか人のとひこん
とあるは此歌歟雪は降しきたれとふみわけてとふ

人たにあらは道は絶しをとふ人のなき故にひたすら通ふへき道もなきまて積りはてたりといへる也

拾遺
山里は雪ふりつみて道もなし　けふこん人をあはれとはみん

曾丹集
冬草のかれにし人の今更に　雪ふみ分てみえん物かは

同
山人の露と結へる草の庵　雪ふみ分てたれか問へき

冬の歌とてよめる　紀貫之

雪ふれは冬こもりせる草も木も春にしられぬ花そ咲ける

雪ふれはと一句をたて丶下はそれを釋するやうに見ると引つ丶けてみると心かはれり一句をたつる時は冬こもりとは草木の葉落て其精の根にこもる心なりつ丶けて心得る時は雪にこもる心なり但萬葉に冬こもり春の大野冬こもり春さりくれはなとつ丶けたるも草木の冬こもれるか時至りてめのはる心なれはこれをもて思ふに一句の歌なるへし同し人の歌に空にしられぬ雪とも人にしられぬ花とも時にしられぬ秋ともよまれたる此春にしられぬ花といへるに同し心なり

しかの山こえにてよめる　紀あきみね

白雪の所もわかす降しけは岩ほにも咲花とこそみれ

雪の所もわかす降敷たれは草木は更なり花咲へしとおもひもよらぬいはほまて咲てみゆるとなり

文選謝靈運賦云瞻山則千巖倶白　萬葉第十九に

なてしこは秋さく物を君か家の　雪は岩ほに咲にけるかも

雪島のいはほにおふるなてしこは　千世にさきぬる君かかさしに

彼小序云于時積雪彫二成重巖之起一奇巧綵二發草樹之花一云々

ならの京にまかれりける時にやとれりける所にて讀る　坂上これのり

やとれりける所とは路次のやとりにはあらすならの京のやとりなり

みよしの丶山の白雪積るらし故郷さむくなりまさるなり

故郷はならなり吉野は大和國にてはすくれて高けれはやとりの寒きにつけても先雪やつもるらんと

思ひやる心なり故郷さむくといへる感情ふかし

六帖貫之
君まさは寒さも忘らしみよしの
よしのゝ山に雪はふるとも

寛平御時きさいの宮の歌合の歌

ふちはらのおきかせ

浦ちかくふりくる雪は白波の末のまつ山こすかとそみる

拾遺集には題忘らす人丸とてふたゝひ入たり或抄に金玉集にも人丸とあるといへと此集にかくたしかに有うへに人丸の比の歌のすかたにもあらねは後の集は信しかたし此歌は後のみちのく歌に君をおきてあたし心をわかもたはといふにてよまれたり彼歌の心はそこにいたりて注すへし或抄に浦ちかくふりくるとは浦ちかくてみる雪なり松山は思ひよそへていへるなりとあるはいつくの浦にもあれちかく降くる雪を見て彼松山に浪のこさんするやうもかくこそとおもひやる心なりとなりいはれす後撰集に

浦ちかくたつ秋霧はもしほやく
烟とのみもみえわたりける

此歌も今の發句とおなしいりほかなる説を求むへからす

壬生忠岑

みよしのゝ山の白雪ふみ分て入にし人の音信もせぬ

此歌菅萬にもいれり雪ふみ分て入にし人のいとゝふりそふまゝに跡たえて音信もせぬを哀に心もとなく思ひやる歟又雪ふみわけて心つよくいる人と思ふもしる／＼やかて音信もせぬとよめる歟

後撰
百敷はをのゝえくたす山なれや
入けん人の音信もせぬ

忘ら雪のふりてつもれる山里はすむ人さへや思ひきゆらん

下句は住人さへ雪とゝもにや思ひ消らんとなりおもひきゆらんとはかたり合すへき友もなくて思ふ事のさなから消うする心にや又心の消失て寒灰のことくなるをもいふへし

萬九人丸
雪こそは春日きゆらめ心さへ
消うせたれや言もかよはぬ

凡河内みつね

雪のふるをみてよめる

雪ふりて人もかよはぬ道なれやあとはかもなく思ひ

きゆらん
上の句は雪ふりしきて人もかよひこぬ道のうつもれてめのまへに消ゆるをもてやかて下の句のたとへとせりあとはかもなくはそこはか淺はかあてはかのことくはかはことはのたすけにてあともなくといふなり又思ふ事のあともはかなくともきこゆさひしき宿の感なり

雪のふりけるをよめる　　きよはらのふかやふ
冬なから空より花の散くるは雲のあなたも春にや有らん

雲のあなたは上の夏の歌にも雲のいつこにとよまれたる類なり雪とよまぬはこと書にゆつるなり深養父の歌は人にことなるめつらしき風情あり道濟十躰第六高情の歌に出せり

貫之集
春ちかくなりぬる冬の大空は
花をかねてそ雪も降ける

菅萬
雲の上の風やはえけき白雪の
枝なき花とこゝら散らん

雪の木にふりかゝれるをよめる　　つらゆき
冬こもり思ひかけぬを木のまより花とみるまて雪そ降ける

菅萬
このまより吹夕風に散ときは
雪も花とそみえまかひける

六帖
木のまより花にまかひて降雪は
春くるまては花かとそみる

やまとの國にまかれりける時雪の降けるをみてよめる　　坂上これのり
朝ほらけ有明の月と見るまてによしのゝ里にふれるしら雪

朝ほらけは朝開といふ詞に同しほとひとけときと五音通する字なれはなり萬葉集には朝開とのみよめるを後に朝ほらけとはよみかへたり夜の明はなれたる事をいふ初秋を詩に開秋と作るかことし又陰は閉陽は開けは其心も有歟萬葉には朝ほらけとよみて後はあさひらきとこそよむへきことなるをこれ引かへて覺ゆるなり朝ほらけにとくおき出てみれは有明の月影の殘れるかとまかふはかりに夜の間によしのゝ里に雪のふれることと也或說に有明の殘れる影のことく薄雪のふれる眺望也とあるは面白き義に似たれと薄雪ならは此歌雪の中に引

下してこゝには有へからす只朝ほらけに見ゆる雪
を月の照れる影に似たりといへるなり後撰集に
　夜ならは月とやみましわかやとの
　　庭白妙にふれる白雪
これに合せて思ふへし爲家卿詠していはく
　さらぬたにそれかとまかふ山の端の
　　有明の月にふれるしら雪
本歌の雪は有明の月にはふらぬなりとしらする歌
なり今按さきの是則歌の詞書にならの京にまかれ
りける時にやとれりける所にてよめるとあり今の
歌はその明る朝つとめてみやれはおもひしことく
白妙にみゆれはかくはよまれたるにや但よしのゝ
山にといはすして里にといへれはおほつかなしこ
と時にや
題しらす　　　よみ人しらす
けぬかうへに又もふりしけ春かすみたちなはみ雪ま
れにこそみめ
　けぬかうへにはきえぬかうへになり
梅の花それともみえす久かたのあまきる雪のなへて
ふれゝは

此歌はある人のいはくかきのもとの人丸か歌なり
拾遺集には題しらす柿本人丸とて春の部に入たり
定家卿詠歌大概拾遺によりて春にあり道濟十體に
は第七器量の歌に出せり顯註にあまきる雪は空の
くもりて雪のふるなり萬葉に
　夢のこと君をあひみてあまきりあひ
　　ふりくる雪のけぬへくおもほゆ
棚霧合雪もふらぬかうめの花
　さかぬかはりにそへてたにみん
萬八
打きらし雪はふりつゝしかすかに
　わか家のそのに鶯なくも
打なひき春さりくれはしかすかに
　あま雲きりあひ雪はふりつゝ
是等歌の詞皆同心なり又秋の田のほのうへきりあ
ふ朝かすみともよめはかきくもる心なり密勘云あ
まきるあま雲きりあひ又一同萬葉にそらきらし雪
もふらぬかいちしろく是又同心也今私に三首をく
はふ
　ひとめみし人に戀しくあまきらし

ふりくる雪のけぬへく思ほゆ
あまきりあひふりくる雪のきゆれとも
君にあはんとなからへわたる
あまきりあひ日かた吹らし水莖の
岡の湊に波さわきける
定家卿のそらきらしと引たまへる歌は萬葉第八に有若櫻部朝臣君足歌なり天霧之とかきて今の本にはあまきらしと點せり天霧合とかけるをあまきりあひと點せるを思へはそらきらしとよめる古點然るへくも聞えすきるといふは物をさへきりてみせぬ心なれは霧をきりとはいへり源氏にめもきりてといへるも此心なり雪の降時天をさへきれは天きるといふめつらしからぬ詞なりほの〳〵とあかしの浦とつゝけたる例に久かたのあまきるとはよまぬよしいふは萬葉なとみぬ人の此一首にかきる名言とおもへるにや遜東家の説なり
萬八赤人　わかせこにみせんと思ひし梅の花
それともみえす雪のふれゝは
同十　梅の花それともみえすふる雪の
いちしろけんなまつかひやらは

是より下四首は雪中梅の歌なり
梅の花に雪のふれるをよめる　小野篁朝臣
花の色は雪にましりてみえすとも香をたに匂へ人のしるへく
六帖　花の色に雪はましりてみせすとも
香をたにぬすめ人のしるへく
とあり花といひて梅といはぬは雪にましる花梅をおきてはなけれは歟又こと書にゆつるともいふへし下句は人のしるへく香をたに匂へと打返して心得へし下にも人の知へくわかこひめやもとよめり人のしるへくは人の知はかりにといはんかことし可の字をいかはかりの心のはかりとよむ此心也
雪のうちの梅の花をよめる　きのつらゆき
梅か香のふりおける雪にまかひせはたれかこと〳〵分てをらまし
六帖にはまかひせはをうつりせはたれかこと〳〵をたれかは物をと有こと〳〵は上の秋部に秋の露いろ〳〵ことにおけはこそといふを萬には第二句いろこと〳〵にとありて色殊殊丹と書せ給へり俗に面々にといふ心なり又貫之集に

櫻花ちらぬ松にもならはなん
色こと〳〵に見つゝ世をへむ
是もちらぬ事を櫻も松にならへ然らは松の色と櫻の色とをならへて面々に見て世のかきりを經んとなれは今も梅か香のふりつみおきたる雪にうつりてまかひせは誰か雪は雪梅は梅と見わきて折ことを得んとなり或抄に雪にも香ありて色のことく梅にまかはゝ誰か悉分別して折へき梅はかり匂ふによりてかくれなけれはこそわかちやすけれといふ心に注せりこれはこと〳〵をこと〳〵くの略語と思へり然らす其外の心も作者の心にあらす

雪のふりけるをみてよめる　紀のとものり
雪ふれは木ことに花そ咲にけるいつれを梅と分てをらまし
或抄に梅の字木毎にとよめりいつれを梅とわきてをらましとつゝけてめてたきと基俊はいへりと有

六帖
いつれをか分てをらまし梅花
枝もとをゝにふれるしら雪

續古今爲家
年の内の雪を木ことの花とみて
春をおそしときゐる鶯

物へまかりける人をまちてしはすのつこもりによめる　みつね
わかまたぬ年はきぬれと冬草の枯にし人はおとつれもせす
年はきぬれとゝは近く來ぬれとなり又内典に因中說果の例あることくあすは必くる春なれはすてにくるになしてもいふへし冬草は枯にしといはんためなり梓弓いそへなとつゝくるよりは是は少歌の匂ひとなれり新勅撰雜一に伊勢大輔
わすられて年暮はつる冬草の　枯はてゝ人も尋さりけり
これ今の歌をとりてよめり

としのはてによめる　在原もとかた
あら玉の年のをはりになることに雪もわか身もふり増りつゝ
六帖には腰句なる時はとあり心明らかなり

寛平御時きさいの宮の歌合の歌　よみ人しらす
雪ふりて年のくれぬる時にこそ終にもみちぬ松もみえけれ
菅萬にはくれぬるをくれゆくもみちぬをみとりの

とあり宗于集にも載たれと今讀人しらすとあれは
おほつかなし露霜の時を過して後雪度々ふり年く
るれとも變する色なけれは終にもみちぬ松とは今
に至りて知心なり文集云歳暮滿山雪松色鬱青々こ
れを取てよめる歟論語曰歳寒然後知松柏之後彫莊
子曰孔子曰天寒既至霜雪既降是以知松栢之茂也文
集の詩ももとはこれらによれり古來風躰抄に後撰
集の冬歌四首抄せられたるはてに題しらすよみ人
しらすとて此歌有には第四句つゐにみとりのと有
て註に云此歌は古今に有かれはつゐにもみちぬと
有そのことはいかにそ聞ゆるを此集にはつゐにみ
とりのと有はよきにはにたれともまたもみちぬよ
りは心のおとるなりいつれもいかにそおほえなか
ら年寒してしかうして後に松栢の後にしほむこと
を知るに心のいみしく何れもえもらし侍らぬなり
とあれと今の後撰集にはなしおちけるにや

としのはてによめる　　はるみちのつらき

きのふといひけふとくらしてあすか川なかれて早き
月日なりけり

六帖に第二句けふといひつゝと有こと書によりて
歳暮の歌にいれり

歌たてまつれとおほせられし時によみて奉れる

紀つらゆき

行年のをしくも有かなます鏡みる影さへにくれぬと
思へは

見る影さへにくれぬとは年のよりてみゆるをいへ
り許渾か高歌一曲掩明鏡昨日少年今白頭と作れる
感あり

# 古今和歌餘材抄卷八　二十二首

賀歌

賀は祝言なり

題しらす　　　　よみ人しらす

我君は千世にやちよにさゝれ石のいはほとなりて苔のむすまて

發句朗詠には君か代はと有第二句六帖には千世にましませと有顯註にも千代にましませと有定家卿密勘に無不審とのみあれは同心歟奥義抄に引れたる道濟十體には神妙體とせりそれもちよにましませなりちよとはちとせなり萬葉に萬歳をよろつよとよめり千年に八千年になりやもしをことはなりと云說あれと六帖に我ならぬ人にや人になといふやこそあれちよにやちよにといふことわりたしかならす拾遺集に能宣朝臣の長歌にすへらきのちよもやちよとつかへんとよまれたるにても准へて知へしさゝれ石は萬葉第四にさゝれとのみもよめり

さほ川のさゝれふみわたりぬは玉の
こまのくるまは年にもあらぬか

此歌にさゝれを小石とかけり又第十四には

信濃なる千隈の川のさゝれしも
君しふみては玉とひろはん

とよめり是はいしを上略してよめりちひさき石をさゝれ石といふ和名集に礫とも細石ともかきてさゝれ石とよめり浪のちひさきをさゝら浪といひすこしある水をさゝら水といひ荻のちひさきをさゝらきといふにおなし　顯註にさゝれ石とは沙なりすなこともいひいさこともいふとかゝれたれと和名にも沙の外に出せり俗にくりいしなといふ躰なるかさゝれ石なり酉陽雜俎云和州臨江寺石得之水中僅如拳置於佛殿中石遂長不已經年重四十斤　眞名序に沙長爲巖之頌とは此歌を思ひてかゝれたれとまことはすこしかはらさるにあらす苔のむすは萬葉に生の字をかけり草のおふるを草むすとよめり　顯註にいはほの苔むすはあなかちに久しかるへきにあらねともたゝ巖になるはかりにて歌のすかたわろけれは苔のむすまてとはよめるなり和歌にかゝる事おほかり拾遺集に清愼公五十

賀し侍りける時の屏風にもとすけ

君か代を何にたとへんさゝれ石の
　いはほとならんほともあかねは

又同し集に東宮のいしなとりの石めしけれは三十一を包みて一に一文字をかきて參せける讀人不知

苔むさはひろひもかへんさゝれ石の
　數を皆とるよはひいくよそ

わたつみの濱の眞砂をかそへつゝ君か千とせのありかすにせん

顯註に第四句君か命のとあり　わたつみは濱をいはんためなり或抄にわたつ海は四海の總名なり四海に心ありといへりよもの海ともよまさるをしひて註して四海といへるに心あるといへるはあまりの事なり濱の眞砂のかきりなきをかそへて君かよはひの數にせんとなりちとせとはたゝ久しきをいふなり又は千年を眞砂ひとつにあてゝありかすにせんとよめる歟もしたゝ千年ならは眞砂かそへても詮なしあり數はあるかすなり

貫之集　たか年の數とかはよむゆきかひて
　千鳥啼なる濱の眞砂を

萬葉　やほか行濱の眞砂も我戀に
　あにまさらめや沖津島守

やほか行は八百日行なり

しほの山さしてのいそにすむ千鳥君か御代をはやちよとそなく

顯註にさしてのいそは甲斐國に有と能因か歌枕に侍るめれは鹽の山も同し所歟といへり愚按夫木抄第二十に題不知梁塵秘抄讀人しらす　かひにおかしき山の名はしらねなみさきしほの山むろふしかしはま山すゝのしけれるねはま山と有これによれは鹽の山甲斐に有海ならて川にも池にもいそとよみたれとさしての磯なといはんは海邊とこそ聞ゆれ夫木抄第廿に又しほの山甲斐保安二年閏五月贈左大臣家歌合郭公神祇伯顯仲卿

時鳥なくしほ山のいそわには
　たなゝしを舟出そわつろふ

これ今の歌によれり甲斐國は海なき國なれはおほつかなし上野に鹽の山あれと是も海なき國なり平家物語第七を見るに志保山打越て能登の山田中

親王塚の前にて陣を取とあり其前は能登越中の境なる志保山といひたれは越中に志保山有もしこれにてさしての磯もそこにやこれは賀の時立られたる屛風の繪に付て讀る歟志保山のさし出るといふやうにつゝきたるは自然の事なるへし或抄に八千世とそ鳴といふを千鳥の鳴聲はちよ〳〵と鳴やうなれはいへるとあれとさらはちよとこそなけとよむへしかれか聲に聞えぬ八千世とはいふへからす鶯をひとくと鳴といひ古々と鳴て古々鳥といふ事も文徳實錄に見えたれと又うくひすとのみ鳥の鳴らんけふはかりとそたつも鳴なりなとよめるはかれか聲にはあらて心をいひたれは千鳥と名におふ鳥のしけくなく聲なれは君か御代を八千世ましませとおさへてよめるなるへし日本後紀に右大臣園人の嵯峨天皇によみてたてまつれる歌

けふの日の池のほとりに時鳥
　たひらはちよと鳴はきつゝや

これ心をいへり又拾遺集の平兼盛

千年とそ草むらことに聞ゆなる
　こや松虫の聲には有らん

。これも唯松虫の名によせて千年と鳴やうによめり

我齢君かやちよに取そへて留置ては思ひ出にせよ

今按これは君より臣下に賀を給ふ時我をいはひ給ふによりて我よはひ久しかるへし同しくは此久しき齢を君かもとよりの八千世の上に取そへてとめ置て我思ひ出にせんとよめるかせよはみつから下知する也後鳥羽院の俊成卿に九十賀給ひける時

此杖はわかにはあらす我君の
　八百萬代の道のためなり

と俊成のよみ給へるに合て心得へし

仁和の御時僧正遍昭に七十の賀給ひける時の御歌

三代實錄第四十八云仁和元年十二月十八日戊辰延僧正法印大和尚位遍昭於仁壽殿申曲宴遍昭今年始滿七十天皇慶賀徹夜談賞太政大臣左右大臣預席焉四十より老の始なれは祝ひそめて十年ことに祝ふなり

かくしつゝとにもかくにもなからへて君か八千世に
あふよしもかな

とにもかくにもなからへてとはいかにもしてなからへおはしましてなり是は遍昭のやちよは疑ひな

けれは御みつからもそれにあひそひておはしまし
て御覧したきとの御心なり君かやちよとはきみは
公の字なり萬葉にかやうの事字に心を着てかける
事おほし光孝天皇はことに遍昭をたふとひ給へる
事三代實錄にあまた所見えたり

仁和のみかとのみこにおはしましける時に御をはの
やそちの賀にしろかねをつえにつくれりけるを見て
かの御をはにかはりてよめる　僧正遍昭

光孝天皇御母贈皇太后藤原澤子贈太政大臣緒繼女
也今御をはとは贈皇太后の姉妹の間なるへしいま
た親王の時せさせ給ふ賀なれとも後に位につかせ
給ふ故に御をはといへり下の貞辰の親王のをはと
いへるは是にわかてり

ちはやぶる神のきりけんつくからにちとせの坂もこ
えぬへらなり

拾遺集神樂とりものゝ歌杖

　あふ坂を今朝越くれは山人の
　　ちとせつけとてきれる杖なり

すめ神のみやまの杖に山人の
　　ちとせをいのりきれる御杖そ

此歌を本歌にてよまれけるなるへし萬葉にみかと
をも皇子をも神とよみつれは今も神のきりけんと
いふに其心あるへし顯註に杖といふ詞なくて神の
きりけるやとほめたるに杖は聞えたり千年の坂も
越ぬへらなりとは杖をつくといふにつきて神のき
りたる杖なれは越かたきちとせの坂もこゆといふ
にやたとへはうゐのおくやまけふこゆといふやう
に千年を過ん事有難けれはたゝ山といはんよりは
とて年のこゆるによせて坂にたとふるなり拾遺に
はよろつ世の坂とよめりこの歌をおもひてよめ
るにや　密勘云杖歌又不詠杖字如夏中餘花歌　今
案六帖にも顯註にも其外或抄等にもみな神やきり
けんとあるを今の本神のきりけんと有につきてい
はゝ神やきりけんと有ことく句をきりても心得へ
し又神のきりけん杖をつくからにといふ心につゝ
けても見るへし禮記云五十杖㆓於家㆒六十杖㆓於鄕㆒
七十杖㆓於國㆒八十杖㆓於朝㆒九十者天子欲㆑有㆑問焉
則就㆓其室㆒以㆑珍從　後漢書禮義志云仲秋之月縣
道仁皆案㆑戶比㆑民年始七十者授㆑之以㆓玉杖㆒餔㆓之
糜粥㆒八十九十禮加㆓賜玉杖長尺㆒端以㆓鳩鳥㆒爲㆑飾

鳩者不レ噎鳥也欲ニ老人不レ噎これらの心にて賀には杖を作るなるへし本朝の史傳にも老臣に杖を賜ひたる事あまた見えたり

ほりかはのおほひまうちきみの四十賀九條の家にてしける時によめる

在原業平朝臣

堀川のおほいまうちきみ太政大臣基經也昭宣公といふ貞觀十四年八月二十三日任右大臣左大將三十七歳貞觀十七年四十歳凡四十賀にいはひはしむる事はいにしへより有ければにや懷風藻云正六位上刀利宣令詩五言賀五八年云々從五位上上總守伊支連古麿一首五言賀五八年宴云々三代實錄第四十七云仁和元年夏四月廿日是日天皇於延曆寺東西院崇福梵釋元興寺五寺各請ニ十僧一始自今日五十日間轉ニ讀大般若經一賀ニ太政大臣滿ニ五十算一兼祝ニ壽命一也

櫻花ちりかひ曇れ老らくのこんと云なる道紛ふかに

此歌は下の雜歌においらくのこんとしりせはかとさしてといふ歌をおもひてよまれたるにや四十より老の始なれはこんといふなるとはいへり道まかふかには顯注道まかふはかりといへり密勘云かにといふ詞を賀部に詠る有其興歟

六帖別
櫻花けふちりくもれあかすして　別るゝ人も立とまるへく

さたときのみこのをはのよそちの賀を大井にてしける日よめる

きのこれをか

貞辰は清和天皇第七の皇子なり

龜の緒の山のいはねをとめて落る瀧の白玉千世の數かも

顯註云かめのをの山は龜山なり龜の尾に似たれはかめのを山といふへきを略して龜山といふ也尾といふ詞に付て龜の緒山ともかきて侍るめり今按本朝文粹第一前中書王兎裘賦云吾將入龜緒之巖隱歸兎裘而去來　自註云龜緒便龜山也猶如龜尾之讀故云此自註の心ならはもとは龜緒といふ心に名つけてそれを龜尾といふことく呼となり緒は和訓上聲なるを尾のことく去聲によめと註したまふなり今尾に於の假名を用るは誤なり遠を用へし初より龜尾の心に名付たらは龜尾と書て注し給まても有まし龜尾の心名付たる心はいまた知侍らす命長き物には鶴尾をいへは年の緒長き心に付たる歟是によれは顯昭の說表裏也又本朝文粹第十二同中書王祭

龜山神文云伏見此山之形以龜爲體云々これによるに山の姿龜に似たる故にやかて名とせるなりいはねをとめておつるとは磐根にそひておつるをいふとむるは春の歌のとめて折つるにおなしいつくの瀧のしら玉にても千世の數とはよみてんされと大井にてせられたる賀なれはたより有上に龜山といふ名もかた〳〵よせあれは歌はかやうによめるをよろしと心得へきなり

さたやすのみこのきさいの宮の五十の賀たてまつりける御屛風に櫻の花のちるしたに人の花見たるかたかけるをよめる　　藤原のおきかせ

貞保は清和天皇第五皇子御母二條后　此賀は寛平三年也伊勢集にきさいの宮の五十の賀せさせ給ふに御屛風にはらへする所なといひて三首有同時なるへし賀の時にむねと屛風をたつるは老人をいはふためなれは風にあてしとなるへし

いたつらに過る月日はおもほえて花見て暮す春そすくなき

朗詠には腰句おほけれと丶有　顯註に此歌に付て兩樣有一には第三句はおもほえてとよむへし其心は常に過る月日はおほかるやうにおほゆれと花見る春の心は月日のすくなきやうにおほゆといへり一にはいたつらに過る月日は何ともおほえさるに花見る春はすくなきやうにおほゆとよめるは甚深なる儀なり但あまりにや後の人の心にまかすへし今按に前の義まさるへし後撰歌にも

待くらす日はすかの根におもほえて　あふよしもなと玉の緒ならん

心言葉等今の歌を思へる歟然れは腰句もおもほゆる心歟おもほえすといふ心には叶はす　密勘云兩說と註せられたるを實義の山存也後撰歌は不可尋守此歌今いはくまことに後撰の歌は兩義の中の一義におのつからかよふといふへし今の歌によりてよめるにはあらす又兩義の中には後の說然るへしこと書によりて何となき歌の賀に入ことも下の泉の大將四十の賀の屛風の歌等例あれとこれは素性か仙宮に菊をわけているかたを露のまにいつかちとせをとよめる心にていたつらに過る月日はおほえすして花見て暮す春のすくなきにおとろきて思へは過にし月日はおほかりけるとはしめておほゆ

る心なるへし但或註に中の五文字すみていふ人もあり當流にはにこるへしとそ　又或抄に濁る說面白し定家卿も同心也とあるはこれは密勘にかへりてそむけり下句は歲時春尙少と作れる晩春の詩の心におなし新勅撰集に此句を題にて大江千里

貫之集　年月にまさる時なしと思へはや
　　　春しも常にすくなかるらん

貫之集　行月日おもほえねとも藤の花
　　　見れはくれぬる春そしらるゝ

元眞集屛風に十二月つこもり

いたつらに過る月日はおほかれと
　　　けふしもつもる年をこそおもへ

此元眞歌は今の歌をとれる歟いたつらに過しおほくの月日はおほえすしてけふ年のくるゝといふ日になりておとろきてつもれる年をおもふといへるにて今の腰句の心を知へし貫之集の歌も心相似たり又兼盛集に

世の中にたのしきものは思ふとち
　　　花見てくらす心なりけり

是も今の歌よりよめる歟

もとやすのみこの七十の賀のうしろの屛風によみてかきける　紀つらゆき

源氏花鳥餘情に八條式部卿本康親王仁明天皇第五御子母從四位上滋野濕子參議貞主女也又或系圖云本康仁明天皇第七皇子一品式部卿號八條宮母從四位下紀種子名虎女延喜元年薨　たきものゝ侍從黑方なとの方を作給へる人なり

春くれはやとに先咲梅の花君かちとせのかさしとそみる

やとはみこの宿なり家の物といふ心なり屛風にかける梅は咲て後ちる事なけれは君か千年のかさしとみるとはいへり

萬五　春されはまつ咲宿の梅の花
　　　ひとり見つゝやはる日くらさん

同八梅　今のこと心を常に思へらは
　　　まつ咲花のつちに落めやも

下旋頭歌に春されは野へにまつさく見れとあかぬ花云々

素性法師

いにしへにありきあらすはしらねともちとせのため

し君にはしめん
千年をへたる人はいにしへにありもあらすもしらねと君をはしめのためしにせんとなり日本紀に本の字をためしとよめり
ふして思ひおきてかそふる萬代は神そしるらんわか君のため
初の二句は伊勢物語にむかし男ふしておもひおきて思ひおもひあまりて云々六帖に
ふして思ひおきてなかむる春雨に　花の下ひもいかにとくらん
わする丶間なく切に思ふ心なりわか君といへるは本康のみこなりみこのために萬代をへたまへとふしては思ひおきてはかそふる心の内は神のしろしめさんとなり　日本紀云齶田蝦夷恩荷進而誓曰不爲官軍故持弓矢但奴等性食肉故持若爲官軍以儲弓矢齶田浦神知矣

藤原三善か六十賀によみける　在原しけはる
つるかめもちとせの後はしらなくにあかぬ心にまかせはて丶ん
この歌はある人在原のときはるかともいふ
文選劉孝標辨命論云朝秀晨終龜鵠千歳年之殊也
つるかめもよはひ久しといへともちとせのうちをかきりて其後をはかれらもしらねは君かよはひはいはふ人のあきたらす思ふ心にまかせて限りなかれとなり拾遺集に權中納言敦忠母の賀し侍りけるに源公忠朝臣
萬代も猶こそあかね君かため　思ふ心のかきりなければ
貫之集
百年といはふを我は聞なから　思ふかためはあかすそ有ける
古イ
左註を或抄に等類の義なりとあれとこれは此歌一首の上に滋春時春の異を傳へて當時ふたりともになき人にてたしかにしるせるものもなけれは多分につきてしけはると載れとも異説を捨ぬ心にて註せるにや侍らん滋春は上手にて時春は其名聞えさる歟

よしみねのつねなりかよそちの賀にむすめにかはりてよみ侍ける　そせい法師
良岑經也は文德實錄三代實錄に所々に出たる人なり三代實錄第二十七云貞觀十七年五月十九日庚子

從四位下行丹波守良岑朝臣經世卒　也と世と似たるによりて經世とも誤てかけり

萬代をまつにそ君をいはひつるちとせの陰にすまんと思へは

六帖には萬代のまつにそ年を祈りつると有て作者貫之也まつにそといふに松をかね祝ひつるといふに鶴をもたせたりむかしの歌にかゝる事おほしこれは此時松に鶴の居たるを作りていはへはあはせてよまれ侍ける成へし千年の陰は松によせて父をいひすまんと思へはゝ鶴によせてむすめみつからの事をいつまても父の陰を賴まん心なり　花鳥餘情云嘉祥三年仁明天皇四十御賀御挿頭臺造沈香山以金爲鶴令含御挿頭花

内侍のかみの右大將藤原朝臣の四十の賀しける時に四季のゑかけるうしろの屛風にかきつけたりける歌

内侍のかみは尙侍なり此尙侍は滿子也内大臣從一位高藤二女拾遺に三條尙侍といへる此人なり延喜のみかとの御をはなからやしなひ奉れる人なり右大將藤原朝臣は泉大將定國也高藤男右大臣右大將正二位此賀は延喜十四年の春にて此屛風もみかとより調して内侍のかみにたまへり躬恒集云延喜十四年二月十八日おほせによりて奉るいつみの大將の四十賀の屛風うちよりてうしてつかはすにかくれうの歌といへり四季の繪は源氏物語若菜上にうしろの屛風四てうは式部卿の宮なんせさせ給ひけるいみしくつくしてれいのしきのゑなれとめつらしきせんすい多きなとめなれすおもしろしといへり作者かはれるを皆素性とて入たるは素性に仰付られけるにや家集ともを勘ふるに其故見えす此時の歌こゝに八首見えたり作者近人也歌はこれに限らす家の集にも見え後の勅撰にも入れり此春の歌二首六帖には作者素性次は躬恒なりともに家集にも有春の歌とかゝぬは四季のゑかけるといひて後に夏秋等を書たれは春といふにおよはねはなりかすかのに若菜つみつゝ萬代をいはふ心は神そしるらん

六帖にはいはふを祈ると有序の小註に出せる歌也山高み雲井に見ゆる櫻花心のゆきてをらぬ日そなき

山の高くて雲井に見ゆる花のもとには身はゆくこ

とを得ねと思ひやる心は行てをらぬ日なしとなり見賢思齊といへる心もこもるへし道濟十體第十兩方の歌に出す

夏

めつらしき聲ならなくに時鳥こゝらの年をあかすも有哉

六帖に友則歌也友則家の集にも有或抄に貫之歌とあるは誤なり年毎におなしやうになくもめつらしきこゑならなくにとはいへり珍らしからすしてあかぬはまことのめつらしきなりたとへは君子交淡如水といふかことし萬葉に年のはにきなく物故時鳥きけはしのはしあはぬ日おほみ　としのはゝ註云毎年謂之等之乃波　續千載雜一山田法師

珍しき物かはあやな櫻花　こゝらの春にあかすも有かな

此歌今のこゝろと同しよみうつせるにや

秋

住の江の松を秋風吹くからに聲打そふるおきつしら浪

躬恒か歌なり彼家集に有六帖には素性か歌とす松吹風は浪にまかふ物なる上に沖津浪もよせきてこゑをそふとなり打はことはの字なるを波のうつにかねたり後撰集に

秋風の吹しく松は山なから　浪立かへる音そきこゆる

新古今に天暦御時御屛風のうた壬生忠見

秋風のせき吹こゆるたひことに　聲打そふる須磨の浦浪

これは行平の關吹こゆる須磨の浦風といふに今の歌を取合せてよめるか大納言經信の歌に

沖津風吹にけらしな住の江の　松のしつえをあらふ白浪

松を秋風吹からにといひてこゑ打そふるおきつ白浪には立をよふへからずや

千鳥鳴さほの川霧立ぬらし山の木葉も色まさりゆく

忠岑か家集には落句色かはりゆくと有拾遺には秋の部にふたゝひ載らる六帖には題まきにてまきの梢も色つきにけりと有　千鳥なくは佐保川の枕詞なり萬葉第四第六にも有然れは當時ならてもよむ

へきにいはんや木葉の色つくころは當時の事にも
よむへし萬葉第六に神龜二年五月の長歌に吉野の
川の河の瀨の清きをみれはかみへには千鳥しはな
きしもへにはかはつ妻よふとよめり

秋くれと色もかはらぬときは山よそのもみちを風そ
かしける

これも忠岑歌歟下句はいつくともなき紅葉の山風
にまかひくるを風そかしけるとはよめり拾遺集賀
に小野好古朝臣

吹風によそのもみちは散くれは
君かときはの陰そのとけき

此歌今の歌をもとゝしてよまれたりと見えたり

冬

白雪のふりしく時はみよし野の山した風に花そちり
ける

拾遺集には貫之歌也

春宮のうまれたまへる時にまゐりてよめる
典侍藤原よるかの朝臣

延喜第二皇子保明母中宮穩子攝政基經女延喜三年
誕生四年二月十日立爲太子十六年十月元服廿二年
三月薨廿一諡曰文彦太子此年改元延長

峰高きかすかの山にいつる日はくもる時なくてらす
へらなり

御母中宮は堀川殿の御むすめ藤原氏にてましませ
は東宮の生れさせ給へるを天兒屋根命のはかりこ
とにて天照大神天磐戸より出させたまふによそへ
てよめり

# 古今和歌餘材抄卷九　四十一首

## 離別歌

文選江文通別賦云黯然銷レ魂者唯別而已矣況秦呉兮絶國復燕宋兮千里

題しらす　　在原行平朝臣

立わかれいなはの山の嶺におふるまつとしきかは今かへりこん

和名集云因幡國法美郡稲羽(伊奈波)と載たれはいなはの山此所なるへし續後拾遺集離別におやのゐなかへ下りけるにおくりける藤原相如

吹風につけても悲しいなばなる　いなはにかゝる露の身なれは

此歌もこと書を合せて思ふにいなはなるいなはとは法美郡稲羽郷へ下りけるなるへし六帖にも國の題に此歌を入たるはいなはの山を武藏國の武藏野のごとく國と名を同しうせりと見る故也又國の題の歌五畿七道の次第に載たるに但馬の下石見の上に此歌有顯註に能因歌枕にも因幡の國に有よし也然るを美濃國にも稲葉山ある故に範兼卿抄に美濃に屬せられたるは用へからす文德實錄第七云齊衡二年春正月壬午朔丙午從四位下在原朝臣行平爲因幡守かゝれは思ふ人を置て因幡の任に下らはといふ心を立わかれいなはの山とつゝけたり後撰集に京に侍ける女子いかなる事か侍りけん心うしとてとゝめおきていなはの國へまかりけれはむすめ

打捨て君しいなはの露の身は　消ぬはかりそ有とたのむな

又躬恒集にいなはの守の下るに

ひとひたにみねは戀しき君かいなは　年の千とせをいかて過さん

これを續古今には紀貫之美濃介にてまかれりける時にわかれをしみてよめると有彼國にもいなは山有故歟君かいなはといへるは家集によるへし　續千載集羇旅に因幡守になりてくたる人に弓をつかはすとて大納言公任

梓弓引とゝめても見てしかな　いなは戀しとおもふへけれは

これらのつゝき今の歌と同し常に相見るほとはこと心も出來ぬ物なれとも別れてほとふるまゝにや

うく〳〵忘るゝ習なれは立わかれて行かは人の心お
ほつかなしといふ心こもれりしかはあれともみさ
ほある人は更にかはる心の出来ぬ事松の不變なる
かことしさやうに有て我をまつときかは今やかて
歸らんするそといふなり立別れいなはの山とつゝ
くるより峰におふる松といひて待を兼たり友に別
るゝ歟女に別るゝ歟知かたし　風體抄には此歌あ
まりにくさりすきたれと姿おかしきなりといへり

萬葉 かとにおるをとめは内に入りぬとも
　いたつらこひは今かへりこん

拾遺別 わするなと別路におふる葛の葉の
　秋風吹は今かへりこん

すかるなく秋の萩原朝たちてたひ行人をいつとかま
たん

すかるは日本紀の雄略紀に蜾蠃此云須我屢とあり
和名集云蠮螉(悦翁二音和名佐曾里)似蜂而細腰者也兼名苑云
一名蜾蠃(果裸二音)かくのみ註してすかるの和訓を出さ
れねとすてに日本紀にたしかなり總して日本紀萬
葉なとに出たる和名を和名集に出されさる事おほ
し萬葉集にこしほそのすかるをとめともすかるの
こときこしほそになともよめり詩にも蜂蝶とつゝ
けて春秋の花の時むつれきて鳴ものにすれは萬葉
第十には春なれはすかるなる野とよめりなるとは
羽をもて鳴虫なる故也今すかるなく秋の萩原とつ
ゝけたるも其心なり然るを鹿をすかると心得きた
れるは日本紀萬葉集をかんかへあはせすして萩は
鹿の花妻にてましはりてなく物なれはおしあてに
しかそと傳へ來れるなるへし日本紀に鹿をかせき
とこそ點したれとそれたに和名には見えすまして
すかるといへる事は物にもすへて見えぬ事なりす
かる鳴は只萩をいはんためにて萩原といへるは露
といはねと露ふかき萩原を分そほちて朝またき立
別れ行を見る悲しひをふくめり歌は古歌の姿也

　すかるふす野中の草や深からん
　　行かふ人の笠の見えぬは

色見えて身にもしむかなすかるなく
　　小萩か原の秋の夕風

風體抄 これらは鹿と心得たる歌なるへし

かきりなき雲井のよそにわかるとも人を心におくら
さんやは

題註に大和物語を引て下句は人を心におくらさらめやと有て遠く立はなれたれは心をはおもひおくるとよめるにこそとかゝれたりされと今の大和物語は今の本とかはらす又顕昭の本にはおくらせむやはとありて註は人々思ひやる心はさきたちてこそあれ立おくるへからすといふ心にや　密勘云人を心におくらせんやはと用ゆ身は野山の末に有なから人に心をおくらせぬ心なりとあり　今の本にはかくのことくおくらさんやはとのみありかくのことく別れゆくとも思ふ人を心の内はかりはおくらさんやおもかけを身にそへてゆかんとよめるとそきこえたる大和物語には遍昭の歌なり心今とかはれり源氏かけろふに今はかきりの道にしもわれをおくらかしけしきをたに見せたまはさりけるか

　つらき事とおもふに云々

をのゝちふるかみちのくのすけにまかりける時にはゝのよめる

たらちねのおやのまもりとあひそふる心はかりはせきなとゝめそ

顕註にたらちねのおやとは母をよめり萬葉には母とかきておやとよめり世の人たらちねはちゝはゝをいふちゝをたらちをといひ母をたらちめといふと思はれたれと父母をみなたらちねとよめり遍昭僧正出家の時にも

　たらちねはかゝれとてしもむは玉の

　　我黒髪をなてすや有けん

密勘云たらちね父母をあひかよはして用ゆわかせこ夫妻に用る體の古語は本義わきたるやうなれと又通用ゆ勿論歟　今いはくたらちねの事は序註に委しけれいまはいはす此歌はまもりなとにそへたる歟後撰にまもりをおきて侍ける男の心かはりにけれはそのまもりをかへしやるとてこれひらの朝臣のむすめいまき

　よとゝもになけきこりつむ身にしあれは

　　なそやまもりの有かひもなき

さたときのみこの家にてふちはらのきよふかあふみのすけにまかりける時にうまのはなむけしける夜よめる　　きのとしさた

けふわかれあすはあふみと思へとも夜や更ぬらん袖の露けき

あすはあふみとつゝけたるはあすは逢へき身といふ心を近江介にそへていふなり袖の露けさは露も曉になりておくものなれは別れををしむなみたをそれによせていへり　貫之集にみなもとのきんたゝの朝臣の近江のかみにくたるによめる

ねになきてわひしと思はぬほとなれと
　つねの心にかはりけるかな

あふみは都より近けれはねになきてわひしとおもはぬほとゝいふもあすはあふみとよめるに心はおなし又常の心にかはるといふと夜や更ぬらん袖の露けきといふ心も似たり

こしへまかりける人によみてつかはしける

歌に春霞とあれは書よみてつかはせるなり

かへる山ありとはきけと春霞立わかれなは戀しかるへき

かへる山は越前國敦賀郡に有和名集に鹿蒜とかけり延喜式神名帳に敦賀郡に加比留神社鹿蒜神社鹿蒜田口神社なと有比と倍と五音通すれはかひるともかへるともいふへし　行末にかへるといふ山有と聞てわかれの心を思ひなくさむれと春霞と共に立わかれていなは戀しからんとなり春霞は物を隔つる物なれはその心こもるへし

人のうまのはなむけによめる　きのつらゆき

をしむから戀しき物を白雲の立なん後はなにこゝちせん

六帖には第四句立わかれなはとあり別れんことをおしむ今よりはや戀しく思ふものを白雲と共に立出なん後は猶いかなる心ちかせんとなり白雲は立とつゝけんためなから遠く立へたてはの心なり

ともたちの人の國へまかりけるによめる
　在原しけはる

別れてはほとをへたつと思へはやかつ見なからにかねて戀しき

思へはやはおもへはにや下の句は上のおしむから戀しき物をといふに同し心也又下の戀の歌に見る物からや戀しかるへきとよめる心もおなしまた萬葉集第十二に

月かへて君をは見んと思へとも
　日もかへすしてこひのしけゝき

あつまのかたへまかりける人によみてつかはしける

いかこのあつゆき

思へとも身をしわけねはめに見えぬ心を君にたくへてそやる

發句は深く心をこめたる詞なり源氏にも此詞をもて發端とせる巻有ともなひてもゆかはやと思へとも宮つかへかきりある身に神通なとをもえねは身を分ちてたくひ行事もあたはさる故にせめてはめに見えぬ心をも君にそへてやるとなり

いせ物語　あかねとも岩にそかふるめに見えぬ　心を見せんよしのなけれは

思へとも身をしわけねはめかれせぬ　雪のつもるそわかこゝろなる

後撰　身をわくることのかたさにます鏡　影はかりをそ君にそへつる

源氏物語にいかて身をわけてしかなとおほし給ひける云々

あふ坂にて人をわかれける時によめる　なにはのよろつを

相坂のせきしまさしき物ならはあかすわかるゝ君をとゝめよ

あふ坂の名には心をつくへからす關は人を留る物なれはまさしき關にてあらはの心なり

題しらす　よみ人しらす

から衣たつ日はきかし朝露のおきてしゆけはけぬへきものを

此歌はある人つかさを給はりてあたらしきめにつきて年へてすみける人をすてゝたゝあすなんたつとはかりいへりける時にともかうもいはてよみてつかはしける

旅たつ日をはきかし我をおきてゆけは身も消ぬへくかなしき物をと也から衣はたつといはんためなからきりたてはこなたかなたにわかるゝ心あり萬葉第十三の長歌にきぬこそはそれやれぬれはぬひつゝも又もあふといへとよめるをおもふへし朝露はおきてといはん料なりけぬへきものをとは身を露にそへてよめり註のともかうもいはては詞はなくてなり哀なる歌なり

ひたちへまかりける時にふちはらのきみとしによみてつかはしける　寵（此名は音にいふへし）

藤原公利は本朝文粹三善清行異見封事に備中守に

もなられけるよし見えたる人なり
あさなけにみへききみとしたのまぬは思ひ立ぬる草
枕なり
あさなけには萬葉にあさにけにともよめりけには
異の字をかけり又日にけにともよめりともに日に
〳〵といふ心なり或抄朝夕にと註せるは叶はすと
もに都に有とてもつらくして日に〳〵逢見るへき
君ともたのまぬ故にせんかたなくたひには思ひた
つとなり恨むる心あり見へき君としといふに公利
をたちいれおもひ立ぬるにひたちをたちいれたり
後撰集に在原のとしはるかみまかりけるを聞て伊
勢

かけてたに我身の上と思ひきや
こんとし春の花を見しとは

これもとしはるといふ名をたち入たるは今の歌に
おなし
きのむねさたかあつまへまかりける時に人の家にや
とりてあかつきいてたつとてまかり申しけれは女の
よみて出せりける
日本紀に辭の字をまかりまうしすともいとままう
しすともよめり

よみ人しらす

えそしらぬ今心見よ命あらは我やわするゝ人やとは
ぬと
我や人を忘るゝ人や我をとはぬと命あらは今こゝ
ろみよ我はかならす君をわすれし此ことはたかふ
へからす只君かとひとはす末の心をかねてより我
はえしらぬといふ也ことと書によりてこゝにいれり

後拾遺雜四
絶やせん命そしらぬ吉野川
よし流れても心見よ君

續古今清少納言住吉の社にまうてける人跡りこん
まてわするなと申ける返事に

いつかたかしけりまさると忘れ草
よしすみよしのなからへて見よ

あひしりて侍ける人のあつまのかたへまかりけるを
おくるとてよめる

ふかやふ

雲井にもかよふ心のおくれねはわかると人に見ゆは
かりなり
腰句六帖にはふかき心のとあり雲居路のはるけき
所まて行かよふ心はおくれすしてたくひゆく物な

れは只わかるとけに人に見ゆるはかりにて心は更にわかれすと玄たしみ思ふ心を切によめるなり
とものあつまのかたへまかりける時によめる
よしみねのひてをか
白雲のこなたかなたに立別れ心をぬさとくたく旅哉
白雲は聚散常なけれはこなたかなたに立別れといはんためなから終に遠望を隔つる心なり心をぬさとくたくとはぬさはきぬなときりたちて旅行にちらす物なれは思ひに心をくたくによせたり　元稹か樂天に寄る詩の落句に兩地各傷無限神といへる心かよへり
つらゆき
白雲の八重にかさなるをちにても思はん人に心へたつな
白雲は限なく遠き心なり落句のへたつなは雲の縁なり
人をわかれける時によみける
別れてふことは色にもあらなくに心に玄みてわひしかるらん
心にしみつくやうに深く悲しきなり別れの色にもあらぬとは此玄みてをいはん料なり
あひしれりける人のこしのくにゝまかりて年へて京にまうてきて歸りける時によめる
凡河内みつね
かへる山なにそはありてあるかひはきてもとまらぬ名にこそ有けれ
かへるといふ山の有て何のかひそとおもふにあるかひは都にきてもとまらすしてかなたに早く歸る名にこそ有けれとなり
こしのくにへまかりける人によみてつかはしける
よそにのみこひやわたらん玄ら山のゆきみるへくもあらぬわか身は
下句は雪を見るに行て見るをかねたり
おとは山のほとりにて人をわかるとてよめる
つらゆき
おとは山こたかくなきて時鳥君か別れををしむへらなり
こたかくは木高くなりそれをなく音の高きにいひなせりかゝる折しも郭公さへ木高く鳴て我心にかよひて君か別れを惜むにやと思ふ心なり

藤原ののちかけかからもの丶つかひになか月のつこもりかたにまかりけるにうへのをのこども酒たうひけるついてによめる　　ふちはらのかねもち

から物の使とて大唐渤海等の商船渡り來る時其貨物を檢校する使也朝聘使の來れる時の勅使にはかはれり文徳實錄第三云散位從四位下藤原朝臣岳守承和五年出爲二太宰少貳一因レ檢二校大唐商人貨物一適得二元白詩筆一奏上帝甚耽悅授二從五位上一　此たくひ成へし敦忠家集にもちかもりからもの丶つかひにていくに云々藤原兼茂右近中將利基四男延長元年參議

もろともになきてとゞめよきり〳〵す秋の別れはをしくやはあらぬ

諸共になきてとゞめよはこれふたつの心あり一には我ともろともになりふたつには秋の別とは俊蔭か別と秋の別とを兼ていへはそれをもろともになり　千載集離別遠所にまかりける人のまうてきて曉歸りけるに九月つくる日虫の音あはれなりけれは紫式部

鳴よはるまかきの虫もとめかたき秋の別れや悲しかるらん

平もとのり

奥義抄云藏人右衛門尉基範作者部類云平元規左衛門尉叙爵播磨介中興子五位至延喜八年

秋きりのともに立いて丶わかれなははれぬ思ひにこひやわたらん

此初の五もしは上に春霞歸る道にし立ぬとおもへはと有春し霞のごとく常の秋霧には替りて秋の字に心ありこよひの明方に至りて暮る秋の霧と共に旅人も立出て別れなははれせぬ思ひに我はとまりゐて戀やわたらんとなりはれぬは霧の縁なり金葉集に藤原基俊

秋霧の立別れぬる君により　はれぬ思ひにまとひぬる哉

これは今の歌にてよまれけるなり

源のさねかつくしへゆあみんとてまかりける時山さきにてわかれをしみける所にてよめる

しろめ（見大和物語源告女江口遊女）

命たに心にかなふ物ならは何かわかれのかなしからまし

或抄に命たに心にかなふものにてあらは別はかなしかるましきなり命の有によりて別の悲しきなりと有是は命の心にかなはゝかゝる別にはとく去にてわかれをなけかしとよめりと思へるにや更に去からす命たに心にかなひて人の歸りこんを待つけてあひみんと兼てしるものならは別れをもなけかしとよめるなりさるにても別れはかなしかるへけれと歸るをまちつけんまてい今さへしられぬよりかくはよめるか女の歌にてことにあはれふかし

やまさきより神なひのもりまておくりに人々まかりてかへりかてにしてわかれをしみけるによめる

源　さね

實參議源舒男善朝臣弟右近少將　此神なひのもりに山崎の西にあり津のくに也今かうなひといふひの守いのことくいひならへり　新勅撰集旅部に宇治關白ありまのゆあみにまかりける道にて惜秋暮歌よみ侍けるに權大納言長家

神なひの森のあたりに宿はかれ
暮行秋もさそとまるらん

人やりの道ならなくに大かたはいきうしといひていさかへりなん

ひとやりとは心ならす人のやるなり六帖に

人やりにあらぬ物から玉しひも
ひとつ心に身をそ恨る

新拾遺集戀五西宮前左大臣

人やりにあらぬ物から恨るは
身のことわりも思ひしらすや

新古今集につくしに侍ける時秋野を見てよみ侍ける大納言經信

花見にと人やりならぬ野へにきて
心のかきりつくしつる哉

源氏に人やりの涙ならぬにとも人やりならぬ枕もうくはかりともかけり何事も心よりなすを人やりならぬといひ心よりなさぬを人やりといへりされはわれと思ひたつ旅は人やりならねは今はいきうしとて心にまかせていさ歸らんとなり

兼輔集　わたくしの別れなりせは秋の夜を
心つくしにゆくなといはまし

今はこれよりかへりねとさねかいひけるをりによみける

したはれてきにし心の身にしあれは歸るさまには道もしられす
したはれてこれまてきにし心の身にあれは猶ゆく人にこそたくふへけれ今は歸れといはれて歸らんとする道は我心ならねはまとひてしられすとなり
文選宋玉九辨曰憭慄若在遠行登山臨水兮送將歸潘岳秋興賦云夫送歸懷慕徒之戀兮遠行有羈旅之憤
藤原のこれをかゝむさしのすけにまかりける時におくりにあふさかをこゆとてよみける　つらゆき
かつこえてわかれもゆくかあふ坂は人たのめなる名にこそ有けれ
かつこえてはかくこえてといふ人もあれとたゝ且越にてかつこえそめてなりゆくかはゆくかなゝり人たのめとは人にたのましむるといふこゝろ也たのむるといふ同しことはなりたのむとのみいふにはかはれり萬葉集にとよむといふには響字をかきとよむるといふには令響とかけるになすらへは令憑とかくへしあふ坂といはゝ別れし人にもあふへきをかへりて今わかたれは人たのめなる名とはいふなり　拾遺集にものへまかりける人のおくりせき山まてし侍るとて貫之
別れゆくけふはまとひぬ逢坂は
かへりこん日の名にこそ有けれ
おなし人の集に
出て行道としれゝと逢坂は
歸らん時の名にこそ有けれ
おほえのちふるかこしへまかりけるうまのはなむけによめる　藤原のかねすけの朝臣
千古音人男也兼輔拾芥抄云右近中將利基六男從三位承平三年二月十六日薨五十七歲號堤中納言
君かゆく越の白山しらね共雲のまに〳〵跡は尋ねん
白山をうけてしらねともといへりゆきのまに〳〵は雪のまゝといふに行を兼たり雪ふむ跡にまかせて尋んとなり
人の花山にまうてきてゆふさりつかたかへりなんとしける時によめる　僧正遍昭
花山は山科の元慶寺也
夕くれのまかきは山と見えなゝんよるはこえしとやとりとるへく
夕くれのまかきは山と見えよ夜はこえしとてやと

りとるはかりにと人のとめまほしきあまりにせめてもわりなき事をよめるなり顯昭本にまかきは山と見えぬかなと有之腰句普通には見えなゝんと侍れは今すこし心得やすしされと兩説本ともに此定なれはさて心得へき也見えぬかなとあるは見えよかしとおもへる心にこそあひ見てしかなとよむことはもあひみよかしといふ心にこそよめはこれもおなしことなるへし　定家卿云家の本まかきは山と見えなゝんを用但見えぬかな深意不違同し僧正の歌に

　まてといはゝいともかしこし花山に
　　しはしとなかん鳥のねも哉

心いまと似たる歌也

　　　幽仙法師

山にのほりてかへりまうてきて人々わかれけるついてによめる

此山といへるは叡山也山門寺門とて山とは延暦寺をいひ寺とは園城寺をいひならへりかへりまうてきてといひなから歌には猶山の櫻とよまれたるは幽仙の坊の西坂本なとに有けるまて歸りてそこにて人々の別れけるなるへし　幽仙法師は天台宗の僧なから仁和寺にもすまれけるよし物に見えたり兼輔集云幽仙法師年久しくおほんたうしつかうまつりて律師になりたるあしたに

　足引の山のかけはしふみのほり
　　けふこそ嶺の花はをるらめ

この律師にかはりてそうせる

　日の光あたるあしたはいたゝきの
　　雪こそとけて袖ぬらしけれ

わかれをは山の櫻にまかせてんとめんとめしは花のまに〳〵

別れゆく人を我ちからにてとゝめかたけれはともかくも花のまゝにてあると花に打まかするなり

うりんゐんのみこの舍利會に山にのほりて歸りけるに櫻の花のもとにてよめる　　僧正遍昭

舍利會にうりん院のみこの山にのほりてと意得へし三代實錄第十三云貞觀八年六月廿一日甲午爲二延曆寺一立二式四條一其二一禁下制供二舍利會一職掌僧闕怠上曰舍利會者故座主圓仁授闍梨誓以護レ國令寺衆僧上中下倶隨喜連レ名同爲二檀越一闍梨生前如レ署奉行豈至二沒後一早致二背忘一况是奉レ酬二釋迦之德一亦

乃鎭二護朝家一之事乎而頃年差二職掌僧一無レ心二助修一永代事業何不二嚴制一今須下永爲二公會一世々勤修上其有二闕怠一之類一准二灌頂一將レ懲二其怠一

山風に櫻吹まき亂れなん花のまきれに立とまるへく

山風にといふにもしにつよく心をつくへからす古歌にかやうによめる事おほし

幽仙法師

ことならは君とまるへくにほはなんかへすは花のうきにやはあらぬ

君とまるへくは上にもいへることく君とまるはかりなりにほはなんは香にあらす色也とまるはかり色を見せてにほへとまるはかりに匂はすしてかへすは花の心のうきにてはなきかうきなりといふ心なり又花のためにもうきにやはあらぬともいふへしたとへは花の耻といはんかことし

仁和のみかとみこにおはしましける時にふるの瀧御らんしにおはしましてかへりたまひけるによめる

秋上の終に遍昭の里はあれてとよまれし其時なり

兼藝法師

大日經に阿闍梨の相を說中に通達三乘兼綜衆藝といへり兼藝の名は此心にてつかれけるなるへしあかすしてわかるゝなみた瀧にそふ水まさるとやしもは見ゆらん

しもとはみなしもなり河の末なりかんなりのつほにめしたりける日おほみきなとたうへてあめのいたうふりけれはゆふさりまて侍てまかり出侍ける折にさかつきを取て

つらゆき

日本紀に酒をおほみきとよめり大御酒の心なり大嘗會に白酒黑酒有しろきくろきとよめは酒をきとのみもいへりさか月をとりては兼覽王にさすとてよまれけるなるへし伊勢物語にもかりして天川にいたるといふ心をよみてさかつきはさせと有

秋萩の花をは雨に濡せ共君をはましてこそ思へ

これは萬葉集に

白露にあらそひかねてさける萩ちらはをしけん雨なふりこそ

ふりこそはふるなとねかふ詞なり此歌をおもひてよまれける歟萩はことに雨にあひてはうつろふ物なりされは萩を此雨にぬらしてうつろはする事はをしけれとそれよりもましてわたくしの家にまか

り出て君に別るゝかをしきとよめるなるへし

兼覽王

とよめりける返し

三代實錄第四十九云仁和二年正月七日授無位兼覽王從四位下拾芥抄云國康親王男宮內卿正四位下或云惟高親王男

をしむらん人の心をしらぬまに秋のしくれと身そふりにける

君か家をしりてさはかりをしむらん心をしらさりしまに秋のしくれと共に身のふりはてぬることの今更くやしくなんおほゆる若かゝらましかは君とけふより久しくあひかたらはましをといふ心なり心ある人にあひて餘命の久しかるましき事をなけくはかへりて人をほむる心あり　貫之の歌を思ふに八月の頃と見ゆるに秋の時雨と返しによまれたるは和名抄云霡雨小雨也禮之久 これは秋冬の間小雨なりといはぬ故にいつにても小雨をしくれといふと見えたり然れは秋のすゑより冬をかけてふるをいふのみならす秋の雨をもしくれとひろくよめるなるへし萬葉第十に

さをしかの心あひ思ふ秋萩を
しくれのふるに散そふをしも

さよふけてしくれなふりそ秋萩の
本葉のもみちちらまくをしも

後撰に萩の花を折て人につかはすとて讀人不知

時雨ふりふりなは人に見せもあへす
散なはをしみをれる秋萩

これら萩に時雨をよみ合せたり　蜻蛉日記に八月になりぬついたちの日雨ふりくらすしくれたちたるに云々

かねみのおほきみにはしめてものかたりしてわかれける時によめる　みつね

わかるれとうれしくも有かこよひよりあひみぬさきに何をこひまし

うれしくもあるかのかはかななりこれはおもしろくよめり後鳥羽院の夕煙むせふもうれしとよませ給へるもこれにちかし心はうかるへき事なれとうれしくも侍かなこよひよりさきの逢見ぬほとには何をかこひん心ある人にあひてかたりてこそこふることの出來て心をはなくさめ侍るへけれといふなり　屈原九歌云悲莫悲兮生別離樂莫樂兮新相知

此後の句を思ふへし貫之躬恒にかくよまれたる兼覧王いかはかりなる人にか侍りけん

題しらす　　　　讀人しらす

あかすして別るゝ袖の白玉は君か形見と包みてそ行

下におのか物からかたみとや見んと有に似たり涙といはねと袖の白玉といへるにそれと聞ゆ

限なく思ふ涙にそほちぬる袖はかはかし逢ん日迄に

限りなく思ふとは今の別れををしむをいふそほつとはぬるゝをいふなり古歌のすかたなり

かきくらしことはふらなん春雨にぬれきぬきせて君をとゝめん

顯註本にはかきくつしと有てかきくつしとはいたくふるといふ詞なり人のいたく物をいふをもかききくつしていふとこそ申せかきたれふるともいへりと註せらる密勘にともかくも沙汰なし同心歟　ことはふらなん此ことはといふ詞上にことならはといふを註せるに同し春雨にぬれきぬきせて君をとゝめんとはぬれ衣とはなき名をいふといへと其來歴たしかならすされと後撰集に貫之

春くれは咲てふことをぬれ衣にきするはかりの花にそ有ける

伊勢集
夜とゝもにわかぬれ衣となる物はわふる涙のきするなるへし

伊勢物語
名にしおはゝあたにそ有へきたはれ島浪のぬれ衣きるといふなり

六帖
かり衣の心のうちにほさなくになとか亂れて物思ひそする

これらなき事をいひつくるやうに聞ゆれは今はたゝ春雨にことよせて君をとゝめんといへるなるへしたゝぬれきぬとのみもよめと春雨にとつゝけるは詞に縁あり

しひて行人をとゝめん櫻花いつれを道とまとふまてちれ

ゑひて行とはまてといふ事をきかぬなり下にゑひてゆく駒のあしをれとよめり上の賀の歌に櫻花ちりかひくもれとよみさきに山風に櫻ふきまきみたれなんとよめり六帖の別の歌にも

櫻花けふちりくもれあかすして別るゝ人も立とまるへく

志かの山こえにていし井のもとにてものいひける人の別れけるをりによめる　　つらゆき

むすふ手のしつくににこる山の井のあかても人にわかれぬるかな

山の井の水は清くして淺けれは手にむすふ水の雫にも濁る故にあくはかりむすはぬによせてあかても人にわかるとはよそへれり風躰抄云此歌むすふ手のとおけるより雫ににこる山の井のといひてあかてもなといへる大かたすへて詞ことのつゝきすかた心かきりなく侍る歌なるへし歌の本躰はたゝ此歌なるへしといへり拾遺集戀に此歌をふたゝひ載られたることはかきに志かの山こえにて女の山の井にてあらひむすひてのむを見てとて次に三條の尙侍方たかへにわたりて歸るあしたに志つくににこるはかりの歌今はえよましと侍けれは車にのらんとしけるほとに

我なから別るゝ時は山の井の
　にこりしよりもわひしかりけり

かゝれは後に俊成卿執し思はれけるよりもとく此歌は名高かりけるなり

萬葉　泊瀨川はやみ早瀨をむすひあけて
　あかすや妹といひし君はも

六帖　むすふ手のいしまをせはみ奥山の
　いはかきしみつあかすも有哉

元眞集　あかすして別るゝけふに結ふ手の
　志つくならねとにこらさりけり

此元眞歌は今の歌を取てよめり

道にあへりける人のくるまに物をいひつきて別れける所にてよめる　　とものり

志たの帶の道はかた〳〵わかるとも行めくりてもあはんとそ思ふ

顯註に下の帶とは束帶にはうへ志たに帶をすれはいふなり帶は兩方にわかれて腰をまはして前にあへは帶のやうに方々にわかるともゆき廻りて終にはあはんとそへたるなりといへり　今按下の帶は道の枕詞なり伊弉諾尊日向の檍原にして御祓し給ふ時帶を投棄たまひしかは長道磐神となるこれ道路の神也委古事記日本紀等に見えたりよりて今下の帶の道とはつゝけたりたゞ帶のかなたこなたに

行めくるを道といへるとも心得へけれとこと書に
道にあへりけるといふよりあはせて見るへし行め
くりては歌の帯のみならすこと書の車にも縁有
萬葉に
玉のをのくゝりよせつゝ末つゐに
行はわかれておなしをにあらん
此離別歌の中に初より君か行こしの白山しらねと
もといふ歌まては旅の別の歌なり遍昭のまかきは
山とゝよまれたるより末に至りて其中に讀人不知
の歌四首を除ては雑にも入ぬへけれは附る心なる
へし

# 古今和歌餘材抄卷十　十六首

羇旅歌

左傳云陳敬仲曰羇旅之臣杜預曰羇寄旅客

もろこしにて月をみてよみける　安倍仲麿

仲麿は中務大輔船守か子にて元正天皇の御時遣唐使に隨て學生となりて入唐すといへり元正紀云靈龜二年八月癸亥以二從四位下多治比眞人縣守一爲二遣唐押使一從五位上安倍朝臣安麿爲二大使一正六位下藤原朝臣馬養爲二副使一大判官一人少判官二人錄事二人少錄事二人九月丙子以二從五位下大伴宿禰山守一代爲二遣唐大使一養老元年二月壬申朔遣唐使祠二神祇於蓋山之南一甲午遣唐使等拜朝三月己酉遣唐押使從四位下多治比眞人縣守賜二節刀一二年十二月壬申多治比眞人縣守等自二唐國一至甲戌進二節刀一此度使人略無二闕亡一前年大使從五位上坂合部宿禰大分亦隨而來歸光仁紀云寶龜元年三月乙丑朔丁卯初問二新羅使來由一之日金初正等言在レ唐大使藤原清河學生朝衡等屬二宿衛王子金隱居歸鄕一附レ書送二於鄕親一是以國王差二初正等一令レ送二清河等書一

云々十年五月丙寅前學生阿倍朝臣仲麿在レ唐而亡家口偏乏葬禮有レ闕勅賜二東絁一百匹白綿三百屯一丁卯唐使孫興進等歸レ國これは孫興進等か唐國へ歸るにつけて賜へる也養老元年遣唐使判官平群廣成歸朝すとて風に放たれ崑崙國に到り彼王歸る事を赦さす唐の人の彼國に來るにひそかにくせられて唐まて歸ける時仲麿に逢ひ唐帝に奏して粮食なと賜りて天平七年に平群廣成は歸朝せり又續日本紀云我朝臣學生播二名唐國一者唯大臣吉眞備朝衡二人而已仁明天皇承和三年詔詞曰故留學問贈從二位安陪朝臣仲滿大唐光錄大夫右散騎常侍兼御史中丞北海郡開國公贈潞州大都督朝衡可レ贈二正二位一身渉二鯨波一業成二麟角一詞峯聳レ峻學海揚レ漪顯位斯昇英聲已播如何不憖奠レ逐二言歸一唯有二挾天之章一長傳二擲地之響一追賁二幽壤一既隆二於前命一重叙二崇班一俾レ洽二於命詔一挾天之章とは今の歌をさせる詞なり

あまの原ふりさけみれはかすかなる三笠の山に出し月かも

此歌はむかしなかまろをもろこしに物ならはしにつかはしたりけるにあまたの年をへてえかへりまうてこさりけるをこのくにより又つかひまかりいたりけるにたくひてまうてきなんとていてたりけるにめいしうといふ所のうみにてかのくにの人うまのはなむけしけりよるになりて月のいと面白くさしいてたりけるをみてよめるとなんかたりつたふる今まつ先註より釋すへしなかまろをもろこしに物ならはしにつかはしたりけるにとは元正天皇養老元年に遣唐使につかはされける時吉備大臣いまた下道眞備といひけると阿倍仲麿と共に學生にて隨ひ行吉備公は聖武天皇天平五年に歸朝せらる仲麿は猶もろこしにとゝまる・唐書列傳二百二十聖武白龜年中眞人粟田復朝其副朝臣仲滿慕華不肯去易姓名曰朝衡久乃還此もろこしの紀錄誤有といへとも慕華不肯去なといへるさも侍るへし此國より又使まかりいたりけるにといへるは孝德天皇天平勝寶三年に藤原清河を遣唐使につかはされけるをいへり其間三十五年玄宗皇帝につかへて秘書監となるこなたの圖書頭也或著作郎とも云姓名を朝衡と改む或は晁卿ともいふたくひてまうてきなんとて出たりけるにとはたくひては萬葉に副をた

くふとよめりそひてといふに同し此度朝衡歸らんとする時かなたにてともなひける右丞相王維秘書包信陸海等別を惜みて各餞別の詩を贈る序は王維かけり唐詩訓解に載たり王維か詩積水不レ可レ極安知滄海東九州何處遠萬里若レ乘レ空向國惟看日歸帆但信レ風鰲身映レ天黒魚眼射、波紅鄕樹扶桑外主人孤島中別離方異城音信若爲通　陸海か詩西掖承ニ休澣一東隅返ニ故林一來稱鄭子學歸是越人吟馬上秋郊遠舟中曙海陰知ニ君懷三魏闕一萬里獨搖レ心包信か詩上才生ニ下國一東海是西隣九譯蕃君使千年聖主臣野情偏得レ禮木性本含レ眞錦帆乘レ風轉金裝照レ地新孤城開ニ蜃閣一曉日上ニ車輪一早識來朝歲塗山玉帛均めうしうは明州也こゝにて餞したる唐人は誰といふことをしらす月のいとおもしろくさし出たりけるをみてとは土佐日記によるに月はいつとしらねと廿日の夜なり廿日の月出にけり山のはもなくて海中よりそ出くるかやうなるを見てやむかし阿倍仲丸といひける人はもろこしにわたりてかへりきたる時に舟に乘るへき所にてかの國の人馬のはなむけしわかれをしみてかしこのから歌作りなとしけりあかすやありけん廿日の夜の月いつまてそ有けるその月は海よりそ出けるこれをみて仲丸のぬし我國かゝる歌なん神代より神も詠給今は上中下の人もかやうにわかれをしみよろこひもありかなしひもある時にはよむとてよめりける歌

あをうなはらふりさけみれは春日なる
　　三笠の山に出し月かも

とそよめりけるかの國の人聞しらましくおほえたれと事の心ををとこもしにさまをかきいたしてこゝのことはつたへたる人にいひしらせけれは心をやきゝ得たりけんいとおもひの外になんめてけるもろこしと此國とは詞ことなるものなれと日の影はおなしことなるへけれは人の心もおなしことにやあらんさて今そのかみを思ひやりてある人のよめる歌

都にて山のはに見し月なれと
　　浪より出て浪にこそいれ

とありさて淸河か舟に乘て歸るに風に遇て安南國にいたる此時李白か晁卿すてに漂溺せりと聞ていためる詩にいはく日本晁卿辭ニ帝都一征帆一片達ニ

方壺一明日不レ歸沈二碧海一白雲愁色滿二蒼梧一勝寶六年に副使大伴胡麿吉備眞備は歸朝す清河仲丸は彼國に留れり　歌の心は明州の津に出て明日は本國へ歸らんとうれしさかきりなき折しも東海より出くる月のさまむかしならの京に居て三笠の山に待出たりし月のやうにおもしろかりければそこにてよめりといふ義なり貫之の注にて感情殘りなく聞えたり土佐日記には五もしを青海原とかけりもとより兩様にいひつたへたる歌にてかくはかけるにやふりさけは萬葉には振仰とも振放ともかけり遠き物をふりあふきて見る心なり　此歌今の註幷土佐日記にて心明かなり天文道に達したる人なれは月を掌にいれてみる心なといふ説用るにたらす

今案萬葉に

月みれはおなし國なり山こそは　君かあたりをへたてたりけれ

文選謝希逸月賦云隔千里兮共明月　これらをおもひあはすへし又萬葉に今の初の二句のつゝきあまた有數をしらす　奥義抄に新撰髓腦にいにしへのよき歌とて沙彌滿誓の世中を何にたとへんといふ歌と此歌とを出されたるよしみえたり

萬十旋頭歌　春日なる三笠の山に月も出ぬかもさき山にさける櫻の花のみゆへく

同七同　春日なる三笠の山に月の舟いつたはれをののむさか月に影に見えつゝ

おきのくにゝなかされける時舟にのりていてたつとて京なる人のもとにつかはしける

小野たかむらの朝臣

續日本後紀第七云承和五年十二月己亥勅曰小野篁内含二綸旨一出二使外境一而稱レ病故不レ遂二國命一准二據律條一可レ處二絞刑一宜降二死罪一等一處中之遠流上仍配二流隱岐國一初造舶使造レ舶之日先自定二其次第一名レ之非二古例一也使等任レ之各駕而去一漂廻後大使上奏更復卜定換二其次第一第二舶改爲二第一一大使駕レ之於レ是副使篁怨懟陽病而留遂懷二幽憤一作二西道謠一以刺二遣唐之役一也其詞章興多犯二忌諱一嵯峨太上天皇覽レ之大怒令レ論二其罪一故有二此竄謫一同第九云七年二月戊申朔辛酉召二流人小野篁一六月乙巳朔辛酉流人小野篁入レ京被二黄衣一以拜謝同第十云八年九月戊辰朔乙卯授二無位小野朝臣篁正五位下一詔曰篁

雖レ期二奉國一猶悔レ失レ晨朕顧惟舊且愛二文才一故降二優貫一殊復二本爵一　文德實錄第四云仁壽二年十二月癸未參議左大辨從三位小野朝臣篁薨云々承和五年春聘唐使等四舶次第泛レ海而大使參議從四位上藤原常嗣所レ駕第一舶水沃穿缺有レ詔以二副使第二舶一改爲二大使第一舶一篁抗論曰朝議不定再三其事亦初定二舶次第一之日擇二取最者一爲二第一舶一分配之後再經二漂廻一今一朝改易配當危器以二己福利一代二他害損一論二之人情一是爲二逆施一既無二面目一何以率レ下篁家貧親老自亦尫瘵是篁汲レ水採レ薪當レ致二匹夫之孝一耳執論確乎不二復駕一レ船近者太宰鴻臚館有二唐人沈道古者一聞二篁有二才思一數以二詩賦一唱レ之毎視二其和一常美二艶藻一六年春正月遂以レ捍レ詔除爲二庶人一配二流隱岐國一在レ路賦二謫行吟七十韻一文章奇麗興味優遠知文之輩莫レ不二吟誦一凡當時文章天下無レ雙草隷之工古二王之倫後生習レ之者必爲二師摸一七年夏四月有レ詔特徵八年秋閏九月叙二本位一

わたの原八十島かけてこき出ぬと人にはつけよあまの釣舟

風體抄云人につけよといへるすかた心たくひなく侍るなりといへりわたの原は海上なり日本紀に海をわたとよめり八十島はおほくの島をいふ遠流の身として隱岐の國までの海路にあまたの島々を經へけれはやそしまかけてとはいふけふなにはのうらより舟出してこき出ぬといふ事を京に思ふ人にいひやるを海邊よりの使なれは海士といひて釣舟には用なけれともしのたらねはいひつゝけたるなり詩歌にかゝる例おほし然るをまことの海士のつり舟に心得てめのまへにことつくへき人はなくてあまのつり舟のみ見ゆれはなと釋せらるゝはひかこと也伊勢物語に業平齋宮の女のわらはに對して

　みるめかるかたはいつこそさをさして
　　我にをしへよあまの釣舟

といひかけたるも今とおなし心なり　萬葉第十五備後國水調郡長井浦にてよめる歌

　海原を八十島かゝりきぬれとも
　　ならの都はわすれかねつも

又廿卷に筑紫へつかはさるゝ防人か歌に

　もゝくまの道はきにしをまたさらに
　　八十嶋かけて別れかゆかん

萬葉にわたのそこといふに綿底とかりてかけれは
和田の原たもし濁るへからす
題しらす　よみ人しらす
宮古いてゝけふみかの原いつみ川かは風さむみころ
もかせ山
都を出てけふみかといふ心につゝけたり
伊勢物語に業平のなにはつをけふこそみつの浦こ
とにとよまれたるつゝきにおなし都を出てけふ三
日になるといふ心につゝけたるにはあらす　みか
のはらいつみ川かせ山みな山城國相樂郡に有衣か
せ山又秀句なり泉川もとは輪韓川といひけるを崇
神天皇の御時埴安彦と官軍と河をへたてゝいとみ
けるより時の人挑川といひけるを後によこなまり
て泉川といへるなり今木津川といふこれなり
ほの〳〵とあかしの浦の朝霧に嶋かくれゆく舟をし
そおもふ
此歌はある人のいはくかきのもとの人丸かなり
風體抄云柿本人丸歌也此歌上古中古末代まて相か
なへる歌なり顯注に夜のほの〳〵としらむをりそ
夜のあくるといへはあかしの浦とつゝけたりほの
〳〵とありあけの月ともよめりほの〳〵とは明行
空のおほろにてほのかにさたかならぬ心なりそれ
をあけほのとは申なりといへりこれまての註はよ
くて是より下の註おほつかなし嶋かくれ行舟をし
そ思ふとは沖の小嶋ともを帆かけたる舟とものか
くれあらはれゆくかあはれに心ほそきをおもふと
はよめり　四條大納言此歌をは三年まて不心得三
年後心得しはいかゝときこゆ或人あかしには嶋な
しと申侍るなり明石の沖にはるかにちり〳〵なる
嶋共見え侍りふたこ嶋みなほし島たかれ島くらけ
島家島なと打ちりたるやうに侍るを知さりけるな
り或は淡路山のあれはなと申は心得すそれは淡路
一國の大島なれはかくれ行舟なとおもひやり詠め
んもあはれならすや　密勘云三年はいたく心おそ
くこそ聞え侍れ道を心得て後十五番弁九品第一に
は入られけるにやあかしに島なきよし魔緣說歟勿
論今案先達の釋せられたる事なれと是は旅部の歌
なれは帆かけたる舟ともの澳の小嶋にかくれあら
はれゆくをあはれに心ほそくなかめやる心にあら
すそれならは海邊眺望なといふ題の歌にこそあら

めもし又別れをしたひておくれる時の歌なりとい
はゝそれも離別にこそ入へけれは此歌の心にあら
すいはんや明石の浦は淡路の岩屋といふ所へ向へ
り岩屋の北の磯邊は繪嶋なり其あはひの海わつか
に一里はかりにて更にひとつの小嶋ある事なし顯
昭の申されたる嶋々は明石よりは遥に西南の方に
あり家嶋は播磨の揖保郡にて淡路の西海上八九里
に及ひて何くれといふ小嶋は其めくりにあるよし
いへは明石よりは十五六里も過べしそこに嶋かく
れん舟は離婁か目にあらすは見ゆへからす然れは
顯昭もいまたよく彼あたりを見すして推量して申
されけるにや萬葉廿巻防人か歌に

　あかとき（曉なり）のかはたれ（彼は誰なり）時に嶋かき（隱なり）を
　　こきいにし舟のたつきしらすも

　ゆ（行なり）こさきになみ（浪言なり）なとゆらひしるへには
　　子をら妻をらおきてたにきぬ

此二首の東歌を引て此歌を心得へし初の歌はなに
はにてよめる歌今の歌は明石にてよめれは所こそ
ことなれ歌の心大かたおなしあかときは曉なりか
はたれ時はかれはたれ時なり夕くれをたそかれ時
といふかことししまかきは嶋陰なり然れは初二句
は今の上の句におなし次二句は今の嶋かくれゆく
舟をしぞといへるにおなしたつきしらすもといへ
るは今の歌の思ふなり次の。歌はゆくさきに浪の音
ゆりしりへには子を置妻を置てきぬると也これ又
今の舟をしそ思ふの心なり船をしのしもしは助語
にて船をそ思ふなりはる〳〵きぬる旅をしそ思ふ
なれをしそ思ふあはれとは思ふ人のむすはんこと
をしそ思ふなといふにおなし初の防人が歌なには
には嶋もなけれと嶋かけをこきいにし舟といへり
又さきの篁の八十嶋かけてこき出ぬとなにはより
京へいひつかはされたるを思ふへしおほよそ人丸
は持統天皇の御時石見の國よりのほりて宮仕し文
武天皇の末にいたりて石見へかへりて死せらる其
あひたに一たひ筑紫へも下らる其歌とも萬葉に見
えたり萬葉第三に人丸羇旅の歌とて一所に八首有
中に

　ともし火のあかしのなたにいる日にや
　　こきわかれなん家のあたりみす

此ともしひもあかしとつゝけんためなる事今のことしこれはなにはより出てあかしまてゆひて舟をとゝむる歌と見えたり今の歌は明ほのにあかしの浦をこき出て京に思ふ人なきにしもあらす海上の風波も又知かたし折あはれなる朝霧は胸のうちにもみちておほくのしまかくれゆかん舟の行へをかけてさま〳〵に思ふへし朝霧にすなはち誠に嶋かくれゆくと心得るより明石の沖に嶋のありなしをは論するなり朝霧のまきれに明石の浦より出とて行末遠く八十嶋かけて島かくれ行舟のゆくへを思ふと心得は所論なきなり源氏松風にむかしの人もあはれといひける浦の朝霧へたゝりゆくまゝにいと物悲しくて入道は心すみはつましくあくかれてなかめゐたりとかけるは心を得て轉し用る事あれは今の歌に妨なし

順集　ほの〳〵と明石の濱を見わたせは
　　春のみなともいつる舟のほ

重之　ほの〳〵とあかしの浦をこきくれは
　　きのふ戀しき浪そ立ける

昔の人はほの〳〵とあかしといふつゝきもかくはゝからすよみ侍けり又萬葉第三の長歌には居まち月あかしのとにはともつゝけ第十五にはあか心あかしのうらに舟とめてとよめり今のほの〳〵と明石とつゝけたるに同し心なり又此歌を俗に此集の中にてことに習あるやうにいへるも心得す人丸の歌にて和歌九品にも上々としこれは詞もたへにしてあまりの心さへ有なりといはれたるほとの歌なれはとおもひてしひていふなるへし貫之新撰和歌集序にこれらの弘仁以前の歌とも此集中にて玄中に玄を取時皆のそかれたる事鏡に向ふよりも明らかなるものなり此集の肝要の歌ならはいかてかこれをもらさるへきや但此は歌の玄々にあらさるにはあらす上代の篇はおほくは古賢の語を帶するゆゑに一例して古賢の語なきをもとらぬ心なり彼序はすてに序註に引るかことし

あつまのかたへ友とする人ひとりふたりいさなひていきけり三河國八はしといふところにいたりけるにその川のほとりにかきつはたいとおもしろくさけりけるを見て木のかけにおりゐてかきつはたといふいつもじを句のかしらにすゑて旅の心をよまんとてよ

める　　　　　在原業平朝臣

おりゐては日本紀に下の一字をよめり　いせ物語にはかきつはたといふいつもじを句のかみにすゑてたびの心をよめといひければよめるとあり心少たかへりこれらのこと書伊勢物語に大かた同しきは業平の日記なとのありけるをともに取用てかける歟伊勢物語は貫之なとの歌猶後の歌も有順なとの名もあれは後の人のかける物と見ゆ然れは此集に彼物語を取てはかくへからすもしは此集のことは書を彼物語に取て猶委く事をそへたる歟

から衣きつゝなれにしつましあれははる〴〵きぬる旅をしそ思ふ

きつゝもなれにしもつまもはる〴〵も皆衣の縁也折句の歌なれは縁の詞かちなるもくるしからすさむしの國としもつふさの國との中にある角田川のほとりにいたりて都のいとこひしう覺えけれはしはし河のほとりにおりゐて思ひやれはかきりなくとほくもきにけるかなと思ひわひてなかめをるにわたしもりはや船にのれ日もくれぬといひければ舟にのりてわたらんとするにみな人物わひしくて京に思ふ人なくしもあらすさるをりにしろき鳥のはしとあしとあかき川のほとりにあそひけり京にはみえぬ鳥なりければみな人みしらすわたしもりにこれは何鳥そととひければこれなんみやこ鳥といひけるをきゝてよめる

すみた川は萬葉集に辨基

まつち山ゆふこえゆきていほさきの　すみた川原にひとりかもねん

これは駿河に有といへり六帖に國の題に

出羽なるあほとの關のすみた川　なかれてもみん水やにこると

かゝれは同名なる所三所なり　菅原孝標女のかゝれたる更級記に云しもつさの國とむさしのさかひにてあるふとゐ川といふからみのせまつさとのわたりのつにとまりて云々　又いはく野山あしをきの中をわくるより外のことなくてむさしとさかみとの中にゐてあすた川といふて在五中將のいさことゝはんとよみけるわたりなり中將のしふには角田川と有舟にてわたりぬれはさかみのくにゝなりぬ云々是は此集と伊勢物かたりとにたかへり業平

集とは伊勢物語をいふ歟昔別に家集ありける歟今あるは用るにたらぬものなり孝標女はみつからみちのくよりのほるとて見てかゝれたれは捨へきにあらす萬葉と更級記とを引て今の集に合すれは角太川の所さためかたきに似たり　わたしもりはや舟にのれ日も暮ぬといひけれは　毛詩云招々舟子謝宣遠詩云榜人理二行艫一　土佐日記にかちとりものゝあはれもしらておのれし酒をくらひつれははやくいなんとてしほみちぬ風も吹ぬへしとさわけは舟にのりなんとす云々都鳥は伊勢物語にさるをりしも白き鳥のはしとあしとあかきしきのおほきさなる水のうへにあそひつゝいをゝくふとかけり或人鴫よりは今すこしおほきにてかもめの中にましりてあそふ物なり遠き物はちいさくみゆれは鴫の大さとはかけるにこそと申き

萬葉
舟きほふほり江の河のみなきはに
　来居つゝなくは都鳥かも

六帖
めつらしく啼もきたるか都鳥
　いつれの空に年を經ぬらん

うつほ物語
わひ人の住ふるやとは都鳥
　おとつれたえて年そへにける

同
なにしあふ關をも越し都鳥
　こゑするかたをもゝしきにして

名にしおはゝいさことゝはん都鳥わかおもふ人はありやなしやと

齋宮女御集
人をなをうらみつへしや都鳥
　ありやとたにもとふをきかねは

續古今雜上に新院いまた御くらゐの時都鳥の侍けるを題にて人々にうたよむへきよし仰せられける時少將内侍
吹風ものとけき花の都鳥
　をさまれる世のことやとはまし

和泉式部
ことゝはゝ有のまに〳〵都鳥
　みやこのことを我につけなん

拾遺集
心ありてとふにはあらす世中に
　ありやなしやのきかまほしきそ

題しらす　　よみ人しらす
きたへ行雁そ啼なるつれてこしかすはたらてや歸るへらなる

此歌はある人をとこ女もろともに人のくにへまかりけりをとこまかりいたりてすなはちみまかりければ女ひとり京へかへりける道にかへる雁のなきけるをきゝてよめるとなんいふ

わかすこ〳〵と獨歸る心のかなしさに故郷へ歸る雁はうれしかるへきことわりなるになきゆくはおのれもつれてこしめをの間とられなとして數のたらて歸るなるへしといふ心なり此女の心のうち思ひやるへし　土佐日記にくたりし時の人の數たらねは古き歌に數はたらてそ歸るへらなるといふ事を思ひ出て人のよめる云々或抄云これは滋春甲斐國に女とくたりけるか滋春の死て女の京へ歸りのほる道にてよめる由かきたり哀傷部の滋春か歌のこと書大和物語にかけるも女をくして下れるよしにはみえねは用へからす文選謝靈運詩云羈雌戀舊侶迷鳥懐故林

あつまのかたより京へまうてくとて道にてよめる

これは歌を思ふに京へかへりまうてくとてなり

おと

山隱す春の霞そ恨めしきいつれ都のさかひなるらん

六帖には第二句霞そ春はとあり

六帖いせ　けにし上に又もけぬへき春霞
　　かすめるかたを都と思へは

こしの國へまかりける時白山を見てよめる

甲斐少目の時の事なるへし

みつね

きえはつる時しなければこしちなる白山の名は雪にそ有ける

後撰　あら玉の年をわたりてあるかうへに
　　降つむ雪のきえぬ白山

新勅撰　昔より名にふりつめる白山の
　　雲井の雪はきゆるともなし

紫式部集　名に高きこしの白山雪なれは
　　いふきのたけを何とこそみね

あつまへまかりける道にてよめる

拾遺別にはゐなかへまかりける時とて作者歌合同

つらゆき

糸による物ならなくに別路の心細くもおもほゆる哉

源氏物語には第二句物とはなしにと引てかけり萬

葉のあかゝすそひきといふ歌も源氏にはあかもたれひきと引たれはそらにおほえたるかたかへるなるへし家集も今と同し

かひのくにへまかりける時みちにてよめる

みつね

夜をさむみおく初霜をはらひつゝ草の枕にあまたゝひねぬ

あまたゝひといふに旅をかねたり

たちまの國のゆへまかりける時にふたみの浦といふ所にとまりて夕さりのかれいひたうへけるにともにありける人々歌よみけるつゐてによめる

ふちはらのかねすけ

たちまの湯は城崎の湯なるへし二見のうらは播磨なり今所のものうたみといひならへりかれいひは餉をかれいひとよめり文選鮑明遠東門行云居人掩閨臥行子夜中飯

夕つく夜おほつかなきを玉くしけふたみのうらはあけてこそみめ

夕つくよの比は影もまたほのかなれはおほつかなきをといへり

萬葉第十
春されは木のはのくれの夕月夜
おほつかなくも山陰にして

六帖第五
春霞たなひくけふの夕月夜
おほつかなくも戀わたるかな

玉くしけふたみのうらはあけてこそみめとはくしけのふたとつゝけて箱もあけぬほとはうちのゆかしくおほつかなけれは夜明てよく／＼みんといふ心をそへていへり

玉くしけいつしかあけんいせの海の
浦を行つゝ玉もひろはん

此いつしか明んといへるも玉くしけのうちのゆかしきによする心なり

重之集
玉くしけふたみの浦の中におつる
月の影こそかゝみなりけれ

同
いつくそやふたみの浦の有といひし
心をいれてとはましものを

二見は伊勢にも同名あり重之か二首はいつれをよめるにか知かたし

これたかのみこのともにかりにまかりける時にあま

の河といふ所の川のほとりにおりゐてさけなとのみけるつゐてにみこのいひけらくかりしてあまの川原にいたるといふ心をよみてさか月はさせといひけれはよめる　　ありはらのなりひら朝臣

かりくらしたなはたつめにやとからんあまのかはらに我はきにけり

　宿からんといふを句絶ともすへし又やとからんする天河原にとつゝけてもよむへし

みこ此歌をかへす〱よみつゝ返しえせすなりにけれはともに侍てよめる　　きのありつね

ひとゝせにひとたひきます君まてはやとかす人もあらしとそ思ふ

　一たひきます君はひこほしなりまてはゝ君をまてはなり或抄にてもしを濁て惟喬親王の御事なりといふは用へからすやとかす人はたなはたつめなり

萬葉　わたしもり早舟よせよ一とせに
　　ふたゝひきます君ならなくに

同　ひとゝせに七日の夜のみくる人の
　　戀もつきねは夜のふけゆくを

朱雀院のならにおはしましける時にたむけ山にてよめる

ならにおはしますは御幸なり御供に手向山にてよむとなり　萬葉第三長屋王駐馬寧樂山作歌
　　さほ過てならのたむけにおくぬさは
　　　妹をめかれすあひみしめとそ

　　　　　すかはらの朝臣

此たひはぬさもとりあへす手向山紅葉の錦神のまに〱

　此たひといふに旅を兼たまへる歟　後撰にをとこのたひよりまてきて今なんきつきたるといひて侍ける返事に
　　草枕此たひへつる年月の
　　　うきはかへりてうれしからなん
　此御歌も取あへすを何ともすへしその時はぬさは誠のぬさにて御幸の御供にて私ならねはぬさも取あへねはたゝ手向山の紅葉ゝ錦を心をも　奉れは神の御心のまゝにうけたまへとなり又取あへす手向山ともつゝけさせたまへりとも聞ゆ其時はぬさは紅葉の錦なりもとは二に分るれと末の心はひと

つなり　　　　素性法師

手向にはつゝりの袖もきるへきに紅葉にあける神やかへさん

つゝりの袖は袈裟なり袈裟は切裁てつゝれるものなれはなりされは神の手向には袈裟を切てもぬさとすへきを紅葉の錦おのつからぬさとちる比なれは色もなきぬさをは神もうけすして返しやせましとてぬさにもきりたゝぬとなり　顕昭云此歌は源光僧正の夢に素性か一世の歌と告けるとそ語り傳へて侍る

後拾遺集に素性

梅かえを折はつゝれる衣手に
思ひもかけぬうつり香そする

# 古今和歌餘材抄卷十一

四十七首滅歌
五首合五十二首

物名

世にはこれをかくし題といふかくせる物の心をやがてよめるも有又こと事によみなせるも有心にまかせたり

うくひす　　藤原としゆきの朝臣

心から花のしつくにそほちつゝうくひすとのみ鳥のなくらん

六帖には貫之の歌とすたゝ此集によるへし　うくひすとのみは厭不干とのみ也鳥とは或注に諸鳥なりとあれと是は鶯也次の歌も郭公の心をよめるに准ふへし花のしつくにそほちつるそれは心からにてこそあるをうくもひぬ事と花のしつくのしひてぬらすらんやうに恨みかほになくらんよと也然るに承暦二年殿上歌合に中納言匡房卿・

いかなれは春くるからに鶯の
おのれか名をは人に告らん

文治二年百首に前中納言定家卿

うくひすと鳴つる鳥や春きぬと
めくむわかなも人にしらする
これらはおのか名をやかて鳴とよまれたるはもし此敵行歌を意得損せられけるにや切聲に鳴時ひとくと聞ゆるをこそひとく〳〵と鳴くとよみたれ常に法花經とさへつると俗にいひならはしてけにもさは聞ゆるをいかなる鶯かおのか名のやうには鳴待るおもひかたき事也

ほとゝきす

くへきほとゝきすきぬれや待わひて鳴なる聲の人をとよむる

すきぬれやは過ぬれはにや也とよむるはとよましむる也時鳥のくへきほとの時過ぬれはにやたれ〳〵も待わひて後に鳴聲の人をとよましむると也

うつせみ　在原しけはる

浪のうつせみれは玉そみたれけるひろはゝ袖にはかなからんや

これは物によせて忠岑かよき歌のおほきを譽る心なるへしはかなからんやははかなからすして袖に玉のみちるといふ心也

返し　壬生忠岑

たもとよりはなれて玉をつゝまめやこれなんそれとうつせみんかし

これなんそれとはこれなん玉といふ心也これは滋春か歌の才をほめて君かたもとより外にはなれて玉をつゝむものあらんやたゝこれなん玉と打瀬見んとなるへし

うめ　よみ人しらす

あなうめにつねなるへくも見えぬかな戀しかるへき香は匂ひつゝ

此歌はやかて梅をよめりあなうめには痛厭目にてあなうし目にと云也古語に痛の字をあなとよめり顯注に萬葉におほくはむめの花とかけり又うめの花ともかけりこれは顯注の誤也萬葉は皆今のことくうめとのみかけり一所もむめとかける事なし和名集も同し順集に
うめつ河このくれよりそなかれての
うれしきせゝは見えんみなそこ
序云うもしをたまはりて云々是によれは此集の頃はいよ〳〵むめとはかくへからす

かにはさくら　つらゆき

和名集云玉篇云樺戸花胡化二反和名加波又云加仁波今櫻皮有之 萬葉には櫻皮

とかきてかにはとよめり顯注に朱櫻とかけりとあれともこれはあやまれる歟和名集云朱櫻波々加一云爾波佐久良かくあれはにはさくらにてこそあれ衣の色表蘇芳裏うす色なるをはかはさくらといへり花の色のすこし赤かるへきにこそ是も又顯注なり源氏野分にみとほしあらはなるひさしのおましにゐたまへる人ものにまさるへくもあらすけたかくきよらかにさとにほふこゝちはしてはるのあけほの霞のまよりおもしろきかはさくらの咲みたれたる心ちす云々　これによれはかはさくらは櫻の中に一種ハ別名也又まほろしにほかの花は一重ちりて八重さく花櫻さかり過てかは櫻はひらけ藤はおくれて色つきなとこそはすめるを云々

かつけとも浪のなかにはさくられて風吹ことにうきしつむ玉

風吹ことにうきしつみて玉とは波の見ゆれとさりとてかつけとも浪の中には其玉のさくりえられぬ也かつくは日本紀に探の字をかき萬葉には潛の字をかけりさくられてはさくられすして也玉といへるも浪の事也

すもゝのはな

すもゝは李也酸桃といふ心にて實の味の酢けれは名つけたり

今いくか春しなけれは鶯も物はなかめておもふへらなり

今幾日といふはかりも殘れる春のなけれはものおもふ時人のなかめするやうに鶯も何となくなかめて物思ふへしと也

からもゝのはな　　ふかやふ

杏也韓桃といふ心に名つけたり

あふからも物はなほこそかなしけれ別れむことをかねて思へは

かねて別れを思ひやれはあふ時から猶悲しきと也文選に謝靈運弟惠連遇詩云夕慮二曉月流一朝忘二曛日馳一

たちはな　　をのゝしけかけ

足引の山たちはなれ行雲の宿り定ぬ世にこそ有けれ

歌の心明かなり

をかたまの木　　とものり

いかなる木ともしらす六帖等にも出さすこの集よ

り外にはよます或抄にをかたまの木說々おほしと
いへともさしたる證據なし分明の相傳もなしとい
へり是を正說とすへし
みよしのゝよしのゝ瀧にうかひ出るあはをか玉のき
ゆとみゆらん　　よみ人しらす
やまかきの木
和名集に鹿心柹とかきてやまかきとよめり兼名苑
注云鹿心柹々之小而長也今案張平南京賦に山柹あ
り同しき歟
秋はきぬいまやまかきのきり〳〵すよな〳〵なかん
風のさむさに
歌の心明か也
あふひかつら
葵と桂と也賀茂祭にともに用る物也葵を桂の枝に
かくるをもろかつらといへり
かくはかりあふひのまれになる人をいかゝいつらし
とおもはさるへき
ひとめゆゑ後にあふひのはるけくはわかつらきにや
思ひなされん
人目をつゝみて逢日の遠くは人はさはおもはてわ
かつらきゆへなりと思ひなさんと也
くたに　　　　僧正遍昭
苦丹とかきて牡丹の類といへり　源氏をとめに北
ひんかしは凉しけなるいつみ有てくたになとやう
の花の草々うゑて春秋の木草其中にうちまぜたり
とかゝれは夏咲く物と見えたり或抄に同じ物語に
つたこたにといふを引たれとそれにはあらす
ちりぬれは後はあくたになる花を思ひしらすもまと
ふてふかな
六帖くたに貫之
水上を山にておつるたきつせのしつくのたえすそゝく谷蔭
さうひ　　つらゆき
薔薇也和名集云本草云薔薇一名墻蘼音微今案薇蘼通
我はけさうひにそ見つる花の色をあたなる物といふ
へかりけり
けさうひにそ見ゑとは催馬樂高砂にけさひらけた
る初花にといへり奥義抄云うひにそ見つるとはは
しめてそ見つるといへる也うひをとこうひたち皆
はしめたること也伊勢物語にうひかうふりなと
いへり今いはく今の人うゐと書は誤れり是を證と

すへし

をみなへし　とものり

白露を玉にぬくとやさゝかにの花にも葉にも糸をみなへし

菅萬　白露のおけるあしたのをみなへし
花にも葉にも玉そかゝれる

朝露を分そほちつゝ花みんと今そ野山をみなへしりぬる

此歌菅萬には
露草にぬれそほちつゝ花見んと
しらぬ山邊をみなへ知にき
とあり下句は今そ野山を經て皆よく知ぬと也
朱雀院のをみなへしあはせの時にをみなへしといふいつもしを句のかしらに置てよめる　ゆらゆき

をくら山みね立ならしなく鹿のへにけん秋をしる人そなき

これは折句の歌也拾遺には此歌を雜秋に載らる
同人家集　さを鹿の尾上にさける秋萩を
しからみへぬる年そしられぬ

きちかうの花

桔梗也和名集にありのあふきといふ和名あれと歌によまるへき名にあらす

秋ちかう野は成にけり白露のおける草葉も色かはりゆく

此秋ちかうは螢火亂飛秋已近なといへることく夏にしていふにあらす秋なからも草のかるへき時をいへり萬葉第十秋の歌に人丸
夕されは野への秋萩うらわかみ
露にしかれて秋待かたし
露にしかれてはしは助語也露にかれて也此歌をおもふへし
六帖　秋の月ちかうてらすと見えつるは
露にうつろふ光なりけり
拾遺　あた人のまかきちかうな花うゑそ
匂もあへす折つくしけり
よみ人しらす

しほに

紫苑也和名のしなれとも是も歌めかねは音により來れり六帖に數首あり

ふりはへていさふる里の花見んとこしを匂ひそうつろひにける

ふりはへてはわさとの心也春の歌に源氏を引たる
かことし

りうたんの花　　　　もとのり

龍膽とかけり陶隱居本草注云味甚苦故以レ膽爲レ名
也和名はゑやみくさともにかなともいふりんたう
ともいふはりうたんの音の轉せる也

我やとの花ふみしたく鳥うたん野はなけれはやこゝ
にしもくる

友則集にはふみしたくをふみちらすこゝにしもく
るをこゝにしもなくとあり鳥うたんとはつふてな
と打てたてんと也　第四の句顯注には野はなけな
るをとありて此歌普通の本には野はなけれはやこ
ゝにしもくるとあるを兩説本には野はなけなるを
とあるはなしといふ詞也野はなきに何せんとこゝ
にしもくるそといふ詞也　密勘家の本野はなけれ
はやを用但野はなけなるを共心不違歟只可隨人々
之所存

六帖に貫之
鶯の花ふみしたくこのもとは
いたく雪ふるはるへなりけり

鶯のしたかむ中に梅の花
散のこらなん春のかたみに

後の歌は物の名にたかむなをよめる也

拾遺りうたん
川上に今よりうたんあしろ木は
まつもみちはやよらんとすらん
よみ人しらす

をはな

萬葉に尾花とかけりすゝきの異名也穗に出たるか
鳥獸の尾に似たる故の名なるへし此尾の字萬葉に
はてにをはのをにかける事數しらす今の歌もおな
し今の世をはなとかくはかへりてたかへり　日本
紀萬葉和名等のかきやう一同にて末にいたりてた
かへる事おほし

ありと見てたのむそかたき空蟬の世をはなしとや思
ひなしてん

六帖かけろふ
ありと見て頼むそかたきかけろふの
いつともしらぬ身とはしる〳〵

けにこし　　やたへの名實 矢田部

牽牛子也和語に難波をなにはといひ丹波をたにには
といふかことし　和名集云牽牛子陶隱居本草注云
牽牛子 和名阿佐加保 此出於田舍凡人取之牽牛易藥故以名
之

うちつけにこしとや花の色を見んおく白露のそむる
はかりを
後撰うちつけはうちあたりの心也
打つけに物そかなしき木葉ちる　秋のはしめをけふとおもへは
拾遺けにこし
忘れにし人のさらにもまたるゝか　むけにこしとはおもふ物から
二條の后春宮のみやす所と申ける時にめとにけつり
花させりけるをよませたまひける　文屋やすひて
めとは奥義抄に蓍といふ草をゆひあつめてそれに
けつり花をさすやうにいへり　或抄云一禪御說古
今三種の秘事の中にめとにけつり花さすといふ事
有說々不同家々の所存各別也定家卿の所用はめと
ゝいふ草有其草に作花したる也といへり此趣を用
へき也家說佛名なとの時蓍につくり花をして瓶に
さゝるゝ事也又說めとゝは草を花たてのやうにむ
すひてけつり花たてたる也蓍ははゝき木といふも
の也きはめて枝しけき物也是に花を作りて付たり
けるにや　又說蓍は草名也昔は佛名なとに佛に献
物也といへり或說に初春の初子のけふの玉はゝき
といふ歌めとをは玉はゝ木といふ此蓍は神靈ある
草也藥とす春の始つかたに莇持けるを玉箒と云今
案めとは細くて黑葛なとのことくなれはゆひてけ
つり花さゝんは似つかはしかるへしそのうへ史記
龜策傳曰上有二擣蓍一（索隱曰擣音逐留反擣蓍即叢蓍稱字）下有二神龜一こ
れによれは下に龜あるものなる故に龜は瓶に名も
かよへはいはひてさすくも有へし後撰にさくらの
花のかめにさせりけるか散けるを見て中務につか
はしける貫之
久しかれあたにちるなと櫻花　かめにさせれとうつろひにけり
返し
千代ふへきかめにさせれと櫻花　とまらぬことは常にやはあらぬ
此贈答の歌を思ふへしけつり花はけつりかけたる
作り花なり延喜式圖書寮云金銅華瓶二口菊制花二
枚（左近ゝ各進 枚蔡受供之）朝忠集、朱雀院のみかと院にならせ
たまひて御佛名のあしたにけつり花をさして御あ
そひの折に
年ことに梅はをれともいかなれは　けふ折袖の露もかはかぬ
小大君集に女御たちのおほむつほねに候らひける

時の御佛名のまたの夜參りたるに人々あつまりいてとくまゐれとせむれは何事ならんと思ふにけつり花を庭にさしたりけるに雪のかゝりたるよめとなりけり心もえす

としつまは誰かは雪をはらひあへむ
菊のうへともしはしこそみめ

新古今集に佛名のあしたけつり花を御覽して朱雀院御歌

時過て霜にかれにし花なれと
けふは昔のこゝちこそすれ

同し集に花山院おりゐ給て又の年は佛名にけつり花につけて申侍りける前大納言公任

ほともなくさめぬる夢のうちなれと
其世に似たる花の色かな

返し御形宣旨

見し夢をいつれの世そと思ふまに
折を忘れぬ花のかなしさ

續古今集雜下にひえの山にかたわきてけつり花しける事侍るにかたきの方にをみなへしを作りたりけるを人々もてあそひけれはねたくてむすひつけたる云々　新千載冬佛名のきくの花を御覽してよませ給ける冷泉院御製

秋ならて霜夜にみゆる菊の花
時過にたるこゝちこそすれ

眞言門の經軌に花のなき頃は雜色の綵帛を花に作りて供養すへきよしあまた見えたり佛名のけつり花は其心なるへし今は二條后の御前にけつり花を御覽すれ　佛名にはかきらぬ也又けつり花ならぬ作り花をも御覽する事有　新古今集に後冷泉院御時御前にて瓶新成櫻花といへる心ををのこともつかうまつりけるに大納言忠家

さくら花をりて見しにもかはらぬを
ちらぬはかりそしるしなりける

大納言經信

さもあらはあれ暮行春も雲の上に
ちることしらぬ花し匂はゝ

清少納言にも櫻の作花の事見えたり

花の木にあらさらめとも咲にけりふりにしこのみなる時もかな

花の木にあらさらめともと云はけつり花の心にてめとを讀入たれは物名歌となる也ふりにしこのみとは是に二つの心侍るへし論語に先進の禮樂は野

也と云り野は質なれはたとへは木の實のことし世の末にいたれは文花ののみうるはしくて質の實すくなけれはけつり花によせて文質相兼むことをねかふ歟又述懷にて此身を菓によせてなり出るを實のなるによせて花の木にあらねとかくさけはわかふりにしこの身もなり出る時もかなとよめる歟

しのふくさ　　きのとしさた

山高みつねにあらしの吹里は匂ひもあへす花そちりける

六帖には峰の嵐の吹里はとあり

やまし　　平あつゆき

和名集に知母をやましといへり或抄に山にあるしのねと註せるは誤也おほよそ和名を考るに羊蹄菜をしといひて其類多し大黄はおほし知母はやまし紫苑はのし白英はほそし蘘荷はすし

郭公みねの雲にやましりにし有とはきけと見るよしもなき

歌の心明か也

からはき　　よみ人しらす

いかなるをいふともしらす或抄に今の世に見えすといへり

空蟬のからは木ことにとゝむれと玉のゆくへを見ぬそかなしき

歌の心明か也

かはなくさ　　ふかやふ

和名集云辨色立成云水苔一名河苔（和名加波奈）延喜式第八鎭火祭祝詞云吾名妹命能所知食上津國尒心惡子乎生置氐來止奴宣氐返坐氐更生子水神匏川菜埴山姫四種物乎生給氐此能心惡子乃心荒比曾波水神匏埴山姫川菜乎持氐鎭奉止事教悟給支　和名と鎭火祭祝詞とを引合て案するに此かはなくさなるへし　風俗通曰堂殿上作二藻井一以象二東井一藻以壓レ火　これ和漢おのつから通せる心也一說に女靑をかはね草といふねとなと通すれはこれ歟と云り　和名集云本草云女靑一名雀瓢（和名比波久佐）蘇敬注云子似二瓢形一故以名レ之

うは玉の夢に何かはなくさまんうつゝにたにもあかぬこゝろを

うは玉は古事記幷萬葉にはぬはたまといへりくろしとつゝくる枕詞なりそれより心を得て夜とも髮

ともおよそ黒き事につゝけたり夢とつゝくるは夢
は夜見るものなれは轉してつゝけたり萬葉に野干
玉なと書たれに顯昭はかゝすあふきを射干といふ
射干を又は野干ともかけは其實の黒きをいふ歟と
思はれたれと萬葉第十一に玉に寄てよめる歌の所
にもあれは黒き玉ありてそれか名にや黒玉と書て
ぬは玉とよめるを思ふへし野干玉なとかけるは彼
黒玉からすあふきの實に似たれば義をもてかける
歟延喜式に五色玉二百八十九なとあり黒き玉は世
に聞えねは若は射干の實をもて黒き玉におつる歟
然らはやかて射干の實をぬは玉といふ歟

さかりこけ　　たかむこのとしはる

蘿也たりさかりたるこけ也堀河院百首に顯仲
　よそねしてしたはにおふるさかりこけ
　　露かゝらねとかるゝまもなし

花の色はたゝひとさかりこけれともかへす〳〵そ露
はそめける

歌の心明か也

にかたけ　　しけはる

和名集云兼名苑注云長間笋（今案和名之乃女）笋靑最晩生味大
苦也俗にしのめともにかたけともをんな竹ともな
よ竹ともいへりもしすこしかはりあるか聞所かく
のことし

命として露をたのむにかたけれは物わひしらに鳴のへ
の虫

露をたに頼むにかたけれはとは露を命とすれとも
たのみかたき也
　營爲
　秋の虫何わひしらに聲のする
　　頼みしかけに露やもり行

かはたけ　　かけのりのおほきみ（景式王 宗親王子）

和名集云四聲字苑云篁（音與皇同竹叢也立成云苦竹加波多計 本朝式用河竹二字今案苦宜從）

（竹作 菅原）
さよふけてなかはふけゆく久かたの月吹かへせ秋の
山風

歌の心明か也

わらひ　　眞せい法師

煙たちもゆとも見えぬ草のはを誰かわらひと名つけ
そめけん

今わらひといへるは藁火也これはよくかくせりと
も見えす又折句の歌も載られたれは物名一様にか

きらぬ也

六帖わらひ
みよしのゝ山の霞をけさ見れは
　　わらひのもゆる煙なりけり

同
我ためになけきこるともしらなくに
　　何にわらひをたきてつけまし

同ひさくら
梓弓はるの山邊に煙たち
　　もゆとも見えぬひさくらの花

さゝ　まつ　ひは　はせをは　　きのめのと

是は葉を見る物を取集めてよめりそれにさゝ松は葉ほそきを類して松は木なれは枇杷につゝけんためにさゝの下に置歟枇杷芭蕉は共に音を和語にも用ひ又共に葉廣く大きなる中に枇杷は木なれは松につゝけ芭蕉は草にて葉は枇杷よりも大きなれはかくは次第して題とせる歟和名集に芭蕉の二字をはせをはとよみたれは葉の字をくはふるに及はす

いさゝめに時まつまにそ日はへぬる心はせをは人に見えつゝ

いさゝめはかりそめの心也萬葉に

眞木柱つくる杣人いさゝめに
　　かりほにせんと作りけめやは

大和ものかたり
いさゝめに吹風にやはなひくへき
　　野分すゝしく君にやはあらぬ

かりそめにあひ見るへき隙ある時をまつほとにわか心はせをは人に見えおきつゝ日を經てえあはぬとにや

なし　なつめ　くるみ　　兵衛藤原雅茂女大納言國經母

三代實錄第五十云仁和三年二月九日癸丑信濃國例貢ニ梨子大棗呉桃子雉腊一別貢ニ梨子大棗等一貢獻之元不レ立レ制太政官議定例貢毎年十月別爲レ期立爲ニ恒例一これをもておもふに此例貢の物をもてきたる時これよめとおほせなとの有ける時よめるにや

兵衛は六帖に忠房かもとに侍ける兵衛と有もこれ歟下のことかきに業平朝臣の家に侍ける女といへるになすらへは忠房か妹なとにや

あちきなしなけきなつめそうきことにあひくるみをは捨ぬ物から

なけきなつめそは伊勢物語におもひつめつる事と云つむるのことしなけきなきはめそと也腰句以下

はさりとてうき事にあひくる身なりとてもえ捨ぬものからと也下の篁の歌にしかりとてそむかれなくにといへるに心同し

からことゝいふ所にて春のたちける日よめる

安倍淸行朝臣

からことは備前に有淸行は三代實錄第三大納言民部卿安倍朝臣安仁傳云有子男八人貞行宗行淸行興行最知レ名

浪のおとのけさからことに聞ゆるに春のしらへやあらたまるらん

けさからことには今朝より殊にといふ韓琴を兼たり春のしらへは雙調也下卷は眞せい法師

都までひゝきかよへるからことは
浪のをすけて風そひきける

かねみのおほきみ

いかゝさき

かちにあたる波のしつくを春なれはいかゝ咲ちる花と見さらん

蜻蛉日記に石山にまゐりて舟にてかへるとていかゝさき山ふきのさきなといふ所を見やりて蘆の中よりこきゆくといへるは近江に伊香郡有もしそこに有ていかこ崎といふへきをいかゝ崎といふにや　源氏床夏に

草わかみひたちの海のいかゝ崎
いかて逢見ん田子のうら浪

これは元眞集に

ひたちなるいかこの崎のわすれ貝
拾ふかひなき物にも有哉

かとことゝ音通へは此いかこの崎とおなし所にやこれらになすらふへし　高光集にたむのみねに住頃あさみつの大納言ひはの北の方わつらひ給ふ祈せよとのたまふに

昔より聞ならしこしいかゝ崎
淺からしとを思ひなさなん

返し大納言

はやくよりきゝならしけるいかゝさき
末の人さへたのもしきかな

淸少納言に崎はからさきいかゝ崎續後拾遺物名いかゝさき和泉式部

我はたゝ風にのみこそまかせつれ
いかゝさき〳〵またはゆくらん

和名集云河内國茨田郡伊香以加今のいかゝ崎は次にから崎をつゝけたるにて近江なる事を知へし

源氏胡蝶 春の日のうらゝにさして行舟は
さをの雫も花そちりける
近江御息所歌合にかちの木の花
わたつ海をこきゆく舟のかちの木の
はなとは更に波そ立ぬる
からさき　あほのつねみ
續日本紀云延喜三年十一月戊戌朔戊午武藏介從五
位上建部朝臣人上等言臣等始祖息速別皇子就二伊
賀國伊賀郡阿保村一居焉逮二於遠明日香朝廷一詔二皇子
四世孫須珍都斗王一由レ地錫二阿保君之姓一其胤子意
保賀斯武藝超レ倫足レ示二後代一是以長谷旦倉朝廷改
賜二建部君姓一是旌二庸愚意一非二昨日蒋倫一望請返レ本
正レ名蒙レ賜二阿保朝臣之姓一詔許レ之於レ是人上等
賜二阿保朝臣一建部君黑麿等賜二阿保公一　和名集云
伊賀國伊賀郡阿保　新拾遺集神祇延喜六年日本紀
竟宴歌思兼神阿保經覽
思ひかねたはかりことをせさりせは
天の岩戸はひらけさらまし
かのかたにいつからさきにわたりけんなみちは跡も
のこらさりけり
かのかたは彼潟にも彼方にも有へし

浪のはなおきからさきて散くめり水の春とは風やな　伊勢
るらん
水の春は上に是則歌に水の秋とよめるかことし
かみやかは　つらゆき
拾芥抄云紙屋院在野宮東圖書別所　源氏物語にかんやかみと
いへりこゝにてむかし紙をすけるにや
六帖 かりにてもわかると思へはかみや川
せゝの千鳥の亂れてそなく
うは玉のわかくろかみやかはるらんかゝみの影にふ
れるしらゆき
拾遺には此歌をしはすのつこもりかたに年の老ぬ
ることをなけきてとて二三句我黑髮に年くれてと
てふたゝひ入たれは彼によれは物名にはあらす
後撰貫之 ふりそめて友まつ雪はむは玉の
我黑髮のかはるなりけり
家集 けふみれは鏡に雪そふりにける
老のしるへは雪にや有らん
よとかは

足引のやまへにをれは白雲のいかにせよとかはるゝ
時なき
此歌六帖には雲の題に入て作者なし又拾遺にふたゝひ載られたり又同しよとかは在原元方
うゑていにし人も見なくに秋萩の
誰見よとかは花の咲らん
かた野　たゝみね
夏草のうへはしけれるぬま水のゆくかたのなき我こゝろかな
輔兼集に三條のおとゝ片野にかりし給ふにおひてきて
君かゆくかたのはるかに聞しかと
したへはきぬる物にそありける
かつらのみや（桂宮六條北西洞院西一町）　源ほとこす（施揚男）
秋くれと月のかつらのみやはなるひかりを花とちらすはかりそ
桂花無實といふ本文にてよまれたりかつらといふことはよくもかくれす下のみやのかくれたるにてとれるなるへし但天祿三年八月野宮歌合に草のかうを題にて左は草のかうつる我たもとゝよみ右はくさ〳〵のかうつる袖とよめる順の判にかみのくさはもとのくさにてしものかうのみそへたれは人にかくれん人の身のみかくれておもてあらはす心ちなんしけると有になすらへは難ともいふへきかはてのをの字つよくあたるへからす
百和香　よみ人しらす
和名集云神仙傳云淮南王張錦繡之帳燔百和之香漢武内傳云武帝好長生之術求道七月七日帝宮掖之内設座殿上紫羅席庭燔百和香張紫雲幃燃九光之微燈設玉門棗葡萄酒帝乃盛服立於階下内外謐寂以俟仙宮宮中簫鼓之聲人鳥之響食頃王母至也云々　或抄に五月五日に百草を取て合する香なりと云へる誤れり
花ことにあかすちらしゝ風なれはいくそはくわかうしとかは思ふ
歌の心明かなり
すみなかし　しけはる
すみなかしは墨流とかけりすなかし也檀紙扇紙など有
春霞なかしかよひちなかりせは秋くるかりはかへら

さらまし

なかしは中にてしはやすめ詞也

おき火 唐韻熾猛火也 四聲字苑熾熾　　みやこのよしか 都良香

都良香は本朝文粋に文あまた有文德實錄第四云仁壽二年五月丁卯朔戊子主計頭從五位下都良香宿禰貞繼卒貞繼大和介從五位下桑原公秋成子也弘仁十三年與㆓兄正五位下文章博士腹赤㆒共上請改㆓姓都宿禰㆒三代實錄第廿一云貞觀十四年五月七日丙午掌渤海客使少內記都宿禰言道自修㆓解文㆒請㆓官裁㆒偁姓名相配其義乃美若非㆓佳令㆒何示㆓遠人㆒望請改㆓名良香㆒以遂㆓穩便㆒依㆑請許㆑之同廿三云十五年正月十三日己卯以從五位下行少內記都宿禰良香爲㆓大內記㆒同三十二云元慶元年十二月廿五日賜㆓姓朝臣㆒其先御間城入彥五十瓊殖天皇之後與㆓上毛野大野池田佐味車持朝臣㆒同姓也　同三十五云元慶三年二月廿五日乙酉文章博士從五位下兼大內記行越前權介都朝臣良香卒云々年四十六有集六卷

なかれいつるかたゝに見えぬ涙川おきひん時やそこはしられん

初二句は流れ出る所もしらぬ也下句は大かたにひん時は底もしられしと也川には沖よむ事珍しからす萬葉集には吉野川のおきとも猪名川の沖をふかめてともあまたよめり

ちまき　　大江千里

のちまきのおくれておふる苗なれとあたにはならぬたのみとそきく

後まきはおくてにはあらてはやく損するところにふたゝひまくをいふなるへしたのみは田の實と憑とを兼たり晩年の學問なとをすゝむる心なとにや論語云子曰苗而不秀者有矣夫秀而不㆑實者有矣夫

いなつまはかけろふはかり有し時秋のたのみは人しりにけり

はをはしめるをはてにてなかめをかけて時の歌よめと人のいひけれはよめる　　僧正聖寶

此詞書の心春霖雨のしける時の事なるへし　元亨釋書第云四釋聖寶讚州人光仁帝之後也貞觀之末闢醍醐寺仁和三年勅賜㆓傳法阿闍梨位㆒寬平二年爲㆓貞觀寺座主㆒自㆓延喜之初㆒受㆓月俸于太倉㆒二年爲㆓僧正㆒九年七月六日逝年七十八本朝の眞言宗相承弘法大師眞雅僧正源仁僧都此源仁僧都に二人の弟子

有益信僧正聖寶僧正也これよりかつ〳〵わかれて終に小野廣澤の兩流となる益信僧正は廣澤の小祖廣澤は仁和寺の流也聖寶僧正は小野の小祖小野は醍醐の流也小野流には聖寶を貴ひて尊師といへり或抄に此集をえらはるゝ時聖寶はいまた僧正ならさる故に僧聖寶とかきて正の字はかたはらによせてかくよしいへるは僻事也此僧正の歌後撰集に

　人ことにけふ〳〵とのみこひらるゝ
　　都ちかくも成にけるかな

此二首の外見えすといへとも歌よみならすはかゝる事をは人もいひかけし又かくはよみすゑられ侍らし

花のなかめにあくやとて分ゆけは心そともにちりぬへらなる

八雲御抄には第二句めにやあくとてと有　新勅撰雜五終に云春のはしめに定家にあひて侍けるつゐてに僧正聖寶はをはしめるをはてにてなかめをかけて春の歌よみて侍るよしをかたり侍けれはその心よまんと申てよみ侍ける大僧正親巖

　初子の日つめるわかなかめつらしと
　　野への小松にならへてそみる

以上上卷合四百六十八首

# 古今和歌餘材抄卷十二 八十三首滅歌二首合八十五首

戀歌一

此集四季雜等をわかつ事おほきも上下に過ぬをひとり戀のみ五卷にわかつ事は戀の歌はおほきうへに歌は戀をさきとする故にや萬葉集には四季の歌をさへ春相聞秋相聞等といふに對して相聞ならぬ花紅葉なとの歌をは春の雜歌秋の雜歌といへり相聞は戀也但親子兄弟朋友にもわたれり後の勅撰にもすこしは男女の中の外にわたれるあり此集はをとこ女の中に限れり二十卷なれと二卷とす上の卷は天の道をさきとして四季よりはしめ下卷は人の道をさきとして戀よりはしむる歟夫婦相和して家をさまる家よりつゐに天か下におよふ故に毛詩の關雎よりはしまれるなとになそらへたるなるへし

題しらす　よみ人しらず

郭公なくやさつきのあやめ草あやめもしらぬ戀もするかな

郭公は卯月にもなけと五月をさかりとするものなれは鳴やさつきのとはいへり萬葉長歌にもほとゝきすきなく五月のあやめ草よもきかつらきなとつゝけよめり上の句はあやめもしらぬといはんための序也あやめもしらぬとは定家卿云世にあるものは錦織ものをはしめて龜のかふ貝のからまて文なきものはすくなしあみのめこのめきぬめ布目なといふよしいろふし見わかるゝをくらきやみにもなり心のほれ／＼しくいふかひなくなりぬれはそのものゝすかたをみれとあやとめとのわかれはしられぬをあやめしられすといふとそ申されし　貫之家集に

かきくらしあやめもしらぬ大空に
　ありとほしをはおもふへしやは

忠見集
よはにのみなく時鳥おほつかな
　あやめみるへきけさはいつちそ

兼盛歌
おく山のゆつるはいかて折つらん
　あやめもしらぬ雪のふれるに

六帖
郭公いく聲なきし玄つくにか
　あやめもしらぬたかきぬはきし

続後拾遺集戀四に典侍因香朝臣につかはしける近院右大臣
雲鳥のあやの色めもおもほえす
人を相みて程のへぬれは
定家卿の説此うたに叶へり但大和物語にはあやのいろをもと有源氏若菜上にめつらしきあやめをつくし云々竹川に夕くれの霞のまきれはさやかならねとつくつくと櫻色のあやめもそれとみわきつ上にひめ君は櫻のほそなか山吹などのおりにあひたる色あひのなとありてかくかけれは色あひをいへるときこえたり是は戀を歌のはしめにおける歌なれは戀そむる心のまた何と思ひわく事もなき心なるへし
素性法師
音にのみ菊のしら露よるはおきてひるは思ひにあへすけぬへし
家集には落句たへすけぬへしとありたゝ音にのみ聞たる人故によるはいもねす起居て晝もなくさむことなき思ひにたへすして身も失ぬへしといふ事を菊の露によそへてよめる也常は思ひのひを火になしてよめとこれは露に對すれは日になしてよめる歟日も火の精なれはつゐに同し
後撰
かくこふる物としりせはよるはおきて
明れはきゆる露ならましを
詞花
紀貫之
みかきもり衛士のたく火のよはもえて
ひるはきえつゝ物をこそおもへ
よしの川岩波高くゆく水のはやくそ人をおもひそめてし
上の句ははやくといはん料なり六帖には年へていふといへる題に載たれははやくをはやくよりといへると心得たるなり或抄にも同し心に註せられたれと右の歌につゝけてこゝに置心しかるへからす又上は序といひなからいは浪高く行水とはいたりてはやきをいはんためなり然れは聞ても見ても其まゝにおもひそむるなり
藤原勝臣（信）
白浪のあとなきかたに行舟も風そたよりのしるへなりける
浪の上には陸の道のことくとむへきあともなきた

に追風をたよりにふなてしつれはおもふ方にはいたるなれはさるへきなかたちして思ふよしをいひやらはみすしらぬ人にもなとかいひよりてあふ事もなからんとみつから心をなくさめてよめるなるへし風をたよりといへはかくはなすらへたり此歌良材集にも文字ひとつにて戀の歌となれりといへり

在原元方

音羽山音に聞つゝあふ坂の關のこなたに年をふるかな

六帖には貫之の歌とす不審なり相坂の關は山城と近江との堺なり音羽山は關の西南の山つゝきなり關より西は山階なりされは山科の音羽の山ともよめり音にのみ聞てあはすして年をふるといふ心をならへる所をふたつ引合てたくみによめるなり六帖にみつねか歌に

春雨に君をやりては逢坂の
關のこなたに戀やわたらん

彼家集には關のなたてにと有後撰集には

近江路をしるへなくても見てし哉
關のこなたはわひしかりけり

道しらてやみやはしなぬ逢坂の
關のこなたはうみといふなり

立かへりあはれとそ思ふよそにても人に心をおきつしらなみ

立歸りとは下の波の緣の詞なりあはれは憫怜なり密勘云人に心を沖津白波とは人に心をかけたりとよめるとこそ聞侍りしか奥歌に

ことならは思はすとやはいひはてぬ
なそ世中の玉たすきなる

といへるかけたるよしの同し心なりとそ申されし今案心をおくとは常に心を隔つるを心を置と云にはあらてこれは其人の上に心を思ひ置をいへり日本紀云皇祖高皇產靈尊特鍾二憐愛一以崇養焉　此中の鍾の字の心也下に貫之の歌に露ならぬ心を花におきそめてとよまれたると同し人にめくしと思ふ心をおく故によそなからも波のことく立かへりあはれとおもはれて忘られぬよしなり下の戀の長歌に春霞よそにも人にあはれとおもへはとよめるおなし心なり

つらゆき

世中はかくこそ有けれ吹風のめに見ぬ人も戀しかりけり

萬葉の長歌に吹風の見えぬかことくゆく水のかへらぬことくなとよめり吹風のことく音にのみ聞てまた見ぬ人をこふる心からなへての世もかくこそ有ものにありけれといへるなり

後撰忠房
人をみて思ふおもひも有物を
空にこふるそはかなかりける

右近のうまはのひをりの日むかひにたてたりける車の下すたれより女のかほのほのかにみえければよみてつかはしける　在原業平朝臣

ひをりの日といふことはことに難義なる事とて袖中抄にも最初に釋せらる右近の馬塲は一條より大宮の方をいふそれより東の方に左近の馬塲なり五月三日は左近荒手結四日は右近荒手結五日は左近眞手結六日は右近眞手結なり荒手結の日は射手の近衛の舍人水干はかまにくゝりをあけて裾の尻を女の中ゆひたるやうに引出て其上にむかはきを結なり眞手結の日は紅の下のはかま織物のさしぬきにくゝりを上すしてそはをはさみて裾の尻を膀より前さまに引たをりて前にはさめりされは此眞手番の日をひをりの日とはいふなり云々以上顯昭の説なりかゝれは右近のひをりの日は六日なりひをりは引折なり引板とかきてひたとよむかことし法性寺殿にて五月五日に俊頼朝臣

長き根も花の袂にかほるなり
けふやまゆみのひをりなるらん

此まゆみは常の眞弓にはあらて騎射とも馬射とも書てうまゆみといふを略せるなりまゆみのひをりとは弓をひくとつゝけたり此ひをりは左近眞手結をよめり右近馬塲のひをりの日あれは左近馬塲のひをりの日あるへきことわりいはすして知へし下すたれは和名集云車簾唐韻云[illegible]（毘簾二音俗云比簾）車帷なりいにしへより競馬は有ける事なり續日本紀第十七聖武天皇紀曰天平十九年五月丙子朔庚辰天皇御南苑觀騎射走馬

伊勢物語大和物語
見すもあらすみもせぬ人の戀しきはあやなくけふや詠めくらさん

初の二句はほのかに見たる心なりこひしくはとは

かりそめなる事のさてもえあらす切に戀しくはの
こゝろなり　　　　よみ人しらす

返し
伊勢物語大和物語
しるしらぬ何かあやなく分ていはん思ひのみこそしるへなりけれ

或抄にしるしらぬをいなせなりと註せるはかなふへからすこれはみすもあらすみもせぬ人とよめる心を得てうけていへり見すもあらすはしるなりみもせぬはしらぬなりたゝ思ひこそしるへにてあれはまめやかにふかくおもふ心たにあらはしる人しらぬ人にもよらす逢時有ぬへしといふ心を何かあやなく分てはいはんとよめり伊勢物語に此歌の後に後はたれとえりにけりとあり大和物語云在中將物見に出て女のよしある車のもとにたてり下すたれのはさまより此女のかほいとよく見てけり物なといひかはしけりこれもかれも歸りてあしたによみてやりけるさきの歌なりとあれは女返し

見もみすも誰も知てか戀らるゝ
　おほつかなみのけふのなかめや

かくあれと今の集幷に伊勢物語には過へからす新

古今集戀一云前大納言隆房中將に侍ける時右近馬塲のひをりの日まかれりけるに物見侍りける女車よりつかはしける　よみ人しらす

ためしあれはなかめはそれとしりなから
　覺束なきは心なりけり

返し前大納言隆房

いはぬより心やゆきてしるへする
　詠る方を人のとふとて

此比ひをりの日さたまりけるなるへし

かすかのゝまつりにまかれりける時に物見に出たりける女のもとに家を尋てつかはせりける
　　　　みふのたゝみね

或本にはかすかのまつりにとあり　延喜式云春二月冬十一月並上申祭之歌によるに今は春の祭なり

春日野の雪まを分ておひ出くる草のはつかにみえし君はも

顯註に草のはつかにみえしとはけふほのかに見たる心なり又めつらしき心もあるへし君はもとは君はと尋たる心なり　今按はつかには萬葉には小端

と書りはつ〲といふも同し詞なり萬葉に
白たへの袖をはつかにみしからに
かゝる戀をも我はするかも
君はもは又萬葉に
秋萩の花野のすゝき穗には出す
吾戀渡るこもり妻はも
後撰みつね
春日野におふる若菜を見てしより
心をつねに思ひやるかな
曾丹集正月
片岡の雪間にきさす若草の
はつかに見えし人そ戀しき
和泉式部
跡をたに草のはつかにみてしかな
むすふはかりのほとならすとも
人の花つみしける所にまかりてそこなりける人のも
とにのちによみてつかはしける　つらゆき
山櫻霞の間よりほのかにもみてし人こそこひしかり
けれ
家集には下句見しはかりにや戀しかるらんと有花
つみにてほのかに見たる人の戀しきたとへに山さ
くら霞の間よりとはいへり

題しらす　もとかた
たよりにもあらぬ思ひのあやしきは心を人につくる
なりけり
此歌後撰にははつかに人を見て遣しける貫之と有
たよりのしるへとなりて人をあはれともえおもは
せぬおもひの猶あやしきは我心をさそひて人につ
けさするとなりつくるはかへる心なり二三の句に
心を着へし
凡河内みつね
初かりのはつかに聲を聞しよりなかそらにのみ物を
おもふかな
初鴈をうけてはつかといへり人の聲を聞そめたる
を初鴈のめつらしきによせたれは鴈は空にわたる
故になかそらに物思ふといへりなか天に思ふとは
心のうきたちてつくかたなき義なり
つらゆき
逢ことは雲井はるかになるかみの音に聞つゝ戀わた
るかな
家集には落句戀やわたらんと有あはんする事は雲
ゐのことくはるけき人をなる神のことく音にのみ

聞つゝ月日をへて戀渡るとなり逢見ぬさきの歌なれは雲井はるかになるとつゝくるにはあらす鳴神とは名高く人のいふ喩なり　應神紀に大鷦鷯皇子髪長媛に向て讀せたまへる御歌　彌知(道)能之利(後)古波儾塢等綿(處女)塢伽未能語等(如神)枳虚曳之介迺(雖所聞)阿比(相)摩區羅(枕)摩區(纏)此神のこと聞えしかど、よませ給へるにおなし或抄に家集には禁中なる人をおもひてよめるとそと有は家集を見られさりけるにやまたくさる事なし

萬葉　天雲の八重雲かくれなる神の
　　音にのみやも鳴わたりなん

後撰　ちはやふる神にもあらぬ我中の
　　雲井はるかになりも行哉
　　　よみ人しらす

是則集　かた糸をこなたかなたによりかけてあはすは何を玉のをにせん

糸はいく筋にもあれよりあはせぬをはかた糸といふかた糸はよはき物なれは萬葉に
　かた糸もてぬきたる玉の緒をよはみ
　　亂れやしなん人のしるへく
とよめり男女もあひみぬほとはこなたもかなたもかた糸のことしされとこなたにのみよりかくるやうに思ひてもかひなしかなたにもよりかくることくあひおもひてあはすは何を命にしてなからへんといふ心を命をも玉の緒といへはたとへの玉のをにそへてよめり　詩召南云其釣維何維絲維緡(絲之合而爲綸猶男女之合而爲昏也)

六帖　かた糸のこれかれよりによられつゝ
　　あひなん後は何かたゆへき

六帖雲　夕くれは雲のはたてに物そ思ふあまつ空なる人をこふとて

顯註には夕くれの雲のはたてにと有て註にいはく夕暮の雲のはたてとははたゝかひの場御即位の時諸陣なとにたつる旗のことくなるあかき雲の夕暮にたつをは雲の旗手といふなり旗の手のやうにおひたゝしくひろこりて夕日の空にまかひて夕日やけするなり然るに雲はつきもせぬものなれはつきもせす物を思ふ心にもよめり又うき雲は跡さたまれ

る事もなきよしにも叶へり順か假名の序にもおもふ心雲のはたてにある物からおりたちていはんかたなしとかけり雲はおりゐる物なれはそれによそへて空にうきたる事を思ひておりたちていはんかたなしともかけるにや又古歌に云

天の原はる〳〵とのみ見ゆる哉　雲のはたても色こかりけり

とよめり萬葉に

わたつみのとよはた雲に入日さし　こよひの月にすみあかくこそ

とよめるも豐旗雲とよめるは豐はひろくおほきなる旗手といふことにて此雲のはたてと同し心なるへし今いはく顯註に引れたる順か假名の序幷古歌とて引れたる菅萬の歌又拾遺集に

吹風に雲のはたてはとゝむとも　いかゝたのまん人の心を

狹衣にこの人をかくめにみす〳〵雲のはたてにまよはしては云々これらは夕くれといはされはいつにても雲のはたてといふへし詩にも雲旗と作れり夕暮に物思ひをる折しも雲の旗手のことく見ゆれは夕暮はとおけり雲のはたてとはかきりなくみたれて物を思ふよしときこゆ次下にかゝりこもの思ひ亂れてといふ歌をつらねたるも其心ある歟天津空なる人とは及ひなき人にはあらて下に天津空にもすまなくに人はよそにそ思ふへらなるとよめることく逢事のはるけかるへき中をいへるなるへし又重之家の集にあしたかくもの手ひとつ落たるか二三日までをこくを

さゝかにのくものはたてのをこくかな　風をいのちに思ふなるへし

これは蜘にもはたてとよめり　古事記に土雲訓云具毛と有は神武紀に土蜘蛛[ツチクモ]といへるなり蜘のさまは雲に似たれは聲こそかはりたれと同し名にもよふなるへし歌にもさゝかにのくもらぬ空なとそへたるおほし蜘は夕くれにことにすかくる物なれはそれにそへてよめる歟六帖蜘の歌に

常ならぬ身はさゝかにの糸なれや　天津空なる思ひかくらん

此歌によるに天津空なる人といへるも其よせありかた糸とよめる歌につゝけたるも緣あり但今の歌

六帖に雲の題に載たれは初の説證ありそれもまた先蜘のはたてとよみてやかて雲にそへたりといははことわりたかふへからす袖中抄云雲のはたてとは雲のひろき心なりつねには夕の雲の旗の手に似たるを雲のはたてとはあまたの文に申たれと萬葉集の長歌をみるに國のはたてに咲にける櫻の花と讀たれは國にははたて有といふへくもなけれは空の廣をは雲のはた手といひ地の廣きをは國のはたてとよめるにやとなすらへて思ふなりたとひ雲の旗手といふへくは花の色々に咲みちたるをはたてといふへきにや其は猶心ゆかす云々是は古今秘注より後に見出て義を改られたるなり國々の末々までといふ心を旗の手のひろこりたるによせて國のはたてといはん事たかふへからす

かりこものおもひみたれて我こふといもしるらめや人しつけすは

刈たるこもは亂やすけれは思亂といはんとてかりこもとはおける也萬葉に多き詞也中に人丸の歌に

けひの海のにはよくあらしかりこもの
　亂れ出見ゆあまの釣舟

この歌は古歌の姿也

つれもなく人をやねたく白露のおくとはなけきぬとはしのはん

或抄にねたくをもろともに寝まほしきよしにいへるはいふにたらぬ説なりつれなき人故におくるとは歎きぬとてはしのふかねたき事といふなり

　まてとこぬ人をやねたく山吹の
　　いや初花の見まくほしけん

ちはやふるかものやしろのゆふたすきひと日も君をかけぬ日はなし

顯註に神のやしろと有密勘云神賀茂兩説歟用二賀茂之説一ゆふたすきとは木綿をたすきにするをいふ是はしめなとのことく社にかくると云にはあらす神事にあることなれはかけぬ日はなしといはんための序にいへりかくとは心にかくるなり拾遺に

　石上ふるの社のゆふたすき
　　かけてのみやは戀んと思ひし

ちはやふる賀茂の川邊の藤なみは
　　かけて忘るゝ時のなきかな

姫採式に
長月のあをつゝらこにをとりいれて

ひと日も君をかけぬ日はなし
我戀はむなしき空にみちぬらし思ひやれともゆくかたもなし
萬葉におもひやるとよめるは思ひを過しやるなり
今も萬葉におなし遣情遣懐遣悶なといふかことし
想像とかきて思ひやるといふには異なり
独衣 我心かねて空にやみちぬらん
行かたしらぬやとのかやり火
するかなるたこの浦浪たゝぬ日はあれとも君をこひぬ日はなし
萬葉十五 からとまりのこの浦浪のたゝぬ日は
あれとも君をこひぬ日はなし
後撰 我戀をしらんと思はゝたこの浦に
立らん浪の數をかそへよ
重之集むすめ いそき行旅のこゝろやかよふらん
たゝぬ日そなきたこの浦浪
新拾遺雜中應和二年一宮歌合に讀人不知
田子の浦の浪はのとけし我袖に
たとへん方のなきそ悲しき

猿丸集 夕つくよさすやをかへの松の葉のいつともわかぬ戀もするかな
此歌六帖夕つくよに出せるは今と同してる日に出せるは
朝ひこかさすや岡への松かえの
いつともしらぬ戀もするかな
かくかはれるは別の歌歟上の二句は松をいはんためにて松はいつともわかぬといはんためなり
足引の山下水のこ隠れてたきつ心をせきそかねつる
此歌後撰には女のもとにつかはしけるよしのぶ朝臣と有返しよみ人しらす
こかくれてたきつ山水いつれかは
めにしもみゆる音にこそきけ
上の句は人しれぬ喩なりたきつは萬葉に沸の字をかけりわきかへりてたきるなり萬葉に
ことに出ていはゝゆゝしみ山川の
たきつ心をせきそかねつる
家持集 吉野川いはきりとほし行水の音にはたてし戀はしぬとも
川の中に石にさはりてよこきれ流るゝ水をは岩き

ゆくといへり切なるおもひの忍ひかたき喩也

萬葉 高山のいはもとたきり行水の
音にはたてし戀はしぬとも

瀧つ瀬の中にもよとはありてふをなと我戀の淵せと
もなき

淵は靜にして瀬はさはけはいかなる瀧つせにも中
によとむ所の有といふをなと切なる思ひのいつと
なく瀬のことくのみむねにさはくそといふ心を淵
瀬ともなきとはいへり本意に喩をましへてよめり

山高みしたゆく水の下にのみなかれてこひん戀はし
ぬとも

山高み下行水とはふかくしのふ喩なり　以上四首
寄水歌類なりこれより下此巻の中に忍ふ心によめ
るはこふる人ひとりにいはしと忍ふなり後の巻に
あるは世の人に忍ふなり

思ひ出るときはの山のいはつゝしいはねはこそあれ
戀しき物を

おもひ出るときはのつゝきは夏の歌にありきいは
つゝしはいはねはといはんためにてつゝしには用
なし但萬葉には春秋の花を思ふをもこふると讀た
れはいはつゝしを色よき人によそへて讀るにや宇
治大納言物語に本院左大臣の國經卿の妻を取て歸
り給ふ時車におしのするほとに平仲か彼北方の袖
の下にみちのく紙に書て入たる歌

物をこそいはねの森のいはつゝし
いはねはこそあれ戀しきものを

今の歌は古歌にてかくは平仲か引なほしけるなる
へし

人しれす思へはくるしくれなゐの末つむ花の色にい
てなん

人しれすはおもふ人にしられすなり紅葉は末より
咲そむるを摘取故に末つむ花とはいへり萬葉に

よそにのみ見てやは戀ん紅の
末つむ花の色に出すとも

秋の野のをはなにましり咲花の色にやこひん逢よし
をなみ

顯註に薄にましり咲いろ〳〵の花とよめり色に出
てこふといはんとてさせる色なき花にましりてさ
く花とおけるなり密勘云此心たかひ侍らし薄にま
しる花の色々におほく侍らんこれらはとてもかく

ても侍ぬへき事なり秋の薄まそをの糸をくりかけたるさかりにはまことにちくさの花もこきませ侍らん此まそをの糸をくりかけたるさかりとは顯昭のさせる色なき花にましりてといふを少打給へる心有歟又云猶此歌は同し事なれと秋の野のさかり過心ほそけなる長月の霜のうちにをはなはかり殘りたる比りうたんのはなやかに咲出たるを尾花にましり咲花とはいへる歟紫の色のゆかりをおもへるにやとそ申入侍りし　今按彼卿の一字百首に

霜埋む尾花か下のかれまより
　色めつらしき花のむらさき

これ此心にて花の紫はりうたんの事なるへし源氏夕霧にかれたる草の下よりりうとうのわれひとりのみ心ながうはひいでゝ露けうみゆるなと云々八雲御抄第三龍膽物名外不聞但時平歌合に下草の花をみつれは紫にとよめりとあり密勘はこれらの心にや但秋の野のをはなといへるさま秋の盛とおほしきにや又我ひとりのみ心なかうはひ出てといはれたるりうたんはいとみしかき草なれは尾花にましりといはんにけなくや　今按萬葉第十寄花相聞歌に

秋萩の花野のすゝきほには出す
　我戀わたるこもりつまはも

此歌によるに尾花にましる花とは萩をいへる歟萩薄は一双にいふ物なれは男女の間に喩ていへる歟其中に萬葉は萩を女にたとへて薄を我身にたとへ今は薄を女にたとへて萩を我身にたとふる歟かゝる事便にしたかふ習なれは定れるやうなし色にやこひんは色に出てや戀ん也前後の歌にて知べし忍ひにては逢よしのなけれは薄にましる萩の咲そむるやうに今は色に出て顯れてや戀んとよめる歟右三首は草木によせたるを春夏秋と次第に連ねたり

わかそのゝ梅のほつえに鶯のねになきぬへきこひもするかな

密勘云ほつえと書てそはにはつえとつけたりし本にてほつえはつえ同し事なり梅の末枝なりと侍りりしかは云々　萬葉には末枝とも最末枝ともかけり日本紀應神天皇日向髮長姫を仁德天皇いまた大鷦鷯の皇子にてまし〳〵けるに賜はる時の御歌に「かぐはし一句はなたち花二句しつえらは三句人み

なとり四ほつえは五鳥ゐからし六みつくりの七な
かつえの八ふほこもり九あかれるをとめ十いさゝ
かはうな十一これにほつえの詞はじめて見たり
神代紀に上枝(カミツエ)とあるにおなし萬葉第十七鷹の逸物
の心をほつたかとよみ又第十四東歌に山とりのを
ろのはつをとよめるはをとりの尾の中にすくれて
長きをいふ山鳥の尾のしたり尾とよめると同しし
かれはほつはつは五音通してともにすくるゝ心な
り最末枝と書る最の字これにあたれり日本紀に秀
の字をほともほつともよめり穗の心なりこれ又同
し心なりほつえにとよめるは高くねにあらはれて
なきぬへくなりぬの心なり此歌の姿古歌なるへし

萬十　妹かためほつえの梅をたをるとて
　　しつえの露にぬれにけるかも

足引の山ほゝときすわかことや君にこひつゝいねか
てにする

物おもひに我いねかてにする夜郭公のあはれに鳴
を聞てかれも妻こひするとていねかてにしてや鳴
らんといふ心を我うへよりかけていへは君にこひ
つゝとはいへり此歌も古歌の躰なり

右二首寄鳥歌を春夏とつらねたり

萬葉　朝井手にきなくかほ鳥なれたにも
　　君にこふれや時をへす啼

六帖　わかことく君もこふれや郭公
　　此よすからをいねかてにする

夏なれは宿にふすふるかやり火のいつまて我身下も
えにせん

發句六帖には夏くれはとあり夏なれはとは夏にあ
れはといふことをつゝめていふ下に秋なれは山下
とよみなく鹿にといへるも同し心なり此歌季の心
をもて上につらぬ

萬葉　足引の山田もるをのおくかひの
　　下こかれのみわかこひをらく

拾遺　蚊遣火は物思ふ人の心かも
　　夏の夜すから下にもゆらん

曾丹集　蚊遣火のさよ更かたの下こかれ
　　くるしや我身人しれすのみ

戀せしとみたらし川にせしみそき神はうけすも成に
けらしも

風體抄云此歌は伊勢物語の歌なりなりひらの朝臣の歌にやおほつかなしいかにもめてたき歌なり伊勢物語には下句神はうけすもなりにける哉とありて業平の歌なりみたらし川は神山より流れ出て賀茂御社のきふねかた岡の社の中よりとほれる小川なり人はつれなく我思ひはくるしきにわひて今は戀せしと祓をして祈るにそれをたに神はうけたまはすなりにけれはにや猶人の戀しきはとなりもとは逢事を祈るよりおこるなり奥義抄に是は深養父か元輔にをしへけるなり公任新撰髓腦に見えたり御祓はおほく夏するわさなれは上の歌につらねたる歟

六帖
つらき人忘れなんとてはらふれは
　みそくかひなく戀こそまされ

萬葉
いかにして忘るゝものそあめつちの
　神をいのれと我思ひます

同
あめつちの神をも我は祈てき
　戀てふ物はすへてやますけり

あはれてふことたになくは何をかは戀のみたれのつかねをにせん

人のあはれとたにもいはすは何をか亂れたる戀をさむるつかね緒にせんとなり物を取集てゆふ緒によせたり又一説にあはれてふはみつからいふあはれなり下の長歌に墨染の夕になれはひとりゐてあはれ〳〵となけきあまりとよめるあはれなり思ひあまる時のことくさなりされともことくさのみにてはつかねをにはなりかたかるへし

萬葉十五
白妙の我ひものをの絶ぬまに
　戀んすひせん逢ん日までに

拾遺
刈てほす淀のまこもの雨ふれは
　つかねもあへぬ戀もするかな

後拾遺
朝ねかみ亂れて戀そしとろなる
　逢よしもかなもとゆひにせん

おもふには忍ふる事そまけにける色には出しとおもひし物を

伊勢物語には上句は同しくてあふにしかへはさもあらはあれと有人を思ふ心も忍ふる心とあらそふ時おもふ心のつよけれはいかにしのはんとおもふ

心もまくるなり後撰に藏内侍
　ちかひても猶思ふにはまけにけり
　　誰ためをしき命ならねは
重之家集に
春の雨は忍ふる事そまけにける
　　山の緑も色に出にけり
我戀は人しるらめや敷たへの枕のみこそしらはしる
らめ
人しるらめやは深く忍へは人はしらしの心なり敷
たへは枕をほむる詞なり枕にかきらす萬葉には家
をも床をも髮をもいへり枕をは萬葉にも心ある物
にして
　吾せこはあひ思はすとも敷妙の
　　君か枕はゆめにみえこそ
ともよめれは今のことくはよめり下に伊勢か歌に
もしるといへは枕たにせてねし物を云々又新古今
に
　枕たにしらねはいはし見しまゝに
　　君かたるなよ春の夜の夢
あさちふのをのゝ篠原しのふとも人しるらめやいふ
人なしに

六帖題あさちにて人丸歌に上句おなしくていもは
しらしなとふ人なしにと有とふはいふにて今とお
なし又參議等朝臣のあまりてなとか人の戀しきと
よはれたるも上の句これより出たり序歌なり古歌
の姿なり
人しれぬ思ひやなそと蘆垣のまちかけれとも逢よし
もなき
六帖にはおもひや何そと有顯註にあしかきのまち
かけれともとは蘆の細きをこまかにくみてはひま
もなけれはひまなしともまちかしともよめるにこ
そおもひやなそとゝ侍るは只おもひやなせそなり
ともしはいはれぬやうなれと詞のたすけにおきた
るにや古歌にはたらぬ所に文字をくはへ又おほか
れは略する文字も侍るへし　今按蘆垣のまちかけ
れともとは只蘆垣を一重へたてゝとなりに住身な
れどもといふにや毛詩云其室則邇其人甚遠　文選
劉公幹贈徐幹詩云誰謂相去遠隔二此西掖垣一拘二阻
清切禁一中情無レ由レ宣上是則これに似たる心歟
　うつせみの人めをしけみいしはしの

まちかき君に戀わたるかも
これらも同し心なりあふよしのなきは昔より蘆を
よしともいひて其心にやさなくても有へし後撰集
に坂上是則
　しるしなき思ひやなそとあしたつの
　　ねになくまてにあはすさひしき
おもふともこふともあはん物なれやゆふてもたゆく
とくる下ひも
顯註云人に戀らるゝ時下紐とくといふことあり古
歌云
　戀しとは更にもいはし下紐の
　　とけんを人はそれとしらなん
とよめりされは此歌の心は思ふともこふとも逢ま
しきにゆふ手もたゆくとくる下紐よしなしと讀る
成へし是は心つよき女のよめる心に釋せられたり
或抄には身を心ともせぬ身なれはの心にやといへ
るは女をたすけていへり今按萬葉第十一に
　君こふとうらふれをれはくやしくも
　　吾下紐のゆふ手もたゝに
これは女の歌にて我のみかたこひにうらふれをる
に人のこふらんやうに我下紐のゆふてもいたつら
にたひ〳〵とくるかくやしきとよめりされはこれ
はわか人をこふるに下紐のとくるとよめるなり今
の歌此心なり人のつれなきはいかにわか思ふとも
こふともあはん物なれや逢ふへしとも見えねはか
た戀故にたひ〳〵下紐のとけてゆふ手のたゆきも
よしなしとなり　顯註は今引歌を見出されさる故
なり下にいたりて
　あひみぬもうきも我身のから衣
　　思ひしらすもとくるひもかな
これこそ女の歌にてつれなかりしことをくひてや
さしくは聞え侍れおほよそ紐のとくるはさきのこ
とくこふるとこひらるゝとはことにとくるうへに
また人にあはんといはひてわさとゝくることもあ
り萬葉に
　こま錦紐のむすひめ解あけて
　　いはひてまてとしるしなきかも
　人めにはうへもむすひて忍ひには
　　下紐ときて待夜しそおほき
いてわれを人なとかめそおほふねのゆたのたゆたに

物思ふ比そ

いては詞のかへりにいひ出る詞なり喘とかけり又日本紀の允恭天皇紀には厭乞とかけり是はしひて人に物をこふときいてそれひとつ給へといふ心なり萬葉に乞とも欲得ともかきていてと讀るも又同し心なり今も我をとかむなといへはこふ心もあり人なとかめそとは人なあやしめそといふなり大船のゆたのたゆたに物思ふとは船の浪にうきてたゆたふことくつくかたなくてとかく物思ふ心なり萬葉第二に

大船のはつるとまりのたゆたひに
　物思ひやせぬ人のこゆゑに

同巻長歌に大船のたゆたふみれは思ひやる心もあらす云々又第七に

我心ゆたにたゆたにうきぬなは
　へにもおきにもよりかてましを

これ同し心なり萬葉に猶豫とも不定とも書てたゆたふとよめり又日本紀には富寛と書てとみたゆたふとよめりことわさに事の行かたきを大船こくやうにともいへは此寛の字も叶ふへし此歌古き姿也

いせのうみにつりするあまのうけなれや心ひとつを定めかねつる

うけは和名集に泛子とかけり水に引れてひとゝころにもさたまらぬ物なれはたとへていへり

萬葉　住吉のつもりあひきのうけのをの
　うかれやゆかん戀つゝあらすは

六帖みつれ　玉くしけあけかたになる秋の夜は
　心ひとつをさためかねつる

いせの海のあまのつりなは打はへてくるしとのみや思ひわたらん

顯註の本にはあまのたくなはとも有てそれを釋して但院御本にはあまのつりなはとあり又釋して猶たく繩に心ひかれたるを密勘云つりなはを用うちはへてくるしともに繩の縁なり　以上三首一類をもてつらねたり

涙川なにみなかみをたつねけん物思ふ時の我身なりけり

物思ふ時の我身より流れ出る涙川なれは我こそ水上なるを何水上をよそに尋けんとも也誠に水上を尋たる事はなけれと歌のならひなれはかくはよめり

伊勢に涙川あれとたゝ目のまへになかるゝをいへり　史記大宛列傳賛云今自張騫使大夏之後也窮河源　此事にもとつきてよめるなるへし涙川をもて上の海につらぬ

たねしあれは岩にも松はおひにけり戀をしこひてあはさらめやは

六帖には腰句おひぬるをとあり種あれはおひかたかるへき岩のうへにも松のおふることくこひたにこひたらは逢かたき中なりともあはて有へきかとよはる心をみつからはけましてなくさむるなり奥義抄にみくにのまちのよめる混本歌

いはのうへにおふる松かえとのみこそ
思ふ心ある物を

後撰

種はあれとあふ事かたき岩の上の
松にて年をふるはかひなし

拾遺戀一

岩の上におふる小松も引つれと
猶根かたきは君にこそ有ける

同雜上

岩の上の松にたとへん君々は
よにまれらなる種そと思へは

これらは皆今の歌よりよめるなるへし

朝な〳〵立河霧の空にのみ浮て思ひの有世なりけりわすらるゝ時しなけれはあしたつの思ひみたれてねをのみそなく

萬葉第三赤人長歌に朝霧にたつは亂れて夕霧にかはつはさわく見ることにねのみしなかるむかしおもへは是も下のねのみしなかるは上の朝のたつ夕の蛙によせたれは朝にたつはみたれてなくといへる事今と同し

から衣ひも夕暮になる時はかへす〳〵そ人は戀しき日も夕暮を唐衣の紐をゆふと取なしてつゝけたり夕の陰氣にもよはされていとゝおもひの切になる心なり又萬葉に

ぬは玉のねての夕の物思ひに
さけにしむねはやむ時もなし

此ねての夕といへるによれはから衣といひて返す〳〵といへるは夢にや見るとせめての事に衣を返しきるはかり戀しきとよめるにや衣を返す事次の卷の小町か歌につきて註すへし

いつとてもこひぬ時とはあらねとも
ゆふかたまけて戀はすくなし

よひ〳〵に枕さためんかたもなしいかにねし夜か夢に見えけん

枕さためんかたもなしとは展轉反側してふしもさためぬをいふ萬葉に

敷妙の枕うこきていねられす

物思ふこよひはやあけんかも

敷妙の枕うこきてよるもねす

思ふ人には後もあはんと

此枕うこきてといふに同し思ひの彌まさるまゝに今はよひ〳〵に枕もさためぬをいつそや人を夢に見し事の有しはいつれの月日いかにねし夜の事にてか有けんとおほめくさまなり所詮今はぬる夜もなけれは夢にだに見すと歎くなり

後撰

夕されは我身のみこそ悲しけれ

いつれのかたに枕さためん

小町集

はかなくも枕さためすあかす哉

夢かたりせし人を待とて

戀しきに命をかふる物ならは死にはやすくそ有へかりける

戀しき苦しさに命をかへてはをしきものは命なれと死やすからんとなりいたく戀しき事の苦しきをいふなり或抄にあふにかふると意得たるは誤なり

遊仙窟云他道愁勝レ死兒言死勝レ愁愁來百處痛死去一時休萬葉に

なか〳〵に死なはやすけん出る日の

いるときしらぬ我しくるしも

此歌にあはせて見るべし

人の身もならはし物をあかすしていさこゝろみんこひやしぬると

元眞集

心をそならはし物といふなれと

かた時のまもえやはわするゝ

拾遺

手枕のすきまの風も寒かりき

身はならはしの物にそ有ける

忍ふれはくるしき物を人しれす思ふてふこと誰にかたらん

宋玉神女賦云情獨私懐誰者可語

こんよにもはやなりなゝんめのまへにつれなき人を昔と思はん

來世にもはやなりねかし今めのまへにつれなき人を昔過去世に有けることく思ひなさんとつれなき人をとかくいひかねてせめての事によめるなり

續古今集に實方朝臣の歌に

目の前にたえすも見ゆるつらさかな
うきを昔と思ふへき世に

今のうたをとれる歌なり

つれもなき人をこふとて山ひこのこたへするまて歎きつるかな

菅萬には人をまつとて山ひこの音するまてにと有寛平皇后の歌合の歌なるへし　なけきは長息なり物を思ひあまりてためたる息の長くつかるれは山彦もこたふるまてなりといふなり歎きつるかなといふにかひなきことをくゆる心こもれり

行水に數かくよりもはかなきは思はぬ人をおもふなりけり

此歌伊勢物語にも有涅槃經云是身無常念々不ㇾ住猶如二電光暴水幻炎一亦如三畫ㇾ水隨ㇾ畫隨合一此文の心なりいたくつれなき人はことわさにいふ鹿の角を蜂のさゝんやうにひたすらさりけなけれは水に數かくはあとこそのこらねとかくほとをはうくればそれよりもはかなしといふなり

萬葉　行水に數かくことく我命
妹にあはんとうけひつるかも

拾遺　かつみつゝかけはなれ行水の面に
かく數ならぬ身をいかにせん

人をおもふ心は我にあらねとも身のまとふたにしられさるらん

身をおもふはならひなるに身のまとふをもしらぬは人をおもふ心は我心にはあらぬにやとよめるなり

順集　誰ために君をこふらん戀わひて
我は我にもあらすなり行

おもひやるさかひはるかになりやするまとふ夢路にあふ人のなき

はるかなるさかひにはすむ人のまれなれは道を行にも人に逢ふ事のなきによせて夢にも人にはあはぬをかくはよめり　韓非子曰六國時張敏與二高惠一二人爲ㇾ友毎相思不ㇾ能ㇾ得ㇾ見敏便於二夢中一往尋但

行至二半道一即迷不レ知二路途一迴如レ此者三
夢のうちにあひみんことを頼みつゝくらせるよひは
ねんかたもなし
夜にもならはせめて夢にやみるとうちたのみてく
らせるよひはさるはかなき夢をたのむほとの思ひ
なれはあやにくに枕もさためかたくめもあはぬよ
しなり
戀しねとするわさならしむは玉のよるはすからに夢
に見えつゝ
うつゝにはひとめたに見えぬもの故によもすから
夢に見ゆるは戀しねとてする君かしわさにこそ有
らめとなりかくは一筋にうくつらからすは又其一
すちにこそ有へきをうつゝにはうき人の夢にはな
さけあるは誠に進退惟谷といふかことく人をしな
すへきものなりとなり萬葉に
戀しなは戀もしねとや玉ほこの
道行人にこともつけゝん
戀しなは戀もしねとやわきもこか
わきへの門を過て行らん
今のうた此一首に心かよへり

六帖
戀しねとするわさならし玉つさの
使も見えす成行見れは
涙川枕流るゝ浮ねには夢もさたかに見えすそ有ける
うきねは旅泊によする詞なりさたかは菅萬に眞の
字をかゝせ給へりたしかなる心なり
萬葉四
敷たへの枕をくゝる涙にそ
うきねをしける戀のしけきに
拾遺
涙川水まされはや敷たへの
枕のうきてとまらさるらん
六帖
ひとりねの床にたまれる涙には
石の枕もうきぬへらなり
同
人こひてぬる春の夜は敷妙の
枕ねさめになかれ出ぬへし
右四首夢につきてよめるを一類とす
戀すれはわか身は影となりにけりさりとて人にそは
ぬものゆゑ
菅萬には二三句我身そ影となりにけるとあり　六
帖には思ひやすといふ題に入影となるとは戀にや
せおとろへて影のことく成をいへり影は人の身に

そふ物なれは我影なれは人にはそはぬ物ゆゑにと
なり古來風體抄云此歌なとは只このころの人の歌
のめてたきにて侍るなり

萬葉
朝影に我身はなりぬかけろふの
ほのかに見えていにし子ゆゑに

拾遺伊勢
はるかなるほとにもかよふ心かな
さりとて人のしらぬ物ゆゑ

貫之集
身にそへる影ともなしに何しかも
外にわひしき人となりけん

かゝり火にあらぬ我身のなそもかく涙の川にうきて
もゆらん

後撰には此歌女につかはしけるよみ人しらすとて
かゝり火にあらぬおもひのいかなれはとて入れり
鵜河のかゝり火こそ河にはもゆる物なれ水と火と
は類せぬ物なるを我か身影のことくなりて思ひの
なとかくのことく涙の川にはうきてもゆらんと鵜
川にたとへてよめり體ハ擧テ用ヲ取心ニテ我身と
いへるは思ひは身に有故に思ひといへる心なり
和名集云漢書陳勝傳云夜篝火「師說云比乎加々利
邇須今漁者以鐵作篝盛レ火照レ水者名レ之此類乎 源
氏篝火に五六日の夕月夜はとく入ておまへのかゝ
り火のすこしきえかたなるを御ともなる右近大夫
をめしてともしつけさせたまふいとすゝしけなる
やり水のほとりにけしきことにひろこりふしたる
まゆみの木の下にうちまつおどろ〳〵しからぬほ
とにおきてさしゝりそきてともしたれは云々註に
かゝり火に打いれ〳〵ともす故にうち松といふか
ゝり火はかならす水のうへにたくなり火をやかて
けしてすゝしくかまへたるなりされは鵜川ならて
もかゝりはよむへきを猶涙の川にといへるは鵜川
によせたりと見えたり拾遺に
またしらぬおもひにもゆる我身哉
さるは涙の川の中にて
かゝり火の影となる身のわひしきはなかれて下にも
ゆるなりけり
右の歌をふみて二首にて心を盡せる一人の歌にや
なかれてはなからへての意なりなかれてといふに
涙川の心有古歌にはかゝる事おほし　右二首かゝ
り火によせたる歌上のわか身はかけとなりにけり

といふにつゝけたり
はやきせにみるめおひせは我か袖の涙の川にうゑまし物を
六帖には落句うゑて見ましをと有て作者貫之なりみるめは海にこそあれ涙の川にはいか〻おひけんと不審を殘す人有へし見るを海松によせていふも歌の習なれは海川のたかひめまてをいふへくもなし水におふる物にて水松ともかけは似つきたる所によめるなり
おきへにもよらぬ玉もの波の上に亂れてのみや戀わたりなん
おきへにもはおきにもへにもなりへの字すみてよむへし或抄におきにもへにもといふは不用と有はへの字を濁りておきのほとりと心得たる歟かへりて誤れり用へからす　神代紀に天孫の御歌にもおきへもはへにはみれともとよませ給　萬葉にはさきに引るうきぬなはへにもおきにもよりかてましその歌のみならす
おきへゆきへにゆき今や妹かため
我すなとれるもにしつるかな
なとあまたよめり　是は古歌の姿なり右二首藻によせたるを一類とす
蘆鴨のさわく入江の白波の知すや人をかく戀んとは
蘆鴨は蘆にすむ故にいふおほくむれ居てさわく物なれは思ひのやすく靜なる時のなきによそへてかく心の常にさわきて戀ひんとはかねてしらすやとなり白浪をうけてしらすやといへりしるやしらすやとみつからとふ心にはあらす
六帖
あしたつのすまふ入江の白菅の
しらすや君をわかこふらくを
これは君は知すやにて同しつゝけやうなれと心かはれり但し此六帖の歌は萬葉第十一に胸の句さわく入江のといひ下句しられんためとこひいたむかも此歌也　以上數首江河等によせたるを一類とせり
人しれぬおもひを常にするかなるふしの山こそ我身なりけれ
人しれぬ思ひといふに火をもたせたり二三句のつゝきは秀句なりふしの山も煙たちてもゆとはいへと世間の火のことくあらはに見えねは人しれぬ思

ひによそへてわか身とはいへりおもひとのみいひてもゆともいはぬはふしの事人のあまねくしれるにゆつるなるへし
六帖
人しれぬおもひするかの國にこそ
　　身をこからしの杜は有けれ
とふ鳥の聲もきこえぬ奥山のふかき心を人はしらなん
上の句はいたりてふかき戀の喩にいへり
六帖
鳥のねもきこえぬ谷のむもれ木は
　　わか人しれぬ歎きなりけり
仲文集
鳥のねもきこえぬ山にいかてかは
　　雲路を分て人のかよはん
後拾遺
あし引の山時鳥のみならす
　　あほかた鳥のこゑも聞えす
王荆公か詩にも一鳥不鳴山更幽と作れり
逢坂のゆふつけ鳥もわかことく人や戀しきねのみなくらん
鷄を木綿著鳥といふは世の中さわかしき時四境祭とて祓するに鷄に四手を付て四境の關にはなたるゝこと有されはかくは名付たり我人をこひて鳴よりゆふ付鳥もといへりあふ坂は只ゆふ付鳥をいはん爲なり
あふ坂の關になかるゝいはし水いはて心におもひこそすれ
六帖には下句いはてしもこそこひしかりけれと有上句は序なり以上四首一類にて其中に又二首つゝ殊に一類せり
うき草のうへを茂れるふちなれや深き心をしる人のなき
心は上の飛鳥の聲も聞えぬおく山とよめるに似たり水をもて上の歌につらぬ
續古今
水草ゐて有とも見えぬ沼水の
　　下の心をしる人そなき
打わひてよはらん聲に山ひこのこたへぬ山はあらしとそおもふ
後撰に此歌をふたゝひ載て詞書云返しせぬ人につかはしける返し
山びこの聲のまに〳〵とひゆかは
　　空しきそらに行や歸らん

人のつれなくて返事もせぬよりもしうちわひてよはらんするものならは心なきいかなる山の山ひこもこたへぬ事は有ましきになさけなくこたへぬ君かなとうらむる心なり

心かへするものにもかかた戀はくるしき物と人にしらせん

心かへとはわか心と人の心とをいれかふるなり物にもかは物にもかなとねかふなり　列子曰周穆王時西極之人有二化人一來云々既已變二物之形一又且易二人之慮一又曰魯公扈趙齊嬰二人有レ疾同請二扁鵲一求レ治扁鵲治レ之既同愈謂二公扈齊嬰一曰汝曩之所レ疾自レ外而干二府藏一者固藥石之所レ已今有二偕生疾一與レ體偕長今爲レ汝攻レ之何如二人曰願先聞二其驗一扁鵲謂二公扈一曰汝志彊而氣弱故足二於謀一而寡二於斷一齊嬰志弱而氣彊故少二於慮一而傷二於專一若換二汝之心一則均二於善一矣扁鵲遂飲二二人毒酒一迷死三日剖レ胸探レ心易而置レ之投以二神藥一既悟如レ初二人辭歸於レ是公扈反二齊嬰之室一有二其妻子一妻子弗レ識齊嬰又反二公扈之室一有二其妻子一妻子亦不レ識二一室因相與訟求二辨於扁鵲一扁鵲辨二其處一由訟乃已これらは心をかへたる證なり

拾遺
戀するはくるしき物としらすへき　人を我身にしはしなさはや

玉葉戀一忠岑
わかたまを行か心に入かへて　思ふとたにもいはせてしかな

源氏總角細流引歌
いかて我つれなき人に身をかへて　くるしき物と思ひしらせん

よそにしてこふれはくるしいれひものおなし心にいさむすひてん

いれ紐は裝束に雄紐雌紐ありめひもにをひもをさし入れて結へはいれ紐といふふたつを取合せてさす物なれはおなし心にむすはんとはよめるなり

右二首心類せり

萬葉
何ゆゑか思はすあらんひものをの　心にいりて戀しき物を

六帖
いれひものさしてきつれとから衣　からくいひてもかへしつる哉

同
草枕むすふとしけんよひ〳〵は

とけさりきやは下のいれひも

春たては消る氷の殘りなく君か心は我にとけなん

歌の心明なり

あけたては蟬のをりはへ鳴くらし夜は螢のもえこそわたれ

明たてはゝあくれはなりをりはへは打はへといふにかよひてきこゆやむまもなくひねもすになく心なり

六帖
ひるはなきよるはもえてそなからふる

螢も蟬も我身なりけり

うつほ
啼蟬ももゆる螢も身にしあれは

よるひる物そ悲しかりける

重之集
わか里のまつあけたてはうつ蟬の

むなしきねをも鳴あかす哉

夏虫の身をいたつらになすこともひとつおもひによりてなりけり

夏虫とはともし火に飛入りて火をとらんとして死ぬるむしなりさて身をいたつらになすとは云也飛蛾とも燭蛾とも云　心地觀經第六離世間品偈云如下飛蛾見二火光一以愛火故而競入不レ知三焔炷燒二燃身一失二命火中一甘自焚上世間凡夫亦如レ是貪二愛好色一而追求不レ知三色欲染二着人一還被二火燒一成二衆苦一出曜經偈云亦如三魚食レ釣飛蛾入二燈火一專心投二危欲一不レ惟二後受ヲ禍莊子曰不レ安二其味一而樂二其明一是猶三夕蛾去レ暗赴レ燈燒而死一　仁德紀に磐之媛皇后夏虫の火虫とよませ給へり萬葉長歌にも夏虫の火にいるかことみなと入に舟こくかことなとよめりひとつおもひとは我とおなしおもひなり思ひの火を火になしていへり新勅撰戀二に寛平御時后宮歌合のうた讀人不知

夏虫にあらぬわか身のつれもなく

人を思ひにもゆる比哉

後撰
夏虫の身をたきすてゝ玉しあらは

我もまねはん人めもる身は

いせ
夏虫の思ひに入てなそもかく

わか心からもえんとをする

同
よひのまに身をなけはつる夏虫は

きえてや人にあふと聞覧

夕されはいと丶ひかたきわか袖に秋の露さへおきそはりつ丶

秋の露さへといへるあはれふかし

六帖
いつとてもかはかぬ袖の秋の夜は
　　露置そへて物そ悲しき

いつとても戀しからすはあらねとも秋の夕はあやしかりけり

小町集には下句あやしかりけり秋の夕くれとあり顯註にあやしとは常にことなれはいへるなり　文集詩云大底四時心惣苦就中腸斷是秋天　萬葉七譬喩

つるはみのときあらひきぬのあやしくも
　　ことにきほしき此夕かも

萬十一
いつとてもこひぬときとはあらねとも
　　夕かたまけて戀はすへなし

齋宮女御集
秋の日のあやしきほとの夕くれに
　　荻吹風の音そ聞ゆる

兼輔家集
逢ことをいつしかとのみ思ひつ丶
　　くらす心はあやしかりけり

秋の田のほにこそ人をこひさらめなとか心にわすれしもせん

穗々はあらはにといふ心なり薄の穗蘆の穗にもそへて船の帆にもそへたり伊勢物語にほいにはあらてなといふにはあらすそれは本意にて音なりこれは和語なりまきらはせる註有故にことわるなり

秋の田の穗の上をてらす稻妻の光の間にも我やわする丶

六帖にはほのうへをのをなしわれやわする丶を君そ戀しきと有題稻妻にて此次に
　　いなつまの光のまにも忘れしと
　　　　いひしは人のことにそ有ける
此歌は返しなとにや

人めもるわれかはあやな花薄なとかほに出てこひすしもあらん

これはおもひあまりてふて丶よめる心なり萬葉に
家持
　　戀しなんそれもおなしそ何しかも
　　　　ひとめひとゝこちたくわかせん

あは雪のたまれはかてにくたけつ丶我物思ひのしけ

きころかな

あは雪は沫雪なり春の雪の消やすきをいふと申せと萬葉第二に但馬皇女かくれさせ給ひてその冬穗積皇子かの御墓をみやりてかなしひてよませたまへる御歌に

　　ふる雪はあわになふりそよこもりの
　　　　ゐかひの岡の關にせまくも

又第八巻冬歌に大伴坂上郎女

　　しはすにはあは雪ふるとしらぬかも
　　　　梅の花咲ふゆにそあらずて

されは冬も春もきえやすけにてふるをあわ雪といふなり顯註にたまるなりかてにくたけつゝとはかてにはかつといふなりかつきゆる心なりたちつてと同五音なりまたきえかてなといふはきえかたしといへはたまりかたしとよめるかとおほゆれとたまれはといふはもしのくはゝりてかたしとはきこえぬなり　密勘たまれはかて且字無異儀きえかてのことは別事なりくたけつゝとは雪のたまると見れは堪すほろ〳〵とおつるなり　今案かてにを且といへる事此詞心得かたけれは先達もしひていへるなりかつをかてとかよはせる例もなし其上かつといへる時かつにといふ事なけれはにもしもいかにそやとおほゆ此歌は古歌の姿なれは不勝とかきてかてにと讀るは此心にてたまれはたへすなり其證は萬葉第四

　　いにしへに有けん人も我かことか
　　　　妹にこひつゝいねかてにけん

此いねかてにけんを宿不勝家牟（イネカテニケン）と書るこれなりいねかてにしけんと心得る人あらんかしからすまたこれを注すへし同し萬葉十二に

　　ませこしに麥はむ駒ののらるれと
　　　　猶も戀しく思ひかてぬを

此おもひかてぬを思不勝焉とかけるをもて知へし同第十に

　　山ちかく家やすむへきさをしかの
　　　　聲を聞つゝいねかてぬかも

　　もみちはの過かてぬこを人つまと
　　　　みつゝやあらん戀しき物を

此二首のかてぬも不勝なりかてぬはかたぬなりかたぬはまくる事なれはたへぬなり詩に不勝を不堪

と同しやうに用るこれ也しからはかてすとこそいふへけれかてにとよめる事おほつかなしと難する人あるへし不知をしらにとよめる事國史にも載たる宣命の詞萬葉集等めつらしからぬに準らへて知るへし又萬葉第十七に

梅の花みやまとしみに有ともや
かくのみ君は見れとあかにけん

同卷長歌にかゆきかくゆき見つれともこゝにもあかにと云々　此二首は不飽をあかにと讀り然れは此義なるへきにやくたけつゝは雪のくたくるに心の思ひくたくるをかねたり

おく山のすかのねしのきふる雪のけぬとかいはん戀のしけきに

此歌は萬葉第八に

高山のすかのはしのきふる雪の
けぬとかいはも戀のしけゝく

とありて三國眞人人足か歌なりけぬとかは雪によせしけゝくは菅の葉によす又萬葉第三に

おく山のすかのはしのきふる雪の
けなはをしけん雨な降そね

又第六に

奥山のまきのはしのきふる雪の
ふりはますともつちに落めやも

これら皆葉なり菅の根は書たかへたるにやしのくはをかす心なりなにともせぬなり葉といはゝ更なり根はすこしうとし文鏡秘府論に出たる字對例詩云原風振₂平楚₁野雪被₂長菅₁　春たては消る氷のといふよりこなた四季をもて次第せり

## 古今和歌餘材抄卷十二 六十四首

戀歌二

題しらす　　小野小町

おもひつゝぬれはや人の見えつらん夢としりせはさめさらましを

夢の名殘をしたひてはかなくよめり萬葉に

思ひつゝぬれはかもとな黑玉の
　　ひとよもおちす夢にしみゆる

列子周穆王篇云夢有二六候一一曰二正夢一二曰二靈夢一三曰二思夢一四曰二寤夢一五曰二喜夢一六曰二懼夢一周禮の六夢も列子に同し此六夢の中に思ふ人を見る夢は第三の思夢也下の句は莊子云方二其夢一也不レ知二其夢一也夢之中又占二其夢一焉覺而後知二其夢一也且有二大覺一而後知二此其大夢一也此はおのつからかなへる也かゝる事を引て小町か讀るには有へからす

重出萬葉十五

おもひつゝぬれはかもとな黑玉の
　　ひとよもおちすいめにしみゆる

假寢に戀しき人を見てしより夢てふ物は賴そめてき

文選に假寢と有をうたゝねともかりねとも讀り

いとせめて戀しき時は黑玉のよるの衣をかへしてそきる

いとせめてはいたくせまりて也せちなる心也萬葉に甚の字痛の字をいとゝよめり又萬葉にいとをいたすともよめりせめてもを或抄にせめての事にする也と注せるは叶はすせめての事といふ時もせまりての心は通へといとせめてとつゝくる時はこと也味て知へし衣をかへしてきるとはよるきたる衣を返してぬれは其戀しき人のかならす夢に見ゆるといへり後撰集にも

白露のおきてあみぬことよりは
　　きぬかへしつゝねなんとそ思ふ

いとせめて戀しきたひのから衣
　　ほとなく返す人もあらなん

から衣かきたえ君か忘るれは
　　返してもきす戀しけれとも

萬葉には袖かへすとよめり

わきこもにこひてすへなみ白妙の
　　袖かへしては夢に見えすや

わかせこか袖かへす夜の夢ならし

まこともも君にあへりしかこと
白妙の袖をかへしてこふれはか
　　妹かすかたの夢にし見ゆる
顯注に又俊頼朝臣の一の説衣をかへしてぬれは戀の心なくさむといへり若此歌に戀しき時は夜の衣をかへしてきるとばかり有て夢に見ゆといふ詞のなけれはにや其義なくは戀のなくさむともなけれはそれも覺束なし萬葉にあまた袖をかへしてぬれは夢に見ゆとよみたれは衣返すと同し事なるへし密勘萬葉集の袖返す歌思ひわきまへ侍らさりけり俊頼朝臣のなくさむ説におほえ侍らす只衣をかへしきれは戀しき人夢にみゆと許を今よみ用ひ侍れはかへしてきるといふにてしりぬ夢に見たきよしの歌とこそは心得侍れ今いはく俊頼朝臣のなくさむといふ説は今の歌にてかへるには有へからす
六帖
なくさむと誰かいひけんから衣
　　かへすに戀のまさりけるみを
同
秋風をさむきにはあらすかへしきて
　　戀なくさめん衣かせ君
後拾遺元輔
なくさむる心はなくて夜もすから
　　かへす衣のうらこそぬれける
これらの歌にて申されたるなるへしされとあまたの歌をもて心得るに衣をかへしてぬれは夢に見ゆる故になくさむといへるにや夢に見るにはあらすしてたゝ何となくはいかゝなくさむへきにか
　　　　　　　　　　　　　　素性法師
秋風の身にさむけれはつれもなき人をそたのむくるゝ夜ことに
つれもなき人をそ賴むとは秋風のさむき夜ものあはれなる折ふしにもよほされてつれなき心もよはりやせんとたのむ心也或抄に
身にさむく秋のさよ風吹なへに
　　ふりにし人の夢に見えつゝ
此歌なとをよみうつしたるらんと有に又或抄に人丸か歌にとてひけり今云これは好忠家集に有て好忠は圓融院の頃の作者なれは此等は誤れる説也
萬葉
よしゑやしこひしとすれと秋風の
　　寒く吹夜は君をしそ思ふ
よしゑやしはよしやにてよし〳〵の心也うつほ物語に

いつとても頼む物から秋風の
　吹夕くれはいふかたそなき
これは今の歌にてよめりと見ゆ又重之集に
あさちふにけさふく風はさむくとも
　かれ行人を今はたのまし
しもついつも寺にて人のわさしける日眞せい法師
のたうしにていへりけることはをうたによみてを
のゝこまちかもとにつかはしける
　あへのきよゆきの朝臣
しもついつも寺は和名集云山城國愛宕郡出雲（伊都毛）（在都）
上下拾芥抄載廿一寺中上出雲寺下出雲寺載ニ之公家
恒例ニ被レ行ニ御讀經ニ云々宇治拾遺物語に王城の北
かみついつも寺と有人のわさしける日とは追善の
法事する日也眞せい法師は此集に歌二首有此人歟
後撰集にあつまなる人のもとへまかりける道にさ
かみのあしからの關にて女の京にまかりのほりけ
るにあひて眞靜法師
　あしからの關の山路をゆく人は
　　しるもしらぬもうとからぬかな
これも同し僧なるへし或抄に眞濟僧正といへと然
るへからす眞濟ならは僧正といふへし凡僧のこと
く法師とはいふへからす其故は僧正遍昭聖寶はと
らに眞濟よりは後なれと僧正とかけり齊衡三年に
僧正となれる人をいかてか法師とはかくへきたと
ひ微官の時なり其後の撰集なれは僧正といはん事
妨なし
つゝめとも袖にたまらぬ白玉は人をみぬめのなみた
なりけり
法華經五百弟子品曰譬如下有レ人至ニ親友家ニ醉レ酒而
臥是時親友有官事當レ行以ニ無價寶珠ヲ繫ニ其衣裡ニ與
ニ之而去其人醉臥都不ニ覺知ニ起已遊行到ニ於他國ニ爲ニ
衣食ニ故勤力求索甚大艱難若少有ニ所得ニ便以爲レ足
於レ後親友會遇見レ之作ニ如レ是言ニ咄哉丈夫何爲ニ衣
食ニ乃至レ如レ是我昔欲レ令ニ汝得ニ安樂五欲自恣ニ於ニ
其年月日ニ以ニ無價寶珠ヲ繫ニ汝衣裡ニ云々法華經の
此文を誦する日淸行朝臣も小町もともに其座に有
て聽聞しける故に是にことよせてよみておくられ
けるなるへし
返し　小まち
おろかなる涙そ袖に玉はなす我はせきあへすたきつ

せなれは
おろかなるはおろそかなる也
萬葉
おろかにそ我は思ひしをふの浦の
ありそのめくりみれとあかすけり
新古今
露はかりわくらん袖は頼まれす
涙の川のたきつせなれは
光孝天皇の御返事によみて奉れる歌也
寛平の御時きさいの宮の歌合のうた
藤原としゆきの朝臣
戀わひて打ぬる中に行かよふ夢のたゝちはうつゝなならなん
菅萬にはゆきかよふを行かへるとあり　打ぬる中とはねたる中なりたゝちは徑の字也萬葉には直道とかけり菅萬には只徑とかゝせ給へりうつゝには行かたきに夢には逢やすけれは夢のたゝちとはいへりねたるうちに君かりゆきかよふと見る夢路をうつゝになさはやと讀る也
躬恒集
あはぬ夜もあふ夜もいをしまたねゝは
夢のたゝちはあれやしぬらん

住のえの岸による波よるさへや夢のかよひち人めよくらん
住吉の岸は殊に波のひまなくよする所なれはいつくにても有へき中に取出られたり後撰に
住吉のきしの白波よる〳〵は
あまのよそめにみるそかなしき
しら波のよる〳〵きしに立よりて
ねもみし物を住よしの松
住吉のなみにはあらねとよとともに
心を君によせ渡る哉
すみの江の松に立よる白波の
かへる折にやねはなかるらん
住よしの岸にきよするおきつ波
まなくかけてもおもほゆる哉
住の江のめに近からは岸にゐて
波の數をもよむへき物を
すみよしのきしともいはしおきつ波
只うちかけようらはなくとも
波かすにあらぬみなれは住よしの
岸にもよらすなりやはてなん

一集の中かくのことし家々の集後々の撰集に入たる中に猶おほかるへし　上二句はよるさへやといはんための序なりよるさへやといへるにてうつゝにはまして人めをつゝむ事のしらるゝ也下にいたりて小町か歌にうつゝにはさもこそあらめ夢にさへ人めをもると見るかわひしきこれ今の歌と同しやうの心也

萬葉　たゝにあはすあるはことわり夢にたに
　　何しか人にことのしけゝん

をのゝよしき

我戀はみやまかくれの草なれやしけさまされとしる人のなき

菅萬には落句しる人もなきと有

紀とものり

よひのまもはかなくみゆる夏虫にまとひまされる戀もするかな

菅萬には夏の歌也六帖には夏虫の歌として結句を戀にも有かなと有或抄に此夏虫を螢と思へるは誤也

菅家のこの歌の左の御詩の落句にも其　奈レ遊蟲入二夏燃一と有にても知へしたゝよひのほとしはらく燈の光にまとふ夏虫たにはかなく見ゆるに我はよるひるといふわきなく思ひにもゆれはまとひまされるといふ也

夕されは螢よりけにもゆれとも光みねはや人のつれなき

是は菅萬には夏の歌也けにはまさる心なり萬葉には勝の字異の字殊の字をかけりすなはち菅萬此歌に異の字をかゝせ給へり下の句は光みねはや人のつれなき我思ひにも光ありて螢よりけにもゆるを見はつれなからしと也

さゝの葉におく霜よりもひとりぬる我か衣手そさえまさりける

菅萬には冬にありて下句わか衣こそさえまさりけれと有

わか宿のきくのかきねにおく露の消かへりてそ戀しかりける

是も又菅萬には冬に有て下句消かへりてもあはんとそ思ふと有上句は序也消かへりは今朝きえても又あすは置それも又きゆるやうなれと又さかりに

戀しくなるをいへるなるへし詩に關却と作るは俗にさひかへるといふ也それにはことなり

河の瀬になひく玉ものみかくれて人にしられぬ戀もするかな

顯注云みかくれてとは水に隱るゝ也みこもりなと云も水にこもる也俊頼朝臣歌にとへかしな玉くしのはにみかくれてとよめるそ我か身をかくると讀る其證歌おほつかなきよし申侍しかは俊惠は證歌なくてはよも讀しなと申侍りしかと見出し侍らさりき彼をまねひて後の人のよめらんは沙汰に及はす俊頼朝臣已前によめる證歌やあると心にかけてみるへきなり　定家卿云みかくれみこもりみきはみさひなと申同心水によせすは更によむへからさる事歟但俊頼朝臣の歌よりさきの證歌はよも侍らし物を詠ぬへしとも思ひもよらす先達の事はおそれあれとそしるにはあらす人々の心のこのむ處のくせ〳〵を申也彼朝臣はすへて證歌をひかへ道理をたゝして歌をよまぬ人にて侍る也其身堪能いたりていはゝいふ事皆秀歌の躰なり師大納言の子にて殊勝の歌よみ父子二代ならふ人なきに似たり又年老て後いよ〳〵かたはらに人なしと思ひて心の泉のわくにまかせ風情のよりくるにしたかへておちすはゝからす云つゝけたるそしり難すへきことわりも思ひつゝけられすあなおもしろかくこそいはめと見ゆれは時の人も後の人もゆるしつれはやかて先例證歌になりて用るなりそれほとにおもしろく上手に見えさらん人は思ひよるましき事なりさくらあさのけふのうらなしなといふ事それよりさきには見及ひ侍らぬものを人のくせと思ひなして信仰するはかり也されは基俊公は歌は俊頼に損せられぬるそかれまねひ給ふなまんなの文字もかゝすしりたる事なきまゝにわらはへのかたる事につきて無遮法界のいたつら事歌によみちらす物そ歌の外道なりとそ常に侍ける亡父は師匠金吾のいはれし事なれと歌をよまん人俊頼をもときては三十一字はいたつら事になりなんとそ申され侍し並たる人は其短をみる後の人はこのみにしたかふなり　八雲御抄云みかくれて如萬葉は水隱也寄レ水可レ詠存レ之而近曾歌合無レ何みかくれてと詠歌合する座にて朕水を離れみかくれ如何違二萬葉本意一

之由謂出而定家家隆卿共に俊頼か玉くしの葉にみかくれてと證歌を申其上朕不レ及レ謂二子細一但彼作者そこを思ひてよむほとの人にもなかりき兩人か出二證歌一事はゆゝしけれと此條猶如何近日歌合皆基俊流也何忘二先師一哉奈良の花林院の歌合といふ物を基俊判其時代歟教縁俊頼詠歌曰一雪ふれは青葉の山もみかくれてときはの名をやけさはおとさんといへるを基俊云見かくれてとは水にかくれてといふ也萬葉には水隱とそかける然れは波の下草かはつなとそみかくれてとはよめる山をみかくれてとよめるは未二曾聞一といふ俊頼つらぬよしに又詠歟猶可レ爲レ難其上基俊か流の人不レ可レ存也此御抄近習歌合とかゝせ給へるは建保五年十一月四日歌合也　冬野霰の題左兵衛内侍勝

なかめゆく末野の原の霜かれに
たまらぬ色は霰なりけり

右左衛門督忠信卿

しめし野のあられの玉のみかくれて
うす緑なる冬の下草

判詞云左のたまらぬ色いとよろしきよし各申右のみかくれて水のあたりにやなへていひならはしたると申人侍しかと俊頼朝臣玉くしの葉にみかくれてもすの草くきめちならすともと申歌侍るにと申出し侍りき猶さまことに優なりとて爲二左勝一判者衆議隱レ名付レ詞治部卿後日書詞畢治部卿は定家朝臣也さきに顯昭わか身をかくるといはれたるは袖中抄の意も今に同し俊頼は見かくるとよまれたるを顯昭誤て身隱と心得られける也落句の日路ならす共にかけ合せて意得へし建保の歌并判詞今いふに同し今案六帖ほしの歌に

月影にはかくれにけりあかほしの
あかぬ心に出てくやしき

此はかくれといへる其義心得かたし推量するには見の字をうつしたかへてもとは見かくれにてや侍りけん後の人よき本をもとめてたゝし給ふへし此集俳諧の女郎花の歌に花のすかたそ見えかくれすとともよみたれ共詞はすこしたらぬやうなれと見かくれの例もあれは見かくれともいふへきにや

みふのたゝみね

かきくらしふる白雪の下きえに消て物思ふころにも

有かな
序歌也下消はつもれる雪の下より消る也それを人
しれぬ思ひに心の消うするやうなるによそへてよ
めり
六帖　かきくらし降白雪の下きえに
　　　戀うせねとや人のつれなき
これは今の歌にや
　　　　藤原おきかせ
君こふる涙のとこにみちぬれはみをつくしとそ我は
なりける
菅萬に胸句涙のうらにとありみをつくしとはみを
しるし也江水の深きしるしに木をたておきたれは
それをしるしに舟はのほりくたる也名のよしは水
の深き筋を水尾といへはそこに立つ串也つは例の
詞也顯注に國史には難波江に始立二澪標一之由しる
せりと有は類聚國史歟　日本紀續日本紀等には見
えす延喜式第五十雜式云凡難波津頭海中立二澪標一
若有二舊標朽折一者搜求拔去土佐日記にみをつくし
のもとより出てなにはにつきて川尻に入かゝれは
難波はみをつくしのもとゝは見えたり萬葉十二に
　みをつくし心つくしておもへとも
　　此まもゝとな夢にし見ゆる
これは羇旅發思といふ中に前後名所の歌の間にあ
れはなにはのみをつくしなるへし　忠見集に御屏
風に名ある所々をよめる中にみをつくし
　吹風にまかする事もみをつくし
　　まつとしらてやさしてきつらん
是難波のみをつくしをよめる也萬葉第十四には遠
江の引佐細江にもよめりなにはをもとゝして似つ
きたる所にはいつくにもよむへし　又顯注に世俗
にはみをしるしといひ和歌にはみをつくしとよむ
を歌にみをしるしとよむ人侍るくちをしき事なり
密勘にみをしるしいまたよみ侍らねとさるものゝ
なからんにこそあらめそれより見くるしき物もう
たによみ侍るめるかといへり六帖に
六帖　河波もうしほもかゝるみをつくし
　　　よするかたなき戀もする哉
しぬる命いきもやするとこゝろみに玉のをはかりあ
はんといはなん

菅萬には初二句きえぬへき命もいくやとあり六帖には結句あひ見てしかなゝ有　玉の緒はかりとは玉の緒のなかくともつゝくれとまつはみしかき物にいへり然れはしはしのほとゝいふ心なり下にあふことは玉のをはかりとよめり　萬葉第十四東歌に

さぬらくは玉のをはかりこふらくは
ふしの高根のなるさはのこと

貫之集
ぬきみたる涙もしはしとまるやと
玉の緒はかり逢よしもかな

或抄に下句をしはしはかりあはんといひて見んと也といへるは誤也いはなんは人にいへとねかふ詞也

わひぬれはしひてわすれんと思へとも夢といふ物そ人たのめなる

戀わひぬれは忘れたにせはやと思ひてしひてわすれんとおもへと夢といふ物の見えてわすられす人たのめなるとなり人たのめとはたとへはさりぬへき時逢事あらんするそまことちきりおきて折よき時あれとも逢すして年月を過すやうなるをいふ也

詞華集に讀人不知
わひぬれはしひて忘れんと思へ共
心よはくもおつる涙か

是は今の歌の上句と下の菅野忠臣かつれなきを今はこひしと思へともといふ歌の下の句を取合せて一首とせり何人のしわさにかあらんいかにしてか集に入けんおほつかなし

わりなくもねてもさめても戀しきか心をいつちやらはわすれん

六帖にはわりなくそねてもさめてもこひゝるゝ菅萬は上句六帖と同しく下句恨みをいつちやりてわすれんとありわりなくはことわりなくの心なりことわりはことをわる也たとへは木をわるかことしよりて判断等の字をことわるとよめり戀しきかはかな也

戀しきにわひてたましひまとひなはむなしきからのなにや殘らん

六帖にはまとひなはを出ていなはと有菅萬には名にや殘らんを名にやたちなんとありむなしきからはあひみすしてむなしき物からといふ心にそへた

りなき世までの名にやたゝんと歎く心也

貫　之

君こふる涙しなくはから衣むねのあたりは色もえな
まし

萬葉には君こふるを人を思ふと有或抄に涙の水の
おほき心なりといへるは歌の心を得ぬ釋也落句は
色燃なましなり君こふる涙にぬるれはこそあれさ
らすは思ひにこかるゝむねのあたりは其色火のこ
とくもえぬへしとよめり後撰に貫之

涙にも思ひのきゆる物ならは
いとかくむねはこかれさらまし

これは同しやうにて心かはれり　うつほ物語藏ひ
らきに

むかしのはきえにし物をほともなき
戀にそへては色もえぬへき

これは今の歌をとりてよめり　潘安仁悼亡詩不レ覺
涕霑レ胸謝玄暉銅雀臺詩芳襟染二涙迹一　沈約詩山櫻
開欲燃

題しらす

よとゝもになかれてそ行涙川ふゆもこほらぬみなわ
なりけり

流てそ行は家集になかれてそふるとあり　六帖に
は冬もこほらぬを水もこほらぬとあり冬を水に書
たかへたる成へし　よとゝもには與世俱也世はつ
きせぬものなるをこれとゝもにといふは常にとい
ふ心也みなわ萬葉に水沫とかけり水のあわ也　或
抄に水の沫は浮てこほりやすきものなれとこほら
ぬといふと有それまては有まし只冬もこほらぬ水
といふに文字のたらねはみなわといへるなり

夢路にも露やおくらんよもすからかよへる袖のひち
てかわかぬ

家集には露や置らんを露そおくらしと有夜もすか
らかよへる夢路にも露や置ぬらん我袖のぬれてか
はかぬと也只寢たるほとにもかはかぬ袖を覺て後
かくよみなすなり六帖に

秋の夜の夢路に露そおきけらし
かよふとしつる袖ひちにけり

これはもし今の歌の轉せるにや

みつね集

衣手に今朝はぬれたる思ひねの
夢ちにさへや雨はふるらん

元眞集
思ひつゝひとりぬる夜のから衣
夢ちにさへも露はおかしを

これは今の歌をとれりと見ゆ

素性法師

はかなくて夢にも人を見つる夜はあしたの床そおき
うかりける

六帖には初二句夢にても戀しき人をと有此はかな
くては夢にてもはかなく人を見たる夜はとも又夢
にも人を見たる夜はなこりをしたひてはかなく朝
の床のおきふしといへりともきこゆ

後拾遺能宣
こひ〳〵て逢とも夢にみつる夜は
いとゝねさめそわひしかりける

續古今集三元良親王家歌合うた
かきりとは思はぬものをあかつきの
別れの床のおきうかるらん

六帖いせ
夢ならてあふ事かたき世の中は
大かた床を起すやあらまし

同貫之
けさのあさけ露おきなから悲しきは
あかぬ夢路をこふるなりけり

藤原たゝふさ

いつはりの涙なりせはから衣しのひに袖はしほらさ
らまし

僞に戀しといはゝなにしか忍ひ〳〵に涙に袖をは
しほるへきそとよめり平仲か涙のたくひは僞のな
みた也

六帖
まことなき物を思ひせは僞の
涙はかねておとさゝらまし

大江千里

ねになきてひちにしかとも春雨にぬれにし袖とは
ゝこたへん

涙を春雨にいひなさんとは其頃物おもへるなるへ
し

としゆきの朝臣

わかことく物やかなしき郭公時そともなく夜たゝ鳴
らん

六帖には落句よゝになくらんとあり　よゝは夜こ
との心歟又さくりあけてなくをよゝになくといふ
それにやそれはすこし時鳥にはいかにそや聞ゆ時
そともなくは時ともなく也上に足引の山時鳥わか

ことやと有し歌に似たり

萬葉
　足引の山下とよみ行水の　時ともなくも戀わたるかも

同
　春日野の淺茅か原におくれゐて　時ぞともなくわかこふらくは

源氏賢木
なけきつゝわか身はかくて過せとや　むねのあくへき時ぞともなく

つらゆき
さつき山こするゑを高み時鳥鳴ねそらなるこひもする
かな

五月山は名所にあらすたゝ五月の山也春山夏山秋
山冬山後の歌に彌生山ともよめる類也また萬葉に
卯の花さける山を卯の花山もみちする山をもみち
の山とよめる類も相似たり拾遺集に同し人

五月山この下やみにともす火は　鹿のたちとのしるへなりけり

又萬葉集に
五月山うの花月夜ほとゝきす　きけともあかす又なかんかも

五月山花橘にほとゝきす　かくろふ時にあへる君かも

これら皆夏にのみよめるにて知へし木するゑを高み
は郭公によせてなく音そらなるといはんため也な
くねそらなるとは或抄に人を戀て高く鳴によすゝ
心に釋せるは叶はす物思ふ心のそらになりてなき
てのみふるをよそへていへり次の歌をかけて見る
へし

六帖
　この山の嶺にちかしと我見つる　月の空なる戀もするかな

六帖
　足引の山の木末し高けれは　なく時鳥こゑはるかなり

凡河内躬恒
秋霧のはるゝ時なき心にはたちゐの空もおもほえな
くに

秋霧のはるゝ時なきといふ縁に立居のそらもおも
ほえすといへりこれは心のこゝにあらぬを俗にも
何をする空もなしといふかことし

萬葉
　立居する容もしられすこふれとも　妹につけねは間使(マツカヒ)もこす

清原ふかやふ

虫のこと聲に立ては鳴ねとも涙のみこそ下に鳴るれ

忍ひになく事の虫にもまさるよしをなみたのみこそ下になかるれとよめり

これさたのみこの家の歌合のうた

よみ人しらす

秋なれば山とよむまて鳴鹿に我おとらめやひとりぬる夜は

或抄に發句を人の飽によせたりと云は用へからす部立を案すへしひとりぬる夜もあはぬほとの事也

題しらす　貫之

秋の野にみたれてさける花の色のちくさに物をおもふ頃かな

六帖には秋の野のちくさに咲りといひて下をみたれて物をと有上句はちくさにといはん序也亂れてといへるに思ひみたるゝ心あり

六帖
春くれは野へのまに〳〵生しける
ちくさに物を思ふ頃哉

みつね

ひとりして物を思へは秋の田のいなはのそよといふ人のなき

六帖には物を思へはを物をそ思ふいふ人のなきをいふ人もなしと有そよとは戰くといふ詞にそれよといふ事をかねたりひとり物を思へはわか思ふ人のみならすそれに思ひは悲しき物よとなくさむる人もなしと也

曾丹集
こからしの秋も立にしその日より
いなはのそよといはぬ日そなき

六帖
秋風の荻の葉を吹音きけは
そよ〳〵我も物をこそ思へ

大和物語
ひとりしていかにせましとわひつれは
そよともまへの荻そこたふる

ふかやふ

人を思ふ心はかりにあらねともくもゐにのみもなきわたるかな

心は鴈にあらねともとは鴈にかりそめの心にあらぬをそへたり

新古今村上御歌
春行て秋まてとやはたのめけん
かりにはあらす契し物を

たゝみね

秋風にかきなす琴の聲にさへはかなく人の戀しかるらん

秋風にかきなすは秋風樂の心にあらす文集五絃彈第一第二絃索々秋風拂松踈韻落云々李嶠百詠秋風入ニ夜琴ニ云々これらの心也かきなすはかきならす也萬葉に鳴の字響の字ともにならすとよめり時もりの打なすつゝみとよめるもうちならす也遊仙窟時々弄ニ(カキナラス)小絃ニ　これはおもひのあまりになくさむやとてみつからかきならす琴の音にさへかへりてはかなくなとか人の戀しかるらんとよめるなるべし

後撰　秋の夜に人をしつめてつれ〳〵と
かきなす琴のねにそなきぬる

つらゆき

まこもかるよとの澤水雨ふれは常よりことにまさるわかこひ

上句は常よりことにまさるといはんためなり　或抄に下句のとまりふつゝかなりいたりてふるき歌のさま也といへるは用へからすさまていふへきことにはあらねはたゝ時によりてこのまぬ詞あれは今はかやうにはよむへからすとはいふへし又或抄に我戀は泥によそへたり泥の字をこひちとよむといへるは不可用泥をこひちとよむ事はなしひちりことよみひちとよむをそれを戀路にはよみなせともこひとはかりにはいかゝそふへき

後撰　をやみせす雨たにふれは澤水の
まさるらんともおもほゆる哉

六帖　なかれます淀の澤水雨やまは
いかにならんとおもほゆる哉

元眞集　雨ふれは常よりまさる澤水と
きゝしは君かなみたなりけり

順集　雨ふれは草葉の露もまさりけり
淀のわたりのおもほゆる哉

これらは今の歌をとりてよめるにや

いせ集　津の國のみつの堀江に雨ふれは
かきりもしらすたまるわかこひ

拾遺　かゝらても有にし物を白雪の
ひと日もふれはまさるわか戀

わかこもは夏なれとまこもかるといふは秋歟然れは千里か歌より是まて十一首也春夏秋の詞あるを次第してあつめたる歟

やまとにはへりける人につかはしける

こえぬまはよしのゝ山の櫻花人つてにのみきゝわたるかな

家集には尾の句きゝやわたらんとあり　發句はあはぬまはといふ心也此歌表は花をいひて裏に戀のこゝろをたとへたり共いふへし又上句は序にて下句は表に本意をよめりともいふへし後撰にある人のもとにつかはしける御導師淨藏

霞たつ山のあなたの櫻花　　思やりてもをしき春かな

此歌今の歌をよみうつせる歟此歌より下三首は上の千里か春雨にぬれにし袖といふ歌の姿に有ぬへく見ゆる歟

やよひはかりにものゝたうひける人のもとに又人まかりてせうそこすと聞てよみてつかはしける

露ならぬ心を花に置そめて風吹くことに物おもひつゝ

六帖には落句物をこそおもへとあり花をめつる時風吹ことにちりやしなましとうしろめたく思ふことく人のうへに心を置ておもへは我ならぬ人のせうそこするに人の心のうつりてさそはれやせんとおほつかなき心をたとへたり萬葉第七譬喩歌寄山

佐保山をおほに見しかと今みれは　山なつかしも風吹くなゆめ

おほにはおほよそなりさほ山といひたるははなもみちの事なれは風ふくなゆめといへるは今の心に同し或抄に風のたよりを聞ことに物思ひをすると註せるは一向かなはす

題しらす　　坂上これのり

わか戀にくらふの山のさくら花まなくちるともかすはまさらし

かれすけ集
春ふかく散かふ花を數へても　とりあへぬ物はなみたなりけり

右三首花につけたるを一類とす　むねをかのおほより

三代實錄第三十二云元慶元年十二月廿七日右京人

前長門守從五位下石川朝臣木村散位正六位上箭口朝臣岑業改二石川箭口一並賜二姓宗岳朝臣一木村言始祖大臣武内宿禰男宗我石川生二於河内國石川別業一故以二石川一爲レ名賜二宗我大家一爲レ居因賜二姓宗我宿禰一淨御原天皇十三年賜二姓朝臣一以二先祖之名一爲二子孫一之避レ諱詔許レ之又第四十二云散位從五位下宗岳朝臣木村等言建興寺者是先祖大臣宗我稻目宿禰之所建也云々　推量するに蘇我或宗我と書來れるを宗岳に改られたるは馬子大臣蝦夷大臣其男入鹿其後左大臣赤兄皆逆臣にして不忠なりければ赤兄の後蘇我氏の人も聞えて絶すなから先祖の罪によりて然るへき官位にもいたらさりけるにや續日本紀より後續日本後紀に至るまて此氏見えす此木村に至りて又見えたり然れは蘇我と書ける時は逆臣有けるを忌て我を岳に改られける歟雜下に躬恒か君か思ひ雪とつもれはたのまれすとよめる歌のこと書に今の如くむねをかのおほよりとかなにかけれとその返しの作者の名には宗岳大賴とあれは此集の古本は皆眞名に宗岳と書れけんを此氏の人後もまれになりて聞なれねは音なる事をしらて和訓の氏かと心あてにおしはかりてむねをかとは後の人の書なせるなるへし

推量するに宗の字を和訓になし我の音を岳になしてそれをも又和訓になしてむねをかといへるにや棟梁の字をもてむねやなと名に付るを思ふへし

冬川の上は氷れる我なれや下に流れてこひ渡るらん

うへはこほれるわれなれやとはうへはこほれるごとき我なれはにやの心也冬川の上は氷にとぢられてあれと下は流れてやまぬやうに我もさりけなくみさほつくりてあれと下の思ひは年月をへてたえぬと也此歌は秋風にかきなす事の次に有へきにや

敦忠家集　下にのみなかれまさるは冬川の氷れる水とわれとなりけり

たゝみね

たきつ瀬にねさしとゝめぬうき草のうきたる戀も我はする哉

たきつ瀬はことにうき草の根さしとゝむましき所なれは思ひの切なるにたとふる心有歟又人の心のいたくつらきにたとふる心あるへしうきたる戀はよる方もなき也六帖に友則かめをはなれたる時の

歌に
たきつ瀬にうき草の根はとゝむとも
いかゝたのまん人の心は
とものり
よひ〳〵にぬきてわかぬるかり衣かけて思はぬ時の
まもなし
上句は衣を夜はぬきて衣桁にかくれはかけてと云
ん序なり上にかもの社のゆふたすきと有しか如し
後撰
から衣かけてたのまぬ時そなき
人の妻とは思ふ物から
同
中々に思ひかけてはから衣
みになれぬをそ恨へらなる
同
うらむともかけてこそみめ唐衣
みになれぬれはふりぬとかきく
東路のさやの中山なか〳〵に何しか人をおもひそめ
けん
是も上二句は序也さやのなか山は遠江也　和名集
云遠江國佐野郡　續日本紀云養老六年二月割二遠江
國佐益郡八郷一始置二山名郡一

後撰
東路のさやの中山なか〳〵に
あひみて後そわひしかりける
六帖
東路のさやの中山さやかにも
見ぬ人ゆゑに戀やわたらん
新古今集忠岑
東路のさやの中山さやかにも
見えぬ雲ゐに世をやつくさん
下のかひ歌にもよこをりふせるさやの中山と讀り
さよの中山とよみなせるは末にいたりての事也
佐夜とかくに付て夜の字にて訓を交へたる沙汰あ
りおほつかなし中山は吉備の中山みのゝ中山きさ
の中山の類也何しかのしはやすめたる詞也さやの
中山の事顯註密勘に委しく見えたり
しきたへの枕の下に海はあれと人をみるめはおひす
そ有ける
なきためし泪を枕の下の海といふによりあひみる
事なきを海松布のおひぬによせたり或抄に人はあ
はれと見え來ぬよしといふは叶はす
拾遺
もとゆひにふりそふ雪の雫には
枕の下に浪そ立ける

新古今深養父
うらみつゝぬる夜の袖のかはかぬは
　　枕の下にしほやみつらん
年をへてきえぬおもひはありなからよるの袂は猶こほりけり
　年を經て消やらぬ思ひの火はさかりなれと夜なよなの切なる戀に流るゝ涙は猶えかはかさてはてはこほるまてなりと也涙といはねとたもとのこほるにてきこえたり猶そぬれけるなとはよまて立こえてこほるとよめるは夜の涙をつよくいへる也うつほ物語くらひらきに
　　きえすのみもゆる思ひもある物を
　　　　何か袂のこほりしもせん
　これは今の歌を取てよめる也
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　つらゆき
わか戀はしらぬ山路にあらなくにまとふ心そわひしかりける
　家集には腰何あらねともと有六帖には下何なとか心のまとひけぬへきと有　旅にてしらぬ山路にまとふはわひしき物なるよりゆくへもしらぬ戀路を

かくはたとへたり
紅のふりいてつゝなく涙には袂のみこそ色まさりけれ
　紅のふり出は夏部時鳥の歌に釋しき袂のみこそとは人は紅の涙を見ても心にしみてあはれともおもはぬよりいへり
後撰
　紅に袖をのみこそそめてけれ
　　　　　君を恨る涙かゝりて
　今はとてふりつる時は紅の
　　　　涙とまらぬ物にそありける
白玉と見えし涙も年ふれはから紅にうつろひにけり
　家集には落何なりぬへらなりと有
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　みつね
夏虫を何かいひけん心からわれも思ひにもえぬへらなり
　何かいひけんとは火に入てもゆる事をもときてはかなき事と何かいひしと也六帖に
深養文
　まさりては我そもえける夏虫の
　　　　火にかゝるとて何もときけん
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　たゝみね

風吹けは嶺にわかるゝ白雲のたえてつれなき君かこゝろか

此歌貫之集にも載たる事不審也　菅萬に上句同しくて行かへりても逢んとそ思ふとあるは此歌か但それならは寛平御時后宮歌合と有へきを題しらすとあれは別の歌歟六帖に尾句の君か心かを人の心かと有上句は序也たえてつれなきは絶倫といふ時のことく世にたえてたくひなくつれなき也或抄に風ふけは嶺にわかるゝ白雲のことく人の物いひさかなきに付て中絶てつれなく君か心のあるとなりといへるは部立の心にかなはぬ上絶てといへる心を得ぬ也菅萬に

朝影にわか身はなりぬしら雲の　絶てきこえぬ人をこふとて

これはおなしつゝけやうなれと心同しからす

月影に我身をかふる物ならはつれなき人も哀とや見ん

拾遺戀三につれなき人もを思はぬ人もとてふたゝひ載す六帖にはあひ思はぬと云題に入たり月とのみはよますして影と云事をそへたるに心をつけたるにや我は人をあはれと見ること月のことくなるに人は我をあはれとも見ねは月の水なとにうつる影のおなしけれはもし其月影にわか身をかふる物にてあらは諸共にあはれとや見んと讀る心にや或抄の心つれなき人も月をは面白く見るへけれはわか身を月にかふる物ならはかへたきと也

新後拾遺天暦御製

月影に身をやかへましあはれてふ　人の心にいりて見るへく

戀しなは誰か名はたゝし世の中の常なき物といひはなすとも

わか戀しなん時君は世の常なきにいひなすとも君か名ならて誰か名かたゝんと也萬葉に

里人もいひつくかねによしゑやし　戀てもしなん誰名ならめや

人めおほみたゝにあはすてけたしくも　わか戀しなは誰名かあらん

此二首をもて本歌にせられける歟或抄にたか名はたゝしを釋して君故にこそと人はいはめとなりといへるは歌の心を得ぬ也

貫之

津の國のなにはの蘆のめもはるにしけきわか戀人しるらめや

めもはるにとはゐもはるかに也それを蘆のめくむによせてつゝけたり或抄に云二つの心有此歌は目のはる也紫の色こき時はめもはるにとよめり此歌は目も遙なり土佐日記に松原めもはる〳〵なりとかけると同しといへるは誤也物によするとよせぬとのかはれるのみ也菅萬に

駒なへてめもはるの野にましりなん
若菜摘くる人もありやと

是は物によせねともはるを春に續けてよめり兼盛歌に

なには江にしけれる蘆のめもはるに
おほくの世をは君にとそ思ふ

今と同し心也これを取てよめる歟稻麻竹葦はしけき事にいふ物なれは我戀の數々なるを人しるらめやよもしらしとたとへてよめり

手もふれて月日へにけりしらま弓おきふしよるはいこそねられね

六帖には落句を物をこそ思へと有弓は男の手にとる物なる故に女をおほく弓によそへてよめりさるを手もふれすして月日へにけるといふは誠に手をたに取ふれすして久しく戀わたることをかねてよめる歟又は表は弓をいひてあはぬ事のたとへとする歟おきふしもよるもいこそも皆弓の縁の詞也弓をふりたつると引ふせるとをおきふしといふ　神代紀云振起弓彇云々　萬葉第三云大夫之弓上振起云々　古事記輕太子歌云都久由美能許夜流許夜理母阿豆佐由美多弖理多弖理母云々こやるはふせる也弓をふするに寄すたてりは弓を振起るに寄すおきつふしつして物思ひてよるはいねられぬとよめる也或抄に手ふれす久しく置たる弓は節おきなとしてくせの出來ることくに我も物を思ひていねられぬ事のくせとなりたると也とあるは用へからす

人しれぬおもひのみこそわひしけれわかなけきをは我のみそしる

下に恨てもなきてもいはんかたそなきといふ歌もこれにかよへり

新古今式部内親王

忘れてはうちなけかるゝ夕かな
我のみしりて過る月日を

われのみしりても是より出たり
ことに出てゝいはぬはかりそみなせ川下にかよひて　とものり
戀しきものを
詞に出てかくといはぬのみそみなせ川の水なき川
と聞ゆれと下になかれてかよふことくいと戀しき
心有ものをと也下は底也萬葉に
　戀にもそ人はしにするみなせ川
　　下にわれやす月に日にけに
又長歌に此川の下にもなかく汝か心ゆめなともよ
めり
　みつね
君をのみ思ひねにねし夢なれはわか心から見つるな
りけり
六夢の中の思夢は上の小町か歌にひけりわか心か
らみつるなりけりとは一切唯心造の文の心に似た
り萬葉に
　我心とのそみ思へはあたら夜の
　　ひとよもおちす夢に見えけり
　たゝみね
命にもまさりてをしく有物は見はてぬ夢のさむるな
りけり
家集に云むかし物なといひ侍し女のなくなりしか
はあかつきがたの夢に見はて侍らてさめ侍りにし
かは云々　命よりもまさりてをしきものは思ふ人
にあふと見る夢の見はてすさむる名殘のみなりと
也命にまさるとはをしきよしをきはめていへり
後撰　よそなからおもひしよりも夏の夜の
　　見はてぬ夢そはかなかりける
　はるみちのつらき
梓弓ひけはもとすゑわかかたによるこそまされ戀の
こゝろは
六帖には尾の句戀しきことはとあり弓は引時にも
とゝすゑとの我方によりくれはよるといふ詞まう
けんとて上は例の序にいへり
　みつね
我戀はゆくへもしらすはてもなしあふをかきりと思
ふはかりそ
つく〳〵と我戀を思へはいつくをゆくへいつをは
てともなしたゝあふ事あらんを戀のかきりと頼み

思ふはかりなるそとよめる也上にわか戀はむなしき空にみちぬらしと有し歌を取てよめるにや

我のみそかなしかりけるひこ星もあはて過ぐせる年しなければ

菅萬
戀わひぬあまのかはらへ行てしか
わたる彦星ありといふなり

貫之集
年を經て戀わたれとも我ためは
天河原のなきそわひしき

ふかやふ

今ははや戀しなましをあひみんとたのめしことそ命なりける

一すちにつらくは中々に今は戀死て物も思はしをよしなきそらたのめの命となりてしにたにえやらてなからへて物思ふ也前後の歌を見合せ今ははやといへるに心を付へし

後拾遺集和泉式部
中々にうかりしまゝにやみにせは
わするゝほとになりやしなまし

こと書に久しうとはぬ人の音つれて又おともせすなり侍にければと有落句物をとそへて心得へし今の心に似たり

みつね

たのめつゝあはて年ふるいつはりにこりぬ心を人はしらなん

此歌後撰には詞かきに久しくいひわたり侍りけるにつれなくのみ侍りけれは業平の朝臣とて伊勢か返し

夏虫のしか〳〵まとふ思ひをは
こりぬかなしと誰か見さらん

此歌ともに載たりこれは枇杷左大臣仲平也いまたつかさくらゐひきかりける時の歌なれはなかひらの朝臣と假名にかきたるを後の人かもしを誤りてうつしなしたる歟又なかひらと有をなりひらと見損しける歟

いせの海にあそふあまともなりてしか
浪かきわけてみるめかつかん

といふ歌も枇杷殿の伊勢におくり給へるうたなるを在原業平朝臣と眞名にかけり業平家集にも入れり是も物をもよく見ぬなま才學なる人の藤原なかひら朝臣と有けるをなかひらをなりひらとかき

損するか見損する歟より藤原は在原なるへしと思ひて眞名には改けるにや梨壺五人これらのまちかき事まとふへきにあらす業平と伊勢と時代たかへる上に此贈答共に伊勢か集に有て枇杷殿也枇杷殿も伊勢も躬恒も同時にて此集にみつねか歌なるに彼集に枇杷殿の歌にて伊勢か返しさへあるは返す〳〵不審也　歌の心にためおきてあはて年頃をふる僞にはこりて思ひやむへきことなるにそれにてこりぬにまことの心のいたれるをしれかしと也

とものり

命やはなにそは露のあたものをあふにしかへはをしからなくに

何そはのは丶そへたる字也命やは何そつゆとひとしきあた物なるをあふ事にもし人のかへはをしからすとみつから身をかろんしてよめりたとひ千世萬世をむなしく經んをも一夜のあふ事にかへはをしからしいはんや露の身のあた物をやの心なるへし　萬葉第十三長歌終に人はあた物そうつせみの世人いせものかたりに

思ふには忍ふる事そまけにける

逢にしかへはさもあらはあれ

# 古今和歌餘材抄卷十四

六十一首滅歌二首合
六十三首或六十二首

## 戀歌三

六十三首といひ或は六十二首といふはこの卷滅歌あめのみかとの返しに奉れるうねめか山しなの音羽の瀧の音にたにとよめるは山科の音羽の山の音にたにといふに山と瀧とひともしのたかへるのみなれはおなし歌なるにより此集歌數總して千百首とも千九十九首ともいへる故なり

やよひのついたちよりしのひに人に物をいひて後に雨のそほふりけるによみてつかはしける

在原業平朝臣

しのひに人に物をいひてとは部立の心またあひたるにはあらす只思ひ初たるよしをいひつかはすをいへる歟又は物をいひかはせる成へし伊勢物語にはうちものかたらひてかへりきて時はやよひのついたち雨そほふるにやりけりとあれは今とたかへりそほふるは細雨なり添降にてふりそふ心なりといへる説は誤也或抄に雨のそほふるはそとふる雨をいふ世俗にそばぬれてといひ人のちとにくきをそほろにくきといふかことし

萬葉十六
彌彦のおのれ神さひ青雲の
たな引日すらこさめそほふる

源重之
春雨のそほふる空のをやみせす
落る涙に花そちりける

後撰云八月中のとをかはかりに雨のそほふりける日をみなへしほりに藤原のもろたゝをのへにいたしておそく歸りけれはつかはしける左大臣

暮はては月も待ゝし女郎花
あめやめてとはおもはさらなん

小雨なる故に女郎花ほりにもつかはされ月もまつへしとよみたまへり

おきもせすねもせてよるをあかしては春の物とてなかめくらしつ

物をおもひておくるともなくぬるともなくて夜を明してひるは又春の物とてなかめくらしつるとなり長雨になかむるをかけたり或抄に長雨によせすといふは誤なり六帖に雨とあしたとの題に出せり

毛詩云寤寐思服悠哉々々輾轉反側又云言念君子載寢載興　伊勢物語にむかしをとこふして思ひおきて思ひおもひあまりてといへり　源氏若菜下にかんの君は中々なる心ちのみまさりておきふしあかしくらしわひたまふ

謙德公集
よるはさめひるはなかめにくらされて
春のこのめそいとなかりける

六帖
ふして思ひおきてなかむる春雨に
花の下紐いかにとくらん

六帖はあしたに此歌を載す後朝也おきもせすねもせてを逢みしひとを夢ともうつゝともわかぬさまに取なしなかめくらしつは空蟬のなくといふことく暮を朝にかねていふ心歟さらては後朝の歌にあらす

業平朝臣の家に侍りける女のもとによみてつかはしける

女は業平の妹なり委は伊勢物語に見えたり

としゆきの朝臣

つれ〳〵のなかめにまさる涙川袖のみぬれて逢よしもなし

伊勢物語には第四句袖のみひちてとあり　或抄につれ〳〵なる日つく〳〵と心のうつるかたなく人を思ひ居たるなかめに涙川のみまさりて袖のぬるゝをわさにして逢よしはなしと讀りと註してなかめを長雨にかけすといへり　今按なかめにまさる涙川といへるを長雨をかけすといふ事何のよしそや其上六帖に雨と涙川とふたつの題に入れたれは長雨を兼たる事あらそひなし詞書には見えねと雨のふる日つかはせるにやふらぬ日にてもなかむるに兼てはよみぬへし逢よしもなしとは涙川の水まさりて深けれは渡り越て行て逢よしもなしといふ心を譬を本意にてむすへるなり　搜神記に韓憑か妻の夫に贈れる書云其雨霪々河大水深といへり蘇賀といふもの此意を釋して云其雨霪々言愁且思也河大水深不レ得ニ往來一也　萬葉第四に朝川わたるとよめるも逢事[illegible]集下に至りて立田川わたらてやまん物ならなくにとも川と見なからえこそわたらねともよめるみな此心なり　又返しに身さへなかるといへるも此故なり

六帖
つれ〳〵になとか涙のなかるらん

人なん我をおもふともなく

同
つれ〳〵と袖のみひちて春の日の
なかめは戀の妻にさりける

後撰戀四道風
歸るへき方もおほえす涙川
いつれかわたる淺瀨なるらん

返し大輔
涙川いかなる瀨より歸りけん
みなるゝ身をもあやしかりしを

同五
せきもあへす淵にそまよふ涙川
渡るてふ瀨をしるよしもかな

返し
淵なから人かよはさし涙川
わたらは淺き瀨もこそはあれ

內侍たひらけいこ
絕ぬとも何おもひけん涙川
流れあふせもありけるものを

元輔集
思ひつゝほとふる雨に涙川
いとゝふかくもまさるころ哉

右これらの歌にて心得へし
かの女にかはりて返しによめる　なりひらの朝臣
あさみこそ袖はひつらめ涙川身さへなかるときかは
たのまん

淺みこそといふにふたつのやう有ひとつは俗に河の深き所を深み淺き所をあさみといふ萬葉に浪こすあさとよめるもこれなり然れは涙川の淺みこそと體にも心得へしふたつには里とほみ山近みなといふことく淺みこそと用にいへる歟涙川の淺みまておりたてやめはこそ袖のみはひつらめ逢みんかために淵瀨をいはすたゝ渡りにわたりて身さへなかるときかはたのもしき心とおもひて逢んとなりうつほ物語菊の宴に

涙川うきて流るゝ今さへや
我をは人のたのまさるらん

これは今の歌を取てよめり返しの心によりていよ〳〵さきの說を思ふへし伊勢物語によめる

淺みにや人はおりたつ我かたは
身もそほつまて深きこひちを

題しらす　よみ人しらす
よるへなみ身をこそ遠く隔てつれ心は君か影となりにき

よるへなみは緣なきなり定家卿云よるへとはたと

へは立より頼む縁なと有あたりをいふなり無縁に
さしはなれたるをよるへなしとはいふなり今按い
にしへはよるといふ事をよるへといへるなり萬葉
第九に處女墓を

つかの上のこのえなひけり聞かこと
ちぬをとこにしよるへけらしも

是は處女墓の上の木の枝のちぬ男か方へ今もより
てなひけるは世に有し時うなひ男よりもちぬか方
に心のよれると聞しか誠に聞しかことくよりにけ
らしとよめるなりこれにて知へし　或抄によるへ
なみを浪によせ身をこそを水尾によせたりといふ
說用へからす更にそのこゝろなしおもひやる心は
人の身をはなれねは影となるといへり

いたつらに行てはきぬる物ゆゑに見まくほしさにい
さなはれつゝ

伊勢物語には業平の歌とし六帖には人丸の歌とす
もし次の歌の左註を此歌をもかけて註せりとおも
ひけるにや下の句は見まくほしく思ふ我心にさそ
はるゝなり是より下七首は不逢歸戀なり

萬葉
かくしてや猶やかへらん近からぬ
道のあひたをなつみまゐりて

後撰
春の池の玉もにあそふにほ鳥の
あしのいとなき戀もするかな

曾丹集
時のまもゆくめつらしにおもほえて
見まくほしさにさそはれにけり

あはぬ夜のふる白雪とつもりなは我さへともにけぬ
へきものを

此歌はある人のいはく柿本人丸か歌なり
此歌ふる白雪とつもりなはといひともにけぬへき
なとよせたるやう詞つかひ人丸の比の體にあらす
萬葉をよく／＼見ん人これを信すへし

なりひらの朝臣
秋の野にさゝわけし朝の袖よりもあはてこしよそひ
ちまさりける

伊勢物語にはあはてぬる夜そと有六帖もおなし篠
は殊に露ふかきものなれはいへり上句には露とい
はて露あり下句には涙といはねと涙あり　夫木第
十一昌泰元年亭子院歌合女郎花讀人不知

秋の野のをみなへしとかさゝわけに
ぬれにし袖や花とみゆらん

新勅撰集神祇部に

笹分ば袖こそやれめとね川の
いしはふむともいさかはらより

此うたも袖こそぬれめをうたひあやまれる歟

小野小町

見るめなき我身をうらとしらねはやかれなてあまのあしたゆくくる

いせ物語には右の歌の返しなり作者たれともなし顯註みるめなきわか身をうらとよめるは見る事もなき我身をうしとそへたるなり但わか身とよむは此うらみおこせたるをとこの身をうしとおもひしれとよめるなり又我身をうらむともしらねはやともよめるなるへしあはすとうらみたる歌の返しなり　かれなてあまのあしたゆく來るとは人の中のたゆるをはかるゝといふかれ〳〵になるともいひ夜かれすともいふ也あしたゆく來るとはしけくあるくには足のたゆきなり密勘此歌の心かきあらはされて侍めり我身をうらむとしらねはやかれなてしけくくるとそ侍しをとこの身をうしと思へとても侍なん小野の心そらにはかりかたし　今按小町集に

みるめかるあまのゆきゝのみなとちに
なこその關も我すゑなくに

これは今の歌の心にかはれる歌なり

萬葉　わひわたる我身のうらとなれしはや
戀しき人のしきなみにたつ

後撰　流れてはゆく方もなし淚川
わか身のうらや限りなるらん

同　わたつみとたのめしこともあせぬれは
我そわか身のうらは恨むる

小大君集　よひ〳〵の夢の玉しゐ足たゆく
ありかてまたんとふらひにこよ

かれなてはかれでといふになもしをそへたるなり竹取物語云難波よりきのふなん都にまうてきつる更に鹽にぬれたる衣たにぬきかへなてなん立まうてきつる云々

中々に消はきえなて埋火の
有てかひなき物おもふ身は

源宗于朝臣

あはすしてこよひ明なは春の日のなかくや人をつらしとおもはん

こよひ明なはとはこれよりさきいく夜もあはて歸りてこよひさへあはて明なはといふなるへし　春の日は長くやといはんためなから此歌よめる時なるへし

みふのたゝみね

有明のつれなく見えし別れよりあかつきはかりうきものはなし

顯註云これは女のもとより歸るにわれは明ぬとて出るに有明の月はあくるもしらてつれなく見えし也其時より曉はうくおほゆとよめりたゝ女に別れしより曉はうき心なり定家卿密勘に云つれなく見えし此心にこそ侍らめ此ことはのつゝきは及はすえんにおかしくもよみて侍る哉これほとの歌ひとつよみ出たらん此世の思出に侍るへしとかけりかゝれは顯昭の説しかるへしと定家卿も思ひ給へり然れとも此歌はあはすして明たる歌ともの中にはさまれて侍り六帖にも來れとあはすといふ題の所にこの歌を出せりつれなく見えしの心は顯註のことく月の皃の明るもしらぬ心にしてそれにあはすしてかへす人のつれなき體を相兼てよめる歌なるへし萬葉集第十三云百不足山田道乎浪雲乃愛妻跡不語別之來者速川之往文不知衣袂笑反裳不知云々あはねと別るゝ事は有るなり

ありはらの元方

逢事のなきさにしよる浪なれはうらみてのみそ立かへりける

あふ事のなきさは逢事のなきとつゝけたりゆけとゆけといたつらに逢事のなくて恨て立歸るを渚による浪の立歸るか恨むるやうなれはよそへていへり以上七首はあはて歸る戀なり

伊勢物語　大よとの松はつらくもあらなくにうらみてのみも歸る浪哉

六帖　あふことのなきさにみをしなしつれは袖も涙にぬれぬ日そなき

よみ人しらす

かねてより風にさきたつ浪なれや逢ことなきにまたき立らん

顯注の心浪は風吹時こそたて風もふかぬさきに浪

のたゝんやうに人にあひてこそ立へき名のまた逢ぬさきに立ぬるとよめるなり今按名のたつとたしかにいはされとも風にさきたつ波なれやといふに人のいひさわく心きこえ侍り六帖に名を惜む

いかなれは千尋の舟もかゝるらん　風のさきにもさわく浪かな

これも同しやうに侍り萬葉集第十一に

風ふかぬ浦に浪たつなき名をも　我はあふかもあふとはなしに

今の歌はもし是を本歌にてよみける歟又六帖に

我のみやあたなは立といそに出て　渚をみれは波も立けり

さてこれより五首は不逢名立戀也

たゝみね

陸奥にありといふなるなとり川なき名とりてはくるしかりけり

名取川といふ川の陸奥にあんなると人の語るをよそにこそ聞し身のいつしかまことなき名を取てはいとくるしきとなり　日本紀に負の字をとるとよめり

みはるのありすけ 御春有助

貫之集に兼輔兵衛佐かも川のほとりにて左衛門の官人みはるのありすけかたひゆくうまのはなむけによめる歌云々

あやなくてまたきなき名の立田川わたらてやまん物ならなくに

またきは日本紀に豫の字をかけりかねての心なり常にはやき心なりといふもたかはす下句はさりとてあはてやむへき物ならぬにの心なり

もとかた

人はいさ我はなき名のをしけれは昔も今もしらすとをいはん

後撰云おほつふねに物のたうひつかはしけるを更に聞きいれさりけれはつかはしける元良親王

大かたはなそや我名のをしからん　昔のつまと人にかたらん

返し大つふね 在原棟梁女 此歌なり不審の事なり或抄に人とはひとりをさゝぬ世の人なりといへりいつれにても有へし昔も今も志らぬとは更に志らぬよしなりしらすとをのをは助たる詞なり

よみ人志らす

こりすまにまたもなき名はたちぬへし人にくからぬ世にしすまへは

顯注にこりすまとはこりすといふ詞なりこりすまの浦なとそへよめり人にくからぬとは俗の詞にもさまてなきことに物あらくはしたなき人をは人にくしと申めりけにくしともいふやはらかになつかしき人をは人にくからすと申めり此歌の心はかならすしもあはねとなつかしく物かたりなとすれはよその人はあひにけりといへはまたもなき名は立ぬへしといふなり女の歌かとおほゆなき名といへる女によれり密勘この註相叶無名たちてなけかしかりける人の又もなつかしく物語なとしける人にさきの事を思ひ出てよめるにこそ中々にねんもなき中よりは心とまりあはれにおほえ侍りけんかし　今案兼盛集に

ひたふるにいひもなはてそ世をふれは
人にくからぬ物とこそきけ

蜻蛉日記にかのめてたき所にはこそ見てしよりすさましけになりにたへかぬれは人にくかりし心思ひしやうはいのちはあらせてわか思ふやうにおしかへし物を思はせはやとおもひしを云々又云かくて人にくからぬさまにてとをといひてひとつふたつの年はあまりにけり云々こりすまのまもしかやうにそへたる歌有萬葉第十五に

うは玉のよる見し君を明るあした
あはすまにして今そ悔しき

ひんかしの五條わたりに人を志りおきてまかりかよひけり志のひなる所なりけれはかとよりはえいらてかきのくつれよりかよひけるをたひかさなりけれはあるしきゝつけてかの道に夜ことに人をふせてまもらすれはいきけれとえあはてのみ歸りてよみてやりける　なりひらの朝臣

東の五條わたりは五條后の御所なり人を志り置ては二條后のたゝ人におはしける時なり垣のくつれよりかよひけるをとは伊勢物語にわらはへのふみわけたるついちのくつれよりといへるにおなし和名に築墻をついかきともついちとも訓せり史記孔子世家云去レ衞將レ適レ陳過レ匡顏淵爲レ僕以二其策一指レ之曰昔吾入レ此由二彼缺一也　源氏物語帚木に

此女の家はたよきぬ道なりけれはあれたるくつれより池の水影見えて云々須磨になかあめについひちところ〳〵のくつれてなときゝ給へは云々浮舟にとのゐ人あるかたにはよらてあし垣しめたる西おもてをやをらすこしこほちていりぬ枕草子に人にあなつらるゝ物ついひちのくつれ

人しれぬ我かよひちの關守はよひ〳〵ことにうちもねなゝん

源氏物語藤裏葉にあなかちにかう思ふことならはせき守のうちもねぬへきけしきに思ひよはり給ふとは聞なから云々

題しらす　つらゆき

忍ふれと戀しき時はあし引の山より月の出てこそくれ

三四の句は出てこそくれといはん序なから折ふしにあへり

萬葉
足引の山より出る月まつと　人にはいひて君まつわれを

よみ人しらす

こひ〳〵てまれにこよひそ逢坂のゆふつけ鳥はなかすもあらなん

是より三首は逢戀なり

こひ〳〵てまれに逢夜の曉は　鳥のねつらき物にそ有ける

をのゝこまち

秋の夜も名のみなりけりあふといへはことそともなく明ぬる物を

六帖にはふせりといふ歌に入てあふといへはをあひしあへはとあり小町集にはあひとあへはと有ことそともなくにたま〳〵逢見ては何事をいひ出したりともなく思ひためつる事もかひなくてあかすしてほとなく明ぬるといふよしなり

見る時はことそともなく見ぬ時は　こと有かほに戀しきやなそ

秋の夜のなかしといへとつもりにし　戀をつくせはみしかゝりけり

遊仙窟云昔日雙眠(ツノカミ)恒嫌二夜短一云々

凡河内みつね

なかくとも思ひそはてぬ昔よりあふ人からの秋の夜なれは

むかしより人のいひつることく逢人による習ひな
れは秋の夜なれと長しともおほえすとよめるなり
　よみ人しらす
しのゝめのほから〳〵とあけゆけはおのかきぬ〳〵
なるそかなしき
ほから〳〵はほがらか〳〵にて朗の字なりことわ
さにほかりと口をあくなといふは此詞の俗語なり
紫式部家集にも
打忍ひなけきあかせはしのゝめの
　ほからかにたに夢を見ぬかな
おのかきぬ〳〵なるそかなしきとは今は明ぬとて
ぬきおける面々のきぬをとりきるをきぬ〳〵とい
へり　遊仙窟云遂則被レ衣對座泣涙相看 きぬきぬ
になるそと云へきをにもしなきは古語の故なり是
より下七首は別戀なり
うつほ物語
明ゆけときぬきさためぬしのゝめの
　老の世にてもわひしかりしか
きぬ〳〵のぬれてわかれししのゝめそ
　明る夜ことに思ひ出らるゝ
藤原國經朝臣 大納言中納言長良男

六帖には作者閑院の大臣とあり
明ぬとていまはの心つくからになといひしらぬ思ひ
そふらん
顯昭本に落句おもひなるらんと有密勘沙汰なし同
心歟　今はの心とはいまは歸りなんと思ふ心のつ
く也いひしらぬは密勘に此別の心いひもならはす
思ひもならはぬほとにをしく戀しき心なり
寛平御時后宮の歌合の歌　としゆきの朝臣
あけぬとて歸る道にはこきたれて雨も涙もふりそほ
ちつゝ
こきたれてとはかきたれてといふにおなしことは
なりかとこと同五音なり
題しらす　寵
しのゝめのわかれをゝしみ我そ先鳥よりさきになき
はしめつる
或抄に鳥よりさきにといふは早く別るゝよしなり
といへるは似たる物のそれならぬかことくやうや
う別れなんとする時いたる故に鳥よりさきになき
そむるなり
六帖
にはとりにあらぬねにても聞えけん

明ぬることを我なきしかは
よみ人しらす
郭公夢かうつゝか朝露のおきて別れしあかつきの
こゑ
おきわかれし人の物いひし聲のかなしくもおかし
くも聞えしを時鳥によそへて夢かうつゝかとなこ
りをしたひてたとる心なり別の時分の事は下にあ
かつきとあれは朝露はおきてといはんためはかり
なり
玉くしけあけは君か名たちぬへし夜ふかくこしを人
見けんかも
玉くしけはあけはとつゝくる枕詞也明て後歸らは
君か名の立ぬへき事を思ふ故に夜ふかく別れこし
を猶人や見つらんとおほつかなき心なり或抄に我
夜深く來たるを人の見つるほとに夜明なは君か名
のみ立へきとわひたるよしなりといへるは不叶こ
れは古歌の體なり
萬葉
玉くしけおほふをやすみ明てゆかは
君が名はあれと我名し惜も
同
玉くしけあけまくをしきあたら夜を
衣手かれて獨かもねん
同
月しあれはあくらんわきもしらすして
ねてわかこしを人見けんかも
後撰
鏡山あけてきつれは秋霧の
けさや立らんあふみてふ名は
大江千里
けさはしもおきけんかたもしらさりつ思ひ出るそき
えて悲しき
けさはしもはけさはにてしものふたもしはやすめ
たる詞なるをそれをやかて霜にかねておきけんと
つゝけきえてともいへり後撰に興風
思ひにはきゆる物そと知なから
けさしもおきて何にきつらん
此今朝しも今に同し今朝は別るゝ心まとひにいか
におきけんともしらさりつるを歸りきて其きはを
思ひ出るそまして心も消るはかり悲しきとよめる
なり
人に逢てあしたによみてつかはしける　業平朝臣
ねぬる夜の夢をはかなみまとろめはいやはかなにも

成まさる哉

是より下五首は後朝戀なり遊仙窟に睡の字をまとろむとよめりねぬる夜の夢とはあひみしことのうつゝともおほえぬをいへりまどろめはいやはかなにも成まさる哉とは別れきてもし又まことの夢にもやみんとまどろめと其かひなく夢にも見えねはいやはかなしとはいふなり

業平朝臣の伊勢の國にまかりたりける時齋宮なりける人にいとみそかにあひて又のあしたに人やるすへなくて思ひをりけるあひたに女のもとよりおこせたりける

伊勢國にまかりたりける時とは伊勢物語には狩使と有狩使ならは伊勢守の舘にやどるへし是は奉幣使なとに下られける時にやこの事いつの比そとならは伊勢物語にいはくこよひたに人しつめていととくあはんと思ふに國のかみいつきの宮のかみかけたるかりの使ありと聞て夜ひとよさけのみしけれは云々是を以て考みるに三代實錄第十云貞觀七年五月十六日丙申從五位上行伊勢權守藤原朝臣宣爲齋宮寮頭伊勢權守如レ故　此外正にも權にも伊勢守の齋宮寮頭かけたる人見えす　同第十二云八年二月十三日己未以二齋宮寮頭從五位下藤原朝臣諸房一爲二中務少輔一此諸房朝臣伊豆宣朝臣に代りて齋宮寮頭となられけるにか實錄には見えすといへともいかさまにも此事は貞觀七年五月以後其年の間の事なるへし齋宮恬子内親王文德天皇皇女母三條町紀靜子名虎女惟喬親王同母妹　三代實錄第三云貞觀元年冬十月五日丁亥卜二定恬子内親王一爲二伊勢齋一同第五云三年九月壬申朔勅遣二右大臣正二位兼行左近衛大將藤原朝臣良相尙侍從三位源朝臣全姬一向二八省院一發二遣伊勢齋内親王一

よみ人しらす

君やこし我や行けん思ほえす夢か現か寢てか覺てか

下句は上二句の心を述腰句は上につけ下につくる事心にまかすへしおもほえす我や行けん君やこしと何を置かへて皆おほえすとにや

萬葉十二
うつゝにか妹かさませる夢にかも
我かまとへる戀のしけきに

返し　なりひらの朝臣

かきくらす心のやみにまとひにきゆめうつゝとは世

人さためよ
かきくらす心の闇にまとひて夢ともうつゝとも得定むましけれは世の人さためよとなり忍ふ事なれと歌の習はさのみよむ事なり　伊勢物語には落句こよひさためよと有こよひ來りて定めよと齋宮をさしていふなり　或抄右二首の註に云諦の事なと引かけていへり歌に所用なし返す〳〵用へからす
曾丹集
かきくらす心のやみにまとひつゝ
うしとみる世にふるそわひしき
題しらす　よみ人しらす
むは玉のやみのうつゝはさたかなる夢にいくらもまさらさりけり
人めをつゝむとてくらきにあひ見たるうつゝをさたかに見ゆる夢にくらふれは何ほともえまさらすとなり
後撰
時の間のうつゝを忍ふ心こそ
はかなき夢にまさらさりけり
興風集
あひみてもかひなかりけりむは玉の
はかなき夢にをとるうつゝは
さよふけて天のとわたる月かけにあかすも君をあひ見つるかな
やゝまたれてきたる人をもさよ更て後出たる月のことくに心にあきたらてあひ見つるといふ心なりすなはちさる月の前にあへる成へし　下の句の心後朝によみて贈れる歌にてこゝに入たるなるへし
六帖
あし引の山下とほる月影に
あかすも人に逢見つるかな
君か名も我なもたてし難波なる見つともいふなあひきともいはし
なにはにみつあれは見つともいふなといはんためになにはなるとはおけり萬葉に
大伴のみつとはいはしあかねさし
てれる月夜にたゝにあへりとも
此歌より下は相見て後忍ふ心ある歌ともなりなとり川せゝのうもれ木あらはれはいかにせんとかあひ見そめけん
うもれ木とは水にも土にも久しくうつもれたる木なり谷の埋木なともよめり萬葉に

あまたあらぬ名をしも惜み埋木の
　下にそこふるゆくへしらすも
まかなくて弓削のかはらの埋木の
　あらはるましき事にあらなくに
又埋水ともよめりそれは藪草なとに埋もれてありとも見えす人にもしられすして年ふる水なり歌の心は瀬々のうもれ木のことく下に忍ふとすれと名取川の名にあらはれなはいかにせんとおもひてあひ見そめけるそと世のつゝましきをわひてよめる成へし
萬葉　そき板もてふける板間のあはさらは
　いかにせんとかわかねそめけん
同　下にのみこふれはくるし山のはに
　出くる月のあらはれはいかに
六帖　かくれぬの下行水のおもほえは
　いかにせんとかわかねそめけん
よし野川水の心ははやくとも瀧の音にはたてしとそおもふ
瀧の音にはを六帖にはたきつ音にはと有　水の心ははやくともとは心といふにもとふたつ有天竺にはわかちて人の心を質多(シッタ)といひ草木の心をは汗栗(カリ)娜(タ)といふもろこしにも此國にもわかたす詩には天心江心なといひ歌には池の心谷の心なといふ事は中をさして心といふ草木の心をなかことといふかことし此水の心といふは我心の物思ふ事のせちにすみやかなるを川中の水のはやきによせていへるなり躬恒集に
　散ぬとも香をやはとめぬ藤の花
　　池の心の有かひもなく
袋草子に能宣家集歌とて
　白川の水の心もいにしへの
　　秋をはけふやおもひ出らん
詞花集　誰にとか池の心もおもふらん
　　底に宿れる松のちとせを
萬葉　あた人のやな打わたす瀬を早み
　　心はとへとたゝにあはぬかも
戀くはしたにを思へ紫のねすりの衣色にいつなゆめ
初二句六帖には思ふとも下にをあはむと有下におもへのをはやすめ字也　紫のねすりの衣とは紫の

根にてそむるものにて色こき物なれは色に出ると
いはん料なり高陽院の歌合に
　旅人のねすりの衣打はらひ
　　　はらひもあへぬけさの白雪
此歌は作者いかに思ひてよまれたるにか判者經信
卿難をいはすかたせたるもおほつかなし　奥義抄
の一説の疊摺返す〳〵用へからす　ゆめはゆめゆ
めなり萬葉におほしつねには努の字を用ゆ萬葉に
は謹の字を勤の字をもかけりこの歌は古歌の體な
り後拾遺集に小式部内侍のもとに二條前太政大臣
はしめてまかりぬときゝてつかはしける
　　　　　　　　　　　　堀川右大臣
　人しれてねたさもねたし紫の
　　　ねすりの衣うはきにをせん
返し和泉式部
　ぬれきぬと人にはいはん紫の
　　　ねすりの衣うはきなりとも
　　　　をのゝはるかせ　從五位上右雄子
花すゝきほに出てこひは名をゝしみ下ゆふひものむ
すほゝれつゝ

花すゝきは穂に出てといはんため下紐はむすほゝ
れつゝといはんためなり下ゆふひもは下紐也顯昭
は女の下裳のこしをゆふ紐と釋せられたれと春風
か歌なれはそれにはあらす日本紀に衣帯をころも
ひもと點したれは下のおひ也或抄に人に戀らるゝ
には紐のとくれは思ふ人をあらはれて戀なはさた
めて紐のとくへけれは人の戀ぬる事の名ををしみ
て紐をつよく結はんとなりといへるはゆめ〳〵用
へからす
たちはなのきよきかしのひにあひしれりける女のも
とよりおこせたりける　　　よみ人しらす
橘清樹は三代實錄に見ゆる人なり
おもふとちひとり〳〵かこひしなはたれによそへて
ふち衣きん
ひとり〳〵とはあまたの人あらんやうなれと只獨
にてわか事なり　竹取物語にかうのみいましつゝ
のたまふ事を思ひさためてひとり〳〵にあひ給へ
やといへは云々これかくや姬におもひかくる人五
人有を其中におもひさためてひとりにあへといふ
事をいへり　大和物語に蘆屋のうなひをとめか事

をかける所にうはらをとことちとぬをとこか事をいふにひとり〳〵にあひなは今ひとりか思ひはたえなんといふに云々これもふたりの中にひとりにあは丶今ひとりかおなしやうに思ひし思ひはたえはて丶其まゝにては堪忍せしといふなりしかれは君と思ふとちなるわか人めを忍ふほとに戀しなは君は誰によそへてか藤衣はきんするそとなり藤衣は服衣なり續衣とかけり人しれぬ中に思ひのせちなれはかくあるましきことをまうけてよめるなり源氏物語かけろふにこと〳〵しきはならぬ思ひにこもりて參らさらんもひかみたるへしとおほえて參りたまふそのころ式部卿の宮ときこゆるもうせたまひにけれは御をちのふくにてうすにひなるも心のうちのあはれにおもひよそへられてつき〳〵しく見ゆ是は式部卿の宮の失給へるにことよせて忍ひたる女の服を着るなり　或抄ともにはゝとり〳〵の心を釋せす心得さりけるにや

返し　　たちはなのきよき

泣こふる涙に袖のそほちなはぬきかへかてら夜こそはきめ

君か我ために戀しなは我は泣てこふる涙にぬるへし然らは其ぬれたる衣をぬきかへかてら藤衣をは人の見ぬ夜着へしとなり

題しらす　　こまち

うつゝにはさもこそあらめ夢にさへ人めをもると見るかわひしき

さもこそあらめとは人めをもるもさこそあるへきことわりなれの心なり上に敏行のよるさへや夢の通路人めよくらんとよめる歌に心相似たり部立の心はかはれり

かきりなき思ひのまゝによるもこん夢路をさへに人はとかめし

顯昭の本にはおもひのまにまと有　定家卿今の本を用てまにま同心なれはたがひ侍らすとのたまへりよるもこんといへるはよるもゆかんなり　萬葉に直不往とかきてたゞにこぬとよめり下句の心うつゝは人の見とかむる心しられたり　遊仙窟云今宵亦閉戸夢裏向渠邊

萬葉　人の見てことゝかめせぬ夢にわれこよひいたらん宿さすなゆめ

夢路にはあしもやすめすかよへともうつゝにひとめ見しことはあらす

奥義抄に引れたる喜撰式にはかよへともの下になそやかひなきといふ一句そひて旋頭歌なり　見しことはあらすはみしことくにはあらすなりゆめによゝすからゆきて見るはわつかなるうつゝにもおよはすとなり

後撰　思ひねのよな〳〵夢に見しことを　たゝかた時のうつゝともかな
　　　　　　　　　　　　　　　　　　よみ人しらす

おもへとも人めつゝみの高けれは川と見なからえこそわたらね

顯註川と見なからとはあはと見なからといふなり古歌みな此心なりあはといふはあれはと云詞也あれはといふはかれはといふ詞なれはかはといひあはといふ同事なり後撰にもふるさとをかはと見つゝもわたるかなふちせ有とはむへもいひけりとよめり云々密勘心はたかひ侍らしあはを川とよめるとは知侍らすたゝ川有とは見やれともえわたらぬ心つくしをよめれは後人又これを本歌として見かはしなからつれなき中には昔今かはと見てとのみよみ侍めり云々　今案顯昭の説も其故なきにはあらすかはと見なからとはあはと見なからといふ心をもかけたる歟かのといふをあのといひかなたをあなたともいへりあとかとは諸音の中にことにしたしく通する字なれは和名には筑前の志加を志阿と載せ日本紀私記には文武天皇のまた皇子にてまし〳〵ける時輕皇子と申けるを阿留皇子といへりされはかはにあはといふことをそへたる事侍ぬへくや貫之集に

あはと見る道たにあるを春霞　かすめるかたのはるかなるかな

此發句六帖にはかはと見ると有是證なり後撰に

川と見て渡らぬ中に流るゝは　いはて物思ふ涙なりけり

これは今の歌をもて本歌とせる歟顯昭の引れたるは監命婦か歌にて大和物語に有後撰にはなしそらにおほえられたるかたがへるなるへし

たきつせのはやき心をなにしかも人めつゝみのせきとゝむらん

歌のこゝろ明かなり

六帖　いひしらて人めつゝみにせかれたる
池の水ともゆかぬ心か

寛平御時きさいの宮の歌合の歌　　きのとものり

菅萬　くれなゐの色には出しかくれぬの下にかよひてこひはしぬとも

下に通ひては互の心の下に通ふなり戀はしぬともは人めにさはりてなり

萬葉　いふことのさかなきくにそ紅の
色にな出そおもひしぬとも

題しらず　　みつね

冬の池にすむにほ鳥のつれもなくそこにかよふと人にしらすな

後撰には冬部によみ人不知の歌にて第四句下にかよはんと載たり六帖には氷の歌にて下句氷の下にわれはかよはんとあり　つれもなくとはにほ鳥の氷のゐる比まて池にかつくによせて心なかくしのひてかよふをいへり底に彼所をかねたり

六帖　君か名も我なもたてし池にすむ
にほといふ鳥の下にかよはん

さゝのはにおくはつ霜の夜を寒みしみはつくとも色に出めや

六帖に中の三句おきゐる霜の寒ければしみはしつともと有顯註云しみはつくともとはしみこほるなといひてさゆる心なりそれが人を思ふ事にもしみつくなといへはしみつきて思ふとも色に出しとせめて忍ふ心なり　密勘云此註相叶さゝは色かへぬものなれは色に出めやとよせたり

よみ人しらす

山しなの音羽の山の音にたに人のしるへくわかこひめかも

此歌ある人あふみのうねめのとなん申す
いさとこたへよわか名もらすなと有御返しなれは音に聞てたに人のしるへきやうにわかこひめやおとにもきこえすこひんとなり下の瀧歌には音羽の瀧の結句わかこひめやもと有

六帖　山吹のそれにあく事なくしあらは

人のしるへくわかこひめやは
　　　　きよはらのふかやふ
みつしほのなかれひるまをあひかたみみるめのうら
によるをこそまて
是はひるはあひかたけれは夜をまつといふことを
かくはよせたりみるめのうらとつゝくるにはあら
すうらにみるめのよるをこそまてと心得へし　續
後撰戀一におなし人の歌に
恨みても鹽のひるまはなくさめつ
　　袂に浪のよるいかにせん
躬恒集齋宮屏風歌
梓弓いるまとかたにみつ鹽の
　　ひるあひかたみよるをこそまて
　　　　平　貞文
白川のしらすともいはし底清み流れてよゝにすまん
とおもへは
これはさのみ人にあらかひてしらすともいはし心
の底きよくふた心なくしてともになからへて久し
くあひすまんと思へは忍ひはつへきにあらすとい
ふ心なり
　　　　とものり
したにのみこふれはくるし玉の緒の絶てみたれん人
なとかめそ
玉はいくらも緒につらぬきて結ふものなれは緒を
くゝりよするを忍ふにたとへて今はしのはしとい
ふ心を絶て亂れんとはいへり
萬葉
いきのをに思へはくるし玉のをの
　　絶て亂れなしらはしるとも
我戀を忍ひかねてはあし引の山橘のいろにいてぬへ
し
顯註は落句色に出ぬへくにて山橘は色紅にてこと
にうつくしき色なれは色に出ぬへくとよめり　密
勘云無不審又所用色に出ぬへし忍ふ限こそしのへ
今は忍かたけれは山橘のことく色に出へきとなり
山橘は萬葉にも六帖にも草なり　清少納言に木は
といふ所に出せるはおほつかなしはひゆく末々よ
りしけくおひたち實は色も大きさも南燭のことし
延喜式に嘗會の神供物の中にも出たり世俗には藪
柑子といひて髪そきの時山菅にそふる草なり萬葉
にあまたよめり

萬葉
あし引の山橘の色に出て
かたらひつきて逢こともあらん

同
足引の山橘の色に出て
わかこひなんをやめかたくすな

同
紫の糸をそわかよる足引の
山橘をぬかんとおもひて

同
此雪のけのこる時にいさかへな
山橘の實のてるも見ん

同
けのこりの雪にあへてるあし引の
山橘をつとにつみこな

六帖
かくはかり戀しわたらは紅の
末つむ花の色に出ぬへし

よみ人しらす
おほかたは我名もみなとこき出なん世をうみへたにみるめすくなし

六帖には下の句を人を見るめもおきにこそかれと載たり素性集には
たよりなくなき名は沖にこき出なん
よるへたもとにみるかひもなし

とあり今の下句は定家卿も世をうみ邊だにと心得ておはしけるに顯昭日本紀に海濱とかきてうみべたとよめる事なと引て釋せられたるを甘心して於此說者もとより思ひよらす尤可ニ信仰ー但おかしからん女なとのうみへたにと詠出たらんはくちをしくやとかき給へり委しくはそこを見たまふへし今日本紀を引て顯註をひろめん　神代紀下云妾必以ニ風濤急峻之日ー出ニ到海濱(ウミベタ)ニ又海畔をもうみへたとよみ又日本紀にも萬葉にも海邊とかきてへたとよめり又只邊の字をもよめり又日本紀に海濱とかきてあまはたともよめれは五音をもて通すれはあまはうみにてへたははたなり顯昭上の句を釋していはく我名もみなとこき出なんとは名をのかれんと申事なり　三善道統申狀云苟裳非レ素何遁ニ名於東海之東ニ蘿徑應レ深誰晦ニ跡於北山之北ニ 本朝文粹六　みなとは海の湊なり我身も名もみなこき出なんとみなとにそへたり下句を釋していはく世を倦たる心を海によせたり海には沖ありへた有へたとはほとりなきさなりそれによせてわろき身をもへたといへりみるめすくなしとはうき身は戀しき人にもあひ見ぬ心なりされはうき名をもとゝめしとよめるな

り第五句に戀の心は侍る歟今いはく海へたはさることなれと歌の心はいまたよくも得られたりとも見えす世をのかる皆こき出なん名をもとゝめしなと今の心にあらす貞文か白川のしらすともいはしといふ歌よりこなたのつゝきはあらはれて戀んといふ心の歌なりよの人のものいひさかなきをうみて磯かくれたる舟のやうに忍ひをれは中々人をみるめのすくなきにみなとよりおきをさしてこき出る舟のことく我名をも公界にあらはしてこひて人を見るめをやすくからんとなり六帖の下句を思ふへし舟には名を付る物なれは我名もとそへていへり萬葉第十一に

あちかまの鹽津をさしてこく舟の
　名はいひてしをあはさらめやも

又十六に沖津島かもといふ舟ともよめり　應神紀には枯野と名付給へる御舟有　續日本紀には高麗へつかはさるゝ使の乘れる舟を能登と名付たる例有公界を沖にたとへたるは下にもいその浪わけ沖に出にけりとよめり素性集のへたもとゝいへるは海邊許也

萬葉
あふみの海へたは我しる沖津浪
　君をおきてはしる人もなし

後撰
何せんにへたのみるめを思ひけん
　沖津玉もをかつく身にして

平　貞文

枕よりまたしる人もなきこひを涙せきあへすもらし
つるかな

發句は枕より外にの意なり上に枕のみこそしらはしるらめと有下にはしるといへは枕たにせてねしものをとよめり清少納言のはてに此さうしは目に見え心におもふ事を人やは見んすると思ひてつれ〳〵なるさとゐのほとに書あつめたるをあいなく人のためびんなきいひすくしなとしつへきところ〳〵もあれはきようかくしたりと思ふを涙せきあへすこそなりにけれとかけるも枕草子といふ名に付て世にもらすといふ心を此歌を思ひてかけるなり

よみ人しらす

風ふけは浪うつ岸の松なれやねにあらはれてなきぬ

へらなり

此歌はある人のいはくかきのもとの人まろ也六帖には松の歌にいれて浪こす磯のそなれ松と有て作者人丸なり人丸集にも有此歌ねにあらはれてといはんために上の句をよめるやう上古の體にあらす又へらなりといふ詞萬葉集に一首もよまされは人丸の歌にてはあらしとそおほえ侍る

拾遺　かた岸の松のうき根と思ひしは
　　されはよつひに顯はれにけり

六帖　さみたれの玉にぬく日のあやめ草
　　根にあらはれてなきぬへらなり

池にすむ名をゝし鳥の水を淺みかくるとすれと顯れにけり

名を惜むを鴛の名にかけてをし鳥のかくると水の淺くしてえかくれぬやうに名にたゝんことを惜みて人にしられしとつゝめとあらはれたるとなり

六帖　君か名も我名もをしのひとつかひ
　　おなしえにこそすまゝほしけれ

惜も鴛もむかしは遠之とかける故にかやうにそへたり今は鴛は昔のことくかけと惜は於之とかく誤なり萬葉等ゑからす昔はかへりて遠之と於之とかよはしてそふるやうのことはせさりき

逢事は玉のを計名のたつは吉野の川の瀧津瀬のこと

あふ事はわつかにて名はこと〳〵しく立てきこゆとなり古歌のすかたなり

萬葉　さぬらくは玉のをはかりこふらくは
　　ふしの高根のなるさはのこと

いせ物語　逢ことは玉のをはかりおもほえて
　　つらき心のなかく見ゆらん

伊勢集　瀧津瀬と名に流るれは玉のをに
　　あひみしほとをくらへつる哉

これは今の歌を取てよめりと見ゆ是より五首は逢後名立戀なり

村鳥のたちにし我名今更にことなしふともゑるしあらめや

むら鳥のたつはにはかにこと〳〵しく立ものなれは名のさわきたつ喩をかねて枕言にいへり萬葉長歌に

天さかるひなをさめにと朝鳥のあさたちしつゝ
むら鳥のむらたちゆけは云々
ことなしふとはことなしいふなりしのひゝきに伊
あれはそれにもたせたり又たゝいふの上略ともい
ふへしこともなしけにいひなすなり

後撰
かざすとも立とたちなんなき名をは
　　ことなし草のかひやなからん

六帖あふち
さみたれにことなしひつる時しもそ
　　人にあふちの花はさきける

後撰集の詞書にをとこの物にまかりてふたとせは
かり有てまうてきたりけるをほとへて後にことな
しひにことひとになたつときゝしはまことなりと
いへりけれは云々源氏總角にことなしひにかき給
へるかおかしう見えけれは云々夕霧にいとうくこ
となしひに云々枕草子にたれ〳〵かとゝへはそれ
〳〵といふにみなはつかしき中に宰相中將の御い
らへをはいかゝことなしひにはいひ出んと心ひと
つにくるしきを云々

君により我名は花に春霞野にも山にも立みちにけ
り

六帖には初二句君か名も我名もおなしとて霞の歌
に入たり霞はいつくにもたつを花にとしもいへる
は人を花によそへ又は歌のにほひにいへるなり後
撰にあひしれりける人の久しうとはさりけれは花
さかりにつかはしけるよみ人しらす

我をこそとふにうからめ春霞
　　花につけても立よらぬかな

返し源清蔭朝臣

立よらぬ春の霞をたのまれよ
　　花のあたりと見れはなるらん

或抄に我名は花にとははな〳〵しく人のいひなす
にたとへていへり我名は花にと切て春霞を下へ付
るやうに心得へしと有は今ひける後撰の歌に違へ
り用へからす世にあまねく名の立といはんとて野
にも山にもといへり

後撰典侍因香朝臣
春くれは花みんと思ふ心こそ
　　野への霞とともに立けれ

續千載戀一みつね
人めをも今はつゝまし春霞
　　野にも山にも名はたゝはたて

大和物語
里はいふ山にはさわく白雲の

空にはかなき身とや成なん
伊勢
ゑるといへは枕たにせてねし物を塵ならぬ名の空に
立らん
枕は戀をゑる物といへはつゝましくそれさへせす
してねたる物をいかて塵にもあらぬ名のかろく空
には立らんとなり塵は枕の縁なり空に立らんとい
へるはなき名を立るそらにとの心にはあらす高く
たつ心なり

萬葉　みそらゆく名のをしけくも我はなし
あはぬ日あまた年のへぬれは

後撰　吹風の下の塵にもあらなくに
さも立やすき我なき名哉

同　塵にたつなき名きよめん百敷の
大宮人を枕ともかな

六帖　夢とても人にかたるなゑるといへは
手枕ならぬ枕たにせす

同　涙のみゑる身のうさもかたるへく
なけく心をまくらとも哉

# 古今和歌餘材抄巻十五　七十首滅歌二首合七十二首

## 戀歌四

題しらす　よみひとしらす

陸奥のあさかのぬまのはなかつみかつ見る人にこひ
や渡らん

六帖には下句かつみる人の戀しきやなそとあり初
の五もし顯注にはみちのくのとありてみちのくの
おくは陸奥也陸奥國とかきてみちのおくのくにと
よむ歌にはかくのことくみちのおくとよむを略し
てみちのくともかけり世俗にみちのくにと申は歌
の詞にあらすましてむつのくにゝ申無下の事也陸
といふ文字をむつといへはとおもへり陸をはみち
とよむ也又かちともよむなりされは常陸はひたか
ちをひたちと申なり今案陸をは日本紀にくぬかと
よみたるを常にくかと申めりかちとよめることは
いまたしらすひたちはひたみち也あさかの沼は安
積郡にあり安積山同所なり花かつみとは菰をいふ
といへと和名にも見えす六帖にも菰につゝけて別

に出したれはこと物歟また菰も秋になりては花あれとも薄花橘なとの例にいふへき花にもあらすその上菰は夏こそ賞する物なるにおとろふる比さく花をもていふへくもあらねはいよ／＼おほつかなし又顯注にかゝる物の名は所にもえたかふ事なれは伊勢國には蘆をは濱荻といひ又さか木をは玉くしと申すやうにみちのくにもこもをかつみと申とかやかつみふきとて五月五日にも彼國には菖蒲をはふかてこもをふくは菖蒲のなきかとおもふにあさかのぬまにあやめをよむはひか事とも申つへしとそ俊頼も志るしたるに郁芳門院の根合に藤原孝善かよめる

あやめ草引手もたゆく長きねの
　いかてあさかのぬまに生けむ

此歌を金葉集に入られたり如何密勘云陸奥のならひにて菖蒲なかりけり實方中將の守に成りて下られたるにいかにあやめはふかぬそと尋ぬるに國にさふらはすと申すさてあるへきならすあさかの沼のかつみを刈てふくへしとてふかせられたりけるのち五日はかつみをふくなりと中古の人かたりつたへけり六條右府子息皇后宮亮信雅朝臣みちのくにの守に成て下りて京へ歸りて申されけるは此事そらこと也さうふこよなくおほかりと侍りけるは彼中將の後にや出來けむまたかつみふく事ひか事ならんもしらす今案萬葉第四に

をみなへしさき澤におふる花かつみ
　かつてもしらぬ戀もする哉

六帖
きみかをる八重山吹の花かつみ
　かつみる人は戀しかりける

此二首は淺香の沼ならてもかつみをよめれは陸奥國にかきりて菰をかつみといふにあらぬ事しられたり又昔よりあさかの沼に菖蒲ありけれはにや左近家集に或女の歌

くるしきに何もとむらんあやめ草
　あさかの沼に生ふとこそきけ

左近は實方と同時の人なるにそのころかくよめれはかつみふく説は一定ひか事なりかつみる人とはかつ／＼逢みし人也是より下九首は逢見て後の戀の類也

信明集
花かつみかつみる人の心さへ

あさかの沼となるそかなしき

或本　はなかつみかつみるたにも有物を
あさかの沼に水や絶なん

これらは今の歌を以てよめる也

あひみすは戀しき事もなからまし音にそ人をきく／＼
かりける　つらゆき

石上ふるの中道なか／＼に見すはこひしとおもはま
しやは

初二句はなか／＼にといふへき序なり武烈紀物部影媛歌云伊須能箇瀰賦屢嗚須擬底擧慕摩矩羅拖箇幡志須擬云々　續日本紀桓武紀高倉朝臣福信傳云少年隨二伯父一背奈行文一入レ都時與二同輩一往二石上衢一遊戲相撲云々　これらによるに布留の中道といふ大路昔より有と見えたり齋宮御集に宣耀殿女御歌に

鈴鹿山ふるの中道君よりも
聞ならすこそおくれかたけれ

藤原のたゝゆき　遠江守有貞子

君といへは見まれみすまれふしのねのめつらしけなくもゆるわかこひ

きみといへはゝ君とたにいへは也或抄に君ていへはとかける本もありといへり友則家集にしかかきて落句もゆる我身をとありみまれみすまれは見もあれ見すもあれなり毛阿反麻なる故也土佐日記のはてにとまれかくまれとくやりてんとあるもともあれかくもあれなりめつらしけなくは日本紀に希見をめつらしとよみたれはまれ／＼ならぬなり上に賀部にめつらしき聲ならなくに時鳥と有しに同し後撰集に

山近みめつらしけなくふる雪の
白くやならんとしつもりなは　伊勢

夢にたに見ゆとはみえし朝な／＼わかおもかけにはつる身なれは

朝ことに鏡に向ひて見るによくもあらぬ色のおとろへたるかはつかしけれはうつゝをは更にもいはす今は夢に入てたにも見ゆるとはみえしとなり女の歌に用意ありてやさし前漢書外戚傳云初李夫人病篤上自臨候之夫人蒙被謝曰妾久寢レ病形貌毀壞

不レ可ニ以見レ帝云々我以ニ容貌之好得下從ニ微賤一愛中幸於上上夫以色事レ人者色衰而愛弛云々則恩絶上所以攣々顧念我者乃以ニ平生容貌一也今見ニ我毀壞顏色非レ故必畏惡吐ニ弃我一云々文選云寒灯耻ニ宵夢清鏡悲ニ曉髮一中務集

心してあらまし物を夢とても　いかておもなく見えわたりけむ

これも母の歌にならへり

よみひとしらす

いしまゆく水のしら浪立かへりかくこそはみめあかすも有かな

さゝやかにて清き山河の石間行水は立かへりてみれともあかぬものなれは見るにあかれぬ人にもよそへてその石間行水を立歸り〳〵みる人もかくはかりこそあらめと也立歸りは上に池の藤浪立かへりと有しつゝき也

元眞集
我宿に咲にし日より櫻花　かくこそはみめあかすも有哉

いせのあまの朝な夕なにかつくてふみるめに人をあくよしもかな

顯註朝な夕なにかつくとは朝夕をも朝な夕なとは申せは朝夕にかつくにても有へし又朝菜暮菜とかきてあまの朝夕のくひものゝ料にみるめをとるともいひつへしかつくとは海に入てあまのうみ藻をも魚貝をもとるをいふ也今案萬葉第十一に

いせのあまの朝な夕なにかつくてふ　あはひの貝のかた思ひして

此歌に朝魚(アサナ)夕菜(ユフナ)とかけり魚も菜も和訓奈なれはかりて書てたゝ朝夕也その故は鰒をかつくを朝魚とはいふとも夕菜とはいふへからねは也今もこれになすらへて知へし上句はみるめにといふへき序にて別の心なし或抄にあまの朝夕かつきするかくるしきわさなれは我おもひのくるしきにせめて見るめにあかはやとよせたるよしいへり用へからす古歌の姿也

とものり

春かすみたなひく山のさくら花見れともあかぬきみにもある哉

上の山櫻霞のまよりといふに似たれとも彼はあはぬほとのみたる歌これは逢見て後なをみることの

あかぬ心なり

心をそわりなきものと思ひぬる見る物からや戀しかるへき　ふかやふ

前歌にかつみなからにかねてこひしきとよめると同し

萬葉　朝夕にみむ時さへやわきもこか
見れとみぬこと猶戀しけむ

後撰　戀のことわりなき物はなかりけり
かつむつれつゝかつそ戀しき
凡河内みつね

かれはてん後をはしらて夏草のふかくも人のおもほゆるかな

六帖にはかれはてんことをはしらて夏草の深くも人をたのみける哉と有夏草のしけき時いつかれん物とも思はねと秋ふけ霜おけはかれはつるやうに相思ふ中もいつとなくさこそかれはつるをかねてさも思はずはかなく夏草のことく深く人の思はるゝとなり是より三首は思戀の心也

萬　この比の戀のしけゝく夏草の
かりはらへともおひしくかこと

同　わかせこにわかこふらくは夏草の
刈そくれともおひしくかこと
よみ人しらす

あすか川淵は瀬となる世なりとも思ひそめてん人はわすれし

後にあるきのふのふちそといふをとれり

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

思ふてふことのはのみや秋を經て色もかはらぬものには有らん

秋は千草萬木色かはる習なれとわか人をおもふといふ言の葉のみあまたの秋を經れとも色もかはらぬものとよめりことのはの色かはらぬといはむか爲に年をへての心を秋をへてといへり或抄秋を飽に寄すといふ其心也續後撰戀四昌泰四年八月十五夜歌合に戀よみ人しらす

おしなへてうつろふ秋もあはれてふ
言の葉のみそかはらさりける

寛平御時の歌合と年もあまたへたてす是もかれも歌合のうたなるにいとあひにたり
題しらす
狹莚に衣かたしき今宵もや我を待らんうちのはし姫
又は宇治のたまひめ
六帖には家とうしを思ふといふに入たり延喜式云山城國調廣席二百八十枚狹席五百九十枚又云狹席六枚長席八枚　此狹席は廣席長席にむかへたれはせはくみしかき莚の名也狹はよろつに付て云る詞なれは今は何となく文字をたしていへる成へし顯注の心宇治の橋姫とは姫大明神とて宇治の橋もとにおはする神也其御許へ橋の北におはする離宮と申神夜毎に通ひ給とて曉ことにおひたゝしく波の立音のするとなん彼邊に侍る士民の申侍し隆縁と申歌よみに此歌の事たつね侍りしかは住吉の明神宇治橋姫と申す其神のもとへかよひ給ふ間の歌也と申きゝかさまにも宇治はしひめは一定なり又六帖家持の歌に
むは玉のよむへはかへるこよひさへ　我をかへすな宇治の橋姫
今案今の六帖をみるにうちの玉ひめと有此家持の歌萬葉第四にはみちの長手をと有家集にはなけれは六帖はおほつかなしうちはしかけ始たるは道昭和尚也續日本紀第一文武紀云四年三月己未道昭和尚物化天皇甚悼惜之云々乃山背國宇治橋和尚之所創造者也　顯昭説は橋姫物語の說歟彼物かたりは後の人の今の歌によりて作るともいかさまにも離宮のおはします事をまち給ふといひつたふるによりて女を橋姫によそへてかくはよめる成へし是より六首は待戀の心成へし
ぬは玉の妹か黑髮こよひもか　われなき床になひきてぬらん
君やこん我や行かんのいさよひにまきの板戸もさゝすねにけり
六帖には腰句以下やすらひにまきのいたとをさゝてねにけりと有やすらひもいさよひもともに徘徊とかきて同し心也まきのいたとは被板戸なり櫻を板にしたるを櫻戸とよめるに同し
萬葉
紅のすそひく道を中に置て　われやかよはん君やきまさん

同
ゆかぬ我〱とか夜門もさゝすして
あはれわきもこ待つゝあらん

同
おく山のまきの板戸をおしひらき
しゑや出こね後は何せん

同
おく山のまきの板戸をおとはやみ
妹かあたりの霜の上にねぬ

同
おく山のまきの板戸を戸どゝして
わかひらかんにいりきてなさね

後撰
山里のまきの板戸もさゝさりき
たのめし人を待し宵より
そせいほうし

風雅
今こんといひしはかりに長月の有明の月をまち出つる哉

顯注長月の夜の長きに有明の月の出るまて人を待とよめり密勘云今こんといひし人を月ころまつ程に秋もくれ月さへ有明に成ぬるとそよみ侍けんこよひはかりは猶心つくしならすや或人の云是は人丸に長月の有明の月の有つゝも君しきまさはわかこひめやもとよめる心を用たり今こむとは今日のくれたらははやこんといふ心也さはかりたのめ置て其人の見え來らぬを我はいつはりともしらす長き夜を今や〱と待ほとに有明の月出るほとに夜は更たれともたのめし人は待も出すたのめぬつきの出來ぬといひてこぬ人の空ことを顯はせる也有明の月は十五日より後をもいへとかやうに待心をそへよめるは二十日より後の月也此歌をひと夜のことにはあらす秋のはしめ比より長月比まてかけて待ける心也といふ說あれとたゝ今よひとたのめたるひとよのことにして感情あくまて有へし今案此說けにもいはれて覺ゆ久待戀の類は下の卷にあり仲文歌に

有明の月のひかりを待ほとに
わかよのいたく更にけるかな

これに准らへて知るへし今の歌をとりてある歌順德院御百首の中に

今こむといはぬはかりそ時鳥
有明の月のむらさめの空

長明か歌に

今來んと妻や契りし長月の

有明の月にをしか鳴なり
これらはひとよの事也此歌道濟十體には餘情也
六帖
今こんといひしはかりにかけられて
人のつらさの數はしりにき
よみ人しらす
月夜よし夜よしと人に告やらはこてふに似たりまた
すしもあらす
顯注月夜よしとは萬葉にも月夜よし門にいてたち
なとよめり月のあかくてよきなり夜よしは雨風も
なくしつかによきなりこてふに似たりとは來とい
ふに似たりといふ也こよひこそよき夜なれと告に
やらは人を來といふに似たりわれもまた待すしも
なしと打まかせしのひたる心をよめるなるへし萬
葉云
我宿の梅咲たりと告やらは
こてふに似たりちりぬともよし
密勘云一同今案月もよく夜もよけれはかゝる夜を
いたつらに過さすきませと告やらは人の心をはか
り見るにさためてこんといふへきに似たり我もま
た此良夜にはまたぬにしもあらねはいさ告やらん

といへるにや侍らん萬葉の歌も告やらはこむとい
ふへきに似たりひとめ見せて後はちりぬともよし
いさ告やらんにこそ但拾遺に
こてふにも似たる物かな花すゝき
戀しき人にみすへかりけり
これは薄の風になひくかまねくたもとゝ見ゆるを
こよといふにも似たる物かな心なき草たにかくは
まねく物をとわかこふる人に見せてさこそわか思
ふらめとおしはからせはやとの心也これ今の歌を
とりてよめりとみゆれは顯昭の人を來といふに似
たりと釋せられたる心也されとそれにては今の歌
の心もほのかなる上に萬葉の歌更に心得かたけれ
は來といふにことこんとの兩義を存して今はこ
んに付へき歟是より三首は古歌の姿也
君こすはねやへもいらしこむらさき我もとゆひに霜
はおくとも
顯注こむらさきは色の紫也をとこのもとゆひにてよる也今案延喜式大
もとゆひはむらさきの糸にてよる也今案延喜式大
神宮御裝束注文に髻結紫絲八條長五尺といへり萬葉
にはうまひとのひたひかみゆへるそめゆふともよ

めりもとゆひは和名集云髻(音佸和名毛度由比)これは髮をやかてもとゆひといへりもとをゆふ物なれはやはり髮をもゆふ糸をもおなし名によふ也

萬 居あかして君をはまたんぬは玉の
わかくろかみに霜はふるとも

同 待かねて內へはいらし白妙の
わか衣手に霜はおきぬとも

君まつと庭にしをれは打なひき
我黑髮に霜そおきける

みやきの丶もとあらのこはき露をおもみ風を待こと
君をこそまて

顯注にもとあらのこはきは萩のふるえを春やきて今年の若はへのおひかはるより花はさくもとあらとは古枝より花のさくをは本萩とてこは〳〵しきなりそれを本あらのはきといふそれか中にもおほきなるちいさきあれは其ちいさきをもとあらのこはきとはよめり本あらの櫻といふ事あり櫻は他の木よりもとあらしといひならひたり寄勘一同今案みつねか秋萩のふるえに咲る花みれはといふ歌の注にも榛を萩にまかへられ侍しかこ丶にもその心にておほきなるちいさきあれはそのちいさきをもとあらのこはきとよめりとかゝれたれはおほきなるは眞榛とも榛原とも萬葉にいへる物なりといふ心也まことに萩は木のことくになりてふるえにはなさくもあれと遂に草也山ふきのとしを經てさけと草なるかことし榛は上にもいへることくはりの木なり萩にあらすよりて萬葉第七寄木歌に

白菅の眞野の榛原心にも
思はぬ君か衣にそする

とよめりもとあらといふはふるえにかきらす此集にも秋萩の下葉色つく今よりやなと讀て花の盛にさくひより下葉は散てもとのすけはもとあらのはきとはよめるなるへし好忠家集に

宮城の丶やけふの萩もふた葉より
本はらにさかん花をしそ思ふ

此曾丹か歌今案の證也もとあらの櫻も同し集に

我宿の本荒の櫻さかねとも
心をかけて見れはたのもし

風を待こと丶は枝もたは丶に露のおけるをうれへてかせ待ぬへくみゆるを歌のならひなれはおして風をまつとはいへりこれは後の陸奥歌の木の下露

は雨にまされりとあるを思へる歟

萬葉　みさごゐるすにをる舟の夕鹽を
　　　待らんよりは我こそまさめ

同　みくに山梢にすまふむさゝびの
　　　鳥を待こと我まちやせん

あな戀し今もみてしか山賤の垣ほに咲るやまと撫子
あなこひしとは切に戀しき也古語拾遺云古語事之甚切皆稱阿那とこなつはうるはしき花にて人の愛する事親の子をはいつくにゝたる故になてしこといへはやかて人のむすめになしてよめる山かつのかきほとはいやしきものゝよきむすめをもてるをこふるにや狹衣にすこしゆゑつきたる山かつのかきほのなてしこにはおのつからめとまらぬにしもあらぬほとに云々是を思ふへし六帖「こひしともいふ人なしに山かつのかきほの花をなとかをりけん同「山かつの垣ほにのみやこひわひんわか身も人も露の命を後撰「あなこひしゆきてやみまし津の國に今も有てふ浦の初島

津の國のなには思はす山しろのとはにあひ見むことをのみこそ
これは津國の難波に山城の鳥羽を對してともに秀句によめる歌也なには思はすとは何事も思はすといふ心なりとはは萬葉に不止とかけりとことはにて常にといふ心なり常にたゝ君にあひみん事をのみこそおもへその外の何事をも思はすとなり萬葉に「かにかくに物は思はすひたひとのうつすみなはのたゝ一筋に此歌の心に同し落句ののみこそといへる心を付へし顯注になには思はすを名には思はすまことにあらむと思ふといふなりと釋せられたるはかなはすこと歌とも難波を名にはとも何はとも便にしたかひてつゝけたり津のくにのなにはたかはぬ津のくにのなにはたゝまくなとよめるは名とつゝく我君なにはの浦に我はなにはの何とたに見す津のくにのなにはのことかなとつゝけたるは何とそへたり

つらゆき
敷島のやまとにはあらぬから衣ころもへすして逢よしもかな
磯城島は和州に有欽明天皇磯城島金刺宮にて世を治させ給へりめてたき所なれは大和の枕言とし又たゝ敷島とのみいひても大和の事とす此大和は和

州なるを惣名のやまとにもいへり上の句はころも
へすしてといはむための序にてあひて後はともへ
す又あはゝやとねかふ心をよめる

ふかやふ

戀しとはたかなつけゝむことならんしぬとそたゝに
いふへかりける

六帖には二三の句たかなつけゝることの葉とあり
戀しとは心遠く誰名付たる詞そしぬとすくに云へ
かりけるをと久しくあはぬ思ひの切なるをふるま
ひよめる也

よみ人しらす

みよしのゝ大河野邊のふちなみのなみに思はゝわか
こひめやも

上句は序也大河野へは大河邊なりなみにおもはゝ
とは人をなみ〳〵に思はゝ也古歌の姿なり萬葉「み
よしのゝ大河水のゆほひかにあらぬ物ゆゑ波の立
らん同わたらひの大河のへの若くぬきわれひさな
らは妹こひんかも同「今しくはみめやと思ひしみよ
しのゝ大河よとをけふみつるかも同「わかゆつる松
浦の河の川浪のなみに思はゝわれこひめやも同「山
しろの泉のこすけおしなみに妹か心をわれはおも
はす

かくこひん物とは我も思ひにき心のうらそまさしか
りけり

六帖にはわすれなんものとはかねておもひにきと
あり心のうらは心のうちのうらなひ也文選嵆康與
山巨源絶交書云私意自試不レ能レ堪ニ其所ニ不レ樂自
卜（ウラナツテ）已審源氏物語薄雲にさかしき人の心のうちによ
にも物とはせなとするにも云々

天の原ふみとゝろかしなる神も思ふ中をはさくる物
かは

あまのはらふみとゝろかしおひたゝしうなりひら
めく神の落かゝりては物として破そこなはぬ事な
けれとそれも相思ふ中をは遠さくるものかは神た
にさけねはたれ有てかさくへきとよめる萬葉に
「天雲をほろにふみあらし鳴神もけふにまさりて
かしこけめやも「かみつけのさのゝ舟橋取はなし
親はさくれとわかさくるかへ
梓弓ひきのゝつゝら末つゐに我思ふ人にことのしけ
ゝむ

あつさゆみはひきのといはんとておけりひきのは河内に日置とかきて俗にへきといふ所ありこれ成へしするゑつゐには行末はたしてなり末はつゝらにつゝきて弓にも緣ある詞なり顯注につゝらは別々におひたれとするゑはひとつにゆきあひたれはそれかやうにつゐにおもふ人とひとつになりて云かはす事もしけからんとねかふこゝろきこえたりとあるは叶はず密勘云たとへは思ふ中のいかなることか出こんとあやしみおもひしにするゑつゐにわか思ふ人に口舌出來て人のそしりしけくえあはすなりぬるとなけきたる心なり云々今いはく末つゐにことのしけゝむとはやう〳〵人のとかくいひそむれは後には人ことやしけからんとかねて思ひおくなり 萬「玉の緒をくゝりよせつゝ末つゐにゆきはわかれて同し緒にあらん 同「高圓の野へはふ葛のすゑつゐにちよにわすれん我大君も 同「ことしけき里にすますはけさなきし雁にたくひていなまし物を 同「ことしけしはしはたてれよひのまにおけらん露は出てはらはん

此歌は或人あめの帝近江の采女に給けるとなん申す

此歌六帖には弓の歌にならの帝とて載たり此天のみかとをいつれの帝を申と云に付て一つには天智天皇を申す御諱天命開別尊（アメミコトヒラカスワケ）御諡天智天皇なれは事よれり大津宮にましましけるに後の滅歌にとこの山なるとよませ給へるも共に近江の采女に賜へれは其由あり ふたつには聖武天皇を申すともいへりならのみかとゝいふに異議あれと一說によらは聖武天皇を申奉る成を今の歌六帖にならのみかとの御歌とせり又六帖にあめのみかと「道にあひてゑみせしからにふる雪のけなはけぬかにこふてふわきもこ「けさの朝け雁かね寒く鳴しなへ野への淺茅そ色付にける 此二首萬葉には聖武天皇の御歌なれはさてはあめのみかとは聖武の御事也清輔朝臣の袋草子此義によられたり是に付て愚案をめくらすにあまのみかとゝはすへていつれのみかとをも申へし必そのみかとゝ限りて申へきにあらしと存す其故は上に引兩首萬葉に天皇御製歌とて載たりこれはときのみかと聖武にてましますす故にかけり天皇をは和訓にはすへらみことゝこそよめと六帖にはこれをあめのみかゝとよみて聖武の御名と思へり聖武より以前のみかとをも天皇とか

き孝謙天皇をも時にあたりては天皇とかきたれは定まれる御名にあらす委彼集を考て知へししかれは六帖のみならす此集の比にも彼集を見そんして聖武をあめのみかとゝ申すと心得しより彼集になき今の歌も聖武の御歌といひ傳へたるをかくは注したる歟次にとこの山なるとある歌は萬葉第十一に作者未詳歌也當集に誤て入たる歟されとも滅歌なれは憾ならす三つには萬葉第廿に「かしこみやあめのみかとをかけつれはねのみしなかゆあさよひにして此歌は天平勝寶八年十一月二十三日大伴宿禰池主家にして大原今城か傳へよまれる歌にて作者未詳としるさる此あめのみかとといつれとも知かたし歌のやう哀傷ときこゆ今年五月に聖武天皇かくれさせ給へは歎き奉りてよめる歌なとにやされとそれならは當時の事にて作者も誰としらるべきにや其上此歌の上に藤原氷上夫人の歌あり「あさよひにねのみしなけはやきたちの心もあれは思ひかねつゝ　此夫人は天武天皇白鳳十一年にうせられたりけれはそれよりさき帝をこひ奉りて讀給へる歟これにつゝき似たる歌なれは天武天皇の宮女の讀るにやしかれは此あめのみかとはいつれの御事と定かたけれは所詮惣名にして別名にはあらさるへし

夏引の手ひきの糸をくり返しことしけくとも絶むとおもふな

此歌は返しによみて奉りけるとなん

顯注に糸は春こかひして夏ひけは夏引の糸と云手して引は手引の糸と云也手やみもせす糸をくるやうに人言はあり共我をたへす思へと也顯昭も此返しにては右の歌のことのしけゝむをいひさはく人ことゝ心得られたり夏引の手引の糸とは麻の事也顯注は誤なり萬葉に夏麻引とよめり又催馬樂に夏引の白糸なくはかりありさ衣におりてしきせんま汝女離しめはなれよかたくなに物いふをみなかれましあさきぬもわかめのことくたもとよくきよ　肩よく小首こくひやすしにぬひきせめかも是夏引の糸は麻をいふ證也又糸をくるやうに人ことはありともといふにはあらす人ことはよししけくとも夏引の麻をくり返すことく我にたへんとおほしめすなとつゝくる心なり

里人のことは夏野のしけくともかれ行君にあはさらめやは

萬葉に里人とよめるはおほくの人の心也かれ行とは夏野といふよりよそへていへり人言の夏の丶草のことくしけきによりてかれ行君なれはその夏のことくなる人言に時ありてやむへければうつりかはりて又あはすあらめやあふ時あらむとなり古歌のすかたなり人ことは夏の丶草のしけくとも妹と我としたつさはりなは

藤原敏行朝臣のなりひらの朝臣の家也ける女をあひしりてふみつかはせりけることはに今まうてくあめのふりけるをなんみわつらひ侍といへりけるをき丶てかの女にかはりてよめりける　在原業平朝臣

今まうてくは今まうてこんといはむかことし六帖に「つのくにのまちかね山のよふこ鳥なけと今くといふ人もなし

六帖

かす／＼に思ひおもはすとひかたみ身をしる雨はふりそまされる

顯注かす／＼にはこと／＼なといふ心也毎事にといふ也數はことを盡す儀なりされはおもふらん心さしのほとをつくしてとふへきにあらすたゝ雨のふらんにぬれ／＼きたらんはたくひなき心さしとしりぬる丶とてこすはさしも思はさりけりとしらんとよめるなり我身の程をしらせむすれは身を知雨とはいふ也これをもとにて今の世の人身をしる雨とはよみ侍るとそみゆるを涙をいふそなと申人もあれともいか丶侍るへからん今案に涙そとのみ申人は一定僻事なるふるくよめるみな雨のふるに付て詠る也かす／＼にとよめる歌萬葉に「かすかすに思はぬ人は有といへとしはしも我は忘られぬかも　後拾遺になき人の百和歌大齋院一法のためつみける花を數々に今は此世のかたみとそ思ふ密勘云かす／＼身をしる雨ひとへに同此説涙といふ事勿論六帖「天原なるかみいかに思ふらんけふは身をしる雨とこそふれいせ集「かたみにも身をしる雨のふりし哉我もせきあへす君もこしかは

ある女のなりひらの朝臣をところさためすありきすと思ひてよみてつかはしける　よみ人しらす

遊仙窟云十娘何處漫行去來信明集に「はし鷹のす丶ろありきにあらは社かりにも人に思ひなされめ

おほぬさのひくてあまたに成ぬれは思へとえこそ頼さりけり

六帖にも奥義抄にもなりぬれはをとまらねはと有顯注もまたおなし密勘同心にや異儀なし顯注大ぬさははらへする陰陽師のもちたるくしにさしたるゑてなりはらへはてぬれは是をおの〳〵引寄つゝなつる物なれは人のもとことによれともとゝまらて過れはひくてあまたにとまらねはとよめるなり今案此歌よめるは滋春か母にて右大臣良相女染殿内侍歟其故は大和物かたりにいはくそめとのゝ内侍といふいますかりけり云々おなし内侍に在中將すみける時云々かくてすますなりて後中將のもとよりきぬをなんしにおこせたりけるそれにあらはひなとする人なくていとわひしくなんあるなほかならすしてたまへとなん有ければ内侍御心もてあることにこそはあなれ「大ぬさに成ぬる人の悲しきはよるせともなくしかそなかるゝ　となんいひやりける中將「なかるとも何とか見えむ手にとりて引けむ人とぬさとしるらん　これ今の歌の贈答の後絶てまたきぬの事いひやれは内侍今の贈答をふみて大ぬさになりぬる人とよめるにやとわさにまめやかならておほよそなる人をおほのさといふは大ぬさをいひあやまれる成るへし六帖に「水無月のなこしの山のよふこ鳥おほぬさにのみ聲の聞ゆるこれもたれとなくおほとかによふをおほぬさにのみといへり

なりひらの朝臣

大ぬさと名にこそたてれなかれてもつゐによるせは有てふ物を

顯注かくとゝまる所なきやうなれとも川になかれつる時はなかれとまる所なくやはあるとよめる也あまたの所へかよへとつゐには君かもとにこそとまらめといふ心なり今案瀬といふ詞のはしめは舊事本紀云伊弉諾尊勅二桃子一曰汝如助レ吾於葦原中國所有顯見蒼生之落二苦瀬一而患惱之時可助告而賜レ名號曰二意富迦牟都美命一矣　これは黄泉にて泉津日狭女におはれて黄泉平坂に至り給ふ時桃樹に立隱れて其桃子三箇を取て待て撃て追返し給ふときの神語なり古事記の説おなし此苦瀬といふよりあふ瀬うきせこゝをせにせんなといふことは〻出た

るなり萬「川上にあらふわかなのなかれきて妹かあたりのせにこそよらめ貫之集「大ぬさの川の瀬ことになかれきて千年の夏はなつはらへせむ六帖「わたつみのおきのしほせになかれても人のよるせはあふてふ物を同「よるかたも有といふなりありそ海の立しら浪もおなし所に

題しらす　　　　　　よみ人しらす

すまのあまのしほやく煙風をいたみ思はぬかたにたな引にけり

六帖にはいせのあまのといへり伊勢物かたりには業平の歌にせり人の心のことさまになるをたとへてよめり萬「なはの浦に鹽やく烟夕されはゆき過かねて山にたなひく同「志賀のあまの塩やくけふり風をいたみ立はのほらて山にたな引みつれ集「もしほやくあまのたく火の煙こそ思はぬかたに立のほるらし

玉かつらはふ木あまたになりぬれはたえぬ心のうれしけもなし

此歌伊勢物かたりには女の歌なり六帖にはこと人を思ふといふ題に入てなりぬれはを有とはいへはとあり顯注に第四句たへぬことの葉とあるを密勘所存同と有て沙汰なし葛のはひかゝる木おほきかごとく物いふ人のおほかれはたえぬはかりの心はうれしからすとよめり葛はまた絶ぬことにいへはたえぬ心のとはそへたるなり次下巻にも玉かつら今はたゆとやとよめり萬「谷せばみ峯にはへたる玉葛たえぬの心わかおもはなくに

誰里に夜かれをしてか郭公たゝこゝにしもねたるこゑかな

菅萬には夏の歌也夜かれを夜避とかゝせ給へりよかれとはこぬ夜あるをいふ六帖には第四句たゝこゝにのみと有まかふ方ある男のあり／＼て音つるゝを時鳥のまたれ／＼てたま／＼鳴こゑによそへていつくの誰里にひと夜よかれしてさりけなくたゝこゝもとにねたらんやうのこゑはするそと恨むるなり六帖「たゝこゝに君きまさぬか墨染のたそかれ時にその姿みん

いて人はことのみそよき月草のうつし心は色ことにして

猿丸集には發句みな人は落句あひもおもはすとあ

り顯注いて人とはいてや人はといふなりことのみそよきとは詞のみそよきといふ也世の人の詞にことよしといふは詞のみよしといふなり月草はうつし心といはむとておけりうつし心は現心なり露草の花をは紙にそめて又それを移してものをそむれはうつし花といふなりされは人にうつる心を露草にそへて人にうつる心はことはに丶すとよめるなり今案ことよきは源氏蓬生につねにもとふらひ聞えねとちかきたのみ侍りつるほとこそあれはとあはれにうしろめたなくなんなとことよかるを更にうけひきたまはねは云々又ゐなかなとはむつかしき物とおほしやるらめとひたふるに人わろけにはよもてなしきこえしなといとことよくいへは云々つき草は和名第十四染色具云楊氏漢語抄云鴨頭草都岐久佐辨色立成云押赤草うつし心はうつる心也現心をうつし心といふは同し詞にて心はことなりそれは日本紀に顯見をうつしきとよめるにおなしくうつ丶の心にてたしかなるをいふ顯注はまかはれたり萬十一「ますらをのうつし心も我はなしよるひるいまは戀しゐたれは同十二「うつせみのうつし心も我はなし妹を相見て年の經ぬれは　此二首は現心なりすなはち初のうたに現心とかけり今の義にあらす萬十「こちたくはかにかくせんを紅の寫し心やいもにあはさらん同十二「内日刺色にはあれとつき草の移情（ウツシゴヽロ）は我おもはなくに同「も丶にちに人はいふとも月草の移情はわれもためやも

右三首今のうつし心と同しわきまふへし　江次第五於興宗寺被行法華會用途料永宣旨中云鴨頭草移二帖上野云々　これ顯昭の紙に染て又それを移してといはれしうつしなり此歌古歌の姿なり

いつはりのなき世なりせはいかはかり人のことのはうれしからまし

六帖　世の中に絶ていつはりなかりせは
　　たのみぬへくもみゆる玉つさ

いつはりと思ふ物から今更にたかまことをかわれはたのまん

いつはりにこりなからも猶君かことの葉をこそたのまめ外心もたねは誰まことをかいまさらにたのむへきとなり女の歌とおほしくてえんにやさしくたのもしき歌也右の歌ぬしおしかへして又あるに

や　　素性法師

秋風に山のこのはのうつろへは人のこゝろもいかゝとそおもふ

秋かせのふきたちてあを〳〵と見えし山の木の葉の色かはりたるを見て物みなかくこそあれは今はたのもしくみゆる人のこゝろもうつろひやせんとおほつかなくなる也

寛平御時きさいの宮の歌合のうた　　とものり

蟬のこゑきけはかなしな夏衣うすくや人のならんとおもへは

菅萬には夏の歌也六帖には落句ならんとすらむと有　五月蟬聲送麥秋とも詩につくりたれとまさしくは六月節のころよりなけは夏衣のうすさもおほえて秋風さむくなる事もほとなけれは蟬のこゑにおとろきて時節の變改する事を思ふに付て人の心もかはりてうすくやならんとおもふ故に悲しき也蟬の羽衣ともよめは夏衣とはそのよせ有歟右の素性歌よりも上にあるへきを次の歌空蟬のことはにつゝけんとてこゝにはおける成へし

題しらす　　よみ人しらす

空蟬のよの人ことのしけゝれはわすれぬ物のかれぬへらなり

或抄にはかなき人ことゝいふ心に空蟬とはおけるよしをいへれとうつせみはたゝ世の枕言なる世の人の物いひさかにくけれは忘すなからかれぬへしとよめりわすれぬ物といへるのもしおもしろし伊勢物語にも「君こむといひしまことに過ぬれはたのまぬ物の戀つゝそぬる

あかてこそ思はん中ははなれなめそをたに後の忘かたみに

顯注には腰句わかれなめと有そなたにはそれをたにといふ也忘れかたみとは顯注にわすれかたしといふ詞をやかて人の形見といひつゝけてそへたる也とあれといかゝと見ゆ又或抄にわすれて後のかたみなりといへるもかなへりとも聞えす形見をみて心をなくさめて憂を忘なれはわすれかたみとはいふ也すなはち新今古に今の歌をとりてよめるうたに「散花の忘れかたみのみねのくもそをたに殘せ春の山風　これにて心得へし

忘れなんと思ふ心のつくからにありしよりけに先そかなしき

異本に先そ悲しきを待そかなしきと有伊勢物語にはわするらんと思ふ心のうたかひにとてまつそを待そになせり但彼は新古今にとられたれは別の歌歟ありしよりけには萬葉に勝の字をけとよめりありしよりまさりてなり人のつらきに今はたゝ忘れなんと思ふ心のつけはつらきなからもいひかはしつる時よりまさりて悲しきと也玉葉集戀に謙德のもとに遣しけるよみ人しらす「わかれなん今はと思ふ時にこそ有しに增る物おもひはすれ是は今の歌を取てよめる成へし後撰に「わすれなんとおもふ心のつくからにことの葉さへやいへはゆゝしき

わすれなん我を恨な時鳥人の秋にはあはんともせす

兼輔家集にはをんなとて此歌ありて返しあり「わすれなは誰かは人を恨へきうきにおくれて知は我かは　古歌の女の心にかなひたれはおくりけるにやさらすは兼輔朝臣によみておくりけるなとこと書あるへし發句はいひきれりとも見え亦忘れなんするを恨みなといへりともきこゆさしも人のめつるなる時鳥も人の心の秋にはあはむともせすしてまつこそ山へ歸るなれはいはんや初より時鳥のことくもめてられぬ身なれはさてあらは今やかて人にあかれてなこりもなかるへけれはしゐて今忘れなん我をうらむるなといふ也ほとゝきすは秋なかぬ鳥なる故にかくはよめり萬「時鳥聲きくをのゝ秋風に萩さきぬれやこゑのともしき同「郭公なきて過にしをかひから秋風吹ぬよしもあらなくに後撰「秋近み夏はて行は時鳥鳴こゑかたきこゝちこそすれ六帖「人よりも我こそさきに忘れなめつれなきをしも何か頼まん

たえす行あすかの川のよとみなは心あるとや人のおもはむ

此歌ある人のいはくなかとみのあつま人か歌なり

此歌は萬葉第七に有腰句以下よとめらはゆゑしもあること人のみらくにと有作者なし心有とは故しも有ことゝいふに同したえすかよふ中にさはる事有て夜かれせは何とそおもふ故有てこぬにやと人のうたかひおもはむとよめるなり萬「ことゝへは中はよとまし水無瀨川絶てふことを有こすな夢同「人

ことを忘けみこちたみあはさりき心あることとおもふなわかせ同「夏葛のたえぬ使のかよはねはことしもありと思ひつるかも

淀川のよとむと人は見るらめとなかれて深き心有ものを

是は右の歌の餘義をつくすやうなれはかくつらねたり川の中に水の行とも見えすしてたゝへたる所をよとゝいへはわかかよふ事のとゝこほるをゆゑしもあらんやうに人は見るらめともさにはあらす行末とをくなからへてあはむと思ふふかき心ある故にひとめ人ことを忘のひて時をまつそとなりよとむ所はふかけれはふかきはよとの縁なり忠見か「何方に啼て行らん時鳥よとのわたりのまた夜ふかきに　とよめるにおなし

素性法師

そこひなき淵やはさわく山川の淺き瀬にこそあたなみはたて

六帖にはあたなみをうはなみとありそこひなきはきはまりなき也萬葉に「あめつちのそこひのうちにわかことく君にこふらん人はさねあらし　これは天地のきはみのうちにわかきみをこふることとく戀する人はまことにあらしとよめる也また天雲のそくへのきはみなとよめるそくへも五音通すれは同しかるへし源氏玉かつらにものゝ色はかきり有人のかたちはおくれたるも亦そこひある物をとて云々胡蝶にかきりなふそこひしらぬ心さしなれと人のとかむへきさまにはよもあらしそこひなきに河の底をそへたりかやうにそへたる歌おほし後撰かきりなき名にあふふちの花なれはそこひもしらぬ色の深さも同「玉もかるあまにはあらねとわたつみのそこひもしらすいるこゝろ哉六帖「さほさせとそこひもしらぬわたつうみのふかき心を君にみるかな　淵やはさわくとは文選賈誼鵩鳥賦云澹乎若二深淵之靜一　まことに至りて深きふちはさわくことなきかことく人をふかく思ふ心は思ふとてことこと敷おもふよしをも見えす又とかく人のいひさわくにもうつる心もなし思ふ心のあさき人こそ山川の淺き瀬にあた浪のたちさわくことく色めきてこと〳〵しくはみすれと也　近來印本新撰和歌集讀人不知「あさき瀬に波は立らんよしの川深き心を

君はしらすや

よみ人しらす

くれなゐの初花そめの色ふかくおもひしこゝろわれわすれめや

六帖には腰句色衣落句我は忘れすとあり紅のはつの花にてそむる初花そめ也何の色も初のは色こき也我わすれめやわするゝはかはるなれは今ならはわれかはらぬやとよみて紅の縁とすへきを古歌なれは本意をすなほにいへる也

かはらの左大臣

源融貞觀十四年八月二十五日左大臣

みちのくの忍ふもちすり誰故にみたれんと思ふ我ならなくに

伊勢物語にはみたれんとおもふをみたれそめにしとあり顯注陸奥國の信夫郡にもちすりとてかみをみたしたるやうにすりたるをしのふもちすりといふわか心は誰故にみたれんそ君にこそみたれそめたれとそへたるなりもちすりとて忍ふのみたれとも伊勢物かたりによめり今案前後の歌のつゝきによりて見るに顯注の心にあらすみたるとは心の一筋ならぬをいへり一たひ契おきし心をたとひいかなるたれなりともその人ゆゑにしのふすりのことくとかくみたれんとおもふ我にはあらすとなり萬葉第十四東歌云「伊豆の海に立しら浪の有つゝもつきなんものをみたれしめゝや　此落句しとそと通すれはみたれそめゝやなりこれ今の心におなし伊勢物かたりにあるは誰故に亂そめし我にあらす君故にこそ亂そめたれといふ心なれはそれはおもひのさま〳〵に亂るゝにて今と心ことなり

よみ人しらす

おもふよりいかにせよとか秋風になひくあさちの色ことになる

顯注おもふに過ていかにせよと思ふにかあるらんあさちの秋風になひくやうにしたかへる人の色のかはりてもとのけしきにもにぬはとよめるなり

ちゝの色にうつろふらめとしらなくに心し秋のもみちならねは

菅萬にあれは歌合のうたにや人の心はちゝの色にこそうつろふらめとわか心はうつろはんやうをしらぬとなり秋にあく心をそへたり或抄には人の心

の秋の紅葉のことく上にみえねはいろ〳〵うつろふへけれとしられすといふ人をいふはわかうつろふこゝろなきをいはんため也

小野小町

あまの住さとのしるへにあらなくにうらみんとのみ人のいふらん

恨みんを浦見んといふにそへてあまの住さとの道しるへするものにこそいてその浦みんとはいはめしるへにもあらぬ身をなとうらみんとは人のいふらんとなり（六帖）「わたつみにつらき心やふかゝらんあまてふあまのうらみぬはなき

しもつけのをむね

くもり日の影としなれる我なれはめにこそ見えね身をははなれす

顯注にはくもる日のと有て注云くもる日のかけとしなれる我なれはとは人にはいかにも影といふ物そへりくもる日にもあれとも人はこれをみす天眼はこれをみる也證文にいへることなりと有は影を人のかけと心得られたり今云これは曇りたる空の日の影はありとも見えぬやうにわか心は君か身をはなれす立そひたれと君かしらぬとよめる也影としなれるといふにおもひやせたる事をもかけたる成へし

つらゆき

色もなき心を人にそめしよりうつろはむとはおもほえなくに

此歌拾遺にまた載たり結句我思はなくにと有何にもあれ色成物はうつるを色なき心にて人をふかく思ひそめつれはうつろはんといふ心は思はぬと也下にいろなしと人や見るらんとむかしよりふかき心にそめしものを（後撰貫之）「色なくはうつるはかりも染てまし思ふ心をえやはみせける（六帖）「おほつかな何の色とはしらねともたゝふかくのみ思ひそめけん

よみ人しらす

めつらしき人をみむとやしかもせぬ我下紐のとけわたるらん

此めつらしき人といふこれ絶て久しくこぬ人なりしかもせぬはさもせぬなりとかめぬいへりわかとかぬひものをのつからとくるはひさしくこぬ人に

あひみんとての相にやとなり古歌の體也これより
下五首は立かへりこふる心の歌とも也
かけろふのそれかあらぬか春雨のふるひとなれは袖
そぬれける
六帖ならひに顯注にはふるひと見れはと有奥義抄
は今の本のことしかけろふはさま〲にいへと春
雨のふる日となれはとつゝけたるにて思ふに遊糸
なり管萬にはすなはち遊糸とかゝせ給へり野馬と
もいへり詩にも天外遊糸或有無とつくりて有とも
なしともたしかに見えぬものなれはそれかあらぬ
かといはむとておけり白氏文集に是耶非耶とある
をそれかあらぬかとよめり春雨はふる人といはん
ためにおきて袖そぬれけるともそへたりそれかあ
らぬかとおほめくはかりのむかしの人にあひみれ
はきしかたのことゝもおもひつらねて袖のぬるゝ
となり　萬「うつゝにも夢にも我は思はさりきふり
たる人にこゝろあはんとは　同「まゆねかき下いふ
かしみ思へるにいにしへ人をあひみつるかも
ほり江こくたなゝし小舟こきかへりおなし人にやこ
ひわたりなん

六帖には入江の題に下句おなし人のみおもほゆる
哉と入たりほりえは仁德天皇の御時ほらせたまへ
り日本紀に見えたりたなゝし小舟とはちいさき舟
にはふなたなのなき也萬葉には棚無小舟とかけり
ふなたなとはせかいとてふねの左右のそはにえん
のやうに板をうち付たる也それをふみてもあるく
也和名集に枻をふなたなとよめり日本紀にはこれ
を船のへとよめりへといふは艫舳のへにはあらて
萬に物のはたをへといふ常に此字をふなはたと讀
はたとへとおなし心なりたなゝしをふねのおなし
ほりえにこきかへることとくつらくてうらめしとお
もひしおなし人に又思ひかへしてや月日をこひわ
たりなんとなり　いせ一あしへこくたなゝし小舟いくそ
たび行歸るらん知人もなみ　　伊勢
わたつみとあれにしとこを今更にはらはゝ袖やあわ
とうきなん
家集には落句あわときえなんと有後撰集にみやつ
かへし侍りける女ほとひさしく有てものいはんと
いひ侍りけるにおそくまかりけれは　枇杷左大臣

よひのまにはやなくさめよいその上
　ふりにし床も打はらふへく
返しいせとて今の歌をのせたり伊勢集も同し海は
ある丶物なれはわたつみとはあれにし床とつ丶け
んため也同し人の後の長歌におきつ浪あれのみま
さる宮のうちはとつ丶けたる同し心也さてあれた
る床とは問たえて程へたるをいへりわたつみをう
けて袖や沫とうきなんといへるはなみたの上にあ
わのことくうかふとなり　萬「眞袖もて床うちはら
ひ君まつとをりしあひたに月かたふきぬ
　　　　　　　　　　　　　　　　つらゆき
いにしへになほたちかへる心かな戀しきことにもの
わすれせて
六帖には落句物わすれしてとありいにしへにとは
萬葉にいにしへ人とよみ此集にふる人と讀りもと
あへる人なりたとへは久しくゆかぬ道なとはわす
れはて丶行へくも覺えぬに戀しき事はかりにはさ
も物わすれもせていにしへ人になほ立かへり戀る
我心かなと人をそしるとて打返しほむる事あるそ
れていによめる也或抄に戀しき事を戀しき度こと
にと釋して戀そめしむかしに心のたちかへるよし
にいへるは似たる事なからかなふへからす部立の
心然らぬ上に六帖にも昔をこふといふ題にいれ家
集にも此歌の上に「石上ふるの丶道の草わけて清
水くみには又も歸らん　下には「年月は昔にもあ
らぬけふなれと戀しき事はかはらさりけり　此つ
丶きもまた此集の心也
人をしのひにあひしりてあひかたく有けれはその家
のわたりをまかりありきけるをりに鴈の啼を聞てよ
みてつかはしける
　　　　　　　　　　　　　　　　大伴くろぬし
思ひ出てこひしき時ははつかりのなきてわたると人
しるらめや
啼てわたるとは前わたりするをそへたり詞書にそ
の家のあたりをまかりありきける折にといへる心
也大和物語に監命婦かふるさとをかはとみつ丶も
わたるかなといふ歌の前のことはにもつ丶みに有
ける家を人にうりて後その家のまへをわたりけれ
はとかけるに同し
右のおほいまうちきみすますなりにけれはかのむか
しおこせたりける文ともとりあつめて返すとてよみ

ておくりける　　典侍藤原よるかの朝臣
たのめてしことのはいまは返してん我身ふるれはお
き所なし
言の葉はことかきにいへる文也ふるれは丶ふりぬ
れはなり我身ふりぬとて人に忘られたれは身を置
へき所なしと云事をおもては文の置所なきと云に
そへたり（後撰）「契けむことのは今は返してん年のわた
りによりぬる物を（同伊勢）「ふるゝ身は涙の中にみゆれは
やなからの橋にあやまたるらん（同）「やれはをしやら
ねは人に見えぬへしなく〳〵も猶かへすまされり
返し　　近院の右のおほいまうち君
拾芥抄云近院春日北烏丸東號松殿右大臣能有家此
右大臣は文徳天皇の御子孫源氏也
今はとてかへすことの葉ひろひおきておのか物から
形見とやみん
上にあかすしてわかるゝ袖の白玉はとよめる歌に
似たり日本紀第十一仁徳紀云諺曰有海人耶因己物以泣
題しらす　　よるかの朝臣
玉ほこの道は常にもまとはなん人をとふとも我かと
おもはん
六帖にはふみたかへの歌也或抄にもしか注したれ
とそれは使の道にまとふ也歌の表さは聞えかたし
六帖貫之歌に「月影に道まとひしてわか宿にひさ
しく見えぬ人もみえなん」此歌家集にもありこれ
になすへらて使にまとへといふにあらぬ事を知へ
しこれはかよふ方ある人のたま〳〵かりそめにき
て見えたる時君は道をまとひてこそ心ならす我宿
にはまつらめと猶今より常にかく道にまとへ人を
とふとてこそまとふとも我は我をさしてとひ來る
歟と思ひてなくさまんと也玉鉾は道の枕言なりこ
れに三つの義有へし玉は例の物をほむる詞これは
三義に通す神代紀に大穴持命廣矛をつきて國をめ
くりて治め給へるよしあれはそれによりてつゝく
る歟又ものゝふは劒をつきて行とありなすらふる
に矛をもつくへけれはいふ歟また萬葉に鉾椙とよ
めるは杉の直きか鉾をたてたるに似たれはいふ歟
道をは毛詩にも周道如砥其直如矢といひ文選鮑明
遠か詩には馳道直如髪とも作りたれは鉾を直き物
にして道の直きに喩へていふ歟

よみ人しらす

まてといはゝねてもゆかなんしひて行駒のあしをれまへのたな橋

顯注にはまてしはしと有注にまてしはしとはまてといはゝ也まてとはしはしまてと留る詞也ねてもゆかなんを六帖にはねてもゆけかしと有前のたなはしとは人の家の前に小川なとに渡したる小橋也萬葉旋頭歌に「天なるやひとつ棚橋いかて行らん若草の妻かりといふ足をうつして　たなはしを天川にわたす橋によそへてよめる歟板にて棚のやうに柱たてゝ渡したるをいふなるへしねてゆけと留むれときかて行人の駒をつまつかせてひさを折てふさせよと橋にあつらふる心也　唐周賀送僧還嶽詩曰辭僧下水棚これはちいさき橋をやかて水棚といへり（後撰）「しひて行駒のあしをる橋をたになと我宿に渡さゝりけむ（うつほ物かたり吹上）「ゆく人の駒もとゝめぬたなはしはをしみとりたるかひもなきかな　此二首は今の歌をとりてよめり

中納言源のゝほるの朝臣のあふみのすけに侍りける時よみてやれりける　閑院（源宗于朝臣女）

源昇河原左大臣男湛弟或勘物云延喜八年中納言九年民部卿十四年大納言

あふ坂のゆふつけとりにあらはこそ君かゆきゝをなく／＼もみめ

あふみのすけに讀てやれはかくはよめりなく／＼ゆきしをたにもえみぬといへは逢坂は木綿付鳥をいはむためはかりにてあふといふにはよせさるへし

題しらす　伊勢

故郷にあらぬ物からわかために人の心のあれてみゆらん

萬葉にあらふる妹ともよみまた放鳥あらひなゆきそとよめるもあるゝにおなしすさましきまて人の心のかはりゆくを故郷によせてよめり

寵

山かつのかきほにはへるあをつゝら人はくれともことつてもなし

六帖題あをつゝら下句たつねくれともあふよしもなしと有て作者なし和名集云防己　本艸云防己一名解離（和名阿乎加豆良）延喜式典藥寮式には防己をあをつゝ

らと點せり又防葵ともかけるを同しくよめり上句
は人はくれともといはんとての序也
　　　　　　　さかゐのひとさね 酒井人眞
大和物語に云土佐守にありけるさかゐのひとさね
といひける人やまひしてよはくなりてとはなりけ
る家に行とてよみける「行人はそのかみこんとい
ふ物を心ほそしやけふのわかれは
大空はこひしき人のかたみかはものおもふことにな
かめらるらん
六帖　大空にわれよふ人もきこえぬに
　　　　物思ふことになそといはるゝ
　　　　　　　　よみ人しらす
あふまてのかたみも我は何せむに見ても心のなくさ
まなくに
おやのまもりける人の娘にいとしのひにあひてもの
いひけるあひたにおやのよふといひけれはいそきか
へるとてもをなんぬきおきて入にけるその後ものを
かへすとてよめる　　　　　おきかせ
あふまてのかたみとてこそとゝめけめ涙にうかふも
くつなりけり

裳を藻に涙を浪にいひよせり後撰に志賀の唐崎に
てはらへしける人のしもつかへにみると云侍けり
大友黒主そこにまて來てかのみるにこゝろをつけ
ていひたはふれけりはらへはてゝくるまより黒ぬ
しにものかつけゝるそのものこしにかきつけて見
るに送り侍ける「何せむにへたのみるめを思ひけ
んおきつ玉もをかつくみにして　源氏物かたり明
石に御つかひになへてならぬ玉もなとかつけたり
とかけるも所にあひたれは藻によせたり又後撰に
「立さわく浪まを分てかつきてしおきのもくつを
いつか忘れん是はあるわらはは女の五節見に南殿に
さふらひてくつをうしなひたるに輔臣朝臣藏人に
てくつをかしたるをかへすとてよめる歌也
題しらす　　　　　　　　よみ人しらす
かたみこそ今はあたなれこれなくはわするゝ時もあ
らまし物を
伊勢ものかたりにむかし女のあたなるをとこのか
たみとておきたる物ともを見てとあり顯注にあた
とはかたき也此かたみたになくはわするへきをわ
すれぬねたさにうれしかりつる形見を今はあたと

おもふ也今はあたなれとはかなきよしによみなす人もあれと歌の心にかなはねはよしなし密勘云あたなれは敵也あたは謬説也但はかなきよしにあたなれとなかむる人おほかり女房なとのいはむをあたといふておしへむもすこしは聞にくゝや侍るへきちかく内裏に歌合に講師此詞を仇とよみあけしひか事とはきゝ侍らさりしをたれとなくうちわらはるゝこゝろ〴〵のし侍しかはまことに聞にくきにつきてもあらぬへかりけりと侍也今案此詞を仇と讀あけしとは則彼卿の歌に「形みこそあたの大野の萩の露うつろふ色はいふかひもなし此時の事也伊勢集に「わか爲に何のあたとは春風のをしむとしれる花にしもふくかうよみなされては仇もかならすおそろしき詞にあらす今の歌も女のうたなれは作者は仇とそ讀侍りけん源氏物語にはあたもたなひきをにくきすかたといひつれは聞にくかる事はよましを堅木に「あふ事のかたきをけふに限らすは今いく世をかなけきつゝけむ　御ほたしにもこそ聞え給へはさすかに打歎き給ひて「なかき世の恨を人にのこしてもかつは心をあたとしらなんかくもよみたるを後鳥羽院の御宇の比よりの作者はあまりにけたかくやさばまんとて事えりの過たる也但定家卿のかたみこそあたの大野とよみ給へるは作者もとよりはかなきよしにつゝけられたる歟ひか事とは聞え侍らさりしをといへる中にその心あるか上に彼野の名に他のことく所のもの今も申侍り和名集にも大和のくに宇智郡阿陀（陀音可濁讀）自注かくのことくなれははかなきよしによみあけぬはおのつからかなはすや貫之集に「我爲にあたにさりける年月をおもひもなくて行かへりつゝ「かくとたにかゝみもみゆる物ならはわするゝほともあらましものを

戀歌五

五條のきさいの宮のにしのたいに住ける人にほいにはあらてものいひわたりけるをむ月のとをかあまりになんほかへかくれにけりあり所はきゝけれとえ物もいはてまたの年の春梅の花さかりに月のおもしろかりける夜こそをこひてかのにしのたいにいきて月のかたふくまてあはらなるいたしきにふせりてよめる

在原業平朝臣

西の對に住ける人は二條后なり伊勢物語に委し梅の花さかりはなへて世の梅なから又の年の春といへるは西の對にても見けるをこゝのにもよほされてかしこのをも思ひ出る也伊勢物語に立て見ゐてみ見けれとこそに似るへくもあらすといへるを思ふへし

月やあらぬ春やむかしのはるならぬ我身ひとつはもとの身にして

風躰抄に月やあらぬといひ春やむかしのなとつゝける程のかきりなくめてたき也といへり月やはこそのよりもとの身にしてと也まて後に改られたりおほろ月夜梅の花さかりをはしめてこそにかはる事なきに月も春もこその物ともおほえねはたゝ月やこその月にあらぬ春やこそのはるにあらぬこそ人にあひたてまつりし時のみこひしくわすられぬ我身ひとつはもとの身にしてと下句より上句へかへりてきはめてとかめておくへしある抄に下句を注して我身一つも又もとの身なるに何事そさもおほえぬはとなりと云るはいまたひとつはといへるは心をえぬ也月やこその月にあらぬと見るにおほろ月夜の面白さもこそにかはらす春やこその春にあらぬとみるに梅の花さかりをはしめて又こそにかはる事なしたゝわか身ひとつはうかりしもとの身にしてと也伊勢物語にあり所はきけと人のゆきかよふへき所にもあらさりけれはなほうしとおもひつゝなんありけるといへる時をさして其時のまゝの身といへりとそあひみし時にくらへてもとの身といへるには非す寶には其時のこゝろになりてよく／＼味ふへし新勅撰に俊成卿

梅か香も身にしむ此は昔にて
　人こそあらぬ春のよの月
我身ひとつはもとの身にしてと歎く詮は人のこゝにおはしまさぬ故なれは心を得て人こそあらねと讀給へり

題しらす
　藤原なかひらの朝臣
花薄我こそ下に思ひしか穂に出て人に結はれにけり
伊勢集には二三句我こそふかくたのみしかとありてこと書に云此をとこのあになるをとこありける今はあの人はよにもとはしなにかたのみ給ふ我をおもへなとせちにいへと文はかりは見つゝもさらにあはてありけりかくいふけしきもとの人は知たりけり女さとに出て秋せんさいなとのおかしかりけるをはなをなんてすさひにむすひたりけるこのつらかりし人の來りてよみたりける云々これにてよくきこえたり六帖には腰句伊勢集と同しむすはれにけりは日本紀に約の字をむすふとよみたれは下に思ひし我はかひなくてあらはれて人に約束したりとねたみてよめる也人とは兄の時平公也薄は高き草なれは下にとそへたりもしは萬葉に「道のへの尾花かもとの思ひ草今さら何のものかおもはん　とよめる歌によりて此思ひ草によせて下におもひしかとよまれたる歟

　藤原かねすけ朝臣
よそにのみきかまし物を音羽河わたるとなしにみなれそめけん
只よそにして音にのみきかまし物をといふことを音羽川の名にいひかけてなとかくやしくあふともなしに見馴そめて物思ふらんといふ心を音羽川といふからわたらぬ物故水になるゝといふに添たり上に川と見なからえこそわたらねと有し心也
新勅撰
よの中はなとやまとなるみなれ川見なれそめすそ有へかりける

　凡河内みつね
我ことくわれを思はん人もかなさてもやうきと世を心見む
拾遺にふたゝひ載られたるには發句我はかりとてよみ人しらすなり六帖にも我はかりと有わか人をおもふはかり我をも思ふ人もかなさありても猶うきもの歟と世中を心みむ人たに相思はゝ世はうき

物にはあらしといふ心也これは逢て後人は我を思はて我のみ人を切に思ふ時よめる心なりうつほ物かたりに此歌にならひてよめる歌「もえはてゝわかみくもともなりなゝむさてもや人におよはぬとみん　或抄に我ことくとはみつから身を思ふやうに我を思ふ人もかなといふ心なりといへるはあまりの事也 後撰「我ことくあひ思ふ人のなき時はふかきこゝろもかひなかりけり　此歌の上句に合て見るへし又或抄に下句を心くるしさをさてもうきやとたかひにいひて世を心見むとなりといへるはいと心得かたし

もとかた

六帖 久かたのあまつ空にもすまなくに人はよそにそおもふへらなる

よみ人しらす

見ても又またもみまくのほしけれはなるゝを人はいとふへらなり

なるゝまゝに見れはいとゝ見まくほしくおほゆれははしめより人は心得てなるゝをいとふへき事なりと讀る歟西行法師「なかむとて花にもいたくなれぬれはちる別こそ悲しかりけれ　とよまれたる心にや又はあまりなるまて見まほしくする故になるゝを人のうるさきことにいとふべきとよめる歟新古今「見てもまた又もみまくのほしかりし花のさかりは過やしぬらん　拾遺「思ふとていとこそ人になれさらめしかならひてそ見ねは戀しき

きのとものり

雲もなくなきたる朝の我なれやいとはれてのみ世をは經ぬらん

なきたる朝は朝なきなりなくは萬葉に和の字をかけり海邊に風ふかて波たゝぬをなくといひ又常の所にもあらき風の吹やむをはなくと申ならへり此歌上は雲もなくといひて下に厭はるゝを甚晴とそへたれは晴たるをなきたるといへり六帖「明かたき外山の雲のいとはれて歸りしほとはわひしかゝきや　此いとはれて今と同し六帖「雲もなくなきたる朝の照日にも思はれまさる我やいかなる 賴基集「初霧の空に立つる心かなおもはれんともしらぬ我身を　此二首の思はれてもまた晴をかねたり古歌にはかやうにそへたる事おほし拾遺に「うたかはし

外にわたせるふみなれは我やとたへにならんとすらんこれはうたかはしといふに橋を添たり「にくからぬ人のきせたるぬれきぬはいとひかたくもおもほゆる哉　これはいと干かたきといふに厭かたくとそへたり

よみ人しらす

花かたみめならふ人のあまたあれはわすられぬらんかすならぬ身は

花かたみとは花をつみいるゝ籠をいふ和名集には筌篣をかたみとよめり又筐の字をもよめり又神代紀下云以二無目堅間一云々自注云所謂堅間是今之竹籠也又同書に籠をもかたまと讀りまとみと通すればかたまはかたみなり籠は目おほかる物なれは目並ふ人とつゝけてあまたの人を云り萬葉にも「西の市にたゝひとり出てめならへすかへりしきぬのあきしこそかも　とよめり菅家文草第四云霜鮮數歩菊花殘更有二何人一比目看或抄にはかたみのめのおほかることくあまたの人を見れはといひ或抄にはめは君か見るめなりといへるはたかへりよき人のあまたいひよれは數ならぬ身はわすれぬらんとなり萬葉十二「かつ田にもひえはあまたにありと云とえらえし我そよるひとりぬる同十四「海原のねやはら小菅あまたあれは君はわすらすわれわするれやうきめのみおひてなかるゝ浦なれはかりにのみこそあまはよるらめ

浮和布に憂目をよせて刈に假をよせてうきことのみある身なれはかりそめにのみこそ人は立よるらめと恨むる心也

伊勢

逢にあひて物思ふ比のわか袖にやとる月さへぬるゝかほなる

後撰に重て載るにはものおもひける比とかけりあひにあひてとは物思ふ我に對して涙にやとる詞をいへりぬるゝかほなるはしらすかほなといふことくぬれかほといふ心をわかかほのぬるゝにかけて袖にやとかる月さへぬれかほに見ゆるよといへる也涙といはねとよし狹衣「こひてなく涙にくもる月かけのやとる袖さへぬるゝかほなる

よみひとしらす

秋ならておく白露はねさめするわか手枕のしつく成

けり

發句は秋のしわさならての心なり
すまのあまのしほやき衣をさをあらみまとほにあれや君かきまさぬ
六帖には落句いまたききまさぬと有筬の字をさとよめり鹽やきのきる藤衣はをさのあらくて糸のすく（ヨシ）なけれはそのまとほなるによせて君か住さとゝ我住宿とその道のほとまとほにあれはにや君かきまさぬと遠からねとこぬを恨ていへり萬葉に妹か家路やゝ間遠きをとも間遠きさとを雲ゐにや戀つゝをらんともよみ上に芦垣のまとほけれともともよめり此歌古歌の躰也萬葉一「すまのあまのしほやききぬの藤衣まとほにしあれはいまたきなれす
山しろの淀のわかこもかりにたにこぬひと賴む我そはかなき
顯注にわかこもとはわかき時はからねはかりにたにこもをからぬをかりそめにも人こすとよせたりとかゝれたり此説は誤なりたゝこもはかるものなるによりかりにたにとつゝけんため也こもはわかきを賞して刈故に萬葉第三人丸の長歌にもわかこもをかりちの池とつゝけられたり　延喜式掃部式云稈蔣食薦一枚長六尺廣三尺料稈蔣二尺大膳式下云五月五日節料青蔣十一圍生絲三兩一銖粽料粽葉「みしま江の入江のこもをかりにこそ我をは君は思ひたりけれ　新古今重之「山しろのよとのわかこもかりにきて袖ぬれぬとはかこたさらなん　此歌も假とつゝけたる事今とおなし
後撰集あひ見ねは戀こそまされみなせ川なにゝふかめて思ひそめけむ
みなせ川は水無瀨河とかけはあさきちきりによせてそれを何しにふかくはおもひ染けんとそふる也
六帖あかつきのしきのはねかきもゝはかき君かこぬよは我そかすかく
二三の句を顯注に歌論義にはしちのはしかきもゝよかきと有といへり六帖には此歌の外に上の句はおなしうて下の句かきあつめてそわひしかりけるといふ歌有鴫ははねかくことのしけき鳥なりされはもゝはかきとはいふ也人のこぬよの數をかくしけきなんかのしきのもゝ羽かくやうなりとよめり羽かくとはかゆき所なとかくやうのかくにはあら

てとふにしけく羽をつかふを云歟萬葉六帖「春まけて物悲しさに小夜更て羽ふりなくしき誰が田にかすむ六帖「あさはらに小夜打更て立鳴の羽こそしるらめひとりぬるよは左近集「空にこそつゝきかすかけかはしきのもゝはかきには過やしぬらん　此六帖の歌をもて初の萬葉の歌を見るに立ては打はふき〳〵て啼其羽ふきをいふにや拾遺貫之「百羽かきはねかく鳴もわかことく朝わひしき數はまさらし源仲正の歌に「明ほのゝしきのほり羽かきつらん雲ゐはるけき戀もするかな又隆信朝臣の歌に「明ぬるか鳴のはねかきねや過て袖に月もる深草の里　これらもとふ〳〵つかふ羽音をよまれたりと見えたり六帖「曉にはねかくしきの打しきりいく夜か君にこひわたるらん元眞集「わひぬれは曉かけてかへりたるしきのはねかき我そ數かく

玉かつらいまはたゆとやふく風の音にも人のきこえさるらん

　玉かつらも吹風も共に枕詞なり

わか袖にまたきしくれのふりぬるは君か心に秋や來ぬらん

　時雨は秋よりふる物なれは秋やきぬらんとはいへりしくれふるころの秋也立秋をいふにはあらず

山の井のあさき心も思はぬに影はかりのみ人のみゆらん

　あさき心もおもはぬにとは淺くも思はぬにと也影はかりのみとは影なとのやうにほのかにのみみゆらんと山の井の縁にいへり采女か歌にてよめる成へし

わすれ草たねとらましを逢事のいとかくかたき物としりせは

　逢事のかくはかりかたからんものとかねてしらは我もしひて戀まし物をの心也說文云萱令人忘憂也伊勢物かたりに「今はとてわするゝ草のたねをたに人の心にまかせすもかな元眞集「住よしの戀わすれ草たねたえてなき世にあへる我そ悲しき

こふれとも逢夜のなきはわすれ草夢路にさへやおひしけるらん

　後撰にふたゝひのせたり人の心のかよはねは夢にもみえぬ故にそなたのわすれ草の我ゆめちにさへやおふらんと也

夢にたにあふことかたくなり行はわれやいをねぬ人やわするゝ

夢にも人にあふ事かたきは我ねぬる故か人の忘れはてゝ玉しゐのかよはぬか我はぬれはこそ人にあふとてそみねあらぬ夢をは見るなれはあはぬは人のわするゝ故也けりとよめる心也下句は上の離別歌に我やわするゝ人やとはぬともよめるに似たり

けむけい法師

もろこしも夢にみしかはちかゝりき思はぬ中そはるけかりける

おもはぬ中は心のあはねは夢にも見えぬをもろこしよりもはるけしといふ也

さたのゝほる

出家還俗後賜二貞朝臣姓一初源氏仁明天皇御子登三代實錄第十二云貞觀八年三月二日戊寅云々是日勅沙彌深寂賜姓貞朝臣名登叙正六位上貫右京一條一坊先是貞觀五年九月二十日三品行中務卿諱(光孝天皇)親王四品兵部卿兼行上總太守本康親王參議正四位下行左兵衛督源朝臣多從四位上行伊勢守源朝臣冷散位從四位上源朝臣光等奏言深寂是仁明天皇更衣三國氏所生也承和之初賜姓源朝臣預二時服月俸一厥後依二母過失一被レ削二屬籍一仍出家入道嘉祥之末更垂二優矜一同於法榮寺道三列預二時服月料一聖躬不豫之間與二諱等一共侍二掌藥一登遐之時緣二身出家一不レ預二處分一今善緣不遂再落二俗塵一所レ生之子隨亦有レ數而名猶編レ僧身未レ有二貫附一出仕之理既絕沈淪之悲良深夫爲レ子之道緇素無レ別出家之時既列二皇子一還俗之日何爲非兒然則准二之人間一宜復本姓但伏聞二嵯峨遺旨一此氏有過者其子不レ得レ爲二源氏一望請賜二姓名貞朝臣登一叙位階貫二京職一至是詔許レ之

ひとりのみなかめふるやのつまなれは人をしのふの草そおひける

これは獨のみなかめて年月を經るといふを長雨の古屋とそへ長雨によりてしのふ草のおふるをたとえにし人をしのふ心のまさると添たり和名集云本草云垣衣一名烏韮(和名之乃布久佐)

僧正遍昭

わか宿は道もなきまてあれにけりつれなき人をまつとせしまに

いまこんといひてわかれしあしたより思ひくらしの

ねをのみそなく
拾遺には物名にひくらし忠岑とて載らる今こんといひてわかれしとは素性か今こんといひしはかりのやうに一日の心にはあらす此つゝき戀也ぬる人をもしや〳〵と待心の歌とも也

よみ人しらす

こめやとはおもふ物からひくらしのなく夕くれは立またれつゝ

今はよも人のとひこめやこしとは思へとひくらしのなくにもよほされてなをはかなく立出てまたるゝとなり

今しはとわひにしものをさゝかにの衣にかゝり我をたのむか

いましはとはし文字はことはのたすけにて今はといへる詞也萬葉に「あら玉の年の經ゆけは今しはと夢よわかせこわか名告すなこれに同し又萬葉に「今玄はし名の惜けくも我はなし妹によりては千重にたつとも　是はふたつのし共にやすめたる詞也さゝかには蜘なり日本紀私記云蜘蛛之別名也其躰如蟹住左々原故云今案遊仙窟に小許とかきてさゝやかとよみたれはちいさき蟹に似たるといふ心にて名付たる歟顯注に蜘蛛さかりては待人きたるといへり衣通姫のみかとをこひたてまつりてよめる歌「わかせこかくへきよひなりさゝかにのくものふるまひかねてしるしも　又摩訶止觀にも蜘蛛降而有喜事といへりわひにし物をとは待はわひしかりしものをかく蜘のたのむるとよめり思ひはなちたるにくものかゝるはわひしさをおとろかすにてある也密勘思ひたえたるにくものかゝる中々なるよし所存同今案これはけふ〳〵とひさしく待にとひこねは今はわすられにけりと思ひてわひにし物を心あるさゝかにの衣にかゝりて我をなくさめてたのむるよとよめるにや蜘の事は　爾雅釋蟲云蠨蛸長踦注小鼅鼄長脚者俗呼爲喜子疏此小鼅鼄長脚者一名蠨蛸一名長踦俗呼爲喜子詩東山云蠨蛸在戶陸機疏云一名長脚荊州河內人謂之喜母此蟲來著人衣當㆘有㆓親客至㆒有㆖喜也幽州人謂之親客亦如蜘蛛爲羅網居是也西京雜記陸賈云蜘蛛集而百事喜遊仙窟註集作㆑襲百作萬

今はこしと思ふ物からわすれつゝまたるゝ事のま

もやまぬか
落句のやまぬかはやまぬかな也
月よにはこぬ人またるかきくもり雨もふらなんわひつゝもねん
これはたえて久しくこぬ人のまたるゝをいへり只こよひこぬ人のまたるゝといふにはあらすわひつゝもねんと云に心をつくへし後撰戀六「月にたにまつほとおほく過ぬれは雨もまにこしとおもほゆる哉貫之集「雨ふらん夜そおもほゆるうは玉の月にたにこぬ人の心は六帖「月夜にはこぬたにもこそ待ときけくるをしかへす物にそ有ける「月夜にはこぬ人待といとへともふる夜しもこそねられさりけれ
うゑていにし秋たかるまて見えこねはけさはつかりのねにそ鳴ぬる
家持集には發句うゑておきしと有早苗とる比とひ來ていにし人の秋田かるまてこぬをもしやと待あかしてけさ初鴈の啼におとろきて鴈とともにねなく也古歌と聞ゆる歌也萬葉「住吉のきしを田にはりまきしいねのえかもかる迄あはぬ君かも同「春霞たな引田井にいほつきて秋田かるまておもはしむ
庵付而苑左右令思

頁久
らく
こぬ人をまつ夕暮の秋風はいかにふけはかわひしかるらん
此こぬ人を待といふも絶てひさしくこぬ人也その人となりてきかはまつことにいかにふけはかとも思ひぬへし躬恒集「わかせこかきまさぬ宵の秋風はこぬ人よりもうらめしき哉
ひさしくもなりにけるかな住の江のまつはくるしき物にそ有ける
後撰「久しくもこひわたるかな住の江のきしに年ふるまつならなくに拾遺「住の江のまつならねとも久しくも君とねぬよのなりにける哉
かねみのおほきみ
住の江のまつほとひさに成ぬれはあしたつのねになかぬ日はなし
住の江の松は久しきためしにいへはまつ間の久しくなると添たり又和名集云玄中紀云松脂淪入地千歳則爲伏苓郎丁反和名松脂萬豆夜迺伏苓麻豆保止淮南子曰千年之松下有茯苓上有兎絲これによれは

茯苓の和名にかけて久しくしてなる物なれはいふ歟山さとのものは今も茯苓をまつほとゝ申ならへりとそ承はるあしたつのねはこれもひさしきものゝ松に住なれはよせたり

なかひらの朝臣あひしりて侍けるをかれかたになりけれは父がやまとのかみに侍けるもとへまかるとてよみてつかはしける

伊　勢

伊勢集云人のむこになりぬれは我を今はよもとはしと思ひてもとありけるやまとにいきて玄はしあらんとおもひて女とあり此前に云みきのおほいまうちきみにむこにとられにけりと有枇杷殿は菅家の聟なり

三輪の山いかにまちみむ年經ともたつぬる人もあらしと思へは

此集の歌に「我いほはみわの山もとこひしくはとふらひきませ杉たてる門　此とふらひきませの心を得ていかに待みんと讀り六帖「みわの山玄るしの杉はかれすとも誰かは人のわれを尋ねん

題しらす　雲林院のみこ 諱人康仁明御子後出家

吹まよふ野風をさむみ秋はきのうつりもゆくか人のこゝろの

序歌なり吹まよふは吹みたす也亂の字を萬葉にまよふとよめり野風のさむく吹まよふころ秋萩の心ならすうつることく世の人のとり〳〵いひさわくをわひてこゝろのうつりゆくかと思ひ返してうつろふ人のつらきをゆるす心にや

をのゝこまち

今はとてわか身玄くれにふりぬれは言の葉さへにうつろひにけり

後撰には冬の歌にて今はとてを秋はてゝと改て題不知讀人しらず也發句は上の句終にうつして意得へし我身のふりぬれは今はとてたのめし人のことのはもうつろふとよめりしくれにふりぬれはといへるは人のことのはを紅葉によせん料なり新古今に同し人「木からしの風にもみちて人知れすうきことのはのつもる比かな

返し　小野さたき

人を思ふ心この葉にあらはこそ風のまに〳〵ちりもみたれす

人をかろ〳〵しく思ふ我心ならねは木の葉のことくやすくはみたれしと也

なりひらの朝臣きのありつねかむすめにすみけるをうらむる事ありてしはしのあひたひるはきてゆふさりはかへりのみしけれはよみてつかはしける

此贈答伊勢物語に有は少かはれり

あま雲のよそにも人のなりゆくかさすかにめにはみゆる物から

あまくもは天雲也天雲はよその枕詞也萬葉に「天雲のよそにのみ見しわきもこに心も身さへよりにしものを「天雲のよそにかりかね聞しよりはたれ霜ふり寒し此夜は「かくのみしあひ思はさらは天雲のよそにそ君は有へかりける今も枕詞なからよそに成ゆくかともめにはみゆるものからとも云り皆此雲を承ていへりなりゆくかはなりゆくかな也

返し　なりひらの朝臣

ゆきかへり空にのみしてふることは我ゐる山のかせはやみなり

伊勢物かたりには初をあま雲のよそにのみしてとありおくる歌なりひらをあま雲によそへしかはそれをうけてその雲のことくいたつらにゆきかへりて中空にのみしてふる事は山風のあらけれは雲のおりゐることのならぬやうにつらき心あれはえすみつかぬそとなり我ゐる山とはやかてたとへられたる雲になりて女をさしていへり　後撰「白雲のゆくへき山もさたまらす思ふかたにも風はよせなん　拾遺「白雲のかゝる空ことする人を山のふもとによせてけるかな

題しらす　かけのりのおほきみ

から衣なれは身にこそまつはれめかけてのみやはこひんとおもひし

衣のなるれは身にまつはるることく人にもなれゆかはさりともむつましくこそならんと思ひし人のいとゝ逢かたくて衣架にのみかけおくことくよそにのみ心にかゝりて戀ん物とやは思ひしと也衣のなるゝは萬葉に穢の字をかけりきなれてあかつく心なり

とものり

秋風は身をわけてしもふかなくに人の心の空になるらん

友則集には腰句ふかねともと有落句顯昭の本には空に散らんと有て注に風は人の身をわけてはよもふかしなとかく君か心のひとつにはなくて空にちるらんとよめる歟審勘無不審とのみ有同心と見えたり今案以下の歌に秋よりさきのもみちといへるによりておもふに空にちるらんとはもみちにそへていへる歟秋風にちるものは本のはなれは詩にも歌にも昔はその文字をすゑねとそれと聞ゆるをは後のことくきひしくはいはさりけれは此歌もその心にや大井河序にもつたなきことのはは吹風の空にみたれつゝといへり身をわけてどいふに人をわけてといふ心と身ひとつにとりて身と心とをわけていふとのふたつの心有へし後撰「みをわけて霜やおくらんあた人の言の葉さへにかれもゆく哉　これは我と人とを對して身をわきてといへりこゝの歌ふたつにかよひて聞ゆ我と人とを對していはゝ秋風といふに德をそへたりこれは二つの心に通すなへて世の秋風は人をわきてはふかぬを心の秋風は人をわけてなとか我心は松のみとりのことくかはらぬを人のこゝろはもみちのことく空に散ゆくらんとよめる歟又人の身ひとつに取ていはゝ人はもとの人にして秋風の吹につけておもかはりてみゆる事もなきをなとか心のみさそはれてこの葉のことく空にちりゆくらんとよめる歟　後撰「思はむとたのめし人は有ときくいひしことのはいつちいぬらん　此歌後の心にかなへり

源宗于朝臣

つれもなくなりゆく人のことの葉そ秋よりさきのもみちなりける

宗于集には腰句ことのはや尾句もみちなるらんと有つれもなくとは初よりひたふる情なきをもいへとこれは後につれなくなりてつらきによく堪たる人をいへり秋よりさきのもみちとは言の葉のはやくかはれるをいへり

こゝちそこなへりけるころあひしりて侍ける人のとはて心ちおこたりてのちとふらへりけれはよみてつかはしける　兵衛 高經朝臣女

しての山ふもとをみてそかへりにしつらき人よりまつこえしとて

顯昭の本にはふもとよりのみかへりきぬとありて

注には人を先やらんとのゝはねとつらき人にも先たゝむ事のさすかなれはまつこえしとはよめる歟今案にとはぬを恨みてつらき人とはいへとまことにさおもふ人なれは我は人のつらきにならはてしての山を人よりさきにひとりこえむ事のかなしけれはいのちも限りあらん時もろともにこそこえめと思ひてすてにこゆへかりしを猶を見てなんよみかへりきつるとよめりと見ゆ此たくひ後撰にあり公頼朝臣のむすめにしのひてすみ侍けるにわつらふ事ありてしぬへしといへりけれはつかはしける朝忠朝臣「もろともにいさといはすはしての山こゆ共越さん物ならなくに　又いはく人のもとより久しう心ちわつらひてほと〳〵しくなん有つるといひて侍けれは　閑院大君「諸友にいさとはいはてしての山いかてかひとりこえむとはせし

あひしれりける人のやうやくかれかたになりけるあひたにやけたるちの葉に文をさしてつかはせりける

やけたる茅の葉とは野火にやけのこりたる也

小まちかあね

小町によりてそのあねとかゝれたるにて小町か姉高きほとはしられたり後撰にもまた此あねか歌三首あり又おなし集に小町かむまことて歌あり史記項羽本紀云外黄令舎人児年十三（索隠曰令之舎人児也讀舎人児音以其幼弱故隱其父春秋事日乃稱之子是也）同外戚世家云衛皇后所謂姉衛少兒々生子霍去病

時過てかれゆくをのゝあさちには今はおもひそ絶すもえける

小野はみつからの氏によせていへり伊勢か歌に伊勢海伊勢のあまとよめるかことしあさちはよくもみちするものなれは身のさかり過て人のかれゆくにたとへたり

物思ひけるころものへまかりける道に野火のもえけるを見てよめる

伊勢

冬かれの野邊とわか身を思ひせはもえても春をまたましものを

六帖題冬野に入て落句待へきものをといへり冬野の草は霜枯ての後野火にもえても春をまつたのみあるを我うき中は草とともにかれて後我思ひのみひとりもえてたのむかたなき心也有二首一類

題しらす

とものり

水のあはのきえてうき身といひなからなかれて猶も賴まるゝかな

六帖には腰句おもへともと有家集には知なからと有てなかれてなをもをなかれても猶と有六帖「いせのうみのをのゝふるえのなかれえのなかれてもみむ人の心を

よみひとしらす

水無瀨河ありて行水なくはこそつひにわか身をたえぬと思はめ

みなせ川といへとさすかに水のあれはあさはかにてたえ〲なる中にも猶たのみ有心也萬葉に「うらふれて物は思はしみなせ河有ても水はゆくとふ物を　これに似たり古歌の姿なり

みつね

よしの河よしや人こそつらからめはやくいひてし事はわすれし

吉野川はよしやといひはやくといはん料也よし今こそつらくとも人のむかしいひし言の葉を我は忘れしとよめる歟又わか人にちきりたる詞をたかへしとよめりともきこゆ右三首一類

よみひとしらす

よの中のひとの心ははなそめのうつろひやすき色にそ有ける

六帖には腰句月草のとあり花染といふも露草の花にてそむれはいふ字治拾遺物語に色青き大きみを青經とつけてわらひける事をかけるにも色は花をぬりたるやうにあをしろにてとかけり世の中の人とひろくいひて心はひとつにある也

心こそうたてにくけれ染さらはうつろふこともをしからましや

これは右のうたと二首にて心をいひはてたる成へし萬葉には此躰おほし心は我心也うたては世上にいふうたてしきなり竹取物語にもうたてものたまふかなといへり色ともいはてそめさらはといふは上の花染にすかれる也別人の歌ならは用をいひて體をあらはすと知へし右二首一類

小まち

色見えてうつろふものは世中の人のこゝろの花にそありける

花といふ花はうつろふ色みえてこそうつる物なる

をたゝ世の人の心の花のみうつろふ中色も見えす
してうつり行とよめりこれも世の中とひろくいへ
と人をさす也發句のてもしすむ説あれと心の花誰
か其色を見し歌はさのみよむ事なれと濁るはすな
ほ也

よみひとしらす

小町集
我のみやよをうくひすと啼わひん人の心の花と散な
は

人の心の花の散ことくうつろひはてなは只我のみ
世をうき物と鶯のことくなきわひてやあらんと也
鶯は花のちるををしむといふ故に世を鶯とよせた
りはなの散るをうつるといふ事春部に注せしかこ
とし

素性法師

おもふともかれなん人をいかゝせむあかすちりぬる
花とこそ見め

相思はてかれ行人をは恋ひておもふともいかゝと
ゝめん花のちるををさこそおしめとせむかたなく
あかてちらせはそのたくひと見てこそ心を取かへ
めと也

よみひとしらす

今はとて君かかれなは我宿の花をはひとりみてやし
のはん

女の歌と見えたりあはれにやさしき歌にも侍かな
下の句はふたり見たりし時を思ひ出てやしのはむ
といへり或抄に見てや忍はむをなくさまむの心も
有とあれと獨見てやといへるなくさまんとの心に
は見えぬにや右四首一類萬葉集第九云石川大夫遷
任上京時播磨娘子贈歌「たゆらきの山のをのへの
櫻花さかん春へは君をおもはむ

むねゆきの朝臣

わすれ草かれもやするとつれもなき人の心に霜はお
かなん

歌の心明なり

寛平御時御屛風に歌かゝせ給ひける時よみてかきけ
る

そせい法師

わすれ草何をかたねと思ひしはつれなき人の心なり
ける

忘草は何をたねとしてか生ふらんと思ひつれはつ
れなき人の心かたねにて有けりとはしめて知る也

或抄に我心におひよとおもふ忘草のたねはつれなき人の心よりおこる義也といへるは叶はす此歌上に涙河水上をたつねけんとありし歌に似たる心有二首一類小町集「わすれ草我身につまんと思ひしは人の心におふるなりけり

題しらす

秋の田のいねてふこともかけなくになにをうしとか人のかるらん

いねとてやらふ詞をもかけることなきになにをわがためにはうしと思ひてか人はかるらんといふ事を秋の田の稻とつゞけ稻は秤にて懸る物なれはかけなくにとそへ刈物なれはかるにそへたり是顯注の心也定家卿かけなくにの秀句あまりにやと同心したまはねと　後撰「秋の田のいねてふことをかけしかかは思ひ出るかうれしけもなし六帖「わかつめるいたつらいねのかすならはあふはかりなし何にかけまし　これらによれはいはれあり顯注にかけなくにとは又思ひかけすともいひつへしとあるはいはれすすてにいねてふこともといへる物を

きのつらゆき

はつかりの鳴こそわたれ世中の人の心のあきしうければ

世の中の人の心上にいふかことし

よみ人しらす

あはれともうしとも物を思ふときなとか涙のいとなかるらん

人をあはれと思ふ上に又うしと思ひて一かたならすものを思ふときは心の念々にいとまなきをいかなる隙より涙のもりきてそれもまたいとまなく落らんとあやしみ思ふ心也いとなかるらんとはいとまなかるらんのまの字を略せり後撰「春の池の玉もにあそふにほ鳥の足のいとなき戀もするかな　同「ひくらしの聲もいとなく聞ゆるは秋くれかたになれは成けり

身をうしと思ふにきえぬものなれはかくてもへぬる世にこそ有けれ

身のうき時は消もうせはやと思へとそれも叶はねはかく人にも忘られて有にもあらぬ身なからせむかたなくなからふる世なりとよめり　新古今戀四殷富門院大輔「わすられはいけらん物かと思ひし

にそれもかなはぬ此世なりけり　此歌の心おなし
ある人胸の句思ひにきえぬとよみて火にそへたり
といへり流布の本思ひの字のみかけり正本を考て
定むへし

典侍藤原直子朝臣

六帖には内侍のすけきよいことあり

あまのかるもにすむ虫のわれからとねをこそなかめ
世をは恨みし

此歌伊勢物かたりには二條后の御歌とせり或人こ
れを執して直子を作者といへるはひか事なり齋宮
の歌をもよみひとしらすと載たれはまことに二條
后の御歌ならはよみ人しらすといふへし何故にか
作り名する事あらんその上題しらすとあれは二條
后の御歌といふとも憚かる事有へからす處實をま
しへて作れるものかたりによりて歸りて此集の正
説を捨へからす藻にすむ虫の名をわれからといへ
はかくはつゝけたりわれからとは何事もわか心か
らとおもひて人をはうらみしといふ心をひろく世
をは恨みしといへり男女の中のみならすかくたに
おもはゝ人を恨ることは侍らし　拾遺「君を猶うら
みつるかなあまのかる藻にすむ虫の名を忘れつゝ
「あまのかるもにすむ虫の名はきけと只我からの
つらき成けり 業平集又いせ物かたり 「こひ佗ぬあまのかるもに
やとるてふ我から身をもくたきつる哉

いなは 桓武仲野親王基世王因幡

あひみぬもうきもわか身のから衣おもひしらすもと
くるひも哉

人をうらみなとしてあひみぬもさて絶てうきも我
心つからの事なるを此ことわりをもしらす又あは
んするやうにひものとくるよと也新古今に前齋院
尾張「うらみしな思へは人につらかりし此世なか
らのむくひなりけり　此歌と同しく女の歌にてく
ひたる所あるいとやさしわか身からといふに中に
のもしあるものひやか也萬葉に仙女歌「あるもあ
らすおのか身のから人のこのこともつくさしわれ
もかりなん

寛平御時きさいの宮の歌合のうた　すかのゝたゝおむ

三代實錄三十二云元慶元年十二月十六日右京人從
五位下行山城權介船連副使麿內藏權少允正七位上

津宿禰輔主主殿允大初位下葛井連直臣等三人賜姓菅野朝臣其先百濟國人也同卅六云元慶三年十一月廿五日庚〔辰イ〕申中宮大進菅野朝臣直臣等並授從五位下

つれなきを今は戀しと思へとも心よはくもおつるなみたか

つれなきをとは逢見ての後のつれなきなり涙かは涙かな也此歌菅萬にも入れり

伊勢

人しれすたえなましかはわひつゝもなき名そとたにいはまし物を

六帖には胸句やみなましかはとあり人にしられす中たえたらはわひなからもなき名そとたにもいひなすへきを人の知たれはなき名とさへえいはぬ也

よみ人しらす

それをたにおもふ事とて我宿にみきとないひそ人のきかくに

大和物かたりには桂のみこいとみそかにあふましき人にあひたまひたりけるをとこのもとによみておこせ給へりけるとて此歌有今の部立の心にあらすこれはたえての今それはかゝりの事も有しよりおもひなれたる事とて人のきく所に我宿をみつるとないひそ人のうたかひおもふへきにと也中々にしられすしらぬむかしに返りて絶たる時の歌也或抄に初二句を注してそれかくすをたにも我もおもふ事とてあるへきなりといへるはかなはすきかくにはきくになり寒きをさむけくうきをうけくといふに同し後撰「なき人をひとのきかくにかけしとて忍ふるほとそ忘るとな見そ

逢事のもはらたえぬる時にこそ人の戀しきこともしりけれ

もはらは專一純一なり竹取物語にもはらさやうの宮つかへつかうまつらしと思ふを云々伊勢物語にもはらうけひかすとかしらふりてたゝいひにいひはなては云々常の詞にはいへと歌にはまれなる事也日本紀專の字をたくめとよめるは此もはらの古語なり「世の中にかなしけむとは思はねは人のたもとをまかぬ夜もなき

わひはつる時さへものゝかなしきはいつこを忍ふなみたなるらん

後撰には男のわすれ侍にけれはとて伊勢か歌也伊

勢集にもありつらかる人のたえてわひはてたる時さへなをとにかくにわすれやらす物の悲しくおもはるゝは何をなこりとしのひてか涙はおつるらんとなり 拾遺戀二又玉重出「うしと思ふ物から人の戀しきはいつこを忍ふこゝろなるらん萬葉「世の中の戀しけゝむと思はねはいつこを忍ふなみた成らん

藤原のおきかせ

恨てもなきてもいはむかたそなきかゝみに見ゆる影ならすして

落句の終にはの字をくはへて見るへし鏡の影ならては今は我にむかふものなけれは絶にし人のつらきをうらみてもなきてもいひやらんかたなしと也

よみひとしらす

夕されは人なき床をうちはらひなけかんためとなれる我身を

人の絶て後かゝるなけきせむためとてうまれこし我身かと諸共にもふさぬ床をはらひなれたる事とて打はらひて女のぬるとて歎きてよめる心也萬葉「眞袖もて床打はらひ君待とをりしあひたに月かたふきぬ 同「あすよりは我玉床を打はらひ君とはねすて獨かもねん

わたつみの我身こす浪立かへりあまのすむてふうらみつるかな

我身こす浪は是は後の陸奥の歌の末の松山波もこえなんといふをとれり密勘にすへて波こゆといふ心は末の松よりおこり侍れとも度毎に末の松とも置侍らしと有或抄に我身こす浪をあまのかつきするによせていへるはかなはすかはりはてたる人を立かへりも恨る事もはかなしと思へる也後撰「濱ちとりたのむをしれとふみそむる跡打けつな我身こす浪

あらを田をあらすきかへし返しても人のこゝろをみてこそやまめ

猿丸か集には下句見てこそやまめ人の心をと有田をはあらくすきて又すきかへせは返してもといはん料也人の心のかはりはぬてとはみゆれとも猶くはしく見はてゝ後こそ思ひやまむすれと也新古今戀忠「春にのみ年はあらなんあら小田をかへすかへすも花をみるへく

ありそ海の濱のまさことたのめしもわするゝ事の數

にそ有ける

これは我戀はよむともつきしといふ歌より出たるへし濱の眞砂の數によせて末久しくかはらしとたのめしはかへりて忘るゝことのおほき也けりとよめる也後撰「常磐にとたのめし事は待程の久しかるへき名にこそ有けれ　清正集「わすれしの長きためしにたとへこし濱のまさこや數つきぬらん　うつほ「ありそ海のまさこの數は知ぬれとかそふはかりの跡をこそみね

あしへより雲井をさして行鴈のいやとほさかる我身かなしも

萬葉「秋風に山とひこゆるかりかねのいや遠さかり雲かくれつゝ

しくれつゝもみつるよりも言の葉の心の秋にあふそわひしき

人の心の秋にあひてたのめつる言の葉のうつろふかしくれしてもみちする比の大かたの秋よりわひしきと也　萬葉「ことのはを頼むへしやは秋くれはいつれか色のかはらさりける

秋風の吹とふきぬるむさしのはなへて草葉の色かはりけり

秋風は人のあくにそへたり武藏野とは紫のひともとゆへの心にてなへて草葉の色かはるとは草はみなからあはれといひしゆかりの人さへつらき人の我をあきぬる時はみな心かはりぬとそへていふなるへし

小町

秋風にあふたのみこそ悲しけれわか身むなしく成ぬと思へは

家集こと書にみもなきなへのほに文をさして人のもとへやるにといへり秋風にあふ田は實のいらぬ也田の實を憑に添ていみしくたのみし事も忘れぬれはむなしく成ぬるといふ心也

平さたふむ

秋風の吹うらかへすくすの葉の恨ても猶うらめしき哉

六帖には秋かせに吹かへさるゝと有よろつの草の中に葛のははことに風にうらかへる物なりさて葛のはのかへるともうらみともよむ也此歌も又秋風にあくをそへたり

よみひとしらす

秋といへはよそにそ聞しあた人の我をふるせる名にこそ有けれ

あた人にふるさるゝとも我身の秋なるをしらすしてよその事に思ひつるかはかなきと也しくれつゝといふよりこれまて秋を飽にそへたる歌を一類とする中に中の三首は秋風によせたるをつらねたり

わすらるゝ身をうち橋の中絶て人もかよはぬ年そへにける

又はこなたかなたに人もかよはす

身をうち橋とよするにつけて中たえてとも人もかよはぬともいへりこれはたゝ歌の上なりまことのうち橋にかけてさはあるましきなり

坂上これのり

逢事をなからの橋のなからへて戀わたるまに年そへにける

あふ事をなからの橋とは逢事のなきとつゝくる心歟これは初よりあはぬにはあらて逢て後あはぬ也部立の心也二首寄橋を類せり

とものり

うきなからけぬるあわとも成なゝん流れてとたに頼まれぬ身は

六帖には第二句きえせぬあわと第五句たのまれなくにとあり家集には第二句きえぬるあわとゝ有きなからは浮なからにうき身をそへたりなかれてとたにはなからへはとたになり後撰「なかれての世をも頼ます水の上の沫にきえぬるうき身と思へは

中務集 うきなから消せぬ物は身なりけりうら山しきは水の泡かな

よみ人しらす

なかれてはいもせの山の中におつるよしのゝ河のよしや世の中

六帖には第四句よしのゝ瀧のと有なかれてはといふになからへきてはの心有妹背の山の中にさへ吉野の川のなかれきて隔たりおつるを思へは男女のなからひもすへて是のみならす行末皆かゝる事也よしや世中よとひろくうらみたる心也序に吉野川を引てうらみきつるにとかける此歌を思へる也さて男女のなからひをすへていひたる歌にて戀部のはてにも此歌をはたてたる成へし或抄に妹背の山

の中に落るとはふたつの川のたえぬ理也隔る心にはあらすといへりふたつの川とはいかに心得ていへるにかおほつかなし又中に落るといふに妹の山背の山とのへたる心なくは一首のうち何をとちめにてかよしや世の中とは恨み捨つへき紀の川を隔て丶背の山は北に妹の山は南に有紀の川はよし野川の末の紀の國にいりての名也もとはよしの川なる故によしやよの中といはんために水上の名をいひて上になかれてはといひつれはことはりたかはす萬葉にうまさけのみわの山のおはせる泊瀬の川といふかことし三輪にてはみわ川なれと泊瀬の川の末なれははつせの川といふに相違なしこれに准ふへし夫木抄第四河落花といふ事を平泰時朝臣明玉「春たけて紀の川白く流るめり芳野の奥に花や散らん　此歌を思ふへし二首又類をもてつらねたり六帖「人ことはあまのかるもにしけくともおもはましかはよしやよの中

# 古今和歌餘材抄卷十七　三十四首

## 哀傷歌

いもうとの身まかりける時よめる　小野たかむらの朝臣

玉葉戀一妹のおかしきを見て書付て侍ける參議篁「中に行吉野の川はあせなゝむ妹せの山を越てみるへく　返し參議岑守朝臣女一妹背山かけたに見えてやみぬへく吉野の川はにこれとそ思ふ新千載戀二妹のかけたに見えてやみぬへく吉野の川はにこれとそ思ふと申侍けれはよめる參議篁「にこる瀬はしはしはかりに水しあらはすみなんとこそ頼わたらめ　此贈答ありし妹歟續古今戀二に題不知參議篁「身のならんふち瀬もしらすいもせ川おりたちぬへき心地のみして　此歌も妹につきてよまれたりと見えたり

なく泪雨とふらなんわたり川水まさりなはかへりくるかに

顯注云わたり川とは三途川をいふみつせ川ともいへり　地獄畫を見てよめる拾遺雜下菅原道雅女「みつせ川わたるみさほもなかりけり何に衣をぬ

きてかく覽　十王經には奈河ともいへり二七亡人渡二奈河一千群萬綠涉二江波一引レ路牛頭有挾レ棒催レ行鬼卒手擎多此第二七日過二初江王一文也今案彼十王經と云は信用にたらさるもの也されとわたり川みつせ川なと聖教にたしかに見ゆる事なけれと昔よりよみ來れり三代實錄第二纎二皇太后御願一置二安祥寺年分度者三人一願文曰奈河之渡平生之財不隨平等之前君臣序無辨これ奈河平等は十王經に依れる一也平等は十王の中の平等王也神代紀上云一云伊弉諾尊乃向大樹放屎此即化成巨川泉津日狹女（ヨモツヒサメ）將レ渡二其水一之間伊弉諾尊已至二泉津平坂一この巨川と云るや渡り川にて侍らん袖中抄云孫姫式云雨之滌淚螢總（二字不詳）須留於渡河（なく淚云々今の事也）灑之流浦咽聲正聞於椎嶺「我きもの流るゝ灑のむせる聲きこえやすらんしひの尾のきし　椎尾（山城）　六帖（素性）うくも有

かきのふの小雨わたるせに人の涙を淵となさねは

さきのおほきおほいまうちきみを白川あたりにおくりける夜よめる　素性法師

三代實錄第二十二云貞觀十四年九月二日己巳太政大臣從一位藤原朝臣良房薨云々冬十月十日丁未正三位守右大臣兼行左近衛大將藤原朝臣基經抗表辭故太政大臣忠仁公封邑曰臣謹讀去月四日詔書贈於故太政大臣藤原朝臣以正一位又以美濃國封之爲美濃公諡曰忠仁食封資人並同平日太政大臣之官亦如故矣云々十二月十三日己酉先是天安二月十二月九日定十陵四墓獻年給荷前幣是日四墓加太政大臣贈正一位藤原朝臣良房愛宕墓爲五墓在山城國愛宕郡

ちのなみた落てそたきつ白川は君か代までの名にこそ有けれ

毛詩云鼠思泣血無言不疾易曰泣血漣如　韓非子云楚人和氏得玉璞楚山中奉獻厲王王使玉人相之曰石也王以和爲詐而刖其左足及武王即位和又獻之王使玉人相之又曰石也王又以和爲詐而刖其右足文王即位和乃抱其璞而哭於楚山之下三日三夜泣盡而繼之以血王聞之使人問其故曰天下之刖者多矣子奚哭之悲和曰吾非悲刖也夫寶玉而題之以石貞士而名之以誑此吾所以悲也王乃使玉人理其璞而得寶焉遂命曰和氏之璧　今は血の淚の瀧つせとおちて流るれは白川と云は君かなからへて世にありしまでの名

也とよめり

堀川のおほきおほいまうちきみ身まかりにける時に

ふか草山にをさめてけるのちに讀ける

僧都勝延（俗姓紀氏承均兄也）

堀川の亭は昭宣公の宅なる故に堀川太政大臣と云寬平三年正月甍五十六源氏藤のうら葉に三月廿日大殿の大宮の御忌日にて極樂寺にまうて給へり抄に深草に有て昭宣公建立の所也又抄に代々藤家の墓所也古今に深草の山煙たにたてとよめるも此所なり　今案宇治拾遺に極樂寺は堀川太政大臣兼通公の建給ふと見えたれは源氏物語抄の說誤也云々榮花物語云又こはたといふ所は太政大臣もとつねのおとゝ後の御諱昭宣公也そのおとゝのてんしおかせ給ひし所也藤氏の御墓とおほしおきてたりける所にとのゝおまへ（道長公也）わかくおはしましける時故殿の御供におはしましておほしけるやうわかせんそよりはしめて玄たしき事をわかすいかてみなこれを佛となしたてまつらんとおほしける云々御堂殿始めて寺を建給ひて淨妙寺と名付らる其願文大江匡衡かけり本朝文粹に載す心は榮花物語に同し宣昭公はたゝ墓所を點し定られたる計にて寺は御堂殿始て建らる宇治殿の子にて小式部か腹なる本幡僧正靜圓といひしも淨妙寺に住れける歟

うつせみはからを見つゝもなくさめつふかくさの山煙たにたて

僧正遍昭の集に此歌をのするにふか草の山にをさめたてまつりしを思ひまゐらせむ心の程は思ひやるへしとて下句煙たにたて深草の山と有　六帖に下句又玄かり遍昭の集は信すへからす詞書に深草の山にをさめける後といひたれは土葬にしたりと見えたりよりて歌の心はうつせみははかなきものなれと殘れるからを見つゝもなくさむるを人のからは埋みかくせはせめて火葬にして煙をたにたてよ見てたくさまんと也又案に土葬火葬をいはすをさむるといふへけれは人はからををのきさねは煙たに今玄はしたてよとよめるにや煙たにたて深草の山こそたけ高く心こもりておほゆるを今のことくのせたるは誠をさきとしてつくろはぬをよしとせる成へし

かむつけのみねを

崇神紀曰以豐城命令治東是上毛野君下毛野君之始祖也三代實錄第七云貞觀五年十月廿一日庚辰天皇宴太政大臣於內殿以賀滿六十之齡太政大臣家令從五位下難波朝臣綾麿菅野朝臣弟門並授從五位上從五位下上毛野朝臣滋子正五位下慶賀之餘歡恩莽及餘家人也　此家人といふ中に又上毛野氏の女あれは峰雄も家人なる事知るへし

ふか草の野へのさくらし心あらは今年はかりはすみ染にさけ

なき人を今をさむる深草の野へなれは櫻も心あらは人の服衣を着る此春はかりは墨染にさけと悲しみの切なる心よりよめる也或抄にさくらの同し色なるをみてなといへるは誤也右の歌と同しく正月の歌也半康賴入道惟昭か作れる寶物集第二云深草の御門かくれさせ給ひけれは良岑宗貞といふ藏人頭成ける人やかて法師になりて云々又上毛野岑雄といふ者あり御別を歎けるか年來見馴たる櫻の下にて讀る「深草の野への櫻し心あらは此春はかり墨染にさけ草木心なしと云とも物の哀はしれはこそ其春は墨染にさけると也今に深草の墨染櫻とて有とかけり此集にたかへはおほつかなし　拾遺に朱雀院の御四十九日の法事にかの院の池の面に霧のたちわたりて侍りけるを見て權中納言敦忠「君なくて立朝霧は藤衣池さへきるそかなしかりける

藤原の敏行朝臣の身まかりにける時によみてかの家につかはしける　　きのとものり

拾芥抄に延喜七年卒と見えたり後撰にやまひし侍りて近江の關寺にこもりて侍けるにまへの道より閑院のみこいし山にまうてけるをたゝ今なん行すきぬると人の告侍りけれはおひてつかはしけるとしゆきの朝臣「逢坂のゆふつけになく鳥の音を聞とかめすそ行過にける　此たひの事にや

ねてもみゆねても見てけり大かたは空蟬の世そ夢には有ける

六條弁家集には第二句ねても見えけりと有　顯昭の本もさありて注云ねても見ゆとはうるはしき夢なり寢ても見えけりとはうつゝな　生死はゆめなれは寢ねとも見ゆる也　唯識論文云未得眞覺恒處夢中故佛說爲生死長夜

あひしれりける人の身まかりにけれはよめる

きのつらゆき

夢とこそいふへかりけれ世中に現有物と思ひける哉
此歌拾遺集にふたゝひ載たり六帖には腰句世中をと有思ひける哉とは是にうちおとろきてこしかたの心をはかなむ也

みふのたゝみね

あひしれりける人の身まかりにける時によめる
家集には世中常ならす心うかりし比と有

ぬるかうちに見るをのみやは夢といはんはかなき世をもうつゝとはみす
六帖には腰句夢といふと有

あねの身まかりにけるときによめる
家集にはあひしりたる人のすまひのつかひにと遠き國にくたるにと有

瀬をせけは淵と成てもよとみけり別れをとむるゑからみそなき
家集には第二句淵と成つゝと有萬葉第二に明日香皇女身まかり給ひける時に人丸一あすか川ゑからみ渡しせかませはなかるゝ水ものとかにあらましは藤原のたゝふさかむかしあひしりて侍ける人の身まかりける時にとふらひにつかはすとてよめる

閑院宗于女

さきたゝぬくいのやちたひ悲しきはなかるゝ水のかへりこぬ也
さきたゝぬくいは　左傳云若不レ早圖後若噬レ臍こと

わさにも後悔さきにたゝすといへりやちたひは八千度也くゆる度のいたりて多き也八千度もかなしく思ひてさきたゝぬくやみするはたゝ流るゝ水のかへりこぬに同しと也流るゝ水のかへりこぬとは長き別れをは水のかへらぬにたとふる也論語云子在川上曰逝者如斯夫不捨晝夜　陸士衡歎逝賦云悲夫川閲水以成川水滔々而日度世閲人而爲世人冉々而行暮　日本紀第十九云豈圖一旦眇然昇遐與水無レ歸即ニ安玄室ニ萬葉第十五挽歌略「ゆく水のかへらぬことく吹風の見えぬかことくあともなき世の人にして云々

きのとものりか身まかりにける時よめる
是は集成て後に加へ入たる歌也次の歌も同し或抄にはとものり此集秋部までの撰者也といひ或抄には集をはらぬに失にける時よめりといへる共に誤

也其故は泉大將四十賀は躬恒集に延喜十四年といへるに友則の歌あれは也

つらゆき

あすしらぬ我身と思へと暮ぬまのけふは人こそかなしかりけれ

拾遺にふたゝひ載らる家集幷六帖には第二句命なれともと有又家集にはかなしかりけれを哀なりけれと有

たゝみね

時しもあれ秋やは人のわかるへき有るを見るたに戀しき物を

萬葉第十七に家持をとうと書持か身まかりける時の長歌に「なにしかも時しはあらんをはたすゝきほに出る秋のはきの花にほへるやとを云々　同十九挽歌「なにしかも時しはあらんをまそかゝみ見れともあかす玉のをのをしきさかりに云々拾遺「時しもあれ秋しも人の別るれはいとゝ袂そ露けかりける「時しもあれ秋やは人に別るへきさるは夜寒になれる比しも「思ふとちあるたに秋は悲しきに草のかれ〳〵なるそ侘しき

はゝかおもひにてよめる　凡河内みつね

神無月時雨にぬるゝもみち葉はたゝわひ人の袂なりけり

拾遺に冬おやのさうにあひて侍ける法師のもとにつかはしけるみつね「紅葉はや袂成らん神無月しくるゝことに色のまされる・是も今の歌に似たりやかてこれにやともに家集には見えすわひ人とは常には世に有わひ人をのみいへと萬葉第九葦屋處女墓の歌に「この道を行人ことにゆきよりていたちなけかひわひ人はねにもなきつゝといへるわひ人に惑人とかけりかなしひにまとへるをいへり後撰秋「から衣たつたの山のもみちはゝ物思ふ人の袂なりけり

ちゝかおもひにてよめる　たゝみね

藤衣はつるゝ糸は侘人のなみたの玉のをとそ成ける

拾遺にふたゝひ入れるには服ぬきて侍るとて讀人しらすとて腰句君こふる尾句をとや成らんとあり貫之集には腰句君こふるとあり不審の事なり　兼輔集「藤衣うきを限にはつれつゝ涙の玉をぬきてかしける

おもひに侍ける年の秋山てらへまかりける道にてよめる　　つらゆき
朝露のおくての山田かり初にうき世の中を思ひぬるかな
朝露はおくてとつゝけておくての山田はかり初とつゝけんためなから道にてみる物に付てよめり然れは朝露にもはかなき心こもるへし
おもひに侍ける人をとふらひまかりてよめる
たゝみね
墨染ノ君か袂は雲なれやたえす涙のあめとのみふる
拾遺集に題　らすよみ人しらす「墨染の衣の袖は雲なれやなみたの雨の絶す降らん今の歌にや又こと歌のおのつから叶へる歟六帖貫之「藤衣おりきる糸は水なれやぬれはまされとかはくまもなし」
女のおやの思ひにて山てらに侍けるをある人のとふらひつかはせりけれは返事によめる　読人しらす
足引の山邊に今はすみ染の衣の袖のひる時もなし
兼輔集に親のおもひにて山寺にこもれるにいつくにてと人の尋ねたりける返事にとて此歌のはての句ひるよしもなしと有兼輔集おほつかなけれとそれによらは女のおやの思ひにてはおやの思ひにて女のといふにはあらてしうと或はしうとめのために山寺にこもる心にやけにも山寺は女のこもるへき所にもあらすや墨染を住初にいひなせり山寺にすみ初て服衣をきたれは萬引かへてさなから法師のやうにていとゝなけきのまさりて衣の袖もひるときなしといへる心なり拾遺抄「心にもあらてうき世にすみ染の衣の袖のぬれぬ日そなき
諒闇の年池のほとりの花を見てよめる
僞書云諒闇三年不言王宅憂亮陰三祀既免喪其惟弗言云々禮記喪服四制云書曰高宗諒闇三年不言善之也　諒闇はまことにもたすといふ心日本紀の履中紀にはみとせの思ひとよめり嘉祥三年三月廿一日に仁明天皇崩し給ひけれは其後よまれける成へし此巻富人よりはしめて中に貴賤をましへたるは凶事の故歟
たかむらの朝臣
水の面にしつく花の色さやかにも君かみかけのおもほゆるかな
顯注に水のおもにしつく花の色とは沈むといふな

りされは普通の本にはしつむとかけり沈といふはうつるといふ心也水のおもにうつれる花の色のやうにさやかに見えておほん顔のおほゆるとよめり萬葉に「藤なみのかけなる海のそこ淸みしつく石をも玉とそ我みる　催馬樂云かつらきの寺のまへなるやとよらの寺の西なるやえのは井にしら玉しつくやましらたましつくや密勘云しつくといふ詞心はさまてたかひ侍らすおさへて沈とは申にくゝや沈は底へ入ひたるは水に入たりたとへはひたれるやうにて水なみにあらはれゆられてかくれ顯はるゝやうにするをしつくといふ又そこよりさき出たらん石も波にあらはれてゆらるゝやうにはつれて見えむをいふへしとそ申されし此ひたる證歌にも是は叶て可侍　今案萬葉第七水底爾沈白玉誰故心盡而吾不念爾　此沈の字古點はしつむとなりけるを仙覺證據を出してしつくと改められたり　濱成歌經標式云如藤原宮内卿奉贈新田部親王歌曰美那曽己幣句一旨都倶旨羅他麻句二他我由恵爾句三己己呂都倶旨氐句四和我母波那倶爾句五又顯注の引れたる歌にも亦濱成式を引て證せられたれはしつくはしつむといふ詞の古語なり篁のころまてもよめる成へし萬七「わたのそこしつく白玉風吹て海はあるともとらすはやまし同十七「あふみの海しつく白玉しらすして戀せしよりは今そまされる　此二首のしつくといふにも沈といふ字をかけりおほよそ浮沈をわかちていふは勿論なれと又しつむとは水にうくをも沈をもすへていふ詞なり拾遺集「水底にやとる月さへうかへるを深きや何のみくつ成らん同「水の面に月のしつむを見さりせは我ひとりとや思ひはてまし同「櫻花そこなる影そをしまるゝ沈める人の春とおもへは詞花集「難波江の蘆間にやとる月みれは我身ひとつもしつまさりけりこれらの歌月花の影の水にうつるは浮ふにてこそ有を沈むとよめるにて思ふへししむとくと同韻の字なれは通していふにや

ふかくさのみかとの御國忌の日よめる

延喜式第二十一治部式云三月廿一日忌東寺凡國忌日各請當寺僧一百口轉經禮佛輔丞錄各一人玄蕃寮五位一人六位已下官二人皆詣寺以供事事見式部式凡國忌者治部省預錄其日幷省玄蕃應行事官人名申官

前一日少納言奏聞諸司就寺供齋會事（事見式部治部等式）但東西兩寺參議以上及辨外記史各一人太政官史生官掌各一人參

文屋のやすひて

草ふかき霞の谷にかけかくしてる日のくれし今日にやはあらぬ

ふかくさのといはすして其心を草深きとかくしていへるは深き霞の谷とつゝけむとて也霞の谷とは折ふし三月にて霞のふかきをいへり六帖に「淺香山霞の谷し深けれは我物おもひははるゝよもなしとよめり今深草に霞の谷と聞ゆる所あれとそれは今の歌にて後の人の名つけたりとしるへきは六帖の歌その證也崩御を昇遐といふを昇霞ともかくは和訓のかすみも又かすかの心なれば和漢ともに義通せりされは崩御の尊骸を深草にをさめたてまつるを霞の谷にかけかくしとはいへり　照日のくれしけふにはあらぬとはおほやけをは人の國にも日に准ふるをことに此國は日の神のみすゑなれはもはら准らへ奉る也照日のくれしとはてる日の俄にかきくらす也おのつから夕日になりてくるゝにはあらすまた御世の盛と思ふ程に俄にかくれさせ給へる心也萬葉に草壁太子のかくれさせ給へる時舍人ともの歌の中に朝くもり日の入ゆけはとよめるかことしけふにやはあらぬとは其日の中の歎き我心のかなしさを今さらに思ひ出てかなしひ奉る心なり

深草のみかとの御時に藏人の頭にてよるひるなれつかうまつりけるを諒闇に成にけれはさらに世にもましらすしてひえの山にのほりてかしらおろしてけりそのまたのとしみな人御ふくぬきてあるはかうふりたまはりなとよろこひけるを聞てよめる

僧正遍昭

此事猶大和物語に委し藏人の頭は清少納言にめてたきもの丶中に藏人を入ていはくうへの近くつかはせたまふさまなと見るはねたくさへこそおほゆれ御文かゝせ給へは御すゝりの墨すり御うちはなとまゐり給へ云々　かしらおろしては文德實錄第一云嘉祥三年三月丙午左近衛少將從五位上良岑朝臣宗貞出家爲僧宗貞先皇之寵臣也先皇崩後哀慕無已自歸佛理以求報恩時人愍焉

みな人は花の衣に成ぬなり苔の袂よかはきたにせよ
かはきたにせよといへるあはれふかし篁の歌に次
て載けれとも花の衣といふはわたくしの心を謂た
れは康秀か歌にはつきなるへし
かはらのおほいまうちきみの身まかりての秋かの家
のほとりをまかりけるにもみちの色またふかくもな
らさりけるを見てかの家によみて入れたりけり
拾芥抄云河原院六條坊門南萬里小路東八町云々融
大臣家後寛平法皇御所本四町京極西號東六條院
融公寛平七年八月廿五日七十三歳にて薨せらる此
歌はその秋の事也紅葉の色また深くもならさりける
を見てとは唐趙蝦汾陽王の舊宅を經し時に今日獨
經歌舞地古槐疎冷夕陽多と作れるに似たり本朝文
粹第一源順河原院賦然猶山貌礨嵩岸勢縮海云々強
呉滅兮有荊棘姑蘇臺之露瀼々暴秦衰兮無虎狼咸陽
宮之烟片々云々同十四宇多院爲河原左相府沒後修
諷誦文曰 紀在昌作 去月廿五日大臣亡靈忽託宮人申云我
在世間殺生爲事依其業報墮於惡趣一日之中三度
受苦劒林置身鐵杵碎骨楚毒至痛不可具言唯其咨椋
之餘拷案之隙因昔日之愛執時々來息此院惣爲侍臣
不擧惡眼況於實體豈有邪心乎云々　此風誦の文は
延長四年七月四日也

近院の右のおほいまうちきみ

うちつけにさひしくもあるか紅葉はもぬしなき宿は
色なかりけり

あるかはあるかな也もみち葉といへるにてよろつ
の事はかはらすしてさなからあれと皆かはりたる
やうにはおもはるゝ心見えたり色なかりけりはは
えなき心也ことかきはまたうす紅葉の此の事なる
をかくよみなし給へり

藤原のたかつねの朝臣の身まかりての又の年の夏時
鳥のなきけるを聞てよめる　つらゆき

或物云寛平五年五月十九日卒と有考ふへし

家集題不知

ほとゝきす今朝鳴く聲に驚けは君に別れし時にそ有
ける

今朝なく聲に驚けはとはたかつね朝臣の身まから
れしも四月にやこれも初雁の音におとろくなとい
はむにはたかひてほとゝきすはしての山よりくる
といへは其心こもるへし　萬葉 やまとにはなきて
かへらん時鳥なかなくことになき人おもほゆ

櫻をうゑて有けるに漸く花さきぬへき時にかの植ける人身まかりにけれはその花を見てよめる

きのもちゆき茂行

花よりも人こそあたに成にけれいつれをさきに戀むとかみし

此歌伊勢物語には業平のうたとせり　人はかなきものといへと老てもなからふを花は春をかきれは花をこそさきに戀ひんとは思ひしに思ひの外に花よりさきに人をこふるなんあはれなるとよめり　朗詠集「朝貌を何はかなしと思ふらん人をも花はさこそ見るらめ

あるし身まかりにける人の家の梅花を見てよめる

つらゆき

家集にはあるしうせたる家に梅花をみてよめると有は歌によりて思ふにかきあやまてる成へし

色もかも昔のこさに匂へとも植けむ人の影そ戀しき

六帖にはむかしにこさすと有　顯昭本にもむかしにこさすと有て注に云むかしにこさすとは物をほむるには昔にこへたりといふに昔も只同しやうに匂へとうゑけむ人は戀しとよめり　又常の本には昔のこさに匂へともと有それも昔のこき色と同しこさに匂へとももとよみたれは同し事也又貫之集には昔のこさす匂へともと侍り是は昔の色をのこさすつくしておなしやうに匂へとゝ讀り三樣にとりては此昔のこさすはよくおほゆ昔にこさすはあなかちにむかしにこすへきやうやは有へきさし過ておほゆ昔のこさににほへともはこさにと取わきたるもこやけひたり色も香もといひて昔のこさすはおほきらかにそおほえ侍る　密勘云此歌むかしのこさを用ゆ色香といひてはこさとてやかなひ侍らん見及本はつらゆき集もむかしのこさにとかきて侍る也それも古き人々の手跡也勿論とあり今案かけとは木陰にその人をより所にせし事をそへ又面かけをもそへて讀る成へし近院殿の歌よりこなた五首は秋夏春とさかさまにつゝけ春の中にも櫻より梅を後におけるは凶事故に常に變する心にや　六帖「年毎に春は櫻に逢くれと植けむ人の影そ戀しき

河原の左のおほいまうちきみの身まかりて後かの家にまかりて有けるにしほかまといふ所のさまをつくれりけるをみてよめる

菅家文草に大臣薨せられし父の年かはらの院やけたるよし見えたり

君まさて煙たえにし鹽かまのうらさひしくも見え渡るかな

かはらの院のさまは本朝文粋に出たり源順の河原院賦いせ物語になりひらの爰にて鹽かまにいつか來にけむとよまれたる歌かける一段をもてそのあれての後のさまを思ひやるへし　顯注に池をほり水をたゝへてうしほ毎月に三十石まて入て海底の魚貝等をすましめたりと有うらさひしくは浦に裏をそへたり裏は心なり

藤はらのとしもとの朝臣の右近の中將にて住侍りけるさうしの身まかりてのち人もすますなりにけるに秋の夜ふけてものよりまうてきけるついてに見入けれはもとありしせんさいいとしけくあれたりけるをみてはやくそこに侍けれはむかしを思ひやりて讀ける

みはるのありすけ

右近中將利基は內大臣高藤公兒中納言兼輔父也さうしは曹司也

君かうゑし一むらすゝき虫の音のしけき野へとも成にける哉

虫の音はしけき野といふ枕詞かてらつゝけたり西行上人「しけき野をいく村に分なして更にむかしをしのひかへさんとは此うたにてよまれたる也

これたかのみこのちゝの侍けむ時によめりけむ歌共とこひけれはかきておくりけるおくによみて書りける

とものり

或抄にとものりか父は有常也とかけり物に見えたる事にや有常は惟高のみこにてしたしく御伴なとせられけれはけにさも有へくおほえたり

ことならは言の葉さへも消なゝん見れは涙のたきまさりけり

ことのはさへもとは父か身の消失たれはいへる也

題しらす　よみ人しらす

なき人の宿にかよはゝ時鳥かけてねにのみなくとつけなん

顯注に伊勢「しての山こえてやきつる時鳥戀しき人のうへかたらなん此歌を引ていはくされはなき

人のやと丶はよみの國と思はん事ひかことならすや　密勘なき人の宿とは我身に居たれとうせにし人の後家なれはなき人の宿にかよひありかはといひてしての山の鳥なれはかの山に行て音にのみなくと告よと讀たるとならひて侍る也これはいつれもたかふまし今按なき人の宿にかよは丶といひてなくと告なんといへるはしての山の方をなき人の宿と讀る歌と見ゆしての山より此宿にかよは丶又しての山に行て音にのみなくと告よとはすこしむつかしくや定家卿も兩義を捨給はねは初の義に心引れ侍り夏歌に山時鳥ことつてんとよめるに似たり　源氏蜻蛉におまへ近き橘の香のなつかしきに郭公の二聲はかり鳴てわたる宿にかよは丶とひとりこち給ふといへり是彼浮舟の君のうせて後薫大將の三條宮にてかくすし給へり三條宮に浮舟は居給はされはこの宿にといふはしての山の方をさしていへり證とすへしかけてとはなき人を言の葉にも心にもかくる也　或抄に人なき宿の思ひと其人いかにと思ふと二をかけてなりといへるは用へからす萬葉廿元正天皇「時鳥猶もなかなんもとつ人かけつ丶もとなあをねしなくも

あをとはわれを也源氏幻に紫の上失給ひたる次の年の夏夕霧大將「時鳥君につてなん古郷の花たちはなはいまそさかりと　榮花物かたりにひめみやみ丶すかきにせさせ給へる是いかてあての御もとにたてまつらんとのたまはするにつけてもほと丶きすにやつけましとあはれに御らんせらるこれ三條院かくれさせ給ひて後の事也ほと丶きすにやつけましとは此歌にてかきたれは源氏なとに心同し

誰見よと花さけるらん白雲のたつのと早く成にし物を

萬葉には野に雲をよめる歌數しらすあやしむへからす 六帖「野へなるを人もなしとて我宿に峯の白雲おりやゐるらん「たちねとやいひにやらまし白雲のとふこともなく宿にゐるらん

式部卿のみこ閑院の五のみこにすみ渡りけるをいくはくもあらて女みこの身まかりにける時にかのみこのすみける帳のかたひらのひもに文をゆひつけたりけるを取て見れはむかしの手にて此歌をなんかき付たりける

式部卿のみこは敦慶也二品式部卿宇多皇子母贈太后藤原胤子延喜帝同母弟號玉光宮好色無双美男閑院五内親王未考　帳のかたひら　日本紀云帷帳カタヒラカシロ文選潘安仁悼亡詩云望盧思其人入室想所歷幃屏無髣髴翰墨有餘跡流芳未レ及レ歇遺桂猶在壁帳恍如或存周惶忡驚惕　又云茵幬張ニ故房一後拾遺に一條院の御時皇后宮かくれ給て御帳のかたひらのひもにむすひ付られたる文を見つけたれは内にも御らんせさせよとおほしかほに歌みつかき付られたりける中に云々

かすかすに我をわすれぬ物ならは山の霞をあはれとは見よ

我なからん後もわすれ給はぬものならはなきからを納むる山の霞を見てもなつかしみて哀と見おこせ給へと成へし萬葉三家持「さほ山にたな引霞見ることに妹を思ひ出てなかぬ日はなし小野集「はかなくて雲と成ぬる物ならは霞まん空もあはれとは見よ有助か歌よりこなた又秋夏春と次第して春の中にも花をさきに霞を後における事上に云るかことし

をとこの人のくにゝくたりけるまに女にはかにやまひをしていとよはく成にける時よみおきて身まかりにける

人の國とは他國とかけり

よみひとしらす

聲をたに聞かて別るゝたまよりもなきとこにねん君そ悲しき

六帖には腰句我よりはと有聲はをとこの聲たまは我玉しゐ也人に逢見る事をはおきてほのかに聲をたにきかて別れ行我玉しゐよりも猶かへりきてわかなきとこに獨ねん君そ悲しきといへるそのをとこ歸りての心いかなりけん

やよひにわつらひ侍りける秋心ちのたのもしけなくおほえけれはよみてひとのもとにつかはしける

大江千里

もみち葉を風にまかせて見るよりもはかなき物は命成けり

萬葉八「かみな月しくれにあへる紅葉はのふかは散なん風のまにまに

身まかりなんとてよめる　藤原のこれもと

露をなとあたなる物と思ひけん我身も草におかぬは

かりを

拾遺集にやまひして人おほくなくなりし年なき人を野山のやふなとにおきて侍を見てすけきよ一皆

人の命を露にたとふるは草村ことにおけは成けり

やまひしてよはく成にける時よめる

なりひらの朝臣

大和物語伊勢物語 終にゆく道とはかねて聞しかときのふけふとは思はさりしを

人の爲によきをしへの歌なり

かひのくにゝあひしりて侍ける人のとふらはんとてまかりけるみちなかにてにはかにやまひをしていま〳〵と成にけれはよみて京にもてまかりてはゝに見せよといひて人につけ侍りける歌

日本紀に逢病とかきてやまひしてとよめり大和物語に右のなりひらの歌の前の詞にしなんとする事いま〳〵となりてよみたりけるといへり　萬葉第十六長歌に村肝の心くたけてしなん命にはかになりぬ云々　此滋春の母は右大臣良相のむすめ染殿内侍也此歌大和物語にも有是より先かなたこなたさすらへられしさまいとあはれなり

在原しけはる

風躰抄 かりそめの行かひちとそ思ひこし今はかきりのかとて成けり

ゆきかひちとは行きかふみち也それを甲斐の道によせてよめり

# 古今和歌餘材抄卷十八　七十首

## 雜歌上

雜といふ意は序に春夏秋冬にもいらぬくさ〳〵の歌といへるこれなり種々とかきてもまた雜の一字をもくさ〳〵とよめり四季にかきらす旅戀なとの別に部をたてたる外を雜といふ其中に事にひかれて諸部にわたる事はあるへし或抄に雜歌に四季戀雜旅行述懷懷舊みなましはるをいふなりとは此序にもそむけり用ゆへからす

題しらす　よみ人しらす

我うへに露そおくなる天河とわたる舟のかゐの雫か

此歌伊勢ものかたりには業平の物思ひに綴入けるときおもてに水そゝきなとしていきいてゝよめる歌也かれはつくりていへるか此集たしかなるへし萬葉第十に「この夕ふりくる雨はひこほしのとわたる船のかいのちるかも　かいのちるとはかいのしつくの散なりかいは棹の字なりさをといふも同し此歌にて讀る歟かいのしつくとは大かたの露にはあらしと思ひよらぬ心をよめり案にこの歌のつゝき數首はよろこひ有歌の類なるに其初にあれは七夕に思ひかけす内の酒宴なとにめしあつけられて祿なとたまはれる人のその恩露をかくは寄たるにや思ふとちまとゐせる夜といふ歌のつゝきたるにも心を着へし　後撰「我袖に露そおくなる天の川雲のしからみなみやこすらん

思ふとちまとゐせるよはから錦たゝまくをしき物にそ有ける

まとゐは圓居也世俗にくるま座に居るといふこれなりからにしきたゝまくをしきとは左傳云子有二美錦一不レ令三人學二製一焉史記云片錦雖微猶難レ學レ製これらの心はよき錦をはいまた物たちならはぬ人に初めてたゝすへからすといふなりされはこれよりはまるにや錦のをしく裁うきといふにまとゐの所をたちさりうきといふをよするなり　萬葉「しなさかるこしにいつとせすみ〳〵て立別れまく惜き宵かも　後撰「からにしきをしき我名は立はてゝいかにせよとか人のつれなき　兵部卿元良親王歌合別夫木三十九「春のよのあかぬ別れの曉はちゝへの錦をたつにまされる　みつね集「君みては有ぬへしやと心みに裁まくも

うきからにしきかないせ集「あけぬともたゝしとそ思ふから錦人の心にかたなならねは 元輔集「花の陰にしきをしける今宵哉たゝまくをしき庭とみへつゝ うつほ櫻上「すむ人もやともあかねはまとゐして世をつくすへき心地こそすれ

うれしきを何につゝまんから衣袂ゆたかにたてといはましを

寛の字をゆたかとよめりひろくおほきなる心なりいみしと思ふ心を袖につゝむ事なれはうれしきことをもそてにつゝむといふなり朗詠集に「うれしさを昔は袖につゝみけりこよひは身にもあまりぬる哉

限なき君か爲にと折花は時しもわかぬものにそ有ける

或人の云此歌はさきのおほいまうちきみの也

六帖にはかたみの歌にかきりなき君かかたみとゝ載たり伊勢物語には昔おほいまうち君と聞ゆるおはしけりつかうまつるをとこなかつきはかりに梅のつくりえたにきしをつけてたてまつるとて「我たのむ君か爲にと折花は時しもわかぬ物にそ有ける　とよみてたてまつりたりけれはいとかしこくおかしかりたまひてつかひに祿たまへりけりと有ときしもといふにきしを云り今此集にはその心なし題しらすと有作者も忠仁公也みいのちのかきりなき君かためにとおもひて折はなゝれは花さへ時しもわかぬものにそ有と也作花なとに付て奉り給とての歌にやもしはかへりさきなとのしたる花に付給へる歟いとかしこくおかしかり給ひてとあれは忠仁公の集などにかき付ておきたまへるを或人忠仁公の御歌なりと聞つたへたるにより今かくは載たる歟

紫のひともとゆへにむさし野の草はみなから哀とそみる

六帖には下句草はなへてもなつかしきかなと有紫は色のうるはしき草武藏野は限もなき廣く紫も多き所なれは思ふ人ひとりか故に末々迄もむつましといふ事をたとへてよめる也みなからはみななから也此歌より事起りて紫の一もと故と讀又紫のゆかりともよむ也後撰に「むさしのは袖ひくはかり分しかとわか紫のたつねわひにき 貫之「女郎花に

ほへる秋のむさし野は常よりも猶むつましき哉
拾遺物名さくなんさ「紫の色には咲なむさしのゝ草のゆかり
と人もこそ見れ小町集「むさしのゝむかひの岡のくさ
なれはねをたつねても哀とそ思ふみつね集「女郎花一も
とゆへに秋のゝの千種なからに花をおもふかな
六帖「しらねともむさしのといへはかこたれぬよ
しやさこそは紫のゆへ

女のおとうとをもて侍ける人にうへのきぬを送とて
よみてやりける　　なりひらの朝臣
女はなりひらの女也おとうとは妹也それを妻にも
てる人なりうへのきぬは袍の字をよめり和名集云
楊氏漢語抄云袍蒲交反和名字倍乃岐沼一云朝服ミカトコロモ著襴之袷衣也しは
すのつこもりにはるとてやりたるよし伊勢物かた
りに哀にかけり
むらさきの色こき時はめもはるに野なる草木そ分れ
さりける
六帖には野なる草木ぞ哀なりけりと有伊勢物語に
むさしのゝ心成へしと有右の歌を本歌にて讀れた
り色こき時はとは寵愛の盛なるときは也わかれさ
りけるとはいつれと思ひわかす愚におもはぬ心也

大納言ふちはらのくにつねの朝臣宰相より中納言に
成ける時に染ぬうへのきぬのあやをおくるとてよめ
る
或注云寛平六年五月五日任中納言従三位
近衛院の右のおほいまうちきみ
色なしと人やみるらん昔よりふかき心にそめてしも
のを
色なしと人やみるらんとは日本紀に無色とかきて
見にくしとよめれはそめぬあやにつけてみにくし
とや見るらんといふ心をそへたりふかき心にそめ
てしものをとはましはりのふかくこゝろにそめて
思ひこしと事のたよりに心のほとを告しらする也
上に色もなきこゝろを人にそめしよりと有し心也

いそのかみのなむまつか宮つかへもせていその上と
いふ所にこもり侍けるを俄にかうふりたまはれりけ
れはよろこひいひつかはすとてよみてつかはしける
ふるのいまみち
三代實錄第四十九云仁和二年正月七日授ニ従七位
上石上朝臣並松従五位下一　石上ハ物部氏なり遠
祖は饒速日命なり石上に有て布留農神寶をもつか

さとる後に居所につきて石上榎井兩氏となりて大嘗會のとき神楯をたつる事を此兩氏つかさとれり石上麿朝臣は持統文武兩朝の大臣也

ひのひかりやふしわかねはいそのかみふりにし里に花も咲けり

六帖にはふりにしさともはなさきにけりとあり日のひかりはみかとの恩光にたとふやふは和名集云呂氏春秋云澤無水曰藪蘇后反和名也不源氏蓬生にさるやふはらにとしへ給ふ人を大將殿もやむことなくしもおもひきこえ給はしなとえんしうけひけり　後撰にみやつかへしける女のいそのかみといふ所に住て京のともたちのもとにつかはしけるよみ人しらす「神さひてふりにし里に住む人は都ににほふ花をたにみす

二條のきさきのまた東宮のみやすむところと申ける時に大はら野にまうて給ひける日よめる

なりひらの朝臣

江次第四十四云大原野行啓起五條后順子以二藤氏勸學院衆一爲二車副一二條后高子以姪乘レ車後在五中將書和歌與二二條后一歌略レ之人疑先是若有二密事一歟と云りしかるに三代實錄云貞觀三年二月廿五日己巳皇太后向二大原野神社一奉幣御牛車以二藤原氏六位已下一爲二御車從者一云々今東宮御息所とあるにあはすれは年數相違せる故に江次第は誤也大原野は閑院左大臣冬嗣春日社を勸請して藤氏の后女御等のまうて給ふにたよりあらしめ給ふといへり仁壽元年にはしめて大原野のまつりを行はる

大はらやをしほの山もけふこそは神よのことも思ひいつらめ

六帖には腰句けふしこそとあり　舊事紀曰使天太玉命天兒屋命二神陪二從天忍穗耳尊一以降之時天照太神詔二天兒屋命天太玉命一曰惟爾二神並侍二殿內一善爲二防護一焉東宮は天孫の御裔にて二條后はまた天兒屋命の御裔なれは天照太神のよく守給へと有し神勅を思ひ出給ふらめとなりをしほの山もとは神の御事はいともかしこけれはみかとの御事を俗に內裏といふかことく其社の有所をもてあらはすともいふへし又萬葉にはみわ山みむろ山其外神のます山をはすなはち神といひたれは今も其心也伊勢物語には此歌の後に心にもかなしとや思ひけむ

いかゝおもひけん知らすかしとかき大和物に昔を思し出ておおかしとおほしけれとあれはそのかみ有し事を神代の事とほのめかせる也

五節のまひ姫をみてよめる　よしみねのむねさた

續日本紀第十五云天平十五年五月癸卯宴群臣於內裏皇太子親舞二五節一右大臣橘宿禰諸兄奉詔奏二太上天皇一曰天皇大命爾坐而奏賜久掛母畏伎飛鳥淨見御原宮爾大八洲所知志聖乃天皇命天下乎治賜比平賜比氐所思座久上下乎齊倍和氣氐無レ動靜加爾令レ有爾八禮等樂等二都並氐志平久長久可レ有登隨神母所思坐氐此乃舞乎始賜比造賜比伎等聞食氐與天地共爾絕事無久彌繼爾受賜波利行乎物等之氐皇太子斯王爾學志頂令レ荷氐我皇天皇太前爾貢事乎奏於是太上天皇詔報曰現神御二大八洲一我子天皇乃掛母畏伎天皇朝廷乃始賜比造賜幣留寶國寶等之氐此王乎令供奉賜波天下爾立賜比行賜部流法波可レ絕伎事波無久有家利止見聞喜侍止奉賜等詔太命乎奏又今日行賜布態乎見行波直遊止乃味爾波不在之氐天下人爾君臣祖子乃理乎敎賜比趣賜布止爾有良志止奈母所思須是以敎賜比趣賜比奈何良受被賜持氐不忘不失可有伎表等之氐一二人乎治賜那毛波奈止所思行須等奏賜止詔大命乎奏賜止波久奏因御

製歌曰蘇良美都夜麻止乃久爾波可未可良斯多布度久安流羅之斯能未比美例波又歌曰阿麻豆可未美麻乃彌己止乃登理母知氐許能等與美岐遠伊寸多豆末都流又歌曰夜須美斯志和己於保支美波多比良氣久那何久伊末之氐等與美岐麻都流　河海抄云本朝月令五節舞者淨御原天皇所製也傳曰天皇御吉野宮日暮彈琴有興俄人列々前岫之下雲氣忽起疑如高唐神女髣髴而舞擧袖五變故謂之五節本朝文粹第二三清行延喜拾四年四月上二十二條意見封事一中云請減二五節妓員一事右臣伏見朝家五節舞妓大嘗會時五人即皆預二叙位一其後年々新嘗會四人無下預二叙位一之例上由是至二于大嘗會之時一權貴之家競進二其女一以充此妓尋常之年人皆辭遁可レ謂二神事一爰有新制令二諸公卿及女御輪轉進上レ之其費甚多不レ能二堪忍一伏案故實弘仁承和二代尤好內寵故遍令諸家擇進此妓即以爲二選納之便一也諸家僥二倖天恩不レ顧二糜費一盡財破產競以貢進方今聖朝修其帷薄立其防閑此等妓女舞了歸レ家無レ預二燕寢一然則此妓數人遂有何用重案舊記昔者神女來舞未必有定數四五人伏望撰良家女子未嫁者二人置爲五節妓其時服月料稍令僥

給節日衣裳亦賜公物若貞節不嫁經十ヶ年者即預ニ女叙ニ聽令出嫁若願ニ留侍ニ者預ニ之於藏人之列ニ即撰ニ置其替人ニ亦如ニ前年ニ古事記下云雄略天皇段天皇幸ニ行吉野宮ニ之時吉野川之濱有ニ童女ニ其形姿美麗故婚是童女而還ニ座於宮ニ後更亦幸行吉野之時留其童女之所ニ過ニ於其家ニ立ニ大御呉床（アグラニ）而座ニ其御呉床ニ彈ニ御琴ニ令レ爲レ舞ニ其孃子ニ爾因ニ其孃子之好舞ニ作ニ御歌ニ其歌曰阿具羅韋能加微能美弖母知比久（アクライノカミノミコモチヒク）許登爾麻比須流袁美那登許余爾母加毛　今續日本紀と河海抄に本朝月令をひけるを引合て思ふに續日本紀はたゝ天武天皇上下を調てやはらけむ爲に作らせ給ひて吉野にて天女のまひけるよりおこれるよしは見えす是正說なるへし孝德天皇いまた皇太子にして五月にみつからまはせ給へはその比まてはさたまれる事なかりける歟源氏物語抄に十一月丑日舞妓參也もし丑三つあれは中のうしに參也二有は後の丑也但前のうしに例もこれ有て此日を祭の日と云則有帳臺出御寅日御前試卯日童女御覽辰日節會舞姬進舞辰日は五節の終の節會の日也天武天皇六年十一月五節舞姬はしまるといへりをとめともをとめさひすもから玉をたもとにまきてをとめさひすも此歌を天女のうたひたるともまた天武天皇のよませ給へるともいへり爰に遍昭の俗名をかけるは在俗の時よまれたる上に後を始にめくらして遍昭と云ははなはた其事似つかぬ故なり

天津風雲の通路吹とちよ乙女の姿しはしとゝめむ

風は天よりおこるものなれは天津かせと云津は例のことはなり雲のかよひちも空の名也それを天女のおりのほる道にかけたり只今まひはてゝ天上にかへらんとするを人のちからにてとゝむへき樣なけれは風にあつらへいふ心也雲をは風のこゝろにまかする故也雲のかよひち吹とちたらは天上への道をうしなひて今しはし下地にとゝまるへししはしかほとも猶其姿をみんといへる也もとより風雲共にうきたるものなれは久しく吹とつへきものにはあらすよりて玄はしとよめる詞よくかなへり後撰に五節のまひ姬にてもし召とゝめらるゝことやあると思ひ侍りけるをさもあらさりけれは「何しくそ天津乙女（うつほ欅上）と成にける雲ちたつぬる人もなき世に「朝ほらけほのかにみれはあかぬ哉中なる乙女

しはしとゝめん
五節のあしたにかんさしのたまの落たりけるを見て
誰かならんととふらひてよめる
かはらの左のおほいまうちきみ
五節のあしたとは五節はてゝのあくるつとめてなり史記滑稽傳云前有墮珥後有遺簪云々
ぬしやたれとへと玄ら玉いはなくにさらはなへてや
哀と思はん
此かさしの白玉のぬしは誰ならんととへと知ずとていはねば然らは誰しとなく有つる乙女のかきりをやあはれとおもはんと也
寛平の御時うへのさふらひに侍けるおのこともかめをもたせてきさいの宮の御かたにおほみきのをろしときこえたてまつりたりけるくら人ともわらひてかめを御まへにもていてゝともかくもいはすなりにけれはつかひのかへりきてさなん有つるといひけれはくら人の中におくりける　としゆきの朝臣
おほみきは日本紀に酒の一字をよめりおろしは史記孝武紀胙餘皆燎之云々　藏人は女藏人なりわらへるはおほみきのおろしをこふをわらふにはあらし瓶のすかたのよくもあらぬ故にや次歌に女とものみてわらひけれはと有もかたちを見てわらへるなれは人と物とことなれはわらふ心同しかるべし
玉たれのこかめやいつらこよろきのいその浪わけおきに出にけり
たまたれのこかめは玉垂の小瓶也かめのうへにぬりてやきつけたる物の玉のやうにさかりたれはいふなり密勘に瓶に玉垂のかた有説あまねく申事なり一説にはたまたれを瓶に用ひす偏に御簾にのみたまたれとよむへしといへり此歌こもしひとつによりてたまたれの鈎とおけると申せと一字をつりとそへん爲にたまたれといはむ事猶髣髴也　瓶にてこそ侍らめ先人は猶みすのことにありなんかめのすかたにくしとそ侍りし　今案萬葉第七第十一に玉垂小簾玉垂之小簀とかけるはたますたれの小すたれなり今の俗鈎簾とかくは後の人のしわさ也用へからすみすのこうをことひともしにいふへきやうなしたとひいふとも此歌によりて何のよせなし風俗のうたに玉たれの小かめを中にするてあるしはもやさかなまきにさかなもとめにこよろきの

いそにわかめかりあけよやといへりこれをふみて讀れたり玉たれのこかめはいつらとゝへはこよろきのいそのなみわけておきに出たらんやうにきさいの宮のおまへにもて出てかへらすとこたへたるよし也これより下三首は誹諧まではなきものゝすこしあされたる心あるをもて次第せりと見えたり

女とものみてわらひけれはよめる　けんせいほうし

かたちのよからぬをわらふなり後撰集にすかたあやしと人のわらひけれはみつね「伊勢の海のつりのうけなるさまなれと深き心そ底にしづめる

かたちこそみ山かくれの朽木なれ心ははなになさはなりなん

莊子云形固可レ使レ如二朽木一

かたゝかへに人の家にまかれりけるときにあるしのきぬきせたりけるをあしたに返すとてよみける

きのとものり

かたゝかへは天一神の方をたかふる也中神或は長神といふ歌にはひとよめくりの神と讀り「君こそは一よめくりの神ときけなと逢事のかたゝかふらん「逢事のかたふたかりて君こすは思ふ心のたかふはかりそ

蟬のはのよるの衣はうすけれとうつりかこくもにほひぬる哉

家集には落句なりにけるかなと有蟬のはの夜の衣とはかのあるしまつしかりけると見えていたりてうすき心なり文選張景陽七命云秋蟬之翼不足擬其薄和名集云唐韻云羅（魯何反此間良 一云蟬翼）うつりかこきは芳心のふかきを添たりまつしきをあはれみて心ある事をほめたり

題しらす　　よみ人しらす

おそく出る月にも有かな足引の山のあなたもをしむへらなり

六帖に雜月にのす又里のうたに上の二句は是にて腰句巳下山のはのあなたのさともをしむ成へしと有同し歌か我心をもておしはかりて山のあなたも人のをしむ故に月のやすらひて出かぬるにやとおもふ心なり六帖にみつね「こゝにまた我あかぬ月を山のはのをちの里にはおそしとや待「夏のよは月こそあかね山の端のあなたの里に住へかりけり是より下九首は月につきてよめるを一類とす

我心なくさめかねつ更しなや姨捨山にてる月を見て

更科信濃國の郡の名也をは捨山は大和物語にはをひかをはを此山に捨て我家にかへりてかの山をなかめやりてよめりと見えたりされと其事によりて後こそ人のをは捨山とは名付め今みつから姨捨山とよまん事心得かたしかれは此歌に付てかける事にてまことは後の人かの山の月をみて其時の事を思ひてよめる成べし顯注に或書を引て此山の始は冠山といへり冠の巾子のやうににたるとかや云々小町「あやしくもなくさめかたき心かな姨捨山の月もみなくにみつね「をは捨の山より外にてる月もなくさめかねつ此ころの空貫之「君か行所ときけは月みつゝ姨捨山そこひしかるへき信明「秋のよの曉方の月みれはをは捨山そおもひやらるゝ

なりひらの朝臣

六帖
大かたは月をもめてしこれそ此つもれは人のおいとなるもの

伊勢物語に昔いとわかきにはあらぬこれかれともたちとも集て月を見てけるか中にひとりとて此歌ありおほよそは月をも今よりはめてしおもへはこれそこのみか月より有明の末まてなかめ〳〵てつもれは人の老となるものなると也月をもめてしと云に花紅葉の類こもれり

月おもしろしとて凡河内躬恒かまうて來りけるによめる　紀貫之

かつみれとうとくも有かな月影のいたらぬ里もあらしと思へは

上に花見かてらにくる人とよめりしことく月面白しとて來る人なれは月かけのいたらぬ里なきことく我のみを友とおもひてもこしと思へはとはれてかつみなからうとくおほゆと月によそへて讀りうとくも有かなと思ふかうへにてうとく思ふ也此集に「時鳥なかなく里のあまた有は猶うとまれぬ思ふ物から「思へとも猶うとまれぬ春霞かゝらぬ山のあらしと思へは貫之集「久かたの月のたよりにくる人はいたらぬ所あらしとそおもふ

池に月のみえけるをよめる

ふたつなき物と思ひしを水底に山の端ならて出る月影

ひともと丶思ひし菊をとよめる歌のたくひ也
拾遺能宣
秋の月浪の底にそ出にけるまつみん山のかひやなからん

題しらす　よみ人しらず

天の河雲の水尾にてはやけれはひかりとゝめす月そなかるゝ

水のふかきすちをみをといへは天の河といふに付て雲のみをといひて月のとゝこほらすはやくなかす也水尾は冬もはやけれは萬葉に「小夜更て堀江こくなるまつら舟梶音高し水尾はやみかも

あかすして月のかくるゝ山もとはあなたおもてそこひしかりける

此山もとゝいへるはにしの山もと也

これたかのみこのかりしけるともにまかりてやどりにかへりてよひとよ酒をのみ物かたりをしけるに十一日の月もかくれなんとしける折にみこゑひて内へいりなんとしけれは讀侍ける　なりひらの朝臣

あかなくにまたきも月のかくるゝか山の端にけていれすも有らなむ

かくるゝかはかくるゝ哉也伊勢物語には紀有常かかへし有土佐日記に今宵月は海にそ入是を見て業平の君の山のはにけて入れすも有なんといふ歌なんおほゆるもし海へにてよまゝしかは波立さへて入すもあらなんとよみてましや云々　六帖に女をはなれてよめる紀とものり「入月をやまのはにけて入すとも人の心をいかゝたのまん「ぬは玉の夜わたる月をとゝめんに西の山へに關も有なん（萬葉第七）

田村のみかとの御時に齋院に侍けるあきらけいこのみこをはゝあやまち有といひて齋院をかへらんとしけるをその事やみにけれはよめる

あま敬信（因香朝臣母）

文徳天皇を山城國葛野郡田邑にをさめ奉るゆへに田邑のみかとゝいふあきらけいこは慧子文徳天皇の皇女也母藤原列子従五位上是雄女子文徳實錄第八云天安元年二月己巳朔丙申日廢鴨齋院内親王慧子更立二無品述子内親王一爲二齋内親王一遣二右大臣正三位藤原朝臣良相於神社一告二事由一其事秘者世無レ知レ之也皇女は母にあやまちあれは源姓を賜らさる事貞登朝臣のことし然には皇女は母にあやまちあれは齋院齋宮なとを廢せらるゝ例にや文徳實錄に

は齋院を廢せらるゝ事何故と見えされとも今此こ
とかきに其よし顯れたり齋院をかへらんはかへら
れんと有けむれもしのおちたるにや元慶五年正月
六日薨遂逑子爲齋院母惟高同二年而退

大空を照行月しきよけれは雲かくせとも光りけなく
に

月日のいたりて淸けれは雲のかくせと光の消ぬこ
とく人のなき事いひつくるもくもらぬ事にて有と
たとへたりあきらけいこといふ名の心をおもへる
歟

題しらす　　よみ人しらす

いそのかみふるからをのゝもとかしは（柏）本の心はわす
られなくに

ふるからをのは布留野の冬枯たる時をいへり孫姫
式に云浪花津之蘆葭逕三冬而蒼二月舊枯野之本柏
因ニ新交ニ而恨ニ故人ニからはかれなり良と禮と同
五音也かれ木をもから木といふかことし應神天皇
の伊豆國におほせて作らせ給ふ舟の名をからのと
名付たるも枯野とかけり密勘云冬野にはなへて木
葉の色ものこらすかしはゝかれたるはの枝に付て
春まておちぬものなれはひとりもとの心わすれぬ
ものとてよめるとそ侍しもとかしわにつきて或抄
に萬葉に古人とかきてもとつ人とよみたれは柏の
古葉なりといひ又梢の葉は風にもまれておちて本
はかりにはの有をいふともいへり後撰拾遺に曾丹
か歌に「榊とる卯月になれは神山のならの葉柏も
とつはもなし是を兩樣にいへり此歌戀にあらねは
只もとよりしれる友なとをわすれぬよし也是をも
とゝして戀にいはむも勿論也躬恒か萩の古枝の歌
の心のことし「石上（六帖ある人）ふるの社のそのかみのふるき
心はいまもわすれし次と二首をもて一類とす

いにしへの野中の淸水ぬるけれと本の心をしる人そ
くむ

顯注に此淸水は播磨國稻見野に有昔はめてたき水
にて興ありけるか末にはわろく成て人なともすさ
めぬをむかしを聞傳へたるもの尋來て是はもとめ
てたかりける水也いかてかのまてはすきんとて
のめりける事をよめるとそ申けるそれよりもとを
しる事にいひ傳へたる也今はかくも侍らぬに是
は人のかたりし事也見たる所もなけれはたのみか

たし或人此よしを申され侍き歌の心に叶へり能因か歌枕に野中の清水とはもとのめをいふといへりふるき先達もさ社申され侍しかされはにや唯うち有清水には戀のこゝろならてはよめりとも見えす後撰に「いにしへの野中の清水見るからにさし汲ものは涙なりけり」又もとのめにかへりすむときゝて「我ためにいとゝ淺くや成ぬらん野中の清水深さまされは」これらみな古今の此歌を本としてよめると見えたりけさうする女の更に返事もせさりけれは實方中將「我爲に玉井の清水ぬるけれは猶かきやらんさても栖やとふかくものいひける人に元輔「くさかくれかれにし水はぬるくともむすひし袖は今もかわかす」ともに拾遺に有野中の清水とさゝねともかやうにもよむへき也但件のいなみのゝ野中の清水は此比もえもいはすつめたくこそ侍なれ密勘云清水の事奥義抄如斯本妻を云としるせること此歌を思ふてこの人々かくよみつれはすなはち本妻の事に成ぬるにや近衛を三笠山兵衛を柏木なと諸歌まくらに書付たるも堤中納言の宰相中將より中納言になりて賭弓のかへりあるしの日ふるさとの三笠山はとをけれとゝよめり土御門中納言兵衛佐なるに柏木のもりにしもをと讀たるよりさきに此三笠山柏木萬葉にも古今にも近衛兵衛の本文愚眼は見及ひ侍らねとやかてこれらよりもとつけておの／＼中事にやとこそ侍れ野中の清水本妻とさし侍るなん能因か書たらんものはいまた見侍らす柏木のゆはたそむてふ紫のといふ古歌を兵衛のたち（太刀）のを（緒）と釋する猶不審のこり侍りしあるものにも纈なりめゆひなりなとかきたるも太刀のをとも覺え侍らす今案延喜式云凡近衛府舍人刀緒左近衛緋絁右近衛緋纈左兵衛深緑絁右兵衛深緑纈左衛門部淺縹右衛門部淺縹纈是に叶はねは太刀の緒ともおほえ侍らすとはのたまへる歟又歌のおもてにさも云ねはにや定家卿の心は野中の清水とよめる此歌かならす本妻を云るにはあらねと後撰拾遺等の作者さやうにとり用ひたれはやかて本妻の事になるなりとて三笠山柏木等を例に引れたりまことにこの二首はともおちにましはらんには此心なるへきにこそはへらめと此集序にもあるは松山の波をかけ野中の水をくむといひ六帖にも昔

と云歌とし侍れは昔より本妻の心に用ひ侍り又中務集に云知たる人のはやういきし所にまたいきけるに「みな人の袖をあやしとぬらす哉野中の水のふかき計に」但野中の清水と云を印南野と云るはひか事にて布留野に有ける也其證は貫之集に石上ふる野の道の草分て清水汲にはまたもかへらん此歌も戀歌の中に古に猶立歸る心を（イ哉）はと云歌の上に有はもとみし人に又とひ返して逢むの心也則六帖に同し題にて今の歌とならへり寂超法師か歌にも「昔みし古野の澤のわすれみつ何今更に思ひ出らん」とよめり又堀河院初度百首に河内か野を讀るにも「いにしへのふるのゝ道を尋來て清水を猶も結ひつる哉」とありこれらによらは布留といふは旅の義なれと崇神天皇の御時始て布留社はいはゝれさせ給ひてみつかき結ひさしき所なれは昔より古き心にいひなし來るより古野といふ心になして又それを轉して古の野とよめるか六帖に柏原のみかとの御うたとて「いにしへの野中ふる道あらためはあらためられよ野中古道此いにしへのとつゝきたるも今の歌と同しくふる野と聞えたり其故は上に貫之歌にふるの中道と讀れたると叶ひてみゆる也拾遺にすけみか物名に大和をよめるうたに「古道に我やまとはんいにしへの野中の草はしけり合けり」是此集に隱題にやかて其ものゝ上を讀ることく大和をかくして則大和の名所を讀るとみゆ又狹衣に「あかさりし跡やかよふと石上古野の道を尋てそみる」「石上ふるのゝ道を尋てもみしにもあらぬ跡そかなしき」これあかさりしといへる清水を下にふくみて聞ゆ又今の歌いその上ふるから小野といふに次たれは旁愚案其證あるに似たりしからすや

古への賤のをたまきいやしきもよきも盛は有し物なり

いにしへの賤のをたまきとは日本紀萬葉延喜式等に倭文とかきてしつともしつおりともよめり萬葉にもいにしへのしつはた帶とも讀たれは此賤と云布はあら〳〵敷おりていやしきものゝ衣にしたる故にそれをきるほとのものをも衣につけてしつとはいへる歟もろこしにいやしき身のなり出るを布衣より起りてなといへるかことし延喜式には諸社

の祭の文にもおほく載侍れは古より有ける物なるによりていにしへのとはおける也をたまきは苧をうみて巻たる巻子(ヘソ)と云それを苧環(チダマキ)とはいへり顯注にけす女の苧をうみてまきたるをはへそといふを賤のをたまきと云とかゝれたれとこれは本末たかひて古のといへるを捨て注せす本末たかへりと云は倭文を着る故にいやしきものをも賤といふなるへきを賤かうむをたまきなる故にしつのをたまきといふと心得られたるをいふ也萬葉にはしつたまきとのみも讀りしつたまきかすにもあらぬ我故にともしつた巻いやしきわか故ともよみたれはむかしよりいやしき事によめりされはしつのをたまきいやしきもとはつゝくるなりいやしき人たふとき人みな盛はありとよめる也伊勢物語に「古のしつのをたまきくり返し昔を今になすよしもかな篁朝臣の歌に「數ならはかゝらましやは世中にいとかなしきは賤のをたまき」これより五首一類なる中に次二首は名所に寄せ後二首は草に寄るを一類とす

今こそあれ我も昔は男山さか行時も有こしものを

さか行はさかえ行也それを男山には小坂もあれは坂を行によそへたり世をそむき家を出たらん人の影の朽木となりてふかき山邊に身を捨て侍らんか男山にて有し時人にたちましりつかさ位につきてさかえし時も有し物をとよめりと見ゆ

よの中にふりぬる者は津の國の長柄の橋と我となりけり

顯注に國史云嵯峨天皇の御時弘仁三年六月遣使長柄橋云々此時造られける歟しからは造ると有へきを修理なとをくはへられけるにや今云日本後紀の略本を二部まて見侍しに遣使長柄造橋と有れは顯昭の見られたる本には造の字を落せるなりされとも是も初てかけそめたるにはあらす此歌前後のつゝきを見るにたゝ身のふりぬるといふのみにはあらすしかるへき人の才能有れと今世にふるされて用ひられぬ時に人を渡す用有なからの橋のたゝふりにふり行によそへて述懐の歌なるへし

笹の葉に降積雪のうれを重みもとくたち行我さかりはも

六帖には腰句末をおもみと有て結句は我心哉と有

顯注にくたつは斜と云字をよめる也なのめに成也萬葉には降と云字をかけり是もかたふく心なり笹の葉の末のおもくなれはもとのかたふくを我よはひのかたふくにそへてよめり歳はもはわかさかりはいつらやと云心なり萬五「わかさかりいたくくたちぬ雲にとふくすりはむともまたおちはやもおほあらきの森の下草おいぬれは駒もすさめす刈人も無し

又は櫻あさのおふの下草おひぬれは　六帖作者小野小町と有小町集にはなし顯注に大荒木の森は能因か歌枕には山城國に有といへりとかゝる曾丹か三百六十首のうちに四月中の歌に「大荒木の下草までに風吹けはなひきて神を祭りあへるも」此歌によれは加茂の邊に有にやと今案萬葉に「隱してや猶や老なんみゆきふる大荒木野の篠ならなくに」「隱してや猶やなりなん大荒木のうき田の森のしめならなくに」此歌ともを思ふに大和國宇治郡に荒木神社有神社を萬葉にもりとよみたれは彼所にや萬葉第一人丸長歌にみゆきふる河崎の大野にはたすゝきしのをおしなみとよめるも宇智郡なるに吉野につきゝて共に寒き所なれは同しくみ雪ふるとおけり萬葉に越の國の枕言にもみ雪降とおけるを思ひ合すへし山城ならは此詞應せす又續日本紀第三十二云寶龜四年八月辛亥左兵庫助外從五位下荒木臣忍國養老五年以往籍爲大荒木臣神龜四年以來不著大字至是復著大字これも宅地のあらきに有てそこをもて氏とせる歟然れは荒木神社を大荒木神社といはむ事うたかふへからす引所の萬葉の歌と今の歌と相似たれは共に大和の大荒木にて山城なるは同名異所なりと知へしおいはてたる草をは駒もすさめす人もからぬに寄て身の老ぬれはいとはるゝ事をなけく也顯注に草のおふるをはおひぬとかくへきを人の老によせておいぬれはとかけりといひける人もなしとは杜の草をは恐れをなして人もからぬ也とかゝれたるは共に誤り也老ぬれはにてこそ下の句はいはれて侍り後撰忠岑「大あらきの森の草とや成にけむかりにたに來て問人のなき」同みつね「人につくたよりたになし大荒木の杜の下なる草の身なれは」拾遺忠岑「大あらきの杜の下草しげりあひてふかくも夏に成にける哉」同「いたつらにおひぬへらなる大

荒木の杜の下成草葉ならねと貫之集「おほつかな今とし
なれは大あら木の森の下草人もかりけり」これは
みな今のうたより出たり或抄に今のうたの五もし
をあらきのと讀へしと云說を用へからすたゝ有の
儘に讀むへしもしこれをおあらきのと讀はさきに
引萬葉のうたの下の句のおほあらき野のさゝなら
なくにといふをいかゝよまんとか思ふ注にさくら
あさのをふとは櫻麻苧生也萬葉にもよめり櫻麻と
は麻のすなほに生ひたちたるか枝葉さへ櫻に似た
れは云にや櫻の咲ころ麻をまけは櫻麻と云も一說
也苧生は只苧をまける所也名所にはあらす

數ふれはとまらぬ物を年と云て今年は甚く老そしに
皀
上の三句引つゝけて讀て心得へし年といひては年
を疾にかけたり下にとゝめあへすむへも年とはい
はれけりといへる心也釋名曰年者進也進而前也是
より興風か歌までは老をよめるを類とす

おし照や難波のみつに燒鹽のからくも我は老にける
哉

又はおほとものみつの濱邊に　顯注に喜撰式にしほ
うみをおしてるといふとかゝれたれとおしてるは
難波にかける枕詞なり日本紀仁德紀に帝の御歌に
おしてるや難波のさきのならひはまとよませ給ひ
又古事記におしてるや難波のさきとよませ給へる
より此詞見えたり萬葉には押照忍照臨照なとかき
たれと臨照とかけるかまさしき心なり心は仁德天
皇高津宮にて世をしろしめしけれは天子の恩愛光
をもて民に臨ませ給ふ宮なれは臨照宮といひて宮
より難波の海をもおしてるとはいへりと見ゆされ
は萬葉第二十家持歌に「櫻花今さかりなり難波の
海おしてる宮にきこしめすなへ」これ難波にての歌
也おしてるや難波の宮とよますしてなにはの海お
してる宮とよめるにて思ふへし後の歌によさの海
にもおしてるとよめるは延喜式によれり萬十五「昔より
いひける事のから國のからくもこゝに分れするか
な同十七「須磨人の海へつねさらすやく鹽のからき戀を
もわれはする哉」注の大とものみつとは大伴氏の
遠祖道臣命大來目部をくして勳功をたてらる神武
天皇紀にみつ／＼しくめのこら浦とよませ給へる

御歌有古事記云爾大久米命以天皇之命詔ニ其伊須氣余理比賣ニ之時見ニ其大久米命黥利目ニ而思奇歌曰云々　かゝれは大久米命のさける目のにらまへたるやうなるをみつ〳〵しといへり萬葉第三見津々々四久米能若子我云々此見の字は其正字なり道臣命は目をさき給へる事なけれと伴をもて主に攝むる心にて道臣命の末大伴氏をもみつ〳〵しと云心に大伴のみつ〳〵とはつゝくる也萬葉第四に賀茂女王大伴の三依にあひての歌に「大伴のみつとはいはしあかねさしてれる月よにたゝにあへりとも」これも大伴は三依の氏にかけてみつとはいはしにもみつとかけるよしなり

老くのこんと知せは門さして無と答こ逢さらましを

此みつのうたは昔ありけるみたりのおきなのよめるとなん

みたりの翁は三人翁也或抄云此みたりのおきなの事此集四人撰者不勘得して付たる事を末學淺學習の身として勘へしらむ事いかてかあらん秘事なと云人有信すへからす此注すなほ也最可用

倒に年もゆかなんとりも敢す過る齢や共にかへると

文選郭景純游山詩云時變感人思已秋復願夏これ今のさかさまに年もゆかなんといへるに似たり

取止る物にしあらねは年月を哀あなうと過しつる哉

心あきらか也

止め敢すむへも年とは云れ皃然もつれなく過る齢か

發句は一句はなれて心はつゝけりむへも年とはいはれけりとはとゝめあへぬものなれはくれ行ことのとしとはけによくも名付ていはれたりと也しかもつれなくすくるよはひかとはさもつれなくすくるよはひ哉となりつれなしとはとゝむれとさりけなくて過行をいへり或抄に一說に年とはいはれけりとはしりなから思ひ取ともなく年々すくるよはひをしかもつれなくとみつから心に問ひていへるやうに注せり是もいはれたれと語勢唯はしめの心なるへし

鏡山いさ立よりて見行ん年經ぬる身は老やしぬると

此歌は或人のいはく大伴のくろぬしかなり

或抄云序に其樣賤しといへり二三の句かいやしき也心は哀に侍れは花の陰にやすめるとはいへる成へし七首の歌を七叟のうたとて清輔朝臣の尙齒會

の時も用ひられけるは白樂天か履道坊の閑居にて盧胡等の七叟倘齒會をなし本朝には管原是善等の倘齒會せられしに准して行はれけるにこゝなる七首のおのつから數もかなひけれはうたはれけるにや誠に七叟の有けるやうに思ふもの有かありけりと思はゝ誤也業平朝臣の母のみこ長岡に住み侍りける時に業平宮仕すとて時々も得まかりとふらはず侍ければしはす計に母のみこの許よりとみの事とて文をもてまうてきたりあけて見れは言葉はなくてありける歌三代實錄第五云貞觀三年九月十九日庚寅無品伊登内親王薨帝不視事三日内親王者桓武天皇之皇女也母藤原氏從三位乙叡之女也長岡縣日本紀第三十八云延曆三年十一月戊戌朔甲子天皇移幸長岡宮「とみの事は頓の字也源氏物語桐壺に母君もとみにえ物もの給はす箒木にとみにまとろまれ給はす夕貝にかゝるとみの事にはす經なとをこそはすなれとて云々しはすはかりには薨したまへるは九月なれは其度の事にはあらす病氣なとの時なるへし枕草紙に又業平かはらの宮のいよ〳〵見まくとの給へるかいみしう哀におかし引あけて見たりけんこそおもひやらるれ

老ぬれはさらぬわかれも有といへはいよ〳〵見まくほしき君哉

さらぬ別は不避別也のかれぬ也竹取物語に此月の十五日にかのもとの國よりむかへに人々まうてこんすさらすまかりぬへけれはおほしなけかんかかなしき事を云々「(順集)河風はさらむ方なみ山吹の散行水をせきやとめまし　伊勢物かたりにひとり子にさへ有けれはいとかなしうしたまひけり三代實錄に故四品阿保親王娶桓武天皇女伊豆内親王生業平と有れは行平等とは別腹にて伊勢物語にいへるにおなしされはいよ〳〵見まくほしうおほされけんもことわり也彼物語の或抄にみな同腹なれととりわきかなしうおもひたまへはひとり子とはいへりと有は口にまかせていへるなり

かへし　　なりひらの朝臣

世中にさらぬ別のなくもかな千代もとなけく人の子のため

伊勢物語には千代もとなけくを千世もと祈ると有なけくとはふかくねかふ心なれは祈心有人の子とは凡の人の子をいふといへりと我事也上句は廣く世上をいひて下句は我身に歸する也

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

ありはらのむねやす

白雪の八重ふりしけるかへる山かへる〳〵もおいにけるかな

管萬には冬にあり顯注には八重にかさなるかへる山かへす〳〵もと有上の句は序なから白雪の八重ふりしけると云には髮のしゝけはつるをこめてよめるとみゆるにや

おなし御時うへのさむらひにてをのこともにおほみきたまひておほみあそひありけるつゐてにつかうまつりける

としゆき朝臣

老ぬとてなとか我身をせめきけん老すはけふに逢ましものか

第二句家集には我身なとてかと有老いぬと云ひてなとかみつから身をせめ來りけむ老すはけふかゝる御遊にあはむものかとよめり顯注云せめきけむとは毛詩云兄弟鬩レ墻外禦其務雖有良明弁而無戒注云鬩恨也禦禁也務侮也兄弟雖門鬩外禦侮也されはせめきけんとはうらみけむといふ也或人せめきけむとは責來けんと書りせめ來れる事を悔る歟今案責來けんと云はいはれすうらみけむと云んいはれたる歟密勘云鬩字常棣詩に此詞侍けると云此歌は責來と計を習ひてかの兄弟鬩字を用事思ひより侍らす猶せめ來けんにて歌の心たかはすや侍らん今案定家卿の説によるへし

題しらす　讀人しらず

千早振宇治の橋守汝(なれ)をしそ哀とは思ふ年の經ぬれは

此うた宇治の橋姫と云神の有れは千早振宇治の橋守とはその橋姫をいふと心得る人有これしからぬこと也日本紀第十一仁德紀に大山守皇子宇治川になかれ給ふときのうたにもちはや人うちのわたりとよみ給ひ兎道稚郎子皇子のその時の御歌にもまたちはや振宇治の渡りとよませ給へり萬葉にも千はやふるうちとも千はや人宇治ともつゝけてよめり橋守とも橋姫ともつゝけす況や宇治橋は孝德天皇の御時道照和尙の初て渡し給へれは仁德天皇の比橋姫につきてよむへきやうなし千はや人とはたけき人を云物部の宇治川とも八十宇治川ともつゝくるは物部は氏々のおほきものなれはなりされは千早人とおくはものゝふのとおくにおなしちはやふるもちはや人に同しき故にさきの大山守皇子の御歌を古事記には千早振うちの渡りにと有千早ふ

る人かうちとつゝくる心也古事記に輕太子の歌にうるはしとさねしさねてはと有はうるはしと思ふ人と云意也萬葉に悲しきか駒はたくともとよめるはかなしと思ふ人か駒なりこれになすらへてしるへし橋守は野守山守關守なとおの〳〵そのものを守るものになつくるかことく橋を守るものを云日本紀第廿八天武紀上云或有人奏曰自近江京至于倭京一所々置候亦命菟道守一橋者遮皇太弟宮舍人運二私粮一事なれをしそはなれは汝也しは助語也橋守にて汝か年の經ぬる事をあはれと思ふと也もし才德有人のしつめるをあはれひて橋守に寄てよめるかもしは我身を人になしてしつめる身を橋守によそへてよめるにや此うた古歌の姿也

われみても久しく成ぬ住の江の岸の姬まつ幾代經ぬらん

伊勢物かたりに昔みかと住吉に行幸し給ひけりとて此歌腰句住吉のと有次におほん神けきやうし給ひてとて「むつましと君はしら浪みつかきの久しき世より祝ひ初てき」と有此一段を思ふに行幸の御供に此うた業平のよめる歟しからすは似つかはしからぬ事載んやうもなしこゝに顯注伊勢物語に異本をひかれたり今其を略すひめまつは顯注にをさなき松と同しきに幾代經ぬらんとあれは惣して松をひめまつとよみならはせるにこそといへり土佐日記にたゝひとり有かゝみをたてまつるとて海にうちはめつれはくちをしされはうちつけにうみはかゝみの事也ぬれは或人のよめるうた「千はやふる神の心をあるゝ海にかゝみを入てかつみつる哉いたく住の江のわすれ草岸の姬松なと云神にはあらすかし今案俗にを松め松とて有め松はかわうるはしくて赤く葉もしなやか也姬松とはめ松を云なるへし「いにしへのことはしらぬをわれ見ても久しく成ぬあまのかく山

住吉の岸の姬松人ならは幾代か經しととはましものを

これ伊勢物語の異本に業平の歌といふもの也いく代かへしは幾代をか經しなり幾世かかはりたるといふにはあらす「玉津島入江の小松人ならば幾世か經しととはましものを六帖

梓弓いそへの小松たか世にか萬代かねて種をまきけん

此歌は或人のいはく柿本の人丸かなり

梓弓は磯へのいもしをまうけむ爲の枕言也萬葉第十一に「白ま弓磯部の山のときは成命ならはや戀つゝをらん」此つゝけやうに同し磯部の山は石邊山とかきて近江に有今磯部とのみいへるも其山にや彼も人丸集の歌是も人丸と注す又松は千年をこそふるに萬代かねてとは磯部と云に付ていへれは常盤成命ならはやとよせたる心に同じ海の磯邊といへるかと思ふに枕詞をさへ置ていひ出たるに下に至て其用なけれはそれにはあらす源氏物語柏木に「たか世にかたねは蒔しと人とはゝいかゝ岩根の松はこたへん」是はいそへを石のほとりと心得たれはにや岩根の松とよみかへたりされは是も海の磯邊にあらぬ證也誰か世にか萬代かねてといへるには小松はかけゐはぬやうなれど小松と云にふたつ有小松と子松と也小松は常の事也今は子松也されは種はまきけんといふも人の親子を思へる心也子松也と云説は萬葉第二云「妹か名は千代にながれん姫島の子松かうれに苔むすまてに」（子松之末爾蘿生萬代爾）第五「卷向のひはらもいまたくもゐねは子松かうれゆあは雪なかる」これら皆子松とかけりまた拾遺に「我のみや子もたりてへは高砂のはなはにたてる松も子もたり」以上引合て良證也笋を竹の子といひ古事記に仁徳天皇の御歌にはひともとすけは子もたすともよませ給へり大きなれともそれより大なる松にそひてたてるをは小松といふへしまたは小松にて今は大なれとも種まきけんときをさしていへる歟磯部に松の種まく事はなけれと常の草木になすらへていへり歌のならひなり

かくしつゝ世をやつくさん高砂の尾上にたてる松ならなくに

顯注に是ははりまの高砂尾上の里と云所の濱に松の有を高砂の尾上の松と云惣して山を高砂共いひ尾のうへを尾上と云にはあらす歌にしたかひて思ひわくへし今云くかくしつゝとはさせる事もなくていたつらに老行心也（拾遺雜戀貫之）「ひとりして世をしつくさは高砂のまつの常盤もかひなかりけり」（同雜貫之）「いたつらに世をふる者と高砂の松もわれをや友と見るらん」（六帖）「いたつらに老にけるかな高砂の松や我身の果を

かたらん」

重之集
「高砂の尾上の松のわれならは世をへてのみはたてるさらまし」

藤はらのおき風

誰をかもしる人にせん高砂の松も昔の友ならなくに

此歌は興風老はてゝ昔の友のひとりも殘らさる事をわびたる也誰をかもは何をかもと云心人の上に限らす萬物の上まて何をか友にせむと云心也萬物の中には高砂の松のみ色もかへす所もさらす齡も久しきものなれはせめてかれをと思へとかれも昔の友にあらねは外に又誰かあらんと云事也餘りに我身の老たりといはむとて松さへわれにくらふれは猶此ころの物也といふ心也土佐日記に貫之「今見てそ身をはしりぬる住の江の松よりさきに我は經にけり　此心おなし以上五首松につきて讀るを一類とす

よみ人しらす

わたつ海のおきつ鹽あひにうかふ泡の消えぬものからよるかたもなし

おきつしほあひとは沖に鹽のみちあふ所なりしほの八百相なともよめりこの歌も下句述懷なれは上の歌につけり

わたつ海のかさしにさせる白たへの波もてゆへる阿波路しまやま

わたつ海は惣してうみをもいひ又海神をもいふいまこのうたは海神なり則海神海童海若なとかきてわたつみとよむこれなりなみのたつか白うてはなのやうなれはわたつみのかさしにさせりとはいへり萬葉第一に人丸の長歌にやまつみのまつるみつきと春へには花かさしもち秋くれはもみちかさせりとよめり後撰に小町「花さきてみならぬ物はわたつみのかさしにさせる沖津しらなみ」いまのうたにてよめるか又伊勢物かたりに「わたつみのかさしにさすといはふ藻も君かためにはをしまさりけり　これもいまのうたをおもへるにやなみもてゆへるとは帶のこしをめくれることくあはちしまをなみの立まはれるをゆひかたむるといへり文選天台賦云結根彌於華岱古傳云冉々孤生竹結根泰山阿萬葉第三羇旅歌に「わたつみはあやしきものか

あはち島中にたておきてしらなみをいよにめくらし云々

わたの原よせくる浪のしは〳〵も見まくのほしき玉津島かも

よせくるなみはよくより來りたるものをもてしは〳〵とつゝけたり古歌のすかたなり「萬葉時鳥とはたの浦にしら浪のしは〳〵君を見むよしもかな同「玉つ島よれともあかすいかにしてつゝみもてゆかんみぬ人の爲同「玉つ島よくみていませあをによしならなる人の待とはゝいかに 同「玉津島見てしよけくも我はなし都に行てこひまく思へは

難波潟しほみちくらしあま衣たみのゝ島にたつなきわたる

これは神樂大前張の歌也顯注云あま衣とはとりものゝ中にありあまきぬといふもの也たみのといはむとてあま衣とはおける也蓑則雨にきる衣なり雨衣をは油衣ともかけり三品以上雨聽二雨衣一たみのゝしまは津の國に有されは難波かたとよめり遠所の七瀬の中にあけたり天王寺のかたはらに有今按説文云蓑雨衣也海人衣といふにはあらすとしるへし萬葉難波かたしほひに立て見渡せはあはちの島に田鶴鳴渡る

つらゆきが和泉國に侍けるときにやまとよりこえまうて來てよみてつかしける　藤はらの忠房

宇多法皇春日社にまうて給ひけるとき大和の守忠房二十首の歌をよみて奉る此歌も大和守の時なるべし

君を思ひおきつの濱に鳴たつの尋ねくれはそあるとたに聞く

きみを思ひおくとつゝけたり上に露ならぬ心をはなにおきそめて又人に心をおきつしら浪と有しおく也おきつの濱いつみ也鳴たつと云をうけて尋ねくれはそとつゝけたり有とたにきくと云はたつのこゑにつけてすこし音つれのたえたるを恨る心あり

返し　つらゆき

おきつ浪たかしの濱のはま松の名にこそきみを待わたりつれ

拾遺に二度此うたを入られたり詞書にいつみの國

に侍けるほとにたゝふさ朝臣大和よりおくれる返しと有れはさきの歌と詞書とにたかへり貫之集と書の心今と同しおきつ浪はたかしの濱とつゝけむ爲也高石は持統紀に大鳥郡高脚の海とて放生の地とし給へる所也今も聞ゆる所也濱松の名にこそとは松の名にたかはす待事の久しきとなり或抄にかゝる名所の聞えすやはあらんと君をまち渡りつると也所からによりてこそ待得つれと述懐の心也といへり入ほか也「萬葉いさこともはやひのもとへ大とものみつのはま松待こひぬらん「同東歌薪こるかまくら山のこたかきを待となかいはゝこひつゝやあらん

難波潟生る玉もを假初の海士とそ我は成ぬへらなる

たまもをかるとつゝけたり文選に苟の字を假初と讀り京より來て海邊に出るめつらしさにかりそめにこゝにすみつきて玉もなとかるあまとも成ぬへしと浦をほめて讀り拾遺に井手と云所に山吹の花おもしろく咲けるを見て惠慶法師「山吹の花のさかりにいてに來て此さと人になりぬへきかな

あひしれりける人の住吉にまうでけるに讀て遣しける　　　　　みふの忠岑

住吉とあまはつくともなかゐすな人わすれ草生と云なり

六帖には胸句あまはいふとも尾句岸におふなりと有住よき所と海人は告ともなかゐすなむつましくなれたる人をも忘るゝわすれ草の其きしには生たりと云成そと心をつけたるはたゝ早く歸れの心なり住よし長居うらとよめるは此歌によりて名付たる歟ふるき歌には見えぬにや拾遺貫之「月影はあかす見るともさらしなや山のふもとに長居すなきみ

難波へまかりける時たみのゝ島にて雨にあひてよめる　　　　　つらゆき

雨によりたみのゝ島をけふ行けはなにはかくれぬものにぞありける

拾遺にふたゝひ載られたるにはたみのゝ島に分行けとゝ有家集には腰句來てみれは尾句我身なりけりとあり名にはかくれぬといふに難波をもたせたり玉葉集秋下たみのゝしまの菊をよめる讀人しらす「たみのとも今はもとめし立かへり花の雫にぬれんとおもへは

法皇西川におはしましたりける日つるすにたてりといふ事を題にてよませ給ひける

延喜七年九月に此御幸あり九首題をもて各に歌をよませ給ふ友則貫之躬恒是則頼基等也序は貫之かけり

鶴洲

あしたつのたてる川邊を吹風によせて歸らぬ浪かとそ見る

中務のみこの家の池にふねをつくりておろし初て遊ひける日法皇御覽しにおはしましたりけり夕さりつかたかへりおはしまさんとしける折によみて奉りける　伊勢

中務のみこは代明親王歟式明親王歟考ふへし兼明親王には有へからす諸抄に敦慶親王といへと敦慶は式部卿也源氏物語胡蝶に山のこたちなかしまのわたり色まさる苔のけしきなとわかき人々のわへかに心もとなく思ふへかめるにからめいたる舟つくらせ給ひけるいそきさうそかせ給ひておろしはしめさせ給ふ日はうたつかさの人めして船のかくせらるみこたち上達部なとあまたまゐりたまへり云々

水のうへにうかへる舟の君ならは爰をとまりといはまし物を

上句水のうへにうかへるふねのことくなる君ならはとも又水のうへにうかへる舟か君ならはとも兩方に聞ゆともに同し心也うかへる舟は荀子云君者舟也庶人者水也水能載舟亦能覆舟此心にはあらす莊子に虚舟來觸喩あり今は法皇なれは莊子の意也本朝文粹第七法皇請レ停ニ封戸一書云願早收ニ綸旨一莫レ繫ニ小僧虚舟之心一同第八九日後朝侍ニ朱雀院一同賦閑居樂ニ秋水一應ニ太上法皇製一非ニ習者一不レ樂レ之故得ニ我后之觀ニ脱屣一非ニ玄談一不レ說レ之故遇我后之遂ニ虚舟一　後拾遺に延久五年三月住吉に參らせ給ひて歸るさに讀せ給ける後三條院「住吉の神は哀と思ふらん空き舟をさして來たれは　下句は爰こそとまりと云てとゝめ奉るへきものをと還御を惜み奉る也或抄に伊勢は法皇の御思ひ人也思ひに叶はぬやうの心侍ける比にや今宵は爰にもとまらせ給へかしの心也といへるは誤也用へからす御思ひ人なりしは位におはしましける時の事也これは中務親王家にての事なれはあるしのみこより始て

人々の心をよめるものなり

からことゝいふ所にてよめる　眞せい法師

都までひゝきかよへるからことは浪の緒すけて風そ引ける

六帖には第四句浪のをよりてと有すくるは萬葉に箸の字を用ひたり都まで名高く聞ゆるといふ事をからことゝいふ所なれはひゝきかよへるとはいへり（六帖）「松の音を琴にしらふる秋風は瀧の糸をやすけて引らん

布引の瀧にてよめる　在原行平朝臣

こきちらす瀧の白玉拾ひ置て世のうき時のなみたにそかる

（後撰）「朝毎に置露袖にうけためて世のうき時の涙にそかる（いせ物かたり）「我世をはけふかあすかと待かひの泪の瀧といつれ高けん（六帖）「わひ人の袖をやかれる山河の涙のこともおつる瀧かな（貫之集）「瀧津瀬もうき事あれや我袖の涙に似つゝおつる白玉

布引の瀧のもとにて人々集りて歌よみけるときによめる　なりひらの朝臣

上の歌と同したきにてよめれと是はこと時讀れさらにこと書はせる也

ぬきみたる人こそ有るらし白玉のまなくも散か袖のせはきに

散かはちる哉也我に得させんとて水上に白玉の緒をぬきみたる人こそあるらめつゝむへき袖のせはきにあはすれは分にすきたりとよめる心也（後撰）「瀧つせに誰か白玉をみたりけむひろふとせしに袖はひちにき

よしのゝ瀧を見てよめる　承均法師

誰か爲に引てさゝせる布なれや世を經て見れととる人もなき

六帖には第一句かけてさらせる落句きる人もなきと有心明也

題しらす　神たい法師

文徳實錄に嘉祥三年五月に神の爲に（イ六）七十人の僧を度し給ふよりて名の上の字に各々神と云字をおけり此神たいも其一人にや

清瀧の瀬々の白糸くりためて山分衣おりて來ましを

顯注云清瀧は醍醐にも有清瀧河は高雄にも有れと

此歌は吉野の瀧にてよめり山分衣とは山ふしなとの山を分行衣と云也萬葉には露分衣と有「夏草の露分衣きもせぬになと我袖のひる時もなき　瀬々の白糸くりためてとは瀬々の白浪の糸のやうなるをくりためてと云也今案題しらすと有歌をいかて此歌は吉野の瀧にてよめるとは申されけんもし顯昭の本には題不知といふ事のなかりける歟もしは上によしの丶瀧をよみ次下に龍門の歌あれはよしの丶瀧の清きをおして清瀧とよめりと心得られたるにやまことに山分衣といひ歌のつ丶きをみるによしの丶瀧にこそはとみゆれと清瀧も又山分衣とよむましき所ならぬ上あらはれたる名なれはよしのとも定めかたくや山分衣とは袈裟をは蓮花服離塵服なといひて内外清淨に道をおこなふ人にかなへる衣なれは清瀧のせ丶の白糸をもておらはやとよめる心にて露わけ衣と云ると詞はにたれとかはりぬへくおほゆれどふるくもしかるへき人々皆露分衣の類によめり「朝明の山分衣ぬれてけりふかきよたちの霧のしめりに（玉葉旅）「足引ノ山分衣さのみやは雪より雲に日かすかさねん（新後拾遺旅）「花にこし山分衣風ふけはかへる袂そ雪に成ぬる（新續古今春下）「越くらす山分衣さらてたにほさぬ袂にふる時雨かな（同旅）

龍門にまうて瀧のもとにて丶よめる　　伊勢

伊勢集云やまとに三月はかりすむにさう〳〵しく寺めくりせむと思ひてありきけるに龍門といふ寺にまうて丶む月の十日あまりになん有ける見れはそのたうの有さま瀧は雲の中より落くるやうにみゆ仙の岩やといふはいたく年つもりて岩の上の苔八重むしたり哀にたふとくおほえて涙おつる瀧におとらす見しらぬ心ちにたくひなくめてたくみてものかなしく都おもひやられて石のもとにしはしなかむるに此寺いとくろうなりぬ雨やふらんとすらんとともに有人々いそきけれは雨はふらし雪なと云ほとに雪さらはかりにてかきくらしふる有人々いさ歌よまんといひけれは云々とよみたりければこと人よますなりにけり

たちぬはぬ衣きし人もなき物をなに山姫の布さらすらん

たちぬはぬ衣きし人とは仙人也もろこしにも瀧を瀑布といひ爰にも布引の名さへあれは今は其仙人

もなきになにしに山姫の布さらすらんとよめり懷
風藻に葛野王五首遊瀧（龍イ）門山一首命駕遊二山水一長忘
冠冕情安得王喬道控鳥入蓬瀛一雲とみて人まとは（素性集）
すはなかれ出て龍の門より來たる水かも「あした（能因）
つにのりてかよへる宿なれや跡たに今は殘らさり
けり
朱雀院のみかと布引の瀧御覽せむとて文月の七日の
日おはしまして有ける時にさふらふ人々に歌よませ
給ひけるによめる　　たちはなのなかもり
此作者は永盛か仲盛か三代實錄に橘長茂あり是も
ち歟もし其人のなからへて御供せるをなかもちと
かけるを今の如く書なせるにはあらぬやと思ふは
あまりの事なれと後のへの爲におとろかしおく也
主なくて曝せる布を七夕に我心とやけふはかさまし
瀧をやかて布とのみよめり
比えの山なる音羽瀧をみてよめる　　忠岑
うつほ物かたり第三にいはく住渡りける所はその
あたりはひえ坂本小野あたり音羽川ちかくて瀧の
音水のこゑ哀に聞ゆる所なり云々今案に此音羽の

瀧を又は音なしの瀧ともいふ歟「いかにしていか（六帖）
によからんをの山の上より落る音なしの瀧「朝夕（源氏）
に嘷（々嘷）くねをたつる小野山は絶ぬ涙や音なしのたき
おちたきつ瀧の水上年つもり老にけらしなくろきす
ちなし
落たきつは落てきる也水上は髮をもたせて老にけ
られしな黑き筋なしといへり宋錢祚慶か方地を詠
る詩に夜深因被寒暑照恰似仙翁一局棊或者これを
みて黑全輸といひけむ事おもひ出らる「君こふと（うつに）
水上しろくなる瀧は老の涙のつもる成へし　　みつね
おなし瀧を見てよめる
風吹けと所もさらぬしら雲はよをへておつる水にそ
有ける
いかて白雲の風ふけとも所もさらてゐるらんと思
ひしはけにも世をへて落る瀧の水にて有ける物を
といひへてよめる也「うき島と名にきゝくれと浪（能因集）
の上に所もさらす世をそへにける「つくはねの岩（萬葉東歌）
もとゝろに落る水世にもたゆらに我思はなくに
田村の御時に女房のさふらひにて御屛風の繪御覽し

けるに瀧おちたりける所おもしろしこれを題にて歌よめとさふらふ人に仰られければよめる

三條の町紀靜子名虎女惟高母

女房のさふらひは臺盤所也主上の御座也後涼殿の東

思ひせく心のうちの瀧なれや落とはみれと音のきこえぬ

文集五絃彈を題注に引ていはく第五絃聲尤掩抑瀧水咽凍不得流　寄勘に御障子の繪をよませ給ひけるに更衣のよみ給へる歌なれは思ひせきてくるしき心のうちをこそせくとはいひなからいさゝか色に出給ひけめ いせ家集「限りなき心の落す瀧なれは世につたはりて流れ社せめ

屏風の繪なる花をよめる　　つらゆき

咲初し時より後は打はへて世は春なれや色の常なる

咲初しといひて花といはぬは繪にゆつれる也うちはへては萬葉に打經而とかけり布繩なと引はへたることとなかき心也　文鏡秘府論屏風詩曰綠葉霜中夏紅花雪裏春去馬不移迹來車豈動輪唐吳融蓋山水歌云經年胡蝶飛不去累歲桃花結不成菅家文草第五屏風詩云人馬無去來煙霞不始終後撰に「繪にかける鳥とも人をみてしかな同し所を猶尋ぬへく

屏風の繪によみ合てかきける　　坂上これのり

かりてほす山田の稻のこきたれてなきこそわたれ秋のうけれは

かりてほすといふに鴈を添て下のなきこそわたれは是をあひしらへる歟いねはこくものなれはこきたれてとつゝけたり山田の稻も鳥も皆繪にありけるなるべし　躬恒集に「かりてくる山邊の鳥を秋霧のたつたひことに空に社みれ　これは田ともいはてかりて來るといひてかりて來る山邊の鳥とつゝけたるに鴈をいへるとそ聞えたる六帖「かりてほす山田の稻のこきたれて音をこそなかめ世をはうらみし

# 古今和歌餘材抄卷十九　六十八首

雜歌下

題しらず　　　　よみ人しらず

世中は何か常なる飛鳥川きのふの淵ぞけふは瀬にな
る

きのふの淵とみし所けふは瀬となればけふ瀬とみ
る所明日はまた淵と成がごとく世中は何れの事い
かなるわざか常ならんと思ひとる也後撰に「外の
瀬は深く成らし飛鳥川きのふの淵そ我身なりける
幾世しもあらし我身をなそもかく海士のかるもに思
ひみたるゝ

日本紀に萬歲と書てよろつよとよめれば幾世しも
あらしとはいくばくの年もあらじと云也あまのか
るもばかりこもといへるごとく亂るゝ物なればよ
ろづに思あつかふをよせたり

雁の來る嶺の朝霧はれすのみ思ひ盡せぬ世の中そう
き

顯注にこれはくるみといふ物を隱したる歌也藤原
輔相が集に有能よみたり隱題のうたは只の歌に入
たるもよき也今按源氏物語橋姬に峰の朝霧はるゝ
をりなくてあかしくらし給ふに云々此歌をとれる
歟上ははれずのみといふべき序也雁のくるは歌の
にほひ也　曾丹集「みそれふりくもれる冬のはれす
のみ盡せぬ物やまろか身のうき

小野たかむらの朝臣

しかりとてそむかれなくにことしあればまつなけか
れぬあなう世の中

六帖には第四句まろなげかるなと有ことと有時は
まつあなうの世の中やとなげかるゝよさは有とて
そむかれぬもの故にと云也淸原元輔歌に「うしと
いひて世をひたすらにそむかねば物思ひしらぬ身
とや成けん

をのゝさたき

かひのかみに侍りける時京へまかりのほりける人に
つかはしける

文德實錄第五云仁壽二年九月戊子朔從五位下小野
朝臣貞樹爲甲斐守介掾などの朝集使大帳使に上る
時なとの事なるべし

都ひといかにととはゝ山高みはれぬ雲ゐにわふとこ
たへよ

行平のもしほたれつゝと云歌に合てみるべし山高みはれぬ雲ゐとはかひのしらねなとをこめて心ハはれぬをよする成べし

文屋のやす秀が三河のぞうに成てあがたみにはえ出たゝじやと云やれりける返事に讀る　小野小町

縣見にとはゐなかを見にはと云也後撰に定たるをとこもなくて物を思ひける比小野小町「海士のすむ浦こぐ舟のかちを浪世をうみ渡る我ぞ悲しき

侘ぬれば身をうき草のねを絶てさそふ水あらばいなんとぞおもふ

侘ぬればは世に住侘ぬれば也身を浮草とは身をうしと云かけたり文選潘安仁西征賦云飄萍浮而蓬轉注張銑曰言竟如₂浮萍轉蓬₁無ㇾ所₂止託₁也江文通擬古詩曰忽如水上萍遊仙窟曰莫ㇾ作₂浮萍草₁逐ㇾ浪不ㇾ知ㇾ廻六帖に浮草伊勢「根を絶て水にうかべる浮草は池のふかさを頼なるべし「夏の池によるべさだめぬうき草の水より外に行かたもなし

題しらず

哀てふことこそうたて世の中を思ひはなれぬほたしなりけり

哀てふ事こそうたては中々に人の我を哀と云詞こそうたてく世をおもひはなれて捨もすべき身のさすがに心よはくえ捨やらぬほたしなれと也うたてをうたゝ也といふ説につかばさらぬだに世中を思ひはなれかぬる身に彌哀と云詞のほたしとなりてとむる心也ほたしは羈絆の字也馬のほたしより出たる詞なれば思ひはなれぬほたーといへり下のおなじもしなき歌に「世の浮目みえぬ山路へいらんには思ふ人こそほたしなりけれと讀るも山ちへ入事のならぬはほたし故也と云心なれば入らんにはと云るもほたしの緣の言也

よみ人しらず

あはれてふことのはことにおく露はむかしをこふるなみたなりけり

哀てふことのはとは是はあはれいつはと有し物をいつはかく有しものをと過にしかたをいひ出るなり露の木の葉くさのはにおきて見ゆるによせて昔をこふる涙を言の葉ごとに置露とはいへり後撰集「あはれてふことにしるしはなけれどもいはではえこそやまぬ物なれ「哀てふことになぐさむ世中をなど

か悲しといひて過らん

世中のうきもつらきもつげなくにまづしるものはなみだなりけり

或抄に上句うきもつらきも世中が告ぬにといへるよし注せらるれどよのうきもよのつらきも泪に我告ぬにといへるなるべし後撰「みしゆめの思ひ出らるゝ宵々にいはぬを知るはなみだ也けり　是は今のうたをとれるにや續古今集にも和泉式部「何事も心にこめて忍ぶるをいかで泪のまづ知ぬらん

世の中は夢かうつゝかうつゝとも夢ともしらず有てなければ

心明なり

よの中にいづら我身の有てなし哀とやいはんあなうとやいはむ

いづらは事のまこと僞を極めとふやうの詞也いづら我身の眞實はと極めとひてもとむれども有てなければおもしろき物とやいはんあなうのものとやいはんと也上に哀ともうしとも物を思ふときとも哀あなうと過つる哉ともよめり下句語勢は卷頭の元方の歌に似たり

山さとはものゝさびしき事こそあれ世のうきよりは住よかりけり

小町集には第二句物のわびしきと有朗詠には二三の句物さびしかる事はあれどゝ有或抄に物のわびしきと有て其よしに注せるは本の書誤れるにこそ

これたかのみこ

白雲のたえずたなびく峰にだにすめば住ぬる世に社有けれ

六帖に題峯作者をしるさず誰身の上にもかくは思べきをことに文德天皇第一の皇子にまし〳〵て御うつくしみも他にことにおはせし御身をやつして世をのがれてかすかにおはしましけるほどの事思ひやりて見るべし此二首は山家の歌なり

ふるのいまみち

しりにけむ聞てもいとへ世の中は浪のさわぎに風ぞしくめる

かつはもとより知りても有けむさらずは又聞てもいとへ浪のさわぐにそひて風さへ吹とよまん事なんおそろしうと世中昔も今もおたやかならぬ事を讀る也風のしくとは日本紀に重浪をしき浪とよめ

り菅萬には頻浪とかゝせ給へりかさなりたる也朝康が歌にしら露に風の吹しく秋のゝはとも讀り是より下十一首は世をいとふことをよめる也

そせい

いつくにか世をはいとはん心こそ野にも山にもまとふべらなれ

心は野にても山にてもまとふ物なればいづくにか世をばいとはんとなげきてよめる也うつほ「山も野も猶うしてへばしらま弓いるべきかたのおもほえぬかな

よみひとしらず

世中はむかしよりやはうかりけん我身ひとつの爲になれるか

世の中は昔からかくうかりけるか昔からはうからで唯我身ひとつの爲にうくなれるかと身のうき事をせめていはんとてかやうには讀なせる也拾遺「大かたの我身ひとつのうきからになべての世をも恨つるかな

よの中をいとふ山邊の草木とやあなうの花の色に出にけん

人のよの中をいとひて住べき山の草木とてや人に心をつけがほに世中はあなうの花と云名の付たる花の咲出てみすらんと云心也卯の花は木なるを草木とは惣じていへり

みよしのゝ山のあなたに宿も哉世のうき時の隱家にせむ

顯注には腰何家もがなと有て吉野は深き山にて有をそれよりも猶あなたに家もがなとはせめて深き隱家を願ひたる也至りて世のうき事をいへり

世にふればうき社まされみよしのゝ岩のかけ道踏ならしてん

岩のかけ道は棧道と陰道とふたつの説有日本紀第五崇神紀云時官軍屯聚而踏(フミナラス)ニ跳艸木ニ萬葉には踏平をふみならすと讀り或抄にふみなれんと也といへるは叶はず高うひきゝ所有を同じほどにするをならすといふ其ならす也

いかならん岩ほの中にすまばかは世のうきことの聞えこさらん

是は昔天竺に四人の外道有てしなん事を恐ておの〳〵相はからひける其中のひとり須彌山中のいは

ほの中に入てかくれば無常の殺鬼もいかでしらんと云て各好のことくにしけれど時至ぬれば一時に皆死しけるよし經にみえたり經は下に引がごとし世のうき事の聞えざらんとは必死せざらんとにはあらねと經文をふみてせめても世のうきをいかでかのがれんといへる也法句譬喩經無常品曰昔佛在王舍城竹林園中說法時有梵志兄弟四人各得五通却後七日皆當二命盡一自共議言五通之力反二覆天地一乎捫二日月一移山駐流靡レ所レ不レ能寧當不レ能レ避二此死對一一人言吾入二大海中一上不レ出現一下不レ至底正處其中无常殺鬼安知二我處一一人言吾入二須彌山中一還合二其表一令レ無二除現一无常殺鬼安知二我處一一人言我當三輕擧隱二虛空中一無常殺鬼安知二我處一一人言吾當レ藏二入大市之中一無常殺鬼趣得二一人一何必求レ吾也四人議訖相將辭レ王吾等壽算餘有七日今欲レ逃レ命冀當レ得レ脫還乃親省惟願進德於レ是別去各到二所在一七日期滿各々命終猶二菓熟落一市監白レ王有二一梵志卒死二市中一王乃悟曰四人避レ對一人已死其餘三人豈レ得二獨免一云々天台釋に山海空中無二逃避處一といへる是なり（うつほ櫻上）「とちこもりいはほの中に入しかと君がにほひは空にみちにき「はるかなるいはほのはざまに獨ゐて人め思はで物思はゞや　是今の歌をおもへるにや源氏物語に峯高く深き岩の中にそひしりゐたりける云々

足引の山のまに／＼隱なん憂世の中は有かひもなし

山のまに／＼とは深きに任せてかくれんとなり

世の中のうけくにあきぬおく山の木のはにふれる雪やけなまし

うけくは只うき也萬葉第五の長歌にも世の中のうけくつらけくと讀り下の句はおく山へ行なりかくれなましと云事を雪の消にかけていへりあとを消ともいへば雪やけなましとはよせたり（後撰）「人心うさこそまされ春たてはとまらずきゆるゆきかくれなん（拾遺）「うき世には行かくれなてかきくもりふるは思ひの外にも有哉（同）「いつかたに雪かくれなん世の中に身のあればこそ人もつらけれ（躬恒集）「あら玉の年ふりつもる山里にゆきはなれぬるわがみ成けり

おなじもじなき歌　　もの丶部のよしな

これは歌の心をもてこゝに入たり

よのうきめみえぬ山路へ入らんにはおもふ人こそほたしなりけれ

このうた見えぬといひ山路へといへるも聞ところ同じ文字あれど字體別なる故難なし新勅撰第廿に二條太皇太后大貳がよめる同じ文字なき歌に「あふ事ょ今はかぎりのたびなれや行末しらでむねぞもえける　このうたはゑとえと同じその字あれど是さへ字體別なれば同じ文字にあらずこれをよくわかぬ人は同じもじなきうたになりてえよまぬ事あるべし「みかりするこまのつまつく青つゝら君こそ我はほたし成けれ

山のほうしのもとへつかはしける　凡河内みつね

世を捨て山に入人山にても猶うき時はいつちゆくらん

家集には世をうらみて山寺にまかる人につかはすとて「世をうしと山に入人山ながら又うき時はいつち行らんと有六帖「山さとも同じうき世の中なれば所かへても住うかりけり　大和物語「今は我いつち行まし山にても世のうきとは猶もたえぬか

物おもひける時いときなき子をみてよめる

今更に何おひいつらん竹の子のうきふししげき世とはしらずや

六帖には第二句なにおひつらんと有つもじによりて出の字上略にや毛詩云我生之初尚無爲我生之後逢二此百罹一尙寐無吪　是より下三首は竹に寄てよめる一類とす

題しらず　よみ人しらす

世にふればことのはしけき呉竹のうきふしことにうくひすそなく

ことのはしげきとは人のものいひさがなき也よふしことのは皆呉竹の縁也鶯も竹を宿としてなけば身をよそへたり

木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしに我身は成ぬべらなり

木にもあらず草にもあらぬとは晋戴凱之竹譜云植物之中有名曰竹不剛不柔非草非木小異空實大同節目或茂沙水或挺二岩陸一四聲字苑云竹草也一云非草非木竹のよのはしに我身はなりぬべら也とは顯注に孫姫式にははしたに我もと有はしもはしたと同心歟なにもつかずと云心が密勘云はしたに我み共

はしに我みはとも兩說心は同じはしたのよし也內親王の身の思ひがけぬ入內をして又そのほい有御さまにもなかりければ木にも草にもあらずはしたなる身に成にけりと讀給へる也今案はしたの說所存末は一つになれともとはすこしかはれり間の字をはしたといへり間人と云氏有萬葉に行鳥のあらそふはしにと讀るもあらそふ間にと云心也長間笋を和名にしのめとよみ兩節の間をよと讀り長間も兩節の間のながき心になつけたればはしはあいたの心也橋も兩岸のあいたをわたせばの名にやと思ひ出侍り六帖に貫之「もみちする草木にも似ぬ竹のよに變らぬ物のためし成けり　竹の草木の間にてよの二つの節の中に有ごとくつくかたなき身に成ぬべしと讀せ給るなれと末ははしたと云に同じ

**或**人のいはくたかつのみこの歌也

高津內親王は續日本後紀十云承和八年四月辛丑朔丁巳三品高津內親王薨遣從五位下美志眞王從四位下坂上宿禰清野從五位下藤原朝臣宗從五位下林朝臣常繼等監ニ護喪事一親王者桓武天皇第十二皇女納從三位坂上大宿禰刈田麻呂女從五位下全子所誕也嵯峨天皇踐祚之初大同四年六月授ニ親王三品一即立爲レ妃未幾而廢良有以也　嵯峨天皇の比は專詩文を好ませ給ひける故に簾中までもみな詩をよく作らせ給ひて歌はまれによませ給へり後撰にも此みこの御歌「なほき木にまかれる枝も有物を毛を吹疵を云かわりなき　今の歌とゝもに本文を控へて詩文の餘りにて讀せ給へると見えたり歌をのみよみ給はましかば皇女の御身にかなひて鶯のこほれる淚よりもたまをなし松風にかよへる峰よりも猶しらべのたかく侍りぬべきをとをしくぞおぼえ侍る

わが身からうきよの中となげきつゝ人の爲さへ悲しかるらん

わが身のうき事をやゝもすれば人にかたりてなげく故にもとよりはうからぬ人をさへ悲しましむる心也

おきの國にながされて侍りける時に讀る

たかむらの朝臣

思ひきやひなの別に衰へてあまのなはたきいさりせむとは

日本紀に豊期を思ひきやと讀りあまのなはたきはなはをたくゑ也萬葉に馬にも船にもいへる詞也海士のたくなはと云とはかはれる事也栲繩とは白繩なり栲は昔此國に白き事をいへる古語也栲と云木はしろければそれによせていふよし日本紀私記にみえたり栲繩はあまにかぎらず神代紀にもあり然るをおくなはのたくと今のたきとをひとつぞと心得て栲の字をたきと讀と云說有誤也萬葉にたへとは讀り義訓也たへは白きより起る詞也故に雪の字白の字をもかけるに同じ次の歌と二首一類なり

田村の御時に事にあたりて津の國すまと云所にこもり侍けるに宮のうちに侍りける人につかはしける

在原行平朝臣

ことにあたりてとは勅勘に逢也御氣色のあしかりけるほどの事なるべし文德實錄にも見えずたゞ須磨に籠居せられけるは輕き咎なるべし

わくらはに問人あらばすまの浦にもしほたれつゝわぶとこたへよ

わくらはゝたま〳〵の心也萬葉第五長歌にわくらはに人とはなるを云々同第九の長歌に人となる事はかたきをわくらはになれるわが身は云々もしほたれつゝとはならはぬあまのしわざする心になきてのみふるよしをそへたり延喜式第五齋宮式云凡忌詞外七言哭稱鹽垂云々唐吳融詩曰五陵年少若相問阿對泉頭一布衣

左近將監とけて侍ける時に女のとふらひにおこせたりける返事によみてつかはしける　小野のはる風

寛平二年任右少將解官にみつの樣有一には喪解二には病解三には理解也科有て解官するを憂とはいふ也

あまびこのおとつれじとぞ今は思ふ我か人かと身をたどる世に

あまびこは山びこに同じおとづれじとは山びこは呼につけてこたふる物なれば今よりはこたへもせじと也我か人かとは源氏夕がほにも君は物も覺え給はず我かのさまにておはしつきたり云々是より下五首一類也

つかさとけて侍りける時よめる　平のさだぶむ

拾遺集にふたゝひこの初の歌を入られたる詞書につかさとられて侍ける時妹の女御の御もとに遣し

ける

うき世にはかとさせりともみえなくになどか我身の

出かてにする

出がてとはなりいでがたき也（六帖）「いづくより思ひ入てかまどはるゝ戀はかどなき物にぞ有ける（貫之集）「ふる雪や花と咲ては頼めなんなどか我身のなりがてにする（同）「かざせども花咲とやは頼まるゝ身のなり出ん時しなければ（躬恒集）「今までに出たゝぬ身は百敷の宮のさくらをみてやゝみなん

ありはてぬ命まつまのほどばかりうき事しげくおもはずもがな

萬葉第五山上憶良長歌に「玉きはる内のかきりはたひらけく安くもあらんを　こともなくもあらんをいふ命まつまは限有しばしが程也内典に一期爲壽と云へり

みこのみやのたちはきに侍りけるを宮つかへつかうまつらずとてとけて侍ける時によめる

みやちのきよき

日本紀に東宮をみこの宮とよめり

筑波根のこのもとことに立ぞよるはるのみやまの影を戀つゝ

是は下の常陸歌を取て讀りこのもと毎とはかたへの親王たちの御あたりへまゐるをいへる歟春のみ山とは春宮の帶刀なれば春のみやまの御影をこふると云心によめり（六帖貫之）「君まさぬ春のみやまはさくら花なみだの雨にぬれつゝぞふる「嬉しくも秋のみ山の松風にこひことの音のかよひぬるかな　是は源仲正が娘美濃が后の宮に初てみやつかへに出たるに琴引させ給へるが御心に叶ひける時よめる歌なる故中宮を秋の宮と申せば秋のみ山の松風にとはいへり今の春のみ山を思ひけるにや

時なりける人のにはかになく成てなげくをみてみつからのなげきもなく悦もなき事をおもひて讀る

淸原深養父

ひかりなき谷には春もよそなれば咲てとくちる物おもひもなし

六帖には發句ひかりまつと有詞書のやうひかりなきにて有べし官位高き人は日のよくあたる峰のごとくなればかずならぬ身は日影もさゝぬ谷のごと

く春は物をさやかせははるよりよそなればとは恩光を思ひもかけぬたとひ也後撰に時にあはずしてみを恨て籠り侍りける時文屋康秀「白雲のきやどる峰の小松原枝しげゝれや月のひかりみぬ　物思ひもなしとは物思ひの花もなしと也花によりて咲をまち散を惜むとて物おもひとなればやがて花に物思ひと云名をおほせたるにこそ貫之集「ことしげき心より咲物思ひの花の枝をやつく杖につく同「草も木もふけばかれぬる秋風に咲のみまさる物思ひの花うつほ物語「物思ひの枝にこもれる物ならばもえわたるともみへずぞ有けり源氏須磨卷に「咲てとくちるはうけれと行春は花のみやこを立かへりみよ

かつらに侍ける時に七條中宮とはせ給へりけるとき御返事にたてまつれりける　　伊勢

七條后温子昭宣公女寛平九年七月廿六日立后昌泰二年七月皇太后　伊勢集にいはく此女はこれかれいへど聞かす宮仕をのみしてける頃時のみかど召つかひ給けるやうにけしからぬ人のことを聞かざりけると心にもおやなどもおもひ渡りける内にはらみにけり扱をとこみこをぞうみ奉りける我おやみつからもいとうれしと思ひけりつかうまつりしみやす所もきさきに成給ひにけりうみたりける男みこは桂の宮といふ處におきてみつからは后のみやに侍ひけるに雨のふる日うち詠て居たりければ后の宮のよみて給へりける「月のうちの桂の人を思ふとて雨になみだのそひて降らん　御返し今の歌也歌の次にいはくかくてみかとおりゐさせ給ひて云々是によれば寛平九年の歌也

久方の中に生たる里なれば光をのみぞ頼むべらなる

六帖にに久方の月の桂の里なればと有顯注云久方とは月をいふ月の中に桂木は生たれば桂の里といはん料に久かたの中におひたるさとゝは讀り久方の空と讀るに付ては久かたとは空をいふと見えたり久方の月と讀るに付ては久かたとは月をいふとみへたるに空といへば久かたの月と云は空の月と云會釋するに此歌の久かたの中におひたる里といふは月の中の桂のさとゝいへれば月も久かたと云證歌にする也但久方の中に生たる桂と云は空の中のかつらと云歟かつらは即月のかつら也光をのみ頼むと云は月の光を頼むと云也此義を頼みてや猶

月をは久方と云へからぬと思ふべき猶月の中の桂と賴みてや月をも久方といふ證に出すべきはからふべし又后をば月にたとふれば光をたのむといふは后をたのみたてまつる心といへり密勘委細の趣雖有其謂只空月ともに久かたといふばかりしり侍かすしるべからず空とつゞくるに付てあめ月日雲霧など凡空に有ほどの物につゞくるは千早振神とつゞくる心にかもの社ともひらのゝ森とも續くるが如し此一首こそは月を久かたと讀りとは聞ゆれど月も空のものなれば月中の桂を空の中の桂と惣をいへりといはゞ是も兩様なるべきか土佐日記に「久かたの月に生たるかつら川底なる影もかはらざりけり　此久かたは空とつゞくる心に月と續けたる歟但月の内の桂の人と讀せたまへるにすがりて久方の中に生ひたるといへば久方は月を云としられたり月の名を菅家萬葉集には玉桂とよめり「戀佗て影をたにみし玉桂ことはねさへにほりて捨てゝん「後つひにいかにせよとか玉桂戀する宿におひまさるらん是也叉小大君集にいはく內へまゐるに實方中將月こそいとあかけれとの給ひしに「雲の上にさそはざりせは久方の身にそふ影もおくらさらまし　是も久かたをもて月と定て讀り又惠慶法師家集に云東山にて月あかき夜「久かたは手にとる計成にけり雲のゐるてふ寺にやとりて是も月を久方と讀る事影と共に明らか也后を月にたとへまゐらする事は禮記曰天子之與后猶日之與月陰之與陽相須而後成者也此歌は光なき谷といふに光を賴むと讀るをもてつらねたり

紀のとしさたがあはのすけにまかりける時にうまのはなむけせんとてけふといひおくりける時に爰かしこに罷ありきて夜ふくるまでみへざりければ遣しける

なりひらの朝臣

伊勢物語にはうまのはなむけせんとて人を待けるにこざりければと有三代實錄三十六云元慶三年十一月廿五日庚辰大內記紀朝臣利貞等並授從五位下大和物語にひとの國のかみのくたりけるうまのはなむけを堤の中納言していひ給ひけるにくるゝまでこざりければいひやりける「別べきことも有物を終日にまつとてさへも歎つるかなとありければ

まどひ來にけり
今ぞしるくるしき物と人またんさとをばかれずとふべかりけり
此歌第二句より五もじにかへりて物とゝいふ所句絶也こぬ人を待はくるしき物と今始て知也人またんは人をまたんといふも人のまたんと云もたかふへからざる歟我待佗るによりて人にまたせじと思ひしる心まことの歌人也また伊勢物語に昔紀有常かりいきたるにあり來ておそく來りけるに讀てやりける「君により思ひ習ひぬ世中の人はたれをや戀といふらん

これたかのみこのもとにまかりかよひけるをかしらおろしてをのといふ所に侍けるに正月にとぶらはんとてまかりけるにひえの山のふもとなりければ雪いとふかゝりけりしひてかのむろにまかりいたりてをかみけるにつれ／＼としていとものかなしくてかへりまうで來てよみておくりける
三代實錄第二十二云貞觀十四年七月十一日己卯四品守彈正尹惟喬親王寢疾頓出家爲沙門云々此時御年二十九也

忘れては夢かとぞ思ふおもひきや雪ふみ分て君を見んとは
心は明らか也朝夕なれつかうまつりしに思ひの外に世をのかれさせ給ひて所しも小野と云山里にうもれてまし／＼ける御もとにまうでゝわすれては夢かとぞ思ふといひけむ心のうちを思ひやりてみるべし新古今集にみこの御返しを載せたり「夢かとも何か思はんうき世をばそむかさりけん程ぞくやしき　此集にも伊勢物語にもなし此集に見えざる御歌のほどにも似ねばおぼつかなし

深草のさとにすみ侍りて京へまうでくとてそこなりける人によみておくりける
そこなりける人伊勢ものかたりによるに女なり
年を經て住こしさとを出ていなばいとゞ深草野とや成なん
わか出ていなはさらぬたに深草といふ名におへる里いとゝ野とさへたらん事を思ひおく也
返し　よみ人しらず
野とならば鶉と鳴て年は經んかりにたにやは君はこざらん

伊勢物語にはうつらとなりてなきをらんと有かりにたにやはかり初にうつらをかると云事を兼たり狩に寄すといふ説有用へからず六帖にうたかゝり「かりにとて我は來つれと女郎花見るに心そ思ひ付ぬる「花の色を久しき物と思はぬば我は野山をかりにこそみれこれらになぞらへてしるへし「六帖我宿は鶉ふすまではらはせし小鷹手にするゑこん人の爲

題しらず

われをきみ難波の浦に有しかばうきめをみつの海士と成にき

我を君難波の浦とつゝけたるは何と思へる歟うらみに有しかばと讀る也何とは俗に事とも思はぬ事に云る詞也「後撰我ならぬ人住の江の岸に出て難波のかたを恨つる哉　此難波のかたをと云る今の心に同じうきめと云るも海士のかるめによせみつもみるとみつとを兼あまも海士と尼とをかねたり

此歌は或人むかしをとこ有けるをうなのをとことはす成にければ難波のみつの寺にまかりてあまに成て讀てをとこにつかはせりけるとなんいへる

みつの寺は新古今集に難波のみつの寺にて蘆のはのそよぐを聞て行基菩薩「蘆そよぐ鹽瀬の浪のいつ迄か浮世の中にうかひ渡らん　今三津寺と云所有其所彼跡にや　江次第第十二云齋王歸京次第勅使參着前一日給祿以下一日云々二日云々七日禊儀給國司祿解纜同禊所舊例三日有三所禊近代同日行之三津濱下方禊擬住吉　三津濱禊安曇江禊卜部修度給祿各御衣更歸二大江御厨儲所一給國司祿二三津寺諷誦綿五十屯導師十屯供給國司役之齋王不下　延喜式第二十二民部式上云攝津國堀江寺充二土人二人浪人十八一令レ護二佛經一並免二課役一有二死闕一者隨即差替此堀江寺と三津寺と同異可考

返し

難波潟恨むへきにもおもほえずいづこをみつの海士とかはなる

いつこをみつとはいかなる所をうらめしと見て尼とはなると也よせたるやう右の歌の如し源氏物語箒木に「えんに物恥して恨みいふへき事もみしらぬさまに忍びてうへはつれなくみさをづくり心ひとつに思ひ餘るときはいはん方なくすごきことの葉あはれ成歌をよみおきしのばるべきかたみをとゞ

めて深き山さと世ばなれたる海つらなどにはひかくれぬべし又云心さしふかゝらんをところをおきてみるめのまへにつらき事有とも人の心をみしらぬやうににげかくれて人をまとはゞ心を見んとするにながきよの物思ひになるいとあぢきなき事也心ふかしやなどほめたてられてあはれすゝみぬれば頓てあまに成ぬべし思ひ立ほどはいと心すめるやうにてよにかへり見すべくも思へらすいであなかなしかくはたおぼしなりにけるよなどやうにあひしれりける人きとふらひひたすらにうしとも思ひはなれぬをとこきゝつけて涙おとせばつかふる人ふるごたちなど君の御心はあはれ成けるものをあたら御身をなど云にみつからひたいがみをかきさぐりてあへなく心ぼそければうちひそみぬかし

今更にとふべき人もおもほえず八重葎して門させりてへ

むぐらのふかく生るを八重とはいへり門させりてへとはかとさせりといへ也登以切氏の心にてつゞめていへるなり文章に上にしかゞゝといひて下に者の字有をてへりとよむもしかゞゝといへる者也今の世次の句の首へ上ててへればと讀は誤なり八重むぐらしてはむぐらをもてと云心也むぐらの深ければ分入がたければおのづから門をさす心なり此歌は君すでに故なく我を捐て尼と成つれば今さらにとはるべき人もなし八重葎をもて門をさしてつれゞゝとこもりをるよしをいへと此時の使などに云心也此歌拾遺戀二にも又のせたり（後撰同）「八重葎さしてし門を今更に何に悔しく明てまちけん」とふ人もなきやとなれど來る春は八重葎にもさはらざりけり

友たちのひさしうまうでこざりけるもとによみてつかはしける　　みつね

水の面におふるさ月の浮草のうきことあれやねを絶てこぬ

うき草は禮記月令季春之月萍始生と云ひ柳葉水に落て萍となるとも云り彌生に生ふると云は始ておひ初るにて茂く生るは五月成べしうき事あれやは萬葉に「時鳥なく尾の上の卯の花のうき事あれや君がきまさぬ「鶯の通ふ垣根のうの花のうき事あ

れや君がきまさぬ　此二首に共に厭事有哉（ウキコトアレヤ）とかければ我をうしといふもあればにやと云心也萬葉はうもじひとつにつゞけ今は浮たると云詞をもてつゞけたれば下にうきといふふたもじにかゝれりねを絶てこぬは浮草はねなければ絶てこぬといはむとてねを絶てと云り後拾遺「川上やあらふの池の浮ぬなはうき事有れや來る人もなし　此歌今の心也
人をとはで久しう有けるをりにあひ恨みければ讀る
身を捨て行やしにけん思ふより外なる物は心成けり
思ふより外なるといはんとて身を捨て我心はいにやしつらんとはいへりとかくまぎれて思ひながらとぶらふ事のなかりけるおこたりを本意にあらずと云ふ也或抄に恨ある中なれど身を捨て行やせんずらん思ひの外なるものは心にて有と也といへるは叶べからず
むねをかのおほよりがこしよりまうで來たりける時に雪のふりけるを見ておのがおもひは此雪のごとくなんつもれるといひける折によめる
伊勢物語「思へども身をし分ねばめかれせぬ雪のつもるぞ我心なる

君が思ひ雪とつもらば頼まれず春より後はあらじとおもへば
後撰に女の恨る事有ておやのもとにまかり渡りて侍りけるに雪のふかくふりて侍りければあしたに女のむかへに車つかはしけるせうそこにそへて遣しける兼輔朝臣「白雪の今朝はつもれる思ひ哉あはでふる夜の程もへなくに　返し讀人しらず「白雪のつもる思ひも頼まれず春より後はあらじと思へば　殊に返しは下三句同じく上二句も似たり
返し　宗岳大頼
君をのみ思ひ越ちの白山はいつかは雪の消る時ある
思ひこしぢとはおもひくるとつゞけたり
こしなる人につかはしける　紀貫之
おもひやるこしの白山しらねども一夜も夢にみえぬ夜ぞなき
拾遺集に此うたをかさねて載たるには一夜を一日とかけり
題しらず　よみ人しらず
いさこゝに我世は經なんすがはらや伏見のさとのあれまくもをし

菅原や伏見とはともに大和國添下郡に有日本紀の垂仁紀云九十九歳秋七月戊午朔天皇崩於纏向宮冬十二月癸卯朔壬子葬於菅原伏見陵　延喜式第九神名帳上云大和國添下郡菅原神社同諸陵式云菅原伏見東陵(垂仁天皇在添下郡)菅原伏見西陵(安康天皇在添下郡)この中に垂仁紀によれば伏見の翁か事より伏見といふよしは相傳の誤也此伏見の里菅原とつゞけねとよめり伊勢集に伏見にて「名にたてゝ伏見のさとゝいふことは紅葉を床にしけば成けり　此歌の上に山邊にてとて歌有てつゞけたり山邊は添上郡にあれば父が大和守なりける時行てよめる成べし中務集にも村上の御時屏風に名所をかゝせ給へる中にいそのかみとて歌ありて次に伏見とて「梅の花散かふ空はくれにけり伏見のさとに宿やからまし　此つゞきも山城のふしみにはあらずと見えたり歌の心われなくは此里のあれん事を惜みたり下に杉たてる門の歌をつゞけたれば上古の歌にてよみ人も大方の人ならじ是より下六首一類也「(後撰)菅原や伏見の暮に見わたせば霞にまがふおはつせの山「(六帖)秋の野のうつろひ行は菅原やふしみの里のおもほゆる哉「(曾丹集)草深み伏見の里は荒ぬらん爰に我世の久に經ぬれば

此後の二首は今の歌をとれり

我庵はみわの山もと戀しくはとぶらひ來ませ杉たてるかと

六帖第二門の歌に三輪の御歌と載たり然るべく聞ゆるうた也同第六杉に入れたるにとふらひきませをとふ／＼來ませと有古來風體抄には我宿はと有注に是は三輪大明神の御歌と申と有此集にもかく注せる本有ける歟又俊成卿の注し給へる歟定め難し清少納言に歌は杉たてる門神樂歌もおかし今やうはながくてくせつきたるふうそくよくうたひたる云々かゝれば此うたもうたへる事とぞ

喜撰法師

長明無明抄に古今にはきせんをきせとかけりとあれば古本しか有けるにや

我庵は都のたつみしかぞ住世をうぢ山と人は云なり

六帖には發句我やとは落句人はいふらんと有此歌うぢ山の方角をさして都の巽(タツミ)といへり應神紀云夫國樔者其國自レ京東南之隅隔レ山而居ニ吉野川上

此やうに文章などにいへるは珍しからぬことなれど歌にははじめて珍し惣じて五畿七道もみな都をもとゝして云習ひ也喜撰が此歌の後にこそ都の南都のいぬゐなども讀習ひけれされどなとやらん都の巽といへるか興有にはおとりて覺る也しかぞ住は然ぞ住也しかぞはさぞと云詞にて心はかくぞといふに通ず歌の心は我住所は都のたつみちかく他人は山の名をうぢ山と名付て住ものもなけれども我はかくすみなしたりと云心也序に詞かすかにしてはしめ終りたしかならず秋の月を見るに曉の雲にあへるがごとしといひ眞名序も同じ心にいへり人はいふなりとむすべる所慥ならぬ亦有べし六帖にみやこ「わたつみは都こそりていにけらし世をうぢ山の神もみなくに　このうたいかによめる歟またいつれの世いかなる人の歌とはしらねども只ならず見ゆる歌也もし世をうぢ山は喜撰も是を用ひられけるにや西淸詩話云世有ニ才藻一擅レ名而詞不レ工者有レ之不下以ニ文藝一稱上而語驚レ人者ハ如近傳花淸宮一絶乃杜常武昌阻風乃方澤　此喜撰が一首も是に似たり或抄に白河院宇治御覽の爲御幸有ける時餘興つきさるにより京極大との今ひと日の御逗留を奏請せられけるに陰陽寮花洛北に當れは明日還御あらは日ふたがりのつゝしみ有と奏すれば殿下遺恨深き所に行家朝臣宇治は都の南にあらず喜撰我庵は都の巽と讀れたれば苦しからずと奏せられけるにより其日の還御は延にけり時にとりての高名歌人ならずはかゝる事あらじと殿下御感有人もまた美談とせりとぞ長明無明抄云みむろとのおく廿餘町ばかり山中へ入りてうぢ山の喜撰か住ける跡あり家はなけれど堂の石ずゑなどさだかにありこれら必たつねて見るべき事也

讀人しらず

荒にけり哀いくよの宿なれや住けむ人の音信もせぬ

此歌伊勢物語にては長岡にてある女の讀る歌也六帖には作者伊勢と有覺束なし

奈良へまかりける時に荒たる家に女の琴引けるを聞てよみて入たりける　よしみねのむねさだ

源氏花散さとに中川のほとおはしすくるにさゝやかなる家のこたちよしはめるによくなる琴をあつまにしらべてかきあはせにきはゝしう引ならす也

御耳とまりてかとちか成所なればさし出て見入給へば云々任俗のときの歌にて讀るやうも僧正遍昭とのすへからねば俗名をいたせり乙女の姿と讀る歌のごとし

佗人の住べき宿と見るなへになけきくはゝる琴のねぞする

此わび人は世にあり佗る人也見るなべには見るからにと云詞也此下に思ひしもしるくと心を入て見るべし歎くはゝるとは嵆康琴賦曰懐戚者聞之莫不憯懍慘悽愀愴傷心含哀懐{カナシミ}不能自禁此この心也又萬葉に云「琴とれは歎きたつけたしくも琴の下樋につまやこもれる（萬葉）「わがせこが琴とるなべにつね人のいふなげきしもいやしきますも

二條或本源至女（源定孫宥女）

初瀬にまうつる道に奈良の京にやとれりける時よめる

後拾遺集戀四に女藏人二條一數ならぬ我身をうらの濱千鳥跡はかもなくおもほゆる哉　とかきて御硯に入て侍けるを御覽せさせ給ひて延喜御製一濱ちどり行衛もしらぬ跡なれやふみつけつらんしるへだになき　玉葉集五には詞書の歌のみ入れりこれその二條歟

人ふるす里を厭ひてこしか共奈良の都も憂名成けり

ひとふるすさとゝは人をふるす里ともまた人のふるすさとゝも兩様に聞ゆ珍しき人をこそもてなしすさむれはふるすとは思ひ捨たる心を讀り奈良の都をは古郷といひてそれに人にふるさるれはうき名也といへり人にふるされたる事有時の歌なるべし若上に引る玉葉集の女藏人二條といふ同人ならは延喜帝の忘れさせ給へる後の事にや（後撰）一身にはやくならの都と成にしを戀しき事のまたもふりぬる同集に思ふ事侍ける比志賀に詣て、一世中を厭ひがてらにこしか共浮身ながらの山にぞ有ける

題しらす　よみ人しらす

世中はいづれかさしてわかならん行とまるをぞ宿とさだむる

かくしり得たらんは心おだやかに有ぬべし逢坂の嵐の風はさむけれど行衛しらねばわびつゝぞぬる

六帖には腰句はやけれどゝ有結句佗つゝぞぬると有顯注に江談云蟬丸が逢坂にてよめる「あふ坂の

關のあらしのはげしきにしひてぞゐたる世を過すとて　此歌に相似たる歟今案續古今雜中に蟬丸とて入たりたとひ別なりとも蟬丸の歌なるべし
風の上にありかさだめぬちりの身は行衞もしらず成ぬべらなり
下の忠岑長歌にもちりにつけとやちりのみにつもれる事をとはるらんと讀りまた萬葉第十五に「ちりひぢのかずにもあらぬ我故に思ひわぶらん妹が悲しさ　右三首ともに蟬丸のうたといへり

家を賣てよめる　伊勢

大和物語に云監の命婦つゝみに有ける家を人にうりて後あはたと云所にいきけるに其家の前をわたりければ讀たりける「古里をかはとみつゝも渡る哉淵瀨有とはむべもいひけり　風雅集雜一云はやう住侍ける家に人の移り居て後花を折にやるとて讀る伊勢「花の色の昔ながらに見えつれば人の宿ともおもほえぬかな　今いへる家にや

飛鳥川ふちにもあらぬ我宿も瀨にかはり行ものにぞ有ける

明日香河の淵瀨かはるよしの心をとりて家をうる心をよめり瀨にかはり行と云に錢にかはりゆくとよせたり或抄にしからずと云只しかりおそろしき猪のしゝもふすゐのとこと讀ばやさしくなるとは是也周防內侍が夢はかりなるたまくらにかひなくたゝんとこひ名をよめるも此たぐひ也

つくしに侍りける時にまかり通ひつゝこうちける人のもとに京に返りまうで來てつかはしける　紀友則

故鄕はみしこともあらずをのゝえの朽し所ぞ戀しかりける

見しともあらずはみしことくもあらぬと云中に碁を寄たり後撰に「白浪の打やかへすと待ほどに濱の眞砂の數ぞ積れる　是もまたまさごに碁をもたせたりをのゝえの朽し所とは任昉述異記云晉王質伐レ木至ニ信安郡石室山一見ニ數童子圍一レ碁與ニ質一物一如ニ棗核一食レ之不レ飢局未レ終斧柯爛盡既歸無ニ復時人一拾遺に院の殿上にてみやの御方より碁盤出させ給ひける碁石けのふたに命婦清子「をのゝえの朽んもしらず君が世のつきん限りは打心みよ　伊勢集屏風の繪に碁うちたる所「をのゝえのくつ計

にはあらずともかへりみにたに見る人のなき「百（後撰）
敷はそのゝえくたす山なれや入けん人のおとつれ
もせぬ「（六帖）そのゝえは朽なは又もすけかへむうき世
の中にかへらずもかな　文集第十六云送レ春唯有レ
酒消レ日不レ過レ棊
女ともたちと物がたりしてわかれて後につかはしけ
る　　みちのく　源くすなたの女
あかざりし袖の中にや入にけむ我たましゐのなき心
ちする
「（萬葉）わかせこがきせる衣のはりめおちず入にけらし
な我こゝろさへ「（同）山菅のやますて君を思へかも我
たましゐの此比はなき　竹取物語にみかどかくや
姫をとゞめて歸り給はん事をあかずくちをしうお
ぼしけれど玉しゐをとゞめたる心ちしてかへらせ
たまふ
寛平の御時にもろこしのはう官にめされて侍ける時
に東宮のさふらひにてをのこども酒たうべけるつい
でによみ侍ける　　藤原の忠房
はう官は判官也遣唐使は大使副使判官主典おのお
の一舟に乘て四舟ともに行也主典は祿事とも云也
なよ竹の夜ながき上に初霜のおきゐてものをおもふ
比かな
なよ竹はしのめにてしのめは和名に長間笋とかけ
りよりてよなかきとはつゞけたり初霜はおきゐて
とつゞけむ料也なよ竹のよの初霜によせてよな
かきにおきゐて遥なる海路をしのきて歸らん事い
つをほとゝもしらねは物を思ふ比にて有とよめる
也
題しらず　　よみ人しらす
風ふけばおきつしら浪立田山夜はにや君がひとりこ
ゆらん
六帖には落句ひとり行らんと有て雜の風又山の歌
に出してともに作者かく山のはなのこと有顯注に
もひとり行らんと有伊勢物語は今の本とおなじ顯
注に普通の義を擧ていはくおきつ白浪立田山とは
ぬす人をば白浪といへば白浪のたつといひつゝく
ぬす人の立おそろしき山を君が行心也立田山とい
はむとておきつしら浪とつゝけ浪立といはむとて
風吹けばと置る也次に顯注の今案に盜人を白浪と

いふ事は侍れど必しも盜人とはおもはでもや讀侍けん浪は立ものなればおきつしら浪立田山と讀侍ぬべし萬葉に「わたつみの沖つ白浪立田山いつか越なん妹があたりみん　此歌は和銅五年四月遣長田王伊勢齋宮時山邊御井作歌云々然は今の歌は立田山を夜獨りこゆれば盜人の恐れも有ぬべし長田王下向伊勢之時山邊御井とて詠歌にあなかちに盜人の立田山と讀べからず此歌ともに浪立田山と讀ると見えたり錦立田山ともよみたり諸の歌仙古今皆稱搖上玉由曲愚按獨存此義還有怖畏審勘云昔も今も白浪稱盜人庭訓又如斯但愚案遺不審たゞやまとにはあらぬ唐衣の躰につゝけたるは歌の本意也此案殊可貴有興今按神武紀云戊午年夏四月丙申朔皇師勒レ兵步趣ニ立田ニ而其路狹嶮人不レ得ニ並行ニ乃還更欲ニ東踰ニ膽駒山ニ而入ニ中洲ニこれにて龍田路のけはしき事を思ふべし萬葉に「ふたり行けと行過かたき秋山をいかてか君が獨りこゆらん「玉かつましまくま山の夕くれに獨か君が山路こゆらん盜人を白浪と云事は後漢書云靈帝中平元年强角反皇甫嵩討之角徐賊在西河白波谷爲盜時俗號白波賊

拾遺集云廉義公の家のかみゑにたひ人の盜人にあひたるかたかける所藤原爲賴「盜人の立田の山に入にけりおなじかさしの名にやかくれんかゝる歌もあれど顯昭の今案此歌ぬしの心成べし奧義抄に此歌をば貫之が歌の本とすべしと云けりと有

或人此歌は昔大和の國なりける人の娘に或人住渡けり此女の親もなくなりて家もわろく成行あひた此男かふちの國に人をあひしりて通ひつゝかれやうにのみ成行けりさりけれどもつらけなるけしきも見えてかふちへいくことに男の心のごとくにしつゝ出しやりければあやしと思ひてもしなきまにこと心もや有とうたかひて月のおもしろかりける夜かうちへ行まねにてせんさいの中にかくれてみければ夜ふくるまでことをかきならしつゝうちなげきて此うたを讀てねにければ是を聞てそれよりまた外へもまからず成にけりとなんいひ傳へたる

此事伊勢物かたりにはなりひらのとせり大和物語には昔大和國かつらきの郡に住をとこ有けりと書出してはてに此男はおほきみなりけりと有誰ともなし伊勢物かたりに慥に見えたるなりひらの事は

この集に載るとき彼物語のごとく凡つふさに載たり此歌はいつの世誰が事ともしるさねばなりひらの事にはあらぬにや此女にかれかたに成て河内へかよひけるさま業平の心にはあらずと見ゆれは物語にて虚實をましゝたる成べしことをかきならしてとは文選魏文帝燕歌行曰賤妾煢々守空房憂來思君不敢忘不覺涙下霑衣裳援琴鳴絃發清商短歌微吟不能長明月皎々照我牀王仲宣七哀詩曰迅風拂裳袂白露霑衣襟獨夜不能寢攝衣起撫琴絲桐感人情爲我發悲音陸士衡擬古詩曰閑夜撫鳴琴惠清音且悲江文通擬古詩曰佳人撫鳴琴清夜守空帷

たかみそきゆふ付鳥か唐衣龍田の山にをりはへて鳴

大和物語云大和國なりける人の娘いときよらにて有けるを京より來りけるをとこのかひまみて見けるにいとおしげ也ければぬすみてかきいたきて馬に打のせてにげていにけりいとあさましうおそろしう思ひけり日くれて立田山にやとりぬ草の中にあふりをときしきて女をいだきてふせり女恐しと思ふ事限なしわひしと思ひて男の物いへといらへもせてなきければをとこ今の歌女返し一龍田河岩根をさして行水のゆくへもしらぬわか事やなしと讀てしにけりいとあさましうてなん男いたき持てなきけりと有覺束なしみそぎとは六月祓に限らす凡はらへをするを云四境祭にこそ鷄に木綿をつけて四方の關にはなたるといへど今誰みそぎするとてゆふを付たる鳥ぞといへば常の人にもいひたれば四境の祭にはかぎらず鷄にゆふ付て放つ事の有こそ顯昭云平城京にては立田山は攝津國へ通ふ道なれば西の關にてゆふ付鳥によまんにたより有といへりから衣は龍田とつゝけんため也　天武紀云八年十一月初置關於龍田山大江山

忘られん時忍べとぞ濱千鳥行衛もしらぬ跡を留むる

文字を鳥のあとゝ云事序に注せり顯注が他鳥もおなじ事なれど千とりにてよみ初つればやかてちとりと讀は歌のならひ也又いつれの鳥もあとは同じことなれど千鳥は岸のしらすにも渚のひかたにも常におりゐてあさるもの也扨又鹽みちぬれば浦つたひして何方へも渡れば行衛もしらずとよむにも便有歟今案これ歌集もしは草子などのおくにかける歌なるべし是より下五首一類せる歌とも也上の

歌には鳥をもてつゝけたり

貞觀の御時萬葉集はいつはかりつくれるぞと問はせ給ひければ讀てたてまつりける　文屋ありすゑ

いつはかりはいつのほど也貞觀五年三月廿日壬午以散位從五位上文室朝臣有眞爲下總守三代實錄第七に有文室眞人有房と云人もみえたり名も似たるは是らが父子兄弟の間にや

神無月しくれふりおけるならの葉の名におふ宮のふることそこれ

顯注にはならのはの奈良の都と有萬葉をえらべる時代委序に付て釋せり

寛平御時歌たてまつりけるついてに奉りける　大江千里

六帖にはちふるが作なり

あしたつのひとりおくれてなく聲は雲のうへまで聞えつかなん

顯注の本には落句聞えつる哉と有て注にはともかくもみえねば書失にや聞えつかなんをよしとすべしひとりおくれては友鶴の皆たてるに獨とまり居るを諸人の官位昇進する中にひとり下位に沈るをたとへたり毛詩云鶴鳴九皐聲聽于天　是にて讀れたり述懐也日本紀竟宴歌「から衣下照姫のつまこひにあめに聞ゆるたつならぬかも（顯集）「天津風容に吹上る雲もあらば澤にぞたつは鳴とつけなん

ふちはらのかちおん

人しれず思ふ心は春霞立いてゝ君かめにも見えなん

ひとしれずおもふ心とはのぞみ思ふ心有けるにや春がすみは立出てといはむため也此うた讀ける折にあはせたるべし

歌めしける時に奉るとて讀て奥に書付て奉りける　伊勢

山河の音にのみきく百敷を身をはやながら見るよしも哉

伊勢は昔宇多御門の御息所にて大内に侍けるおりゐさせ給ひて後内へはまゐらねばおとにのみ聞と讀也身をはやながらは水尾のはやきに身をはやく昔の世になして見はやとそへたる也後撰には昔あひ知て侍ける人の内にさむらひけるかもとに遣はしけるとて此歌をふたゝび載られたる也伊勢家集には今は心うかりてもとのみやつかへをなんし

ける后の御心は限りなくめでたくなまめきて世にたくひなくなんおはしましけるなど書てつぎに后の御歌二首御返し二首有て次にうためすおくに書てまいらすとて此うた有て次につねになやましくせさせ給ひけるをつゐに六月におくれさせ給ひにけるなどあれば是は七條の后のめしけるに奉れる心なり又家集に「百敷の花を折てもみてしかなむかしを今に思ひくらへて

# 古今和歌餘材抄卷二十　六十八首

## 雜體

雜體おほき中に今此集には短歌旋頭歌俳諧歌此三種を載たり業平のかきつはた貫之のをみなへし共に折句の歌なれと一首は旅に入一首は物名に入遍昭の我おちにきと敏行の玉たれの小かめこれら俳諧に似たれと類にひかれてそこ〳〵にいれりものゝへのよしをかおなしゝしなき歌もこの部にいれはいれぬへき歌歟

短歌　今短歌といふは長歌なりこゝに短歌と標すといへとも下にふるうたたてまつりし時のもくろくのその長歌ふる歌にくはへて奉れるなかうた冬の長歌といへり此事難儀なるによりて古來先達異儀まち〳〵なり京極黄門萬葉集一部の卷々を委考て長きを長歌とし三十一字を短歌といへるよしを注し其上に濱成式喜撰式孫姫式拾遺集等を考へ加へて終言先賢之所用云長短之道理事已分明也何至于延喜五年初載長歌是稱短歌哉不審之中不審難儀之中難儀也但斯時萬葉集未遍披露僅窺聞之輩委

不見歌之員數歟又不辨事之理非只就幷短之字推爲號長短之名歟依獨歩之僻案忘重疊之證據可謂斯道之遺恨崇德院被下百首題之時被載短歌一首之由致長卿書之作者皆詠長歌訖亡父撰千載集之時任古今之例書短歌之字訖次に奥義抄を引て云任濱成朝臣式載之歟端所注長短之體已以相違是就各本文載之不注今所用之相違雖レ似レ可レ弁ニ上古與ニ當時ー相替之由乍存之成憚委不分別歟非無所存哉雖有所辨存不破先達之說歟可謂知道又童蒙抄を引擧て惣ての奥書云竊所勘書只爲備愚蒙也於今者誰改延喜以後稱來之說更尋孫姬以前注置之跡且不加私今案只顯先賢之所存許也貞永元年七月日　黄門遺考とあり依獨歩之僻案忘重疊之證據可謂斯道之遺恨とは貫之等獨歩の才人にして此誤ある事を遺恨との給へる也黄門の心明かなるもの也後の人千載集に短歌とあるを遺恨との給へると見たるは大きに誤れり今こと書ことに長歌とのみいへるに付て案するにもとは長歌と標しけむを後の人の短歌とは書改るにや前後にいへる如く此集に後の人のかきあらためたらんとおほしき事おほけれはこれをもうたかふ也所詮萬葉に付て長短を一決すへし萬葉に長歌を端作りに長歌幾首とかける事はなけれと歌一首幷短歌或反歌幾首とかける短歌反歌は三十一字の歌なれは短歌に對して長歌といふ事知られたり其上第五云老身重病經年辛苦及思兒等歌七首（長一首短六首）是山上憶良歌の自注なるに長歌一首ありて三十一字の歌六首あり　第十三云此月者君將來跡云々反歌云々右二首但或人云此短歌者防人妻所作也然則應知長短亦同作焉憶良の自注と此家持の注に長歌を長歌といへる詞あらはれたり長歌に對せされとも三十一字の歌を短歌といへる證は第五梅花歌注云宜賦園梅聊成短歌詠三十餘人常の歌を詠する序也第十七云橙歌初唉云々同作三首短歌云々又云七言一首云々短歌二首云々第二十云冬十一月五日夜少雷起鳴云々聊作短歌一首これら皆常の歌を短歌といへりまた續日本紀第十九云嘉祥二年春三月乙卯朔庚辰興福寺大法師等爲奉賀天皇寶算滿于四十奉造聖像四十軀云々副之長歌奉獻其長歌詞曰かくていたく長き歌あり長歌の製明らかなる事かくのことし後々の證文又謬說等由阿か詞林采葉抄等に

あれと煩らはしけれは出さす

題しらす　　　　　よみ人しらす

六帖四古き長歌
あふ事の　まれなる色に　おもひそめ　わか身は常に　あまくもの　はるゝ時なく　ふしのねの　もえつゝとはに　おもへとも　あふことかたし　なにしかも　人をうらみむ　わたつみの　おきをふかめて　おもひてし　思ひは今は　いたつらに　なりぬへらなり　ゆくみつの　たゆる時なく　かくなわに　思ひみたれて

是をは顯注にも釋せらるへき事なるをいかに心得てすておかれけんやすきに似て釋せされは又かたしこれは下にも思ひの色とよめるひもしは緋にかけていへる也今思ひそめと云るもそれに同しあふ事のまれなる色とは源氏眞木柱に「なとてかくはひあひ難き紫を心に深く思ひ染けん　かく紫を染るに灰を合するがあひかたしと讀るをもて思ふに緋にはあかねむらさきなとに灰を合せて染るに灰のあひ難きにやそれを古歌なれはくはしくはいはて逢みる事のまれなるといふによせたる歟緋の染樣は延喜式第十四縫殿式云深緋綾一匹（綿紬絲紬東絁亦同）茜大四十斤紫草卅斤米五升灰三石薪八百四十斤紅の染樣は變りたれと赤き色をは皆かよはしていへり

萬葉十一
わきもこにあふよしをなみするかなるふしの高根のもえつゝかあらん

六帖には人をうらみんを人わろくみんと有わたつみのおきをふかめてとは深く思ふといふ事を海の中にもおきのかたはことにふかければかりてたとふる也「萬葉わたつみのおきをふかめてわか思へる君にはあはん年はふるとも「同わたつみのおきをふかめておふるものいとも今こそ戀はすへなき

顯注にはかくなわとはからくた物の中にとかくちかへたるものゝすきかきなとのやうにみたれつくりたるあふら物也順か和名に結菓とかけりむすひたるくたものとかきたるもいはれたりとさまかうさまにちかへたれはみたるゝ事によめり今いはゞ和名集云結菓揚氏漢語抄云結菓（形如結緒此間亦有之今案和名加久乃阿和）加久乃阿和といへるを乃阿を反せは奈となる故にかくなわ也水のあわなとのむすへるに似たれは名付たる歟江次第第二云七日節會次第其菓子唐菓子二

杯加久縄一杯云々縄のみたれたるに似たる心歟但かりてかゝれたる歟阿和奈波と假名もたかひたれはおほつかなし與義抄に喜撰式とて出されたる五七五々體歌にも夢のごといともはかなくなりゆけはかくなわに思ひみたれて云々打物の手をいふに蛛手かくなわ十文字八花形なといへるかく縄もこれ成へし

ふる雪の　けなはけぬへく　おもへとも

萬葉 道にあひてゑみせしからに降雪のけなはけぬかにこふてふわきも「同 朝霜のけなはけなまく思ひつゝいかて此世をあかしなんかも

えふの身なれは　猶やます　おもひはふかし

顯注に云此詞はきはめておほつかなし淸輔朝臣の作られたる與義抄の注にも書出しなから此詞をはゑ注せられすさはかりひろく見聞たる人のいひもはたらかさぬはよくかたきことにこそ其上に愚身も聞もおよはすみたる人も侍らねはちからおよはすさにやあらんとおほゆる事も侍れとおろかにはいかてとおほゆれは注し申さす秘藏つかまつるには侍らす密勘に基俊公は閻浮の身なれはをえふと云たる也とそきつけられしと侍き閻浮とは人界の身なれは思はしとおもへとかなはすとこそすこしは普通に心得かたき事に侍れとつたふる説ありてこそ申されけめ道理至極してはおほえ侍らねと説なきと説あるとなれはしはしさてこそは侍らめ顯昭も袖中抄に此説を出されたり三代實錄第十四右大臣良相傳云貞觀九年十月十日乙亥良相薨是年十月初直廬得疾退就里第同月十日告諸子曰今日興福寺維摩會之初講是吾閻浮業之終夕也云々

あし引の　山下みつの　こかくれて　たきつこゝろを　たれにかも　あひかたらはん

上に「足引の山下水のこ隠れてたきつ心をせきそかねつる此歌をよみいれたるやうなれと長歌にはおのつからさる事あるなり

色に出は　人しりぬへみ　すみそめの　夕になれは

すみぞめは黒けれは夕の空のくらくなりゆくをくろき心につゝくたそかれ時とつゝくるも同し心也ぬば玉のくろしとつゝくる心に夜ともやみともつゝくるかことし「後撰戀四 すみ染のくらまの山にいる人はたとり〳〵もかへり來なゝん「六帖 すみそめのた

そかれ時のおほろよにありこし君にさやにあひみ
つ同「たゝこゝに君きまさぬか墨染のたそかれ時に
そのすかた見ん
ひとりゐて　あはれ〳〵と　なけきあまり　せんす
へなみに
あはれ〳〵とはひとりことにいはるゝ也せんすへ
なみにとはいかにともせんするすへもなきにの心
也萬葉に無之とも無窮とも書てすへなしとよめり
日本紀には不知所如とも不解所由とも厝身無所と
も不知所圖ともかきてせんすへしらすとよめり
いつみ式部「忍ふへき人もなき身はあるをりにあはれ〳〵と
いひやおかまし
庭にいてゝ　たちやすらへは
たちやすらふは萬葉に徘徊とかけり遊仙窟には邐
延をよめり
しろたへの　衣のそてに　おく露の　けなはけぬへ
く　おもへとも
此二句上にもあれと古歌なれはいたはらぬ也
猶なけかれぬ　はるかすみ　よそにも人に　あはれ
とおもへは

春かすみは朧々としてよそめにおもしろく見ゆる
ものなれはよそにも人にあはれと思へはとそへた
りよそにも人をといふへきを古歌にはかやうによ
める事おほしこれは元方かあはれとそ思ふよそに
てもとよめる心におなし
ふる歌奉りし時のもくろくのその長歌　つらゆき
これは此集のはしめに萬葉集にいらぬ古き歌を奉
らしめ給ふ其目錄の歌也或抄にふる歌とは我よみ
おく歌のその長歌は序の長歌也といへるは誤なり
千はやふる　神のみよゝり　くれたけの　よゝにも
たえす
以上四句は惣して歌のつたはりくる事を略してい
へり已下目錄
あまひこの　音羽の山の　はるかすみ　おもひみた
れて
春なり上に霞の衣ぬきをうすみ山風にこそみたる
へらなれ
さみたれの　空もとゝろに　小夜ふけて　山ほとゝ
きす　啼ことに　たれもねさめて
夏也上に「五月雨の空もとゝろに時鳥何をうしと

かよたゝなくらん
からにしき　たつたの山の　もみち葉を　見てのみしのふ
秋也上に「こひしくはみてもしのはん紅葉ばを吹なちらしそ山おろしの風古歌なれはかならすいひもはてす下の冬にもつゝけり
かみな月　しくれ〳〵て　冬のよの　庭もはたれにふる雪の　猶きえかへり
以上冬なりはたれはまたらの心也かのこまたらに雪のふるらんなとよめるかことしはとまとは同韻にて通しれとらとは五音通せり萬葉にはたれ霜ふりとよめれは雪にもかきらねと又はたれとのみいひて雪とせる歌あり萬十「さゝの葉にはたれ降おほひけなはかも忘れんといへはましておもほゆ同十九「我宿のすもゝの花かさはに散はたれのいまたのこりたるかも　はたれは雪につきたる用の詞なるをやかて體に用たる也さゝれとのみいひてさゝれ石にするかことし
年ことに　ときにつけつゝ　あはれてふ　ことをいひつゝ
是は惣して上の四季をつかねていへり
君をのみ　ちよにといはふ　世のひとの
これは賀なり上に我君は千代に八千代にといへり
おもひするかの　ふしのねの　もゆるおもひを
以上戀なり上に思ひをつねにするかなるふしの山よりとよめり
あかすして　わかるゝなみた
離別也旅をかねたるへしあかすしてわかるゝ涙にそふとよめり
ふちころも　おれるこゝろも
哀傷也さま〳〵の事はたてぬきのことしこれをよむは織かことし藤衣といふよりおれる心といひて此おれる心は四季等にすへてわたして心得へし
やちくさの　ことの葉ことに
雜の歌に物名雜體大歌所なとをも兼へし續萬葉と名付たる時は此次第なりけるにや但序に書るも次第せされは大かたにみるべしやちくさは八千種なり物のかす〳〵なるをちくさといへは猶おほくいはんとてやつのちくさといふ也萬葉二十「八千種に草木をうゑて時ことにさかん花をしみつゝしのはん

「やちくさの花の移ふときはなる松のさえたを我はむすはん　同集長歌にもうちなひく春のはしめはやち草に花さきにほひ云々

すへらきの　おほせかしこみ　まき〳〵の　中につくすと

以下勅をうけたまはりてえらふ心なりかしこみはおそるゝ也すなはち恐惶等の字をかけり

いせのうみの　浦のしほかひ　ひろひあつめ　とれりとすれと

催馬樂にいせのうみきよきなきさにしほ貝やなのりそやつまんかひやひろはん玉やひろはんこれを取用ひられたる歟鹽貝は一種の名にはあらて鹽海にあるよろつの貝なるへし貝にはさま〳〵有姿あれはうたにたとふるなり

たまのをの　みしかきこゝろ　思ひあへす

玉の緒已下謙退也眞珠は貝の中より出れは鹽かいといふよりつゝけたる歟萬葉第十一第十二に玉の緒の次に貝の歌を繼けり玉の緒はなかくともみしかくとも時により事にしたかひてつゝけたりみしかき心は短才也大井河の序にもわれらみしかきこゝろのこのもかのもにまとゐつたなきことのはふく風の空にみたれつゝ云々

猶あらたまの　としを經て　大宮にのみ　ひさかたの　ひるよるわかす　つかふとて

猶とは短才なるうへに也大宮にのみ久かたのとつゝきたるは宮中にさふらひて久しくつかふまつりてと云也詩大雅夙夜匪懈以事一人

かへりみもせぬ　わかやとの　忍ふ草おふる　板間あらみ　ふる春雨の　もりやしぬらん

しのふ草のおふるいたまあらみは心のおよふかきりえらひあつむれとも猶さゝもらし見もしらやしぬらんといはむための序なから述懷をかねてきこゆ

ふる歌にくはへて奉れる長うた　壬生忠岑

くれたけの　よゝのふること　なかりせは　いかほのぬまの　いかにして　おもふこゝろを　のはへまし

いかほのぬまは上野也延喜式神名帳云上野國群馬郡伊賀保神社今あつまの人保をにこりて申めり凡あつまの俗語濁音多しさやの中山を長山と申ける

も誠は中なるを長と聞ゆるやうに申ける成へし
拾遺「いかほのやいかほのぬまのいかにしてこひしき
人を今ひとめみむ「六帖かくれなくあはすなりなはみ
ちのくのいかほの沼のわれいかにせん　此六帖の
歌はかみつけをあやまりてみちのくとうつし侍る
歟
あはれいにしへ　ありきてふ　人まろこそは　うれ
しけれ　身はしもなから　ことのはを　あまつ空ま
て　きこえあけ
家集幷六帖にはあはれむかしへとありうれしけれ
とは人丸か有つる事のうれしき也
末の世までの　あとゝなし　今もおほせの　くたれ
るは　塵につけとや　ちりのみに　つもれることを
とはるらん　これをおもへは　けたものゝ　雲に
ほえけん　心地して
忠岑集幷六帖にはこれを思へはの次にいにしへも
くすりけかせるといふ二句あり此集流布の本とも
此二句有もありしかれは落たる成べし雲にほえけ
んを家集にはそらにほえけむとあれと本文によら
は雲にほえけん成へし雲の字の草書を空の字の草
と見てあやまれる成へし神仙傳曰時人傳公安臨去
時餘藥器置在中庭雞犬舐啄之盡得昇天故鷄鳴天上
犬吠雲中萬葉に「わかさかりいたくゝたちぬ雲に
とふ藥はむともまたおちめやも「雲にとふ藥はむ
世はみやこみはいやしきあかみ又落ぬへし　三代
實錄云右大臣基經抗表辭攝政言臣將隨陛下爲雲中
之吠犬何更歸城闕爲花表之鳴鶴
ちゝのなさけも　おもほえす　ひとつ心そ　ほこら
しき
初より是まては序に引てすこし心を注せし故に今
はつらはしくいはすあくまて和歌の上のさいはひ
をいへり
かくはあれとも　てるひかり　ちかきまもりの　身
なりしを　誰かは秋の　くるかたに　あさむきいて
ゝ　みかきより　とのへもるみの　みかきもり　を
さ／＼しくも　おもほえす
家集にはかくはこれとゝあり又家集にはみかき
よりとのへもる身のといふ二句なし落たる歟なく
てもみかきもりといふにてそれとはしらすてるひ
かりは帝をは日にたとへたてまつる也ちかきまも

りとは近衛也忠岑もとは左近番長なり後右衛門府生にうつれり右衛門は西なり秋は西よりくれは此集秋の歌にも西こそ秋のはしめ也けれとよめり今もそのこゝろにて秋のくる方といへり但近衛は中重をまもりて左近は東右近は左近に相對して西也右衛門は外重をまもりて左衛門に相對して西也今は左近に相對して西にうつるやうに聞ゆれと下にみかきよりとのへもる身のみかきもりといへるにあらはれたり衛門はみかきもりとよめりをさ〳〵しくもおもほえすとは近衛番長より右衛門府生に欺き出せる人をいへり日本紀に執制とも幹部とも明直ともかきて皆をさ〳〵しとよめり史記滑稽傳曰沈湎不治何も心たがふまじき中にも明直ならぬと見るはいよ〳〵やすし心ならすうつされける成へし顯注云忠岑は定國大將隨身也いかに衛門府生にはうつされたりけるにか古くはさも侍るにや今案定國の隨身なりし事は大和物語に見えたり

こゝのかさねの　中にては　嵐の風も　きかさりき

離騷曰君門多九重王逸曰天門凡有九重洛陽城閶闔門西向六道門九重也文集曰君門九重閉なるといへるは外衛に有て中衛に有し時をいふ也菅原孝標女三河國宮路山にてよめるうた　嵐こそ吹こさりけれみやち山また紅葉はのちらて殘れる

今は野山し　ちかけれは

外衛なれは野山もちかきやうにいひなすはうたのならひ也

春はかすみに　たなひかれ

萬葉に「卷向のひはらにたてる春かすみくれし思ひはなつみけめやもとよめりくれしは欝の字をかけり今も心の欝々としてむすほゝるを霞に寄てたなひかれとはいへり

夏はうつせみ　鳴くらし　秋はしくれに　袖をかし

郭公の歌に我衣手のひつをからなんとありき今は袖のぬるゝをしくれにかしたるといへり

冬は霜にそ　せめらるゝ

文選張平子思玄賦云逾二白露之爲一霜　かしら霜となりて老にせめらるゝをいへり

かゝるわひしき　みなからに　つもれる年を　しるせれは　いつゝのむつに　なりにけり　これにそはれる　わたくしの　老のかすさへ　やよけれは　身

はいやしくて　年たかき　ことのくるしさ

年たかきは身のいやしきに對してたふとき心なり

いつゝのむつは五六三十也顯注は外衞の勞三十年

になりぬといふ也と釋せられ定家卿は但外衞勞三

十年には侍らしたゝ我年三十をすてに老と申にや

と了簡を加へられたれと共に不審也忠岑か宮仕の

はしめよりをいふ成へし其故は後撰に壬生忠岑か

左近のつかひのをさにてふみおこせて侍ける返し

貫之「ふりぬとていたくなわひそ春雨のたゝにや

むへき物ならなくに　ふりぬとては雨のふるに身

のふりぬとてとよせられたれは左近番長にて年ふ

りて又外衞勞三十年なるへき事有へくもなし况や

又定國隨身なりしは猶昔の事なるべし其上歌のつ

ゝきをもてみるに六十ばかりにても有ぬへきにや

わたくしの老の數とは奉公三十年の外みつからの

生年の事也やよければばは顯昭云彌生をやよひとい

へは彌をやよとよむへき歟常の本にはせめくれは

と有密勘に云おいの數さへやよければは用此說㑹吾

說にはいやよきれはといふ也彌過也いよ〳〵過行

心云々此事猶覺束なしとそ申されし今案彌生は彌

をやよとよむにあらす三月に至れば若草のいよ

〳〵生ひそへばいやおひと云へきを彌はいやを上

略し生はおとよと同韻にて通してやよひとはいふ

也然は其儀にあらす彌生の說はみつからおほつか

なしとなり只何となくおほければといふ心と見て

あるへきにこそ藥師寺に光明皇后の立給へるとい

ふ佛足の跡をゑり付たる石あり拾遺集には山階寺

にある佛跡といへり其傍に此事をよませ給へる二

十首はかりの和歌おなしく石にゑりて立らる其中

に「己乃美阿止阿止夜與都比賀利乎波奈知伊太志

毛呂毛呂須久比和多志多麻波奈　この夜與都比賀

利は今のように都をくはへておほくのひかりとの

たまへるなるへし

かくしつゝ　なからのはしの　なからへて　なには

のうらに　たつなみの　波のしわにや　おほゝれん

なからへてを家集にはなからへはとかけり波のし

わを老のしわと有波のしわといふにつけておほゝ

れんといへり　朗詠集云太公望之遇周文渭濱之波

疊面綺里季之輔漢惠商山之月垂眉

さすかに命　をしけれは　こしのくになる　しらや

まの　かしらは白く　なりぬとも　音羽の瀧の　おとにきく　おひすしなすの　くすりもか　君か八千代を　わかえつゝみん
家集には音羽の瀧のを音羽の山のとありさすかに命をしけれはとはかゝる勅にあへる故にいのちのをしくなるなり歌のみちにつきてさいはひの外はうれへあれはさすかにといへりおひすしなすの藥もかは列子湯問云渤海之東不知幾億萬里有大壑焉其中有五山焉一曰岱輿二曰員嶠三曰方壺四曰瀛洲五曰蓬萊其山高下周旋三萬里其頂平處九千里山之中間相去七萬里以爲隣居焉其上臺觀皆金玉其上禽獸皆純縞珠玕之樹皆叢生華實皆有滋味食之不老不死所居之人皆仙聖之種一日一夕飛相往來者不可數焉戰國策曰有献不死之藥於荊王者文集曰海漫々曰中有三神山々上多生不死藥
風躰
君か世に逢坂山のいはし水こ隱れたりと思ひける哉
六帖山の題に入たるは今と同し水の題に入たるは落句を何思ひけんと有歌の心はかくはかりみちを興し給ふ君か世にあふ事をかねてはしらすしてあふ坂山の岩しみつの木かくれたることく人しれす沈める身と歎し事をくゆるこゝろ也或抄に君か世に逢なからこもり居たる心也と云るは下の句の意を得ぬもの也此集に長歌五首あり反歌はたゝ此一首のみなり反歌は經の偈頌文章の詞のことく長歌の要を取ていふ也萬葉には四首五首まてあり詞林采葉抄に初に短歌とかけるは此歌を指なるへしとて影略互顯といへり影を楊に作れるは失錯歟影略互顯の心をよく得す僻案なれば今彼をとらぬ故に是を略す見む人しるへし

冬のなかうた　　凡河内みつね

家集にはうちにたてまつるとあり
ちはやふる　神なつきとや　けさよりは　くもりもあへす　うちしくれ
家集にはけさよりはの句初しくれにてうちしくれの句けふよりはなり六帖にはうちしくれをはつしくれとあり「神無月ふりみふらすみさためなき時雨そ冬の初なりける（後撰冬）
もみちとゝもに　ふるさとの　よしのゝ山の　山あらしも　さむく日ことに　なりゆけは
○紅葉とゝもに降といふ心にふるさとのとつゝけた

り山あらしは山おろしなり嵐の字を山下出風也と注しすなはち家集には山おろしもとあり萬葉に下風とかきてあらしともおろしともよめり

玉の緒とけて　こきちらし　あられみたれて

あられみたれてといはむ爲に玉の緒とけてこきちらしとさきにいふなり

霜こほり　いやかたまれる　にはのおもに

いやかたまれるを家集にはいやかたましくとあり霜こほりは霜と氷とにはあらす霜のこほりたる也

むら〳〵みゆる　冬くさの　うへにふりしく　しらゆきの　つもり〳〵て　あらたまの　年をあまたも過しつるかな

年をあまたもを家集には年をおほくもと有白雪のつもり〳〵てはおのつから終二句の序となれりある人陶淵明か歸去來辭を歸去來といひなからなとか歸て後の事をは賦しけんといひける時又ある人ちはやふるかみな月とやけさよりはといひて末に白雪のつもり〳〵てなと年のをはりをかけてよめるに同しと申き

七條の后うせ給ひにけるのちによみける　伊　勢

延喜七年六月八日崩三十六

おきつなみ　あれのみまさる　みやのうちは　年へて住しいせのあまも　舟なかしたる　こゝちして　よらんかたなく　かなしきに

おきつ浪はあれのみまさるといはん爲にてやかて下にいせのあまもなと縁をはなれつゝけん料也伊勢かみつらの名をよめる歌は後撰に「伊勢の海に年へて住しあまなれとかゝるみるめはかつかさりしを「おほろけの蜑やはかつくいせの海の浪高き浦におふるみるめは　舟なかしたるは毛詩小弁云譬彼舟流不知所届上の秋のうたにもあまのなかせる舟かとそみるともみちのちれるをよめり齋宮女御集伊勢にて「あさましく舟流したるあまよりも我袖の浦のしほもかはかす

涙の色の　くれなゐは　我らか中の　しくれにて　秋のもみちと　ひと〳〵は　おのかちり〳〵　わかれなは　たのむ陰なく　なりはてゝ

六帖にはたのむ陰なくをたのむかたなくとあり家集は今とおなし陰まされり萬葉第二從山科御陵退散之時額田王作歌「山しなのかゝみの山によるは

もよのつきひるはも日のつきねのみをなきつゝあ
りてや百敷の大みや人はゆきわかれなん　是は天
智天皇の御陵よりちり／＼になる時の歌也信明
集に亭子院うせさせ給へる又のとし御はてに六帖「ふ
るさとの梢のもみち秋はてゝおのかちり／＼なる
かわひしき同「山風のふきのまに／＼紅葉々もおの
かちり／＼ちりぬへらなり
とまるものとは　はなすゝき　君なき庭に　むれた
ちて　空をまねかは　はつかりの　啼わたりつゝ
よそにこそみめ
人はちり／＼にまかりてあかれて殘るものとては
うゑおかせ給ひし花すゝきのみ戀まいらするやう
にむなしき空にむかひてまねかはわれらは初雁の
ことく鳴わたりてそれをよそにこそみめと也雁は
雲井にわたれは空をまねかはといふにつゝけてよ
そにみむといふも緣なり

旋頭歌

旋頭歌の事眞名序の中に注せしかことし赤人集及
躬恒集の中にこれをかうへをめくらす歌とかけり
奥義抄に旋頭は上にかへるとよむなり昔にかへる
義也かるかゆへに濱成式には此歌を雙本となつく
これ本にならふといへはむかしに返る義に同し此
注はおほつかなし旋頭の義は躬恒集にかなにかけ
ることしたとひ左右馬寮なとのことく頭を上の字
と同しくかみとよむともそれはかうへの心にして
昔にかへる義にあらす上下各三句なれは六句の歌
ともいふ故に上句を本とし下句を末として末の句
本にならふによりてこそ雙本とはいふをむかしに
かへる義とはいかていふへき文末集に五七五々七
々と三十六字によめる歌あり萬葉幷に此集拾遺等
皆五七々五七々と三十八字によめり但萬葉第十六
に「彌彦の神のふもとにけふしかも鹿のふすらん
かはのきぬきて角つきなから　此一首のみ五七五
七七七とよめりこれも字の數はおなしけれは三十
六字によまれたるはおほつかなし

題しらす　　　　よみ人しらす

みつね集
うちわたすをちかた人に物まうすわれそのそこに白
く咲るは何の花そも
うちわたすとは遠き所なかき事にいへり日本紀

に仁徳天皇の御歌にもうちわたすながはへなすとよませ給へり「萬葉打わたす竹田の原になくたつの間なく時なくわかこふらくは「後撰うち渡し長き心は八橋のくもてに思ふことはたえせしよりて打わたすをちかた人とつゝけたり或抄に打過るをいふと注せるはかなはす物まうすわれはわれ物まうすといふへきを打かへしていへり物申は源氏には事をいひ出る詞也常にいふもしか也仁徳紀に山城のつゝきの宮に物申す云々萬葉第十六に石まろにわれ物まうす云々八雲御抄に是ははてに七字を添ふと俊頼口傳にいへりと注せさせ給へりしかれは俊頼はわれそのそこにとわれを下の句のはしめと心得られける歟しからす上にいふことく其體萬葉に一首あれと今はわれを下へつらねては一句つゝかて心得られぬなりまた或抄に三四の句を五字七字によみてわかそのそこには我園也そこには邊也と注せるは誤なりといふにたらすそこは彼處とかけり此處をこゝといふにむかへる詞なりをちかたなれは白くみゆるを梅とはしれと早くさけるに驚きあやしみて何の花そととふなり「萬葉沫雪ははたれにふると見る迄になからへちるは何の花そも　三體詩劉言史詩云不知何樹幽崖裏臘何月開花似北人注曰似者呈似之似猶言向也言史北人南遊見景候之異不能無感劉長卿云江華獨向北人愁亦同此意用破愁字則不含蓄有餘味矣下の句これらの心に似たり

返し

春されは野へにまつ咲みれとあかぬ花まひなしに只なのるへき花の名なれや

此歌は顯昭は三四の句を七字五字に心得られ定家卿は五字七字に習ひ傳へておはしけるを顯注をみて花もいひなしのなと申歌は人のみし所にても讀て侍しにや今こそははつかしく侍れとかゝれたりこれは「三芳野の花もいひなしのそらめかもわけ入峰ににほふ白雲　此歌のこと也彼卿の僻案抄云花まひなしとは花もいひなしにたゝなのるへき花の名なれや花もいひなしにてこそあれあれやすらかにいかゝならんといへる也歌をかけるやうに君てへはゝ君といへはなりけぬへくはきえなはきえぬへく也物にさりけるは物にそ有ける也かやうにかくやうに花もいひなしを花まひなしとかけるな

りと有は顯注を見給はぬさきの製作故也よき人はあやまちを知て改むる事を憚かられぬを智なき者は諺にいふ榎の實はならはなれ木は椋の木といふ風情にてふたゝひ過アヤマチする事淺ましき事也顯注にまひなしにはまひなしにといふ詞を略してまひといふ也まひなひとは思ふ事ありて物を心さしにとらするをいふ也萬葉云「あめにます月よみをとこぬさはせんこよひのなかきいほ夜つきこそ　この歌は幣とかきてぬさはせんとよめりぬさたてまつらん夜長かれといふ詞なり或抄にまひはせんとありまひなひたてまつらん夜長かれと云詞也幣の字をはまひなひともよむ也今案まひの事萬葉にあまたよめり今ひかれたる歌も今の本にはまひはせんと點せりぬさはせんと有古點は萬葉を能みぬわろき點なり是は梅の花とはしるらんをいとゝくさけるをほめんとてわさとみしらぬよしにとへるを返歌も春されは野へにまつさくとはいひなから梅と名のらすしてまひなしにたゝにいふへき花の名なれやとはこれも梅をほむるこゝろ也萬葉第八縣犬養娘子依梅發思歌云「今のことも心を常に思へらはまつさく花のつちに落めやも　此集にも春くれはやとにまつさく梅の花とよめり右二首古歌のすかたなり

題しらす

みつね集
はつせ河ふる川のへにふたもとある杉年をへて又もあひみん二本有杉

躬恒集には初せ川ふる川のへに年をへて二本ある杉又もあひみんおもかはりせてと有はつせ河ふる川のへとは常は泊瀬に別にふる河のへといふ所のあるやうに思へり今案泊瀬は古くより名高き所なれば泊瀬川をやかてふるき川と云心にかねてふる川といへる歟延喜式云出雲國造神賀詞にも彼方乃古川席此方乃古川席と云る事有堀河院次郎百首に兼昌か川の歌に「ふる川のとたへを渡る旅人のもすそに青くつけるうき草　とよめるも古き河也ふる川のへはふる河のほとり也み吉野の大川のへといふが如し二本ある杉とは泊瀬川のほとりに昔武隈の松のやうにものふりたる杉の二本たてるが有ける成へし又もあひみんとは二本は夫婦に似たれは其杉によせて戀の心によめる歟此歌古歌の姿な

れはたゝ杉をほめて云る成へし後の人のさま〳〵に取用たるは此歌にはあつくへからす源氏玉葛に「二本の杉のたちとを尋ねすはふる河のへに君をみましや　これ長谷にまうてゝ今の歌によりてよめる也但夫木三名寄に　源具親「石上古川のへの柳陰めくみもあへぬ春のいろかな　夫木六杜若よみ人しらす「いそのかみ古川のへの杜若春の日かすはへたてきにけり　この歌とも勅撰の集にもいらす作者もたしかに證とすへきほとには侍らねと共に石上ふる川のへとつゝけたるに付て思へは長谷川の末北になかれてならまてもつゝく故に萬葉第の一長歌に「隱國泊瀬乃川爾船浮而吾行河乃川隈之八十阿不落萬段顧爲作玉鉾乃道行晩青丹吉楢乃京師乃佐保川爾伊去至而云々とよめり同第九大神大夫任長門守時集三輪邊宴歌「みもろのや神のおはせる初瀬川身をしたえすは我わすれめや　此三諸は三輪山也山をやかて神といへりおはせるは帶にせる也三輪にては三輪川といへと水上長谷川なれは妹背の山の中に落るよしのゝ川とよめるに同し風雅集夏從二位行家「三輪川の水せきいれてやまとなるふるのわさ田は早苗取なり　これ又布留

川をみわ川とよめる心上に同しふるの社の杉の事は日本紀第十五云天皇浩之日石上振之神榲伐本截末云々萬葉第十に「石上布留の神杉かみさひても我はさら〳〵戀にあひにけり　同十一に「石上ふるの神杉かみとなる戀をも我は更にするかも　あまりにふりにけれは精靈の出來て神となりける故神杉と昔よりいへる成へし其木の跡にや今もふた杉とかいひてつゝしみたてまつる所有よし所のものゝ申けるとてある人申きかゝれは今の歌泊瀬川の末のふる河のへと云心に彼神杉をふたもとの杉と布留の方にてはよめるを彼杉も昔語となりてけれは歌のおもむきをよく知る人なくて源氏にも上にひけるやうによめるにや同し手ならひの卷に手習君「はかなくて世に古川のうきせには尋ねもゆかし二本の杉　尼君「ふる川の杉のもとたちしらねとも過にし人によそへてそみる　此二首はたゝふる河とよみたれは上に長谷川を古き河といふ心歟と申つる愚案たかへる歟後の人は石上ふる川のへとよめるも今の歌を布留川の事なりと心得てけれるにやこれ正義にかなふへくおほえ侍り

つらゆき

みつれ集

君かさす三笠の山の紅葉はの色神無月時雨の雨のそ
める成けり

此歌躬恒集にあるにはしくれの雨のを雨にとあり
君かさすとはみかさの山といはん料也萬葉にも
「おほきみのみかさの山の紅葉はけふのしくれ
に散か過なん「君かきるみかさの山にゐる雲のた
てはつかるゝ戀もするかな　なとよめり此歌の心
は枕詞を下まてかけてしくれの雨ゝ君か爲に紅葉
の色を添てしみけると讀る歟とそみゆるそめるは
しめるといふにおなしそむるといふにはかはれり
家持集に「もみちはのしくれとふれはさすかさの
こき紅にしみぬへら也

誹諧歌

誹は俳の字なるをなたらかなる草書の相似たれは
誹となれる成へし俳玉篇之皮皆切雜戯也漢書談笑
類俳倡日本紀に俳優をわさをきとよめり誹玉篇云
甫尾切誹謗也音義共に大に異也諧玉篇云胡皆切和
也合也調也倡也或作鮨乂云調徒聊切和合也大矛切
選也淳于髡優旃等か戯言に事寄て時のたすけとな
れる成へし奥義抄には史記漢書等を引て滑稽にな
すらへらるくはしくは彼抄を見るへし八雲御抄に
はこれはいかなるを云にかあらんまさしき様しる
人なしなと事むつかしき事に注せさせ給へり是も
また彼御抄をひらきて知へし其後は史記の滑稽傳
に手を取ておしふとやすらかにいはれたりこれに
依へし史記滑稽傳云太史公曰天道恢々豈不大哉談
言微中亦可以解紛優孟多辨常以談咲諷諫優旃善爲
咲言然合於大道淳于髡滑稽多辨郭舎人發言陳辭雖
不合大道然令人主和悦これ滑稽の大體也滑稽は王
道にあらされとも妙義を述て時に用あり俳諧もこ
れに准ふへし佛法にもこれあり菩薩有て戯笑をさ
きとして人の心をよろこはしめて引て道にいらし
むすなはちこの戯笑は菩薩方便なり迷者の爲には
方便なれと菩薩の心は眞實にして此外に道有事な
しいはゆる同事攝なり鎌足の戯言によりて入鹿か
劍を解し故に天智天皇大事を遂させ給ひて皇基か
たまりうねめか水をはしきかけてあさか山の歌を
よみしは葛城王のいかりをたちまちにとけたる類
もまた此心なるへし又たゝかくのみならすたはふ

れによみたる歌のよきをこれにとれり萬葉第十六に啞咲黑色歌啞痩人歌なとあり此類也詩云善戲謔兮不爲虐兮といへり論語に孔子子游が治むる武城に行給へるに絃歌の聲あるを聞てわらひて割鷄焉用牛刀とのたまへるもたはふれ也聖人たにありつる事なれは誰かより〳〵たはふれの事なからんや

題しらす　よみ人しらす

梅の花見にこそきつれ鶯のひとく〳〵といとひしもをる

顯注ひとく〳〵とは鶯はなきはてゝきりこゑにまことにはやく鳴ことありそれは人く〳〵となくやうに聞ゆれはかくよめり古物語にかくこそ見ゆるといへり大和ものかたりに「草ふかくあれたる宿の鶯のひとくと鳴や誰とかまたん　厭ふ心は鳥はすへて人を恐るゝをもいふへしまたやとれる枝をおらんするかと思ふにもあるへし此歌より深養父か春のとなりと讀るまては此中の四季の次第なり

素性法師

山ふきの花色衣ぬしやたれとへとこたへすくちなしにして

山吹のきぬはくちなしにて下をそむれはその名につきてとへとこたへすとはよめり後にいはぬ色とよむも此故なり六帖「くちなしの色に衣を染しよりいはて心に物をこそおもへ

藤原敏行朝臣

いくはくの田をつくれはか時鳥してのたをさを朝な〳〵よふ

顯注にしての田長とは郭公の一名也と古きものにしるせりほとゝきすはしての山より來て農をすゝむる故に死出の田長といへり但しての田をさを朝な〳〵よふといふはしての田長とは別のものと聞ゆいかてかみつから名をよふへきといへり今案よふとは出死の田長といふものゝ別にあるをよふといふには侍らし　博物志杜宇啼苦則自呼名曰謝豹かくもいひたれは農をすゝめてなくをよふといふと思ふへし朝な〳〵とは日ことにの心歟又朝つとめて事をなす心にまことの朝ことにといへるか

七月六日七夕の心をよめる　藤原のかねすけ

和名集に牽牛をいぬかいほし又はひこほしといひ

織女をたなはたつめといへり萬葉これに同しひこほしをたなはたといへる事なしたなはたは棚機の心に名付たれはけにも織女こそはたをはおれは牽牛にかよはして云へきにあらすされと此集より後かよはしてよめりと見えたり今たなはたの心とはうたによるにひこほしをいへる歟こゝろとはけふにしてあすの心をよめはいふ歟又ほしの心をくみてよむ心歟

いつしかとまたく心をはきにあけて天のかはらをけふや渡らん

またく心をとはいそく心なり史記晉世家云恵公與女期三日至而女一日至何速也女其念之　此速の字みまたけるとよめる心にまたかると云事を兼ていそき思ひし心をあらはすを河をわたらんとて衣を脛まてかゝくるに添たり毛詩深則厲淺則掲以衣渉水日厲攝衣渉水日掲土佐日記にも何のあしかけに言つけてほやのつまのいすしすしあはひをそ心にもあらぬはきにあけてみせけるとあれとそこの一段すへて心得かたしあすこそわたるへきをはやかういそく心にけふよりまたけてや渡らんとよめりことかきの下に注せし如くあすの心をよまはけふや渡らんはけふやわたるらんと思ひやるなりたなはたの心をはかりてよまはけふやわたらんと思ふなり「家持集我宿のえの木つきの木月ことにつかひはやらん心またくな　これも心いられしていそくなといふ心也

凡河内みつね

むつこともまたつきなくに明ぬめりいつらは秋のなかしてふ夜は

むつことは睦言也此歌は小町か秋の夜も名のみなりけりとよめるに同し心なからいつらは秋のなといへる所俳諧にて七夕後朝の心にこゝに載たる也戀のうたならは戀をは下に一類しておける中に秋の野に妻なき鹿とよめる歌の前に有へき也

僧正遍昭

秋の野になまめきたてる女郎花あなかしかまし花も時

遍昭集にはあなかしかましをあなこと〱しと有なまめくは遊仙窟に婀娜と書り日本紀に幸媚をまめきこぶとよめり伊勢物語に人なまめくといへるは此まめきと同し詞にて今も其心歟あなかしかましはあまた物いふをのみはいはす女郎花のおほく

たちならひて女の色をてらひ寵をあらそふに似たるをあなかしかましのさまや花とみゆるもたゝ一時の事そとをしふる心也

よみ人しらす

秋くれは野へにたはるゝ女郎花いつれの人かつまてみるへき

のへにたはるゝと云つれはいつれの人かつまてみるへきとは人をつみて思ふよしをしらする心を摘(ツム)に兼たり毛詩云匪二面命一レ之言提二其耳一　源氏紅葉賀に　たちぬきたるかひなをとらへていといたうつみ給へれはねたき物からえたへてわらひぬ(千載集頁喜法師)「人のあしをつむにてしりぬ我かたへふみおこせよと思ふ成へし

秋霧のはれてくもれはをみなへし花のすかたそみえかくれする

みえかくれは俗に常に申ことは也みゆるにもあらすかくるにもあらすまたは見え又はかくるゝをいふわれかほよしと思ふ人のまほにみえぬ物からものゝひまよりほのかにみゆるにはれくもる霧間のをみなへしをよそへていへり

花と見てをらんとすれは女郎花うたゝあるさまの名にこそ有けれ

日本紀に奇偉をうたてあるとよめりてとたと五音通してうたゝある也又古事記云爾明旦未二日出一之時忍歯王以平止隨乘二御馬一到二立大長谷王假宮之傍一而詔二其大長谷王子之御伴人一未二寤坐一早可レ白也夜既曙訖可レ幸二獵庭一乃進馬出行爾侍二其大長谷王之御所一人等白宇多弖物云王子(字多弖三字以音)故應愼亦宜レ堅二御身一云々貫之集にありとほしの神をいふ所にとしころやしろもなくしるしも見えねとうたてある神也以上心かよふへしはなやか也とみて立よりてをらむとすれはたけもたかく枝も長くひろこりて奇偉なるすかたにてをみなへしといふは只名のみ也といふにや菅萬にうたてを別樣とかゝせ給へるにも奇偉の心歟或說にうたゝあるさまはあまりあるさまなりとて後拾遺に「思ふ事なけれとぬるゝ我袖はうたゝあるのへの萩のつゆかなといふをひけりまことに此後拾遺の歌はさもきこゆれとそれにては俳諧のこゝろなくまた外にあまりあるさまとよめる例なき歟後の歌をもて昔を證

すましきもあるへし
寛平の御時きさいの宮の歌合のうた
在はらのむねやす
秋風にほころひぬらし藤袴つゝりさせてふきり〳〵すなく
菅萬に第四句つゝりさせとてあり顯注には蛬はつゝりさせかゝうひろはんとなく故にかくよむといへり古物には蛬をはさせといふそれにつきてつゝりさせとはつゝくる也蛬のつゝりさせとなくにはあらぬにや又後拾遺序にも秋のむしのさせるふしなしとかけるは此故也と申たり今案又菅萬に「秋風の吹たちぬれはきり〳〵すおのかつゝりとこのはをそさす」家持集「きり〳〵すつゝりさせとは鳴をれとむらきぬもたる我はきゝ入れす」同「から衣立田の山にあやしくもつゝりさせてふきり〳〵すなく」同「きり〳〵すわかきぬつゝれ侘人の宿も秋風よきすふくなり」これらを引合てみるにきり〳〵すのつゝりさせと鳴なりおのかつゝりとこのはをそさすといひ又我きぬつゝれとのみいひそともにさせといはされはふるきものも後拾遺序もあやまれる也
あす春たゝむとしける日となりの家のかたより風の雪を吹こしけるを見てそのとなりへよみてつかはしける
清原の深養父
あす春たゝんとしけるとは正月節のつこもりにてついたちをさゝはしはすのつこもりの日とかくへきにや又冬なからとよめるも節と聞ゆる歟
冬なから春のとなりの近けれは中垣よりそ花は散ける
六帖にははての句花はさきけると有拾遺集雜秋に西なる隣にすみてかくちかとなりにありける事なといひおこせて　三統元夏式部大輔理平子「梅の花匂ひの深く見えつるは春のとなりのちかき成けり　返しつらゆき「梅もみな春ちかしとて咲物をまつ時もなき我やなになる　雜秋は冬を兼たり貫之の家は東にて東は春の方なれはその心をあらはさん爲に詞書に西なるとなりに住てとかゝれたり　六帖「こよひしも稻葉の露の玉しくは秋のとなりになれは成けり

題しらす　　　　　よみ人しらす

いその上ふりにし戀の神さひてたゝるに我はいそね
かねつる

拾遺にふたゝひ入たるには落句ねきぞかねつると
て作者藤原忠房朝臣と有いその上はふりにし戀と
つゝけん爲也神さひてはこれをうけたり萬葉には
ふりたる事を神さふといへり物のふるきは精靈あ
りてたゝる故にそのこゝろにいへりふりにしこひ
の神のことくたゝる故にねられぬといへり後のこ
となれと山谷か詩にも夢不到漢東茗椀乃爲祟と作
れり俗にもくひものにあてらるゝなとをもたゝる
といへり（臣） 說文云祟神禍也徐曰禍者人之所召神因
而討之祟者神自出之以出警之者師古云禍咎之徵所
以示人也「（六帖）木綿かけていのるしるしの神さひてた
ゝるにしあれはぬきぞかねつる「（同）但馬原のよれと
もあはぬ思ひをは何のたゝりに付てははらはん　是
よりよひのまに出て入ぬる三日月といふ歌まては
戀なり

枕よりあとより戀のせめくれはせんかたなみそとこ
なかにをる

あと枕より戀のせめくれはせんかたなく床中にか
こまれてくるしむこゝろ也「宿を（うつほ藏ひらき）いてゝ跡もまく
らもさためねはふみやるかたもそこはかとなし
「（狹衣）人しらはおち（けイ）もしつへき思ひさへあと枕ともせ
むる色かな「（貫之集）いそは皆鹽みちぬれはにほ鳥の波の
中にそよるはねぬへき

戀しきかたもかたこそありときけたてれをれとも
なき心ちする

こひしきかはこれにふたつの樣侍へしひとつには
かは哉にてこひしきかなと一句をたてゝ下はそれ
をことわるにやこひしきかたもありこひしからぬ
方もありとこそきけなとかたてれともをれともこ
ひしくて戀しからぬかたのなき心ちはするそとよ
めるにやふたつにはこひしきか方とつゝけて戀し
き人の方はそなたと定まりて有とこそきけとて下
はさきとおなし心にや萬葉にかなしきか駒はたゝ
ともにとよめるはかなし思ふ人か也

ありぬやと心みかてらあひみねはたはふれにくきま
てそ戀しき

逢みすしてさてもあらるゝやとかつは試みかてら

にたはふれにあひみねはたはふれにくきまてこひしくてあはすしてさてもあられぬ心也たとへは木をりなる人にたはふれかゝりてうちとけむとすれは心もえすしてはらたゝしくなるやうなるをたはふれにくきとはいふなり源氏物語箒木にいたくつな引てみせしあひたにはいといたく思ひなけきてはかなくなり侍りにしかはたはふれにくゝなんおほえ侍し彼物語におほくかけり（みつね集）「君みてはありぬへしやと心みにたゝまくもうきからにしき哉」（後拾遺）「逢見てはありぬへしやと心みるほとはくるしき物にそ有ける　これら今の歌をふみて讀りと見えたり

みゝなしの山のくちなしえてしかな思ひの下そめにせん

顯注に思ひの色の下染とは紅もあかく火もあかけれはやかておもひの色とよせたり紅のきぬもやまふきの衣とのかはりめはおなし紅にはそめたれと山吹はくちなしを下そめにしたるかかはるなりみゝなしの山のくちなしととりよするはしたのおもひをしのふ心にて耳なしは人にきかれしくちなしは人にかくともいはれしといふ心なり今案續後撰集に七條后のむさしにつかはしける平貞文「もゝしきのたもとの數はみしかともわきて思ひの色そ戀しき　大和物語に此歌の後にいふといへりけるはむさしの守のむすめになん有けるそれなんいとこきかいねりきたりけるそれを思ふ也けりと有

顯昭紅もあかし火もあかけれはやかておもひの色とよせたりと申されたれともゆるおもひ思ひにもゆるなといふ時こそ火にはいひなせ音なから緋と紅といふ色あれはやかてそれにいひなす成へし緋と紅とくはしくいへは異なれ共皆あかきをもとゝすれは歌にては同しかるへし赤と紅と異なれともかよはしていふ是例也新古今集に延喜御時白馬節會見侍りけるに車より紅のきぬをいたしたりけるを檢非違使のたゝさんとしけれはいひつかはしける女藏人內匠「おほ空にてる日の色をいさめては天の下には誰か住へき　かくいへりけれはたゝさすなりにけりこれは紅を照日の色とよせたるは日も赤けれはなるへけれと思ひの色とよせたるはおほきを思ふに緋の色とよせたる成へしいにしへは紅も山吹も皆くちなしをもて下染にしけるにや延喜式

に紅緋なとのそめやうをいへるにもくちなしをいはねはたしかならねと今の歌に然おほしき也六帖「めなし川耳なし川のみす聞す有せは人は恨さらまし足引の山田のそほつおのれさへ我をほしといふうれはしきこと

そほつとは田を鳥なとにはませしとておとろかしにたてる人かた也いなはの露にそほちてたてれはそほつとは名付たるにやされはあやしの人のかすならぬものといはんとてそほつによそへたる也それさへわれにあはまほしといふなんうれへおほゆるとよめるなりあやしき人にけさうせられてよめる歌なるへし八雲御抄には我を烏帽子にせんといふことく注せさせ給へるはいかゝ思しめしけるにかおほつかなし萬葉「山しろのくせのわかこかほしといふわれあふさはに我をほしといふ山城のくせ後撰「いとはるゝ身をうれはしみいつしかと飛鳥川をもたのむへら也　催馬樂に云山しろのこまのわたりのうりつくりわれをほしてふ云々毛詩卷耳曰陟彼砠矣我馬瘏矣我僕痡矣云何吁矣

きのめのと

富士のねのならぬ思ひにもえはもえ神たにけたぬむなし煙を

ふしのねのならぬ思ひとはちやはふる神もおもひのあれはこそ世を經てふしの山ももゆらめとよめることく思ふ事のなりたらはもゆるましきに昔より今に至るまてもゆれはつひにおもひのならぬとしらるゝ故によそへていへり淺間の神たにむなしき思ひの煙をはえけち給はぬはまして人にてはいかてかけつへきなれはもえなはもえもせよと也もし是は後撰に平貞文「我のみやもえて消なんよとゝもに思ひもならぬふしのねのこと　返し紀のめのと「富士の根は燃わたるともいかゝせんけちこそしらね水ならぬ身は　とある贈答をおもふにおなし時の返しにて燃はもえねとは平仲にいへるにやさらすはみつからふてゝいへる歟

紀のありとも

あひみまくほしはかすなく有なから人につきなみまとひこそすれ

あひみまくほしう思ふ心はかすかきりなくありな

なから人にあふへきつきのなきに思ひまとふとい
ふ心を星と月とによせてよめりつきなしとはこと
わさにもといふ事也便宜なき也遊仙窟に方便をつ
き〳〵しとよめり「六帖君にのみあはまくほしの夕く
れは空にみちぬるわか心かな「後拾遺戀四藤原長能かそふれは空なる
ほしもしる物を何をつらさの數にとらまし

小の丶小町

人にあはむつきのなきには思ひおきてむねはしり火
に心やけをり

顯注には月のなきよはゝと有思ひおきてとはつきな
き事をかねてよりおもひ置といふにおきゐたるを
そへたりむねはしり火とはむねのさわくをは走と
いふ也それをはしり火にそへて心やくとはよめる
也清少納言にひんなき所にて人に物をいひけるに
むねのいみしうはしりけるなとかくはあるといひ
けるいらへに「あふ坂はむねのみ常に走井のみつ
くる人やあらんとおもへば　又さわかしき物はし
りひともかけり源氏夕霧にむねはしりていかて取
てしかなとみやす所の御ふみなめり何事ありつら
んとめもあはすおもひふし給へり云々浮舟にめの
とあやしくこゝろはしりのするかな夢もさわかし
との給はせたりつ云々右二首つきのなきといふ事
をつきのなきによせたる心を一類としてつらねた
り

寛平の御時きさいの宮の歌合のうた　藤原興風

春霞たなひく野へのわかなにもなりみてしかな人も
つむやと

菅萬には第二句立出る野へのと有わかなにもなり
みてしかなとは若き人をは人のめつれは老たる身
にていへり摘は身をつむにそへたるへし「後撰霞たつ
かすかの野への若菜にもなりみてしかな人もつむ
やと　これもとは同し歌にや是より下三首春戀を
一類とす

題しらす　讀人しらす

思へとも猶うとまれぬ春霞かゝらぬ山のあらしとお
もへは

世のことわさに何事にもあれこなたかなたかけて
ひとすしならぬをは物にかゝるといふされはあた
なる人の心かろくこなたかなたの人にいひかゝつ
らふをかすみの山ことにかゝるによそへておもは

ぬにはあらねとたのもしからぬ方のことく思はるゝと也唯山に霞のかゝるといふよりはかゝりありく心にて俳諧也淸少納言にもましてけんさなとのかたはいとくるしけなりみたけくまのかゝらぬやまなくありくほとにおそろしきめも見云々（拾遺雜五）「いつくとも所さためぬ白雲のかゝらぬ山はあらしとそ思ふ（いせものがたり）「時鳥なかなく里のあまたあれは猶うとまれぬ思ふ物から

平貞文

春の野のしけき草葉の妻戀にとひたつきしのほろゝとそなく

六帖に此歌を鹿の題に入て下句次のよしひとか歌とおなしくあるは不審也顯注きしの妻こふるよしをよまんとて春の野のしけき草葉のつまこひとはよめるなり或人は春の野のしけき草葉は若草なりわかくさとは妻をいふ此集の春のうたにも春日野はけふはなやきそ若草のつまもこもれり我もこもれりとよめりさてやかて草の葉の妻とつゝけたるなりと申たれとあまりにや萬葉には（あたり萬葉）「春日野にあさるきゝすのつま戀におのかありかを人に知れつゝ　ともよめりきしはけい／＼と啼てほろゝとははねをうつ音とそ申せと人のおなしくけい／＼ほろゝといひつゝけて侍れはほろゝと鳴とよめらんもたかひ侍らし今いはく此俳諧の中に四季戀雜をわかちたるに心をつけて雉子の上とのみ見られて侍けりしけき草葉の妻戀にとはきしによせてよめる戀のうたなれは妻戀のしけき心をしけき草葉とはよせたりほろゝとそなくはきしのこゑに寄てほろ／＼となみたのこほるゝをいへる也玉葉集に行基菩薩の御歌「山鳥のほろ／＼と鳴聲きけは父かとそ思ふはゝかそと思ふ　夫木集第五家集繪に野（いつみ式部）へに雉子のたてる所「かりの世と思ふ成へし春の野のあさたつきゝすほろゝとそ鳴

きのよしひと

秋の野に妻なき鹿の年をへてなそわか戀のかひよとそなく

六帖には題鹿にて發句秋山にといひ第四句なそやいきてのとあり作者伊勢なり顯注になそ我戀のかひよとそなくとはなそはなとゝいふ詞なりふるくは此ことはをおほくはよめり此ころはなとゝ讀あ

へりかひよとはかひある心なりされは秋の野に年を經て妻なき鹿は吾戀かひありとはいかになくそと鹿の音を難する也かひなしとこそなくへけれといふ也但うち思ふはかひよとはなくとあらは心得やすかるへきとそなくといへる詞にすこしまきるれとふるき詞はかくのことく讀ることおほかりかやうにおもふもおろかなる心成へしとそなくとならてはいはれぬ事も侍らんふるき詞を今のよの心にてははからひかたき也今案是も寄鹿戀の心なり年經てこひしるしなけれは我こひのかひはなにそといひてなくを鹿のかひよとなくによせたり次下に夏の歌あれとこれは上の雉子に寄る歌に一類し春秋とつゝけて次第せる也又六帖に「ぬれきぬをほすさをしかの聲きけはいつかひよとそ鳴渡りける　此歌のてにをはもまた今の歌のことく今には叶ひかたし

躬恒

蟬の羽のひとへにうすき夏衣なれはよりなん物にやはあらぬ

ひとへにうすきとは夏衣によせて人の心のうすきをいへりなれはよりなん物にやはあらぬとはよるはきぬのやふれかたになる也和名集云唐韻云紕匹夷切漢語抄云萬與布一名與流紕欲壞也たてぬきのかなたこなたによる心なるへし下の句は二つの心有へし夏衣はうすき故に早くなれてよるものなれは人の心のあたにてうすきをたよりになれよりやすかるへしといへるにやまたなつ衣のことくうすきこゝろなれはなれたらはやかて衣のよることくいとゝうすらくへき中なりといふ心にや拾遺一夏衣うすきなからそ頼まるゝひとへなるしも身に近けれは

たゝみね

かくれぬの下よりおふるねぬなはのねぬなはたゝしくるないとひそ

六帖には胸の句そこよりおふると有かくれぬの下よりといへるにしのひ〳〵の心をふくめりねぬなはをうけてもろともにねぬ君か名はよもたゝしせめてはわか心やりにはかよひくるをたにいとはてかよはせよといへるなり蓴をぬなはと云は沼縄の心なり沼におひて繩のことくなる故の名なりねぬなはといふは根芹といふかことし繩はくるものな

れはくるないとひそとよせたり「六帖あたなりと名に
はいはれの池なれは人のねぬ縄立まさりけり
よみ人しらす
ことならは思はすとやはいひはてぬなそ世中の玉た
すきなる
顯注に玉たすきとはかけたる事にいひよせたり中
々におもはすといひきらはよかるへきをかけたり
といふなり「萬葉十二玉たすきかけねはくるしかけたれは
つきてみまくのほしき君かも「拾遺中々にいひははな
たて信濃なる木曾路の橋のかけたるやなそ
思ふてふ人の心のくまことにたちかくれつゝみるよ
しもかな
くまは曲阿隈等の字也心のくまは心にかくす所あ
るをみちのくまによせていへり「後撰いつかたに立
かくれつゝみよとてかおもひくまなく人のなり行
これは今の歌をとりてよめる歟「いせ物語しのふやま忍
ひてかよふ道もかな人の心のおくもみるへく
思へともおもはすとのみいふなれはいなや思はしお
もふかひなし

六帖にはいなやおもはしを今はおもはしとす
我をのみ思ふといはゝあるへきをいてや心はおほぬ
さにして
顯注には我を君とかきていてやをいなやにして上
の歌にもいなやおもはしとよめりと注せらるゝ有
へきをとはさても有へきをといふ也いてや心はお
ほぬさにしては上に引てあまたとよめるに同し心
を心のおほきにつゝけたり萬葉に數のおほきに大
寸とあまたかけり
われを思ふ人をおもはぬむくひにや我おもふ人の我
を思はぬ
公任卿の和歌九品の内に此歌を出してすこし思ふ
所あるなりといへりいなやおもはしといへると此
歌と二首はことさらに同し詞をかさねてよめる歌
也「六帖思ふ人をおもはぬ人の思ふ人おもはさらなん
おもひしるへく（イはさりけり）「同おもへとも猶も思はれおもふ時
思ふ人をやおもはゝさりけむ　新古今に「うらみし
な思へは人につらからし此世なからのむくひなり
けり　とよめる歌はこれを思へる成へし
一本ふかやふ

思ひけむ人をそともにおもはましましさしやむくひなかりけりやは
我を思ひけん人をそもろともに思はましものをまさしや思ふ人をおもはぬむくひのなかりけりやは
むくひのありて今わかおもふ人のまたあひおもはぬとつらき人にあひて昔のことをくゆるうたなり

一本よみ人しらす

出てゆかん人をとゝめんよしなきにとなりのかたにはなもひぬ哉

猿丸集には腰句方もなし尾句はなもひぬかもと有顯昭の本には發句いてゝいなんと有りて注に此歌の心はことのはしめ物のさきに鼻ひつれはあしき事にてあるにや或抄に人のなに事をも思ひくはたつるにははなをひつれはかなはすといへり又年の始にははなひて千秋萬歳かなといふもはなひるかわろき事にあれはよきさまにねかひなす也はらへするをりはなひるなといふ此心なり又人の家を出る時おのつからわろき物なとにあひぬれはくすき人はいみてかへりいりてとすれは出る時ははなひる人なとの有はいむ事にて侍りやとゝむへきかたもなきに隣のかたにははなひる人のあれかしとよめるもいはれたり萬葉集にははなひてまち人きたるとみゆる事あり是は別事也「まゆねかきはなひゝもときまつらんやいつしかみむと思ふわきもこ「うちなけき鼻をそひつる劒太刀身にそふ妹か思ひけらしも　今按詩云寤言不寐願言則嚏注云我甚憂悼不能寐汝思我心如是嚏此　風終風篇詩と萬葉とおなし心也　袖中抄云四分律云特世尊嚏諸比丘咒願言長壽時有居士嚏乃禮拜比丘佛令比丘咒願言長壽今案今俗正月元日若早旦嚏即稱曰千秋萬歳急々如律令是緣也何只在元日哉尋常禱之

紅にそめしこゝろもたのまれす人をあくにはうつるてふなり

六帖には腰句そめし衣もといひ人をあくにしかへるとおもへはと有紅に染しこゝろといへるはふかくおもひしむるを紅の衣によせたりあくは灰汁なりそれを飽によせたり源氏末摘花に色こき花と見しかともなとかきけかし給ふこゝに海海抄に引けるうた「紅の色こき花とみしかとも人をあくにはうつるてふかな「かきりなく思ひそめてし紅の人

をあくにはかへらさりけり　これ今の歌のよきかへしになりぬへき歌也
いとはるゝ我身ははるの駒なれやのかひかてらにはなち捨つる
顯注には落句はなち捨たると有馬をも牛をも放ちかふをは野飼といふなりそれによせて人を思ひはなつをものかふといふなり延喜式左右馬寮式云凡放播磨國家島御馬寮直移國放繫寮別三十疋從當年十月始放飼來年三月下旬繫取其路次之國各充使等食𩛰牽天遞送（後撰）「みちのくのをふちの駒も野かふにはゝれこそまされなつく物かは（同）「君かてをかれ行秋の末にしものかひにはなつ馬そかなしき
鶯のこそのやとりのふるすとや我には人のつれなかるらん
うくひすの古巢といふ心にこそのやとりとはつゝけたりふるすとは上にもあた人の我をふるせるとも人ふるすさとをいとひてともよめりふりぬとしてわするゝなり
さかしらに夏は人まねさゝのはのさやく霜よをわかひとりぬる
六帖には霜月の歌とせり顯注にさかしらに夏は人まねとはわかゝとおもふことにはあらてかたはらなる人のいふ事をまねふをさかしらにとはいへり夏のよこそあつけれは人のひとりねなるやうに我もぬれ冬の夜霜のさやけきにひとりぬる事のあちきなしと讀る也今案さかしらは萬葉に賢良とも情進とも情出ともかけり俗にかしこたてといふに似たりしらぬ事をも知たるやうにし人にさきたちすゝむやうの心也（萬葉）「大君のつかはさゝるにさかしらにゆきし荒雄ら浪に袖ふる（六帖）「秋の野に行てみるへき花の色を誰かさかしらに折てきつらん（枕草子）「さかしらに柳のまゆのひろこりて春のおもてをふする宿哉源氏螢にさかしらに　わか子といひてあやしきさまにて「いふれやすらん云々さやくはさゝわくなり也と和と同韻にて通せりさやとのみもよめり（萬葉）「さゝのはゝみやまもさやにみたれとも我は妹思ふわかれきぬれは
平中興（内膳正忠望男）
あふ事の今ははつかになりぬれは夜ふかゝらてはつ

きなかりけり
はつかは萬葉に小端とかきて又はつ〳〵とゝよみ
たれはおなし詞也廿日によせたれは夜ふかゝらて
はつきなかりけりといへりつきなきは上にもあり
便なき也

左のおほいまうちきみ

此作者を八雲御抄には本院左大臣とかゝせたまへりけにも此集の時の左大臣は本院時平公にて秋の部女郎花のうたにも時平公をひたりのおほいまうち君としるせりされとも伊勢か集によれは枇杷殿の歌也枇杷殿は戀五に藤原なか平の朝臣と有又伊勢か集に云かくて世にさわき出來て大臣もなかされ給ひけるむこにて兵衛佐より但馬のすけにその人もなかされにけり云々是は枇杷殿は菅家の聟にておはしけるに菅家の縁坐にて但馬介に下して流され給へる事をいへりこれよりさきの歌なれは兵衛佐よりも猶微官にておはすへししかるを左大臣とは承平年中にこそなり給へるを今かうかけるは後の人のしわさ成へし

もろこしの吉野の山にこもるともおくれんと思ふ我ならなくに

顯注云もろこしによしのゝ山あるへきにあらねと心さしのふかきよしをいはむとてもろこしのよしのゝ山にいらんにたにおくれんとも思はぬにまして此國やまとのちかきにあらんよしのゝ山にこもらんにはいかてか尋ゆかさらんとよめる也もろこしのよしのゝ山といへるに俳諧の心は有也もとより此よしのゝ山を唐のよしのゝ山といふならはおとろくへきにあらすはいかいにもとるへからす此歌は伊勢か枇杷大臣に捨られて父大和守繼蔭か國にまかりゆくとて「三輪の山いかにまちみん年經とも尋ぬる人もあらしと思へは　とよめる歌の返しに彼おとゝのよみてつかはしたるなり密勘云如載奥義集推而唐の吉野山とは尋入かたきことをつくり出て詠なりもろこしによしのゝ山をあはすれは俳諧には入なり古來風躰抄の説はこれにことなり此歌は漢朝に五台山と申山我朝のよしのゝ山のやうに南に侍る也よりてかくよめる歟俳諧の心にて侍る也とあり先の説につくへし今案伊勢集に云人のむこに成ぬれは（枇杷左大臣の菅家の聟と成給へるをいへり）我を今はよ

もとはしと思ひてもとは有けるやまとにいきてしはしあらんとおもひて女「三輪の山いかに待みん云々又あるほとに心ほそけにのたまへれはいみしくあはれになんたつぬる人もとあるは人わろくもろこしのよしの丶山に云々をと是れをいとあはれとおもひてかへしをはえせてかくよみたりけるひはのおと丶「よをうみの沫と消にし身にしあれはうらむることそ數まさりける　奈良坂のわたりにおひつきておこせたりけるをんなのかへし「わたつみとたのめし事のあせぬれは我そわかみのうらは恨る　この中に又あるほとにとは三輪の山と讀て贈たる後ある時といふ成へし心ほそけといふよりは枇杷殿の文の詞なりをとこれをいとあはれと思ひて返しをはえせてかくよみたりけるとは伊勢か三輪の山いかに待みんの歌の事なれはこれ枇杷殿の文の詞のまへにうつして心得へし今の歌の後に有れは是をもいせかよめらんやうなれと然らす返しをはえせてかくよみたりけるにといへるにておもふへし返しをはえせてといへれは顯昭の今よめる歌の返しといはれたるはかなはすともに此集に入たるに部をたかへたるも返しならぬ故成へしされとも心はいかに待みむをうけたるに似たりひはのおと丶はかくよみたりけるにはつ丶かす下のよをうみのといふ歌の作者をいふ也よくわきまふへし萬葉「事しあらはをはつせ山の石城にもこもらはともに思ふなわかせ

なかき

雲はれぬあさまの山の淺ましや人のこ丶ろをみてこそやまめ

くもはれぬ淺間の山のみえぬことく人のこ丶ろをみすしてこそやまめそれなんあさましきといふ歟これは見てこそのてもし濁る心也又やむとも人の心をみはて丶こそやまんすれ雲はれぬあさまの山のことく見すしてやむなんあさましきとよめる歟淺間の山は淺ましやとつ丶けむためなりてもしの清濁によりて右の兩義有なり

六帖「うらみてもしるしなけれは信濃なる淺間の山のあさましや君　同「いせの海の千尋たく繩くり返しみてこそやまめ人のこ丶ろを

難波なるなからの橋もつくる也今は我身を何にたと

へむ
家集になからの橋つくるときゝてとて此歌あり新後拾遺集戀五に亭子院御歌「つくるなる橋としるしる恨むれは思ひなからをいふにそ有ける　是もつくるとは橋の縁なから作て後よませ給へるにやこれは上に世の中にふりぬる物は津の國のなからの橋と我となりけりといふを本にてその橋もつくられて人のしけくもゆきかへはふるくかよひくる人もなきわか身を今は何にたとへてなくさまんとよめる也文德實錄第五云仁壽三年九月戊子朔戊辰攝津國奏言長柄三國兩河頃年橋梁斷絕人馬不通請准堀江河置二隻船以通濟渡許之これより後久しく絕て渡されさりける歟輿風集にも「こほれてもあれはたとへてなくさめし長柄の橋も今はきこえすとよめるを後に又あらためて渡されけるにや後撰に同し伊勢かうたに「ふるゝ身はなみたの中にみゆれはや長柄の橋にあやまたるらん　これはいにしへになすらへてふるき物によめる歟奥義抄に云これは伊勢か子の中務君になるらん世にはかやうに歌をはよめといひけり古來風躰抄云此歌は長柄の橋朽にし後またつくらねとも橋はつくりつへき物なるか故に作るとよめるはいかいの心にて侍也と有いかゝ侍らんや宇治橋はたえねと世をうち橋の中たえてとよめるも橋はたゆる事もある物なれはかくはよせけめとさりとてはいかいに入ねはつくりつへきもの也とてまたつくらぬをつくるといへるまてはいかいには取ましくや侍らん

まめなれと何そはよけくかるかやのみたれてあれとあしけくもなし　よみ人しらす

まめなれとゝは眞實なれとももといふ心也日本紀に忠誠をまめとよめり伊勢物語にまめをとことといへるもこれ也何そはよけくは何かはよきなりみたれてはあたにしてまめならぬ也あしけくもなしはあしくもなし也かるかやはみたれやすき草なれは亂れてといはん料に取出たりわれ人を思ふ心は眞實なれと人の口もたのまねは何かはよき大かたの人の心はかるかやのことくこなたかなたにこゝろのおもひ亂てまめならねとさりとてあしくもみえねはいさ我もまめなる心をやかて人なみにみたれん

と也まことにみたれむとにはあらねとふてヽいふなり六帖に「まめなれとよき名もたゝすかるかやのいさみたれなんしとろもとろに　此歌のこゝろいはずしてこもれり刈萱此萱宜にしたかふへし和名集云玉篇云萱魚饑反與宜同（和名加衣）世に萱草の萱に作る故に注するなり

おきかせ

何かその名のたつことのをしからんしりてまとふは我獨かは

打ふてヽよめる心あらはなり文選稽康養生論曰以多自證以同自慰（萬葉）「今のみのわさにはあらすいにしへの人そまさりてねにさへなきし（後撰伊勢）「夏虫のしかしかまとふ思ひをはこりぬかなしと誰か見さらん（狹衣）「よしさらは昔のあとをたつねみよ我のみまとふ戀の道かは

いとこなりけるをとこによそへて人のいひけれは

くそ（源告女屎）

はしめにみつからの名をかくして屎かいとこなるをとこの思ひかけたるよしにほのめかしいひよりけるなるへしくそはくつなり火をうちてつくるほくそのことし源氏抄貫之童名内教坊阿古屎源氏手習にいつらくそたち琴取てまゐれといふに云々又いてとのもりのくそあつまとりことといふにも云々花鳥うつほ物語にも此詞有京くそだちともいへりうつほ物語にたゝこそといふ名ありくとこと五音通せりこれにや大和物語にこやくしくそといひける人又云秋の夜の長きにめをさましてきけはしかなん鳴ける物もいはて聞けりかへをへたてたるをとこ聞給ふやにしこそといひけれは云々源氏夕かほに聞たまふやきたとのこそといへる大和物語に聞給ふや西こそといへる同し詞也

よそなから我身にいとのよるといへはたヽいつはりにすくはかり也

よそなからとは他人にして也我身にいとのよるといへはとはいとこによそへていへるをいとのよるとよせたりいとこにもあらぬ人のいとこなるをとこによそへていふことはたヽいつはりにすくのみなりといふことを針に著くとよせたりすくとはまめなり心なくて色このみなるをいへりいつはりを

針にいひなせるは上に友則かうたにいとはれての
みといふに痛蹄てとそへたるかことし

題しらす　さぬき 安倍清行女

ねきことをさのみ聞けむやしろこそはてはなけきの
杜となるらめ

ねきこととはねかふこと也萬葉に祈の字をねくとよめり神につかふるものをねきといふも祝詞なとしてよろつの事人の上身の上をねくによりての名なるへし源氏床夏に人のねきことになしはしなひき給ひそ又わかな下に心さしふかきわたくしのねきことになひきともいへりされは神に物まうすことく我に人のねきことせしを人にくからて聞入しかは今かゝるなけきとはなりたりといふ心をなけきの杜の神によせてかくは讀りなけきの杜大隅といへりむらさき式部かうたに「かき絶て人もこすへのなけきこそはてはあはての杜と成けれ是は今の歌を思ひてよめると見えたり

大輔 源たすくか女

なけきこる山としたかく成ぬれはつら杖のみそまつ
つかれける

なけきこるとはきもしを木になしてこるといへりこるはきる也きとこと五音通せりよりて萬葉に切の字をこるとよめり山とし高くはしはやすめたる詞也それを年高くなるにもそへたる歟山とはすなはちなけきをいへり後撰に「かすならぬ身をもちにして吉野山高き歎きを思ひこりぬる 拾遺「いにしへものほりやしけむよしの山やまより高きよはひなる人　此歌にて心得へしつら杖とは薪をになひて山路を行ものゝくるしきに杖つくに物思ふとき手しておとかひをさゝふるをよせていへり列子云伯氏曰瞽人北面而立敎杖蹙之乎顧立莊子漁父曰孔子絃歌有漁父者左手據膝右手持頤以聽曲終世說云晋陳逵字道林云々陳以如意柱頰望鷄籠山歎曰云々白氏文集云醉悲灑淚春盃裏裡吟苦支頤曉燭前伊勢集屏風に夜ひと夜ものおもひたる女のつらつゑつきたる所「夜もすから物思ふ時のつらつゑはかひなたかさそしられさりける 六帖貫之「ことしけき心よりさく物思ひの花の枝をやつら杖につく　竹取物語にはそ此みこにあひつかうまつり給へといふに物もいはすつら杖をつきていみしくなけかしくおもひた

り源氏澪標に御きちやうのしとけなく引やられたるより御めのとめてみこほしたまへはつらつゑつきていとものかなしとおほいたるさまなり

よみ人しらす

歎きをはこりのみつみて足引の山のかひなくなりぬへらなり

山に峽あれはかひなくとつゝけたり上の歌の餘義をつくすやうにつゝけたり或抄にうき世をのかれてすめ共歎きをこりつみてあれは山のかひもなくなりぬへきと也山のかひに多く木をつめるによせていふ目の前にある事なれはなりといへるは此つゝき戀なる事をわすれたり用ゆへからす

人こふることをおもにゝになひもてあふこなきこそわひしかりけれ

顯注には腰句思ひもてと有あふこは逢期也それにものになふ木の拐を添たり以上三首一類なり

よひのまにいてゝいりぬる三日月のわれて物思ふころにも有かな

六帖には下句われても物を思ふ比かなとありわれては萬葉にわかむねはわれてくたけてとよめり三日月のかたわれなるに物思ひに心のわれくだくる事を添たり伊勢物語にふつかといふ夜をとこわれてあはむといふ云々「菅萬鶯のわれてはくらむ櫻はなおもひくまなくとくも散哉「六帖おもへはそ月のわれても出つらんかはかりさわく雲の上より「六帖三日月のわれては人をおもふともよにふたゝひは出るものかは「金葉三日月のおほろけならぬ戀しさにわれてそ出る雲の上より

そへにとてとすれはかゝりかくすれはあないひしらすあふさきるさに

この初の五文字顯昭もいかゝおもはれけむ注せられす後撰にけふそへにくれさらめやはと思へともといへるは萬葉に副の字をさへとよみたれはけふさへにといふ心なれは今と同しからす此歌の外に見及はぬ詞なり但古今著聞第十六に近江法眼寛快といふ僧の事をかける所に云或日又こし車にひかれて參りけるに圓宗寺の前にてたけたかく大なる法師のかきのかたひらはかりに袈裟かけたるか同行とおほしき僧四五人具したるか行をみてこし車よりとひおりて何といふ事もなくしやこくひをか

きて相撲を取けりたかひにひし〳〵と取組て此法師をうちまろはかしてけり其後おのれは聞ゆる文學かなといへはそへにといらへておのれは聞ゆる檀光かなといふ又そへにとこたふいさゝらは今一度とらんとて又寄あひて取に此度は檀光うてにけり其後いされ高雄へかいもちひくれにといへはさらなりとてそこよりやかてくして高雄へ行にけりそれよりとはすなりけるとそ云々右この中にそへにといらへてといへるはさよといふ心とみゆれはうき事のある時のかれんともせすさよと打まかせてをれはその事のみにてもはてす又ことうき事のかさなりくるをわひてとすれとかゝりといへるなるへし或説に添荷といふ重荷に小付といふこゝろなりといへりされとそれを添荷といへる事もなくまたあひしらへる詞もなけれは用へからすおほつかなし　重荷に小付の事は地藏本願經下曰在生未曾有少善根各據本業自受惡趣何忍眷屬更爲増業譬如有人從遠地來絶粮三日所負擔物强過百斤忽遇隣人更附少物以是之故轉復困重云々　萬葉五重馬荷爾表荷打等伊布許等能其等云々「よろつとせつまんとすなるおもにゝはいとゝこつけをこりもそへなん

壬二集下云「そへにとてたのめしくれはとにかくに幾夜過行月日なるらん　此歌はいかゝ心得て取用られけむ作者の心をしらすあないひしらすはいふへきやうもしらすの心也詞も及はすといふかこ

としあふさきるさには詩周南云參差行菜左右流之嵇康琴賦云夫所以經營其左右者固以自然神麗而足思願愛樂矣　是によれは源氏物語帚木にとあれはかゝりあふさきるさにて云々空蟬にひたりみきにくるしくおもへとかの御手ならひとり出たりといふに同し心也是はかなたこなたよりうき事のかさなりくる心也顯昭云あふさとはあふさま也きるさとはくるさま也とさまかくさまといふこゝろなりとするもあしといひかくするもあしといひいひしらぬわさかなとよめり此注の意はとするもかくするにも人のよしといはぬをわふる心と見られたる歟よく味ふに初の義かなふへしこれより雑也

世の中のうきたひことに身をなけはふかき谷こそ淺

くなりなめ
公任卿の和歌九品の下々に此上句にてひとひにち
たひわれやしにせんといふ歌有世のうきことのい
たくおほきよしなり（萬葉）「鶯の啼なる谷にしうちはめ
てやけはしぬとも君をしまたん（後撰）「世中にしられぬ
山に身なくとも谷の心やいはておもはん

在原もとかた

世の中はいかにくるしと思ふらんこゝらの人にうら
みらるれは

六帖にはこゝらの人にをよろつの人にと有

よみ人しらす

何をして身のいたつらに老ぬらん年の思はんことそ
やさしき

やさしきははつかしき也心ある人をやさしきとい
ふはむかひてまみえんも心つかひせられてはつか
しき人といふ心なれはこなたの心をかなたに名つ
くるなり（萬葉）「松浦河此川上に家はあれと君をやさし
みあらはさす有き（同五）「よの中をうしとやさしと思へ
ともとひたちかねつ鳥にしあらねは（六帖）「くれはつる
年の心もはつかしくとはてや昔か春になしつる
（同）「いかて猶ありとしらせし高砂の松のおもはんこ
とも恥かし　源氏物語かけろふにおやにてなき跡
にきゝ給へりともいとやさしきほとならぬを云々
又夕霧に浅間しやことありかほにわけ侍らんあさ
露の思はむ所に猶さらはおほししれよ云々道済十
體に此歌は直躰の歌なり

おきかせ

身はすてつ心をたにもはふらさしつひにはいかゝみ
るとしるへく

身はすてつとは遁世の人をいふは常なれと興風か
歌なれは時にもあはねは我なから棄物にする心也
顯注云はふらさしとは人のわろきふるまひするを
はふれたりといふされは身をこそすてめ心をはう
るはしうてつひにあらむやうまたんとよめるなり
といへり此注も今少叶はす又諸抄に放埒にせしと
いへるは放埒の音とおもへり大に僻事なり日本

紀に溢の字をはふれたりとよめるこれなり　日本紀第五崇神紀云武埴安彦先射二彦國葺一不レ得レ中後彦國葺射二埴安彦一中レ胸而殺焉而其軍衆脅退則追破二於河北一而斬首過半屍骨多溢故號二其處一曰羽振苑（和名云山城國相樂郡祝園波布曾乃）古事記云亦斬波布理其軍士故號其地謂波布理曾能續日本紀卅一光仁紀藤原左大臣永手朝臣薨時詔略云大臣之家内子等乎母波布理不賜失不賜慈賜波牟過賜波牟人目賜波牟伊勢長歌の中に「もゆる火の心ははひとあふれつゝあるかなきかにわひをれは云々源氏物語わかむらさきにこゝろにまかせてゐてはふらかしつるなめりとなく〳〵かへり給ひぬ夕貌にかゝるみちのそらにてはふれぬへきにやあらん云々明石にかくなから身をはふらかしつるにやと心ほそうおほせとかしらさし出つへくもあらぬ空のみたれに云々東屋に又みくるしきさまにて世にあふれんもしらすかほにてきかんこそ心くるしかるへけれ云々玉鬘におとしあふらさす云々橋姫に人にたにいかにしらせしとはくゝみすくせとけふあすともしらぬ身の殘りすくなきにさすかに行末遠き人はおちあふれてさすらへむ事これのみこそけに世をはなれんきはのほたし也けれと打かたらひたまへはこゝろくるしう見奉りおまふ云々手習にいかてさるゐなか人のすむあたりにかゝる人のおちあふれけん云々同卷にあさましとてうしなひ侍りぬと思ひ給りし人世におちあふれあるやうに人のまねひ侍にしかな云々夢浮橋にまたいとかくまておちあふるへききはとは思ふたまへさりしを云々今の俗物を捨るをすてはふるといふ詞もこれ歟波と阿と同韻の字なれはあふるはふるおなし溢の字常はあふるとよむを日本紀にはふるとよめるにて知るへし

千さと

しらゆきのともにわか身はふりぬれと心は消ぬ物にそ有ける

萬七人丸集「雪こそは春日きゆらめ心さへきえうせたれやたちもかよはぬ後撰「身ははやくなき物のことなりにしをきえせぬ物は心なりけり

題しらす　　よみ人しらす

梅の花さきての後のみなれはやすきものとのみ人のいふらん

題注にさかり過たるよしをいはんとて梅の花さきての後の身とは添たり梅のすけれはその實なれはやすきものとは人のいふらんとそへてよめるなり伊勢物語に色このみのすきもの云々色好みにてまことすくなきを云紫式部日記に源氏の物かたりおまへにあるをとの丶御覧してれいのすゝろことゝもいてきたるついてに梅のしたにしかれたるかみにかゝせ給へる「すきものと名にしたてれは見る人のをらて過るはあらしとそ思ふ　たまはせけれは「人はまたをられぬ物をたれかこのすき物そとは口ならしけん　此御堂殿の御うたこゝの歌をとり給へり仲文集「すき物を花のあたりにみせさらは此床夏もねたえましやは

法皇の西かはにおはしましたりける日さる山のかひにさけふといふことを題にてよませ給ふけり

みつね

わひしらにましらななきそ足引の山のかひあるけふにやはあらぬ

荊州記云古歌みつね集曰巴東三峽巫峽長猿鳴三聲涙沾裳是をもて讀り「心あらはみたひといつたひなくころを物思ふ我にきかせさらまし

題しらす　よみ人しらす

世をいとひこのもとことに立よりてうつふしそめのあさのきぬなり

六帖に落句こけの衣そと有顯注にあさきぬをふしにてそむる事を木のもとにうつふしそめとつゝけたりうるはしうおひなとときてあふのけにもそはさまにもねすしてまろねにするはうつふしにもねらるゝ事なれはうつふしそめとそふるなり今案大和物かたりに僧正遍昭の事をかけるにいはく年月をへてつかうまつりし君に少將おくれ奉りてかはらん世を見しと思ひて法師に成にけりもとの人のもとにけさあらひにやるとて「霜雪のふるやのなかに獨ねのうつふし染のあさのきぬなり　となん有ける遍昭集には今の本の歌にて下句大和物かたりと同し然れは遍昭の歌なり僧尼令に緇橡壞色等を出さるふしそめはくりなり是また壞色なり千載集に俊賴朝臣述懷の長歌にうつふしそめのあさ衣花のたもとにたちかへて後の世をたにと思へとも云々此歌にてよまれたり古來風體抄此歌まてを出

して萬葉集は時代久しくへたゝりうつりて歌のすかたことはうちまかせてまなひかたかるへし古今の歌こそは本體と信仰すへきものなれはいつれもおろかならねと其中にもことなるともを所々にしるし申侍なりといへり

# 古今和歌餘材抄卷二十一　三十二首

大歌所御歌

大歌所別當有　江次第に大歌小歌有　拾芥抄云大歌所（在圖書東上西門內也新嘗時供奉有親王大納言非參議六位別當案主給年官）延喜式第三十一宮內式曰凡先新嘗之寅日供御幷中宮鎭魂祭神八前大直神一前供奉諸司上十人中三十人下二百六十人並給食（新嘗之後巳日東宮鎭魂祭神幷大直神乃八數亦准之）

おほなほひのうた

おほなほひはおほなほらひといへるに字の落たる歟若はなほらひをなほひともいひける歟　稱德紀云天平神護元年十一月戊午朔庚辰詔曰今勅久今日方大新嘗乃猶良比能豐明聞行日仁在云々　續日本後紀第二曰天長十年冬十月癸未朔辛丑爲ニ大嘗會ー將レ修ニ禊事ー行ニ幸賀茂河ー禊事畢御ニ直相幄ー扈從五位巳上天皇饌焉釋日本紀第十二云太神宮大同本紀云神嘗祭以十七日直會云々齋宮之釆女二人御綱柏（尚）酒盛互每レ人給　稱德紀ニ猶良比とあるによ

れは續日本後紀の直相も大同本紀の直會も共になほらひと讀べき歟又此書によらばなほひとよむへき歟神祇を祭り給ひて後其おろしを王臣に賜はりて酒宴有日をいふ又今の歌は正月四日內裏にて宴ありし時の歌なれば神事に限らず宴を賜はりて諸臣おほく集るを大直會と云歟又案するに大直日と書へき歟神直日大直日とて皆神の御名也神代紀上云伊弉諾尊既還乃追悔之曰吾前到於不須也凶目汚穢之處故當滌去吾身之濁穢則往至筑紫日向小戶橘之檍原而祓除焉遂將盪滌身之處汙乃興言曰上瀨是太疾下瀨是太弱便濯之中瀨也因以生神號曰八十枉津日神次將矯其枉而生神號曰神直日神次大直日神延喜式祝詞の中におほなほひといふ神聞なほし見なほしといへりされは此歌をもて大直日の神をまつるなるへし下のひるめの歌は天照太神をまつるに用る歌歟今彼に准ふへしこゝにてはしめて此歌を載るはおほよそ神祇を祭らんとする時かならす祓をして身を清まはれはそれに准へてたとひ少の愆有とも大直日の神聞なほし見なほしてゆるし給へといふ心なるへき歟今の歌によるに猶初の義なるべし大直日神を祭る心なし　古抄に百官の宿直するによりて大直日とはいふ大甞會の名也といひ節會の時群臣內裏に祗候の日を大直日といふなといへる心得かたし殿上人番にをりて宿直する事はあれと百官の宿直といふ事は聞えす大直日の直は不曲義なり宿直の直は當る義なり其心大きにことなり又宿直は常の事なり何そ其歌とてこゝに載らるへき又大甞會の事ならは歌更に叶はす節會の時群臣內裏に祗候するの日をいふといへるは然るへきをそれも大直日とはかゝれたるを見す

あたらしき年のはしめにかくしこそ千年をかねてたのしきをつめ

日本紀にはつかへまつらめよろつよまてに

此歌は催馬樂呂の歌也下句は注のことし顯注云たのしきをつめとは諸の祭なとにはつみ木とて庭に薪を積たるをいはひによせてたのしきをつめといふによするなりその薪をは左衛門の衛士かもてまゐりてつむなりさて庭薪とかきてはつみ木とよみ侍るとそ申かくしこそとはかくこそといふ詞にし文字をくはへたり　今案つみ木のはしめは日本紀

云天武天皇五年正月十五日初位以上進新是よりな
りされと往古の歌にはたのしきをつむなとよする
事はすくなく侍り又つみ木も餓なれはいとおほつ
かなし今案萬葉第五梅歌に武都紀多知波流能吉多
良婆可久斯許曾烏梅乎乎利都々多努之岐乎倍米
此歌すへて似たるに殊に腰句尾句をもてなすらへ
て案するに今の歌もとはたのしきをへめにて侍
けんを古き上手のかけるかんなはことになたらか
にてへもしのつにまかへるを歌の心をよくもしら
ぬ人のうつしあやまれるにて侍るへしをへめはを
はらめにてたのしきことをきはめゝの意なり經め
といふにはあらす萬葉第十九家持歌に春裏之樂終
者梅華手折乎伎都追遊爾可有　此歌の第二句今の
結句におなし樂の字たのしみと點したれとこれに
ては者の字濁りてよむへき故に心かなはす第五の
歌によりてたのしきとよむへしたのしき事のきは
まりはといふなり今のたのしきこそたのしみをへ
めといひても叶ひぬへきを古歌にはかゝる事のみ
おほし萬葉第十五に「秋されはこひしみ妹をいめ
にたに久しく見んをあけにけるかも

こひしき妹をといふへきをこひしみとよめる此た
くひなり注に日本紀と侍るは續日本紀なりもしは
日本紀に有とそらにおほえてたがひたる歟これは
後人の注を又後の人わきまへすして書加へたるな
るへし　續日本紀第十四聖武紀云天平十四年春正
月丁未朔壬戌天皇御大安殿宴群臣酒酣奏五
節田舞訖更令少年童女踏歌又賜宴天下有
位人幷諸司史生於是六位以下人等鼓琴歌曰新年
始邇何久志社供奉良米萬代摩提丹　宴訖賜祿有差こ
れは恭仁京新にての事なり
ふるきやまとまひのうた
三代實錄第三云貞觀元年十一月十九日庚午撤去
悠紀主基兩帳天皇御豐樂院廣廂宴百官多治
氏奏田舞伴佐伯兩氏久米舞阿倍氏吉志舞内舍人
倭舞入夜奏五節並如舊儀云々　江次第第五
云和舞取榊枝舞也　又大嘗會次第云奏和舞（着
靑摺舞人十人歌人十人居庭中琴師二人居歌
人前舞人用内舍人掃部庭中南北行設二行座
舞人分着其南立床子琴師二人著之笛工一人
在其後云々）或抄に女の舞なりといへり非なり

しもとゆふかつらき山に降雪のまなく時なくおもほゆるかな

顯註云しもとゆふ葛城山とは正月の卯日は杖をたてまつる事をしもとゝいふ杖をはかつらにゆてへはしもとゆふかつらき山とはつゝくるなりこれを卯杖とはいふなり　今案公事に卯杖たてまつる事はあれともこれはふるきやまとまひの歌と侍れは卯杖のはしまれるよりはさきよりの歌にや侍らん又卯杖をしもとゝいへる事此註の外見えさる歟和名集云唐令云笞音知和名之毛度大頭二分小頭一分半これは罪あるものを打杖の名なりいはひて奉る卯杖にいかてかゆゝしきしもとの名はおほせ侍るへき日本紀の景行紀に茂林をしもとはらとよみ同雄略紀には弱木林と書てしもとはらとよめり　延喜式には楉をしもとゝよめり萬葉第十四東歌に「おふしもとこのもと山のましはにものらぬ妹か名かたに出んかも　枕草子にもゝの木わかたちていとしもとかちにさし出たるかたつかたはあをく今かた枝はこくつやゝかにて云々これらをおもふにかの人を打杖のふとさはかりなる木をしもとゝいひそのしけくおひたちたるはしもと原なりされはそれをかりて薪にとるに山なれはかつらをねりそにしてゆへはしもとゆふ葛城山とはつゝきたるにこそ新續古今集に光明峯寺入道前攝政左大臣「戀衣色には出ししもとゆふまさきのつなのよるの時雨に　此御歌も今申す愚意に同しく意得てよませ給へるなりさてこの歌は戀の歌なるへし後京極殿これをとりて「しもとゆふかつらき山のいかならん都の雪もまなく時なし　新勅撰に入れり然るにあるよき先達疑てのたまはく日本紀に非時とかきてときしくとよめるは四時にわたりて不斷の義なりまなく時なしといふもこれに同しきを都の雪もとあるおほつかなし云々今いはくこれはかへりて一隅を擧て三端にくらしといふへきか本歌の心も只冬になりてはるゝまもなくふる心なるへけれは取用るからに都の雪もとのたまはん事難有へからすや萬葉第一に天武天皇御歌云「みよしのゝみゝかの峯に時なくそ雪はふりけるひまなくそ雨はふりける云々第十三にも此つゝき有いつくのやまにか雨と雪と共に四時にわたりてふる事有へきなすら

へておもふへし「萬葉戀衣きならの山に鳴鳥のまなく
時なしわかこふらくは

あふみふり

ふりといふは曲の字なり近江の風俗の歌曲なり
神代紀下云此兩首歌辭今號二夷曲一（ヒナブリ）續日本紀云天平
六年二月癸巳朔天皇御二朱雀門一覽二歌垣一男女二百
四十餘人五品以上有二風流一者皆交雜其中正四位下
長田王從四位下栗栖王門部王從五位下野中王等
爲レ頭以二本末一唱和爲二難波曲倭部曲淺茅原曲廣瀨
曲八裳刺曲之音一令下二都中士女一縱觀上極レ歡而能
賜下奉二歌垣一男女等祿上有レ差

あふみより朝たちくれはうねの野にたつそなくなる
あけぬ此夜は

此歌は近江より登る道にうねの野と云所にたつの
鳴をきゝて夜は明ぬとよめる也南朝の新葉集讀人
不知「戀三うねの野にたつの一聲鳴わかれ又もあふみ
とたのめてそこし　これ今の歌を本としてよみて
も侍哉以上二首は一國の風以下二首は一郷の風也

みつくきふり

水くきのをかのやかたにいもとあれとねてのあさけ
の霜のふりはも

六帖には霜の題に載たり水莖の岡は筑前の名所な
り萬葉にあまたよめり「萬三ますらをと思へる我や水
莖のみつきの上に涙のこはん「同七天きりあひ日かた
吹らし水莖の岡のみなとに浪立わたる「同十秋風の日
にけにふけは水莖の岡の木の葉も色付にけり「同雁
かねの寒く鳴より水莖のをかの葛葉は色つきにけ
り「同十一水莖の岡の葛葉を吹返しおもしるこらか見え
ぬ比かも　これら也屋形はそこに作りたる屋なり
いもとあれとゝは妹と我とゝいふなり古歌にはわ
れをおほくあれとよめりねての朝けは朝明なり霜
のふりはもとは忠岑か歌に草のはつかに見えし君
はもとよめるやうに霜のふりさまはといふ心なり
をりふしを思ふに霜のいたくふりぬへき比なるか
妹ともろともにぬれはさもおほえぬは霜はふりた
りやふらすやといふなり

しはつ山ふり

しはつ山打出て見れは笠ゆひの島こきか（くイ）へるたなゝ

し小舟

此歌は萬葉第三に高市連黒人か羇旅歌八首有中の第三の歌なり三四の句打こえくれは笠縫のとあり此歌の前に年魚市方(アユチカタ)とよめり尾張なり此歌の次に枚の湖高島の勝野原をよめりともに近江なり終に山背の高槻村とよめり然れはあつまより都へ歸りのほりくる道にてよめる次第なり和名集を考へ見るに參河國幡豆郡礒泊(之波止)此礒泊の郷に四極山あるへし注に之波止となれととつとは五音通して同し事也日本紀孝德紀に礒泊といふ人あり同し文字にてしはつとあれはこれをもて知へし　雄略紀云是月爲二呉客道一通二礒齒津路一名二呉坂一　上に住吉津とあれは此礒齒津は萬葉第六に「ちぬわより雨そふりくるしはつのあまあみたつなほせりぬれてたえんかもとよめる所也是異所なから同名の證なり然れは笠ゆひの島も三河也笠といふにつきては笠縫にてありぬへくおほゆ

神あそひのうた

神樂の取物に九種有賢木幣杖篠弓劒鉾杓（和名集云杓廣韵曰杓音酌同和名比佐古斟水器也）葛これ也

神かきのみむろの山の榊葉は神のみまへにしけりあひにけり

六帖には發句神垣やとあり顯昭の本には神のみまへにを神のみむろにと有て神樂の譜には神のみまへにと有といへり神垣のみむろの山は大和國高市郡のみむろ山なり萬葉第九には神なひのみむろの山に立向ふみかさの山とよめり

霜やたひおけとかれせぬ榊葉の立さかゆへき神のきねかも

六帖には落句神のきねかなとあり八たひおくとはたひ〳〵しけくふるなり顯昭云神樂には巫女は常にはなけれとやをとめとて八人の巫女相具たり石清水のみかくらにもあり今いはくふるくは男女にわたりていひけるを後に女をのみいふやうにはなれるなるへし巫覡の字を思ひ合すへし立さかゆへき神のきねとはさか木によせて立さかゆといふ也

萬葉第七に「山城のくせの社に草な手折そおのか時立さかゆとも草な手折そ　以上二首は榊の歌也

まきもくのあなしの山のやま人とひとも見るかに山かつらせよ

六帖には發句わかせこかと有かきあやまれるにや顯昭の本には第四句人も見るかねとあり六帖も同し日本紀萬葉等に此詞ありにとねと通ひて同し事なり顯註云まきもくの山とも云あなしの山ともいふさてかくよみつゝくるなり又この山をとり合せていふ常の事なりかつらきやたかまの山さらしなやをは捨山かゝる事數しらす人もみるかねとは人もみるはかりといふ詞なり奥義抄には人も見るかねとは見るへくなといふ詞なりふうそくのことはなり萬葉には見るかにともいへり同し詞なり五音の故なり山かつらとは神樂するにはまさきのかつらにてかしらをゆふ也かつらゆふといふ物をひたひよりうしろに引まはしてゆふなり御神樂にある事也神樂譜には人も見るへく山かつらせよとあり密勘云奥義抄此註文同あけほのを山かつらと申事もこの山より出たる事と聞侍る不委注今案ある物にはわきもこかあらしの山と誤りてうたふと侍り

六帖
一行かうへにまたもゆけ駒神垣やみむろの山の山かつらせん

六帖
みやまには霰ふるらし外山なるまさきのかつら色付にけり

外山のまさきの色付を見てみ山には今はあられのふるらんと思ひやるなり公任の九品には上中ほとうるはしくてあまりの心有也道體十體には神妙體又新撰髓腦にはみ山といひてと山といへるを病ともせられたり　以上二首かつらの歌なり

陸奥のあたちのまゆみわかひかは末さへよりこしのひ〳〵に

延喜六年正月廿日割安積郡置安達郡かゝれは安達郡とは延喜六年に名付られとももとありあたちといふ所は有なりこれは神樂の取物の中の弓歌なり弓を引はもと末のよりくるによせて後までも我になひきしたかひて忍ひ〳〵によりこよといふなり

我門のいたゐのしみつ里遠み人しくまねはみくさおひにけり

此歌六帖には作者家持にて我宿の板井の清水と有顯注云これは取物の中の杓の末歌なり板井の清水とは板を筒にしたる井なり石を筒にしたる井をはいはゐのしみつとよめりみくさとは萍にあらて色ふかきやうなる草のひまなくうきたるをいふ譜に

はみくさゐにけりともあり「いにしへのふるきつゝみはとしふかき池のなきさに水草生にけり

ひるめのうた

神代紀云天照大日孁尊天照太神をまつり奉るうたなり

さゝのくまひのくま川にこまとめてしはし水かへかけをたにみん

顯昭本には落句よそにたにみんと有て注云萬葉には「さひのくまひのくま川にこまとめてこまに水かへ我よそにみん

此集さゝのくまと有違萬葉歟さゝのくまに付て篠の歌に或人のよみて侍し如何さひのくまは萬葉歌なり平城天皇御撰也古今さゝのくまの歌は承和大嘗會歌也さゝのくまを可用歟今案ひのくま川河内といふ説有誤也大和高市郡に有和名集には檜前とかけり萬葉には顯注に引る外に第七に「さひのくまひのくま川のせを早み君か手とらはよらんてふかも　第二卷にはさひのくまわともよめりさひのくまひのくま川とつゝくるはさはよろつにそへて云文字にてみよしのゝよし野の山といへることくひのくまのひのくま川と重ねていへるなり然るをさゝのくまとはいつとなく誤れるなるへし和名集云但馬國氣多郡樂前佐々乃久萬　これそさゝのくまと云所には侍る源氏葵にさゝのくまにたにあらねはにやつれなく過給ふにつけても中々御心つくしなりとかけるは此集によれり名こりをしたふ歌なれは神の影向し給へるをとゝめたてまつるとて心を得てうたへる歟さて今の歌を顯昭承和大嘗會歌なりと申されたるは下にきひの中山とよめる歌の左の注をこれより三首の注なりとおもはれたるなり大に僻事なりかれは一首の注なり求子本「何わさを我はしつゝか天てるやひるめの神をしはしとゝめん

後撰敦忠朝臣母

「ちかはれしかもの河原に駒とめてしはし水かへ影をたに見ん

かへしものゝ歌

或抄云これは催馬樂の律の歌なり源氏物語に靑柳にをり返しうたひてなといへり　今案源氏若菜上にさうかの人々みはしにめしてすくれたるこゑのかきりいたしてかへり聲になる夜のふけゆくまゝ

にものゝしらへともなつかしくかはりて青柳のあそひ給ふほとけにねくらの鶯もおとろきぬへくいみしくおもしろし細流云かへりこゑになるとは呂の律になるなり又これは此青柳のうた一首の詞書なり次々の歌は別に左に注有又呂の歌あり伊勢か集に故中務の宮の琴をかり給ひて「あつまことと春のしらへをかりしかはかへしものともおもはさりけり　これは春は呂秋は律なる故に東は春のかたにて名もあつまことなれはかへしものとはおもはぬと琴をほめてかへしかね給ふよしによませ給へるなり

青柳をかた糸によりて鶯のぬふてふかさは梅の花笠

顯昭本ぬふてふをぬふといふとかけりすなはちぬふといふとうたひ侍るとなり　是は神樂小前張の青柳の歌なり

まかねふくきひの中山帶にせる細谷川の音のさやけさ

これは催馬樂呂の歌なり　六帖には作者黒主不審なり　顯註にまかねふくとはつちの中なるくろかねのあらかねを水にてゆりあつめてたゝらといふ物にて吹わかすなりまかねとは金をいへと鐵をもあらかねにむかへていふとこそきひの中山は備中にあり彼山の腰にめくれる細谷川を帶にしたりといふ歟萬葉には「大君のみかさの山の帶にせる細谷川の音のさやけさ」同歌をよみあはせたる歟とおもふへきに萬葉集は平城天皇の御時に撰し給へりまかねふく歌は承和のおほむべのきひの國の歌とあれは疑ひなく萬葉の歌をまねひたりとおもふへし是は催馬樂の眞金吹歌也今案眞金は金をいふと知なからくろかねと釋せられたるは吉備の中山は鐵を出す所也ける歟金をもとゝしてくろかねをもまかねといはゝ白かねあかゝね惣してあらかねにむかへてふけるかねをはいつれをも申へきなり又此作者は萬葉をはまねひ侍らし又萬葉に有歌をおほえ侍らしおのつから末三句よみ合たるなるへし萬葉にならひ萬葉の歌をおほえもせはいつこをかよみたりとは申へき萬葉にはみむろの神のおはせるあすかの川ともみもろの神のおはせるはつせの川ともよみ侍り

このうたは承和のおほむべのきひのくにのうた

承和は仁明天皇の年號なりおほむべは大嘗なりおほなめともいへりみかと御位につかせ給へる年或は次年行はる其故延喜式の大嘗式に見えたり御へとかけるは誤なり或說に御贄にて贄をにへとよむ其上略歟とたすけたれと贄は御門に奉る物をいひていつに限らす歌にも其心なし又昔より贄の歌といふ事なし定てあやまれると知へし新穀をもて神祇を祭らせ給ひみつからもきこしめすなり御一世に一度行はるゝを大嘗といひ毎年行はるゝを新嘗といふ其事のおこりは神代紀に見え委しき儀式は延喜式江次第等に見えたり今の歌は主基方の歌也續日本後紀第二云天長十年十一月癸卯天皇御二八省院一修二祠祀之禮一戊辰御二豐樂院一終日宴樂悠紀主基共立レ標其標悠紀則山上栽二梧桐一兩鳳集二其上一從二其樹中一起二五雲一雲上懸二悠紀近江四字一主基則慶山之上栽二恒春樹一樹上泛二五色慶雲一雲上有レ霞霞中懸二主基備中四字一云々　八雲御抄には于時丹波播磨國なりと有おほしめし誤らせ給へる歟日本紀第二十九天武紀下云五年九月丙寅朔丙戌神官奏曰爲二新嘗一卜二國郡一也齋忌齋忌此云踰既則尾張國山田郡次次此云須岐也丹波國訶沙郡並食卜これゆきはきよまる心すきはそれにつく心なれは後に悠紀主基とかけともこれはかりてかけるにて正しくは齋忌次なり催馬樂「もとしけききひの中山昔より名のふりせぬは君か世のため

美作やくめのさら山さら〳〵にわか名はたてし萬代までに

是は催馬樂呂の歌也美作國久米郡にさら山はあればくめのさら山と云性靈集に美作國佐良莊とあれは只佐良山ともいふべき歟くめのさら山と云につけてさら〳〵にといへり伊勢が集に「みまさかやくめのさら山さら〳〵に昔の妹かこひらるゝかな是は伊勢か歌にはあらしと思ふ故は昔の妹とよむへからねは也六帖「美作やくめのさら山いなみのゝいな〳〵君はさらにならさし　下句のさらには上のくめのさら山をうけりたり萬葉「玉川にさらすてつくりさら〳〵たなにそこのこのこゝにかなしき拾遺「玉川にさらすてつくりさら〳〵に昔の人の戀しきやなそ

これはみつのをのおほむへのみまさかの國のうた

主基方の歌なり　三代實錄第三云貞觀元年十一月十六日丁卯車駕幸朝堂院齋殿親奉大嘗祭○十九日庚午撤去悠紀主基兩帳云々詔曰云々參議從三位行右衛門督美作守藤原朝臣氏宗正三位○內藥正從五位上兼侍醫參河權介物部朝臣廣泉等正五位下○參河守從五位下御長眞人近人散位美作介大中臣朝臣眞主等並從五位上外從五位下參河介壹志宿禰吉野正六位上右近衛將監兼美作權大掾紀朝臣正守並從五位下參河權掾大原宿禰麻呂美作掾佐伯直豐麻呂並授二外從五位下一　悠紀方は參河なりける

みのゝ國せきのふち川たえすして君につかへん萬代までに

これは元慶のおほむへのみのゝうた

陽成院の大嘗會の悠紀方の歌也　三代實錄第三十一云元慶元年四月十九日庚寅卜定悠紀美濃國席田郡主基備中國都宇郡並卜食　せきのふち川といふに藤原氏の心は有へからすみのゝ歌なれは彼國の藤川によせてたえすして君につかへんと云ん事諸臣にわたるへけれはなり定家卿のこれを取てたのみこし關の藤川とよせられたるはさも侍るへきなり大和物語「淺くこそ人はみるらめせき川のたゆる心はあらしとそおもふ　これは相坂にやたゝし關川とのみあれと下句は今の歌をとれるに似たり六帖國の題の歌に「みの山にしけりかさなる玉柏とよのあかりにあふるたのしき　作者罴主とあれは今の歌もおなし人のよめるにや催馬樂にはしけりかさなるをしゝにおひたるとあり又催馬樂に一むしろ田のいつぬき川にすむ鶴の千年をかねてあそひあへるかも　席田郡下にあひつれは是もこの度の歌なるべし

君か代はかきりもあらし長濱の眞砂の數はよみつくすとも

これは仁和のおほむへのいせのくにのうた

君か代はかきりなく長からんといふ心につゝけたり悠紀方の歌なり　三代實錄第四十五云元慶八年三月廿二日定二大嘗會國一悠紀伊勢國員辨郡主基備前國和氣郡並卜食一後撰戀五宇輔誰ためにわれか命を長濱のうらにやとりをしつゝかはこし　此右の歌の詞かきにいせのくにゝまかりて歸りまうてきて云々

この返しなり　躬恒集齋宮料屏風歌「長濱にゐて聽たるゝ時鳥五月はかりはあまにきりける　續後拾遺集賀部に仁和御時大嘗會悠紀方伊勢國風俗歌大伴黒主「いせの海のなきさを清み住鶴の千年の聲を君にきかせん　これおなし悠紀方の歌なれは作者くろぬしなることしられたり

大伴のくろぬし

あふみのやかゝみの山をたてたれはかねてそ見ゆる君かちとせは

これは今上のおほむへのあふみのうた

寛平九年七月十三日即位なる故に大嘗會も此年なり悠紀方袋草子に仁和の御時の歌といへるおほつかなし　あふみのやはたゝみまさかやなとよめると同し心なり　日本紀「ひらかたゆ笛吹のほるあふみのやけなのわくごはふえふきのほる」萬葉「あふみのや矢橋のしのを矢にはかてまこと有とや戀しき物を　鏡の山をたてたれはとは鏡山の立たるを鏡臺に鏡を立たるによせていへり此歌にのみ作者をいへるは以前の歌ともは作者を失へる歟

東歌

萬葉に〻東歌有第十四の一卷是なり又第二十の諸國の防人か歌も同し四方の國の歌有へきにひとり東歌といふ事は本朝は日神の國にて東をたふとふ故歟七道をいふ時も五畿內に次て東海道東山道といへり　崇神紀云四十八年春正月天皇勅二豐城命活目尊一曰汝等二子慈愛共齊不レ知レ曷爲レ嗣各宜レ夢朕以レ夢占レ之二皇子於レ是被レ命淨沐而祈寐各得レ夢也會明兄豐城命以二夢辭一奏二于天皇一曰自登二御諸山一向レ東而八廻弄レ槍八廻擊レ刀弟活目尊以二夢辭一奏曰自登二御諸山之嶺一繩絙二四方一逐レ食レ粟雀一則天皇相レ夢謂二二子一曰兄則一片向レ東當レ治二東國一弟是悉臨二四方一宜レ繼二朕位一四月立二活目尊一爲二皇太子一以二豐城命一令レ治レ東是上毛野君下毛野君之始祖也是天下に對してわきてあつまをのみいゝるにて知るへし

みちのくうた

あふくまに霧立わたり明ぬとも君をはやらしまてはすへなし

六帖には第四句せなをはやらしとあり　顯註にあふくまは河也それを人にあふによせて朝霧立て明

ぬとも君をはやらし待かすへなくわひしきにとよめり土民はあふくまとて大わたりとぞ申なる後撰に「あふくまの霧とはなしによもすから立わたりつゝ世をもふるかな　これは今の歌を取てよめる歟順集に「つらくともわすれすこひんかしまなるあふくま川のあふせ有やと　延喜式を考るに彼國亘理郡黒川郡信夫郡牡鹿郡磐城郡行方等郡に鹿島神社鹿島某神社といへるおなし亘理郡に安福麻河泊神社あり　三代實錄第七云陸奥國勳十等阿福麻水神○彼郡に鹿島伊都乃比氣神社鹿島猪名太神社鹿島天足和氣神社なとあれはかしまなるとはいふ歟顯註に大わたりとあるは郡の名亘理なれはいふ歟安福麻とかき今の俗ふもし濁りていへは此歌も然るへき歟それを逢隈といふやうにつゝけなすは白川のみつわくむまてなとつゝくるたくひ也

みちのくはいつくはあれと鹽かまの浦こく舟のつなてかなしも

六帖には第四句まかきの島のと有つなては和名集云唐韻云牽紋（音文訓豆奈天）挽船繩也　顯註に云陸奥の中にそこらの浦山につけておかしき歌枕いつくはおほくあれと鹽かまの浦こく舟のありさま見るはかり心ほそく物あはれにうらかなしき事やはあるとよみたるにもや侍らんとて伊勢物語に融のおとゝの河原院にて業平の鹽かまにいつかきにけんとよまれし所の詞心を得てひかる定家卿同心にて此義有興と感せらる但かなしもとはまことに悲歎にはあらすおもしろしもといふやうなる詞なりと釋せらる此密勘よく叶へり顯註は心ほそく物あはれにうら悲しと釋せられたれは猶此つなてかなしもを悲哀の心とみられたる也面白きあまりに心ある人はさもみるへけれとまつおもしろしもと見るへしつなてかなしもといふにはいそへに付てこき行さまの面白きをいへる心有萬第九に「ありそへにつきてこくあまから人の濱をすくれは戀しく有なり　此歌を思ふへし鎌倉右大臣のなきさこくあまの小舟のつなてかなしもと讀れたるよく心を得たる物也みちのくはいつくはある中に鹽かまにて鹽かまの浦に面白き事おほかる中に礒につきてこく舟の綱て引行さまのおかしとなるへし「（六帖）鹽かまの浦こきつらん舟の音はきゝしかことく聞

はかなしきこれ今の歌をふみてよめる也

わかせこを都にやりて鹽かまのまかきの島のまつそ戀しき

彼國の女夫の都へのほりけるを戀ひて歸らん事を待を松の名によせてよめるなり萬葉東歌にも一吾せこをやまとへやりてまつしたすあしから山の杉のこのまか

をくろさきみつのこしまの人ならは都のつとにいさといはましを

伊勢物かたりには初の二句をくりはらのあねはの松のと作りかへたりをくろさきといふ所のみつのこしまなりめてたき所なれは此島もし人にて聞しる事あらましかは都のつとにいさとさそひてのほりなましと讀り萬葉十七一玉津島見れともあかすいかにしてつゝみてゆかん見ぬ人のため

みさふらひみかさとまうせ宮城野の木の下露は雨にまされり

みさふらひは御侍なりみかさと申せとは御笠さゝせ給ふへしと申せと也これは國司或は鎮守府將軍なとの狩なとに出たる時よめる歌なるへし上に宮城野のもとあらのこはき露をおもみともよめり彼野は惣して露深き所によみならはしたるもとは此歌なり

もかみかはのほれはくたるいなふねのいなにはあらすこの月はかり

續日本紀云和銅五年十月丁酉朔割陸奥國最上(和名集云毛加美)置賜(和名集云於以太三)二郡隷出羽國焉三代實錄第三十五云出羽權守藤原朝臣保則奏狀曰管最上郡道路險絕大河流急云々　今は此歌をみちのく歌に入たるは最上郡むかしみちのくなりけれは歟出羽は兩郡の外いにしへは蝦夷の地にして後に彼等たひらきて兩郡をそへて一國を建られけれは出羽をしかしなから陸奥に屬する歟歌の心上の句はいなにはあらすといはん料の序なりそれによりてのほれはくたるとはいにしへは田ちからをは皆稻にて納ける故に正稅幾萬束幾千束なと物にも見えたりことに陸奥出羽兩國の貢物をは當國に納置けれは民ともの舟にて運ふとてしけくのほりくたる心也　延喜式民部式云凡諸國貢調庸者云々其陸奥出羽兩國便納二當國一　此心なりのほれ

はくたるとはおなし舟のたひ〴〵のほりくたるにても有へし又おほくの舟のゝほるも有くたるもあるにても有へし下の句の心はいなあはしとおもふにはあらす此月はかりは待過せさはる事有といふ心なるへし此月はかりといふをしはしまて君ともいひつたへたる歟　拾遺集に圓融院御時東三條太政大臣大將をはなれてよみて奉られける長歌の次にこれか御返したゝいなふねのと仰られたりけれは御返し「いかにせんわか身くたれるいな舟のしはしはかりのいのちたえすは　此後今の歌を取てはおほくしはしはかりといふことをそへてよみ侍り顯註に又もかみ川は出羽最上郡より流れ出て侍るとかやさてみちのくにゝは北上と申とかやといへり出羽の國に住人の申けるはもかみ川はみちのくより流れきて末は秋田の方までもなかるとなん申侍ける顯昭説はかたる人のあやまりけるにや

君をおきてあたし心をわかもたは末の松山波もこえなん

萬葉ならひに日本紀に此やうのおきてといふには除の字を用たりあたしといふには日本紀に別異他餘これらの字をかけり男女の中のみならす何事にもことなる心にはあたしといへり萬葉にあたと云には化の字泛の字を用給へりあたとあたしと末は通し侍るへけれと本はかはれり今の歌の心は君をさしおきてこと心をわかもちたらは末の松山にはるかにのきたるあなたの海に立浪の山をこえぬへし浪の山をこす事有ましけれはあたし心はつひにもたらしとちかふ心なり漢高祖の功臣を諸侯に封する時の詞にも泰山は礪のことく黄河は帶のことくなるとも此約は變せしといひ日本紀に新羅の人の誓ひにも東の日の西に出あれなれ川のさかさまになかれ河の石のゝほりてあまつあか星になるまてにかはらしといへるは有ましき事のあらんまでといふ心なれは今と同し顯註に能因か歌枕にはもとの松中の松末の松とて三重に有と申されはにや山とはいはて末の松とよめる事も侍といへり今案末の松とよめるは源氏に「波こゆる比ともしらす末の松まつらんとのみおもひけるかな」又松をすてゝ末の山とのみもよめり 信明集「末の山昔よりまつ君

をおきて浪高くともこえしとそ思ふ「元眞集末の山まつ人をのみ頼みつゝ我をはなみとおもふなるへし

さかみうた

こよろきのいそたちならしいそなつむめさしぬらすなおきにをれ浪

いそなは磯邊におふる菜なり萬葉には濱菜つむあまをとめらともよめり　めさしは顯昭めのわらはへなりと釋せらるゝを密勘云さためて證侍らん　顯昭或古物語に「きの國のなくさの濱に貝ひろふあまのめさしのおとなゝりせは　と侍れはめのわらはへの義に叶へりとかゝる今案神樂朝倉本歌云「朝倉やをめのみなとにあひきする玉のめさしになひきあひにけり　袖中抄に玉はほむる詞なりと有今案神樂歌にはあやめをさやめあすをさすなと同韻にて通せる事おほけれはこれもたまはあまにてあまのこを玉のめさしといふ歟又催馬樂に「竹川の橋のつめなる花そのにわれをははなてめさしくはへて　これもめのわらはをそへてしるへとして花そのにつかはせといふ心歟と聞ゆ　狹衣にめさしなる御くしをせちにかきやりつゝあそひむつれたまふとかけるもいときなき子のひたひの髪の末かほにさかりて目をさすはかりみしかきを云れは此心にわらはへをめさしと名付たる歟枕草子にあまにそきたるちこのめに髪のおほひたるをかきはやらて打かたふきて物なとみるいとうつくしこれめさしとはいはねと狹衣に同し　密勘に庭訓如二奥義抄一あまのいさりすとて物なと取いるゝ籠なりと申されきとあれは花つみいるゝかたみをくはへて花園につかはせといふ心とも申へき歟但狹衣の證わらはへに定まりぬへし「おきにをれ浪とは沖のかたへをれ歸れとなり「曾丹集かものゐるすさきのみより氷とちよりこし浪もおきにをりつゝ

ひたちうた

つくはねのこのもかのもに陰はあれと君かみかけにますかけはなし

このもかのもはこなたおもてかなたおもてなりふるく此歌をのみ執してこのもかのもも筑波山にかきるとおもへるは誤なり　後撰に「やま風のふきのまに〳〵もみちはのこのもかのもにちりぬへらな

り　大井川序にわれらみしかき心このもかのもにまよひ云々　源氏夕かほにけにいと小家かちにむつかしけなるこのもかのも云々榊にこのもかのものしはふるひ人云々　萬葉十四東歌に「つくはねのをてもこのもにもりへすゑはゝこもれとも玉そあひにけり　此をてもこのもとはをちもこのもにてをちもは彼面このもは此面なれは今と同し事なり又同十四卷にあしからのをてもこのもとよみたれはこのもかのもいつくにかよまさらんつくは山はしけき山なれは源重之歌にも「つくは山はやましけ山しけゝれと思ひ入にはさはらさりけり　されはかくはかりしけき山なれとおほんめくみの陰にまさる陰はなしといへる也

つくはねのもみちは落つもりしるもしらぬもなへて悲しも

このもかのもより落つもるもみちはその木此枝よりとしらねとみなあはれと見るを知もしらぬもなへてかなしもといへるなりさきのつなてかなしもの悲しに同しこれもおほやけのあまねきおほんめくみの所をえらひ人をわきたまはぬにたとふるこゝろなり

かひうた

土佐日記に又ある人西の國なれとかひうたなといふかくうたふにふなやかたのちりもちり空行雲もたゝよひぬとそいふなる

かひかねをさやにも見しかけゝれなくよこをりふせるさやの中山

さやにも見しかはさやかにもみてしかな也　けゝれなくは心なくなりけゝれこゝろ五音通せり顯註に或はけゝらなくともいひけるはらとれと五音同なりとあれはけゝらなくともかける本有ける歟よこをりふせるもよこをりこせるとかきてこせるはふしたる心なりされはふせるとかきたる本も有といへりかひのしらねをさやかに見るへきに心もなくよこたはりふせるさやの中山かなとよめるなり或はよこをりくせるとかきたる本有くせるもふせるといふ詞なり駿河國の風俗にいへり　今案これは甲斐の國の者の遠江に有て故郷をこひて次の歌とゝもによめるをもと甲斐のものゝ歌なれは甲斐歌とはせる歟もし又みやこへのほるとて遠江まて

きて故郷を戀てよめる歟　新拾遺集旅部に家持歌とて「旅人のよこをりふせる山こえて月にもいく〳〵よ別れしつらん　此歌古來沙汰なく家集にもなければおほつかなし與義抄に玄々集左衛門權佐宣孝大貳三位父「かひかねを見るときくは誠にやよこをりふせるさやの中山　土佐日記に云ひんかしのかたに山のよこをれるを見て人にとへはやはたの宮といふとかけり　八雲御抄に一說によこをりくせるさやの中山といへり

かひかねをねこし山こし吹風を人にもかもやことつてやらん

これはかひかねのかたをさして遠江の方より峯をこえ山をこえて吹行風の人にもかな我おもひをことつてやらんものをといへるなり　顯註に都へことつてやらんと註せられたるは心たかへり都の人のかひに有て都を戀ひてよめる歌ならは甲斐歌とはいはし

伊勢うた

おふの浦にかたえさしおほひなるなしのなりもならすもねてかたらはむ

顯註云おふの浦は志摩國に有齋宮御莊獻梨之處也されと伊勢島とて伊勢と志摩とひとつによむなり又なりもならすもといはんとてなるなしとよめりねてかたらはんといへは戀の心によめる歟さてかた枝さしおほひたるやうにきぬうちおほひてなりもならすもとはおもふことかなひかなはすかたらはんとよむ歟　今案顯註のさてかたえさしおほひたるやうに衣打おほひてといへるをは捨へし取へからす　萬葉第十四東歌に小山田の池のつゝみにさす柳なりもならすもなとふたりはも　なとふたりはもはなとは汝となりはもはいはもの上略にていはんなり柳をさしておひつくとおひつかぬとあれはそれをなりもならすもとよせて汝とふたりいはんとなりこれ同し心なり六帖「人つまはもりかやしろかから國の虎ふす野へかねて心みん

冬の賀茂のまつりのうた　藤原としゆきの朝臣

寛平御記云宇多帝潜龍時號王侍從放鷹狩于賀茂邊俄天陰霧降東西迷レ路帝臥二藪中一憂愁之甚有二一翁一來告曰吾此邊老翁也春既有レ祭冬未レ有レ祭願賜二冬祭一帝心爲二賀茂明神一也因答曰吾力非所及宜レ被レ奏二

請于内一翁曰吾知二其力之所一及願自重而勿レ輕矣言已不見帝大怪之未レ幾仁和三年八月廿六日立爲二皇太子一即日即二天皇位一於是信二神言一而寛平元年十一月廿一日己酉始行二賀茂臨時祭一左近中將時平朝臣爲二勅使一藤原敏行朝臣詠二東遊歌一十一月下未日試樂ありて下酉日臨時祭あり　續日本紀云延暦三年十一月戊戌朔丁巳遣二近衛中將正四位上紀朝臣船守一叙二賀茂下上二社從二位一

ちはやふるかものやしろのひめ小松萬代ふとも色はかはらし

此歌をはてとするは歌もすくれたる上今上の父みかとの此御神のまもり給ふちからによりて寶位にのほらせ給へは萬代ふとも撰者もともに行末かけていはひたてまつる心なるへし　後撰集に延喜御時賀茂臨時祭の日御前にてさか月とりて三條右大臣「かくてのみやむへきものかちはやふるかものやしろの萬代を見む　これ此敏行朝臣のはしめてよめる歌をおもひ給へるなるへし

家々稱證本之本作書入以墨滅歌今別書之　これは定家卿の注なり

巻第十物名部

ひくらし　つらゆき

そま人は宮木ひくらし足引の山の山ひこよひとよむなり

在郭公下空蟬上

拾遺集にふたゝひ入たるには蜩とよむなりと有

勝臣

かけりても何をかたまいきてもみんからはほのほと成にしものを

をかたまの木　友則下

これよくよめる物名の歌なれとゆゝしきうた也元亨釋書第二十九拾異志曰寶龜元年大傳藤原永手薨其子大中大夫病醫治不レ効乞二法教一比丘一比丘燒レ香持咒手レ時大中託曰我永手也我生平仆二法華寺幢一又勸レ八營二八角七層塔一我令三其滅造二四角五級一由レ此墮二地獄一身抱二火柱一手打二火釘一忽閻王宮大烟充塞王驚問二傍人一曰日本國藤永手子病咒師焚香持咒其烟及レ此也王乃赦レ我歸二本土一而我屍已燒無レ所レ寄屢來告耳言已病愈

くれのおも　つらゆき

和名集云懷香一名懷芸和名久禮乃於毛
こし時とこひつゝをれは夕くれのおもかけにのみ見
えわたるかな

忍草利貞下

みつね集
「いつしかもまつ夕暮のおもかけに見えつゝみえ
ぬことのわひしき　これもくれのをもをかくせり

おきのゐ　みやこしま　　　をのゝこまち
おきのゐて身をやくよりも悲しきは都しまへの別れ
なりけり

からこと清行下

おきは和名集に熾於岐比　此字なり此歌おきのゐはか
くしたれとみやこしまは其まゝにいひたれは物の
名といはゝたゝおきのゐとのみかくへし　伊勢物
語には作者はなくておきのゐみやこしまといふ所
にてさけのませてよめるとあり　うつほ物かたり
におきのうへにゐる心ちしていやますくにおほ
さるゝにとは此歌にてかける歟菅萬「人をおもふ心の
おきは身をそやく煙たつとは見えぬ物から

そめとの　あはた　　　あやもち
三代實錄第二十九云貞觀十八年十一月廿七日庚子
車駕幸染殿院廿八日辛丑天皇有レ意レ讓レ位故出ニ居
外宮ニ云々廿九日壬寅皇太子出レ自ニ東宮ニ駕ニ牛車ニ
詣ニ染殿院ニ是日天皇讓ニ位於皇太子ニ同第三十云元
慶元年ニ閏二月十七日己丑山城國愛宕郡水田九町
二百九歩奉ニ太上天皇染殿宮ニ以ニ便近ニ也三月八日
己酉皇太夫人奉レ參ニ太上天皇染殿宮ニ親王公卿相
從畢至ニ宴飮極レ歡夜分而還　拾芥抄云染殿（正親
町北京極西二町忠仁公家或本染殿清和院同所）清
和院（正親町南京極西清和母后御在所）清少納言
に家は近衞御門二條一條もよしそめとのゝみや云
々六帖「あはた山こゆともこゆと思へとも猶あふ坂は
はるけかりけり

うきめをはよそめとのみそのかれ行雲のあはたつ山
のふもとに

此歌はみつのをの御門の染殿よりあはたへうつり給
ふける時によめる

桂宮下

此注によるに拾芥抄に或本染殿清和院同所といふ
正說歟　三代實錄第三十五云元慶三年五月四日癸
巳太上天皇遷レ自ニ清和院ニ御ニ粟田院ニ即是右大臣

藤原朝臣之山莊鴨水東也　此時の事なるへし　又云廿三日己卯是夜戌時太上天皇出自粟田院御宿粟田寺以明曉將幸大和國也かゝれば粟田院と云と粟田寺と別也　又第三十八云元慶四年十一月廿五日乙亥先レ是太上天皇聖體不豫是日遷レ自二棲霞觀一御二圓覺寺一圓覺寺者故右大臣粟田山莊也かゝれは粟田院を寺となして圓覺寺と名付給へるなりあはたつは水のあはのことくたつをいふ歟文選に澆をあはたすとよめりうすくたつ雲歟

卷第十一

奥山の菅のねしのきふる雪の下

けふ人を戀る心は大井川流るゝ水におとらさりけり

宗于集には歌合にとて山里は冬そさひしさといふ歌の次に有大井川なかるゝ水にをあすか川なかるるみをにとありこふる心は大井川とつゝけたるは多しといふ心なり流るゝ水におとらぬとは絶すおもふ事水のなかるゝことしとなり

わきもこにあふ坂山のしの薄ほには出すも戀渡る哉

此歌萬葉第十に有にはほにはさき出す戀わたるかもと有宗于集にも有不審なり　わきもこは吾妹子なりわかいも子といふへきをつゝめていふなり昔の俗妻をいひけるよし日本紀に見えたり萬葉を見るにおほよそ妻のみならす惣して女をしたしみてよふ詞なりあふ坂とつゝけたるは女に行あふ心の枕詞なり　萬葉第十三にものゝふのうち川わたりをとめらにあふ坂山とつゝけたるを思ふへし又をとめらに行あひのわせをかる時になともつゝけたり今はそれをわきもこにあはんと思ふ心にいひよする歟しのすゝきはほには出すもといはんため也しのすゝきはほに出ぬ物なりと思へるは誤なり穗に出る物をかりてほには出すとつゝくる歌のならひなり「秋萩の花野のすゝきほには出すわか戀わたるこもりつまはも（萬葉十）「はたすゝきほには出なと思ひてある心はしれりわれもよりなん（同）

此二首はしのすゝきといはねともほに出ぬとよせたり又「石上ふるのわさ田のほには出す心のうちにこふる此ころ（後撰敦忠）　これもほに出るものをかりてほには出すもとよめり「あふこともいさほに出なんしの薄忍ひはつへき物ならなくに（拾遺勝親）「しのふれとく

るしかりけりしの薄秋のさかりになりやしなま
し後拾遺輔親「しの薄しのひもあへぬ心にてけふはほに出る
秋としらなん金葉集「今はしもほに出ぬらん東路のいは
田のをのゝしのゝをすゝき　これらみなしの薄を
ほに出とよめり萬葉旋頭歌「しのすゝきほには咲出ぬ戀を我
するかけろふのたゝひとめのみみし人ゆゑに六帖「年
ふとも我わすれめや相坂のしのゝをすゝき老はて
ぬとも同「秋風のやゝ吹野へのしのすゝきほに出ぬ
戀はくるしかりけり同「しのすゝきほには出すとも
行秋をまねけといはゝそよとこたへよ　今案今の
歌は萬葉に寄花と有て皮爲酢寸とかけり萬葉にか
くかける所三所有皆しのすゝきと點せり思ふに皮
をしのと點するいはれなし檜皮をひはたとよめは
皆はたすゝきにかりてかける歟岸に雉をかりてか
けは清濁は通するなり又萬葉第七に「妹かりと我
かよひちのしの薄我しかよはゝなひけしのはら
此しのすゝきをは細竹爲酢寸とかけりさて細竹原
とかへしていへるは上のしのすゝきなれはしの薄
は細竹の如くなるすゝきにて穗に出ましきやうに
おほえたり世にさる薄川邊なとにおほし山野なと
に有はみな穗に出るなり

卷第十三

こひしくはしたにをおもへ紫の下
いぬかみのとこの山なるいさや川いさとこたへよ我
名もらすな

此歌萬葉第十一に有には下句いさとをきこせわか
名つけすなと有六帖には名を惜む「いぬかみやと
この山なるいさゝ川いさとこたへて我なもらすな
顯昭の本も六帖と同し但いさとこたへよは今の本
のことし後拾遺集の序によしの川よしといひなか
さん人にあふみのいさゝ川いさゝかに此集をえら
へり　源氏物語椎にいとかく世のためしになりぬ
へき有さまもらし給ふなよゆめ〳〵いさゝ川なと
もなれ〳〵しやとて云々新千載集雑下藤原長能「うしとたに云はさらな
りいさゝ川いさやいかなる我身なるらん　かく異
義まち〳〵なれと萬葉に不知也川とかき又同第四
に岳本の天皇の御歌にもあふみのとこの山なる
不知哉川と讀せ給へは是を正說とすへし犬上は郡
の名也天武紀上云　時近江命ニ山部王蘇我臣果安巨

勢臣比等ニ率ニ數萬衆ニ將レ襲ニ不破ニ而軍ニ于犬上川濱ニ此犬上川といへるがいさや川歟上句はいさや川いさとつゝけんための序にて心なし　源氏にはとこの山なるとくちかためてといひ枕草子にはとこの山は我名もらすなとみかとのよませ給ひけんいとおかし

此歌はある人あめのみかとのあふみのうねめにたまへると

此注或人のいはくと有歟さらすはたまへりとなん申すと有ぬへくおほゆ

返し　うねめのたてまつる

山しなの音羽の瀧の音にたに人のしるへくわれこひめやも

さきにおとはの山と有しに山と瀧とひともしたかへはさきのはたゝ此返しなり

巻第十四

おもふてふことのはのみや秋をへて下

そとをり姫のひとりゐてみかとをこひたてまつりて我せこかくへきよひなりさゝかにのくものふるまひかねてしるしも

允恭記には下句くものおこなひこよひしるしもと有

深養父戀しとはたか名つけゝんことならん下　つらゆき

道しあらはつみにもゆかん住の江の岸におふてふ戀わすれ草

萬葉「いとまあらはひろひにゆかん住の江の岸によるてふこひわすれ貝「新古今住吉の戀わすれ草たねたえてなき世にあへる我そ悲しき

以上下巻合六百三十二首或六百三十七首　上下合千百首

外十一首墨滅　古今餘材抄廿巻先年撰之雖然草稿汚穢自猶不得讀由此誂老兄去年彼草畢日月荏苒校訂延而及今愚案之中若有一兩義之可取庶伸童蒙矣

元祿五年仲秋廿五日　密門釋契冲記之

再記假名依日本紀萬葉集和名鈔等後人莫惟之

# 尾張の家苞

全

# 尾張迺家苞序

おのれ物の序に六度集經をよめる事ありき其中に載たる鏡面王經にある時王目しひともあまたつとへてとひ給はくいましら象といふものを見たりやこたへけらくともに見たり王又とふ象はいかなる物そ其こたへ足をもちしものは漆桶のことく尾をもちし物は掃箒のことしなと皆おのかしゝさくりし所のまゝにこたへてさて象は我らか申せしことき(ごとき)ものにあらすやと申せしかは王いまし目しひともいまた佛經といふものを見すやとてわらひ給ひきこは釋尊の教のまち／＼なるを諸宗の祖師たち其おしへの廣くおほいなる事をえさとらてかたかと計を聞とりて是すなはち佛の正意なりとおのかしゝいひほこりて衆生を導なとするををかしとおほしてかの瞽者の足をもち尾をもちて象はしか／＼のものなりとこたへしをわらひ給ひしたとへ也是誠にしかり和歌の道も又かくそ有へきそはまつあかれる世の風を學ひえんとおもふ人はいはゆる華嚴說法いと物遠きこゝちすれはしはらくさしおきつさて俊成卿定家卿を釋尊ともあかめ奉る和歌者流をはしめ何の先生くれの宗匠たち彼象の足尾なとさくりえて是象也と心得ていひほこる目しひのみ多かるは釋尊ともあかむる彼兩卿はいかにおほしていかに笑ひ給ふらんといとかたはらいたくなん然るに本居先生は世にまれなる博覽卓識の見解にて此集をしも論せられたる尋常にはやうかはりていとめてたしされと七寶蓮華のうちにて十二音樂を聞かことく心ゆかす折かたふくめるふし／＼の多かるは倘化土の機根なりしにやおのれさきに江戸に物せし程をち正明にとひ尋ねしにこれかれしるしてくれられしはかの目しひの目ひらきてはしめて全象を見かことしとやいはん此教をえてこたへんには鏡面王はいかにの給はせんや正しくいはゝ是なん至り淺き正俊らかために正定聚不退轉なといふ位に住する心地して誠に一乘の妙法には有けるさて此文を年久しく櫃に納めてひめ置しにかゝる尊きゆゑよしをおのれ計さとりをらんは聲聞緣覺なりとおもひおこして片野の何かしにかたらひ尾張の家苞と名つけて櫻木にえらするになん哀此注さしの光明遍く十方世界の歌よみの衆生をてらして濟度のたすけともなれか

しとてなんあなかしこ下品下生の初學のおしへにて
はやく妙覺をえたる諸先生のためにはあらしかしな
めけにかくいふとなおもはれそゆめ

文政二年四月　　石原正俊

# 尾張廼家苞一之上

正俊か尾張の國より來ゐて何くれととひける事の中に新古今集の歌とものこゝろはへをなんことにこまやかにとひ尋たるにさとしあけつらひたる趣をおなしくは國にかへらん家つとに書しるしてえさせよとこへるまゝにかきてあたふ

萬葉集古今集はめてたき事はめてたけれと今時よみ出る風には時世あかりて打あはす新古今集の其代の歌なん打まかせたる則には有けるされと其歌意ふかくにほひあまりて輙心えかたしおのれさきに注釋二三種みつれと皆いふかひなし唯本居先生のみのゝ家苞なんさる英雄のたけく思てし出られたる事なればめつらかにめ覺る書なれとむねと立られたる論にしからすとおもはるゝ所ありてあかぬ事におもへりしかと其門人にも打かたふく人これかれあめりさやうに人のこゝろ付たる事にしあれは我いはてもあるへしと年ころは打すて置つるをかのかたふくめるひと〳〵も俊成卿定家卿さはかりの名匠たちを心にまかせてそしられたるをよもしからしと綱ひくまてにて

取とめたる見解しなけれはそのまとひはひとつなり正俊かもとめも親切なるにさてあらんやはとてしふ〱に筆をとる事とはなりぬかりそめのすさみにても此先生の是非をいはんことはいとかしこしさるは新古今集のころの歌は一首の口調をめてたくとゝのふる事を本意として詞のうへに心をのこして餘韻を深くこめ一首のつゝけさま幽玄にしてあらはに淺まなる所なくなさけをふかうし語勢をいたはりたけ高くもしめやかにもつよくもやわらかにも百般の姿ありたゝしほ〱くた〱とするをきらひて詩人のいはゆる雄偉流暢豪壯新奇といふしらへを常にはおもひためりかの新奇なるあまりにこまやかに理をいはゝすこしいかにそやと思はるゝふしなきにしもあらねとそれはた瑕ありとも玉とならん事を願ひて全き死をおもはさりし物也此姿は文治より建保までの諸先達の後地をはらひて見えす爲家卿なん當時の名匠にて世にゆるされたる歌よみなから秀逸拔萃なる歌は一首もなく只ちはうに凡様なるのみにて縁の詞なと取あつめ上下かけあはする事をしおほえて終身一律の全き死なりさるわさはまねひやすきけにや末代この風のみ多し本居先生は古學者にて萬葉以下の書に熟してめてたき才覺なれは拔群の論もあるへきをかのかけ合なといふことになつみて此集をしも論せられたることとなれはたらひの水もて四大海の潮を論することくいたく堺を隔て氣緊くたりたり上下のかけ合縁の詞の配當を規矩にしたるは爲家卿の創立なれとなそ爲兼卿にあらそはむと爲世卿の執したる事にて此集の縱横磊落なるに目を回していふへき事にあらす○此ついてに彼兩卿の門風の子細をいふへし此論に至要なる事也先上古の風體は姑さし置て古今集よりこなた漸に今めかしく花やかにはなりたれとその姿大かたは同しかりしを白河堀河なときこゆる御代にいとけさやかにけうがる岩すへるみ山かたそはおりかたみ花まきあけよ谷の辻風なとやうの不思議なる事いてきたりさるは古今以來の風にあきて新しくめつらしくよまんとのわさにはあれといとけうとくすさましけなりこは俊頼基俊なと事はしめして數十輩の歌人響の聲に應するかことく皆其風にうつりし也撰集には詞花金葉大かたはなたらかにてめてたけれとその心はへはましれり續詞花集も准勅撰に

せんとの攝にて選はれたれはめてたき事はめてたけれとこの習にひかれたりと覺ゆる事すくなからすされと撰集には異體なる歌の數も少くあるもきは〳〵しきはをさ〳〵みえねは此心しらぬ人のめにはたゝぬほとの事なれはよろしきを百首歌合家集には耳目をおとろかす事のみ多かり俊成卿もはしめはもはら其姿をよみ給ひしをさる歌の聖なりけれはかゝる姿はよろしからすと看破してやさしくうつくしうよみ直し給ひて千載集はいてきたりその千載もなほ山口にて文治よりつき〳〵其すかたを研究して此集はなれりけれは千載は遮情の菩薩新古今は表德の如來なりさるは三院あやしきまて歌のひしりにおはします殿下はた世にしらぬ上手にて百首歌合の催日々月々のことなりけれは上をまねふ人心にて我おとらしとめつらかにをかしき事をいひ出んとはけみたる物なりされは神代より末の世までに此道の行はるゝ事此時をさかりなりとす一時の名匠三四十人いつれ劣れりともみえさる中に俊成定家兩卿ことなる宗匠なりけれは和歌はかの家の物のやうになりそめたりかくて承久の亂いてきて三院所々に遷幸し給ぬ後堀河院と申はさる事好ませおはしまさゝりしにや御百首御歌合と云事をさ〳〵聞えすかゝりしかは英雄の諸君子たゝ魂をうはゝれたらん心地してより所なかりしなるへしかの亂の後の定家々隆の卿なとの歌何くれとあれともいといたうすさましきのみ也新勅撰集の此集に及はさるは時世の氣を帶したる故也かくてこの道地に落て年月へたりしを後嵯峨院世をまつりこち給しほと再世上に勃興して百首歌合なと何くれと數多かりかゝりけれは又其世につけたる上手たち出來て絕たる道を繼し也その上手たちの中に爲家卿は俊成定家の孫子也けれは世のおほえよせおもき宿老なりしかはたゝ此人ひとりをおもてにたてゝよくもあしくも其指揮に從ふ事となりぬ世尊寺の筆道に家を立たる如く歌道を家の業とさたるは此卿なんはしめ也けるかくて此卿に子三人あり太郎爲氏其子爲世御子左と號す二郎爲敎その子爲兼毘沙門堂と號す三郎爲相冷泉と號す冷泉は此論に用なけれは姑さし置へし御子左の流は爲氏爲世打つゝきていとめてたき歌よみ也さるは爲家卿の風骨にて俊成定家の氣韵には遠く及はねともさる所せき規矩の中にゐて滯なく

よみたる物にて結句は爲家卿よりもすくれたる所なんみゆる又其門に頓阿といふ上手ありて其風の勢を揮し也毘沙門堂の流は爲敎卿上手にて爲氏卿にも劣れりといふけちめふとしもみえわかす其子の爲兼卿もまた一時の名匠にていといきほひある歌よみ也此風は爲家卿の持法なるをきらひて上二代の風に心をかけたれはすこしく氣概はあるに似たれとあやしきくせある風にて御子左にまさらすまさらねとこれも一家也玉葉風雅とていみしき物にいひ思ふは御子左の遺言なれとさのみはいかゝあしからむ野守鏡井蛙眼目なとにそしられたるは我かた引たる論說なれはその心してみるへしかくて御子左は爲氏爲世と打つゝきて和歌は只我家の物となしはてたるに同流にさる物の上手いてきて撰集をもうけ給りし事なれは家門の嫡庶のまきれもいてきぬへくて周章したるもの也羣書類從にいりたる陳狀をみてしるへしさるまゝに幾干種の僞書をつくりて毘沙門堂にてもてあそふ言葉共をしか〳〵とはよまさる事しか〳〵とはこひねかはさる事といひて定家爲家の兩卿に託して其說を主張して爲兼卿の說を防きたり此兩卿はかの家の

系列の祖なれは必據へしとおもひて也世上の歌よみに草庵體とて持法なるかあるは其風の名殘也かくて爲兼卿は其家つゝかす爲世卿は爲藤爲明爲定爲遠等の卿皆めてたき歌よみにてつひに此風に一致したり一致したるうへはかの風の詞の禁忌もありたりけんを今にいたるまてその餘習にひかるゝ事もあるへし大かたの人はさてもいかゝはせむ本居先生は世にめてたき物しりにてかゝる子細をわすれて草庵體といふ風になつみて褊小なる論せらるゝはいかにそやそは皆普通の小理なれは凡人の機根に相應してけにとふかくおもひしみぬへけれは大きなる道のさまたけ也正明尾張にゐたりし比詠草まいらせて歌なほして給はらんとこひ申たる事ありきほともなく江戸に來て今の先生の敎にしたかひしかは恩をうくる事日淺しといへとも猶そのかみのことは忘れすさるほとに此先生の是非をいはん事はいとかしこく議論の末にはなめけなる事もや出こんといと憚あれと水底清き此集の流にみくさのふたからんはくるしかるへけれはわかいひしことのあしからんにはなしたかひそあけつらひ定てよきにしたかへと敎置れたる事もあ

り岡部の翁のあやまりを糺しもとかれたる事の迹もしるけれはさりともあしとはおほさしとおもひ起してなんあなかしこ／＼

## 新古今集

春歌上

春たつ心をよみ侍ける　　攝政太政大臣

み吉野は山も霞て白雪のふりにし里に春は來にけり

初句はもしいひしらすめてたし○此上にめてたし詞めてたしとありされと此集の歌いつれかめてたからさらんとりわきてほむるは中々なるわさなれは今みな略くへし　のともやともあらんはよのつねなるへし○まつ此御歌は大かたはみよしのや山はかすみて白雪のふりにし里も春は來にけりとあるへきかことくなる歌なるを三吉野や山と重疊したるか語路の宛轉に聊あかぬ所ある故はとし給へり此例此集の比これかれあり別に注すへし古人の調に心を用ひたる事大かたならさる事をみるへしさてみよしのゝとはいひかたきに山ものもゝし大切なりけれは下にいふへきもゝしをこゝにいひて山もかすみて此ころまてしら雪のふりし里にも春は來にけりと四の句へもひゝかせたる御とゝのへさまいみしうめてたし山はといひては故郷はかすまて春ともなきかことくなる勢にていとわろし畢竟は口調をいたはるために枉てはとの玉へるなれははもしはほめ奉る事もなし下にいふへきもゝしを上にいひてめてたくとゝのへ給へるなれは此もゝしをこそほめ奉るへくは有けれ又みよし野のといはんは芳野と故郷とこと所になりていとわろしおのれ國にありし比此先生なこやへ物せられて歌の會ありし時足柄の關の八重山ほの／＼と朝霧ふかき竹の下道とよみつるを足柄やと直されて足柄のといひては竹の下道足柄とはこと所にきこゆるそと教られき今偶此論を立るも猶故先生の遺澤也一首の意はみよし野ては山もかすみて此ころまて雪の降し故郷にも霞か立て春か來たるけしきそと也白雪はふるさとの序のやうにて近日まて雪のふりし事をもたせたる也

春の始の御歌　　太上天皇御製

ほの／＼と春社空に來にけらし天の香山霞たなひく

初御句かすみたなひくへかゝれり二の御句へつゝけてはこゝろうへからす○かくの如し　空とあるを重く見て山の名の天といふと相照して見へし○山の名の何となく御一首に相應したる也一首の意は天のかく山にかすみかたな引たるは春か大空に來たらしいとなり初句は霞の事なり　此集の比のうたはすへてかゝる所に心をこめたる物なり○天と空とかけ合たりとてかくいはるゝか其かけ合といふ事也爲家卿の無骨にて歌をくみたつる術也此集の比は自在なれはたてゝ照應を云へからす

百首歌奉し時春の歌　　式子内親王

山深み春共しらぬ松の戸にたえ〳〵かゝる雪の玉水

春ともしらぬ松とつゝきたるも趣の外の餘のにほひなり○秋ともしらぬ松とつゝきたらはこそあらめ春ともしらぬ松にいかなる匂ひかこもるへきまつの戸はたゝ柴の戸といふも同し事也一首の意は都てはさま〳〵に春めいた事てあらうがこゝは山か深さに春といふ事は何もしらねと松の戸に雪とけの玉水かたえ〳〵かゝる故春かと思ふと也かやうの歌のめてたきはうちよみたるしらへのめてたき也ことなる趣意あるにはあらす世上に新古今集をたくみ也といふそれも一つの姿なれと此御歌のやうなるも常にあり畢竟は姿やさしく調高きをもて一貫の論とすへし

五十首歌奉し時　　宮内卿

掻くらし猶故郷の雪の中に跡社みえね春は來にけり

四の句雪のなほふる故に來つる跡はなけれとも也○春の來たるあとの事也　春はといへるに人は來ぬ意あらはれたり○はもしに其心はなし人の來る來ぬといふ事此歌に用なき事也

入道前關白右大臣に侍ける時百首歌よませ侍けるに立春のこゝろを　　皇太后宮大夫俊成

けふといへは唐土迄も行春を都にのみと思ひける哉

二三の句かの大貳三位か歌とはやうかはりてくちをし○大貳三位歌ははるかなるもろこし迄も行物は秋のね覺の心也けりと有此歌の詞をとりてはあれとたゝ同しさまにめてたきをくちをしとは何故ならん　立春の歌に行春とはいかゝ三月盡の歌にもなりぬへし○まてといふことはにて三月盡の歌とはならす　これらもよさまにたすけていはゝい

ふへけれと今人のかくよみたらんには誰かゆるさむ○人はしらす正明はいとめてたしと申へし　なと立春とはよまれさりけむ○もろこしまてもたつ春といふつゝけやは有へきまてもといふ詞に心つかれさりしにこそ例は精細にのみあるをこゝはたま／＼踈漏なり春は従東到といへはあつまよりみやこまては來る春なれとなほそれよりも西の國々に行わたりもろこしまても行とゝく春なれは行春といはていかゝいはん立春の歌に行春とはいかにとあるもふと一ことは打きゝてはけにさる事なれと父は祖父の子なるを父をさして子とはいかにととかめたるか如しまてもといふ詞に祖父の子とことわりたれはすへて難なき歌なり

題しらす　　西行法師

岩間とちし氷もけさはとけ初て苔の下水道もとむ覽

初句もしあまりいと聞くるし此法師の歌此病つねにおほし○もしあまり聞くるしとは毘沙門堂家の歌を御子左の風よりそしりくさにせし其常談のゝこれる也けに玉葉風雅なとにはうれしとも一方にやはなかめらるゝまつ夜にむかふ夕くれの空なとやうにいたう口こはきもましれりそは玉葉風雅の事にこそあれ此集の秀歌にあてゝ論せらるゝはしひたる事也これらは口こはき所もなし字あまりをあしといふは語路の婉轉のわろきをいふ也　道もとむらんよせなしされとかゝる所此法師の口つきにてこと人はえいはぬ事なり○道もとむらんよせなしとはいかにこゝは苔の下水の流れ行方をもとむる意なり上句にかけ合なしといふ事歟岩間とあるか即水の道なる物をやかゝる所此法師の口つきにてこと人はえいはぬ事なりとあるも心えす水は非情の物なるに道もとむらんと情あるものゝやうにいひなしたるは此集の頃のたくみなり此上人は時好にひかれす眞率なる歌のみ多かるをこれはいとめつらかなる物をや一首の意は岩間をとちた氷かけさからとけそめた故苔の下水となりてなかれ行方を求るてあらうと也

述懐百首に若菜　　俊成卿

澤におふる若菜ならねと徒に年を摘にも袖は濡けり

○みのゝ家つと注なし聞えやすき歌には注なき例なりされと今は猶いはむとすいたつらに年をつむ

とは官位なとすゝます沈淪して事をふる也一首の意は澤に生たる若菜をつめは澤水にて袖をぬらすかさうてはなけれとも世にしつみて年をつむにも袖はぬるゝ物そと也

日吉の社によみて奉りける子日の歌

細波や志賀の濱松舊にけりたかよに引る子日なる覽

子日の歌とはきこえす○松を躰によみて子日は用なる故しかいはるゝ也これを傍題といひていみしき病とするは爲世卿のわさなるへし傍題は病なるか如くはあれとなほ此集の比までは數多みえて歌合にも難とせす此集の中にもこれかれありてひとつの歌也今も此集に心かけむ人まれによみたゝんもつみなき事也　下句たか世の子日にひけるならむといふへきを○かくいひては世といふもしうきてきこえすよみのまゝにてきこえたるうたなりたか世とはいつの時代といふ事とたに心うれは滯る所なし　さはいひかたき故にかくいへる常にある事なりされと子日は引へきにあらされはいかゝ○志賀の濱松はいつの子日に引し松ならんと松と云もしをこゝへもひゝかせたる此集の比のたくみにて數しらす多し常ある事とあれは深き難とはおもはれさりけむ

百首歌奉し時　藤原家隆朝臣

谷川のうち出る浪も聲たてつ鶯さそへはるのやま風

本歌谷風にうち出る浪や云々○谷風にとくる氷のひまことにうちいつるなみや春の初はな　風の便にたくへてそうくひすさそふしるへにはやる○梅か香を風の便にたくへてそ云々といふは本歌の詞はかりをとれりこれつねの事也先生は本歌の如く云々といはるゝ例なるにこゝは然らす　波も聲立つるほとに鶯をもさそひて聲立させよと山風にいへる意也

和歌所にて關路鶯といふ事を　太上天皇御製

鶯のなけともいまた降雪に杉の葉白し逢坂の關

○此御歌雪をむねとよませ給ひて鶯はかりそめなれはいはゆる傍題なり傍題は古人難とせさりし事志賀の濱松の所に委しくいひつみのゝ家つとに此御歌もれたりさるは帝の御歌は難し申されさる事なるに傍題をいみしき難とおもひてよしなしとて除かれたるなるへしみのゝ家つとに洩たる歌を今

くはへたるは上に點をくはふ下これにならふへし
一首の意は鶯かなけは春てはあれともやはりまた
雪か降て相坂の關の杉村か眞白なと也

家の百首歌合に餘寒　　攝　政

空は猶かすみもやらす風さえて雪けに曇る春夜の月

初句の猶といふ詞は三四の句へかゝれりもし霞み
もやらすといふへかけていふ時はまたといふ也こ
れにて猶とまたとのけちめを心得へし○みなさる
事なり　霞にくもるへき春の月の雪けにくもると
也月はたらかす○空はなほといふより月の心はい
とよく貫通したるをはたらかすとはいかにいはる
ゝにかあらん心えかたしもし上の句に影とか光と
かあるへしとおもはれたるにはあらさるか空とは
かりにては猶あかさりしにや一首の意は空はえか
すみもせす風かさえて春の月か雪けにくもりて朧
なるよと也さてみのゝ家つとに詞書を省かれたる
か拙なけなるもあり作者の署名を書改られたるす
ちなき樣なるもあれと歌にあつかりたる事ならね
は舊貫にしたかひて今論せす新加の歌もこれに准
して物しつ又みのゝ家苞の文もさせることなきは
はふく事なかきをいとひて也下これにならふへし

和歌所にて春山月　　越　前

山ふかみ猶かけ寒し春の月空かきくもり雪は降つゝ

春の意はたらかすなほをすむ春をよはなとかふれ
は冬の月のさま也○すへて歌は一もしにいくはく
の意をもこむる物なれはもしをかへて餘の題にな
らんは難にあらすみし玉たれの中やゆかしきとあ
る歌のやもしをそもしにあらためてかへしとした
るためしもなくやはあるましてかうもし多くかへ
むにはいかなる意にもなるへき也此歌みの字猶の
字々眼にて山か深さにやはり影かさむいといひて
なへて世上はのとかにかすめる趣をおもはせたれ
は春といふもしなくても春の歌也冬の月のさまな
りとはいかゝ此集の比は詞のうへ幽玄にて餘情あ
る歌多し淺まに見てはたかふ事也一首の意は世上
はのとかにかすむ比なれとこゝは山か深さに春の
月かけか寒い其うへ空かくもりて雪か降てすへて
春のやうてもないと也

詩をつくらせて歌にあはせ侍しに水郷春望　　左衛門督通光

みしまえや霜もまたひぬ蘆葉に角くむ程の春風そ吹
二の句は霜のまた消ぬをいへるか○此こゝろなり
然らは蘆の角くむ計の春風のふかむに霜のきえぬこといかゝ○百草のもゆるほと霜の置事常ある事なれはそれはあやしくもあらす又蘆の角くむはかりの暖風は吹たりとも風にて霜のきゆる物にあらねは此難はいかにいはるゝにか　又ひぬとは既に解たる跡のいまた乾かぬをいへるか○かく窮屈にみるへからす是は霜のいまたとけすしてあるも既にとけていまた乾かさるもあるへしさる差別をおかす皆一つにして霜もまたひぬといへる也　さては俄に春めきたるさまはさる事なれともとけていまたひぬをたゝ霜もまたひぬといひては詞たらはす○霜は露の結ひたる物なれは霜もまたひぬといへる也かはかりの事難とすへからすされと玉葉風雅の濫觴なり庶幾する姿とはいひかたし一首のさまむ月つこもり二月ついたち朝明のほとは猶いと寒きに日かけのとかにさしのほり暖かなる風ゆるく吹て霜もきえ草も萠る常ある事なり其心してみたらんには霜もまたひぬの先生の難を免るへし

四の句はかりのといふへきをほとのといへるはいやしき詞にちかし○此二つ一向に通用すいかてかいやしき事あらん

藤原秀能

夕月夜汐みちくらし難波江の蘆の若葉をこゆる白波

夕月夜は鹽みちくらしに時よせあり○夕月夜は蘆のわか葉を浪のこゆるかみゆる料也潮時の事也とはおもひよらすや　又眺望にもかゝれり若葉にてまた短き故に波のこゆる也○此歌夕月夜にさしくる潮の蘆のわか葉こゆるさま景氣限なし時よせありなとみるは細なる過たり

春のうた　西行

ふりつみし高嶺の深雪とけにけり清瀧川の水の白波

雪に消るといふと解るといふとのけぢめ此歌にて辨ふへし○五句雪げの水なれは消ともいふへきか詩にも有調によるへし　此けりはおしはかりて定めたる意也○清瀧川の水のわきかへるを見て愛宕なとの高ねの雪のとけし事をしれる也　水の白波水の増りて浪の高きさまによめる也

百首の歌奉りける時　惟明親王

鶯の涙のつらゝ打とけてふるすなからや春をしる覽
○つらゝとは所ひろくこほりたるを云池のつらゝなと也此子細隨筆たつ物にいふへし鶯のなく涙いかに多くとも池川のことくたまりてつらゝとならん事いかゝもし氷柱をつらゝとよませ給しにはあらしか俗語には諸國たるひをつらゝといふ此集の比よりしかいひしにはあらしか一首の意はうくひすがなくなみたがつらゝとなりて惣身についてあるそれかそろ／＼と解て來るのてふるすにゐなから春といふことをしるてかなあらうと也

前大僧正慈圓

天の原ふしの煙の春の色の霞になひく明ほのゝそら
上の句のもし五つ重なりたる中にけふりのは俗言にけふりかといふ意にて餘のゝとは異なり四の句は天の原はおしなへて春の色にかすめる故に煙も其霞へ立のほるをいひて○誤解なり四の句は霞となりてなひく也かすみの上へ煙か立そふ義にはあらす　家隆朝臣の波にはなるゝ横雲と同しさま也○家隆卿の歌も誤解なり此歌も誤解也共に無理なる歌に非す一首の意は虚空の高い所てふしの山の煙が霞となりてなひくさて／＼春のあけほのはおもしろき物そとなり　なひくとはたゝ立のほりてなひくさまをいへるのみにてなひくに意はなし○霞となりてなひくなれは此詞至要也かろくみてはあしかめるを先生は誤解してかくいはるゝなり
明ほのよせなし曙ならすとも同しことなるへけれは也但し此集の比は春の歌にはかくいつにてもあるへきことを明ほのとよめる例のことなり今は心すへきわさそ○世上にもかうやうの論をする歌人ありて結句にはたゝ紅葉といふ題に山をよます山紅葉といふ題あれは也今やうにむつかしき事をいふはいと心せはくうたてき事也此論も其うつりにて猶うるさしすへて明ほのにも夕くれにもわたるけしきを明ほのゝ空とか夕くれの空とか便に隨ひてよめる事はその景をみし時分なれはしかいはてはえあかぬわさ也且此ふしの烟の霞となりて大空にたなひく時刻をいつはかりとはゝ午とも未ともいはし猶あけほのゝ空にそありける　空も上に天原とあれはよくもあらす○曙の空といへるは明ほのゝ比といふ義にて蒼天をさしていへるにはあ

らす瑕瑾とはいかてかいはんすへて此註こまか
なるに過て豪壮の氣少し

晩　霞　　後徳大寺左大臣

なこの海の霞のまよりなかむれは入日をあらふおき
つ白波

初句のもしやとあるへき歌なり○これはいはれた
り　此なかめは霞のまなくても同し事なれは題の
意はたらかす○かすみの間よりなかめたる入日の
いつよりもをかしかりし也かはかりめてたき景氣
なるをいとをしうも難せらるゝものかな志賀の濱
松のやうにもよむ世中にてかはかりの事にいかて
か拘らむすへて題意はたらかずなといふ事は多く
は持法にくみ立る後世の歌の事也

をのことも詩をつくりて歌にあはせ侍しに水郷
春望　　太上天皇御製

み渡せは山もとかすむ水無瀬川夕は秋と何思ひけむ

此集秋清輔朝臣のうす霧のまかきの花の朝しめり
秋は夕と誰かいひけむとある歌よりは上御句もま
さり○薄きりのまかきの花の朝しめり此御歌にお
とるけちめふとしもみえわかす　又秋は夕といふ
は常の事なるにゆふへは秋とあるはこよなくめつ
らかなり○これはいはれたりさて此御歌の上の句
も夕よせなしみなせ川のかすむは明ほのにもある
けしきなれはなりなといはるべきに帝の御歌は議
論をさしおかれたる例にて音もなきにやあらんか
くのことき御歌は風韻のかけ合にて上句何となく
ゆふへのけしきとみゆるやうによみなさせ給へる
なりもしほの〳〵と松原かすむ三笠山といはゝそ
れとても朝夕にわたれとも猶明ほのゝけしき也氣
韻はかたちなき物なれとも求むへき跡なきにしも
あらす御一首の意はみなせ川をみわたせは山もと
のかすむ春の夕くれもあはれなるもの也夕くれの
あはれは秋に限りたるものそと何におもひし事や
らんと也

攝政家百首歌合に春曙　　家隆朝臣

霞たつ末の松山ほの〳〵と波にはなるゝ横雲の空

末の松山を浪のこゆるものにしてかくよめる也か
やうの趣は此集のころのたくみの過たる也○君を
ゝきてあたし心をわかもたは末の松山なみもこえ
なんとある本歌はいかにも浪のこえさるためしに

したるなれは波のこゆる物にしてとあるほしひたる説にちかし　霞たつとほの〳〵とかけあへり○此三の句は末の松山は霞にほの〳〵とくらく波にはなるゝ横雲はほの〳〵と明るにて兩方へわたれり　一首の意横雲はなへては峯に於てはなるゝ物なるに是は浪の上に於てはなるゝにて○一首の意は末の松山は霞にをくらき明かたに沖の方はよこ雲のなみにわかると也海山を一目に見渡したるさまにていと近きけふりむつかしくみるへからす上の慈圓大僧正の霞になひくとおなしさま也○これも誤解也　歌さまはいとめてたけれと浪にはなるゝは心ゆかす○山水のけしきめに浮ひ來るやうにていと心ゆきめてたきを情なうもいはるゝ物哉

守覺法親王家五十首歌に○家といふもし發本に无さる本もありしにや御出家の御事なれは家とは申さるか

藤原定家朝臣

春の夜の夢のうき橋とたえして峰に別るゝ横雲の空

とたえをいはんために夢を夢のうき橋とよみ給へり夢のとたえと横雲のわかるゝとをたゝかはせたり○すへて閤しといへはあくるといふやうの反對をたゝかはせたりといはるゝ例なるにこれはいかさまにたゝかふにかあらん　三句の下にみれはといふ言をそへ嶺にの下にもゝしを添て心得へし○嶺にもわかるゝといふ意にはあらすたゝおいらかにみてあるへきなり猶いはゝ峰にもわかるゝといひて夢もとたゆるとひゝかせたる歌ならはもゝしこそ大切なるへけれこれをのぞきてきこえぬ物かは　又は橋は峰に縁あれは○峰のかけはしとはいへれと棧は打まかせたる橋にあらすこれをおきては葛城の久米の岩橋又神仙にわたりたる事也川入江なとにいふ如く橋は嶺の縁の詞とはいかてかいはん浮はしとあれはさらなり　四句までを浮橋へつけて横雲のわかるゝをもすなはち夢のさむるにしたるにもあらんか○此説いとむつかしくきこえかたし一首の意は上の句は春の夜の眠のさむる意下の句は夜のあくる意なるをねさむる事を夢のうきはしとたえしてといひ夜のあくる事を嶺にわかるゝ横雲の空といふ言の文章にていとめてたし只何となき趣もことはのつゝけさまによりてあはれ

にもをかしうもきこゆる事そかしすへて歌の意は洒落にとゝこほらぬやうにとくへき事也しかむつかしく說ては雄壯の氣うせてしほ〳〵くた〳〵となるあたら事也わか歌もたゝすら〳〵ととゝこほらぬやうによむなんよろしきさはかりむつかしき事をおもひてよみ出んにはおのれのみ心えて人はえさとらし物をや　歌さまのめてたきにあはせては春の夜の詮なし夢のとたえに夜のみしかき事を思はせたるへけれと春の夜のみしかきには中々に夢は殘るへきものをや○春の夜の詮は夜のみしかき也とたえしてとは夢の中絶する意なり見おはりて後夜のあくる事にはあらすされは夜のみしかき主意はあらは也春の夜のみしかきには中々夢は殘るへき物をやとあるは一むき也夢をみはてゝ夜の明し後まても殘るやうによむも一つの趣ねさむへきほとにねさめして夢の中絶するやうによむも一つの趣なりいつれを常の事とかさためむ

**大空**は梅の匂にかすみつゝくもりも果ぬ春の夜の月

二三の句は霞める空に梅か香のみちたるをかくいひなせる也○此說の如し猶こまやかに一首の意をとくへし此歌は春の月はまことには霞にてかすめるを梅か香の空にみちたれは其梅か香にてかすむやうにいひなしたる也大空は梅のにほひにはかすみなから雲霧とはやうかはりてさすかに花の香の事なれはくもりもはてぬと也　四の句はたゝ古歌の趣をとりて○古歌の趣をとりたるにはあらす詞はかりとれる也これ古歌をとる通途なり本歌てりもせすくもりもはてぬ春の夜のおほろ月夜にしくものそなき　春の月のさま也○此句は梅のにほひにかすみつゝにかけ合たりたゝ春の月のさまのみにはあらす詞のかけ合あり意のかけ合あり上に花の香といひて下に梅かえなといふはかりの事は何事かあらん　梅の匂かけ合たる詞なき故にはたらかす此句を除きてたゝかすみつゝにてもきこゆれは也○四の句を疎漏にみられたる故かゝる說もいてくる也又此句を除きてもきこゆれは也とあるもあちきなしけになくてもきこえはすれとあれは秀歌也無用のもしを一もしもいれしと構ふるは草庵なとの風骨也　或人の云大空はくもりもはてぬ花の香に梅さく山の月そかすめるなとあらまほしと

り○此或人は物にくるふかさはかり千古の秀逸をあやしき歌によみ直したるよいとかしこきわさ也直したる歌はいふにもたらねと筆のついてにすこしいはゝもとの歌は梅のにほひにてはかすまぬをいひなしにて梅のにほひにかすみつゝとたしかにことわりたる故くもりもはてぬといふ事きこえたるをなほしは大空はくもりもはてぬ花の香にとふと打出たりしかふと打出ては花の匂ひにくもらぬは勿論ならすや畢竟上の句無理也上に花の香といひ下に梅咲なといひて上下かけ合たりとおもふめりな或人のまとひはいかゝはせん先生のこゝにのせられたる意をしらす

百首歌奉りし時　　家隆朝臣

梅花にほひを移す袖の上に軒もる月の影そあらそふ

○一首の意は梅のはなのにほひを袖の上にうつせは軒もる月の影は我もうつらんと来りあらそふと也月の袖にうつるは月花のあはれにおちし涙也此歌しらへをかしきをみのゝ家つとにもれたる故をしらす

梅か香に昔をとへは春の月こたへぬ影そ袖に移れる

伊勢物語業平朝臣の月やあらぬ云々の歌の段をもてかの朝臣の心にてよめる歌なり○さやうにむつかしき歌のとりさまある事なしたゝ大かたの懐古のうたとおもふへし　影そのそもし力ありすへてかやうのそには心をつけて見へき也月影の袖に移るといふにいよ／＼昔をこひて泪のかゝる意をこめたり月のこたへぬと云て梅香のこたへぬ事も聞えたるは及ひかたきいひさま也○以上此説のことし　一首の意は戀しきむかしの事をかはらぬ梅か香にとへは梅か香はこたへすして月そこたへかほなるをそれもこたへはせすして其影の袖にうつるよと也○此説のことし業平朝臣の心にてよめるなとやうのむつかしき事をさし置て故郷なとにて何となくむかしを戀る意にみれはたかふ事なし

千五百番歌合に　　右衛門督通具

梅花たか袖ふれし匂ひそと春や昔の月にとはゝや

二の句ふるき歌のことはなり○古今集色よりも香こそあはれとおもほゆれたか袖ふれし宿の梅そもとある歌の詞也二の句も四の句も同しく古歌の詞

なるをこゝはかくあらくとかるゝは此句をおもくみては伊勢物語の業平の事とゝくに妨になれは也春やむかしの月とはむかしのまゝの月といふ事のもし古歌を受たる詞にて春やむかしのといひし其月に問はやと也古歌をとる法は花やかにめたゝしき詞を切出て活用する也古來みなしかり　此集のころかの業平朝臣の歌をとりて春やむかしのといふ事をよめる歌多しそはなへての本歌とれるやうとはかはりて此一句にかの歌の一首の意をこめ或は彼段の意をもこめてとれり○月やあらぬの歌をとるやうとて別にあるへきにあらす此句は古歌をうけたれとなへての懷古に取なしたる也これ活用也　此歌にては此四句に彼上句の意をこめて○のもしは春や昔のとよみし其月にとはゝやと云義昔たか袖をふれてかやうになつかしき香に匂ふそとむかしの月に問はやと也　月はむかしの春の儘の月なれは昔の事をもよくしりたるへければ昔たか袖をふれし名殘の匂ひそと問むと也○以上此說のことし何となき懷古のうた也業平朝臣の去年の春をこひしといふ事を忘るれはたがふ所なし

皇太后宮大夫俊成女

梅花あかぬ色香もむかしにて同し形見の春の夜の月

梅花あかぬ色香とつゝきたるは折てなりけりの歌の詞なり○古今集よそにのみあはれとそみし梅花あかぬ色香は折て也けり　本歌と云にはあらす○これ古歌の詞にていはゆる本歌なりしかるをかくよそけにいはるゝは五條の西對の事とするに妨なる故にて上の歌のたか袖ふれしと同し事也辨說も又同事にて何となき懷古の歌伊勢物語の義にあらす　すへて昔にてと云に二つ有昔になりて今は跡もなき意と又昔のまゝにてかはらぬ意と也こゝなるは後の意也○以上みなよろし　此歌もかの伊勢物語の意也○此歌をかの段の意とは何を據としていはるゝにか月といひ春の夜といひ梅といひ昔と云もし一つ二つ合期すれは伊勢物語といはるれとこれらはみな常よむ事にて主ある詞にはあらぬをや　あかぬとは梅のうへにいへれとも昔へもひゝかせたるものにてあかぬむかしの意なり○あかぬは現在むかしは過去なれはあかぬ昔といふ詞あるへきにあらす一首のさまもしかひゝきてもきこえ

す　一首の意は○我先いふへし此故郷は里はいく世かあれはてたれとも梅の花のあかぬ色香もむかしのまゝにて春夜の月と同しくその世のかたみそとなり　此見る春の月はあかぬむかしの形見なるを月のみならす梅花の色香もむかしのまゝにておなしかたみなるそと也○梅の花とおなしく月もむかしのかたみそといふつゝきなるをなとかへさまにはとかれけむ

題しらす　　　　　　　西　行

とめこかし梅盛なる我宿を踈きも人は折にこそよれ

上句二三一と句を次第して聞へし○かく打かへしたるにて語勢いと〲めてたきなり　四の句人はといふ詞はとめこかしの上につけて意得へし○此所誤解也たゝ詞つゝきのまゝにみるよろし　下句此法師のふりなり○此上人は堅固の道心にて和歌のうへにも名利をおもはれす多くは眞率にて下句今少おもはるへくやとみゆるありかたさにそなみたこほるゝなと様にかろくいひ捨たるか多かりもし此上人の體はといはヽさる方をいふへき也しかるにうときも人はをりにこそよれ昔の下水道もとむらんなと力いりて此集の比の常調なり此上人のふりとはいかにいはるゝにか　一首の意○われまついふへし梅さかりなる我宿をとめ來れかし人といふ物は踈遠なるも折によりたる物そと也人はといふ語勢をおもふへし　うとき間なりとてとはぬも折からにこそよる事なれ此梅花のさかりなる我宿をはうとき人なりとも○四の句をかくみては一首の本意なしもといひはといへるてにをはを味ふへし　香をとめてとひ來よかしと也○人はといふもしの置所たかひたる説なり

百首歌奉りしに春の歌　　式子内親王

眺めつるけふは昔になりぬ共軒端の梅は我を忘るな

我なくなりて昔の人になりぬとも○けふは今日なりむかしは昔年也昔の人と云詞此歌にはなしたゝし當今の往昔になるとは人の死て世の換りたる事なれはおのつから其意はある也　けふかくなかめつる事を忘るなとなり○一首の意は物おもひをして軒端の梅をうつとりと見とれたる今日の事を我は死世もかはりて昔といふやうになりても梅は存在するてあらうほとに我を忘るゝなとよませ給へ

り梅はといへるはもし心をつくへし思ひ出る人はあるましきをせめて梅はと聞えてあはれ也○はもし此意なしすへておもひ出る人はあるましきをといふ意詞一首にみえすはもしは上のはと相應して人は死今日は昔年となりても梅は存在すへきほとにといふはの字也　眞木柱卷に今はとて宿かれぬ共なれきつる槇の柱は我をわするなとある歌より出たるへし

　土御門内大臣家にて梅香留袖　藤原有家朝臣

散ぬれはにほひ計をうめの花ありとや袖に春風の吹

二の句のをもしなる物をといふ意なり散ぬれはとは手折て持たる梅花のちりしをいふさやうにみたれは袖と云事よせなし○立よる計にても行かふ袖にても袖たに匂へはよろし手折しならは先に手折て袖の匂ふ也今手折持たるには非す　手折持たりとは詞にみえねとも本歌にをりつれは袖こそとあるにて○折つれは袖こそ匂へ梅花ありとやこゝに鶯のなく　おのつからさやうに聞ゆかゝる所此集の此の歌のたくみ也本歌のとりさまおもしろし○一首の意梅の花か散たれは匂ひはかり袖に殘てゐる物をまた花か有とおもふかして我袖に春かせかふくと也

　題しらす　八條院高倉

獨のみなかめて散ぬ梅の花しる計なる人はとひこて

○本歌君ならて誰にかみせん梅の花いろをも香をもしる人そしる一首の意はたゝわれひとりなかめてあたら梅のはなかちり果たる事よ色をも香をもしるほとの人はとひも來すしてと也本歌のとりさま色をも香をもといふ事を本歌に讓りたり上の通具卿の歌と同し

　百首歌奉し時　源具親

難波かたかすまぬ浪もかすみけりうつるもくもる朧月夜に

とちめのにはうつるもくもる朧月夜なる故にかすまぬ浪もおほろ月夜にかすみけりといふ意也○一首の意は難波潟でみれはなみの霞むといふ道理はなけれとそれさへかすんたそれは水へ移た月かけも空のくもりたるなりにうつる故にと也此歌みのゝ家つとにいとめてたし詞めてたし二三の句と四の句とのかけ合いとめてたしとあり大かた新古今

集の歌いつれかめてたからさらんいふもさらなる事なれはみなさし置て論せさる事也此歌も上にかすまぬ浪も霞けりと二句にいひ下はうつるもくもると一句に云る緩急の勢いとめてたしされと結句にとゝまりたるは強弩之末不レ能レ穿ニ魯縞一いきほひつきてくるしけ也此先生のいとめてたし詞めてたしといはるゝはあらしそ霞む關の杉村さくら色の庭の春風なとけさやかなるか多かりそれも一つの姿にてあしとにはあらねと初學の必心よする所にて淺近なるにちかしいはゝ詞の花の山口なり此集にはえんに奥深きもいうにたけ高きもありておくのさかりはこよなき物をや近來新古今集を華やかなるに過たりといひつくり物也なといふ人多しそれもこれらのけさやかなるをみていふなれは此集の山口にまよひし人也此集は變幻自在なる事をしらす褊き見解なり

攝政家百首歌合に　　寂蓮法師

今はとてたのむの雁も打わひぬ朧月夜の明ほのゝ空

上句二一三と次第してきくへし田面を伊勢物語の歌によりて雁の歌には多くたのむとよみならへり

○以上此説の如し　鴈ものもゝしは心つよくかへる雁もの意なり○もの字の説いとよろし　一首の意は曙はたびたつ時なる故に○此意はなしたゞおいらかにみるべしすべてさかし立たる事には雲を凌ぐいきほひはなき物也これはいさゝかなる事なればとかういふもこちたきやうなれど古人の氣象をおとさんも心くるしく後進のさかしきをよきものに思はんかあやうくてなん一首の意は田面の朧月夜のあけほのゝけしき。に心をとめてこれを見捨てももはや歸らねばならぬ時分なるがとて雁もめいわくかりてなくと也　今は限りとおもへば田面のおぼろ月夜のあけほのゝけしきをみすてゝ別るゝ事をわびしくおもひてうちなくと也わふどはなくにつけていへり

刑部卿頼輔が歌合し侍けるによみてつかはしける　　俊成卿

きく人ぞ涙はおつるかへる雁なきて行なる曙の空

初二句よのつねならばきく人も涙ぞおつるとよむべきをかくよめるそもしはもしのはたらきに心をつくべし○むけの初心はもとよむ方便なるべけれ

ともとより義のことなる事なれば心ある人はさもあらずさてそもしはもしのはたらきの事多くの中にはかくもよむべき事勿論にて撰集にもあるかぎりの姿を具せんとていれることわりなることなれと打きゝあまりきは〳〵し打きゝのきはやかなるは品下るわざなれば此歌此卿の歌にとりては下のきざみ也　古歌に啼わたる雁の涙やおちつらむとあるを心にもちて○古歌とは鳴わたる雁の涙や落つらん物おもふ宿の萩の上の露とみえたる也それを心にもつとは泪といふもし啼といふもしの似たる故にやなく物に泪をよむ事は一向平生の事にていづれの歌によれりといふべきほどの事には非ず雁をおきても古今集「聲はして涙はみえぬ郭公わが衣手のひづをからなん後撰集「風寒みなく松蟲のなみだこそ草葉色どる露と置らめなど數しらず多しされば此歌もたゞなくといひ涙ぞおつるとよめるにて古歌によりたるにはあらず予細に過へからず　今は鳴て別ゆく雁なる故に○啼てと云に雁も別をかなしむ意みえたりこれきく人のなみだすゝむゆゑ也かし　聞人ぞ悲しくて其涙はおつると也○そもしは雁のなく涙をきく人がおとすなり

歸雁　　攝政

忘るなよたのむの澤をたつ雁も稻葉の風の秋の夕暮

澤と稻葉とは春と秋との田のさまにてよくかなへり○澤は地儀にて四季にわたれゝば春の田のさまとも定がたし偶澤べをたつ雁をよませ給へりかけ合のゆゑにはあらず　三の句もは今はたちてゆくともの意なり○いさゝかたがへり春の澤べの哀をみすてゝ行雁なりとも也　風は古歌に秋風に初雁かねぞ聞ゆなる秋風にさそはれわたるなとありてよせあり○秋風と雁とをよみあはせたる歌は千萬多かれとさりとて風を雁の緣の語とはいひかたしたゝ稻葉ふく風のあはれなる也畢竟はたのむの澤の春の哀をみすてゝ行雁でも稻葉の風の夕くれの秋の哀はわすれすきたれといふ事也かく澤を春季とさため風を雁の緣とあなかちにいはるゝは緣語上下かけ合たりといはんとの事なめり抑緣語を上下におけと云敎は上下の句をはなれ〳〵にせじとの料にてむげの初心を敎る法也よき歌は緣の詞の配當にはよるまじ此事今時の通弊なり　はてにを

もしをそへて心得へし

百首歌奉りし時

歸る雁今はの心あり明に月と花との名こそをしけれ

此月花に雁の心をとゝめす見すてゝゆかむは雁にめてられぬなれはあたら月花の名をれそと月花のために名をゝしみたる也○以上みなよろし　今はといへるもこゝろといへるも下句に正しくあたらす○すへてよき歌は月花の景物にも餘韻をふくめておもはせたる物也さるは詞のうへにはなけれとも打よめはそれとしらるゝやうによみなしたるなりこの歌は有明の月に花をむすひたれは彌生廿日はかりの事也さては雁もかへらてはえあらぬ時節故今はの心あるなり下句に正しくあたらすとはいかゝすへてさる風韵には心をとめられす心くるしき事也猶いはく今はの心と熟したるもしを今はといへるも心といへるもときれ〳〵にして下句にあたらぬやうにして離せられたるはあなかち也　心あり明といへるもしひたるいひかけなり○今はの心と熟語にいひなしたれはありともなしともいはるゝ也何の難かあらん　又三の句のにもしもたゝよはしくきこゆ○こゝは文ならはいまはの心ある有あけにといふへき所也あり明は時刻にてあけほのにといふも同し事也にもし何かたゝよはしき又月には有明といへるあへしらひあれとも花のあへしらひの詞のなきもたらはぬこゝちす○此難はゆゑなき事にはあらすその故は上にさかりといひ有明といひ下に月といひ花といはんは合掌の句法にて此歌にもさる詞あらんもいとよき事なれは也されとさる句法のある故は上下ちからをひとしうせんとの構へにて上の句おもくやうありけにて下句かろく何ともなからん事をうれひし也ちからたにひとしくはさる句法になつむへきにあらす魚をえて筌をわするるといふ事もあるなるへし

守覺法親王家五十首歌に　　定家朝臣

霜迷ふ空にしをれし雁かねの歸るつはさに春雨そ降

霜につはさしをれて來りし雁の今又春雨にしをれて歸ると也しをれしを春雨の方へもひゝかせつはさを上へもひゝかせ又歸るといへるにて上は去年の秋來たりし事なることおのつからきこえたりかやうの所をよく心得されは昔の歌の趣もみえかた

くみつからのうたもよきはよみえかたきわさそかし〇此先生の歌にすむかけもあたの大野の花の露色なる月に秋風そふくとよまれたり上下ひゝきあふ事をほめらるゝ也されと此歌のよきは風調のよき也かけ合にはあらす此比の歌は新奇をつとめて變幻萬差なり一隅を守りたる物にあらす

百首歌奉りし時　　攝政

ときはなる山の岩根にむす苔の染ぬ緑に春雨そふる

むす苔のと切てそめぬ緑とつゝけて心得へしむす苔のそめぬとつゝきてはそまぬといはてはかなはすそめぬは春雨のそめぬ也〇そまぬ緑といふことは聞取かたし一首の意は山の岩ねにむす苔のわかそめたるにもあらすときはなる緑なるにわかそめたるやうに雨かふりかゝると也　ときはゝ岩根もそめぬ意をたすけたり〇ときはなるは苔にかゝれり二の句にはつゝかす又岩ねはそめぬ意をたすけたりともきこえす

建仁元年三月歌合に霞隔遠樹　權中納言公經

高瀬さす六田の淀の柳原みとりも深くかすむ春かな

淀の水の深きにむかへて緑もふかくかすむと也〇これ例の上下かけ合の説なれと淀は六田の淀といふ地名にて柳原の歌なれは淀の水の深からん事此歌によりなき事也四の句のもゝしをあしく心えてかくいはるゝ也四の句のもゝしはうら山しくもかへるなみ哉なと哉に應したるもにてこゝろなきか如し牽强すへからす一首の意六田のよとの柳原のみとりかふくかすみてみゆると也もはかろき嘆辭

下句詞はめてたけれと心まきらはしくきこゆ其故は深く霞みて柳の緑の色をへたつる意なるへきに〇これはかやうにふかくへたつる意にはあらすたゝ柳原に立わたりたる霞のこきみとりにみゆる也春かすみ色のちくさにみえつるはたなひく山の花のかけかもなとやうにかすみを色のもるやうによむも常の事也色のもるやうによみても霞たにたては題の隔の字の意はそなはれり　緑も深くといへるは霞む故にみとりの深きといふやうにきこゆれは也〇もゝしを二つをかねたるもとしてもみとりもふかくかすみもふかきといふ意になるへし霞む故にみとりの深き意とはいかてか聞えむ

百首歌よみ侍ける時春歌　　殷富門院大輔

春風の霞ふきとく絶まよりみたれてなひく青柳の糸○書のことくめにうかひてめてたき歌なるをみのゝ家つとにはふかれたるは青柳上句よせなしとにや

千五百番歌合に　藤原雅經

白雲のたえまになひく青柳のかつらき山に春風そ吹

青柳は葛城の枕ことはなるをやかて其山に生立る柳に用ひたりさて柳は風のふくによりてなひくなるをたしかにさはいはてなひく青柳のとまついひて春風そふくととちめたるは柳のなひくによりて春風のふくかみゆるさまにてゆるやかなるもの也○以上此説の如しされと上に青柳のなひくといひ下に春風のふくといふやうのゑたての歌は常ある事也一首のめてたきは始末つゝけさまのめてたき也此かけ合の故にはあらす一首の意はしら雲のたえまに青柳のなひくはかつらき山で春風かふくとみゆるとなり　或人柳は山の上にある物にあらすと難したれとかの家隆朝臣の末の松山なみにはなるゝ横雲なとをこそさもいはめ○みつから誤解して無理なる歌の例とせらるゝはこゝろくるしき事也　山の上に柳をよめるはかりの事は此集の比にとりてはなでう事かあらん○此集のころとてもわろき事はわろしいかにゆるさるゝにかあらんさて此歌はいとも〳〵めてたくて眼をとつれはそのけしきたゝこゝもとにうかひ來るこゝちすかはかりの名歌なれは山に柳をよみたらんもつみきえてひたすらにめてたけれと打まかせては少しいかゝ也大かた物には相應すると相應せさるとあり柳は池川堤渡なと水邊にはいとよかめれとかさなる山雲ゐる嶺なと山類にはなとやらん似つかはしからすさりとて柳は山におふる物なれはよまぬ事と今定むるにはあらすたゝ何となく相應せさるをいふ也その相應すると相應せさるとを辨するは和歌に至要なる事なり用意あるへし

有家朝臣

青柳の糸に玉ぬく白露のしらす幾よの春かへぬらん

へぬらんは糸の縁也○糸に玉ぬくしら露のは柳の實景にてしらすとかゝる序也かやうなるを有心序といふ一首の意青柳はいく世の春をへしそといふ義たゝ古柳をよめる也　拾遺元輔青柳のみとりの

糸をくりかへしいくらはかりの春をへぬらんといふ歌にことなる所もみえす〇拾遺集なるは糸に玉ぬくしら露のしらすいく世と云つゝきなしことなる所なしとはいかゝ此歌のめてたきは此二三句の詞つゝきめてたきにて意は拾遺といたくもことならすすへて等類をのかるといふは一句も等類なき事にはあらす花を雲と見露を玉かとうたかふことは誰人かよまさらんしか我人よむ中によき歌にはめつらしき心詞あるをこそいふなれ　玉も用なくきこゆ〇玉は糸にも露にもよせあり下句にひかるみかくなといふ詞のなからんからに用なしとはいかてかいはむ

宮内卿

うすくこき野への緑の若草に跡まてみゆる雪の村消

跡とは雪のきえ果たる後をいへるにて雪の緑の詞にてもある也〇あまりさかし立てこまかなる趣向の歌は一首いうならぬ物なるをこれは打聞いとめてたしよろつよりも打聞のめてたきをめてたしとする物なれは撰に入し事はむへなれと一首巧に過てこさかしけ也すへて歌は大とかにて力あるをよしとすこさかしきはよくもあらす世上に新古今集は巧に過たりとて無理なる歌のやうにいふ輩もあるは氣韵をくれたる人の疎漏によみていふ事にしあれと多くはかやうの歌ともを此集の本色とおもふ故也先生もいたくめてられて四句いとめつらかなりよくとゝのへる集也と有て我と褒貶反覆す識者えらひ取へし　雪は殘らす消果ての後まて始の村消の跡のみゆるよし也〇雪の久しく殘たる所は若草の色うすくとく消たる所はこき也一首の意は野へのわか草のみとりのこきうすきにて雪は消はてたる後迄も村消にてありし所か見分らるゝと也

西行

よしの山櫻か枝に雪ちりて花おそけなる年にも有哉

ちりてといへる詞花のかたへひゝけり〇一首の意は吉野山はさくらの枝に花の梢に雪か散てまことの花はことしは遲かりそうな年てはあると也　下句此集のころにては此法師のふりなり〇けに此下句は上人の常調也されと二三の句にいとよく相應してちからあり輕易に過たる歌に非す

攝政家百首歌合野遊　家隆朝臣

思ふとちそこ共しらす行くれぬ花の宿かせ野への鶯
本歌春の山へにうちむれて云々〇おもふとち春の山へに打むれてそこともしらぬたひねしてしがといふ歌なり一二の句は勿論花の宿かせも本歌にたひねとあるより出たる趣也だゝ此一首をとれる歌也　くれなはなけの花の陰かは云々〇いさけふは春の山へにましりなんくれなはなけの花の陰かはとある歌なり暮といふもしと花といふもしあるはかりにてすへては似つかぬ事なり此歌の本歌といふへくもあらす〇六百番歌合の判に素性か歌を取過たるやうにいへれとさはあらす〇これはさる事なり本歌をとる法多くはまたしとおもへは村雨の空故郷寒く衣うつなりなとやうにことはをとりて趣をかふる也これをから人は奪體換骨といふ奪體換骨は一もしも多く取たるを名譽とすかへたるもしは少くて趣の清くかはれるをめつる也今人は古歌をとり過たりと常いふことなれとかやうの子細には心つかし物をや一首の意は氣のあふたどうし春の山へに遊ひてこゝはとこかもしらぬが日かくれたほとに花のやとをかしてくれよ野へのうくひすよとなり古歌は旅ねしてしがとねかひたる意これは其ねかひのことく旅ねするこゝろ也

百首歌奉し時　　式子内親王

今櫻咲ぬとみえて薄くもり春に霞める世のけしき哉
初句いうならす今といへるは心をいれてよみ給へる詞とは聞ゆれとさしもあらす此詞なくても有へへきさまなれは也〇此初句をたゝ一句きり出てはいうにもあらすやあらん一首にむすひてはいと〳〵めてたき句也さるは此句をさくら花としては上句あまりのと〳〵として春にかすめるの雄壯なるにかけあはぬ故かくよみて語勢をつよくしたる也先生は詞のうへの照應をのみときて語勢の照應には心をいれられす詞の照應は顯然なる事なれは凡人も心つくわさなるを語勢の照應氣韻の照應は跡なきものなれはそれをむねと注せらるへきにやひめみこの御歌にしもかく雄偉なる語勢のみゆるはめつらかにめてたくなん　二の句は世のけしきのさやうにみゆる也〇此句はさくらへのみかゝりて世のけしきへはつゝかすこゝは俗にいはくまうさくらか咲たとみえてといふ意也むつかしくみる

へからす又今といふ字はまうの義にて此歌の至要なるをなくてもあるへしとはいかゝ　四の句は春のけしきにかすめるをいふされと此にもし少いやしくきこゆ○此歌は春のけしきになりて世上かうすくもりにかすむといへる也此にもし何のいやしき事かあらん霞になひく明ほのゝ空なとつねの事なるをや一首の意はまうさくらか咲たとみえて世上のけしきか春になりてうすくもりにかすむとなり　又近き世に秋にみしなと多くよむにもしは殊にいやしき詞なり○俗言に春にみた秋に來たといふ事のなけれは俗なるにはあらねと一向にことわりなきこと也

花のうた　　西行

芳野山こその枝折の道かへてまたみぬ方の花を尋ん

よくとゝのへり○一首の意は吉野山のこその花見に來た時のしをりかまたそのまゝであるその方はまつ去年見たでよいとしてしをりのない方へ道をかへてまたみぬ方角の花をたつぬへしとなり

和歌所にて春の歌　　寂蓮

葛城やたかまの櫻咲にけり立田のおくにかゝる白雲

高間のさくら立田の奥二の内に一つは山といふ事あらまほし○山といふ字なきも何の難かはあらん

百首歌たてまつりし時　　定家朝臣

白雲の春はかさねて立田山をくらの峯に花匂ふらし

本歌萬葉長歌に白雲の立田の山の瀧の上の小倉の嶺に咲をゝる櫻の花は云々と有を春はかさねてと取なし給へるめてたし○立田山にしら雲とよむもをくらのみねとよむも常の事なり古歌のゆゑにはあらす　結句咲ぬらしとあるへきを匂ふらしとあるは詞はいさゝか勝りたれとこの歌にては匂ふは似つかはしからす○花にほふらしとは色のにほひ也香のにほひにはあらす似つかはしからすとはいかゝ一首の意はいつもたつしら雲のうへゝ春は又折かさねてしら雲かたつこれは大かた立田の小倉の峯に花か咲てその色かほんのりとみゆるのであるらしいと也　次なる家衡朝臣の歌もおなし○これもおなしこと雲のやうに花かほんのりとみゆるなり

題しらす　　藤原家衡朝臣

吉野山花や盛に匂ふらん故郷さらぬ峯のしら雲

○一首の意はあの雲ではなうて吉野山の花かさかりに咲てその色かほんのりとみゆるのであらう雲ならはあなたこなたの峯にうつる物なるにあれは故郷のあたりをさらすしてゐるからと也

和歌所歌合に羇旅花　雅経

岩根ふみかさなる山を別すてゝ花も幾への跡の白雲

伊勢物語に岩ねふみかさなる山にあらねとも云々○一二の句の詞の據也初句は序花さかりの山をいくへも／＼も分すてゝさてかへりみれは跡の方に雲かいくへも／＼立たあれは大かた見て來た花てあらうと也

五十首歌奉し時

尋來て花に暮せる木の間より待としもなき山端の月

二の句花を見てくらせるにはあらす尋ね來ていまた見すして暮ぬるよし也○花を尋來て其花かさかりなる故に日を暮したる也二句の勢しか聞ゆ尋ね來ては俗に見に來てといふにあたるそこよこゝよともとめわひたる義にあらすこれをいまた見さりし義としては撰集の次第もみたれていかゝなり二ノ何のにもしに心をつくへし花をみてあかすたてりし程に日の暮たりときこえすや　もし既に見たるにしては尋ね來てといへるも詮なく○たつねてみたらは詮あるへき也世上尋花といふ題には多くいまたみさる意をよむ其うつりにやあらん抑行て人にまみえたるも尋人と云へし尋花も滿山のさかりをみたらんも題にたかふ所なしせはき論なり　四何のかけ合もちからなし○待といふもしを花へもかけてみる故也それはわろしたゝ月にのみかゝれり　新拾遺集俊成卿の歌にも山櫻咲やらぬまはくれことにまたてそみける春夜の月下何思ひかけさりし月を見てそれもおもしろき意にてもあるへけれと○此心にていとよく聞えたり　四の何のさまさは聞えす花をこそ見むとおもふに待もせぬ月の出たるよとおもひて月をはめてぬ方に聞えていかゝ○しもといふ字をあしく心えられたる也しもは詞の玉緒に二字ともにやすめ辭にていさゝかも心なしといはれたるそれ也さては待となき山端の月にてめつるともめてぬとも詞のうへになけれは物にしたかひて定むへきに山のはの月の出しとていとひ腹たつ人あらん物かは此難は人情にうとしさ

て待となきとは思ひ設さりし事にて下句思ひもよらぬ月まてか出たといふ事なれはよろこふ心は餘情に有へし　右の俊成卿の歌は四句のさま月をもめつる方に聞えたり○俊成卿の歌は月をもめつる意によく聞えたれとさるまゝに意盡て餘韵なし此歌にくらへては煩境を異にしたり此集にもれて新拾遺にいへるも此故なりかの集なとは御子左の風にて風韵おくれたる事多かり

故郷花　　慈圓大僧正

ちりちらす人も尋ねぬ故郷の露けき花に春かせそ吹

露けき花と云に見るあるしのさひしくあはれなる心をもたせたり○たゝ故郷のさま也露を涙とみるはわろし　一首の意はあはれ故郷ならぬ所の花ならはちるやちらすやと人も尋ね來てかやうにちるをみはをしむ人もあまたあるへき物をと思へるさま也○たかひたるにもあらねと迂遠にて詞に親しからす一首の意はちらうがちるまいがすてゝ置て人が見にも來ぬふる里のしめ〳〵とした花を春風か吹てちらすあたら物を人にもみせすにちらすことかなとなり

千五百番歌合に　　通具卿

いそのかみふるのゝ櫻誰植て春は忘ぬ形みなるなむ

植けむ時をしる人そなき○石上ふるの山へのさくら花うゑけん時をしる人そなき　とあるを誰うゑてとゝれり春はと切てこゝろうへし忘れぬは植けむいにしへをわすれぬ也○誰うゑてとある其うゑたる人を忘れぬ也一首の意はふる野のさくらは昔誰かうゑて置てこれをうゑたる人は心ある人哉と春は必おもひ出さるゝ形見にした事さて〳〵よい物をうゑてよい事をしたと也　これらは古今集の中のよき歌のたくひ也　古今集には古歌をとれる歌なしあるもわつかにて打まかせぬ事也ことに此歌は植けむ時をしる人そなきを誰うゑてととりなしたるなといと今めかしくて猶此集の風骨なり古今集の體にはあらすさて又古今集に入てもとある語勢は古今集は此集よりもいたく勝れるか如し世上にも何となくさる物に思ひをる人多かるへし これさら〳〵しからぬ事也かれも一つの姿なりこれも一つの姿なりよき歌はよくわろき歌はわろし百首歌合なとのこの時ほと盛なりし事もなく英雄

家隆の此時ほと出現したる事もなければよし勝らすともいさゝかも劣る事はあらしと正明は思ふ也

正三位秀能

花そみる道の芝草ふみ分て吉野の宮の春の明ほの

○花そみるは花をそみる也四五二三一と打かへしてこゝろうへし

有家朝臣

朝日影匂へる山の櫻花つれなくきえぬ雪かとそみる

さくら花の朝日にあたれる色はこよなく勝りて誠に雪のことみゆるもの也朝日かけにほへる山といふは萬葉の詞にてそれは朝日影の匂へる山なるを此歌にては朝日かけに山のさくらの匂へる也○朝日かけに山の櫻のにほふといへは薄くれなゐにみゆる事にて雪かとそみるにかけあはす此歌も萬葉のことく朝日かけのにほふ也又詞からもさては初句にもしなくてくるしけなるをや一首の意は朝日のかけがありくとてる山のさくらの眞白なのをしんほうつよくきえすにゐる雪かとおもふと也

つれなくと云詞時にかなひていたつらならさるうへに朝日影にもよせあり○時にかなひてとは晩春まて雪の殘りし義與此歌にその意はなきなるへし

# 尾張廼家苞一之下

## 新古今集

春歌下

釋阿和歌所にて九十賀し侍りしをりの屏風に山にさくらさきたるところを　太上天皇御製

櫻咲遠山鳥のしたりをのなか〳〵し日もあかぬ色哉

さくらの咲たる遠山をやかて山鳥の尾へのたまひかけてなか〳〵しの序とし給へり○本歌あし引の山鳥のをのしだりをのなが〳〵しよをひとりかもねむとみえたり　下御句俊成卿の命長きをおほしめしたる也といへりさもあるへし○大かた此御製なとは一首の姿優美にたけ高きを賞し奉るへきなり俊成卿の命なかきをおほしめしたりといふ説は俗人の常おもひよる事なれと細かなるに過て此こゝの氣象にかけあはすたゝ花の御歌なり少しも歌にゆゑあらせんと構るは俗流の注釋なりとかくいひまけなとするうちに英雄の氣うする也百人一首のうらの説といふやうの事さへ出くるなり

千五百番歌合に　俊成卿

いくとせの春に心をつくし來ぬ哀と思へみ吉のゝ花

二の句春には春の花に也○花といふもしをうたにもいれてみるは歌さま淺劣になりてわろしもとより此歌花の歌なれは春の花の事勿論なれと花といふもしをいれてみる結構にはあらす詞のうへはたゝ春に心を盡すにてその春に心を盡すといふは花に心をつくすなる事結句の三吉野の花よりにほひくる也これ正明かいはゆる氣韵の照應なり心をとめてあぢはひみるへし　きぬはきぬるそのこゝろなり○初句にいくといひては三の句來ぬるととまるへきなりさるを來ぬととまりたるは例ある事にて此先生のいはゆる變格なり　結句いうならす○みよしのゝ山とはよむへきかもしよむへくは三吉のゝ花ももしくはりおなし事也何の子細かあらん一首の意はおひたゝしき年の春に機根をつくしたる事そふるきなしみなるほとに三吉野の花もあはれとおもへと也

百首歌に　式子内親王

はかなくて過にし方を數れは花に物思ふ春そへにける

すへてはかなく過といふは何の間もなくすくる事也此歌にてはなす事もなくていたつらに過し意をかね給へりとみゆ○これは語勢にてしる餘情なれは人體にあはせてとくへき也然るになす事もなくていたつらに過しなといふ事は身を立る大丈夫の事也内親王の御うへにてさるしたゝかなる御述懐は何事かはあらん　一首の意はなせる事もなくてはかなく過來つる其間の事ともをかそへてみれはたゝ花に物おもへる年を多くへたるはかりそと也○はかなくての說わろし數ふれはを數へてみれはと說れたる少しかひなしこゝは思出て數へ立てみれは也一首の主意も末とほらすなす事もなくてとあらはその御主意をこそおほし出へけれ花に物思ふ年を多くへたる計そとあるはいかに　又は春毎にたゝ花にのみ物思ひて○のみわろしのみといひては數ふれはへかけあはす　いたつらに○わろし早く○初句は此意也　すき來し年の御數を數へてみれは花に物思ふことも多くの年をへたるよとといへるにも有へし○花に物思ひていたつらに云々とあるいたつらには御述懐の義にてはなくや一首の意は何のまもなく過し年月の事を何事かありけんと思ひ出てその事かの事と數へたてゝみれは何一つこれそと取とめたる事もなけれとさくを待散ををしみて花故物おもひしたる事はさたかにおほえてあまたの春をへし事かなといふ御老後の述懐也かそふれは一句にあまたの餘情こもれる歌也五句の春みのゝ家つとに年とあり春とある本よろし

千五百番歌合に　俊成卿女

風かよふね覺の袖の花の香にかをる枕の春の夜の夢

袖のゝのは俗にがといふ意にて餘の五つのゝもしとは異也一首の意は風の吹かよふ枕の春の夜の夢のねさめの袖が花の香にかをるよといふ意なるを詞を下上にいりましへたるにて詞のいひしらすめてたき歌也○以上此說のことし　三の句を梅かゝにとしてすへてのさま梅の趣なり櫻にはうとし○梅か香にと直して梅の歌にはなるともはなの香にとして櫻の歌にたになれは難にあらすより來るに隨ふことも也かやうの難は今時の人常いふことなれと福き論也さくらにはうとしとある香のなき物ならはこそあらめいかてかさくらにうとからむ

守覺法親王家五十首歌に　　家隆朝臣

此程は知もしらぬも玉桙の行かふ袖は花の香ぞする

初句此ころはにてもあらましを〇此ころはにてもきこえはすれと此歌はもと尋常の姿にあらす一種の體によみ出給へるなれはかくあるぞ作者の本意なる心にも詞にも一首にかぎりたる相應ありて一規にはいひかたし此四句も一首の相應により給へるなり　三四の句玉ほこの道行かふ人の袖はといふへきをあまりにつゝまり過て詞たらはす　此時代の歌は變幻自在にてさま／＼の姿ありこれも其一種にて玉ほこのに道をもたせ行かふ袖に人をもたせたるかめつらしき也撰集にいれるもめつらしきによりてなるへし　のもしはことに心ゆかすなむ〇此難はいはれなきにあらねとなほ一首の非尋常なる姿をおもはるへきなり

攝政家五首歌に　　俊成卿

又やみむかた野のみのゝ櫻かり花の雪ちる春の曙

狩は雪のちる比する物なるを其狩をさくら狩にいひなし其雪を花の雪にいひなせるいとおもしろし〇初句は此やうなおもしろい事が又もあらうかといふ義也年老て又みすやあらんと行末をあやふむ義にあらす

百首歌めしゝ時春の歌　　具親

時しもあれたのむの雁の別さへ花散比のみ吉のゝ里

武藏のみよし野と大和の三吉野と一つになれるはことさらにかくよみなせる也あやまりてまがひたるにはあらす〇これは武藏の三吉野の里也大和にはあらす時しもあれとは俗に折もあらうにといふ事の打合たる時にいふ詞也三の句さへは花の別をなげくうへに雁の別さへあはれなる也すへてさへといふ詞は事のそひ行をりに云也四句花ちる比は花にわかるゝ比也さへといふ詞よりしかきこゆる也一首の意はみよしのゝ里では折もあらうに花にわかるゝ最中にたのむの雁にさへわかるゝ打あひてあはれなる事と也

題しらす　　西行

眺むとて花にもいたく馴ぬれは散別社悲しかりけれ

なかむは心ゆかすゝたゝ打みる事とおもはれたるなるへし此句に諸のあはれこもりていと／＼心ゆく詞なるをやなかむとは物思ひをして外の方をな

かめいたす事一首の意は物おもひが多さに外をみいたしては花をなかめ〳〵なとするほとにこれにもいかうなれたれはそのちる別か又物おもひとなるよと也　古歌になるゝを人はいとふへらなりとあるによりて花にもといへる也○古歌はすこしも此歌に用なしもゝしはもとより物思ひのあるうへに花にもなれてそれもちる別か云々どいふ意なり

越　前

山里の庭より外の道も哉花ちりぬやと人もこそとへ初句のもしいとわろしにとあるへき所也○道字初句へもひゝく山里の道に庭より外の道すな也いとわろしとはいかにいはるゝにかにといひては趣もおとり庭とにもしのつゝきたるか語路の宛轉にいさゝかあかぬ所ありて中々わろき物をや　散敷たる花をふまん事のをしきよし詞にはあらはさすしてさたかにしかきこえたるはめてたし○一首の意は此山さとの道は庭なれとその外の道かほしい物てはある花かちりましたかとて人か來てかううつくしう散しいた花をふみあらすてあらうもしれぬと也

五十首歌奉りける中に湖上花　宮内卿

花さそふひらの山風吹にけりこき行船の跡みゆる迄跡みゆるまて吹にけりといふにはあらす○此こゝろにはあらす　此けりはおしはかりて定めたるけりにて下句は船の跡のみゆるまてに花のちりうきたるはといふ意をいひのこしたる也○おしはかるとは目にみぬ所を心にておしはかりたるなるへきに湖上より比良山はたゝ目前なれはおしはからすとも見て定むへき也猶花さそふひらの山風こき行舟の跡みゆるまて吹にけりとつゝけてみる意也古歌にこき行船の跡なきかことゝありて○此歌にもとつきたる歌にあらさる事勿論かさてこゝに引出られたるは船に跡なきといふ證文歟　船の跡はみえぬ物なるにみゆるまてといへるは散うきたる花のおほきほとを甚しくいへる也○一二四五三とつゝけて心うへし

關路花

あふ坂や梢の花をふくからにあらしそ霞む關の杉村逢坂の關の杉村ならてこと所のこと木にても同しことなれは題の關の詮なし○こと所のこと木にて

も同しこととなりとも逢坂の關の杉村とよみたれは關の歌也關かうこくなと世人一般にいふ事なり世人のいふはいかゝはせん此先生さへかくいはるゝよ　梢のといへるは四の句のために高き所をいはんとてなれと杉村ととゝめたれは杉の梢の花ときこえていかゝ○下に杉村といひ上に梢といひて杉の梢ときかするは爲家卿の風凡人みなする事也此集は拔羣なれは議論も拔羣の論有へし梢の花とあるは櫻也杉にも花の咲物ならはこそ萬一も此難に近くはあらめいと〳〵迂遠なる事也一首の意は逢坂て櫻の梢をあらしかふけは關の杉村ゐたゝは其嵐まてかかすんたやうにみゆると也關の杉村は地名也植物を忘れてみるへしさて此歌世人のいはゆる新古今にてけさやかに淺きに近し是を信するも小乘也そしるも又小乘なり

百首歌奉し春の歌　　二條院讃岐

山高み嶺のあらしにちる花の月にあまきる明方の空

○あまきるは天遮也空に横きるを云一首の意は山か高さにみねのあらしにてちる花か明かたの空の月に遮ると也月上の句に縁の詞はなけれともちる花のみゆるゆゑにていとよろしく景氣一般の風味をます也

最勝四天王院障子に吉野山かきたる所　　太上天皇御製

みよしのゝ高根の櫻散にけりあらしも白き春の曙

おしはかりて定たるけり也○比良の山風吹にけりと同しいひさまなからこゝはあけほのとあれは此説のことし

千五百番歌合に　　定家朝臣

櫻色の庭の春風跡もなしとはゝそ人の雪とたにみむ

初二句は嵐もしろし嵐そかすむなとのたくひにて又一きはめつらか也梢より花をさそふ春風は櫻色にみゆるをいへりさて上句は花は殘りなく庭に散はてたるさま也跡は雪の縁の詞四の句そもし力をいれられたりばぞのてにをはめてたし○一首の意はきのふまて庭の春風かさくら色にみえたがけふは其跡かたもないさて〳〵人にみせたかつたに殘念なるかなそれてもまたとひ來たならはせめては雪とでもみらるゝてあらう來てくれゝはよいにと也　下句本歌あすは雪とそふりなまし云々

一年しのひて大内の花見にまかりて侍しに庭に散て侍し花を硯のふたに入て攝政の許につかはし侍し

太上天皇御製

けふたにも庭を盛とうつる花消すは有共雪か共みよ

初御句は結御句の見よへかゝれりうつるはちれる也四の御句本歌と詞は全く同しけれと意は異なり○古歌けふこすはあすは雪とそふりなましきえすは有とも花と見ましや　もゝしはたゝ輕くそへたるにてよのつねのともの意にはあらすたゝといふに同し○ともの解しひたる事のやう也　下御句の意は花はちりて雪となりたれとも消すはありとおもひてせめてけふ雪かとなりともみよと也○ともの解穩やかならさる故此義ならんともおもはれす正明は此御歌を心えかねたりさこそゆゑある事なるへきにおもひいたらてくちをしき事也

御返し　　攝政

誘はれぬ人の爲とや殘りけむあすより先の花の白雪

四の句は本歌にはあすは雪とそ降なましとあるをこれは今日既に雪と降たれは明日は又此雪もきえぬへきに明日消ぬさきのけふのといふ意か○あすよりさきは本歌の詞をあやなしてのたまひしにてけふといふ事也　又は雪とはふりたれとも本歌にあすは雪とあるその明日よりさきなれは今日は猶雪とはみす花とみるといふ心歟○花のしら雪とある歌を雪とみす花とみると說るゝはいかなる事ならん　いつれにしてもおもしろくとりなし給へる詞なり○さそはれぬ落花に緣の詞御幸に具し給はさりしことをの玉へる也一首の意は召具せられさりし人のためにきえ殘りけん此けふの花のしら雪はとなり

家の八重櫻を折せて惟明親王の許につかはしける

式子內親王

八重匂ふ軒端の櫻移ろひぬ風より先に人のとへかし

○うつろふとは大かたは花のちる事をいへとこれは盛すきていまたちらさるを云一首の意は軒端の櫻か盛過た風かとひよらはちらうほとにそれより先に人のとへと也

返し　　惟明親王

つらき哉うつろふ迄にやへ櫻とへ共いはて過る心は

○八重とへと詞をたゝみて文章をなせり

五十首歌奉し時　　家隆朝臣

櫻花夢かうつゝかしら雲のたえてつれなき嶺の春風

本歌云々しら雲のたえてつれなき君か心か○古今集に風ふけは嶺にわかるゝしら雲の云々　たえては上よりは白雲の絶たる意につゝけ來てたえてつれなきは俗言に言語同斷の○此俗語よくもあたらす絶ては甚といふ義その中に絶景絶品なとの絶にて傍を絶したる心あり俗語に無類にといふ意也つれなき風そといふ意にてつれなく花をちらしたる事を深く恨みたる也二の句一夜のほとなとに俄に散たるさま也○夢うつゝともしらぬといふは白雲のたえてなくなれる義か中たえたるには少し相應せす　さて又しらすをしら雲へいひかけ又嶺の花は白雲とみゆる物なれは白雲の絶るに散たるよし也されは白雲のたえてといへるは本歌の詞なるを本歌になき趣をかくさま／＼こめられたるほといとたくみなりや○以上みなかくのことし一首の意はこれは夢かしらぬうつゝかしらぬさくらの花か散て嶺のしら雲の中か絶たさても／＼無類につれない物は嶺の春風そと也

題しらす　　俊成卿女

うらみすやうきよを花のいとひつゝさそふ風あらはとおもひけるをは

本歌佗ぬれは身をうき草の根をたえてさそふ水あらはいなんとそ思初句やとよとのおとりまさりはよの方は今少したしかにきこゆれとも浮世のよとかさなりてしらへおとれり○かやうの難は古今なき事也かくむつかしくいひもてゆかはつねに同しもしなき歌はかりをよむへきなり　やは疑のやにいさゝかまさるゝ方はあれとも疑のやにあらさる事は一首の趣にてよく聞えたり此やは即よの意にて此歌にてはよといはんよりはしらへ勝れり○よのこゝろのやならはよといはん方勝れりと正明はおもふを人々の心也されとこれは其義にはあらしやはの意のやならんと正明はおもふを又人々の心にやあらん　二三の句は本歌の如く○本歌は詞計をとるなり　世をうき物に思ふ我心を以て花の心をもおもひやりてはやく散行をもうき世をいとひての故とおもひなためて恨みさる一首の趣をあらはしたり○此説いとむつかし二三の句は本歌のこ

とはにあらす本歌はたゝさそふ風あらは一句なりすてに本歌に據なしいかてか本歌のことく云々ととく事をえむすへてこの先生の本歌をとりたる歌をとかるゝなんあやしく煩はしき此一首の意は浮世を花のいとひてもしさそふ風あらはちりもすへしとおもふをうらみすやはあるへきとなり初句はうらみすやはあるへきうらむなり　四の句本歌の水を風にかへたるおもしろしさて此句九もしによむはわろしとは下なる句へつけり此例多し結句をはといへる意は花の早くちることとは大かたはうけれとも浮世をいとふ所はことわりなれはそれをはうらみすとなり○かくいへは花のちることをゆるす也すへて趣に順逆あり花のちるを惜むは順にてゆるすは逆なり猶順の義たるへくや

後徳大寺左大臣

はかなさをほかにもいはし櫻花咲てはちりぬ哀世中

世中のはかなさを外の物にもたとへいふに及はすさくらの花が咲かとおもへはやかてちるやうな物そとなり

花の歌とて　殷富門院大輔

花も又わかれむ春は思ひ出よ咲ちる度の心つくしを

初二句は我死たらん春はといふ事年ことの花に咲をまちちるを〻しみて心をつくしたりし事を我死たらん後の春は花もおもひいてよとなり

千五百番歌合に　左近中將良平

ちる花の忘れかたみの峰の雲そをたに殘せ春の山風

本歌そをたに後の忘れかたみに○古今集にあかてこそおもはん中ははなれなめそをたに後の忘れかたみにといふ歌をとり給へり　歌さまはよろしけれと○秀歌といふ物皆しかり　本歌のとりさまは詮なきか如し○本歌をとるは本歌のことはをとる也本歌のことく云々と說かたき故かくいはるゝなれと固執なり

落花　雅經

花さそふ名殘を雲に吹とめてしはしは匂へ春の山風

なこりは香をいふ下ににほへとあるにてしるへし雲は花にまかひてみゆる物なる故に雲にとはいへる也○一首の意は春の山かせよさそふ花のなこりの香を雲に吹とめて花の時のやうにしはしのほとは匂へと也

## 殘春　　　攝政

よしの山花のふる里跡たえてむなしき枝に春風そ吹

花の故郷とは花の散たる跡をいひて吉野の故郷を棄たり○此説の如し　跡絶ては花の跡もなくなれるにてそれを花の散たる故に見にこし人の跡もたえたる事にかね用ひたるなり○跡は人跡の跡の字花の比は見に來し人も今はたえて來ぬ事也花の跡もなくなりたる事をかねたるにはあらす此次に四句の注なきは空しき枝を花のちりてなくなれる枝とはかりおもはれたるにやそれは詞のうへにてかひなき意をそへさせ給へり花の比はつとひ來て人のもてなせしも散ての後は人めもかれてかひなくなりし心をふくめたる也かひなき心の空しきをかくさまにつかふは詩のしらへのうつりにてめつらしくめてたし　春風そ吹とはとひ來る人はたえてたゝ春風はかり吹よる意なり○春風そ吹とは花もちり人跡もたえて今はかひなき枝を春風はかりは心なかくふくとなり此御歌唐詩の氣格ありすへて此集の比の歌にはさる趣往々にみゆる事なれと此殿の御歌には殊にしるきかあり此説は取とめたる事もなくうきたる事のやうなれと唐詩と此集とをかねてあちはひしりたる人はうたかはしさても此歌最上第一義無二亦無三の高調にていとも〳〵めてたきにめてたし詞めてたしと云事のきこえぬは恨のこるわさ也先生はかけ合にのみふけりて風韻を思はれす又うらみ遺るわさ也

百首のうたの中に　　式子内親王

花はちりその色となくなかむれはむなしき空に春雨そ降

くれかたき夏の日くらしなかむれは其事となく物そ悲しきこゝの二三の句は此三四の句により給へる也○本歌は詞はかりをとる事かくのことし本歌のことく云々と有は迂遠附會のみ多かり　初句花ちりてといはすして花はとあるはもしにあはれなる所あり○此句たゝよはしとてそしらるへきをうれしくもほめらるゝ物かな此御句は俗にはつみのぬけたと云心はへにて嘆辭也下の空しきへひゝく語勢の照應也　二の句は花のありしほとは花の色をなかめしに今は何の色をなかむとはなしに也○二御句何をなかむる事ととりとめたる事もなく外の方を見いたせし也　四の句空はなかむといふに

よせあり○外の方を見出して空をなかめたるなれはよせありなとよそけにいふへき事にあらす　結句はさひしきさまにて花をおもふ情ふかし○結句はたゝ淋しきさま也花をおもふ情は四の句にありさてむなしき空とはたゝ虚空といふ事なるをむなしきにかひなき意をそへたる歌にてむなしき枝と同し心はへ也花はちつたり何の所詮もなき春天よといふ義也一首の意は花はちりしまうたり何をなかむるといふわけもなく外の方をなかめ出せは春の所詮もなくなりたる春天に雨か降てものさひしいと也

千五百番歌合に　寂蓮

おもひたつ鳥は古巣も頼むらむ馴ぬる花の跡の夕暮

二句もゝしは鳥は古巣にかへるたのみもあらんをといふ意也三句の下にをもしをそへて心得へし○二三の句鳥は花に別れても故巣へかへるといふ一つのたのみも有へしと也　下句はなれたる花の散にし跡の夕くれのさひしさは何をたのみにしてなくさめん方もなしといふ意をいひ殘したる也○一首の意はまう故巣へかへらうとおもひ立鳥は花に別れても故巣へかへるといふたのみもあるがわれらは馴々た花の散てしまうた夕暮のさひしさは誠に心なくさめかないと也

散にけり

初句けりといへる詞かなはす○これはさもあらぬ難なりけりといひては二句へつゝかす下句よりかへるてにをはもなしと思はれたるか句絶にてはあしとにや此歌は散にけり句あはれ句うらみの誰なれは花のあととふ春の山風と三段にきれてとゝのひたりまつ此詞ともを俗語に譯していはゝ散にけりは散たなあといふ意あはれは今の詞にアヽハヤとあもし長にいふ心にあかすおもふ時出來る嘆辭也さて此嘆辭にせひもないといふ事こもれり誰なれはゝ人にはあらすみつからしたる事也といひかけし語勢花の跡とは花のちり果て青葉になりたるを云一首の意は散たそなアヽハヤさてかう散たのは誰のわさてもなくみなみつからしたる事なるを花はまう散てしまうたかお笑止なるやとて尋ねに來る春の山風めがと也語勢をおもふへし　ちりにしもとあらはこともなからんを云ひていきほ

ひあらせんとてやかくはよめりけむ○ちりにしも
といひては勢なくて二三句の的切なるに相應しか
たしかゝる所に巧拙はありとしるへし

公經卿

春ふかく尋いるさの山端にほのみし雲の色そ殘れる

○初句は花ちりて後の意ほのみしは入佐山を遙望
したる意さてさきにほのみし雲は花なり今殘れる
はまことの雲なり一首の意春か深くなりて花かち
りて後に入佐山に尋ねいれはさきに花の比遠方か
らほのかに雲か立と見た其雲の色は今も殘りてあ
ると也花といふもしなきは筏士よまてことゝはん
のたくひなり

百首歌奉し時　　攝　政

初瀬山移ろふ花に春くれてまかひし雲そ峰に殘れる

○一首の意は初瀬山の春かくれて花かうつろふて
花盛に花にまかひてみえたる雲はかりが峯に殘て
みゆるとなり

家隆朝臣

芳野川岸の山吹咲にけり嶺のさくらはちり果ぬらん

○意はかくれなし此歌此時世にはあはぬこゝちす
るをこれをも具して一部の新古今集にそ有へき

俊成卿

駒とめて猶水かはむ山吹の花の露そふゐての玉川

猶といへるに心をつくへし○猶は俗にやはりとい
ふいつまでもの意也一首の意やはりいつまでも馬
に水飼てゐて其間も山吹の花をみんと也

五十首歌奉し時　　寂　蓮

くれて行春のみなとはしらね共霞におつるうちの柴
舟

春のみなとゝは春の行とまる所を云○此説のこと
し　湊や秋のとまりなるらんより出たり○年こと
にもみち葉なかる立田川みなとや秋のとまりなる
らん　船に縁ある詞なり下句は川瀬も何もみえす
立こめたるかすみの中へくたり行柴舟のゆくへも
みえぬをくれて行春によそへてなかめやりたる意
なるへし○一首のこゝろはくれて行春の行方はと
ちらの方かはしらねとうちの柴舟かかすみの中に
おつるか大かたあの方角か其かたてもあらうかと
也此かもしも何もみなしらねともといふ詞にこも
れる餘韵也　しらねともといへるはしらねともま
つこれをそれによそへてみるといふこゝろなるへ

し○しらねともといふ詞はたしかにはしらねとも大かたかうてあらうと推量して定めたる也よそへてみるといふ心はともといふ詞にこもりたらんともおもはれす

題しらす　俊成卿女

いその上ふるのわさ田を打返し恨かねたる春の暮哉

打かへしは返々の意也○返々のこゝろは打かへしの打の字の語勢にこもれり　うらみかねたるとは恨みてもかひなきをいふ○恨みに堪かねたる意なり此傍例おもひかねはおもふにたへかねの心をしみかねはをしむに堪かねのこゝろなり猶有へし後撰戀一うちかへし君そこひしきいその上ふるのわさ田のおもひ出つゝ○一首の意上二句は序暮春の事にて有心の序也をしめともとゝまらぬ事を打返し〳〵恨にたへかねたる春の別そとなり

山家暮春　宮内卿

柴の戸をさすや日影の餘波なく春暮掛る山のはの雲

初句にといはてをといへるは夕暮になれは戸をさすといふをも兼たるへし○さすは戸の事也日かけにはかゝはらす上句柴の戸をさすや句日かけのなこりなく句二段にとゝのひたり語勢を味ひて句絶をしるへき也　くれかゝるなといふかゝるはいやしきに近き詞なれとも○かくよむ一ッの風韵にていやしき事はなし此頃の諸先生の歌にまゝみゆる事にていとをかし今もこひねかひよむへき也されとあしくまねへは玉葉風雅におつ心すへし　これは雲の縁にいひかけたれはさもきこえす○もし俗語ならんには雲の縁なれはとてゆるすへきにあらす　山端に雲あれは入日のなこりはいよ〳〵ある物なるを名殘なくといへるは雲にうつりたりし名殘もなくなるまてくれかゝりたるをいへるなり雲にへたてゝ名殘もなしといふにはあらす○先生の注さくは古今集の遠かゞみなとやうに心ゆきてのみあるを此書はいかなる事にか物隔てかゆき所をかくこゝちのみそすることゝは入日の名殘なくとつゝきたるは柴の戸をさすに相應してうすくろう成しほとの意なこりなく春くれかゝるとは三月盡の日もくれはてゝこよひはかりなれは春の名殘なくなりしを云一首の意はけふは三月盡の日なるにもはや柴の戸をさいて山端の雲に日影もなこりなく

なりて春のなこりもまうなくなりはてゝしまいそうなと也

百首歌奉し時　　　　攝　政

あすよりはしかの花園稀にたに誰かは問む春の故郷

花園といふに花のありしほとはまれにも人のとひしこゝろをふくめたり○花そのといふもしにさる意はいかてかふくまんあすよりはといひ誰かはとはむといへるにて此意はふくみたる物をやまれにたに誰かはとはむは花の時は人の多く來しにてあすよりはまれにたに誰かはとはんの反にて聞ゆるをまれに人のとひ來し心をふくめたりとあるはたにといふもしをわろく淺くみられし也　春の故郷とは春の過いにし跡をいひて滋賀の故郷をかねたり吉野に花の故郷といふに同し○皆よろし一首の意は此しかの花その〳〵花の盛には人も大勢來たがあすからはまれにも誰かとひ來るてあらうそ春の過行たる跡のふる郷をと也

夏歌

更衣　　　慈圓大僧正

ちりはてゝ花のかけなき木下にたつ事やすき夏衣哉

本歌けふのみと春をおもはぬ時たにもたつことやすき花の陰かは　三句木の下はといふへきをにといへるは夏衣をたつ方をむねとせれは也○にもし諸本如此はと書る本はなきか可尋にては聞えかたしもしは口調をいたはりてやにとはよみ給ひけむ　四句本歌の意と相むかへて○たつことゝいふ詞の出所也相むかへてよみ給へるにあらす　今はたつ事安き也○立去る事安き也　さて又月日のはやくうつりて夏になれる意をも兼たるへし　四の句の勢さる事と聞ゆ　本歌にてはたゝ花の陰の立さり難き意のみなるにかくとりなして三の心を兼たるは此集の此の巧の深き也○上句は序一首の意は程もなく夏衣をたつやうになりしと也

夏のはしめの歌　　　俊成卿女

をりふしもうつれはかへつ世中の人の心の花染の袖

本歌うつろふ物は世中の人の心の花にそ有ける○色みえてうつろふ云々　世中の人の心ははなそめの○うつろひやとき物にそ有ける　云々初二句は人の心のかはり安きことは男女の中のみならす○此一句不用也本歌の如く云々と流るゝうつりにて

むつかしく入ほかなり　をりふしのうつるにもうつりかはるよといへるにて花染衣をすてゝ夏衣になれるをいへる也○一首の意は折ふしのおしうつれは世中の人心迄かおしうつりて花染の袖を夏衣にかへたと也二句のかへつを結句へもひゝかせてみるへし

齋院に侍ける時神たちにて　　式子内親王

忘めや葵を草に引むすひかりねの野への露の明ほの

草には草枕に也○いひたらぬこゝちす　三句引むすふとありけんをふをひにうつし誤れるか○さては聞ゆれと歌さまいたく下れるをいかゝせん　又はむすふといひては宵のほとの事と聞えて曙にはいかゝとおほして○此御用意はなきなるへし　本よりむすひとよみ給へる歟ひにては詞のとゝのはぬ歌なりもしむすひといはゝむすひしとしもしあるか○これは現在の事をよませ給へる也過去のしはあるへからすさては齋院おり給てのち神たちにおはしましゝほとの事おほし出たる歌ときこえて詞書に相違す　或はかりねせし野への　といはては○かくいひても過去になる　とゝのはす○一首の意葵を草まくらに引むすひてかりねする此紫野の露けき曙の神さひたる有さまを忘れんや身を終るまて忘れはせしと也此二三の句四の句詞つかひとゝのひかねたれと一首の調めてたくてぬなともゝゆらにひゝきあひたれは白壁の微瑕にて全き死に勝る事萬々

あふひをよめる　　小侍従

いかなれはその神山の葵草年はふれ共二葉なるらむ

○二葉とは草木の生初たるほとの名稱也いかなる故にて神山のあふひは年をへても初生の如く二葉なるやらんとなり

最勝四天王院障子にあさかの沼かきたる所

雅経

野へは未た淺香の沼に刈草の且みる儘にしける頃哉

野への草はまた淺きに此沼のかつみはみるかうちにしけるとよめる也此趣いかゝ其故は野の草のまた淺きにかつみのみしけらんことよしなけれは也○かつみはいかなる草ともしりかたけれと菖蒲にかへて軒にふく事なれはたけ高き草也然れは初生のほとより野への淺ちふよりもやゝ高く茂りた

りといはんに子細なし　又野への草はいまた淺きかみるかうちに茂ると野の草のしけるをよめるにて二三はたゝ淺といひかつみるといはん料のみともいはんか○これも一義にてよくきこえたりされと野草のしける序に水草を引ましへたるはまきらはしくやあらん　さては淺香の沼の題にかなはす○傍題は古人の歌に多くある事也されと繪樣の歌にてはいかゝなり猶初の義をとるへし

入道前關白右大臣に侍ける時百首歌に郭公

俊成卿

昔思ふ草の庵のよるの雨に涙なそへそ山ほとゝきす

初句は世にありし昔をおもふ也○たゝひろくむかしをおもふ也一首の意よるの雨にむかしをおもふとて草の庵ては袖をぬらすを此上に又涙をそふるな山時鳥よと也涙はきく人の涙也時鳥の泪にしても聞ゆれと其義にはあらす　二三句は白樂天か詩の句によれり○蘭省花時錦帳下孤山夜雨草菴中

雨そゝく花橘に風すきて山ほとゝきす雲になく也

結句雲は雨によせはあれともなくてあらまほし○此結句は意氣旺揚ことをおほえてめてたき事限なきを遠になく聲又はなくそわひしきなとかへは口惜からすや　すへて此歌雨風雲おの／＼はなれてくた／＼し○此歌は遠近二事を對にしたる歌也雨そゝく花たちはなに風すきてはたゝ爰もとの事山郭公雲になく也は天涯の事にて唐詩の對結といふおもかけあり物數の多きを貯るも歌にこそよれかゝる秀歌のうへにては中々耳にもとまらす

海邊郭公

按察使公通

二聲ときかすはいてし郭公幾よあかしのとまりなり

共

○いてしは泊をいてしにて舟をいたさしなり

百首歌奉し時夏歌の中に

民部卿範光

時鳥なほ一聲はおもひ出よおいその杜のよはの昔を

後拾遺に大江公資東路のおもひ出にせん郭公老曽の杜のよはの一聲とあるによれりよはに一聲聞つとある其昔をおもひ出て尙今も一聲なけと也三の句もかの歌の詞によれり

時鳥を

八條院高倉

一聲は思ひそあへぬ郭公たそかれ時の雲のまよひに

○まよひはかろく行かふ事と心うへし俗語にては

雲の行かよふ拍子にといふなり

千五百番歌合に　攝政

有明のつれなくみえし月は出ぬ山郭公待夜なからに

初二句は古歌の詞によりて〇有明のつれなくみえし別よりあかつきはかりうき物はなし　見えしは此歌にては月のみえたるにはあらす出やらぬけしきのつれなくみえし也有明の月につれなしといふは常はよのあけてもつれなく殘れるをよむを是は出やらぬ方にいひなして〇めつらし　時鳥のまてとなかぬ方へひゝかせたり〇みなよろし上下打かへして聞へし山郭公は待夜のまゝにて有明の月はまち出し也山郭公の下へはもしをそへなからにの下にてもしをそへて心うへし結句磊落にいひなかしたるかよくとゝのひて自在なる所みゆる也

後德大寺左大臣家十首の歌に　俊成卿

我こゝろいかにせよとて郭公雲間の月の影に鳴らむ

歌のさま西行めきたり〇一首の姿洒落なれとこれもこの時世の一ッの姿なり上人の會釋なき姿にも似てはあれとこれらも一具の新古今也　初二句の意のせちなるにあはせては下はさしもあらす上下よくかけあへりともきこえす〇下句ふかくあはれならは上下かけあふへし郭公の月になくらんはいかなる哀かたれにくはへむこれをさしもおもはれぬはあまりたゝありによみくたして會釋なき故の事也されと事のさま哀にて初二句によくかけあひたるをや　又月にとあらまほしきを月の影にもわろし〇月も月かけもたゝ同し事也もし數にあはせてよむならひなるにこゝは影にといふかもし數によりし也これしからすはかけといふ事いかさまにあしきならむ　よはの雲間の月になとあらはや〇同し事なれとくたけたるか如し

郭公のこゝろを　前太政大臣

郭公なきているさの山のはゝ月故よりも恨めしき哉

〇ほとゝきすのなきすてゝいる山のははつき影のいるをうらみしよりも恨めしと也

權中納言親宗

有明の月はまたぬに出ぬれと猶山深きほとゝきす哉

〇山ふかきは郭公の山より出やらぬ義これ此集の眞面目也地歩なり人々誰もかやうのすかたをよみえむと常に心かくへきわさ也

杜間郭公　藤原保季朝臣

過にけりしのたの杜の郭公たえぬ雫を袖にのこして

たえぬ雫信太の杜に似つかはし○下句はなみたのことなり

題しらす　家隆朝臣

いかにせむこぬ夜數多の時鳥またしと思へは村雨の空

本歌たのめつゝこぬ夜あまたになりぬれは待しと思ふそまつにまされる○下句は今はまたしと思ふに村雨の空にて心よわく又もまたるゝと也いかにせんは來ぬ夜のあまたなると村雨の空とに心まよふ也此集のころいかにせんとおける歌いと多き下にかなはさるか多きを○必しもしからすやあらん　此歌なとは此詞いとよくかなひて聞ゆ○かくいひてほめらるゝにやあらん初學の弟子なとの歌みてほむるやうにそある本歌をとりたるさまかくのことはめてたきためし也心えあるへし

百首歌奉し時　式子內親王

聲はして雲路にむせふ時鳥淚やそゝくよひの村雨

本歌こゑはして淚はみえぬ郭公○我ころも手のひつをからなん　云々此歌にては初句のはもしはこゝろなし○さる事なり　むせふはなみたのむせふにて○雲路になくといふ事を一きはせちにむせふといへるなり　むせふ郭公の淚といふつゝき也一首の意は本歌になみたはみえぬとあれとも○以上用なし　此村雨は其淚のそゝくにやあらんと也○よひの村雨は雲路になく時鳥の淚にやあらんと也

千五百番歌合に　權中納言公經

郭公猶うとまれぬ心かななかなく里のよその夕くれ

本歌ほとゝきすなかなく里のあまたあれは○猶うとまれぬ思ふものから　云々本歌の猶うとまれぬのぬはいはゆる畢ぬなるを此歌にては不の心に用ひかへたり下句はなかなく里のあまたありてよそになけともの意也○猶うとまれぬもよその夕くれも戀の歌たちてよめる也ほとゝきす汝か物かたらふ夕くれはよその事にてわれにはうとき故うとむへき事なれと猶えうとますおもふと也

題しらす　西行

きかすともこゝをせにせむ郭公山田の原の杉の村立

二句せは戀しきせうれしきせなとのせにてこゝを

聞へき所にせんといふ意也○山田の原の杉の村立か必ほとゝきすのなくへきやうにみゆる故よしきかぬまてもこゝを郭公きく塲所と思ひさためんと也山田の原外宮のあたりなるへしさるは上人かしこにひさしく住れたれは也

郭公ふかき嶺より出にけり外山の裾に聲のおちくるけりはおしはかりたるけり也○郭公か外山のすそに聲か落來るは深き嶺から今出たなといふ事　深きみねよりといへる何の用そや○深き嶺といへは高く大きなる嶺ときこゆさて落來るといふ詞にかけあひたり　嶺よりとは猶いひもすへきを深きとさへいへる淺き峰より出たる郭公は聲の落來ぬものにや○淺き嶺にてはいきほひなし布引の瀧をみて岩より落るといはんよりも雲より落るといひたるかをかしこれを文といふさてふかきといへるはすそに對せん料也深き嶺外山のすそ對句也かやうの句法詩人には心えたるもあれと歌人はすへて不沙汰也

山家曉郭公　　後德大寺左大臣

をさゝふく賤のまろやのかりの戸を明方に鳴郭公哉

させるふしもなき歌なり○詞めてたしとありそのめてたきかめてたき也すへて歌は詞たにめてたくは何のふしをかまたん

五首の歌人々によませ侍ける時夏の歌　　攝政

うちしめりあやめそかほる郭公鳴やさ月の雨の夕暮

すへて物のにほひはしめれはまさる物也○かはけはまさる物なり茶なと煮るにも先あふりて後に煮るは匂ひのまさる故也されと香なとかはきたるにほひは花やかなるにすきてけにくき所なきゆゑにしめりといふをこのみたる物也こゝにまさるといはれしも心にくき所のまさる事かおほつかなし本歌時鳥なくやさ月のあやめ草あやめもしらぬ戀もするかなうちしめりは俗にしつほりとゝいふ事郭公のなく雨の日の夕くれにゑめやかにあやめかかほるといふつゝき也此歌させるふしもなけれと其姿高妙にてめてたき事いひしらすこれ最上第一義無二亦無三の所なり此歌の姿をさとらされは妙覺の果は得かたし

述懐百首に　　俊成卿

けふは又あやめのねさへかけ添て亂そ增る袖の白玉
二句のねは根に涙をかねたり泪をねといふ也白玉は涙にて藥玉をかねたり○藥玉と涙にて數のまさる也　けふは又といひそへてといひまさるといへるにて常に涙のかゝる事しられたり○これらもその心にてよみたる物なれと此心はさへといふもじよりしらるゝ事也一首の意いつも泪のかゝりたるにけふはあやめのねをさへかけそへて藥玉となみたと數まして袖のうへにみたるゝと也

釋阿に九十賀給はせける時の屛風に五月雨　攝　政
を山田に引しめ繩の打はへて朽やしぬ覽五月雨の比
打はへてはひたすらになといはんか如しそれをしめ繩引はへたるよりいひかけたる也○打はへてくちやしぬらんは賀の歌には禁忌なれと古人は拘らさりし也

百首歌よませ侍けるに　入道前關白太政大臣
五月雨はおうの河原のまこも草からてや浪の下に朽なん
おうの河原とは萬葉三に飫宇海の河原の千鳥云々とある所をよみ玉へるなるへし出雲國なり○さみたれはゝ五月雨には也

五月雨　定家朝臣
玉桙の道行人の言つてもたえて程ふるさみたれの空
上句古歌をとられたれと○戀しなは戀もしねとや玉桙の道行人のことつてもなき　何の詮もみえす○本歌は詞をとるものなり別に何の詮かはあらん　さみたれに似つかはしからす聞ゆ○さみたれの降つゝきて往來の人のまれなる也何の似つかはしからぬことかはあらん

百首歌奉りし時　前大納言忠良
あふち咲外面の木陰露落てさみたれ晴る風わたる也
○上の句おもしろき歌也

五十首歌奉し時　定家朝臣
五月雨の月はつれなきみ山より獨もいつる郭公哉
○つれなきはまつに出さる也ひとりは郭公はかりと云意

太神宮に奉り玉ひし夏歌の中に　太上天皇御製
郭公雲井のよそに過ぬなりはれぬ思ひの五月雨の比

本歌秋霧のともに立出てわかれなははれぬおもひにこひやわたらん四御句は五月雨のはれぬをかねて○はれぬはおもひのはれぬ事さみたれの方はたゝ縁のみ　本歌のこひやわたらんの意をもたせて○本歌は詞はかりをとれり取のこしたる詞は此歌に用なし　よそに過行し時鳥をこひやわたらんとなり○一首の意五月雨の比はれせぬ物おもひをしてをれは時鳥か遠かたを啼て過行となり太神宮に奉り給ひし御歌には承久の御述懐多し

建仁元年三月歌合に雨後郭公　二條院讃岐

五月雨の雲まの月のはれ行を志はしまちける郭公哉

○下句は志はしなかてまちて雲はれての後郭公がなくと也

題しらす　俊成卿

たれか又花橘に思ひ出む我もむかしの人となりなは

○我もむかしの人になりなは此花たちはなにむかしの人を思ふか如く誰か又わたを思ひいてんと也

通具卿

行末を誰志のへとて夕かせにちきりかおかむ宿の橘

行末はわかなき跡なりにといふへき所なれとも三句のはてのにと重なる故にをといへりをの時は契かおかむへかゝる也四句かもしは二句のとての下にある意也然れ共そこには置かたき故に下へおけるにて快からねとも○こゝろよからぬ事はいかてかあらん　ふるくも此例ある事也一首の意に我なくなりたらん後たれ花たちはなのにほひに我をしのへとてかは今夕風に契りおかむ志のふへき人もあるましき我身なれは夕かせに契おくへきよしもなしと也○以上みなよろし

百首歌奉し時夏歌　式子内親王

かへり來ぬ昔を今とおもひねの夢の枕に匂ふたち花

二の句は古歌の詞二句を一句につゝめてとれるにて○例のむつかし　上句昔を今になすよしもかなとおもひてねたるよし也ともしにてさやうに聞ゆるなり古歌をかやうにとり用る此集の比のはたらき也○此歌は古歌をとりたるにはあらす今とは今の如くといふ事一首の意かへり來ぬむかしを今の如くおもひてねたるまくらに立花かにほふと也

前大納言忠良

橘のはなちる軒の志のふ草昔をかけて露そこほるゝ

○露はしのふ草の縁にてなみたの事なり

五十首歌奉し時　慈圓大僧正

五月闇短き夜半のうたゝねに花立はなの袖に涼しき

立花の匂ひをさそひ來て袖にすゝしく吹風の心よきまゝに夜のみしかきをあかす思へるよしなり

題しらす　俊成卿女

たち花の匂ふあたりの轉寝は夢も昔の袖の香そする

○四句はむかしの人の袖なり

家隆朝臣

ことしより花さき初る橘のいかて昔の香に匂ふらん

○一首の意かくれたる所なし

守覺法親王家五十首歌に　定家朝臣

夕くれはいつれの雲のなこりとて花橘に風のふく覽

二三句は後撰に故郷に君はいつらとまちとはゝいつれの空の霞といはまし又源氏物語夕顔卷にみし人の煙をくもとなかむれは夕の空もむつましき哉又葵卷にかくれ給し葵上の事を雨となり雲とやなりにけんといひ其時の歌にも雨となりしくるゝ空のうき雲をいつれの方とわきてなかめんなとある如く○以上不用也されと死たる人を煙といへるは常にて雲といへるはめつらしきをこれは其例なれはひたすら不用ともいひかたし　なくなりし人のなれる煙の立のほりて雲となれることに○以上よろしき説也　朝雲暮雨の意をもかねていへる也○此心はなしむつかしくみるへからす　されはいつれの雲とは昔のいつれの人のなれる雲といふ意也○此説よろし説さま入ほかにてむつかしきによき所々をひろひてゆふへし　さて風は雲に縁ある物なる故にその雲のなこりとはいへる也○風は雲の縁といふこともよしなきに風をさしてその雲のなこりといはんは一向に風雲一物なるか如しみな玄ひたる説也こゝはいつれの雲を吹し名殘にてと云事一首の意は夕くれになれはいつれの人のなれりし雲を吹たる名殘なれはとてか花橘に風か吹てわれにむかしを玄のはするそといふ事むつかしくみるへからす　一首の意は此夕くれの風昔のつれの人のなれる雲○をふきしとそへて心うへし先生の説は雲と風と混雜して一物の如し　の名殘にてか風の花橘にふくらんと也

攝政家百首歌合に鵜河　慈圓大僧正

鵜飼舟あはれとそみる武士のやそうち川の夕闇の空
○あはれは夕やみの空にうかひする人をあはれと
おもひやりたる也おもしろき方にしてもきこゆれ
と玄かにはあらし三の句は枕詞

寂　蓮

うかひ舟高瀬さしこす程なれや結ほゝれ行篝火の影
高瀬をさしこすほとは船のゆらるゝ故にかゝりの
影もえつかならす結ほゝれてみゆる也四句はむす
ほゝれて川をくたり行也やう／＼に結ほゝるゝを
いふにはあらす○此題にとりてはめつらかなる歌
なるを六百番歌合にもみのゝ家つとにもほめられ
すすくせつたなし

千五百番歌合に　俊成卿

大井川篝さし行うかひ舟いくせに夏の夜を明すらん
郭公の鳴一聲にあくといふはかり○以上こゝに用
なし　みしかき夏の夜を鵜飼舟は多くのせゝをへ
てあかすよし也

定家朝臣

久方の中なる川のうかひ舟いかに契てやみを待らむ
一二句は久堅の中におひたる里なれは○光をのみ
そ頼むへらなる　云々の意にて桂川也○意にはあ
つからすたゝ桂といふ事を久かたの中なるとよみ
し先例のみ　此川は月の中なる川にて○以上たか
はす　光をのみたのむと本歌によめるに○本歌の
とりやうむつかし本歌はたゝ一二句の出所也さて
三句の下に月の光をたのむへきをと云詞をそへて
みるへし本歌によりて玄かるにはあらす下の句よ
り出來る趣なり　鵜飼舟はいかなる契にて闇をま
ちてかふそと也四句は俗にいかなる因縁にてとい
ふ意なり○以上みなよろし

百首歌奉し時　攝政

いさり火の昔の光ほのみえて蘆屋の里にとふ螢哉
初二句ははるゝ夜の星か川への螢かも○いさりの
あまの海へゆくかも　云々とよみたりし昔の光な
り○むかしの光とはむかし蜑のたく火を見てはる
ゝ夜の星か云々とよみたりしその時のやうなる光
なり先生の說も同義にやあらん一首の意は蘆屋の
里にとふ螢はむかしいさりの蜑の海へ行かもとよ
みし其時のやうなる光かほのかにみゆると也

式子內親王

窓近き竹の葉すさふ風の音にいとゝ短かき轉寢の夢
朗詠に風生竹夜窓間臥初句うたゝねによし有〇これはさる事　二句すさふといふ詞おもしろしひたすら吹にもあらすをり〳〵そよめくさまにてなつの夜によく叶へりよの常ならはそよくとよむへきをかくあるにて殊にけしきあり〇みなさる事にて詞の風流なる也　一言といへともなほさりにはよむへからす心を用ふへきわさ也〇この親王の天骨より出たるへし練磨の功とはおもはれすは　四句はさらてたに夏の夜にてみしかき夢なるにいとゝ〇みしかき　也

鳥羽にて竹風夜涼といふことを　　春宮權太夫公繼

窓近きいさゝ村竹風ふけは秋におとろく夏の夜の夢
〇風生竹夜窓間臥といふ句此歌にも引へきかいさゝいは發語さゝは篠也四句にもしの下になりてといふもしをそへて心うへし霞になひくと同しにもし也四五句打かへして窓ちかき篠竹に風かふけは夏の夜の夢か秋になりてさめたりとなり

五十首歌奉し時　　　慈圓大僧正

結ふ手に影亂れ行山の井のあかても月の傾きにけり
本歌むすふ手の雫ににこる山の井の〇あかても人にわかれぬる哉　云々山の井を結ふに夏の意あり手してむすへは水の動きてうつれる月の影のみだるゝ故に夏夜のみしかきうへにいとゝしつかにみるほともなくあかてかたふくと也

最勝四天王院障子に淸見潟かきたる所　　通光卿

淸見潟月はつれなき天の戶をまたても白む波の上哉
二句はつれなく殘りていまた入らぬを云三句天は結句のなみのうへにむかへていへり〇以上よろし　戶は所からおのつから關の戶にも緣あり〇一首すへて關の事はなし此緣はあるへからす　をはなるものをの意とも聞え〇此こゝろなり　又をまたてとつゝきてもきこゆ〇つゝきてきこえむ事おほつかなし　下句は月の入をまたて浪ははやしらみて夜の明るをいひて夏の夜の明やすき樣也〇此說のことし三句はたゝ天といふへき所也戶といはんには必其緣語あるへきかことしもじ數にひかれてかくの如きにやあらん少し遺憾なりさりとて四句

をまたても明るといはんは凡の歌なりやむ事を得すしてかくやよみ玉ひけんこれ玉となりて砕る也さて四句戸の縁に明るといふへきをさはいはてしらむといへるはかへりて巧也そは二句も月は入らぬといふ意なるをさはいはすこゝもあくるといふ意なるをことさらにさはいはすして共に戸の縁語の入らぬ明るをは詞に顯さすして意にもたせたる物也○いと〱むつかし詞に出さぬ縁語はしるへきにあらす　其うへ波のうへはあくるといはんよりはしらむといへるそけしきもまされる○これはさる事

家の百首歌合に　　　攝政

かさねてもすゝしかりけり夏衣うすき袂に宿る月影

初句は衣に月影をかさぬる也常に衣を重ぬれは暑きものなるにこれは月影なれは涼しとなり○かくのことし

攝政家にて詩歌を合せけるに水邊自秋涼といふことを　　有家朝臣

涼しさは秋やかへりて初瀬川ふる川のへの杉の下蔭

題自レ秋涼は漢文にて涼二于秋一と書くことなれとも歌の題にさやうにかゝむは中々にいうならねはかく書ならへり○これは何題也何題には霜葉紅二於二月花一なとかくさまにかくも常の事也何のいうならさる事かはあらんあきよりすゝしといふことを自秋涼とかゝむ事はいとも〱つたなくよみとりかたしこれは水邊自秋涼とよむその秋涼も秋のことくに涼しといふことなれは畢竟はおなし事なから自レ秋はあまりに俗也かく書ならへりとあれとさるならひ有事をきかす　三句は恥といひかけたり○涼しさに秋のはつるといふ事は少しおたやかならねと二句のいきほひけにさる事と聞えたり　題をめつらかによみかなへられたり○自秋涼を秋やかへりてはつらんとよまれしといはるゝなれと題の誤讀にてさもあらす又秋の如くすゝしといふ題に秋やかへりてはつらんとよまれたるにしても題にいとよくかなひたり一首の意はこの初瀬川ふる川のへの杉の下蔭の涼しさは秋もはつらんと也

題しらす　　西行

道のへにし水流るゝ柳影しはしとてこそ立止りつれ

しはしとおもひてこそ立とまりたるをあまり涼しさにえ立さらて思はす時をうつしたる事よと也こそといひつれといへるにてその意みえたり○さる事なり

よられつる野もせの草のかけろひてすゝしく曇る夕立のそら

初句は夏の暑き日影に草葉のよれしゝみたるをいふかけろひてといへるにてはしめ日影の甚しかりしこととしられすゝしく曇るといへるにておのつから草葉のもとのことくのひて心地よけなるほとみえたり○先生は此上人の歌はつねにそしらるゝにこれはたま〳〵心に叶ひたりされと猶此集にとりては子細なき歌なり

千五百番歌合に　公經卿

露すかる庭の玉さゝ打そよき一村すきぬ夕たちの雲

○二三句のいきほひは一首に風といふもしあらまほしけれと夕たちのすくるとあらんには難をまぬかるへし上句は流麗にてをかしく下句はつよくてちからあり一勝槩なり

夏月　従三位頼政

庭の面はまた干かぬに夕立の空さりけなく澄る月哉

空さりけなく面白し夕立のしたる名殘もなく淸くすめる也

百首歌の中に　式子内親王

夕立の雲もとまらぬ夏の日の傾く山に日くらしの聲

夕立の雲も殘りなくはれてとまらす日もとまらす傾く○かたふくとは日影の殘りてみゆる姿也　といふ趣意にやあらん○夏の日の傾く山に夕立の雲名殘なく晴て蜩の聲かするといふ事一首のうへにあきらか也もの字からくみるへし先生はもの字をおもくみられたる故此説むつかし　下句いやしきふり也玉葉集風雅集に此格多し○此論は御子左の風より爲兼卿の風を物數多しといひてそしりくさにせし常談なり玉葉風雅は氣韻をおもへる故かなしともさひしともいはて其さまのみゆるやうにいひつらねたる歌ともありさやうの歌は物數おほくみゆる物也これ此二集の長處なるを中々にそしらるゝよ此歌も夏の夕のすゝしきさまみゆるうたなり　此内親王の御歌に霧のあなたに初雁の聲とも有○玉葉我門の稲葉の風におとろけは云々　又

かの二つの集の内に野へは霞に鶯の聲○玉葉遠こちの山はさくらの花さかり云々とあり此にもし何の子細かあらん此下句野へはかすみのうちにて鶯の聲かするといふ意也　尾花か風に庭の月影○玉葉又秋のうれへの色にむかふ也云々尾花の風にて庭の月かけかはるゝと也　なといへる殊にいやしこれらのにもしは傾く山に霧のあなたになとあるにとは異にしてこれもありかれもありと物をならへあくる間におけるなれはいと〳〵いやしき也○上の二首のにもしはにての意なれは何かはいやしからん庭にちりしは桃にさくらふる物は雪に霰なとやうに物をならへあくる中間にあるにとは異なるをや

千五百番歌合に　前大納言忠良

夕つく日さすや庵の柴の戸に久くも有か日暮しの聲

○夕つく日のさすも柴の戸をさすも蜩の聲もみな夕くれのけしきなり

百首歌奉りし時　攝政

秋近きけしきの杜になく蟬の涙の露や下葉そむらむ

秋ちかきと下葉そむとかけ合たり○下葉といふにしのひたるさまありて夏の歌となる也　此涙を紅涙なりといへる説はわろし○此先生の説わろし蟬の紅涙にて下葉をそむる故に夏の歌也　よの常の露も木葉を染るは常の事也○道理をさし置て一首のさまをいふへしよの常の露も木葉はそむるにもせよ涙の露といひ下葉そむるといへは紅涙也

二條院讃岐

なく蟬の聲も涼しき夕暮に秋をかけたる杜のした露

○秋をかけたるは兼官をかけ司といふことく秋をかねたる也夏にして秋を兼たるよしなり

五十首歌奉し時　攝政

螢とふ野澤にしける蘆の根のよな〳〵下に通ふ秋風

四の句よは蘆の緣下にかよふは根のかけ合也○螢火亂飛秋已近と有

夕顔　前太政大臣

白露の情置けることの葉やほの〳〵みえし夕貌の花

○一首源氏物語の面かけ也情とは風流たつ事花を扇に打置て歌よみかけし事也

百首歌の中に　式子内親王

たそかれの軒端の荻にともすればほにいてぬ秋そ下

にことゝふ
○ほにいてぬは表にあらはれぬ事夏の荻のすかたなり

夏のうた　　　　　　　　慈圓大僧正

雲迷ふゆふへに秋を籠なから風もほに出ぬ荻の上哉
こめなからいうならぬ詞なり○こめなからとほにいてぬとたゝかはせたりと有へきかことし　風もの上か下かにまたといふことあらまほし○こめなからにまだの意あり

太神宮に奉給ひし夏の御歌の中に　　　　太上天皇御製

山さとの嶺のあま雲とたえして夕すゝしき槇の下露
○山さと峯雨雲夕槇露なと物數は多かれとすゝしけにめてたき御うたなり

文治六年女御入内屏風に　　入道前關白太政大臣

岩井汲あたりの小篠玉こえてかつ〳〵結ふ秋の夕露
○三の句は岩井をくむ手の小篠にかゝるなるを玉こえてといへる文章にてめてたし

千五百番歌合に　　　　　宮内卿

かたえさすをふの浦なし初秋になりもならすも風そ身にしむ
本歌をふの浦にかたえさしおほひなる梨の○なりもならすもねてかたらはむ　云々かたえさしおほひたる陰なる故に秋になるならさるの論なく夏の程よりして風のいとすゝしきよし也さてかた枝さすとのみにてはすゝしかるへきよしなけれ共本歌のさしおほひといふ詞をつゝめたるなれはそのおほひといふに涼しきよしは有なり○初句かた枝さしおほふといはまほしき事なれとさはいひかたき故かくよめるにて本歌にゆつりたるにあらすいはゝいひたらぬ句也されと一首のうへに涼しき所はみえて難をまぬかれたる歌なり

百首歌奉し時　　　　　　慈圓大僧正

夏衣かたへ涼しくなりぬなり夜や更ぬらん行合の空
本歌夏と秋と行かふ空の通路は○かたへすゝしき風やふくらん　本歌とれる詮なし○夜やふけぬらんといふ事本歌にはなしこれを主意なる歌なる物をや　たゝ夏衣といへるのみかはれるその夏衣も緣の詞たになけれはいたつらことなり○夏なれはなつ衣をきたるに其かたへのすゝしくなれる也た

ゝありのまゝ也縁の詞にて組たてたる歌にはあらす　又なりぬなりといふは他のうへを見聞ていふ詞にこそあれみつからの事にはいかゝ〇他のうへを見聞ていふ所にもいへとかゝる所にもなとかいはさらん一偶を守るへからす　これはなりにけりとこそあるへけれ〇一句のさま第二義なり　すへて今の世の人はかやうのけちめをえわきまへされはたゝ同しことゝそ思ふらん〇けにさる歌よみ多かる世の中なり　此集の頭はしも猶かゝることむけに分れさるにはあらさりしかとも〇此集の頭は古歌をとくにはかゝるてにをはのうへにもおほつかなき事多かるをよみ歌にはすへてなしあやしきことなり　あなかちに詞をいうによまんとつとめられたりしからかゝるたかひめはをり／＼あるなり〇かくよむはつねの事にて他のうへを見聞するやうによむもありたゝ二義なり

# 尾張迺家苞二之上

## 新古今集

秋歌上

文治六年女御入内屛風に　後德大寺左大臣

いつもきく麓の里と思へ共きのふにかはる山颪の風

〇ふもとの里にて風の音はいつも聞物とおもへともその風の音のけしきかきのふとはかはりしと也

百首歌の中に　家隆朝臣

昨日たに問んと思ひし津國の生田の杜に秋は來にけり

本歌君すまはとはまし物を〇津國のいくたの里の秋の初風　云々何故にきのふたにとはむとおもひしにか心えす〇先生は本歌に云々といへる其云々によりてかくの如くと解るゝ風なるに此歌にしも其例をたかへられたるはいかに本歌に君すまはとはまし物をとあるその人のすみか故とはんとおもひし也きのふたにとは立秋の日の心にてたゝ何となき夏の日さへとはんとおもひしに秋は來ぬあきはいよ／＼物の哀なるへけれは必とふへしと也かはかりの事を何故にかとうたかはれしはもし百首

の歌にさしはへたる贈答の意はよましと思はれたるにはあらしか然らしか今時の人題詠の四季の題に述懐に舊贈答旅戀の心なとよむ歌人をさ〳〵みえす憚る所なきをせまき事也

最勝四天王院障子に高砂かきたる所　　秀　能

吹風の色社みえね高砂のをのへの松に秋は來にけり

上二句秋來ぬとめにはさやかにみえねともの意にて風は色のみえぬこゝろと○本歌によりたるにはあらすへて古歌を引出すともきこゆる歌は引出すして義を成すかむつかしくもあらてよろしきにや一首の意は吹かせに秋の色といふはみえねとも高砂の尾上の松にその聲は聞えてあはれに悲しとなり　松なる故に秋の色のめにみえぬ意をかねたり○此心はなし

百首歌奉りし時　　俊成卿

伏見山松の陰より見渡せはあくる田面に秋風そふく

○松のかけよりいとめてたし出物也なといふは歌の道のわさはひ也

守覺法親王家五十首歌に　　家隆朝臣

明ぬるか衣手寒し菅原や伏見の里の秋のはつ風

ふしみといふにねてある意をもたせたり○この意なり　さて此歌委くいはゝ明ぬるかといへるかもしの疑は夜の明て秋の初風のふくかと秋のはつ風へもかゝらてはたしかならす○秋のはつ風といへるにて秋風のひやゝかに衣手寒きはと歌の終まてはかゝりたりいかにいはるゝにかあらん一首は立秋の前夜夜かあくれは秋なる事を心えてねてさめて衣手のひやゝかなるにおとろきて今は早夜か明る事にや菅原の伏見のさとの秋のはつ風にて衣手の寒きはと也一三四五二とつゝけて心うへし　されとかやうのおもむきはほのかなるも歌なり○ほのかなるは此比の風體也されといさゝかも滞る所なくよくきこえたるを此議論はあかすおほゆ

千五百番歌合に　　攝　政

深草の露のよすかを契にて里をはかれす秋は來に鳧

初句里の名に深き草の心を兼たり二句よすかはより所にて露を秋のより所とする心也○以上かくの如し　それをつゆのよすかといふはたとへは人の花をなかむるを花のなかめと云たくひ也○此たと

へよきたとへにもあらす花のなかめはた打まかせたる語にもあらす露のよすかとはいさゝかなるよすかと云事也　ちきりは緣なり○契に契約也緣にはあらす　さて此二三句は露をよすかにてとかちきりにてとかいひて意たれるをよすかと契とをいへるは詞の七五もしにたらさる故也○詞の七もし五もしにたらすとて同し趣の詞をたゝみていへる歌かゝる精選にいるへき物かは此歌めてたし詞めてたしといはれたるにかけあはす又ある所の注に歌はかく一もしといへともいたつらなる事なきやうによむへしといはれたるにも齟齬せりよすかとは據なり契は契約にて二義分明に別なり心詞の重疊したるにはあらす一首の意は深草のさとの草深き所をいさゝかの所緣をわすれす契約ありて月のとふと也いさゝかも徒なるもしなき歌なるをいかにいはるゝにかあらん　四句は今そしる苦しき物と○人待ん里をはかれす問へかりけり　云々の歌の詞也○さまて入たちてみすともよろしき歌也

通具卿

哀亦いかにしのはむ袖の露野原の風に秋は來にけり

又と云るにもとより袖の露けき意をこめたり○又と云もしにさる意はなし一首の意は野原の露に秋風たちてえたへしのはさる意かくては我袖の露も又いかにたへしのはんと云るにて又は俗にいはゆるも亦也　野原と云事えんならさる詞也○ちからありと正明は思ふ大かたは用さまにある物也

具親

敷妙の枕のうへに過ぬなり露を尋ぬる秋のはつ風

涙にぬれたる枕のあたりに秋の初風の吹來るを露を尋ぬるといひなせし也露は秋のよすかなれは尋ね來るよし也○以上かくの如し　過ぬなりとはたゝ吹くる意也すき去意にはあらさる故にをといはすしてにといへりされと此にもし過といふにはいさゝか似つかはしからす聞ゆ○すきぬ也はたゝ吹來たる意過て去たらんも過去はせてとゝまりたらんもこゝには論する事にあらすたゝ吹たに來れはよろしき也詩にはかくつかふ事常の事也歌にはめつらしきにやにもし過といふに似つかはしからすとあるもめつらしきによりての事にやあらん

顯昭

水莖の岡の葛葉も色つきてけさうら悲し秋の初風

上句萬葉十に水くきの岡のくす葉も色付にけり〇萬葉集には秋風のひにけにふけは水莖の岡の木葉も色付にけりとあり筆者の誤なるへし木葉を葛葉にかへたるか古歌をとる法にていはゆる奪體換骨也　四句は後拾遺秋上眞葛原玉まく葛のうら風のうらかなしかる秋は來にけり〇木葉を葛葉にかへたるとうらといふもし作者の新意也古歌に拘らすうらは葛の縁の詞なり〇うらは心義うら悲しはこゝろ悲しといふ意

越　前

秋はたゝ心よりおく夕露を袖のほかとも思ひける哉

四句に袖といへるにて二三の句の心よりおく露は涙なる事をしらせ三句に露といへるにて四句の袖の外は草葉の露なることをしらせたりかやうの所はたらき也心得おくへし〇たかひたるふしもなけれと説さまいとむつかしさるは上下のかけ合を宗といはるゝなれといとしもなし此歌は詞の宛轉なるにて涙の事を心より置露といひ草葉のうへを袖の外といへるかめてたき也四句に袖といへるにて二三句の心より置露は涙なる事をしらせ云々はさもあらす下句に袖となからんからに心より置露といひて涙の事とはいかてかきこえさらんあなかちにかけ合といふ事を尊はるれと上の句に露といひ下句に袖といふはかりの事は濱のまさことといふ物を便にしてよむ歌人も常しかする事也とりたてゝ古人をほめそしる程の事かは　一首の意は秋のほと露のしけきはたゝ物思ふ心より置袖の涙なる物を〇かくいひてはたゝと云詞唯但の字の義にあたる秋は心より置泪の露はかりなる物を木草の上にも置ものゝやうにおもひしといふ歌になりて其義いたくたかへり　草葉のうへとのみおもひける事よと也〇たゝと云詞に妨られてさは聞えすしひことも也たゝは只字の義俗にやはりと云一首の意は秋はやはり我心からも露はおく物なるを木草にのみおく物とおもひしことよと也　後撰雜に我ならぬ草葉も物はおもひけり袖より外における白露〇袖より外といふ詞の出所なり

五十首歌奉し時秋の歌　雅　經

昨日まてよそに忍ひし下荻の末葉の露に秋風そふく

二三の句よそへはきこえぬやうに忍ひて下にのみふきし荻の風なり下句末葉といひ露といへる皆あらはれてふく意にて上句よそに忍ひし下荻といへるによくかけあへり○以上かくのことし

題しらす　西行

哀れいかに草葉の露の氷るらん秋風立ぬ宮城の丶原

秋風の立ぬるにつきて宮城野をおもひやれる也結句を初句へまはして宮城野の原はあはれいかに云々と心得へし○四五一二三とつゝけて心うへし

崇徳院に百首歌奉ける時　俊成卿

みしふつきうゑし山田にひたはへて又袖ぬらす秋は來にけり

本歌萬葉八に衣手にみしふつくまて植し田を引板我はへまもれるくるし夏水漲つきて袖ぬれて植し田をもるとて秋も又露に袖ぬらすよと也○引板はへてまもる田のけしきの哀なるにこほるゝそての涙の事なり　三句はたゝ庵にゐてもるさまをいへるのみ也○かくものけなくいはるゝはひたはへは袖ぬらすにはうとき詞なりといふ難をつよくせん料也三句いかてかゝろ〳〵敷いひ捨へきいとめてたき事也一首の意はみしふつき袖ぬらして植し田をもるとて引板はへて田廬にせれは秋のもの悲しさにそゝろに涙をこほして又袖ぬらすと也引板の露にて袖ぬらすにあらすおのつから露も置てはあるへけれとそれは此歌に用なき事也　それにとりてひたはへは袖ぬらすにうとき詞なれとも○露のおくが引板には打まかせすとにや此歌は露の事にはあらす又ひたのかけなはに露の結はん事うとき詞ともいひかたし　本歌の詞なり○本歌の詞なりともよしなくはよむへきにあらす

題しらす　後徳大寺左大臣

夕されは荻の葉むけを吹風にことそ共なく涙落けり

○二の句荻の葉を介向とてふく風也をもしのてにをはめつらか也ことそともなくは何の故といふ事もなく也

崇徳院に百首歌奉し時　俊成卿

荻の葉も契ありてや秋風の音つれ初るさまと成らん

初句もゝしはゝといふへきをもといへるは秋風の荻の葉にまつ音つれそむるも契ありての事にやといふ意なれは也○もゝしの說いとむつかし　ちき

りは作にいはゆる因縁也○契とは契約の義なれと前世の約束にて今生の縁はある物なれはかやうに縁といふへき所にもいふ事也　つまとは夫婦たかひにいふつまともとおなし意にてあて所となりてむかふ物を云○よく説得られたりつまはより所といふ事にて夫婦となる秀句也一首の意は人間のうへにては前世の縁かあれは物をもいひよりつまにもなるか荻の葉も縁か有てか秋風か音つれ所にすると也もゝしは人間は縁あれはつまとするをきかせたる也はといふへき所にあらす

題しらす　　七條院權大夫

秋來ぬと松吹風もしらせけり必荻のうは葉ならねと

かならすは俗にあなかちといふ意也○俗にきつといふ詞にあたる一首の意は秋か來たと云事をしらするはきと荻の上葉の風の音といふてもなく松吹風の音にも秋をしらせたりとなり　こは歌にはをさ／＼よまぬ詞なるを此歌にては一首の眼となりてめてたし○此集のころの歌にかきりたる事也

百首歌に　　式子内親王

うたゝねの朝けの袖にかはる也ならす扇の秋の初風

○みのゝ家つと注なしかならすあるへき歌なるを不審四句はよへまては暑くて扇をならしゝ事さらはならしゝ扇のとあるへきかことくなれとかくさまにいふも常なり一首の意はよへまてはあつさに手馴しゝ扇の風か一夜ねたる此うたゝねの朝けの袖に秋のはつ風とかはりしと也ふとしては下句心えたかふへし

たなはたの歌とて　　俊成卿

棚機のとわたる舟のかちの葉に幾秋かきつ露の玉章

初二句は題の意をすなはち序としたる也○此說めてたし二句三句へかくらむ料のみ也　露の玉は梶の葉に縁有○とわたる舟はかちと露とを云料のみ也　後拾遺集に天川とわたる船のかちの葉に○思事をも書付る哉と有　云々○かちの木とは紙にすく木也紙はかちと云木の皮にてすく物なれは楮皮とも楮葉とも云こゝは其楮葉也ふみをかく紙也一首の意はたなはたは幾秋文をかよはしつらんと也

百首歌中に　　式子内親王

なかむれは衣手すゝし久堅の天の川原の秋の夕くれ

○なかむれは衣手すゝしそれは天の川原の秋の夕

暮なれはにやあらんと也

入道前關白太政大臣

いか計身にしみぬらん七夕の妻まつよひの天の川風

○たなはたのといひてあまつといひ天の川といへるも川風といひて身にしむといへるも先生のいはるゝかけ合也

七夕の心を　公經卿

星合のゆふへすゝしき天の川紅葉のはしを渡る秋風

○本歌天の川もみちを橋に渡せはやたなはたつめの秋をしもまつと有此歌にては天の川に紅葉の橋といふ橋のある事にしてよみたまへり

守覺法親王家五十首歌に　顯昭

萩か花ま袖にかけて高圓のをのへの宮にひれふるや誰

詞はよし萩か花を袖にかけてひれふるといふ事いとゝ心えす○萩か花をま袖にかくるとは插頭たる花の袖までこほれかゝりたる事なるへしさらはひれふるたひに花もうこきてをかしき姿也領巾とは三四尺の帛のなかはをとりて衣の頸のあたりにつけたる物也人に顏みせしとの料の物にそあるへき遠き人招くに便あれはこれをふりし物也此歌一二の句に文章ありて猶此集の比の姿なりひたすら古體なりとおもふへからす

千五百番歌合に　左近中將良平

夕されは玉ちる野への女郎花枕さためぬ秋風そふく

露を玉ちるといふことよせなく聞ゆ○露ともいはて玉ちるとあるは詞たらす是も此頃の一つの姿にて玉ほこの行かふ袖のたくひ也されと夕されはと云秋風といひ玉ちるといへるにて露といふ事は明らか也かくて玉ちるは魂ちるをよせたる也四句は男のわか方をぬへき所とも定めすして外心のいできたる事五句秋風は我をあきし意一首の意は夕くれとなれは魂をけしてきえ入やうになる女かなをとこか外心か出來て我方に枕をさためてもゐすあきたるやうなれはと也

入道前關白太政大臣右大臣に侍ける時百首歌よませ侍けるに　俊成卿

いと斯や袖は萎し野へに出て昔も秋の花はみしかと

○一二の句はむかしは袖のしをれさりし也とは年老て秋のあはれにえたへす袖に淚をこほすと也

百首歌に　　　　　　　　　　　　　　　式子内親王

花すゝきまた露深しほに出て詠めしと思ふ秋の盛を

本歌拾遺戀志のふれはくるしかりけり志の薄秋の盛になりやしなまし秋のさかりになりや志なましとは穂にや出ましといふ意なり此歌の意は此薄をみれはまた露ふかく物おもはしけなるはいかなる事そ今はすゝきも志のひて物おもふ事はあらし皆穂に出たるへしとおもふ秋の盛なる物をと也露ふかしといひなかむといへる共に志のひて物おもふこゝろ也本歌の初二句にて然聞えたりさて秋のさかりをといへる詞にて其本歌をとれる事を志らせたりよく〳〵あちはふへし○本歌はかくむつかしくとるものにあらすたゝすゝきに秋のさかりとよみたるより所のみ也花すゝきは今は下のおもひもほに出たれはなかむることはあらしとおもふ秋のさかりなれとまた露ふかくて物おもふやうすにみゆると也一三四五二とつゝきたり

攝政太政大臣家百首歌に　　　　　　八條院六條

野へことに音つれ渡る秋風をあたにもなひく花薄哉

○人あまたに物いふをとこにすかされてなひく女によせて花薄をよめる也

和歌所歌合に朝草花　　　　　　　　　　通光卿

明ぬとて野へより山に入鹿の跡ふきおくる萩の下風

○よく聞えたる歌也

題しらす　　　　　　　　　　　　　　　慈圓大僧正

身にとまる思ひを荻の上葉にて此ころ悲し夕暮の空

まつ秋の夕くれは荻の風の音を悲しき物によみならへるを此歌にてはその荻の風にはあらて我身にとまれる秋のおもひか荻の風のことくにて夕暮にはかなしと也○如此にはあれと說さまむつかしく親切ならて初學の爲心くるしけれは今又注す一首の意はこゝには荻はなけれとも秋のおもひかわか身にとまりてそれかすなはち荻の上葉のやうな物て此ころは夕くれになれは悲しいと也　さて風ともいはす秋ともいはさるはことさらにはふきて詞の外におもはせたるたくみ也○秋といふ字はなくてもよろしき歌也風といふもしはたま〳〵もれたり夕くれの風とゝまりては詞つたなけれはさはよみ玉はすかく危き所を侵すまて磊落によむか時世の風也

百首歌に　　　　　　　　　　攝政

荻の葉にふけは嵐の秋なるを待ける夜半の棹鹿の聲

秋なるをとは秋の聲にてかなしき物をといふこゝろ也○しからすあらしの秋とは嵐といひてかなしき物にする秋なるを也　一首の意は嵐は荻の葉にふけはかなしき物を又そのあらしのつてに○此意ならは今少ことはたらす　鹿の音を待ける事よ何しにまちけむ鹿の音もきけは又いよ〳〵悲しさをそふるものをと也○待けるは鹿のうへにかけて心うへしさく人のことにはあらす　秋なるをといひまちけるといふ詞のいきほひをもてしるへし○詞のいきほひにてもその義ならは今少いひたらす一首の意は風か荻の葉をふけは秋のあらしとてかなしき物なるをよはのさをしかはそれを待つけてなく事と也

おしなへておもひし事の數々に猶色まさる秋の夕暮

おしなへては一つにおしくるめて也○常は色々の事もおしくるめて打捨置しこゝろ也　數々にはかすおほくある物をひとつことに也○秋はひとつにおしくるめて捨置かたく一つ〳〵に取わきて物おもひの種となる也○色はかろくみるへし○色は品といふ事一首の意常は一つにおしこめて置し物おもひの數々に秋は又猶さら色品か增ると也　一首の意は常にはたゝ悲しき事も一つにおしくるめておもふのみなりしに秋の夕暮には猶又其數々のおもひの一つことにかなしさの增ると也

題しらす

暮かゝるむなしき空の秋をみて覺えす溜る袖の露哉

一二の句つゝき聞よからす○取わきたる高調にはあらねと尋常の句からなり難とすはかりの事にはあらす　四の句もいうならす○これはたまるといふ詞を打ひらめたりと也されと此比の歌にある事にてかならす秋のといひことの外なるとよめるたくひなりそれらはいたくほめられたるに此うたの心にかなはさるは事一途ならさるかことしたまるといふ詞も水たまるなと古くもよみて打ひらめたる事もなし　すへてよくもあらぬ歌也○四の句の難たに心とけはさのみなとかあしからむ一首の意は木草の色もなき空しきそらの秋の夕くれをみてはなみたのたまるとなり

家の百首歌合に

物思はて斯る露やは袖におく眺めてけりな秋の夕暮

上句物おもはぬ人の袖にかやうに○かゝる露とは紅の涙也此注にてはたゝ露のおひたゝしく置義となる　露のおくものかはといふ意也なかむるも物おもふと同しことにて四句は物おもひけりなといふ意なり○いひもてゆけは同し意に落めれとなかむると物思ふとは分明に別義也同言にあらすなかむるは空をなかむる事其そらを詠るは物おもひをして詠るなる故同し意に落とは云也　すへておなし事を二所にいはてかなはぬ時一つは詞をかへて相照してそれときこゆるやうによむ事一つのならひ也此類多し心得置へし一ならひとは相傳の說歟先生は卓見にて相傳の說はあるへからす不審一首の意物おもひをせすして色の紅なる露か袖に置物かさては秋の夕くれの哀さになかめをするそうなと也

をのことも詩をつくりて歌にあはせ侍りしに山路秋行といふことを　　慈圓大僧正

み山路やいつより秋の色成んみさりし雲の夕暮の空

いつよりの下にかくといふ詞を加へて心うへし○かくといひては意たかへりこゝはかくの如きといふ詞をくはへて心うへし秋の色はすてにみたる事なからかくの如く紅葉したるははしめてみたる意也　題の路の字行の字の意もはたらかすすへて趣のおかしからぬ歌なり○下に同し題にて家隆卿秋風の袖に吹まく嶺のくもをつはさにかけて雁もなく也注に山路を行時のさま也とありこの歌も同し趣にて景物に其狀をみせたるなれはこれも山路を行時にみわたしたる樣也といはゝいかてかゆるされさらんさて此歌の四句みさりし雲とは今迄みえさりし雲にてくれなゐに色つきたる雲也それは木々の紅葉して雲の紅にみゆるにて上のいつより秋の色ならんよりきこゆる趣也幽玄なる義を疎漏に看過してすへて趣のをかしからぬ歌なりとは作者の爲心くるしうなん

題しらす　　寂蓮

淋しさはその色としもなかりけり槇立山の秋の夕暮

○槇立山はいつも綠なる故伏して秋の色といふ事もなき也秋をわふるはさひしさをわふるなる故秋

の色かさひしさの色なり一首の意は槇立山の秋の夕くれはことの外さひしう悲しき事されはとて何の木か秋の色になりてそれ故あはれにさひしとさしていふへき所もなしと也

心なき身にも哀はしられけり鴫立さはの秋の夕くれ　西行

○鴫立さは地名にあらす

西行法師すゝめける百首歌に　定家朝臣

見渡せは花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮

二三句明石の巻の詞によられたるなるへけれと○明石巻にはるゝと物のとゝこほりなき海つらなるに中々春秋の花もみちのさかりなるよりはたゝそこはかとなうしけれるかけともなまめかしきに云々とあり花紅葉とあるはかりにてすへて此歌にことよりても聞えす　けりといへる事いかゝ其故はけりといひては上句さそ花もみちなとありておもしろかるへき所と思ひたるに來てみれは花紅葉もなく何のみるへき物もなき所にてありけるよといふ意になれは也そもゝゝ浦の苫屋の秋の夕ははなも紅葉もなかるへきはもとよりの事なれは今更なかりけりと嘆すへきにあらさるをや○浦の苫屋に花もみちのなき物とはいかて定めらるゝならん磯山浦はの櫻楓はめいほくを失ひたりと愁申へしされと此歌はふみ月葉月の夕くれにて花のなきは勿論の事もみちもいまたそめあへぬ程の時也一首の意は浦の苫屋の秋の夕くれをみ渡せは花もみちの事も忘れてあはれにをかしきけしきそと也俗にいはゝ花もいらぬか紅葉もいらぬといふほとの事也しか心うつす趣は詞のうへにはなけれと浦の苫屋の秋の夕くれといへるあはれなるさま言外にうかひてみゆるなり　我ならはみわたせは花も紅葉もなには潟蘆の丸屋の秋の夕くれとそよまゝしと或人はいへる○花も紅葉もなかりけりといひては浦の苫屋に花もみちのなきは勿論なりと先生はいはるゝ事なるに花も紅葉もなには潟と秀句にいへは花紅葉俄にいてくるにや此二三の句は雄偉にて山を拔力あるをなには潟と秀句にいへは氣骨みな盡る物をや直したる一首の意は見渡せは花も紅葉も何もない難波潟の蘆の丸屋の秋の夕くれはをかしくもなく哀にもなしと也

五十首歌奉し時　　雅經

たへてやは思ひあり共いかゝせむ葎の宿の秋の夕暮

初句詞たらてとゝのはぬ心地す○詞たりてよくとゝのひたり一もしといへとも有餘不足ある事なしたゝ句作自在にて上下に置かへたる故きこえやすからすこれは思ひありともたへていかゝせんやはといふもしのつゝき也やとるかつきの袖のせはきになとのたくひにて此比もはら多かる事なり　いかゝせんもよくかなへりともきこえす○もしを置かへてみ給へいとよくかなひたる物をや　意は本歌にあたりておもひありとも堪てやはすまるへきと也○本歌おもひあらはむくらの宿にねもしなんひしき物には袖をしつゝも一首の意はおもふ人と相おもひに住ならは葎の宿にも起臥する意なれと秋の夕くれの物かなしきにはさやうにあれたる所に堪ていかゝしてをらんや秋はかりは堪かたしと也

秋の歌とて　　宮内卿

思ふ事さしてそれとはなき物を秋の夕を心にそとふ

上下の句の間へかくかなしきはいかなる事そといふことをくはへて聞へしこと葉たらてとゝのはぬ歌なり○此説のことしをもしは連歌にてはをまはしと云多くのこと葉をいひ殘してをもしにてこゝろをまはしてきかする也されはかくかなしきはいかなる事そといふ事をもしにてきこえたれはことはたりてとゝのひたる歌也　ともし一つくはふれは大かた聞ゆる也○さらてもをもしにてよく聞ゆ

鴨長明

秋風のいたり至らぬ袖はあらし唯我からの露の夕暮

古歌に春の色のいたりいたらぬ里はあらし○さけるさかさる花のみゆらん　云々いたりいたらぬといふ詞袖には假つかはしからす○秋風の袖にそ來るといふは常也いたるも到來の義にてたゝ同し事也涙の露いひふるしたることにても又かくさまにいへはめつらしき也　下句我からの露とつゝけてこゝろうへし○涙の事也一首の意は秋風か此人の袖へはいたり此人の袖へはいたらすとやうに人わくことはあらし誰も一様なるへきにひとりかく涙のこほるゝは秋の夕をあはれとわかふかくおもふ心からならんと也

西　行

覺束な秋はいかなる故のあれは漫に物の悲かるらん

○此歌此集のころの姿なるをいとよくきこえたるは此上人の眞率なる風のうつりなり

式子内親王

それなから昔にも有ぬ秋風にいとゝ詠を賤のをた卷

我身もむかしの我身○此心はなし我身は二の句にてむかしにもあらぬ也　秋風も昔の秋風のまゝなから○初句は秋風のみにかゝりて此義なり　我身のうへの昔のやうにもあらぬにつけて秋風の悲しさも昔にはまさりていとゝなかめをすると也○我身も昔のわか身と說るゝ故むつかしくなる也一首の意は同し昔の秋風なるにわか身のむかしにあらぬ故秋風も昔にあらぬやうにていよ〳〵物思をして空をなかむると也秋風まてかむかしにあらぬやうにてとはむかしにもあらぬ秋風にとつゝきたる語勢よりきこゆるなり　結句昔を今になすよしもかなの意をふくめたる詞なり○しつのを環は上の句のむかしに相應して一首をしたつる器財也別に義ある事にあらす

千五百番歌合に　通具卿

深草の里の月影さひしさもすみこし儘の野への秋風

深草の里の月を今來てみれは昔すみてみし時のまゝなるか野への秋風の淋しさも又其時のまゝなるよと也○里の月かけさひしさもとあるさひしさを下句の秋風はかりへかけて月のさひしといふにはあらすとあるはしひことなり月影の下にのもしをそへてみれは子細もなく聞ゆ　さひしさもといへるもゝしにて月の昔のまゝなるといふ意をきかせたるなり○その心はこゝに用なしことはもさはきこえす　月かけのさひしと云にはあらす三句は下へつゝけて心得へし○もの字は月かけと秋風とをかねたりいかてか下句はかりにかけてみるへき一首の意は深草の里の月影のさひしさも野への秋風のさひしさもむかし我住居せしおりのまゝそと也

五十首歌奉りし時杜間月　俊成卿女

大あらきの杜の木の間をもり兼て人頼め成秋夜の月

大あらきと云名を木の間のあらき心にとりて也○四の句は杜の名のあらきといふか木間の事のやうにて月のもるへきやうにおもはるゝか人たのめな

るなり

守覺法親王家五十首歌に　家隆朝臣

有明の月まつ宿の袖の上に人たのめなる宵のいな妻

○三四句は袖にいな妻のうつるか月のさし出てうつり來るやうにて人たのめなる也

攝政家百首歌合に　有家朝臣

風渡る淺茅か末の露にたにやとりも果ぬよひの稲妻

やとりはつるは露の消るまてやとる也○露のちるまてやとるなり消るといひては朝日にひる事のやうにきこゆ風にちる露はたまらぬ物なからもとかくすはかりのほとはあるを稲妻はその間もまたぬと也

水無瀨にて十首歌奉りし時　通光卿

武藏野やゆけ共秋の果そなきいか成風の末に吹らむ

ゆけともは行とも〳〵也秋のはてなきとは秋の旅の悲しさの盡せぬ意にてむさし野の果なき事をかねたり○秋のはてなしとはゆけとも〳〵草の花虫の聲にてはてなき也抑旅情は一首にあり一句にかくへからす　下句は猶行末もいかに悲しからんといふ意也

百首歌奉りし時月　慈圓大僧正

いつ迄か涙くもらて月はみし秋待えても秋そ戀しき

結句なみたにくもらてみし昔の秋そ戀しき也○むかしといふ事一首にみえす　又秋をまちえても涙にくもりて秋の月のやうにもみえぬ故に秋のさやかなる影のこひしきといへるやうにもきこゆ○此說いとよろし一首の意ははれたる月をみてもあはれとおもふ故いつまてなみたにくもらさずに月をみたることそ月は秋の物といふがその秋にはなりてもやはりさやかなる秋かこひしいと也

式子内親王

眺侘ぬ秋より外の宿もかな野にも山にも月や澄らん

本歌いつくにか世をはいとはむ心こそ野にも山にもまとふへらなれ初句は月をなかめわひたる也○なかむとは物おもひをして外の方をなかめいたす事さま〳〵の秋の哀になかめわひたる也　二三句は月をみれは秋のかなしさのますにつけてかやうに秋の月のすまぬ宿もかなとねかふ也○さま〳〵の秋の哀しらぬ宿もかなあれかしとねかふ也月も其中の一つにはあれとかく月にまつはれたる歌に

非す　下句しかれともいつくにのかれても秋ならぬ所はなくいつこにも〳〵月はすみてなかめわふるにてやあらんと也○一首の意は秋の物思にわひて秋にあらぬ宿かなあれかし行てすむへしとおもへど野にも山にも月のすまぬ所かあるまいからせんかたなしと也下句野にも山にもは世のうさに隠家もとむるには必嵯峨野芳野山なと野山とおもひ入る事なれはかゝり　月すむといふは秋の悲しくてなかめわふる意なるをたかひに詞を相てらして初句へ月すむといふ事をひゝかせ結句へなかめわふといふ事をひゝかせたる物也これ上手のしわさにて一つのたくみ也其心を得てみされはいたつきのかひなし○この時代の歌は雄偉流麗豪壯新奇に心をとめたりとおほしけれとゝひゝかせかうひゝかせに勞したる物にあらすすへて上下に物を置て照し合するは上下のはなれ〳〵にならぬ用意にて下手のしわさ也爲家卿天骨なくて構へえられたる工夫にて世上其遺風のみ多かり相構へてしいつるには氣槩の及はぬ事のみなり

題しらす　　從三位頼政

今宵たれすゝ吹風を身に占て芳野の嶽の月を見らん

月をみてあはれなるまゝに思ひやれる也四句おくといふへきをたけといへるおもしろしたけの月をみるは奥なる事おのつからきこゆ○月をみてわか物あはれなるまゝに山こもりしておこなふ法師のあはれにかなしかりぬへき事をおもひやれる也吉野の嶽といへは山臥の事ときこえ吉野の奥といへは隱者の事ときこゆ四句の注くた〳〵しくて尋常の理なりさて此卿は時代やゝあかりて當時の歌ともいひかたしみのゝ家つとたゝ二首いかて入られけん猶おほくあるはのせられす

和歌所のうた合に湖邊月　　家隆朝臣

にほの海や月の光の移へは波の花にも秋は見えけり

本歌草も木も色かはれともわたつ海の波の花にそ秋なかりける

百首歌奉りし時秋の歌　　慈圓大僧正

更ゆかは烟もあらし鹽かまのうらみな果そ秋夜の月

○一首の意はよひのほとは鹽かまの烟にて月にさはれともふけゆかはその煙もあるましけれはいつ迄もみむなと也

題しらす　　　俊成卿女
ことわりの秋にはあへぬ涙かな月の桂もかはる光に
本歌ちはやふる神のいかきに○はふくすの秋には
あへす紅葉しにけり　云々久かたの月の桂も○秋
は猶もみちすれはや照増るらし　云々ことわりの
秋は此二首の本歌のことくなることわりの秋也○
此二首の古歌は詞の例とせはさてもあるへきかそ
れはた秋にはあへすもかならすしも主ある詞とも
さためかたし月の桂は和漢にことふりたりいかて
かこれを出所とさためん詞の出所とさへなしかた
きをいかてかいたゝきにさゝけて此二首の本歌の
ことくに云々と説事をえむ古歌をとるは古歌の詞
をとる也さやうにむつかしき事古人にはなし　あ
へぬは堪ぬ也下句は秋の影の常とはかはりて殊
にさやかなる月をみるによりてといふ意をおもて
とせり○これを表として何をうらとしたるならん
心えす一首の意は月の桂の色も秋は常とはかはる
其ことわりのまゝに我泪も秋にはえこらへすして
色かはりしと也涙の色のかはるとは紅涙になりし
事也下句にかはる光にとあるを上句にことわりの
秋といひてむかへて涙の色のかはりし事をきかせ
たる也此集の比は打よみたるまゝに雄壮なるか多
かる中に又かくこまやかに巧なるもある也めてた
し詞もめてたしといはれたれと作者の主意は二三
の句にあるを錬瀬に見られていかゝ

家隆朝臣
なかめつゝおもふも淋し久方の月の宮この明方の空
月の都はいはゆる月宮殿の事にてそれをやかて月
みる此都の事にかねてよめり○此都をかねたる意
はなしたゝ月中の世界の事也　二句おもふは此都
にて月宮殿をおもひやる也結句も此都の淋しきに
つきてかの月宮殿の明かたの淋しさをもおもひや
ると也○月をなかむる人のさひしきにつけて月宮
殿の明かたの空の淋しく哀なるへきことをおもひ
やれる也此都といふ義にはあらす

五十首歌奉りし時月前草花　　摂政
故郷の本あらの小萩咲しよりよな〳〵庭の月そ移ふ
もとあらの小萩は古今集に露をおもみとある故に
露といはて露しけきことをおもはせて月そうつろ
ふとはよめる也○かくさまにとけはことわりあり

けにてよろしけにはあれと此比は縦横なる風にてしかたくみつくろひ立る事は氣象にあはすかつもとあらの小萩古今集をあるしとする事いとかたし大かた云々の心を本歌にもたせて云々とあることくなといひて本歌取の歌をとくは多くは誤なり露となくて月そうつろふとあるは玉梓の行かふ袖の類なから此歌なとは露となからんもなてふ事かあらん　此歌何のふしもなけれとふるき姿にて殊勝也○此歌古き姿とも新しき姿ともさためかたし三代集の比より此比までにいたりて時々みゆる一つのすかたなり　此殿の御歌此たくひ多し○此殿の御歌にかやうの姿いとまれ也殿にかきらす此比の歌仙の歌は變幻百出する故さし定めてはいひかたけれとなほ此殿はわなしき枝に春風そ吹尾上にかへるさをしかの聲なとやうの姿に長し給へりと正明はおもふ詩人のいはゆる雄偉なり今も歌よまむ人此雄偉なる姿をこひねかふへし　今もふるきふりよまんとならはこれらの歌にならふへき也○此集には種々の姿をそなへられたれは此御歌も入しなるへし集中にはおとりさまなるうた也正明は此殿の御歌を中にもめてたくおほゆる事なるを此御歌にならはんとはおもひもよらすかし

　建仁元年三月歌合に山家秋月

時しもあれ故郷人は音もせてみ山の月に秋風そふく

　時しもあれとは時社あらめ月を見て故郷人を戀しく思ふ折しもといふ心也○故郷人を戀しくおもふ折しもといふ事歌にみえす時しもあれといふ詞を説かねたる蛇足なり時しもあれといふ事は故郷人の音つれぬと秋風の音つるゝと打あひたれはいとよくはたらけり　一首の意山さとにて月を見て故郷人をおもふ折しも○時しもあれといふ詞は切なる勢なるに此注のやうにてはのと〳〵として意蕪す時しもあれとは俗に折も折によつた事といふ事にてかやうの時分にかやうの事かあつてなと二事三事打あひたる時いふ詞也　故郷人は音つれもせて秋風の音して○上の音もせては音つれもせぬ事也それに對して秋風そふくは音つるゝ事也たゝ秋風の木草をふく音のするのみにはあらすこれを等閑にみられたる故時しもあれを説誤られたり　いよ〳〵さひしさをそふと也○一首の意は故郷人か

來てくれそうな物なれと音もせてさひしい折も折とてみ山の月のすむかけに秋風か音つるゝそれて又淋しいと也　故郷人を戀しくおもふといふ事詞の外にそなはれり○故郷人は音もせてさひしいといふ事なれはその反(ウラ)にて來てくれゝはよいとまつこゝろは備るへし戀しくおもふといふ事の備はれりとは迂遠なる事也　其心を以てみされは時しもあれといふ事はたらかす○雲けにくもるを月はたらかすと難して此歌はめてたし詞めてたしとありさは此月はいかさまにはたらくならん題の山家も月も四句の外よしなきにあらすや

八月十五夜和歌所歌合に深山月

深からぬ外山の庵のね覺たに嘸な木間の月は淋しき

たにはすらの意なり○たにの下にかくの如く淋しきにといふ詞をそへてみるへししかすれはいとよくきこゆる歌なりされとかくいひては詞とゝのほらさる心地するは正明かまとひの深きにやあらん此集の此の歌縱横なるあまりに玉ほこの行かふ袖の如く少し無理なるやうなるも時風として疑ふ所なけれと詞を省きて餘韵にてきかするとても調はさる事はあるへくもあらす猶これにてとゝのひたらんを正明かいたり淺きにやあらん　さそなはかくの如くそといふ意也○しかそすむはかくの如くにてすむといふ義なれはさそなをかくの如く說へしかやうによみたる歌集中に露は袖に物おもふ比はさそなおくかならす秋のならひならねとゝあり

一首は外山の庵のね覺に木間の月をみて淋しきにつきて○下句は山の庵のことならは木間といはても有ぬへし上に深からぬといひて外山の庵の淺まにてをさ〳〵木陰のなき事をあらはし下句に木間と云て題の深山の意をよみ叶へ給へりかやうの所に作者の本意はある物也かろ〳〵看過すへからすゆめ〳〵　深山の月の淋しさをおしはかりたる也○一首の意物ふかくもあらぬ外山の庵の秋のね覺の悲しきにさそ深山の木間の月みたらはかなしかるへき事と也もし先生の說の如く下句を外山の庵の事としては結句淋しき物をといはては調はすされと深山月といふ題にかくよみては如何○三の句に詞の殘たるを見落して下句を外山の事とおもはれたる一說也　さそなをおしはかりたる詞と

して下を深山の事ともすへけれとも○此こゝろ一說也　さては上句よりのつゝきにかなはす○三句の下にいひ殘したる詞ありとすへし

月前松風　　寂蓮

月の猶もらぬ木間も住吉の松をつくして秋風そふく

月の影はもらぬ松のこのまゝても悉く殘さす秋風は吹わたると也松をつくして面白し○詞の風流なる也すへて歌は詞の風流ならん事をねかふへきわさ也

長明

眺むれはちゝに物思ふ月に又我身ひとつの峰の松風

本歌なかむれはちゝに物こそ悲しけれ云々初二句は本歌の意にて月は我身ひとつの月にあらす世中おしなへててる月なるすらちゝに物悲しきにそのうへ又也○いたくもたかはねと迂遠也本歌はたゝちゝに物こそと我身ひとつのとをとれるはかりなり　下句は山のおくに住ものは我ひとりなれは此峰の松風は我身ひとつの秋の悲しさそと也○一首の意は世上おしなへててる月なれとも月をみれは千々に物かなしくそのうへに又世上の人にはなき峰の松風か吹ていよ／＼かなしと也世上おしなへてゝる月なれともといふ事は下句の我身ひとつといふより出來る意也

山月　　秀能

足引の山路の苔の露の上にね覺夜ふかき月をみる哉

旅寐の歌也ね覺夜深きといへるにとけてねられぬ意をあらはせり

八月十五夜和歌所歌合に海邊秋月　　宮内卿

心あるをしまの蜑の袂哉月やとれとはぬれぬ物から

月やとれとてぬれたる袂にはあらされとも月のやとりたれはおのつから心あるさまにみゆと也○月かけにやとれとてぬれたるにはあらねと月影かやとりて心あるやうな海人のたもとそと也

宜秋門院丹後

忘れしな難波の秋のよはの空こと浦に澄月はみる共

三句夜はの月といふ意なるを月は下句にある故に詞をかへて下なる月をこゝへもひゝかせたる也○空はけしきといふ事それやかて月の事也されと空といふもしは月をいふもしのかへもし也とさため

らるゝかせはき心地してかく　上下の句の間へ今より後といふ事を加へて心うへし〇一首の意は此後いつくの浦にすむ月をみるとても今宵難波の浦の秋のよはのあはれなりしけしきはえわすれしと也

長明

松島や汐くむ海人の秋の袖月は物思ふ習ひのみかは

月の袖にやとるは物おもふ人のならひのみかとおもへはそれのみならす鹽くむ蜑の袖にもやとれりと也

題しらす　七條院大納言

言とはむ野島か崎の蜑衣波と月とにいかゝしをるゝ

〇波にしをれたる袖に月かうつる故月にもしをるゝなり

和歌所歌合に海邊月　家隆朝臣

秋の夜の月やをしまの天の原明かたちかき沖の釣舟

明かた近きほとに沖につり船のみゆるはをしまの蜑の月ををしむとてこき出たるにやと也〇說えられたり　二三句いひかけの重なりたるはすこしうるさし〇いひかけの重なりたるはけにうるさき物なりされと此二三句は世にめつらかなるつゝきなれは當時にもめてたくおもひ撰集にも入し也今もかくめつらかに出來たらんには憚なくよむへき也

題しらす　慈圓大僧正

憂身には眺むるかひもなかりけり心に曇る秋夜の月

〇うき身には心のはれせぬ故秋の夜の月まてかはれせてなかむるかひもなしとなり

通光卿

立田山よはに嵐のまつふけは雲にはうとき嶺の月影

三句まつは先也松とかける本はひかことそ〇三句は松なりさらては上句ちからなし又先といふもしあまりたりしかるを先とゝかるゝは物數の多くなるをきらひて也世上にもよく此難をいふ人あるもの也それは爲兼卿の風をにくみて爲世卿の方人のいひし遺言也大かたにも此論はわろしまして此歌はまづといひては骨なき物をや　此歌立田山似つかはしからさるやうなれとも〇松もあり月もあらん山ならはいつくの山なりとも何の似つかはしからぬ事かあらんたゝよりくるにしたかひて立田山とよみ給へる也別の子細なし　しからす此峰の月

入かたの月なるを立田山は西の方なれはよせあり○此歌必しも入かたの月とも定かたしたゝ月の歌也しかれは東西南北の論もこゝには不用なり　そのうへ萬葉九長歌に白雲の立田のやまの瀧のうへのをくらの嶺に云々とあるによりて白雲の立田の山とあれとも雲にはうときといへる也○嶺といひ雲といはん事はいつれの山なりとも常なるを一々證文を待へきかは萬葉集によりてとかるゝはいと〳〵迂遠なり　一首の意は秋の月をみるに曉の雲にあへるが如しと古今序にもいへることし○さきには萬葉の歌をより所としこゝには古今の序をより所とせらる依據さたまりなきはいかゝ　入かたの月にはよく雲のかゝる物なれとも○以上不用也是より末にて歌をとくに事たれりすべて古歌古語も引かすして解へくは引かぬそよきむつかしくとけは歌の心も滞り初學も心得かぬるもの也　いまだかたぶかさるさきに夜半に先あらしの吹拂へる故に○ふけはゝ今現在に吹也此註の心ならは夜半にあらしの吹にしかはなとやうに必過去にて有へき也　雲にはうとしと也○一首の意は立田山の松をよはにあらしかふけは雲はきえ松はあらはれて雲は月にうとく松は月に親しと也松のしたしきよしは雲にはのはもしより出る餘韵也

般富門院大輔

なかめつゝ思ふにぬるゝ袂哉幾よかはみむ秋の月

○おもふにとは身の老ぬる事をなけく也幾夜かはみんは行末いく世かはみん也

式子内親王

宵のまにさてもねぬへき月ならは山端ちかき物はおもはし

二三句は其むきにして見捨てねらるゝほとの月ならはといふ意なり下句は山端近くかたふきて惜き物思ひはせしと也さるはあまりさやかなる月にて宵のまにえ見すてゝねさりし故に今かく山端近くなりて惜き物思ひをする事よとふくめたり

更る迄眺むれはこそ悲しけれ思ひもいれし秋夜の月

おもひいるといふことをはしめへもひゝかせて心うへし○なかむるといふ詞の本義にて物おもひしつゝ見出す事也　おもひいれてふくるまてなかむれはこそ悲しけれといふ意なり○思ひ入といふこ

とを上へめくらしてきくはわろしなかむるといふ詞をたゝ打みる事とみられたる故たかへり一首の心は秋の月をふくるまて物おもひをしなからみれは月影まてか悲しきほとに月にもさのみおもひ入すしてよひのまになかめすてゝねるかよいとなり

五十首歌奉りし時　　摂政

雲はみなはらひ果たる秋風を松に殘して月をみる哉

さわるへき雲をは殘さすして○この説のことしさやけさをそふる風を殘し置てみる也○かくのことくみるときは松といふもし不用也又くもりもせんかとの用意に風を殘し置意にはあらす秋風の雲をはらひたるは月のすみ行へき料也畢竟秋風の雲をはらひて月のすみたるにその風を松に殘して松風をきゝて心をすましつゝ晴たる夜の月をみる事と也

家の月五十首に

月たにも慰めかたき秋夜のこゝろもしらぬ松の風哉

月たにもなくさめかたきとは秋の夜は月をみるによりてかなしさをもよほしてなくさめかたきそれたにあるうへに猶又の意なり○此説のことし一首の意は月かけのかなしさはかりにてもなくさめかたき秋の夜なるにあまり無情に松風か吹て人をかなしむると也

定家朝臣

さ筵や待夜の秋の風ふけて月をかたしくうちの橋本

姫歌さ筵に衣かたしき○こよひもや我を待らむうちの橋姫　云々此歌もおもひやりたるさまなれはらんなといふ詞なくてはいかゝ○初句のやもしを葛城や高まの山なといふやもしにみられたる故此難ありやはにやの意五月雨にはをさみたれはとよめる類此比多みゆさむしろにや月をかたしくととちめたる歌なれはらんの字を待すしていとよくとゝのひたり　又月のあへしらひの詞もあらまほし○例なからかたはらいたき事なり秋の夜の月ととまりたる歌の初句なとにゆくりもなく影みれはなとやうに打出たるは身の毛たちてふさはしからぬ物なるをさはかりの英雄のこのすちにのみまつはれたる所論はなにことそや　又さむしろやとうち出たるもいせの海や難波江やなといへるとはやうかはりてよろしくもきこえす○にやのやなる事を

しらて誤解しての論なれは更にいはす　或人の云さむしろにまつ夜の月をかたしきて更ゆく影やうちの橋姫なとそあらまし○この人は二三句詞めてたしと先生の執せられたる句を除却してふけゆくかけやうちの橋姫と秀句になほしたることのさまよ

五十首歌奉りけるに野徑月　　攝政

行末は空もひとつの武藏野に草の原より出る月影

上句行末は山なき故に空と野とつゝきてみゆる也○かくのことし　さて京にては月は山より出て山にいるをのみ見なれたれは草の原より出る月はいとめつらしき也○下句は心ほそきさま也めつらしき趣意にあらす

雨後月　　宮内卿

月を猶まつらん物か村雨の晴ゆく雲の末のさと人

二句まちやすらんの意なりさて村雨のはれ行といふ所にこゝにてははや月をみる意備れり○一首の意村雨かこなたよりあなたへ次第にはれて行その行さきの里人は月をまたまちてやあらんとなり

題しらす　　通具卿

秋の夜は宿かる月も露なから袖に吹こす荻のうは風

三四の句は月をみるに荻に風のふけはいよ／＼哀をそへて忽袖に涙のこほるゝ其涙にも同じく月のやとるを荻のうへより露とゝもに吹こしたるやうにいひなせる也實に荻の露を袖に吹こしたるにはあらす

源家長

秋の月しのに宿かる影たけてを笹か原に露更にけり

しのにはしけくにてさゝの篠を兼たり影たけてと露ふけにけりと重なりてくた／＼し○此難はとかめえられたり一首はめてたけれとたけてといふ詞此歌のきすなり

元久元年八月十五夜和歌所にて田家見月

前太政大臣

風渡る山田の庵をもる月やほなみに結ふ氷なるらん

○風わたるは下に氷といはん料なるへし山田の庵をもる月がほなみに氷のむすふやうにみゆるやらんとなり

和歌所歌合に田家月　　慈圓大僧正

雁のくるふしみのをたに夢さめてねぬよの庵に月を

みる哉
二句四句にもし重なりていかゝをたに夢さめてもいかゝ○一首に金石の響あり同してにをはの折あふをきらふは調のあしからん事を恐るゝ也忌らへたによろしくは同してにをは三四かさなりたらんも何事かあらんこれらの歌を例としててにをはの折あふ歌も忌らへたによろしくは今もよむへきなりかきりをたてゝ偏く論するは今時一般の風なからゆゑなき僻案に泥むのみにて不自在なりをたに夢さめては小田にゐて夢のさめしなれはいかゝなる事もなし其うへ此歌は下句にねぬ夜の庵とある庵をこゝへもひゝかせて小田の庵にて夢のさめたる事なれは何のいかゝなる事かあらんさて此歌雁のくる聲にはしめて夢のさめたる趣なれはねぬ夜といひかたしいかゝされとこれは猶おもふにねぬ夜とは通夜ねぬ事にはあらす雁の聲に夢さめて後其殘の夜を眠らすして月をみたる事なるへし

俊成卿女

稲葉吹風に任せてすむ庵は月そ誠にもりあかしける

稲葉は風のたえまなく吹渡る故にそれにまかせ置てもる人は夜もねふりなとしておこたりかちなれはもるといふ名のみなるをまことにおこたりなくもりあかすものは月にこそあれといへる也月のすきまをもるを守ることにかねていふは常也○此説のことくならは風にまかせて守らせしを風はもらすして月かもるといふ義にやいと物遠し此次に又一説あれとそれは自も難せられたる如くわろけれは引かす此歌はいと難義なるをあなかちに一説をたてゝいはゝ三句を第一にめくらしてみるへし風にまかせては風によつてといふ事さては月のはるゝ趣意はこもりたるへしまかせてをおもくみるへからす一首の意は山田の庵は稲葉ふく風の故に月かはれて賤男はねふりなとしておこたるひまも月かもりあかすとなり

題しらす

あくかれてねぬ夜の塵の積る迄月に掃はぬ床のさ莚

月には月故になり○一首の意月にあくかれてよへもこよひもねぬ故床の狭莚に塵がつもるまても拂はすねる用意はせぬとなり

百首歌奉りし秋の歌　　式子内親王

秋の色は籬に疎くなりゆけと手枕なるゝねやの月影
上句は籬なる千種の花の過行をみ下句は次第に月のさやかなる比になりて手枕になるゝ也さて千種の花も月も秋の物なるか其秋の色は色にうとくなれとも手枕にはなるゝといふ趣なりうとくなると馴るとをたゝかはせたり

秋の御歌の中に　太上天皇御製

秋の露や袂にいたく結ふらん長き夜あかす宿る月哉
長き夜あかすは終夜たゆますあくるまて也

千五百番歌合に　通光卿

更に又暮を頼めと明にけり月はつれなき秋のよの空
今夜はあけぬともさらに又暮るをたのみて月をはみよとて夜のあくるとなり月はいまたいらす殘れるに夜のあくるかをしき時におもへるさま也

經房卿家の歌合に曉月　二條院讃岐

大かたの秋のね覺の露けくは又たか袖にあり明の月
大かたのはなへての世の人のといふ意なり露けくはゝ我ことく袖の露けくは也又といへるにて我袖に月のやとれる事を忘らせたりすへてかくさまにこゝをいひてかしこを忘らせかしこをいひてこゝを忘らする歌のはたらきなる○一首の意は世上一統に秋のね覺に露けき物ならは有明の月は我外に又誰そてにやとりてある事やらんとなりね覺に有明の月はいはゆるかけあひなり

五十首歌奉りし時　雅經

拂ひ兼さこそは露の繁からめ宿るか月の袖の狹さに
○二三句のてにをは普通にては心えにくきやうなれとも例多し言葉の玉の緒にあけたり此歌にてはいかに露のしけゝれはとてといふ意也○二三句は此說のことく初句は物おもふ故袖におく露をはらへとも〳〵又置てはらひわひたる也結句の述懷に相應してみるへし○四句月の宿るかといふ事を詞を下上にせるにてこよなく勢ひ有てめてたし○下句袖のせまきに月のやとるかといふ事を三段に打かへしたる也四句のみにあらす○結句せはき袖なるにといふ意にてにもし重し○五句を五句としていひ殘したるやうにみられたる故にもしを重しといはるれと此歌は袖のせはきに月のやとるかといふつゝきなれは別におもき事はなしかやうのつゝけさまはいはゝや物をとふ人はなしとあるたくひ此

集の比まゝある句法也五句袖のせはきにとは身の數ならぬ意にて述懐の義也さてはらへとも又置露は述懐の涙也此句をたゝ何となく袖に月の宿るとみてはせはきといふもし其詮なしよき歌にはかやうなる奥あるもの也疎漏に看過すへからす　一首の意ははらひかねていかに露のしけゝれはとてもあまりなる事よさても〳〵やとりける哉月影の此袖のかくせはきにとなり○一首の意ははらへとも〳〵又置故てはあるかいかに露かひまかないとてせはき袖にやとりし事と也官位もすゝますゆたかなる袂にもあらて物をおもひて涙をおとす事は下のこゝろ也

# 尾張廼家苞二之下

## 新古今集

秋歌下

和歌所にてをのこども歌よみ侍しに夕鹿

家隆朝臣

下もみち且ちる山の夕しくれぬれてや獨鹿の鳴らむ

ひとりとは妻をこひて鳴意にていへるかいさゝか心ゆかすされと此詞にて殊に哀に聞ゆ○獨といふ詞いとめてたしこれは鹿の片戀にて妻にあはてなく意也相おもひならはひとりにあらすあはぬ故ひとり也いと心ゆきたる詞ならすやさて此歌下もみちかつちる山の夕しくれは折からの哀なる事をいひつくしぬれてやひとりはわひしさの重疊したるさまをいひつくしたりすへて歌はことはには露歌ならて下に哀みゆるかめてたき也

百首歌奉りし時　入道左大臣

山風に鹿の音高くきこゆ也尾上の月にさよや更ぬる

○一首の趣あはれにめてたし唐詩に猛虎一聲山月高とあるにいとようおほえたり

寂　蓮

野分せしをの丶草臥荒果てみ山に深きさをしかの聲

○一首の意鹿が草臥するをのは野分にあれはてたれはふしどがなさに山ふかく鹿の聲かきこゆとなり

百首歌奉りし時秋の歌　惟明親王

み山への松の梢を渡るなりあらしに宿すさを鹿の聲

嵐の松の梢をわたる故に其嵐にたくひたる鹿の聲も松の梢をわたる也

晩聞鹿といふことを　土御門内大臣

我ならぬ人もあはれやまさる覽鹿なく山の秋の夕暮

○鹿なく山の秋の夕くれの哀はわれのみならす誰にてもまさる事やらんとなり

百首歌よみ侍けるに　攝政

たかへ來る松の嵐やたゆむ覽尾上に歸るさを鹿の聲

○一首の意は尾上より鹿の聲か松のあらしにつれてきこゆるを其聲は漸遠さかりてをのへにかへるやうなるは松のあらしか吹たゆみたるかと也

千五百番歌合に　慈圓大僧正

鳴鹿の聲にめさめて忍ふ哉見はてぬ夢の秋の思ひを

二句いうならす○是はかりは常也されと今時歌よまんには一句のくたけぬ樣には心かくへし四句にはさゝ也　秋のおもひをしのふといふ事いかにいへるにか心えす○秋のおもひとは秋の哀なる情也しのふとはしたふ也一首の意秋のあはれなるこゝろはへを夢に見て鹿の聲にてさめていと丶あはれなるゆゑみはてさりし夢の末のさそあはれならんとおもひて戀したふとなり

題しらす　西　行

小山田の庵近く鳴鹿の音に驚かされておとろかす哉

おとろかされてはめのさむるをいふおとろかすは引板なとならして鹿をおとろかす也○かくの如し下句いと〳〵めつらかなる姿也此上人は堅固の世捨人にて時にへつらふ事なかりしかは眞率なる歌のみ多かるを時運によれる物にやあらんか丶るめつらかなる事も出こし也

攝政家百首歌合に　慈圓大僧正

わきてなと庵もる袖のしをほるらん稲葉にかきる秋の風かは

○秋風の稲葉をわたる音のかなしさに庵もる人の

涙を落して袂をぬらすが秋風は何の木草にも吹て
いなはに限る物にあらさるを何とて庵もる人の袖
を取わきてぬらすらんと也さて稲葉ふく音の取わ
きてかなしき趣は言外にあり

百首歌奉し時　　寂　蓮

物思ふ袖より露やならひけむ秋風ふけは堪ぬ物とは

秋風のふけはえたへすこほるゝ物とは物おもふ人
の袖の涙より露もならひやしけむと也○一首の意
物おもふ人は秋風かふけは袖に涙かこほるゝそれ
にならひてなへての露も秋風にえたへすしてこほ
るゝ事やらんと也

秋の御歌の中に　　太上天皇御製

露は袖に物思ふ頃はさそなおく必秋の習ひならねと

○さそなはかくの如ゝ也かくさまに用し例は都の
たつみしかそすむはかくの如くすむといふ事なれ
は一途也一首の意露はさと秋のならひといふはか
りてもなくものをおもへはかくのことくおくもの
そとなり

野原より露のゆかりを尋來て我衣手に秋かせそ吹

露のゆかりは涙也○露のゆかりの泪を尋ね來てな
り一首の意は野原ては露さへあれは秋風かふくか
我袖には泪の露かおく其露を縁として秋風かふく
となり

題しらす　　西　行

蟋蟀夜寒に秋のなるまゝによわるか聲の遠さかり行

物の聲は高きは近きやうに聞えよわきは遠きやう
に聞ゆる物なる故によるよる次第に聲の遠くなる
はよわるかと也○聲のほそるを遠さかるとはいへ
るなり一義聲の遠さかるとは初のほとはよひより
曉まてねをつくしたるか此ころはやうやうたえま
をおくとなり

守覺法親王家五十首歌に　　家隆朝臣

虫の音も長き夜あかぬ故郷に猶思ひそふ松かせそ吹

長き夜あかぬ上に出たり○終夜たゆます明るまて
なりと上に有　桐壺巻に鈴虫の○聲のかきりをつ
くしても永き夜あかすふる涙哉　云々○永き夜あ
かすといふ詞のあれはとて桐壺巻に云々よりたる
事にあらす蛇足なり源氏物語の注には古抄に引し
本歌を多く削られたるに此注には物遠きも引つけ
られたるはいかなる故ならん一首の意は虫の音は

かりても終夜物おもひ盡せぬ故郷にていよ〳〵松風か物おもひをそふと也

百首歌の中に　　　式子内親王

跡もなき庭の淺ちにむすほゝれ露の底なる松虫の聲

三の句むすほゝれてとてもしなくてたゝよはしき心地す○てにをはを省きてそれときかする事は常なる中に五月雨にはをさみたれはといひさむしろにやをさ筵やといへるたくひは少し物遠しともいふへきをてもしはことに子細なき事也花の木陰に行くれてといひ花の木陰に行くらしといふてもしの有無は同じからねゝ萬にことなる所なければはてもしのかろき事をしるへしさるてもしにしも難をかまへられたるはいかゝ　されとしかいひてはいよ〳〵あし○しかいひてとはいかさまにいふ事そもしをあましてむすほゝれてといはんとにやさる歌やはあるへき　松虫を人まつ心にとりて跡もなきといふは人のこぬよしむすほられもおもひ結ほゝるゝよし露のそこなるも涙の心あるへし○以上かくの如し一首の意は人は來す庭の淺ちに跡もなき故おもひむすほゝれてゐなからもやはり人を待といふ松虫はなみたを盡してなくと也三ノ句の下になからといふ詞をそへてみるへし

題しらす　　慈圓大僧正

衣うつ音は枕にすか原やふしみの夢を幾夜のこしつ

音はのはもし枕にといふへあてゝ心得へし○しかつゝきたる詞なれは誰もあてゝ心うへき事勿論なるを何故取わきて注せられけん　夢を殘すは見はてぬを云○かくの如し臥見にふしてみるといふ心をそへて秀句なれは音は枕にすか原やと重れり秀句の重疊するはいやしけなる物なるをこれはいというにやさし

千五百番歌合に　　公經卿

衣うつみ山の庵のしは〳〵もしらぬ夢路に結ふ手枕

しらぬ夢路とは初の夢は牟にさめて又むすふには其初の夢の末はみす異事をみて夢のかはるを云さて此歌庵はよそにて衣うつ音をきく庵なるに衣うつみ山の庵とつゝきたれは此庵にて衣うつやうに聞えていかゝ○二句切出ては萬一さる難もあるへきかなれと一首のうへにてはよそにてうつ衣なる事しるけれは此難はなしをしかなくみ山のいほと

いはゝをしかのなく聲のきこゆるみ山の庵といふ事なるへしさらはこゝも衣うつ音の聞ゆるみ山のいほといふ事なるに相違あるへからす　其うへきぬたの音の聞えむは里こそ似つかはしけれ○庵はみ山なれと山里ふもとの里外山の里柴人きこりか宿にてうつ砧の聞え來む事子細有へからす　み山の庵はよしなきを柴といひかけん料にしひてみ山の庵といへるもいかゝ○み山の庵によしある事上にいへるか如し一首の意はよそて衣をうつ故み山の庵ても又も〳〵めかさめて手枕にむすふ夢路かとりかへ〳〵みしらぬ所計そと也

和歌所歌合に月下擣衣　　　攝政

里は荒て月やあらぬと恨てもたれ淺ちふに衣打らむ

二句はかの春やむかしの春ならぬ云々の歌の意にて昔をしのふよしなり○二句は伊勢物語の歌の詞をとれり一句の意は月はむかしの月にあらぬやをはり昔の月なるにといふ義也　三句てもは常のてもとは意異にしてもは輕くそへたる詞にて只うらみてといふ事也○かもはかとうたかひてもはかろくそへたるもしなる例也此てもはいとまきらはしき所なるをいとよくとられたり　此格のもゝし例ある事なり一首の意は里はあれて淺ちふになりたる宿に月夜にきぬたの音のするをきゝて○此歌衣うつ人の宿は淺ちふの宿也とさたかにしりてよめる意にはあらす衣うつ音のあはれにかなしきは淺ちふにうつもれて里はあれぬ月やあらぬとおもひつゝ衣うつならんと推量したる心なれは此注みなあたらすおもひまかふへからす　誰ならんさそ月やあらぬ云々と恨みてそうつらんと哀におもへる也○一首の意はあの衣うつは誰かはしらぬかこよひみる月はやはり昔のやうな月なるに里はあれたりと世をうらみて淺ちふの中に埋れて衣をうつならんと也

宮内卿

まとろまて詠めよとてのすさみ哉鹿のさ衣月に打聲

すさみとは何わさにまれたしかにうるはしく物するにはあらてたゝわさとなくはかなくするしわさにて俗になくさみことにするといふ意なり○すさみとはわさをする事さしすゝみてわさをするもすさみ也はかなく物するもすさみ也こゝはさしす

ゝみてわさする也　一首の意は月夜に衣うつ音をきゝてねられぬまゝによめる意にてかやうにさやかなる月夜に衣うつことはたゝきく人にまとろまて月をなかめよとての○なかむとは物おもひをして空をなかむる事ひとへに月にかくへからす　すさみわさ○たゝわさとあるへし　にこそあれといひなせる也○一首の意目もあはせすに物おもひをして空をなかめよとて身にいれてするわさかしらね此月夜にあの衣うつ聲はと也

千五百番歌合に　　　定家朝臣

秋とたに忘れむと思ふ月影をさもあやにくに打衣哉

初句たには俗になりともと云意三句のをはなる物をの意四句さもは俗にさてもといふ意あやにくにはいちわろくといふ意なり○以上此說のことし一首の意は月のさやかなるすらに秋の悲しさの堪かたきにつきておもへる意にてせめて秋そといふ事を忘れなりともせはやとおもふ程悲しき月影なる物を○大かたはよろしけれと秋とたに忘れんといふ事解しかたき詞なるにかくはかりにては取とめたる所なし今少したしかにわかるゝやうに說るへきなり　さてもいちわろく衣うつ音の聞えて秋といふ事の忘られもせぬ事よと也○一首の意春夏秋冬いつとなく月は哀なる物なれと秋はことに哀にかなしくて心にせまるやうなれはせめては秋といふ事をわすれて他時の月の心にてなかめはやと思ふにさても〱いちわろく衣をうちてそれて秋といふ事が忘かたいと也

擣衣　　　雅經

みよしのゝ山の秋風さよ更て故鄕さむく衣うつなり

いとめてたし上句詞めてたし○上句としも限られたるはいかに終句衣うつ也とかへたるにて本歌の故鄕の寒くなり增る心さへそひていと〱めてたき物をや　古き姿にて○此うたを古きすかたとはいかにいはるゝならん山の秋風さよ更てといひ故鄕寒く衣うつ也といひたるが詞つゝかさるか如くにて餘韻にてたしかにつゝきたるは此時代の風の第一義也古歌のとりさまも正明か常いふことく詞はかりを取たる物にて所もかへす二三句まて取て心は淸く別事にて相あつからす　古今の山の白雪つもるらしよりはまされり○これはまことにさも

やあらん

式子内親王

ちたひうつ砧の音に夢覺て物思ふ袖の露そくたくる

うつといふからくたくるといへりちたひうつとは
かの千聲萬聲無止時といふからうたにより玉へる
なるへし○袖の露のくたくるとは數のそふ事なる
へし

百首歌奉し時

ふけにけり山端ちかく月さえて十市の里に衣うつ聲

○一首の意は月は山端ちかくさえわたりて十市の
里にて衣うつ聲のきこゆるはさては夜かいかうふ
けたそうなと也今俗に月のはるゝをさゆると云此
御歌其義にちかし

定家朝臣

ひとりぬる山鳥の尾のしたりをに霜置迷ふ床の月影

此歌二三句は長き夜にといふ心なるを本歌により
てたゝ山鳥の尾の云々といひて然きかせたるはあ
まり巧過てことわり聞えかたし○本歌取のうたを
むつかしくみらるゝくせにてかゝる誤解ありもし
此說のことくなかき夜にひとりねて床に霜のおく
かわひしとならは戀のうた也戀部に入へし　した
り尾にといひては山鳥の尾に霜のおきたるをよめ
るになりて床も山鳥の床とこそきこゆれ○山鳥の
尾に霜の置たる也床も山鳥の床也戀の心なから山
鳥のうへの事なり　又床をしひて我床とする時は
我床のあたりに山鳥のひとりねたるを置たるか其
尾に霜のおけるやうに聞えていよ〳〵いかゝ○し
ひて床を我床とみすともよろしかるへし　霜置ま
よふとは床に月影のうつれるか霜の置たるやうに
みえまかひてさえたるを云○まよふは霜のおひた
ゝしく置る事迷惑の義にあらす一首の意ひとりぬ
る山鳥かそのしたり尾に霜のおひたゝしく置とみ
ゆる床の月影がさえわたりたるにこの永き夜にひ
とりねをしてさそわひしからんとなり

攝政大將に侍ける時月歌五十首よませ侍けるに

寂蓮

人目みし野への景色はうら枯て露の寄かに宿る月哉

花の盛には人目をも見し野への今はうら枯て○三
句のうら枯人めへもひゝけり　唯其ころのまゝな
る露のよすかに月のみそ今は宿れると也○よすか

は因縁也露を縁として月の宿る也

五十首歌奉し時

村雨の露もまたひぬ槇の葉に霧たちのほる秋の夕暮

村雨は晴たるかその露もいまたひぬまに又霧の立のほりてはれ〳〵しからぬ山中のさま也

秋の御歌とて　太上天皇御製

淋しさはみ山の秋の朝くもり霧にしをるゝ槇の下露

此御初句は云々槇の下露のさひしさと終に置と同し心にて一つの格也○御初句は枕草子にめてたき物すさましき物なといへるか如き標題にて二三の御句よりさひしき姿をいひつくさんとの御結構なりさるほとにさひしき趣心にしみていと〳〵めてたし　此格を心えぬ人はうたかふ事也○さひしき景氣をいはんとて先さひしさはといふはいとよく心えらるへきに

河霧　通光卿

明ほのや河せの波のたかせ舟くたすか人の袖の秋霧

二三の句は舟をくたせは舳にあたる波の音の高きをいふ○なみの高きとかゝりたる也音にはあらす人の袖の秋霧とは○此二句正明は解えす或抄にいへる如く人の袖か秋霧にかくれてみえぬはといふ事なるへきかさるにては詞のうへあまり奇にていひたらす猶こと心あるへきかことしもし霧を袖にみなしたるにはあらしか雲霞ならは一定其義なれと霧を衣とも袖ともいひし例ふともおほえすもしさもいふへくは一首の意明ほのに河瀬の浪の高いに高瀬舟を下す人かもしは秋霧か人の袖のやうにみゆるのかといふ義にてきこゆる也　經信卿母の歌に明ぬるか河瀬の霧のたえ〳〵に遠方人の袖のみゆるはとあるをとりて○明の字川瀬霧人袖と云もしはあれとかく物遠き歌をとりたりとも思はれす　花やかによみなせる也されは此句は袖のたえ〳〵にみゆる心なるを其詞をは本歌に讓りて○詞を本歌にゆつるは山鳥の尾のしたりをのに永き夜といふ事をゆつりたりとある如く聞えす逆の義也　人の袖のといふ詞にて本歌をおもはせたる物也然るを或抄に袖は霧にかくれてあるといふ事也と註せるはいとをさなし○をさなきかはしらねと順にておたやかなり　一首の意は波の音高く聞え又霧に人の袖のたえ〳〵みゆるにつきて○袖の秋

霧といふ句を霧はやゝはれて人のそてのみゆると説るゝは畢竟しひこと也　高瀬舟を下すにやとおもへるさま也○人の袖をたしかにみて高瀬舟は下すかと疑かはん事あるへくもなし

題しらす　　西行

横雲の風に別るゝしのゝめに山とひこゆる初雁の聲

○一二句は風かふけは横雲のみねにわかるゝなるを文章にかくいへるなり

白雲をつはさにかけて行雁の門田のおもの友慕ふ也

○上の句は歸雁の景狀下句は歸雁の情致にてすゝて春雁の歌なるをこゝに入れるは撰集のあやまり歟

五十首歌奉し時月前聞雁　　慈圓大僧正

大江山かたふく月の影さえて鳥羽田の面に落る雁金

○さえてははれてといふ事此集の頃よりまゝみゆ俗語にはしかのみいふ也鳥羽田は名寄には山城也さては初句とかけあはす丹波にもさる地名ありてそかくはよませ給ひけん都ちかきわたりの事なれはまかへてよみ給ふことはあらし

題しらす　　俊成卿女

吹迷ふ雲ゐを渡る初雁のつはさにならすよもの秋風

吹まよふとよものと相照したり○まよふといふ詞上にもいへることくおひたゝしく物する事霜置まよふは霜のおひたゝしく置事風吹まよひは風のおひたゝしくふく事にて迷惑交加の義にあらすよもの秋風は處々の秋風といふほとの事所をひろくさして云東西南北の義にあらすこゝに相照したりといはるゝも上下並に義を失ひてうへの事也　首の意は處々の秋風かおひたゝしくふけは其雲ゐを初雁はわたりて風を翅に令レ馴となり

詩にあはせし歌の中に山路秋行　　家隆朝臣

秋風の袖に吹まく嶺の雲をつはさにかけて雁も鳴也

○上二句は山中をゆく時のさま也○かくの如し　三句もしあまり聞くるし○これはことに耳にたゝぬをかくいはるゝはあいうおのもしなき故なるへしさる事萬葉集よりあり　下句は雁も翅にかけて鳴也と心うへし○人の袖に吹まく雲を雁もつはさにかけてと上下相應したり雁の翅は人の袖のやうなる物故にていとこまやかなり　さて雁も鳴といへるにて我わひしきほとをあらはせり○もの字此義にあ

らす秋風かみねの雲をわか袖に吹まくその雲を雁もつはさにかけてなくといふ義のもの也雁かみつからつはさにかくるやうにも聞ゆる詞なれと秋風か雁のつはさにまて吹かくる意となりていとよくとゝのひたりなくはたゝなく也啼泣號哭の義にあらすされと秋風か嶺の雲を袖に吹まく上に雁さへ啼て我わひしき事は限なき也

五十首歌奉し時菊籬月　宮内卿

霜をまつ籬の菊の宵のまにおき迷ふ色は山のはの月

菊は一さかり過て霜のおけは又一さかりうつろひさかりとてある故に霜をまつとはいふ也○まつとは今や〳〵とまつ義にあらすもとあらの小萩露をおもみ風をまつことは風のふかはたゞちにちらんとまて置たる義こゝは霜のをかはたゝちにうつろはむとまて咲たる意まつといふ詞に此義多し心得おくへしかやうなるを詞の典雅風流也と云　よひの間といふも霜をまつによしあり○朝霜夕霜といへとよひ霜といふ事なけれはよしありともきこえすあなかちなる照應なりよひのまとは此霜にまかふ月は七日八日はかりの月也よひのまといひ山端の月といへるにてしるき也　山端といふもよひのまによしあり○そのよしをいかにと説るへき也打まかせては山端の月は落月にて曉によしありそれを山端よひのまによしありとはかりにては其よししりかたし居待立待なとの比は宵のまに山端いつれは其義とせんかされと出るとも昇るともいはては猶落月なり　すへて歌はかくの如くいつれの詞もたかひによしあるやうによみとゝのへたるかよき也○一わたりはさる事なれとあなかちにこれに拘る時は秀句を好み緣の詞にまつはれなとして氣概ある歌はいてこぬ物也　おきまよふ色とは霜の置たる色にまかふを云○まよふとは霜のおひたゝしく置たる事まかふと一つにおもふへからす一首落月の霜にまかふ趣にはあれとまかふといふ詞はなし一首の意は霜か置たらはうつろひもすへしとまて咲みちたる菊に宵のほと霜かおひたゝしく置たとみゆるは霜てはなく八日計の月の山端にかゝりてすみわたりたる光なりと也

千五百番歌合に　慈圓大僧正

秋をへて哀も露も深草の里とふものはうつら也けり

下句うつらならては音つるゝ人もなき意也○秋をへては七月より八月九月とやう〳〵うつり行事しか秋のうつり行まゝにあはれもふかく露もふかき深草の里也一首の意は秋をへて段々哀も深く露も深い深草の里は人はとはてうつら計音つるゝとなり

通光卿

入日さすふもとの尾花打なひきたか秋風に鶉なく覧

下句の意は鶉のなくはたか心の秋風をうき物におもひてなくらんと也○かくの如し　然るに上句はたゝけしきはかりをいひて下句にかけ合たる意なしいかゝ○入日さすは鶉のなく時分なりふもとの尾花はうつらの立所也打なひきは秋風のよせなりふくともたつともいはすとも一々かけ合たりさて戀の意は打なひきては秋風をうくおもふなれは三四五とかけあひたる物をや

俊成卿女

題しらす

あたにちる露の枕にふし侘てうつらなく也床の山風

床の山は枕のよせ也○一首の意は山風にてもろく露かちる故枕かぬれてふしかねてわひしそうにうつらかなくと也

千五百番歌合に

とふ人もあらし吹そふ秋は來て木葉に埋む宿の道芝

とふ人はあるましき秋の來て嵐の吹そひぬれは宿の道も木葉にうつみてとふ人なしと也○一首の意はあらし吹そふ秋か來て木葉に宿の道芝を埋みたれはとふ人もあらしと也一説の如し　秋は來てといへるはもし人は來しといふ意なり○はもしこゝにありてはさはきこえすその義ならは初句をとふ人はといふ也はもしにてひゝかするは常の事なれと置所によりてひゝかす　さてあらしはあるましといふ意にいひかけたる也此いひかけ古の歌は皆しか也あらすといひかけたるにはあらす然るを近き世の人此わきまへなくして嵐をあらすといふ意にいひかくるはひかこと也○すへて秀句は成語にあらすいひかけも二字かゝりて三字におよはすまれに三四五字もかゝるもあれと別義にて普通は二字也三字めより轉じて詞をそへて義をなす物なれはあらじあらすはよりくるまゝにて何事かあらんあらしあらすは勿論の事あらんに用てもよかるへ

しと正明はおもふ也　帚木の巻に云々あらし吹そふ秋は來にけり○此歌の本歌にあらす何の料に引出られたるにか

色かはる露をは袖に置まよひうら枯て行野への秋哉

千種の盛に其色にうつりし野への花の露を今は我袖に殘し置て花はみなからかれゆく事よと也○千種といふ事も花といふ事も一首にみえすうら枯て行野への秋也何草にても妨なけれは千種のさかりに云々と說てはあたらす一首の意は草葉の色かはりしほとは紅の露が置しが今では其露をわか袖にのみおひたゝしく置て草葉は段々色かはる露は花の色のうつれる露なるをうら枯て露も色なくなる秋のくれ方そと也　袖に置まよひといふは例の紅の涙にて秋の悲しさの涙也さる事にも紅の涙をよむは此集のころの常そかしおきまよひとは花の露の色にまかふ故にいふ○まよふとは露のおひたゝしく置事迷惑の義にあらす又紅涙が花の露の色にまかふとあるしか紅なる花は何にかあらん萩はこき色女郎花は黄也鳳仙花唐きりの外をさ〳〵み及はす　さて上につゆをはといへるをはに合せてはおきまかへといふへきをまよひといへるは少しいかゝ○もとよりまかへの義にあらすまよひにてよくとゝのひたり

秋の御歌の中に　　太上天皇御製

秋ふけぬなけや霜夜の蛬やゝかけ寒し蓬生の月

なけやなけ蓬か杣の蛬過行秋はけにそ悲しきといふ歌よりおほしめしよれるなるへし○此歌によらせ給ふともみえすおのつから一首の御歌也上下打かへして心うへし

百首歌奉し時　　攝　政

きり〳〵す鳴や霜夜のさ筵に衣かたしき獨かもねむ

霜夜の寒きといひかけたり此歌萬葉集に入ても古今集に入てもすくれたる歌也○かやうの所此集の醍醐なる故にて古今萬葉と其味ことなりさて此歌戀の歌也四季の題に戀のうたよむも常ある事なり

千五百番歌合に　　春宮權大夫公繼

ね覺する長月の夜の床寒み今朝ふく風に霜や置らん

○長月の夜にね覺をすれは床か寒いのは今朝ふく風て霜ても置かしらぬと也

和歌所にて六首歌つかうまつりし時秋の歌

慈圓大僧正

秋ふかき淡路の島の有明にかたふく月を送る浦風

淡路島をみやりての歌也○送るとは月の入方へ風のふく也

暮秋

長月も幾有明に成ぬらん淺ちの月のいとゝさひゆくいとゝといふ詞いさゝか叶はす○初秋より淺茅の月は物さひたる物なりしに長月の末になりてはいとゝさひゆくなり

攝政大將に侍ける時百首歌よませ侍けるに

寂蓮

鵲の雲のかけはし秋暮て夜半には霜やさえ渡るらん

鵲の雲のかけはしとはいかゝ雲ゐのといふ事なるへきをさはいひかたき故のしひことなるへし○雲ゐのといふ事ならは天のかけはしといふへし雲ゐのゐもしを省きてはきこえぬしひことなれは此大德はかりの歌よみのさるわさすへしとも覺えす雲のかけはしは雲梯といふからもじにてそれは雲を梯としたる事なれとこれは天の川の東岸西岸の雲より鵲かかけはしをわたす也雲にかけたる梯故鵲の雲の梯といへる也　又古歌におく霜のしろきをみれはとあれはそのうへにめつらしくいはんこそほゐならめ○大かたは必しもしからすかくいひては事窮すめつらかなる事出來たる跡にて又させるふしなき事出來るもよからすともいかゝはせん常ある事と心うへき也されと此歌は先生の説よりもめつらかなる心あり下にいふへし　たゝ霜やさえわたるらんとのみにてはいとよわく何の詮もなしこれは見やうの疎漏なる也まつ雲のかけはしとはふみ月に彥星をわたしたるかけはし也秋くれてとは今は彥星をわたす時分にはあらぬ也一首の意は鵲の雲の梯にてさきには彥星をわたしたるに長月の末にもなれは彥星はわたらすして霜のみさえわたると也みなかの古歌にはなき趣也

秋歌

八條院高倉

神なひのみむろの梢いかならんなへての山も時雨する比

○上に神なひといひ下に山といへるなと如法にかけ合たる歌なるをみのゝ家つとにはなともれにけ

む

最勝四天王院障子に鈴鹿川書たる所

太上天皇御製

鈴鹿河深き木の葉に日數へて山田か原の時雨をそ聞

○山田の原は鈴鹿川の川上に有と聞ゆ一首の意すゝか川にふかく木の葉のつもりたるは山田の原の木葉にてかしこの梢をちりたるよりは日數をへて時雨がすれは山田の原のしくれをすゝか川にてきくと也山田原は外宮のおはします度會の郡なるをゝきて鈴鹿の郡にもある也けりいつくはかりの事ならん大こう寺なはてのあたりいとよかめれと川上にあるへきにとりては叶はすそれより上は山にせまられて原といふへき所もみえすもし山をのほりはてゝ近江國山中なといふわたりにはあらしか

入道前關白太政大臣家に百首歌よみ侍けるに紅葉

俊成卿

心とや紅葉はすらむ立田山松は時雨にぬれぬ物かは

○一首の意は立田山のこと木はわか心から紅葉するてあらう松も同し樣に時雨にぬるゝ物なれとそれは色もかはらすにゐるのをみてはと也

百首歌奉し時

宮內卿

立田川あらしや峯によわるらん渡らぬ水も錦絕けり

○本歌立田川もみちみたれてなかるめりわたらはにしき中やたえなんとありみねのあらしの吹つゝくるほとはこの葉のたえすちる故立田川の水にちりうきたるもたゆる所なくすへてはひきはへたるにしきなるをみねにあらしもかよわれは木の葉のちるか中たゆる故其ちりうきたる水も引はへたる錦にはあらす中絕ると也下句本歌にわたらは錦中やたえなんとあれとこれは渡らねとも中絕るとよめるにて先生の常にいはるゝとりやう也か樣なるも希にはある事そ

左大將に侍し時家の百首歌合に柞

攝政

柞原しつくも色やかはるらん杜の下草秋ふけにけり

○初句の下にはもしをそへて心うへし雫もは雫にもと心うへし大かたは露しも時雨なとにて色かはるならひなるに柞原は雫にも下草の色かかはるかと也秋ふけにけりも色かはりし事也

定家朝臣

時わかぬ波さへ色にいつみ川柞の杜にあらし吹らし
古歌に波の花にそ秋なかりけるとある波さへ秋の
色に出る也○古歌には波の花とありこれは花の字
なければ事よりたりともみえす川に波といふ事は
常なり古例をまたすなみは春秋といふ事なき水の
色なれともそれさへ色に出し也　波の色に出るは
紅葉のなかるゝなれは川上なる柞の杜に嵐のふく
らむことをおもひやれる也○かくの如し

百首歌奉し時秋の歌　式子内親王

桐の葉も踏分かたくなりにけり必人を待となけれと
我宿は道もなきまて荒にけりつれなき人を待とせ
しまに必しも此本歌の樣に離面人を待宿にはあら
ねとも也○古歌のとりやう例のむつかし古歌はた
ゝ詞はかりをとれるなり　初秋に一葉落そめたる
桐の葉のふみ分かたきまてちり積るは秋のいたく
ふけたるよし也　待ほとの久しきよし也一首の意
はかたく約したるにもあらねはきと來へしとおも
ひて待にはあらねともおのつからとひこんとおも
ひて下心にまちしほとに桐の葉か落積りて今はよ
も來しとおもふほとになりしと也上句いたくまち
し心の今はおもひよわりたるさまもみえすこし腹
たゝしきけさへそひて語勢いよ〳〵めてたし

守覺法親王家五十首歌に　公繼公

もみち葉の色に任せて常盤木も風に移ろふ秋の山哉
○初句は落葉の事也うつろふはもみちする事一首
のこゝろは紅葉したる落葉を風か吹かくる故其色
にまかせてときは木もうつろふと也

千五百番歌合に　家隆朝臣

露しくれもる山影の下紅葉ぬる共をらん秋の形見に
本歌白露も時雨もいたくもる山は○下葉のこらす
色付にけり　云々四句濡つゝそしひて折ける○年
のうちに春はいくかもあらしとおもへは　云々の
心あるへしさてその春を秋にかへ用ひて秋のかた
みにとはとちめたるへし○上句は古歌の詞也四句
は本歌の詞にあらすぬるとも折ともよむは常の事
也迂遠にみるへからす一首の意かくれたる所なし

題しらす　西行

松にはふまさ木の葛散にけり外山の秋は風荒ふらん
風すさふは吹あるゝを云○けりは推量したるけり
也まさ木のかつらのちるをみて外山の風のあらき

をしりたる也

百首歌奉し時　二條院讃岐

散かゝるもみちの色は深けれと渡れは濁る谷川の水

○下句は山川の水の淺きにて紅葉の色の深きにたゝかはせたりいとめてたくたゝかひたるをみのゝ家つとになと漏に劔

長月の比みなせに日比侍けるにあらしの山の紅葉涙にたくふよし○紅葉の落るを惜みてなみたを落す事　申つかはして侍ける人のかへり事に　公經卿

もみち葉をさこそ嵐の拂ふらめ此山もとも雨と降也

○上句はあらし山の事下句は水無瀨の事也

家の百首の歌合に　攝　政

立田姬いまはの比の秋風にしくれをいそく人の袖哉

立田姬は四句へかゝれり今はのころの秋とは暮秋を云風は時雨のよせ也しくれをいそくとは世人の秋の別をゝしみてなく涙の落るを立田姬の時雨をふらせて木葉を染る如くに人の袖にも時雨をふらせてそめむとするよしにいひなせる也いそくとは事をいとなむをいひて立田姬の時雨をいそくといふはしくれをふらせて染る事をいとなむよし也

千五百番歌合に　權中納言兼宗

行秋の形見成へき紅葉々も明日は時雨と降や紛はむ

○行秋の形見とすへきものはもみち葉なれともそれも明日は時雨とともにふりて跡なくならんと也

五十首歌よませ侍けるに　守覺法親王

身にかへていさゝは秋を惜みみむさらてももろき露の命を

二句さはゝさらは也下句秋にかへすとてもゝろき命なる物をといへる也

閏九月盡　前太政大臣

なへて世の惜さにそへて惜む哉秋より後の秋の別を

○惜さにそへて惜む哉といひ秋より後の秋といへる上下の句の輕重をひとしうするわさにて句法也

冬歌

千五百番歌合に初冬　俊成卿

おきあかす秋の別の袖の露霜こそ結へ冬や來ぬらん

九月盡の夜秋をゝしみておきあかす袖の淚の霜になりぬるははや冬の來つるにやと也○此說のことし

春日社歌合に落葉といふ事をよみて奉りし

慈圓大僧正

木葉ちる宿にかたしく袖の色をありとしらて行嵐哉

袖の色とは例の紅の涙にそまりたるをみそれも紅葉と同し色なるに嵐のこれをは有ともしらて過行よと也

通具卿

木葉ちる時雨やまかふ我袖にもろき涙の色とみる迄

一首の意我袖にもろく落る紅の涙の色とみゆるまてに時雨のまかひてふるは木葉のましりてふる時雨にてやかやうに色のまかひてみゆらんとなり○まかふとはからもしに交加といふあなたよりもこなたよりもふりましる意迷惑の義にあらす木葉ちる時雨といひて色の紅なる事をきかせたり一首の意はちる紅葉を帶したる時雨かあなたこなたよりふりまかふ事哉しかも色か紅て我袖に紅涙かおつるその色とみゆるくらゐにと也やもしは疑のやと聞ゆれと一首疑の意なし猶別義ある歟

雅經

うつり行雲に嵐の聲すなりちるかまさきの葛城の山

葛城山を見渡せは嵐にふかれてうつり行雲にそのあらしの聲のするはまさきのかつらのちるかと也○此説の如しいとめてたし詞めてたしとありけにをかしさはをかしけれと世にこの集を花やかなるに過たりたくみなるに過たりなといひおもふ人あるはこれらの歌見ていふ事也此比の歌人は變幻自在なる中にかやうなるも一つの姿にていとまれにはある事なれとそれを此集の本色とはいかてかいはん　下句勢ひあり此卿のえられたる所なり○さる事は此ころの諸豪傑の常也此卿にかきりたる事にはあらす

七條院大納言

初時雨忍ふの山の紅葉々を嵐ふけとは染すや有けむ

初しくれの初もしのふも下にかけ合なし○初しくれとは嵐の吹てもみちのちる日染はしめしをりの事をいふ歌なれはいと大切也かけ合なしとは下句に色の一しほなとあるへしとの事歟さるわさは初學の一術にて精撰の名歌にかくへき事にあらす忍の山陸奥の地名そはいつくの山にても有へけれとたま／＼信夫山とよめる也かくし忍ふ意にあらね

はそのあへしらひの詞の下にあるへきやうなし一首の意最初時雨か信夫の山のもみち葉をそめはしむる時に今日なとの樣に嵐か吹てちらせとてしたる事にてはよもあるまいにとなり　もしは初時雨ははじめよりといふ意○はしめにといふ意よりといひては違へり紅葉をそめんとする最初に也　しのふはあらしにしられしと忍ひし心にいへるにやあらん○此義にあらす細鑿なるは氣韻下るものなり　三句のをもしいさゝか心ゆかす○もみち葉を染るといふをもしにて別にいふへき詞はなし何事をいはるゝ事かこゝろをえかたし　古今たらちねは○かゝれとてしもうは玉のわかくろ髮を撫すや有けん　云々○此歌の語勢をおもひてよめる歌にはあれと心詞清く相あつからす大かたの本歌とは異なれは其旨を注せらるへき也

信濃

しくれつゝ袖も干あへす足引の山の木葉に嵐ふく比

初二句は涙のおつる事なるを木葉の緣にしくれといへる也山の木葉にあらしの吹比は物の哀なるに涙をおとして袖もかはかすと也

秀能

山里の風すさましき夕暮に木葉亂れて物そかなしき

○みたれて物そかなしきとはとにかくにおもひみたれて物かなしとなり

祝部成茂

冬の來て山もあらはに木葉降殘る松さへ嶺に淋しき

あらはになれる梢のさひしきのみならす殘れる松の葉はさひしかるましきことわりなるにそれさへさひしと也○この歌を新古今集のくす也といふ說もありけにしらへいとめてたくはあらすされと一首の結構英雄なる歌にて次々の集にはなき姿なり衆口にひかれて猥にあしと定むへからす　此歌上句少しくた／＼しく三句は殊によろしからす○上句すくれたりとにはあらねと取たてゝあしくもあらすかけ合なしとてさのみいはるゝ也三句もいたくすくれたるにはあらねと大かたならはてなといひてつゝくへき所をこの葉ふりといひきりたるは雄氣ある口調なり　すへててといはては落居ぬ句をさはいひかたくてを省きたるは聞くるしき物也此三句も必木葉ふりてといふへきをさはいひか

たけれはせん方なし○此歌は木葉ふりてといひて下へつゝくる趣にはあらす山もあらはなるまて木葉のふりたるかあはれなる事の一條殘る松さへ時にしたかひてさひしけに立るか哀なる事の又一條にてかそへ立るやうなる語勢也三句にてしはらくよみ切るへしそへてみるてにをははなし　下句もそ又はやなといふてにをはなくしてしきとゝまりたるは調はす○これはさる事也されとぬるとゝまりたると同例にて罪重からす

五十首歌奉し時　　宮内卿

唐錦秋のかたみや立田山ちりあへぬ枝にあらし吹也

本歌から錦枝に一むら殘れるは秋のかたみをたゝぬ也けりから錦はたつの縁也ちりあへぬとは此歌にてはいまた散までにもいたらぬを云○たかへりあへぬは俗におふせぬと云紅葉かおほくは散たれともいまたちりおゝせすして殘たるもある也これ初冬の實景也いまた散までにもいたらぬといひては初冬の事にあらす　一首の意はいまたちるまてにもいたらぬ紅葉の枝に嵐のふくは秋のかたみを殘さしとて殊更にたつにやとなり○一首の意は秋のかたみをたちてしまうとてかいまたちりおゝせす少し殘たるもみちの枝をあらしのふくと也錦といひ立田山といひ枝といひて紅葉なる事をきかせたり

題しらす　　西行

月をまつ高根の雲は晴にけり心あるへき初しくれ哉

四句心ありけるといふへきを上のけりと重なる故にあるへきといへるなるへしあるへきといふ時は心ありけなるなといふ心也○此説にても聞えたれと猶おもふに心あるへきは斟酌あるへきといふ事一首の意は月をまつ高根にかゝりたりし雲かはれた此まゝて月か出やうならは奇妙てあるが初しくれも常にははれくもりするにもせよかやうの時には斟酌あるへき事そと也　さて此歌初時雨とあれは初冬にて十月上旬なり上旬に月をまつといへるはたかへりもしは九月の末の歌なるを時雨とあるによりて冬部に入られたるにや○此論はさる事秋部に入へき也三代集なとにはかやうの事多みえたり歌の神驗をおもひて驪黄牝牡をわすれし也

山家時雨　　藤原隆信朝臣

雲はれて後もしくるゝ柴の戸や山風はらふ松の下露

〇三句やもし疑のや也しくるゝやとあるへきを三句にめくらしたるめてたし雲はれて後にもしくれの降は山かせか松の下露を拂ふにやあらんと也

時雨を　慈圓大僧正

やよ時雨物思袖のなかりせは木葉の後に何を染まし

此歌はかのしくれをいそく人の袖哉といへるとはたかひていかゝ〇此歌いとをかし時雨をいそくも一つの姿也この歌もひとつの姿也かの歌にたかひたりとていかゝとはいかゝ一首の意はやれしくれよ木葉をはそめた跡でもまだ我らのやうに物おもふ人の袖かありてそれをそむる事なるかもし物おもふ人の袖かない物ならは木葉をそめ盡して後は何をそむるてあらうと也袖のしくれは紅涙也此歌紅葉をよみたれは秋部に入へきか如しされとこれは作者は組題なとにて冬によまれし故みゝに入し也歌の雋秀なるを選てかやうの事にはさしも拘らさりし也

冬の御歌の中に　太上天皇御製

深緑爭ひかねていかならんまなく時雨のふるの神杉

本歌萬葉十にしくれの雨まなくしふれは槇の葉もあらそひかねて色付にけり槇の葉も色つくといへれは此神杉もいかならんと也〇たゝ古歌の詞をとらせ給ふ也かくむつかしくとりたるにはあらす一首の意はあのふるの神杉がまつ今まては深緑てゐるがあれもあらそひまけてとうならうやらしれぬあまり時雨かひまなく降故にと也いかならんはとうならうやらしれぬといふ義にて萬一紅葉するかもはかりかたき也三御句いとめてたし

百首歌の中に　二條院讃岐

折こそあれ詠めにかゝる浮雲の袖も一に打時雨つゝ

をりこそあれはをりもあらんになかめをする折からといふ意也〇なかめは物おもひをしてそらをなかめ出す事　なかめにかゝるとはなかめをする空にかゝるを云三句ののはがといふ意也〇一首の意はをりもあらうに空をなかむれはやかてめにかゝるうき雲かわか袖まて一所にしくれてあはれなる事と也袖の時雨はなかめの哀なる故おつるなみたなり

たいしらす　西行

秋しのや外山の里や時雨らんい駒の嵩に雲の懸れる
二句のやはうたかひ也　膽駒山に雲のかゝれるをみて秋篠の外山のさとのしくれむ事を思ひやれる也

千五百番歌合に　具親

いまは又ちらてもまかふ時雨哉獨ふりゆく庭の松風
ちらてもは松の葉の事也今は又とは今までは木葉の散しにむかへていへり○此説のことし木葉のちるにまかひしといふも松の葉はちらてもまかふといふも葉といふもし大切なれは此歌に葉といふもしのなきは遺恨なり　まかふ時雨哉は時雨にまかふ哉也○かくの如し　ふりゆくといへるたゝ時雨の縁の詞のみにて○時雨のふる事也縁の詞とはいかゝ　歌の意によせなし○此句すくれてはあらねとよせなしなといふへき事かは一首の意今までは木葉のちるを時雨におもひまかへたるが今はちらても時雨にまかふそれは庭の松風はかりか時雨のふり行やうに聞ゆるのでと也ばからがとはひとりといふことは也　松の木の年ふりたる意にしてもゆくといふ詞いかゝ○ふりといふ詞秀句にあらす

百首歌奉し時　入道左大臣

槇の屋に時雨の音のかはる哉紅葉や深く散積るらん
○このはのふかくちりつもれる上へふる故しくれの音のかはるなり

千五百番歌合に　二條院讃岐

世にふるは苦き物を槇の屋にやすくも過る初時雨哉
くるしきと○くるしくふると　やすく過るとをたゝかはせたり○一首の意は世にふるはくるしき物とおもふに時雨は槇の屋をはら〳〵と降過て世にふるもさのみくるしき物のやうにもなしと也　たゝ時雨にてあるへきをも初時雨とよむか此集のころの常也○初といふもしはおもくする物あり初花初紅葉なとの類たゝ花紅葉といふへき所にはいひかたしかろくする物あり初雁初霜なとの類雁かね置霜といふへき所にいふ常の事也初しくれは此類なりよみならひたるに輕重ある也時代によりたる事にはあらす　此歌なとはむらしくれとあらまほしくこそおほゆれ○やすくもすくるといふ事ふりみふらすみの義にあらねは村の字は中々わろし

たいしらす　宜秋門院丹後

吹はらふ嵐の後の高根より木葉くもらて月や出らん
月そ出けるといふへき歌なるを詞をえむにあらせんとて月や出らんといへるいか丶〇月そ出けるとよむへき歌なりとはいか丶定めらる丶ならんいまた月の出さるほとこよひなとは木葉にくもらて月か出るやらんと推量したる意なれはやらんといふへき歌にてこそあれ二句あらしの後はとあれは事もなくきこゆしかるをはといはざるは調迫切になりていうならすのといへは溫和にして滯なき故かくよめる也古人は如此しらへをおもひし物そ　今の人の歌にも此難常にある事也〇そけるといふへき所をやらんとよめる歌古へに多ある事也しらへをいたはりてことわりを忘る丶也時によりては今もよむへし今人のそ丶ろによむばしらへをいたはるともなくてよくもあらす一首の意木葉を吹はらふあらしの跡の高根から木葉が邪魔にならいて月か出るてあらうと也木葉くもるとは木陰の月にさはる事なり

春日社歌合に曉月　通光卿
霜氷る袖にも影はのこりけり露よりなれし有明の月
殘りけりは秋の影の殘れると〇此意はなし月といふもしをかくさまにはたらかせんとする草庵風の一癖なり明かたに殘れる事とをかねたり〇やとりけりなといふへきを有明の月なる故殘りけりといへるす丶ろにめてたし一首の意は秋の時分は袖の露にみなれたる有明の月が冬か來てこほりて霜となりても夜のあくるまてやとりてあるとなり

和歌所にて六首歌奉しに冬月　家隆朝臣
なかめつ丶幾度袖に曇るらん時雨にふくる有明の月
〇袖にくもるとは袖の淚にやとりし月のくもる也ふくるは月をみて夜をふかす也一首の意は時雨する夜月をみて夜をふかせはなかめてをるうちに袖の淚にうつる影まてか何返くもる事やらんと也

千五百番歌合に　具親
今よりは木葉かくれもなけれ共時雨に殘る村雲の月
今よりはといふ詞は木葉かくれのなきへか丶れるのみ也下句まてへかけては見へからす〇木の葉かくれはなけれとも今よりは時雨の村雲に殘る月といふ事なれはむねと下句へか丶れりされと木葉かくれのなきも今よりの事なれは兩方へかけてみる

へきものなり　下句は時雨故に村雲の殘れる月といふ意にて木葉はのこらねとも村雲の殘りてそれにさはる也○殘るとは月の事也語勢を味ひみるへし木葉にかくれし月か落葉後も時雨の村雲に殘りて猶くまなしとはいひかたしと也

題しらす

はれ曇る影を都にさきたてゝしくると告る山端の月

しくると告るはすなはち上句のさまを云○さきたてゝとは時雨よりもさき立せて都につかはしたる也一首の意は山端の月がはれくもる影を先へ都にやりて追付しくれがしまするぞやといひて告ると也晴くもりしてみするが告る也　都と山端と相むかへたり

五十首歌奉し時　寂蓮

たえ〳〵に里わく月の光哉しくれを送るよはの村雲

○一首の意しくれを送るよはの村雲にて晴たる里くもりたる里と差別をして月のかけか絶々にみゆる也

題しらす　慈圓大僧正

もみち葉はおのかそめたる色そかしよそけに置るけさの霜哉

三句色なるをといふへきを色そかしといへるは其ことわりを霜にいひきかせたるさま也○さる事也色なをるといへるよりはいきほひ萬々勝れり　四句詞も少しいうならさるうへによそといふ事もすこしかなはぬ樣なり俗によそ〳〵しけにといふ意也○一首の意これ霜よ此もみち葉は汝か染たる色なるぞよそれによそ〳〵しけにけさ置た事はと霜にいへる也霜の色のしろくて紅葉を染たる物のやうにもみえされはよそけにといへる也四句いうならすとあるもかなはすとあるもみないかゝ也さて此歌霜に紅葉を結ひたれは秋の歌なるへく覺ゆ

西行

をくら山麓の里に木葉ちれは梢にはるゝ月をみる哉

三句もしあまりいと聞くるし○いきほひあらせんとてことさらにしたる事なれとなとやらんこれは少みゝに立也　例の此法師のわろきくせなり○もしあまりは此時世の風也此上人にかけてはいひかたしわろきくせといふもし誰にかおふすへき　此歌は小倉山木葉ちれは梢にはるゝ月をふもとの里

にみる哉といふ意なりかやうに心得されはみる哉といふことより所なし○此歌の詞かやうにもつゝきてきこゆる物にやあらん心得すいかにも〳〵ふもとまて木葉のちりこし事とこそきこゆれみる哉といふもしをいたうもてあつかはれたれと何の子細もなき事也一首の意は小倉山のふもとの里へ木葉かちりくれは嶺の梢は空しくなりてその梢に木葉にくもらぬ月をみると也麓の里にて嶺の梢の月をみる也　其故は本のつゝきのまゝにしてはたゝみるといへるのみこなたの上にて其外はみなかなたのうへのみにてこなたにつきたる詞なき故にとゝのひわろき也○以上何の事ともえ聞とらすこなたの上とは月をみる人かかなたのうへとは何をさしていはるゝ事ならんすへてしりかたし　近き世の歌にはさる事いと多し人の心つかぬ事也

五十首歌奉し時　　　雅經

秋の色を拂ひはてゝや久堅の月の桂にこからしの風

二句俗言にいへははらひ果たかしてといふ意也然れ共疑はすしてはらひ果てと治定したるさまにあらまほしき歌也○かくいはるゝ故は目前に木葉をはらひ盡したるを見てあるへけれは疑ひたるはあしとなるへしこれ目前の木葉にてさす所いと狹し此歌天上の桂に對して世界の木葉をいふなれはさす所いと〳〵ひろししらぬ野山の木葉をもおもひやりたる事なれはうたかひの詞なくてやは有へき　下句いやしき姿なり此事春部にいへり○春部にみえす夏部に夕立の雲もとまらぬ夏日のかたふく山にひくらしの聲といふ歌の下に此論ありさもあらぬ事そこにいひつそも〳〵此下句は此集の骨目にてめてたしなともいへはおろかなるをいやしき姿とはかけまくもゆゝし直衣きたる人の妻戸のもとにて紅梅の盛なるを見たてらんか如き姿にてはとやことなき物をや一首の意は世上の紅葉を拂ひ果たるにやあらん月の桂にさへこからしの風かふくと也

題しらす　　　式子内親王

風寒み木の葉はれ行よな〳〵に殘る隈なき庭の月影

初句寒みいかゝ風をいたみなとあらまほしかりしにこそ古へはさのみ拘らす寒風といはゝあらき意は具したるへし　三句にもしいうならす○勝れ

てめてたき詞にはあらねと此句をいうならすと難
せは歌の道の破滅也二句は木葉のやう〳〵落て月
にさはらぬをいふ

我門の刈田の面にふす鴫のとこあらはなる冬夜の月　殷富門院大輔

○今時の歌よみならは初句かけさえてなといふへ
ししかいはさる故此集には入し也かけ合になつむ
へからさる事をさとるへし

千五百番の歌合に　俊成卿女

さえわひてさむる枕に影みれは霜深き夜の有明の月

さえわひてはさゆるにわひて也○斯の如し此句い
うならす霜の下にもの字をそへて心うへし霜も深
く夜も深き也三句影と云もしのふと出來たるはあ
なかちに縁の詞を配分したるやうにて拙きに近し

霜結ふ袖の片しき打とけてねぬ夜の月の影の寒けさ　通具卿

二句にてきりて心得へし○さては一句もきこえす
一首も續かす　袖のかたしきよくもあらぬ詞也○
いといきほひありてめつらしき詞也一句とり出て
はことやうなれと一首にむすひていとめてたし先
生はの丶字を心得すしてかたしきの袖といふ事を
無理に打かへしたりとおもはれしなるへしのは俗
言にがといふ意のの也かたしきの下ににてといふ
詞をそへて心うへし一首の意は霜むすふ袖か片敷
にてねられぬ夜の月の影か寒くて身にしむと也

五十首歌奉し時　雅經

影とめし露のやとりを思出て霜に跡とふ淺ちふの月

○みの丶家つとにめてたしと有は結句に淺ちふの
月とありて初句に影とあるかよくかけあひたりと
なるへししかやうなるは大かたはつたなき物なるを
此歌は淺まに打つけ也ともいひかたけれは一概に
は定めかたき物也けり一首の意は淺ちふの月か露
の時から影をとめたるやとりなる事をおもひ出て
露になりてゝとひ來ると也跡とは霜は露の跡なれ
はかくよみ玉へるなりされと後世人ならは無常の
歌めきたりと難すへきか

橋上霜　法印幸清

片敷の袖をや霜に重ぬらん月によかるゝうちの橋姫

○本歌さむしろに衣かたしきこよひもや我をまつ
らんうちの橋姫月に夜かるゝとは月夜には人めを

避てまつ人のとはぬ也一首の意はうちの橋姫か月の夜には人がよかれしてとはぬ故まつ人の衣にかさぬへきかたしきの袖を霜にかさぬる事と也

冬の御歌の中に　太上天皇御製

冬夜の長きをおくる袖ぬれぬ曉方のよものあらしに

須磨巻に枕をそはたてゝよものあらしを聞給ふに云々涙おつともおほえぬに枕もうくはかりになりにけり○此歌には用なき引ふみ也　冬夜のなかきをおくる程にしも曉かたの鶴の一聲此歌契沖引おけり何に出たるかふとはおほえす○冬夜の永きをおくるとは終夜めもあはせでをる意なるべし一首の意は永い冬の夜をめもあはせすに物おもひをしてをれは曉かたのよものあらしの音が心ほそさにひたもの袖をぬらしたとなり

百首歌奉し時　攝政

笹の葉はみ山もさやに打そよき氷れる霜をふく嵐哉

萬葉二にさゝの葉はみ山もさやにみたれとも○われは妹おもふ別來ぬれは　云々○二三句はさやくもそよくも同言なれはふと打みては病かとおもはると二句のさやは風の音を形容したる體の語三句のそよくは用の語にて二句打つゝきたれは病にあらすこほれる霜とはさゝの葉に粘着して落ちらさる意歟一首の意はさゝの葉はさら／＼さらさらと音をたてゝこほり付てとれぬ霜をいくたひも嵐が吹てちらさうとするなり

題しらす　俊成卿女

霜枯はそこ共みえぬ草の原誰にとはまし秋の餘波を

花宴巻にうき身世にやかて消なは尋ても草の原をはとはしとや思○此歌によりて草の原へとひ行し樣なる歌也　狹衣に尋ぬへき草の原さへ霜かれて誰にとはまし道芝の露　これは源氏物語より出たる枝流也源によらは忘れても有なんそこともみえぬは秋のなこりのみえぬ也秋のなこりとは此歌にては草の原の花の猶咲のこりたるかあるを云一首の意は霜かれになりては秋のなこりかいつくにありともみえぬが此草の原の中にはまた花なと咲殘りてゐそうな物とおもはるゝが誰にとはうそと也

百首歌の中に　慈圓大僧正

霜さゆる山田のくろの村薄かる人なしに殘るころ哉

此僧正の歌かゝるたくひ多し西行かふりをまねは

れたる物也○此歌下句の洒落なるか西行上人の歌の姿に似たりかやうの歌のまれにましる事は此ころの人英雄は誰といふ事なくしかりもと縦横なるより出て百般の姿によみ出る故なり正明なとも百首に一首はかやうの姿によまんとおもふ也

題しらす　　西行

津の國のなにはの春は夢なれや蘆の枯葉に風渡る也

心あらん人にみせはや○津のくにのなにはわたりの春のけしきを　云々とよめる春は夢なれやと也○一首の意おもしろかりし難波の春のけしきは夢なるにや今は蘆の枯葉に風かわたりて淋しと也みの丶家苞此次に古抄に二句を世中の事は何のうへも夢そと也といへるは叶はすもし其意ならは春もといふへきをやと有春はといひても其意に聞ゆ此說も捨かたしなにはゝ津國の何はおもはすのなにはにて何事も也春といふもしに榮耀の義をもたせたり下句はおとろへたる事一首の意世中は何ても一旦の榮は夢の樣な物で難波の春のいさましさも冬は蘆の枯葉の風の音か悲しと也

淋しさに堪たる人の又もあれな庵を並へむ冬の山里

○一首の意は我は此山さとの冬のさひしさに堪忍してくらすが今一人同し樣なる人もあれかし隣にして物かたりてもしもなくさまうにと也

冬の歌　　守覺法親王

昔思ふさ夜のね覺の床さえて涙もこほる袖のうへ哉

○四句もゝしは哉と相應してもといふ也二つをかねたるもゝしにはあらす

百首歌奉し時

立ぬるゝ山の雫も音絕て槇の下葉にたるひしにけり

○上にもおほひかゝる計そは立る山の雫にて下行人も立ぬれ道のへの槇の葉にかゝりては氷柱となれる也

俊成卿

かつこほりかつはくたくる山川の岩間に咽ふ曉の聲

山川の曉の聲とつゝく意也山川の岩間とつゝくにはあらす○山川の岩間と三字へつゝくにはあらねと岩間にむせふと七もしへつゝく也のもしは俗にがといふ意ののにて山川が岩間に曉むせふ聲とつゝく也山川の岩間とつゝかすして四句はいつくよりかはつゝかん一二句は曉はことに寒さ故かつは

こほり山川のなかれのはやき故かつはくたくる也むせふといふは氷のくたけて岩にあたる音のむせふやうにきこゆる也此詞わひしけにてめてたし

攝　政

消返り岩間に迷ふ水の泡のしはし宿かる薄こほり哉

すへて消かへりわきかへりなといふかへりは其事をつよくいへる詞なるを此歌にてはきえて又結ふことによみ給へるいかゝ○かくいはるゝは泡のきえて水になり水から又泡になりかへりたる意によみ給へりとおもはれたるにや不審これは水がいくらも泡になり〳〵してもやかてきえ〳〵するその中にしはしはきえすして岩間をかなたこなたとめくるもある也初句は泡のすへての事二句は其中には消殘りて岩間をめくるもあるを云　又やとかるといふ詞も何のよせもなき事也○宿かるとは岩間をめくる泡の泡のまゝにて薄氷にとちこめられたる也露の中にとゝまる月の影を宿かるといふ氷にとゝまれる沫をなとか宿かるといはさらん何のよせもなしとは上句に松かね枕草葉の筵なといふ事のなしとにやこれはいとかろくてたゝとまるといふほとの事なるをや　又水のこほりたらんに泡のこほらさる事いかゝ○泡は泡のまゝにてこほりたる也水はこほりて泡はこほらすして水のうへに點したるやうにてはいかゝあらむ　但し薄氷とあれはこほらぬ所もある故に泡もたつにや○こほらぬ方の沫はやかてなかれ行へけれはしはし宿かるとはいひかたくや　又山川とも何ともなくて岩間とのみいへるも事たらはぬ心地す○山川にもあれ遣水にもあれ岩間行水とたにみゆれはよき歌なり何事か事たらさる事たらはすとはくもりもはてぬ花の香のたくひをこそいへ沫のまゝにて氷にとちこめん事は厚くは必きゆへきわさ故薄氷とよませ給へりしはしとは薄氷なる故行水にくたけなともし日かけにてもまつきゆへきわさなる故しはしとはよませ給へりまよふとはかなたこなたゝよひ行こゝろ也

枕にも袖にも涙つらゝゐて結はぬ夢をとふあらし哉

霞麿氷水草みさひなとは平らかにおほふ物なれはこそゐるとはいへつらゝにゐてはいかゝ○ゐてと云詞は居て也一つ所にすはりゐて動かさるを云霞

ゐてといふ詞のありなしはふとはおほえねと行かへりする物にあらねはゐてともいふへきにや塵は物のうへにつもりゐて動かぬ物なれはゐて也氷は行水もこほれはゆかさるものなれはゐて也水草みさひは水のうへにゐすはりて沈みもやらぬ物なれはゐて也雲ゐるともいふそれは山端にかゝりなとしてうこかさる雲をいふ大空に平におほひたる雲を夕ゐる雲なといひし事はなきを以て先生の説のあたらぬ事をしるへし又つらゝは平かにおほふ物なるをつらゝにゐてはいかゝとあるはつらゝといふ物をよくもしらて氷柱(タルヒ)と一つにおもひあやまられしなるへしたるひを世上みなつらゝといへは俗習にひかれて物をうしなはれし也つらゝとはつら〳〵の約つら〳〵はすべる形狀也俗につる〳〵ともづる〳〵ともいふこれと同言也山路の岩かけなとよりもり出て路頭をうるほす水の坂道のまゝにこほりたるか一丈二丈つゝきたるを其うへをわたらんとすれはすべる故此名あり一とせ東山道を冬くたりしに下諏訪より和田峠廿町はかり山路さし入てさる所ありきわたらんとするに草鞋すへりてたふれてはもとの所におり立てわたりわつらひしを具したる者とかうしてわたりて杖をさしおろしてひかへたりそれをちからにして辛くしてわたりたりきこれつらゝ也雪消ていまたかはきあへぬに朝風さえて平地一面にこほりたるこれつらゝ也野澤の水さらぬも平地にたまりたる水行潦なとのこほりつゝきたるはつらゝ也それよりうつりて池水のこほれる其形狀の同しき故轉してつらゝと云也まつよく名物を辨ふへし　池の氷なとをつらゝとよめるもみなわろし○しかいはゝ罪人多かるへし一首の意は物おもひする身故なみたかおひたゝしくなかれてそれかみなこほりてつらゝとなりてわひしき故めもあはす夢も結はぬ物をもし眠るならはおこさうとおもふかたひ〳〵嵐かとひ來ると也もしあらし上句によせなしといはゝ嵐のさゆる故なみたのこほる也とわれこたへむとす

五十首歌奉し時

水上やたえ〳〵こほる岩間より清瀧川にのこる白波

初句やもしわろし○何のわろき事かあらん　此やはのといふ意と聞えたり○さる意のやもしすへて

ある事なし　もし疑のやならは二ノ句にてきるゝ也
○此説の如したゝし一三二とつゝきてさて二ノ句にて切る也　岩間より殘るといへる詞とゝのはす○しかいふへき理なき事なれは初學にてもさはつゝけじこれを以て三ノ句のつゝけからに故ある事をしるへき也こは二三句打かへして水上は岩間よりたえ〲こほるやらんといふつゝき也一首の意は清瀧川のなへてはこほりもやらて猶白波の立を見て水上もかくの如く岩間よりたえ〲氷りやしつらんと也　よりの下になかれきてなといふ事なくてはたらさる也又殘るといへる事も心えす其故は水上とあれは絶々こほれるは水上のみのことにこそあれ川下はすへて氷ることとなきなれは○清瀧川もなへてはこほりて猶なみの立所も殘れる也　白波はつねのことくなへて立へけれは○誤解なり　岩間より殘るなとはいふへきにあらされは也○誤解しての論なれは今辨せす　もし又結句までをすへて水上のことゝしてみれは清瀧川にとあるにもしおたやかならさるをや○これも二三の句打かへしたるをしらさる説也

百首歌奉し時

片敷の袖のこほりも結ほゝれ解てねぬ夜の夢ぞ短き

二ノ句もゝしはとけてねぬといふにあたれり夢ぞみしかきといふに夜はなかき意あり朝貌巻にとけてねぬね覺さひしき冬の夜にむすほゝれたる夢のみしかき○此説よろし一首の意もかくれなし

最勝四天王院障子に宇治川書たる所　太上天皇御製

橋姫のかたしき衣さむしろにまつ夜空しきうちの曙

○本歌さむしろに衣かたしきこよひもや我をまつらんうちの橋姫うちの橋姫は橋の神の事なるを此本歌にはうちにすむけさう人によせたり後々もこれをとりては皆うちなるけさう女にしてよむ例也此御歌もしかり三ノ句かたしき衣さむしとの玉ひかけたり其さむしか御歌のとまり也三四五一二とつゝく一首の意はさ筵に人をまつ冬の夜にとひも來ずむなしく明るうちの曙のそらは橋姫のかたしき衣さむしと也

慈圓大僧正

網代木にいさよふ浪の音更て獨やねぬるうちの橋姫

冬の意みえす○これはさる事也あしろ木に冬季をもたせたりとおもふへからす網代は冬也網代木は四季也あしろ木にいさよふ浪なといふ事は盛夏にもよむへし前の太上天皇の御歌もかたしき衣寒しとあるはかりにてたしかに冬とも定かたし雑部に入てよろしかるへきにこゝにあるは最勝四天王院の障子の繪名所を四季に分て出たるかうち川は冬にあたりし故そのうつりにてこゝに入し也今時ならは必冬をたしかによむへし此頃の作者も撰者も歌の拔萃をおもひてさしも拘らさりし物なり

百首歌の中に　　式子内親王

みるまゝに冬は來にけり鴨のゐる入江のみきはうす氷りつゝ

○みるまゝには俗に見てをる間にといふ意一首の意は鴨のゐるみきはが薄こほりしてみてをるまに冬か來た事よとなり

攝政家歌合に湖上冬月　　家隆朝臣

しかの浦や遠さかり行浪間より氷りて出る有明の月

さよふくるまゝにみきはやこほるらん○遠さかり行しかのうらなみ　云々こほりて遠さかり行浪間より月もこほりていつるなり○此說の如し

守覺法親王家五十首歌に　　俊成卿

獨みる池の氷にすむ月のやかて袖にもうつりぬる哉

袖にうつるとは影のさすことゝ○袖のなみたへ月影のうつることなり　池より袖へうつるとをかねていへり○此注聞取かたし池より袖へうつるとは池の上にうつりし月の池をさりて袖にうつり來し事のやうなれと此歌よもさは思はれしいふかしき事也袖にもうつるとあるもゝしは池にもうつり又袖にもうつる義也池を去て袖にうつりくるにはあらす　ひとりみる故にあはれをもよほして淚のかゝるよしなり○初句はあはれを深からしむる料也月をみれはあはれなるにひとりみる事にさへあれは淚とゝめかたきよし也ひとりみる故にあはれをもよほすにはあらす一首の意はひとりみる池の氷にすむ月が池の上はかりかとおもへはやかて我そての上にもうつり來たるよと也　さて此歌氷といへるのみにて氷のあへしらひもなく○なきも難にあらすされとこれは池もうつるもみな氷のあへしらひなる物をや　すへて冬のさまみえす○こほり

といふか冬のさま也　たゝ秋の月なるはいかゝ○春には餘寒の氷あり夏には氷室の氷ありまきれもすへし秋にはいかなるこほりありて此歌を秋の月也とは定めらるゝならんもし月を見て哀を催しなみたを落すは秋の事也冬月はすさましき物にいふ事也と一むきに心えられたるにはあらしかしかいふも一事也かくいふも一事也冬の月ならんからにいかてか哀といはさらん

題しらす　後徳大寺左大臣

夕凪にと渡る千鳥浪間よりみゆるこ島の雲に消ぬる

○此歌ぬるととまりて上にぞともやともなしかやうなるは歎息の心ありと先生はいはるゝ事也もし格に乖かは歎息なりとて許すへきにあらねとかくの如きも一種のてにをは也歎息の故にはあらす

五十首歌奉し時　攝政

月そすむ誰かはこゝにきの國や吹上の千鳥獨なく也

初句そもしかなへりともきこえす○さるは月そすむ人はすますしてなとやうに聞ゆるそにあらぬをいはるゝ也されとそもしを用る樣千萬ことなりかのそにあらすとてはたらかすといはるゝは窮屈なる事也此歌は初句一句にてきれたりそは散にけり哀うらみの云々の類にて山をぬく力有ものを心うくもいはるゝ物かな　三句來てみんといはては月の詮なけれはたゝきのくにやとのみにてはことたらす○たれかはこゝにきのくにやは誰かはこゝに來たらんといふ秀句也人は來す空しく花はちりぬといはゝ人の花をみに來ぬ意分明なるへしょしこれかきこゆるほとならは月そすむ誰かはこゝに來たらんといへは月見に來る人のなき事となとか聞えさらん見字なしとて月の詮なしとはいひ難し千鳥は數おほくむれゐる物なれはひとりといふこと似つかはしからす○ひとりはばかりといふ事詩には常あるもし也此殿の歌に唐詩をおもひたるか多かり一首の意はきの國の吹上の濱に月かすむその月を誰かみに來る事そくる人はなくてちとりはかりか哀になくと也

千五百番歌合に　季經卿

さよち鳥聲こそ近くなるみ潟傾く月に潮やみつらん

○潮のみちくる故千鳥の聲か沖よりうらさとへちかつくこゝろ也

最勝四天王院障子に鳴海浦かきたる所　秀能

風吹はよそになるみのかた思ひ思はぬ波に鳴千鳥哉

二句風にふかれてよそになり行と戀のうへの契のよそにうつれるとをかねたり三句潟といひかけたる也四句も風にふかれておもはぬ○思ひもよらぬ也　波のうへになく意とかた思ひにて人の我をおもはぬとをかねたり○みなよろし風ふけはよそになるとは千鳥か風にふかれてよそのかたへなひくさま也一首の意は千鳥かよそ／＼敷なる契にて片おもひをして我をおもはぬとてなくと也

おなし所　通光卿

浦人の日も夕暮になるみ潟返る袖より千鳥なくなり

一二のつゝきいかゝ○のは俗にがといふの也浦人か日もくれたりとて歸るといふつゝきなれはいかゝなる事もなし　初句は四句の上にある意也○さやうにみれは二三一四五とつゝく浦人の歸る袖とつゝきたれは又いかゝなる事もなし　下句もおかしからす○われはをかしとおもふを人々の心なり一首の意は浦人か日もくれ方になりしとてなるみかたをかへる其袖の下から千鳥かたつと也

文治六年女御入内屏風に　季經卿

風さゆるとしまか磯の村千鳥たちゐは浪の心也けり

土佐日記に云々○これは何といふ事そ我先生はよろつ精細にてかくの如き荒涼なる事はせさりし人也筆者の書そこなひなとして其まゝに置るか　下の句おかしからす○われはおかしとおもへるを人々の心也

五十首歌奉し時　雅經

はかなしやさても幾夜か行水に數かき侘る鴛の獨ね

三四句本歌行水に數かくよりもはかなきはおもはぬ人をおもふ也けり此下句の意にてをしのひとりねにおもはぬ人をおもふをはかなしといへる也二句は本歌のことくおもはぬ人を思ふははかなきことなるをさありても猶幾夜も數かきわふらんといふ意なり○此注さしてたかひたるふしもなけれと迂遠にて初學の人ふとはえ心えすやあらんはかなしとはおもひはかりなき事俗にばかなといふと同語にてもは此歌にてはさうてはあるけれともと云意行水に數かくとは流の水に筋を引事水にすち引

しては直にきえてかひなき故おもはぬ人をおもふかかひなきたとへ也さて此歌にては行水はやかて鴛のゐる水也一首の意はあまりばかり〲しき事かなさうてはあるかいく夜獨ねしてをし鳥かおもはぬつまをおもふ事そと也

百首歌に　式子内親王

さ筵のよはの衣手さえ〲て初雪しろし岡のへの松

初句猶あるへし○さむしろの夜半の衣手いとめてたきをかくいはるゝは岡の縁の語もしは松の縁の語ならはよからんとての事なるへしえかなき故にめてたき也　下句はあくるあしたに見わたしたるさま也○一たひこれを吟すれは五月寒を生する歌也内親王の御うへにてかく雄壯なる調のいてきおはしますはあやしきまてめてたし

入道前關白右大臣に侍ける時家の歌合に雪　寂　蓮

降初るけさたに人のまたれつるみ山の里の雪の夕暮

初句ふりそめしといはん方まさるへし○これはさる事なるへし　まされつるはさひしさに人のまたれたる也ましてふりつもりたる夕くれなれはいよ〱さひしさにまたるゝ意あらは也○此說いとよく聞えたり

雪のあした後德大寺左大臣の許につかはしける　俊成卿

けふは若君もやとふと眺むれは又跡もなき庭の白雪

○下の句まち久しきこゝろあり

かへし　後德大寺左大臣

今そきく心は跡もなかりけり雪かき分て思ひやれ共

我はそなたの庭の雪をせちにおもひやれはさためて其我心の跡のつきたらんとおもふにまた跡もなしとは今こそうけ給りつれさては心の跡はつかぬ物にて侍りけるよと也

百首歌奉し時　定家朝臣

駒とめて袖打拂ふ陰もなしさのゝわたりの雪の夕暮

萬葉三にくるしくもふりくるあめかみわかさきさのゝわたりにいへもあらなくにといふを取て其くくるしくもふりくるといへると○これは一首のうへにて聞ゆる餘情也本歌の詞の故にはあらず　家もあらなくにといへるとを袖うちはらふかけもなしとよみなされたる○陰といひて家といはさるは

羇旅の歌にあらぬ故なり　一きはつよく心もせち也其うへ夕暮とあれはまして宿かるべき家のなき意詞の外にあり○此歌旅行の歌にあらず夕くれといひても宿かる意はなし夕くれは折からのわひしき也晴たる日かりそめに物へ行てかへるさに俄に雪にあひし也雨衣などの心しらひもなきに袖はらふとて立よるべき陰もなくなとしてわひしき狀を盡したる也

攝政大納言に侍ける時よませ侍ける山家雪

まつ人の麓の道はたえぬらん軒端の杉に雪おもる也

軒端なる杉に雪のふりつもりて次第におもり行をみて待人の來へきふもとの道はたえぬらんと思ひやれる也

同家にて所の名をさぐりて冬歌よませ侍けるに

伏見里の雪　　有家朝臣

夢通ふ道さへたえぬくれ竹のふしみの里の雪の下折

ふしみといふは夢の縁也下をれは下折の聲に也くれ竹は伏見の枕詞なるをやかて伏見の里にて竹の雪折するにいひなしたる也三句以下はくれ竹が伏見の里にて雪の下折する聲にとみるべし

家に百首歌よませ侍けるに

入道前關白太政大臣

降雪にたくもの煙かき絶て淋しくもあるか鹽竈の浦

○たくもの煙は鹽やかんとて藻をたく煙也雪のふれは汐のくみかたくてやかてある趣也

守覺法親王五十首に　俊成卿

雪ふれは嶺のまさか木埋もれて月に磨ける天の香山

月にみかけるとは雪にうつもれたるうへに月かけのさすをいへるか若然らは雪の詮なし榊葉を月影にみかく事は雪にうつまずとも然いふへけれは也○月にみかくとは天のかく山の事也榊葉にはあらす榊葉は雪にうつもれてあやなき也さて此注の榊葉を月かけにみかく事は云々次の説に月にみかくへき榊葉は雪にうつもれてみかくとある榊葉を月にみかくとはいかさまにしてみかくならん不審なる事也天のかく山はみとりなる榊なとも埋もれて雪なへてふかくつもりたるか月かけにてり合てきら〳〵としたるは玉なとみかくらん様にみゆる故みかくとはいへる也たゝ榊葉に月の影さすをみかくとはいかてかいはん　もし又月にみかくへき榊

葉は雪にうつもれて天のかく山のすへてをみかけるといへる意にやさるにては詞たらてたしかならす○此說やゝよろしけれと榊葉を月にみかくとある限はいかゝ也一首の意は雪かふれはくまともなるべき嶺の眞榊はうつもれてなへて雪のきら〳〵としたるに月のてりあひて玉なとゝみかくやうにみゆる天のかく山と也玉なと云々はみかくといふもしよりいてくる義也さてはいかなる詞のたらさるにかあらん

題しらす　小侍從

かきくもり天きる雪の故郷を積らぬ先にとふ人も哉

○させるふしもなけれとすゝろによき歌なり

慈圓大僧正

庭の雪に我跡付て出つるを問れに㒵と人やみるらん

○下句人にとはれて其人のつけしあとぞとよそにみるらんかと也

詠むれはわか山の端に雪白し宮古の人よ哀ともみよ

○三句たゝ雪のかゝれる事を白しといへる詩には常ある事なり

雪のあした大原にて　寂然

尋來て道わけ佗る人もあらしいくへも積れ庭の白雪

○上句大原にて都の遠き故也下句はおもひ捨たる意はへ也

百首御歌中に　太上天皇御製

此頃は花も紅葉も枝になししはしなきえそ松の白雪

○花もみちのかはりにみそなはすべきに松の雪にしはしきゆるなと也此御二句あらびたりとて今人はいはぬ事なれといと力ありてめてたし

千五百番歌合に　通具卿

草も木も降紛へたる雪もよに春待梅の花の香そする

春まつといふ事用なくきこゆ○三句は雪の中にといはんか如し四句春まつ梅とは冬の中より咲そめて春を遲しとまつ意也一二の句はこと木草を雪にて梅の花にふりまかへたる也一首の意はいつれの木草も梅の花のやうにふりまかへたる雪中にも春まつ梅には花の香かしてまかはぬと也二句は似せ物の花なり四句春まつといひて正花なる事をしらせて二句と相たゝかはせたり用なしとはいかゝ

鷹狩のこゝろを　左近中將公衡

狩くらし交野の眞柴折敷て淀の川瀬の月をみる哉

○上下にかけ合といふ事はなけれとすゝろにをかしくめてたき歌也

百首歌奉りし時　　式子内親王

月數ふる雪けにまさる炭かまの煙もさひし大原の里

初二句は雪の日數へてふれは寒きまゝに炭をいよ〳〵多くやく故にいふ一首は烟のしけきは常にはにきはゝしき事にするをまさるもいよ〳〵さひしといふ趣なり

年の暮に人につかはしける　　西行

おのつからいはぬをしたふ人やあるとやすらふほとに年の暮ぬる

おのつからはしたふといふへかゝれり○おのつからは俗にもしひよつとゝいふ此歌にてはもしひよつととひ來うといはぬにとひ來る人があらうかといふこゝろ也　いはぬはとひ來よともいはぬ也やすらふは俗に見あはせてゐるといふ意也一首の意は自然とあなたよりしたひてとひくる人やあるとやすらひてこなたよりはとへともいはすてあるほとにはや年もくれぬるをつひにとふ人もなしと也○もしひよつととひ給へといはてもとふ人かあらうかとて引しらうてゐたうちに年かくれるとひ給へといはねはとふ御心はなきかと也

としのくれに　　俊成卿女

へたて行よゝの俤かきくらし雪とふりぬる年の暮哉

初句は年の重なれは過し方は次第にへたゝり行○ゆくといふもしの意也　物なれは年のくれによしあり○よゝの面影とはわか過來たる年々の事をいふ千代は千年といふ事なれは年々をよゝともいふへしかきくらしは物のあやなく差別なくなる事雪とは雪のことくといふ意也さては歲暮の景物なりふりぬるは身の老たる事一首の意は段々と遠さかり行年々の事をおもひ出ても何事も忘れかちにて其面影も差別なくなりて老の積る年の暮そと也

百首歌奉し時　　小侍從

思ひやれ八十の年の暮なれはいか計かは物は悲しき

○誰も歲暮は物かなしき物なれと八十になりての歲暮はいかはかりかなしき物そおもひやれと也

題しらす　　西行

昔思ふ庭に浮木をつみ置てみしよにも似ぬ年の暮哉

こは年の暮に年木とて薪をつむことのあるをよめ

る也それをうき木とよめるは浮木の名をかりてうき事にいへる也○浮木はいひしらすうれしき事也うの字のあらんからに憂き事にとりかたし昔おもふ庭とは靈山の法華會塲い事をおもふなりにはといふ詞塲の字にあたるうき木とはむかし腹に一目ある龜ありけり月日の光をみさる事をなけきけるに浮木ありてなかれ來る龜此木にのりたり此浮木に一つの節穴ありて龜の腹なる目にあたるかゝりしほとにあらき浪たちて浮木を打かへしけるに龜も諸共に打かへされたりさてかのふし穴より日の光をみたりしと也法花妙法の値かたき教にあふ事を浮木の龜の日の光みたるにたとへし也此歌にてはこの上人の法花妙法を傳えられし事也つみ置てとは年木をつむによせて法花行業の功勞をつむ也四句はむかしは年木をつみしに今は浮木をつむ故みしよにもにぬと也年木の事は詞になけれとうき木つむとあると年のくれとあるとみしよにもにぬとあるより聞ゆる也一首の意昔の靈山會塲をおもふ我庭には法花業をまなひ得て浮木を多くつみ置事先年は今ころは年木を多くつみしかそれには似もよらぬ年のくれそと也述懷の義にあらすたゝ道心の歌也　昔おもふと云見し世にも似ぬといへるなりうきこゝろ也○誤解也　ふるき抄に昔をこひたるにはあらす思ひ出たるはかり也といへるは叶はす○さる事なり　さては浮木といへる何のよしそや○古抄の說にても浮木は叶はねとみつからの說尤わろし　すへてよめる歌をみな其人の境界にかなへてとかむとするからかゝるしひことは云也○題詠なとには初春に秋の歌をよみ隆冬に夏の歌をよみ戀せぬ人も人をまち別をおしむ歌をよみ佛信せぬ人も六度修行の歌よむたくひあれは一々境界にかなへては說かたし只述懷の歌はよりくるまゝによみちらしたる物にはあらす必其境界にかなへて自のうへをよむ事也此歌古抄も先年の說も述懷の意なるに境界にかなへてとくをひかことゝいはるゝは正明とはいたく心えのたかへる事也　西行ならんからに岩木にあらされはをりにふれてはなとか昔をこふる事もあらさらん○うき木をうきことによせたるならはむかしをこふとは法師をうとみてあはれ在俗のむかしにあらはやと出家した

る事をくやしくおもふ也さやうの事は中人以上にはなき事也よし在俗のよからんからに今はすへきやうなけれはおもひ捨ていひ出もせぬ事也まして此上人をや此上人のいみしき道心なる事は事の迹にもしるく物にも多くみえて浮世をかへりみる人にはあらす　歌はおもふ心をいつはらすたゝありによみ出れはこそめでたき物にはあれ○上人の歌は道のへにし水なかるゝ柳かけしはしとてこそ立とまりつれ何事のおはしますかはしらねともありかたさにそ涙こほるゝなとやうにたゝありによみ出る風也さるにては西行か心のまゝによみちらしたるなといひてそしられ又かくさまにもいはるゝはかにかくに此上人の歌は先生の心にかなはすうはへをつくろひかさりていさきよくみするはうるさきから國心也○さるまゝにくやしくも出家しにける事かな奉公してあらは官さくをもえたらん家をもおこしたらんよき女にもあひつらんよき子をもゝたらんにやとおもひあやまりて頭そりつる事よとかゝすへいはんは愚癡なる老婆の情なり大丈夫のしかあらんものかはこれをから國心なりとあらは我々はから國心にならんとなんおもふ

攝　政

いその上ふる野の小笹霜をへて一夜計に殘る年かな

夜々をへたる事を笹の縁に霜をへてといへるなり一夜も笹の縁なり○一夜はさゝの縁の詞なれと霜をは笹の縁のことは也といはるゝは風をは雁の縁の詞也といはるゝと同し事也夜々をへたる事とは聞取かたき注なりもしは夜を重ねてといふ義かしからは何の縁にもあれ霜をへてといひてはきこえぬ事也これはたゝ小笹のたひ／＼霜を帶し事也さていそのかみふる野とは霜の縁のふるのためにいへるのみか○霜には打まかせては置といふふるといふ事もありもやしつらん縁の詞にはいと物遠しふる野は大和の布留野にてたゝ名所也霜の縁にあつかるにあらす　又年のふるくなれる意もあるかよみ人の意しられす○もとより此意はなし　四句のにもし一よはかりになるとこそ云へけれ○かくよむか詞の雅なる也にもしかろくみるへし一夜はかり殘る事といふつゝき也さてはにの字少しうきたるやうなれとかくさまによむも常ある事也さ

て此歌上句は序布留野の小篠霜をへては一よはかり殘るとかゝるかくもしを多くかゝりたるか珍しき也されと蘆なとゝはやうかはりて小篠は霜をへて朽葉になりてやう〳〵に折て一よはかり殘るといふ事ありかたくや普通の樣に小篠はよとかゝるはかりかともおもへと三句の勢必下までつゝけてかゝるへきにや一首の意は一年か一夜はかり殘てくれはてたる事よと也　殘るとてとはいかゝ

慈圓大僧正

年のあけて浮世の夢のさむへくはくるともけふはいとはさらまし

夢は夜の明れはさむる物なる故に年のあけてといへりされと年に明といふは俗にちかし○明年をあくる年とはいふへしさらは年のあけてともなとかいはさらんよし常にはをさ〳〵いはすとも夜のあけて夢のさむるに對してうき世の夢のさむるには年のあくるとなとかいはさらん齊明紀の童謠の解におさへたといふ事を說れしとはいたく途を異にしたる論なりかし　又いとふといへるも叶はすすへていとふとは物にても事にてもあるをにくみてなかれとおもふをこそいへ○世をいとふとは世界のあるをにくみて刧火にてやけもうせねとおもふにあらす世中をあちきなうおもふ事なれはいとふの說叶はすいとふとは俗にいやなといふ詞にあたる世をいとふは世上がいやな也年の暮るをいとふは年のくるゝかいやな也　年のくれゆくをいとふとはいひかたし年ならは來るをいとふとはいふへしこれよく人のあやまる事也心得おくへし○いとふと云詞を心えあやまられたる故此論みなかなはす　此結句はなけかさらましとあるへきを○しかいひては迫切なりいとはさらましとのとやかによみたるか作者の本意也　後撰集に花しあらは何かは春のをしからんくるともけふはなけかさらましといふ歌ある故にすこしかへられたるにや○正明は此歌には心もつかてよませ給へるなるへしと思ふ也　もし然らはをしまさらしとこそあるへけれ○なけかさらましよりはやゝゆるやか也されと猶のとやかにいとはさらましといへるなんよき一首の意は年かあけて浮世の夢か覺てさとりをひらく物ならはことしのくるゝもいやてもあるまいと也

百首歌奉し時　　入道左大臣

いそかれぬ年の暮こそ哀なれ昔はよそに聞し春かは

すへて歳暮の歌にいそくとよむは來む年の始のまうけをいとなむ事也物語の歌に元服女御入内なとやうのこと有て其まうけをいとなむを御いそきと云體の語也こゝはそれを用にいそかれぬといひて何の儲する事もなき也　春を早く來よかしと待事と心うるは誤也此歌は入道の御身なる故に春の始のまうけを營むへきわさもなきよし也〇一首の意はいつも墨染の衣て何の支度にも及はぬ年の暮は哀なる物そむかしは節會の裝束大饗の裝束とて其まうけにて春をよそに聞てはゐられさりしと也

入道前關白百首歌よませ侍ける時歳暮　　後德大寺左大臣

石はしる初瀨の川のなみ枕早くも年のくれにける哉

上の句は序歌の心かくれなしなみ枕普通は旅泊の歌によむなみを枕にすといふ事此歌なるはめなれぬ詞なり此ころの文章に川のなかれの早きを瀨枕打てそなかれたるといへる事あるは瀨にあたりてわきかへる事ときこえたれはこゝも初句にあはせて石にあたりてわきかへる心なるへしさらは其ころの流俗の語なり俗語を歌によむは俊賴朝臣の風にて千載集以後はまれなる事なり

土御門内大臣家にて海邊歳暮　　有家朝臣

行年ををしまの蜑のぬれ衣重ねて袖に波やかくらん

これは蜑の歳暮のさまをおもひやりたる意也かさねては衣の縁にて常に波にぬれたるうへに年をしむとて又淚をやかけそふらんと也

寂蓮

老の波こえける身こそ哀なれことしも今は末の松山

二三句今年も今はといふにかけあはす〇上句は上句にて哀なれといひはなちて下句はさらに起りたる歌也四句の上に其上に又といふ事をそへて心うへし　又こえむ身そ哀なるほとそいはまほしき〇しかいひてもきこゆれといはゆる草庵體にて器小也英雄なる所なしこれは花も紅葉もなかりけりを花も紅葉もなにはかたと直したるある人の例にてよろしくもあらす三句にていひはなちたるは此ころの風調にて豪氣あり一首の意は年のよりたる身は哀なる物なりそのうへに又ことしも末になりて

又も老をかさぬるとなり

千五百番歌合に　　俊成卿

けふことにけふや限と思へ共又も今年に逢にける哉

けふや限は歳の暮にあふもことしや限ならんの意
四句ことしは年のくれのけふの意也〇けふことに
は除日ことに也けふを限とおもへともは此除日を
かきりとおもへともの意又もことしにあひにける
哉は又も今年の除日にあひにけるよと云意なり除
日といはすけふといひ今年といひてきかせたるか
文章也　二句のけふと四句のことしとをたかひに
入かへて心うへし〇除日といふもしをそへてみれ
は二句も四句もよみのまゝにてよろしこれを添す
しては入かへても聞えす　いたく老たる人の意ま
ことにかくのごとくなるべしとおもひやられて哀
なり

# 尾張廼家苞三

## 新古今集

### 賀歌

文治六年女御入内屏風に　　俊成卿

山人のをる袖匂ふ菊の露打拂ふにも千代はへぬへし

本歌のぬれてほす間は〇濡てほす山路の菊の露の
まにいかてちとせを我はへにけん　猶しばしのほ
ともあるへきを打はらふにもとは又其うへをいへ
る也〇本歌の云々ととくはむつかしたゝ本歌の詞
をとりて一層せちによみ給へる也露の一期を千代
と定めてぬれてほすも一期也打はらふも一期也一
首の意は仙人が菊を折とて露か袖にうつりて匂ふ
其露を打はらふはまことに少しのほとなれとも其
間にも千年はたつてあらうと也

百首歌奉し時　　式子内親王

天か下めくむ草木のめも春に限もしらぬ御代の末々

〇めもはるには目もはるかに也古今集紫の色こき
時はめもはるに野なる草木そわかれさりける

松有春色　　攝政

おしなへて木のめも春の淺みとり松にそ千代の色は
籠れる
○三の句の下になる中に取わきてといふ詞をそへ
て心うへし

百首歌奉し時

敷島や大和しまねも神代より君か爲とや固め置けん
○初句は序大和しまとは日本國也それを島といふ
事は日本紀に神日本豐秋津島とありかたむとは古
事記に修理固成久良下那須多陀用閇留之國と有
國のはしめて成出し時はに潮土のましりてふわふ
わとしたる物なりし故かくよみ玉へり一首の意は
日本といふ國は神代に國造り給ひし時より天皇の
しろしめす爲とてやつくり固めなし給ひけんと也

千五百番歌合に

濡てほす玉くしの葉の露霜に天てる光幾よへぬらん
玉籤の葉は祭の時の榊葉なり○祭の時といはす神
前にさしたる賢木を云　ぬれてほすとは古今集の
菊の歌を心えあやまりてよみ玉へるか此歌にては
心えかたししひてたすけていはヽいくよへぬらん
といふにあはせてぬれてはかわき〳〵する意か○
ほすといふ詞おのつからかはく事也例はうらみわ
ひほさぬ袖たに云々空蟬の啼ねやよそに杜の露ほ
しあへぬ云々榊の葉の露霜にぬれてかはくを一期
として神の御光幾世へ給ふらんと也

祝のこヽろを　　俊成卿

君が代は千代共さヽし天の戶や出る月日の限無れは
さヽし出る戶の緣なり三の句少しおたやかならす
をといはん方や勝るへき○をといはんは尋常の口
つき也猶やそまさるへき人々の心にある事か

千五百番歌合に　　定家朝臣

我道をまもらは君をまもるらん齡はゆつれ住吉の松
上の句歌の道さかゆる君か代なれは此道をまもり
玉ふ住吉の神はさためて君を守り給ふにてあるへ
しと也四の句松のよはひを君にゆつれ也

月多秋友　　寂蓮

高砂の松もむかしになりぬへし猶行末は秋のよの月
高砂の松もむかしの友ならなくにといふ歌をとり
て此歌にては其松を友としてさて友といふ事をは
いはてしらせたり又松も昔の友云々とある本歌の
詞を松も昔になりぬへしと取なしたる面白し一首

の意千年へむ松も終に枯てむかしに成ぬへし其後も尙友とすへき物は秋夜の月そと也○月はたらかすとはいはておもしろしとあるはいか丶

和歌所の開闔になりてはしめてまゐりし日奏し侍ける　　源家長

藻鹽草かく共つきし君か代の數によみ置和歌の浦波

○かくともつきしとは籌（カズ）をかく事なるへきに數によみおくといひては二の句へまはるへからすいかなる事ならん

入道前關白太政大臣宇治にて人々に歌よませ侍けるに　　前大納言隆房

嬉しさや片敷袖に包むらんけふ待えたるうちの橋姬

○本歌さむしろに衣かたしき今宵もや我を待らんうちの橋姬又嬉しさを何につ丶まん唐衣たもとゆたかにたてといはましを例の詞はかりをとれる也一首の意は此君のおはしたるを待えてうちの橋姬も嬉しさを袖につ丶まんと也此歌祝の意なし雜部に入るへきにや

百首歌よみ侍しに　　後德大寺左大臣

やをか行濱の眞砂を君か代の數にとらなん沖津島守

○濱の眞砂は限なき數なり八百日行濱ならんにはます〳〵限なきかす也八百日行濱萬葉集にみえたる詞也

家の歌合に春祝　　攝政

春日山都の南しかそおもふ北の藤波はるにあへとは

此御歌喜撰か歌をとりてしかそおもふといひ北にむかへて南といへるたくみなれと都の南といふ事も何の用なく○宇治は都の辰巳なる故別に用はなけれともたつみとよめりこれもそのことく春日山はみやこの南なれは別に用なけれとも南とよませ給へりもし難ならは喜撰の難なり此殿の難にはあらす　しかそおもふといふ事もた丶おもふにてこそあるへけれしかそといふ事あまりてきこゆ○かくいはる丶は凡夫の歌のことく北の藤なみ春にあへと思ふと結句より三句へかへしてみるべく思はれたるなるへし此比の歌は變幻百出にて一途をまもりてはいひかたし此歌は二句三句四五とつ丶きたり一首の意は都の南におはします春日の神此神にいのりて我はかう〳〵なんおもふ北家の藤氏時にあひて世に榮へよといふ事也かくのことく心

うれはしかそといふ事あまりても聞えす　其うへむすひのとはもはもし何の心そや○あかぬ別のくるはものかはといふ歌はあかぬ別のくるは物の數かといふ事にてはもしさせる意なし此はもしを何の意そやとあらは同罪多かるべし

仁安元年大嘗會悠紀稻舂歌　俊成卿

あふみのや坂田の稻をかけつみて道ある御代のためしにそつく

○かやうの歌はよみにくき物にやあらん此卿の歌のやうにもなし

仁安元年大嘗會主基方稻舂歌丹波國長田村　權中納言兼光

神代よりけふの爲とや八束穗に長田の稻のしなひそめけん

○本文日本紀に保食の神の御身よりなり出し稻種をとりて天狹田及長田に植しかはその秋八束穗にしなひて甚快かりし事みえたり長田村を神代の長田にしてよみ給へるおもしろき趣意なり

元曆元年大嘗會主基歌青葉山　式部大輔光範

立よれは涼しかゝけり水鳥の青葉の山の松の夕風

○すかたよろしき歌なり

建久九年大嘗會主基屏風に六月松井　權中納言資實

ときはなる松井の水をむすふ手の雫ことにそ千代は見えける

○本歌むすふ手の雫にみる山のゐのあかても人にわかれぬる哉水をむすふといふにて月次の六月の意をもたせたる也

哀傷歌

公守朝臣母みまかりて後の春法金剛院の花を見て　後德大寺左大臣

花見てはいとゝ家路そ急れぬ待らんと思人し無れは

○一首の意はいつの年も花をみては家を忘るれとも妻のまつへしとおもふ故いそきかへる事なりしにその人身うせて今は宿にまつ人のなきゆゑに花を見ていよ〳〵家路を忘ると也妻の存生の時すら花を見ては家をわすれしに妻をうしなひては待へき人もなき故いとゝ家路をおもはぬと也公守朝臣母とは大納言實國の女後德大寺左府の北方なり

定家朝臣母のおもひに侍ける春のくれにつかはしける　　攝政

春霞かすみし空の名殘さへけふを限の別なりけり

上句は立のほりし烟の○此注はむつかしたゝ煙といふ事也　なこりなりし霞さへ也別はうせにし人の別のうへに又餘波とみし霞さへ也けふは別なりといひて春のわかれをかねたり○霞は春の景物にして夏はかすまぬ物にしてよみ玉へる御歌なれは霞に別るといふはすなはち春にわかるゝにてわかるゝ物一つなり霞にもわかれ春にも別ると相並へたる意にはあらす一首の意はなき人の野へのけふりの名殘か大空に春かすみになりてかすみしか霞は春はかりの物なれば其霞にさへわかると也

公時卿の母みまかりて歎侍ける比大納言實國卿の許に申つかはしける　　後德大寺左大臣

かなしさは秋のさかのゝ蟋蟀猶故鄕にねをや啼らん

詞書公時卿は實國卿息にて其母は中納言家成卿の息女實國卿の北方也なほは此歌にてはいよ〳〵ことにといふこゝろ也○こゝはそれよりもましてといふ意　ふるさとゝは身まかりし人のなき跡をいふ○ふる里とはなき人の住し宿則實國卿の里第也一首の意は悲しきことは秋のならひなるかそこにはいよ〳〵殊に蟋蟀のことくねをやなきたまふらんと也○一首の意はかなしさを秋のならひに嵯峨野にては蟋蟀かねをなくかそれよりもまさりてなき人こふる故鄕にて君かねになき給ふならんと也　さか野といへるは秋のさかといひかけ又蟋蟀をいはん料のみか○此分にてもよき歌也　はた實國卿さか野に別庄なとありて此時こもりゐられけるかしらす○さか野といひ故鄕といへる語勢さる事ならんもしりかたしさらはいよ〳〵よき歌なり

母の身まかりけるをさかのほとりにをさめ侍ける夜よみける　　俊成卿女

今はさは憂世のさかの野へをそ露消果し跡と忍はめ

初句さばはさらば也二三の句はうき世のならひとてなきからをもとゝめす送りてをさめし野へといふ意を嵯峨野へいひかけたる也○かくの如しきえはてしといふはたゝ消しといふとは殊なりこゝにては母の身まかられしか消たるにてそのなきからをたにとゝめすおさめたるかきえはてしなり

すへて今の世の歌人ははてしはつるといふ詞を何心なくみたりにそへてよむはひかことなり○はてしはつるにかきらす何詞にてもみたりによみてはわろかるへし母の身まかられしがきえたるにてそのなきからをたにとゝめすをさめたるがきえはてし也といはるれと身まかられていまた葬らすとも蘇生たにせられすは消果しともなとかいはさらん

母の身まかりにける秋野分しける日もとすみ侍ける所にまかりて　定家朝臣

玉ゆらの露も泪もとゝまらすなき人こふる宿の秋風

玉ゆらはしはしといふ意なり八雲御抄にみえて此歌も其意によまれたりと聞ゆさて露の風にさわくさま泪のこほるゝさま共に玉のゆらくに似たれは其よしをも兼てよみ給へるにや○一首の意はなき人こふる宿には秋風が吹て露もなみたもいさゝかのまもとゝまらぬとなり

父秀宗身まかりての秋寄風懷舊　秀能

露をたに今はかたみの藤衣仇にも袖をふくあらし哉

今は露をたにかたみとおもふ藤衣の袖なるをあたに吹ちらす嵐かな也○あたには物のたまりもあへぬ事一首の意は人にわかれて後は藤衣の露なりともかたみにせうと思ふにそれさへ嵐かふくとなり今はといふに心をつくへし常には袖の露けさをはいとふわさなるに今は也○此心はなし

久我内大臣春の比うせて侍ける年の秋土御門内大臣中將に侍ける時つかはしける○久我内大臣は雅通公土御門内大臣通親公の父　殷富門院大輔

秋深きね覺に如何思出るはかなくみえし春の夜の夢

○春と秋と對ね覺と夢と對にて合掌の句法なり

返し　土御門内大臣

みし夢を忘るゝ時は無れ共秋のね覺はけにそ悲しき

○一首の意は夢のやうにはかなくなりし人の事をいつとても忘るゝ事はなけれとも秋のね覺を尋て給はるかけに其秋のねさめが中にも悲しき頃そとなり也

みちの國へまかりける野中にめにたつさまなる冢の侍けるをとはせ侍けれはこれなん中將の塚と申とこたへけれは中將とはいつれの人そとと

ひ侍けれは實方朝臣の事となん申けるに冬の比
にて冬かれの薄ほの〳〵みえわたりて折節物悲
しくおほえ侍けれはよめる　　西行
朽もせぬ其名計をとゝめ置て枯野の薄形見にそみる
○一首の意は野中の古家に實方朝臣のはかといつ
までも其名はかりはとゝまりてあたりは枯野のす
ゝきはかりなれはそれを形見そと思ひてみると也
同行なりける人打つゝきはかなくなりにけれは
思ひ出てよめる　　慈圓大僧正
故郷をこふるなみたや獨ゆく友なき山の道しはの露
○わかき御時修行せさせ給ひて旅にて同行の法師
の死たりけれは御心ほそくて都こひしくおほした
る也一首の意は故郷をこひしさにおとす涙が友も
なき山路のひとり行道の道芝の露かと也
母のおもひに侍ける秋法輪寺にこもりて侍ける
に嵐のいたく吹けれは　　俊成卿
憂世には今は嵐の山かせにこれやなれ行初なるらん
法輪寺は嵐山にあり歌の意うき世にはあらし今は
のかれむと思ひたつ比なれは○かくおもひたつは
母のおもひにふかき故也　此あらしや程なく此山
にかくれ住て嵐になれ行へきはしめならんと也
定家朝臣の母みまかりて後秋の比墓所ちかき堂
にとまりてよみ侍ける
稀にくるよはも悲しき松風を絶すや苔の下に聞らん
○まれに來てきくたに悲しき此松風の音を苔の下に
て夜ことに絶すや聞らんと也○こゝろさしあはれ
なるうたなり
十月はかり水無瀬におはしましゝ比前大僧正慈
圓のもとへぬれてしくれのなと申つかはしてつ
きのとしの神無月無常の御歌あまたよみ給てつ
かはし侍りし中に　　太上天皇御製
思ひ出る折たく柴の夕煙むせふも嬉し忘れかたみに
思ひ出る折ふしといひかけ給へる也忘かたみは煙
となりしかたみ也○詞書の意は御おもひ深かりけ
る女にわかれさせ給ひて御なけきの御意はへをぬ
れてしくれのと云歌によませ給ひて慈圓僧正に給
ひし也さて一年をへて又其ころかの女の事をおほ
し出て無常の歌あまたよみ給ひて又慈圓僧正のも
とへ給はせし也一首の意はなき人をおもふ折から
折たく柴の夕くれの煙にむせふのもうれしいはか

なき人のかたみとおもへはと也

御かへし　前大僧正慈圓

思ひ出る折たく柴と聞からに亂しられぬ夕けふり哉

○下句は夕けふりのごとく御こゝろ亂れておはしまさんと也みたれしられぬとは御心のみたれの限しられぬといふ事なるへし

雨中無常　太上天皇御製

なき人の形見の雲や時雨らん夕の雨に色はみえねと

朝雲暮雨の意なり又初二句はけふりとなりしなごりの雲の意をもかね給へり○一首の意はなき人の野への煙が果は雲となりて其雲より此しくれはする事か夕くれに雨中の事にてかきくもりて物のあやめはみえねとも也あはれにこゝろくるし

權中納言道家卿母かくれ侍にける秋攝政のもとにつかはしける　俊成卿

限なき思ひの程の夢の中はおとろかさしと歎こし哉

ほとのうちはといへるかさなりて聞くるし○此難はいはれたりとおほし其故は一二句かきりなきおもひのほとのとあるは俗に忌中といふにあたる四十九日の間の事なるへしほとは中の字の義にあたる三句夢の中はゝおもひにくれたるか夢のやうなる事にて俗に夢中といふこれ又中の字の義なれはそかしされとほとゝうちと詞のかはりたるうへはかくもなとかよまさらん　結句もくちをし○これはしからすいとつき〳〵しき詞也一首の意は限りなき御おもひの日比はいかにととふらひおとろかしたてまつらは却て御おもひのますわさなれは我身ひとつに歎息して月日を過したりと也

かへし　攝政

みし夢に驚て紛れぬ我身社問るゝけふも先悲しけれ

若紫卷見ても又あふ夜まれなる夢の中にやかてまきるゝ我身ともかな○夢にまきるゝの出所なりみし夢とは人の夢のことはかなくなりしをいふやかてはそのまゝに也○俗に直にといふ上方にてはつひといふ其時直に其夢にまきれてわれも共にしなさりし也　まきるゝは其夢と共にはかなくなるをいふ○一首の意は夢のごとく死たる人に直に一所にえしなさりしわか身の事か常々悲しいにかやうに人にとはるゝけふとてもまつ一番にそれか悲しいと也わか命のいとはしきなり

無常の心を　西行法師

いつ歎きいつ思へき事なれは後の世しらて人の過覧

○初句は後生悪趣におつる事をなけく也二句は後生善所に生せん事をおもふ也おもふとは憶念飯命の義一首の意は等活無間の苦患をなけき等覺妙覺の樂果をねかふもいつすべきことそみな今生の業也今生は老少不定なれはたゝ今すべき業なるを後生ともしらすして世上の人の月日をむなしく過る事と也釋教の歌にとりてはかばかりなるはめてたし

慈圓大僧正

皆人のしりかほにしてしらぬ哉必しぬる習ひ有とは

○一首の意は世間の人かみな人間は必しぬるならひのある事とは知た顔するなれとも實にはしらぬ事ぞもし知たらは後世のいとなみをすへきにさもあらぬはとなり

きのふみし人はいかにとおどろけは猶なかき夜の夢にそ有ける

三の句とをはとある本はひか寫しなり○驚けとゝある本もあるへしされと今校する所七八本みなはなりはにてはきこえす○はにてもきこゆるなり

　きのふまて世にありし人のけふはなくなりたるをはこはいかにとおどろきなからもなほ無常をさとらす長き夜の夢にまよひゐるよと也長き夜の夢佛經の詞なりおどろけとゝいひて猶長き夜の夢といへる面白し○夢と驚くと上下に有と也　人はといへるはもしの意は人のうへをはの意なり○はとある本の意はきのふ見たりし人をけふはその人か死しか夫は何としたる事そとおどろく習なれはやはり浮世は長夜の夢といふ物そと也とゝある本によられたるみのゝ家つとの説もきこえはすれとなをばとある本そまさりたるへき

蓬生にいつかおくへき露の身はけふの夕暮あすの曙

二の句にてきれたり○三一二句四句五句とかくの如く續きたり　夕くれあけほのともに露の縁也○よもきふにいつかおくへきはいつか死て野へに葬られんといふ事露の身とはもろき人の命をいふ一首の意はかくもろき人の命はいつ死て野へに葬らるゝことやらんけふの夕くれかあすの明爪かと也これらの歌唐詩の對結の句法に似たるにや

我もいつそあらましかはとみし人を忍ふとすれはいと丶そひ行

拾遺世中にあらましかはと思ふ人なきか多くもなりにける哉あらましかはと思ふとは其人の世にあらはとあらんかくあらんと事ふれて思ひ出るをいふ〇生てゐたらはよかろうにと思ひ出る也　此歌の二句のともしは忍ふといふへかゝれりみし人をあらましかはと忍ふ也〇いかてか然らんたゝ二三とつゝけて心うへし此注いとよしなし　結句は本歌の下句の心にて我もいつ其數にいらむと也〇下句はかりの意といふはなき事なる事前にもいへり扨此歌にも本歌にも結句に我もいつその人數にいらんといふ事はなし此歌の初句そ其心には有ける　いつそとは前の歌の蓬生にいつか置へきの意と同し〇蓬生にいつか置へきとは死て野に葬る事これもしぬる事にはあれと野に葬る心なしいかなる說を立らるゝならん一首の意は我も死ていつ其人かすにいるてあらうそ此世に生てをるならはと思ふ人を戀したふまに其數か段々とそふと也

前參議教長高野にこもりゐて侍けるか病かきりになりぬとき丶て頼輔卿まかりけるほとに身まかりぬとき丶てつかはしける　寂蓮

尋來ていかに哀となかむらんあとなき山の峰の白雲

詞書頼輔卿は教長卿の兄なり初句來ては行ての意也〇かくの如しされと行てといふへきを來てといひてはいかゝ也なと字餘りに尋行てとよまれさりけん　すへて今の詞ならは行てといふへきを昔はきてといへる多し〇昔とても來ては來て也行ては行て也いかてか相混雜せん　嶺のしら雲は烟となりし餘波の意あるへし〇一首の意高野山にて跡なくなりし人の終の烟のなこりが峰の白雲であるそれを尋行て見ていかに哀となかめたまひけんとなり

人におくれてなけきける人につかはしける　西行

なき跡の面かけをのみ身にそへてさこそは人の戀しかるらめ

〇なき人とはいはてなき跡の俤とあるいさゝかあかぬこゝちす穴賢

なけく事侍ける人とはすと恨み侍けれは

哀とも心に思ふほとはかりいはれぬへくはとひこそ
はせめ
初句ともはたゝとゝいふ意にてもはそへたるのみ
也されと此もはよくもとゝのはすせんかたなさと
きこゆ然るを此もにまとひて初句を四句へかけて
注したるはいはれす二句へつゝきたる詞なるをや
○此説の如く哀と心におもふと二句につゝきたり
ほとはかりと重りたるもいかゝ○これはさる事
結句もよわし

無常の心を　入道左大臣

つく〳〵とおもへはかなしいつまてか人のあはれを
よそにきくへき
○けふは人の死ぬるなけきをよそにきくなれとあ
すはわか身のうへにならんと也

左近中將通宗かはか所にまいりて　土御門内大臣

おくれゐてみるそ悲しきはかなさをうき身の跡にな
にたのみけん
○内府は通親公通宗朝臣はその子也一首の意跡に
おくれゐて世の無常をみるか悲しいかやうにはか
なき人をうき我身の跡に殘りて跡とふてくれうと
何頼みし事ぞと也

覺快法親王かくれ侍て周忌のはてに墓所にまか
りてよみ侍ける　慈圓大僧正

そこはかとおもひつゝけて來てみれはことしのけふ
も袖はぬれけり
○詞書はてとは二夜三日なとの法事をして終の日
をいふ　初句に墓といふもしをこめたり○さる事
なり　但しそこはかとなくとこそいへそこはかと
おもひつゝけてといへるは聞えぬ事なり○そこは
かとおもひつゝくるとはそここゝとおもひつゝく
る事にて存生の時の事を何くれとおもひつゝくる
也此歌のつゝきよくきこえたりとおもふをかくい
はるゝはいかなる故ならん　上下のかけ合のなき
歌なり

離別歌

みやこの外へまかりける人によみて贈ける　惟明親王

名殘思ふ袂にかねてしられけり別るゝ旅の行末の空
○なごりとは人にわかれて後その人の事かこゝろ

に殘りてはなる丶事なき也なこりおもふ袂とはいまた別れさるさきより別れて後のこひしかるへき事をおもへにたもとのぬる丶也一首の意は別に臨みて別れて後戀しかるへき事をおもへはやかて袂かぬる丶故別て行給ふ行末の草葉の露にて袂がぬる丶事もおもひしられたりと也此歌正明かもたる本に誰としもの上に有こ丶は其序也諸本わするなよの次にあり其心してみるへし

守覺法親王家五十首歌に　隆信朝臣

誰としもしらぬ別の悲しきは松浦の沖をいつる舟人

松浦はもろこしへ渡る海なれは誰ともしらぬ人の別もかなしと也

みちのくにへまかり侍ける人に餞し侍けるに　西行

君いなは月待とても眺やらんあつまの方の夕暮の空

○一首の意君がみちのくへ行たまは丶夕くれの月まつにつけてもあつまの方のそらよとてなかめやらうと也

遠き所に修行せんとて出たちける人々わかれをしみてよみ侍ける　西行

たのめ置む君も心や慰むと歸らん事はいつとなく共

詞書をしみけるにとかけれはとか有へき事也上句二三一と次第して見へしたのめおかむはいつのほとにかへらんと契りおく也君もといへるに我もの意あるへし○一首の意は此旅は歸京はいつ比の事といふ心あてはなけれと大ていゝつ時分と約束しておかう君も心かなくさむかもしらすわれらもはり合になるてあらうとたのむと也

さり共と猶あふ事を頼む哉しての山路をこえぬ別は

○一首の意又いつあはうとさきにこ丶ろあてはなけれと死わかれといふてもない故にさはいひなから又あふ事かあるてあらうとたのむとなり

題しらす　俊成卿

假初の旅の別としのふれと老は泪もえこそとゝめね

かりそめの旅と引つ丶けてみる時はちかき旅なり○此意なり　又かりそめのと切て旅の別と見る時は死ぬる別にむかへていふ也老はとあれはさも聞ゆる也○老はとありてもさは聞えすかくうかちて見るはよくもあらす　忍ふはおさへしのふ也○一首の意はたかゞ其所まて行て來るちよつとした旅

の別の事とこらへてはみれと老といふ物は泪もろな物でえとゝめぬとなり　結句はたひ行人をえとゝめぬになみたもえとゝめぬなり○もは嘆辭いまの俗にも京人はもうといふつゝともうなといふ尾張人はまあといふをれがまあきのいたお事といふはなといふ也二つをかねたるもにあらす別もえとゝめぬと別をかけてみるへからす

定家朝臣

忘るなよ宿る袂はかはる共かたみに絞るよはの月影

二三の句は又こと人と契をかはして今かたみにしほる我袂はかはりてこと人の袂にやとるとも也○此心にはあらしこと人と別する義にはあらすたもとのかはるとは月日ふるほとに衣を更る也○かたみにはたかひに也契きなかたみに袖をしほりつゝ云々○此歌すへてこゝに用なし　一首の意は又こと人とかたらひをなして袂はかはるとも今かたみにしほりあひてわかれをゝしむ此たもとにやとる月影をはわするなとなり○一首の意はわかれのかなしさにたかひにこよひの月にたもとをしぼるがたとへ月日がたちて衣をかへてやとるたもとはかはるともこよひのかなしさをわするゝなと也先生の説はすへて戀の歌のやうなるときさま也こと人とかたらふなともともとより此歌の義にあらす　わかれ行人の歌にてとゝまる女によみかけたる意也○わかれ行人の歌としてもきこゆれと猶旅たつ人のうたなり

羇旅歌

守覺法親王家五十首に旅　俊成卿

夏刈のあしのかりねも哀なり玉江の月の明かたの空

二の句もゝしをおもふに此あはれなりは時所のけしきをめてたる方ときこゆもしかなしき方ならはかりねぞ哀なるとあるへき事なり○大かた旅の歌は哀に悲しき方によみならへれと此次の歌も面白き方なれはさる意にもなとか讀さらんいとよく説えられたり夏刈の蘆は序玉江によしありて有心の序也一首の意は玉江の月の明かたの空はあはれに身にしみておもしろけれは旅のかりねもよき物そとなりもゝしを嘆辭としてかなしき方に聞ゆれとなほ先生の説の如くおもしろき方に見へき也　後拾遺に玉江の蘆をふみしたき云々○此歌の本歌に

あらすこゝに用なし

立歸り又もきてみむ松島やをしまの笘屋波に荒すな

○一首の意はこの松しまのけしきのおもしろくわすれかたきによりて立かへり又來てみるへき事もあるへきをこよひかりねしたるをしまの笘屋をなみにあらすなと也

定家朝臣

ことゝへよ思ひおきつの濱千鳥啼々出し跡の月かけ

古今に君をおもひおきつの濱に云々此本歌はたゝ君をおもひて尋ねきつといへるにておきつの濱にいひかけたるにはあらさるを○此歌本歌をとりしにあらす以上无用の事也　こゝの歌は思ひ置といひかけたり思ひを殘し置て別れ來つるなり○かくの如し　跡の月影は別れ來し方の空にみゆる月也○跡にとゝめし女を月にたとへたりことゝへとは文なとおこせて有さまをもとへといふ事一首の意はわか心を殘し置てなく〳〵出來たる跡にとゝめし人よ此たひねのうさをいかにと時々事とひおこせよと也かくておきつの濱は旅宿の所千鳥は啼々といはん料はかりにて跡は其緣のことは也　さる故に別れ來つる跡の事を語りて聞せよと其月にむかひていへる也○ことゝへよといふ五もしを別れ來つる跡の事を語りてきかせよといふ事とはいかにいはるゝ事ならん

家隆朝臣

野への露うらわの浪をかこちても行へもしらぬ袖の月かけ

上句やとれる月影の袖にとまらぬ事を露や波にかこつ也○かこつとは嘆く意歟とまるとは宿る意かなとやらん聞取かたき注さく也　露波の袖にかゝるをかこつにはあらす○かこつをうらむる心にみられたる也　一首の意袖にやとれる月を旅寢のなくさめにみつるを其月も袖にとまらぬを惜みてやとしたる露や波にかこちうらむれともつひに其月かけはゆくへもしらすきえにしよし也○以上もの遠き説なりさも聞ゆる事にやあらん　ゆくへもしらぬといへる旅によせある詞なり○上句野へにては野への露をかこちうらわにてはうらわの波をかこつにてあはれにわひしくおもふ也下句はされと露波の便にこそ袖にうつる月をも見て心をなく

さむれ露浪の便ならては袖の月影も行へをしらすと也されと露浪の云々はもの字にこもれる餘情也

旅の歌　攝　政

もろともに出し空こそわすられぬ都の山の有明の月

○一首の意はみやこの山の有明の月の出るころもろ共に出て來たりし其夜の月のかけがわすられぬ事よと也

題しらす　西　行

都にて月を哀と思ひしは數にもあらぬすまひ（さひイ）也けり

旅にて見る月のあはれさにくらふれはみやこにありて見しあはれさは物のかすにもあらぬすさひにてありしよとなりすへてすさひとはまめやかに心をいれてするにはあらてたゝ何となくはかなくすることを云手すさひ口すさひなとのたくひ也○物の數にもあらぬすさみ事也と云ては義をなさすいかゝさてすさひはさびと同言にて進むこゝろを本義とす雨ふりすさひ風吹すさひもその定也されと又轉々の故にやあらん此說のことくまめやかに心をいるゝとはなくて何となくはかなく物する手すさひ口すさひなとの類ありて表裏二義なり今はすまひといふ本によりたれと猶いふ　此すさひをすまひとある本は誤なり○一首の意は此山里にて月をみては物のあはれ限なき事都にて月をあはれとおもひしは物の數にもあらぬやうなる今のすまひそと也

月みはと契りて出し故鄕の人もや今宵袖ぬらすらん

故鄕をわするゝ時は月見はたかひにおもひ出んと契おきし人もこよひわかことく月をみておもひ出て袖ぬらすらんとなり

五十首歌たてまつりし時　家隆朝臣

あけは又こゆへき山の峰なれや空行月の末の白雲

白雲の下にはもしをそへて其下へ上の句をつゝけて心得へし

雅　經

故鄕のけふの面影さそひこと月にそ契るさよの中山

わかれしまての面影は月にうかへとも其後のおもかけはいかならんしられす戀しきほとに今日の面影をさそひ來て見せよと也佐夜中山はさやの中山なれ共此集の比に至りては夜の意をこむる時はさよの中山とよめり今はなへて然いふなり

和歌所月十首歌合に月前旅　　　　攝　政
忘れしと契置つるおもかけはみゆらん物を故郷の月
三四の句は我面影の故郷にみゆらん也結句は故郷人のみる月なりさて四の句物をといへるは○音つれもせぬはいかなる事そ忘れやしつらんといふ事をふくめたり初句にひゝかせてみるへし　さりとも我事をわすれはせしおもひ出らんといふ意なるへし○一首の意は故郷にて別し時月をみはわすれしと約束したる事なれは此月にむかひて我俤はみゆるてあらうに音信のなきはいかなる事ならんかくてはわすれやしつらんとなり　されと此詞すこしおたやかならす○をもしを誤解したる説なり

旅の歌　　　　慈圓大僧正
東路のよはの眺めをかたらなん都の山にかゝる月影
初に此我○旅ねする　といふ事を添て心うへし○二句なかめのあはれをとことはをそへて心うへし四句都の山は比叡逢坂なと也都を出し夜野路なとにてやかて旅宿したる趣なり

海邊重夜といへる事を　　越　前
いく夜かは月を哀と眺め來て浪にをり敷伊勢の濱荻
○伊勢の浦つたひに日數へたる旅ね也三句の來てとある來もしのこゝろはあはれ〳〵となかめ〳〵してといふ義なり

百首歌奉し時　　　宜秋門院丹後
しらさりし八十瀬の浪を分過て片敷物は伊勢の濱荻
旅のやうをもしらてさま〳〵ならはぬ事ともの多きをいへる歌也しらさりしといふに心をつくへし○此注は初句を下句へもかけて見るへきかことしその義ならは初句をしらさりきといひて下にかへるてにをはあるへき也されとこゝにしとあるうへは八十瀬計にかけて心うへからすしらさりし八十瀬の浪を分るといふか侘しき事の一條伊勢の濱荻をかたしくかわひしき事の一條なりかく艱難をいひつらねて一首としたるなり　波を分といふ事鈴鹿川には少し似つかぬ心地す○雲を分草を分といふは分るといふ事おもくて雲をおし排き草をおしひらく也野を分山を分とは野をおし排き山をおしひらくにあらねは分といふもしかろくて野を經山をふるをいふなりこゝも八十瀬の浪を過るこゝろとせは似つかぬ事もあらし物をや其うへこれは八

十瀬といふ數の多きに分といふへき勢あらしやは

式子内親王

行末は今幾夜とかいはしろの岡のかやねに枕結はむ

本歌萬葉一君か代も我世もしれやいはしろの岡のかやねをいさ結ひてな○三句以下此歌の三句以下により給へり　君か代もわか世もしれやとあるにつきて○本歌の此句は此歌にすへて用なし　今我行末の旅寢は又幾夜ならんと也本歌のよは代なるを夜にとりなし給へる也○しからす本歌の初二句はこゝに用なしたゝ夜と代一もし似たれはとて牽強すへからす　二三のつゝきいはんといひかけたるにはあらす二句より結句へつゝけり○三句いはゝかといふ秀句也かもし下へめくらしてみるへし二句より結句へつゝくとあるもいかゝ句つゝきは一二三四五とつゝけり一首の意は行末を今いく夜といひしならは岩代の岡のかやねを枕にむすふならんと也行末をかそふる意也

松かねのを島か磯のさよ枕いたくな濡そ蜑の袖かは

○上句二一三とつゝけて見るへし下句蜑の袖にもあらぬにあまりにぬるゝなと也海人の袖はなみにて濡るを自のは涙にぬるゝ也

千五百番歌合に　俊成卿女

かくてしも明せは幾夜過ぬらむ山路の苔の露の席に

初句のしはやすめ詞にてかくても也二三の句はあかせはあかされて幾夜過ぬらん也○下句旅宿のからきさまをみるへし

攝政家歌合に羇中晩嵐　定家朝臣

いつくにかこよひは宿をかり衣日も夕暮の嶺の嵐に

○三句宿をからんとかゝりて日もの枕詞也結句にもしはみねのあらしのわひしきにといふ心のに也

旅のうた

旅人の袖ふきかへす秋風に夕日さひしき山のかけ橋

秋風夕日山のかけ橋おの〳〵こと〳〵にてたかひに何のよせもなく○三の物々はことなれと意つゝきたれはこと事にあらす何のよせもなくとはいかてかいはん二三句秋風はさらても身にしむ物なるに旅の袖ふきかへしたらんは其悲しさ一段なるへし四句旅はいつもわひしき物なから朝たつほとはをのつから心つよきを秋の日の夕かけになりてさひしけにさし來たらんはかなしかるへし一首の意

旅人か山の梺を行折から秋風か袖を吹かへしさひしけに夕日のさしたるはかなしかるへき事と也人のうへをいひたりとしてもよろしく旅人をやかて我身の事としてもよろし　其うへに三句より下旅人の縁もなし○三句袖ふきかへす秋風なれは旅人よりつゝきたり四句は旅行の時分五句は旅行の場所なれは其よせいとつよし何事をいはるゝならん　かやうにたゝ物をあつめてけしきをいひならへたるは玉葉風雅のふりにちかし○玉葉風雅は爲家卿の風をきらひて定家卿をまねひたる物なる故此集に似たるところありそれはかの集中のとり所にて氣槩あるかことし物數のおほきかあしかるゆゑは何事そや

家隆朝臣

故郷にきゝし嵐の聲もにすわすれぬ人をさやの中山

忘れねはわすれよかしといふ意なり此ねをぬと書る本ともは誤也○わすれぬ人をは人を忘れねといふ事打かへして語勢をそへたる也此集の比の歌に多し　結句はさやといふ詞にいひかけたりさやはさやうにやは也○さやうにやは戀しのふへきといふ事をさやと計いひてはきこえす　一首の意は嵐の聲も故郷にて聞しには似すかはりたるにさのみやは故郷人をわすれす戀しのふへき今は故郷人の事を忘れよかしと我心にいふ也○いたくたかひたるにもあらねとさやはさやうにやはと說るゝ故むつかしき也上句は故郷のなこりの薄らきたる意しかなこりかうすらけは人をもわすれ安き也一首の意はさやの中山の旅ねにきけは故郷にて聞しあらしの音とは似つかすかはりてなこりもうすらきたるほとに今はおもふ人をもわすれよかしと也四句を結句にして心うへし　又思ふに上句に嵐の音さへかはりぬれは人の心もさそかはりぬらん物を○かくさまにむつかしくみるは歌のためわろき事也といふ心もあるへきか歌ぬしの心はかりかたし

雅經

白雲の幾重の嶺もこえつらんなれぬ嵐に袖を任せて

あらしに袖をまかせてとは嵐のふくまゝにふかれて行を云○一首の意はなれぬあらしか袖ひくやうに吹故それまかせに行々て白雲のたつ嶺をいくつ越た事やらんと也都にては物ふかき第宅の中に

ゐて山風のあらきになれぬ也

家長

けふは又しらぬ野原に行暮ぬ何れの山か月は出らん

初句又は下へつゝけて心うへし日々にかはる意あり下句月のいつる方さへしられぬさまあはれ也○方角をたかへし意にはあらすいつれの山とはしらぬ野原ゆゑ山の名もしらぬ也一首の意はしらぬ野原に日をくらしたりさて今宵は何と云山から月か出る事やらんと也

和歌所歌合に羇中暮

俊成卿女

故郷も秋はゆふへを形みにて風のみ贈るをのゝ篠原

初句もゝしは遠くへたゝり來ぬる故郷もの心なり○もは故郷からものこゝろのも也　二三の句は秋はかならす夕くれに風の吹物なれは○秋とても風のふかぬ夕もあるへけれは此歌はたま〳〵風のふく夕なり　其夕風か形見にて○秋は夕をかたみにてといふ本ありしなるへし今は普通の印本にかたみとてと有に依る　故郷の方より我をおくり來るよし也風のみといへは風より外には故郷のかたみにすへき物なきよし也さてのみの下へはもしを入て心得へしをのゝ篠原は風に緣はあれとも少したらかぬ心地す○一首の意は故郷からも音つれもなくふみ一つ贈らすして秋は其文のかたみにとて此をのゝ篠原の夕風はかりを贈りあたふと也風は故郷より贈りあたふる物にはあらねとこれを音書のやうにいひなしたる也又故郷の音つれのなき事詞のうへにはなけれと風のみ贈るとあるのみといふ字よりきこゆ先生は風のみ送ると說れたり故郷は遠くへたゝり來つる旅の事なれは故郷人の送らぬはもとよりなる故風のみ送るとあるのみといふもしいかゝ也いつれにもむつかしきうたなり

雅經

いたつらにたつや淺間の夕煙里とひかぬる遠近の山

いたつらにとは○俗にむたなといふ用にたゝぬ事也　宿かるへき里のけふりならはしるへともなるへきにこれは山の上の煙にて里とふしるへにもならさる故にいふなり夕煙は宿かるへき時をいへりをちこちとは本歌の詞をもていへるにて○信濃なる淺間かたけにたつけふりをちこち人のみやはとかめぬ　かなたこなたの山をみわたしたるさま也

宜秋門院丹後

都をは天つ空ともきかさりき何眺むらん雲の旗てを

本歌ゆふくれは雲のはたてに物そおもふ〇あまつそらなるひとをこふとて　云々この本歌によりてくものはたてといへるにて夕暮になる也〇いとほのかなれとこれはさる事なるへし又題のもし落してよむも此ころの常なり一首の意はみやこをはあまつ空にある物とは聞及はさりし事なりそれに何故に旅のやうにたなひく雲をなかむる事やらんと也なかむるとは雲のはたてをなかめて都こひてものおもふなり　あまつそら本歌のことは也

秀能

草枕ゆふへの空を人とはゝなきてもつけよ初雁の聲

正句我旅の夕のさまを故郷人のとはゝ也空とは雁の縁にて其時のけしきをもいへり〇その時のけしきにて雁の縁の詞なりとあるへし　なきてもつけよとはかなしきよしを告るを云〇旅ねの夕の悲しきよし也　悲しきさまをみて人に告るには泣るゝ物なれは也〇四句かくさた／＼としたる事ともおもはれす雁の告るはなくなれはなきてもといへるなれと語勢に啼泣の趣をそへてあはれにおもはせたる也　なきてといふをかろくみては歌の魂なし

旅の心を　有家朝臣

ふしわひぬしのゝ小笹の假枕はかなの露や一夜許に

四句露の心なくいふかひなきをはかなしといへりと聞ゆ〇俗にばかなと云と同言也なきは無の義にあらすおもひはかりのなき事也俗語と同言なから清濁異にて俗語はあなつりたる語勢なるを雅言のうへにはさしもあらす　よのつねにいふはかなしの意にてはきこえかたし〇よのつねとはいかなる事かもしられす今一義あへなき意にいへるもありそれにはあらす　一夜はかりには一夜はかりなるにの意なりふしもかりも一よもさゝの縁なり一首の意はたゝ一夜はかりのかりねなれに露も心すへき事なるにしけく置てかやうにふしわひさするはさても心なくいふかひなき露哉といへるなり〇此説のことし

石清水歌合に旅宿嵐

岩かねの床に嵐をかたしきて獨やねなむさよの中山

〇岩かねの床は旅宿のわひしき限也嵐をかたしく

は旅態のわひしき限なりひとりやねなんは旅情の佗しき限也さよの中山は旅程のわひしき限なり

旅の歌　　藤原業清

誰となき宿の夕を契にて變るあるしを幾夜とふらん

誰となき宿の夕とは或抄に夕くれになれは誰となく宿れはかくよめりといへるもさる事なり○今時のはたごやをおもひていふ也此心にはあらす　又おもふに誰となきは宿のあるしの事にてもあるへし○此心なり俗に行がゝりの所々とまるといふ義思設たる主のなきこゝろなり　さては四句とかけ合よろしき也夕を契にてとは夕となれば必宿るへきを契にてと云意也○此注は聞取かたし契るとは因縁にてといふ事一夜やとるも深き縁かありてといふ意なり一首の意行がゝりにて誰とおもひさためたる事はなけれと夕になれは因縁次第で毎度かはる主人を幾夜とひたつぬる事ぞと也

羇中夕　　長明

枕とていつれの草に契るらむ行を限の野邊の夕くれ

三句ちきらましとこそいふへけれ○其意にはあらすにもしに心つくへし草葉にちきるとは御縁か有て今宵の枕にする事などつふ〳〵とかたらふほとの趣なり　らむにてはふる郷人なとの旅なる人のうへを思ひやりてよめるやうにてかなひかたし○其心にもきこゆれど自のうへの事ときこえていとよく叶ひたり　四句もゆきとまるをそ宿とさたむると○此歌を取たるにあらすは無用の古歌は引ても詮なし　くる意とは聞ゆれとも行をかきりとのみにてはことたらはす○行をかきりはゆかるゝを限と云事にて則足をかきり也ゆかるゝだけといふ事を行とのみいひたるか物遠く思はれしにや一首の意はゆかるゝたけを限にする野への夕くれにてどの草に今宵は枕にむすひまするそやとちぎる事ならんと也

東の方へまかりける道にてよみ侍ける

民部卿成範

道のへの草の青葉に駒とめて猶故郷をかへりみる哉

此人は信西か子なりければ平治の亂に老たる母いときなき子をとゝめ置て東の國に流されてくたらるゝ時の歌也後拾遺集に増基法師か都のみかへりみられて東路も駒の心にまかせてそ行とあるは

駒のあへしらひなきを○かやうにいひくたしたる歌にさのみあへしらひをまつ物かは　これは草の青葉といへるなとめてたし○一首の意は道のへの草の青々としたる所に馬を駐めてそれか草くふうちナヲじつと都の方をなかめてゐたるよと也唐詩に草色青々送馬蹄といへるに似たる趣なり

旅の歌　　秀能

さらぬたに秋の旅ねは悲しきに松に吹也とこの山風

四句山風の松に吹につきて故郷人の我をまつらむとおもひやらるゝ意なるへし○此意はなし故郷人といふ事全篇にかけてもなき事也しか穿ちてみるは歌のためわろき事也歌はたゝおいらかなるをよしとすさかし立たるは品下るわさ也一首の意さうてなうても秋の旅宿はかなしきものなるをとこの山風か松をふく其松風で一しほかなしいとなり

攝政家歌合に秋旅　　定家朝臣

忘れなむ待となつけそ中々にいなはの山の峰の秋風

本歌立わかれいなはの山の○峯におふるまつとしきかは今かへりこん　云々初句は故郷の事をおもへはくるしきほとにいかて忘れはやと思ふなり然るを故郷人のまつときかはわすれかたかるへきほとに中々にさな告そと也中々にはなましひに也○なましひにといはんよりもかへつてといふ方ちかし俗にはけつくといふ　二句の上へうつして心うへし故郷人のまつといふたよりはうれしかるへき事なれとも忘れんとおもふには妨となれはなましひに待とな告そと也○かくの如し　此歌は秋旅といふ題なるに秋風といへるのみにて秋の意なしいかゝ○さては傍題なりよしともいひ難けれと傍題は此ころの歌にこれかれみゆ

百首歌奉りし時旅の歌　　家隆朝臣

契らねと一夜はすきぬ清見潟波にわかるゝ曉の雲

清見潟に旅ねして曉に立わかるゝ時に浪のうへに雲も別るゝを見て思へるやうあの雲と契りはせさりしかと一夜は此浦に諸ともにあかしぬることよと也○雲に契るといふ事すこしいかゝ契らねとはかねて期したる事にはあらねとゝいふ事三四五一二と次第してみるへし一首の意は清見潟曉の雲の波にわかるゝ時分に起出てかねてこゝに旅ねすへしとは思はさりしに一夜すくしぬる事と也　但し

一夜はもろともにあかしぬといふことを過ぬといへるはたしかならす○相ふしある歌ともみえさるをもろともにあかしぬとはいかなる事ならん又一夜あかす事を一夜は過ぬといひてたしかならすとあるもいかなる事ならん　されとちきらねとゝいへるにて然聞えたり○契らねとゝいひて然聞ゆる事もいかなる事ならん

千五百番歌合に

故郷にたのめし人も末の松待らん袖に浪やこすらん

下句は我をまちわひて袖に涙のなかるらんといふ意なり結句心やかはりぬらんといふやうに聞ゆれとも其意にはあらす末の松とおけるはまつらんと詞を重ねて浪こすといはん料のみにて波こすはたゝ涙の流るゝをいふなり浮舟巻に浪こゆるころともしらで末の松まつらんとのみおもひける哉三四の句は此歌によれゝと意ことなり○かくの如し二の句人もといへるもゝしにて我涙をなかす事しられたり○一首の意は故郷にていつ比はかへらふとやくそくした人も此ころは涙こほしてそてぬらすらんとなり末のまつ待らんとたゝみたるは詞のあやにてみちのくに旅したる歌也

歌合し侍ける時旅の心を　入道前關白太政大臣

日をへつゝ都忍ふの浦さひて波より外の音信もなし

○信夫の浦みちのくなるへしうらさひてに心のわひしき事をもたせたり一首の意月日をへてみやこ戀しくわひしきに都の人のたよりもなく波より外には音つれもなしとなり

入道前太政大臣家百首歌に旅の心を　俊成卿

難波人蘆火焚屋に宿かりてすゝろに袖の鹽たるゝ哉

あし火たく屋にすゝといふ事をよむは萬葉十一になには人あし火たく屋にすしたれと云々とあるによれりすゝたるはすゝひたる事なりこの歌はその煤をすゝろにといひかけたり

述懐百首歌に旅

世中は憂ふし繁しの原や旅にしあれは妹夢にみゆ

旅のうきに又妹か夢にみえてさま〳〵うきふしのしけきといふ意なるへけれと四の句のやう其意にかなひかたくや○旅にしあれは心やすかるへきに

といふやうなる詞つかひなるをとかめられたる也
されと其意にあらては二の句のしけしといふ事
聞えす○よふししけし篠の縁の詞

千五百番歌合に　宜秋門院丹後

おほつかなみやこにすまぬ都鳥こと〻ふ人にいかゝ
こたへし

伊勢物語に京にはみえぬ鳥なりけれは皆人みしら
す渡守にとひけれはこれなんみやことりといふを
き〻て名にしおは〻いさこと〻はんみやこ鳥わか
おもふ人はありやなしやと云々一首の意かくれた
る所なし

天王寺にまゐりけるに俄に雨降けれは江口に宿
をかり侍けるにかし侍らさりけれは　西行

世中をいとふ迄こそかたからめ假の宿りを惜む君哉

四の句は旅の宿に此世をかりのやとりといふを兼
たり○一首の意はわれらのやうに世中をいとふ事
こそかたくはあらめたゝこよひ一夜のかりのやと
りなるにそれさへをしみ給ふと也

かへし　遊女妙

世を厭ふ人としきけは假の宿に心とむなと思ふ計そ

宿かしまゐらせさるはたゝしかく〵とおもふのみ
にこそあれをしむには侍らすと也○一首の意世を
いとふ人ときゝ及し故執着をきらふ事なれはかり
の宿に心とめたまふなとての事そとなり

和歌所にてをのことも旅の歌つかうまつりける
に　定家朝臣

袖にふけさそな旅ねの夢もみし思ふ方より通ふ浦風

さそなとは夢もえみさらむことをかねておしはか
りていふ也さて夢のみえむにこそ風をもいとふへ
けれとても夢はみゆましけれはおもふ方より吹來
る風なれは我袖にふけと也○おもふ方よりは都の
方より也一首の意はさぞかし旅ねでは夢もみえま
いほとにおもふ都の方からふく浦風ならばわか袖
にふけと也

家隆朝臣

たひねする夢路はゆるせうつの山關とはきかずもる
人もなし

○一首の意かくれたる所なし

詩を歌に合侍しに山路秋行　定家朝臣

みやこにも今や衣をうつの山夕霜はらふ蔦の下道

霜ふりて寒き山路の夕暮に故郷の夜寒をも思ひやりて今や衣をうつらんと也○一首の意はうつの山の蔦の下道を夕霜打はらひつゝゆくにはたへ寒き事をおほゆれは都にても今衣をうつらんやと也霜をはらふとて手して衣をたゝくさまと衣うつさまと似たにつきて思ひやれる意もあまりのにほひにておもしろし○作者は心もつかさりし事ならんと正明はおもふ也かやうのすちをたくみなりとて學はんには其歌左道なるへし　うつの山に蔦の下道をよむは伊勢物語の詞によれり

長明

袖にしも月かゝれとは契置す涙はしるやうつの山越

月をかゝれとは涙の縁をもていへるにてかくあれといふをかねたり四の句は月影の袖にかゝる故を我はしらず涙はしれりやと問かけたる也○一首の意はうつの山こえで袖にかうまで多くかゝれと月に契約はせさりし也涙はさやうにちきりし事をしりたりやと也涙のおひたゝしくこほるゝに月のうつれるをあやしけによみなしたる也二句は四句しるやに應して的切也と正明はおもふ也下句本説よろしといふ人ありけにきこえたる説なれは人えらひ取へし　さて此歌月の縁の詞なく○四の句は月のうつる事なれは此比の人は別に縁の詞をもとめさりし也必かけてるなと縁の詞をいるゝは爲家卿の流也　うつの山の縁もなし○これは其所にてかやうの事ありてよめりし也と思へは難なし必夢うつゝ蔦楓といはてもよろしかるへしこは題詠なからその心はへにて拘らさりし物也今も此集の姿をこひねかはん歌人はあなかちに拘らてもありなんと正明はおもふ

慈圓大僧正

立田山秋行人の袖をみよ木々の梢はしくれさりけり

秋ゆく人は秋のころこえ行人なり袖をみよとは袖の色の深きを見よといへるにて例の紅の涙也下句は此袖の色にくらふれは木々の梢のもみちしたる色はいと淺りけりと云事をしくれさりけりといへる也○よく説えられたり一首の意立田山を秋ころ行人の袖の色をみよ物のあはれに血のなみたをおとしてみなくれなゐ也木々の梢もよほとゝ染てはあ

れともこれにくらへてはもちつとしくれそうな物となり　又袖をみよをたゝ涙のおつる事の甚しきよしとしてそれにくらふれは時雨は物の數ならすといふ意とみすへしさやうにみる時は木々の梢といへるはかろくしてたゝ時雨のあへしらひのみ也猶前の意なるへし○かくみる時は梢用なく秋行といふ意うすし此歌旅の意なきを物のついてにふとこゝに入たるにや

百首歌奉りし時旅

さとり行誠の道に入ぬれは戀しかるへき故郷もなし

○まことの道とは佛道也故郷はこゝは娑婆世界を云佛道に入てみれは心の殘る故郷もなしと也百首の旅の題の歌なれと釋教に入へきにや

東の方へまかりける時　　西行

年たけて又こゆへしと思ひきや命也けりさ夜の中山

古今に年ことに花のさかりはありなめとあひみんことは命なりけり○此歌を本歌にしたるにあらす一首の意はまへど此佐夜の中山をこえた時に老年のうへに又もこゆるであらうとはおもひし事か思ひもよらなんた事なるにけふ又こゆるは命といふ物ではあるなあと也

旅歌とて

思ひおく人の心にしたはれて露分る袖の返りぬる哉

思ひおく人とは故郷人をいふのはかの意也心も我心なり袖のかへるとは色のかはるをいひて故郷にかへるといふ縁なり○一首の意は故郷に殘し置たる人が心にしたはれて我身こそかへられね露分る袖がかへつたと也初句は殘し置たる人をおもふなり　野へ草葉なとなくて露分るといふことよせなく聞ゆ○旅ゆく人は野山くぬかぢも草木を分る道なりけれは露分るとよめりかやうの事たしかに野山草木とみるへきは爲家卿よりの規矩なりほのかなるは縱横にて此集のころの氣骨也

熊野へまゐり侍しに旅の心を　　太上天皇御製

みる儘に山風荒くしくるめり都も今は夜寒なるらん

○上句はまことにしかそ有けんとおもはるゝけしきなり下句はまことにしかそ思しけんとおもはるゝ折から也

# 尾張廼家苞四之上

## 新古今集

戀歌一

和歌所歌合に久忍戀　　攝政

石の上ふるの神杉ふりぬれと色には出す露も時雨も

結句は露にも時雨にもの意也されは三句は年をへてふるくなりたる意にて○年を歴る意也舊くなるとはこと事なり　つゆしくれの方は詞の縁のみ也露もしくれもふりぬれとゝつゝく心にはあらす○一首の意はいその神ふるの神杉は序自餘の木草は露しくれにて色にいつるを下のおもひは年へて幾露しくれにぬれても色にはいてすと也五四打かへして聞へし　さては詞とゝのはす

小野宮歌合に忍戀　　太上天皇御製

我戀は眞木の下葉にもる時雨ぬる共袖の色に出めや

時雨の下へ如くといふ詞をそへて心うへし

百首歌奉りし時　　慈圓大僧正

我戀は松をしくれの染かねて眞葛か原に風さわく也

二三の句は人のつれなき意下句はうらむる意なるへし

家の歌合に夏戀　　攝政

空蟬の鳴音やよそに杜の露干あへぬ袖を人のとふ迄

空蟬はなく音といひ杜といはん料なり一首の意は袖をほしあへす人のあやしみとふまてになきぬらしたれはさためて此なく音もよそにもりやすらんと也結句人のとふまてになりぬれはと詞をそへて心うへし○かやうの所此集の比の妙所也今もこひねかふへしされとあしくまねへは聞えぬ事になる語勢に心を用へき事なり　空蟬卷にうつせみの羽におく露のこかくれてしのひ〳〵にぬるゝ袖かな

寂蓮

おもひあれは袖にほたるをつゝみてもいはゝや物をとふ人はなし

本歌夕されはほたるよりけに燃れとも光みねはや人のつれなき○大和物語の此段の心を下におもひてよめる也　つゝめともかくれぬ物は○夏虫の身よりあまれるおもひ也けり　云々下句は下上に打かへして物をとふ人はなしいはゝやといふ意也○かやうにあなかちなる所にて句をきりたる物にあ

らすこれはたゝとふ人はなし物をいはゝやといふつゝきなるを三段に打かへしたり此比の歌に多くみゆる姿なり一首の意はおもひかあれは泪を落して袖につゝみても物を思ふかととふ人もなけれは打つけにいはゝやと也人とは我思ふ人也　されとつゝみていはゝやとつゝくやうに聞えてまきらはしきいひさま也○つゝみていはゝやとつゝくとはいかにいはるゝならん　一首の意は我は螢のもゆる如くなる思ひあれは人の見てとひもやすると螢を袖につゝみてあれとも本歌の如く○本歌をかくとる事はなき事也　光みねはやとふ人はなく其かひもなけれは今はたゝにかくと言にいてゝいはゝやと也○いたくたかへるふしもなけれと迂遠なり

水無瀨にてをのこともゝ久戀といふ事をよみ侍りしに　　太上天皇御製

おもひつゝへにける年のかひやなきたゝあらましの夕くれの空

本歌後撰におもひつゝ經にける年をしるへにてなれぬる物は心なりけり○此古歌と初二句は全くおなしけのと其同しきはたま／＼にてすへて相あつからす此歌は本歌とりし歌にあらす　上二句に此本歌のすへての意をこめてよませ給へるなるへし○すへて本歌はきはやかなる詞をとる事也かくむつかしきとりやうはなし　されはたゝあらましとは本歌のなれぬる物は心なりといへるによれり○むつかしくてきこえかたし　すへてあらましとはゆくさきのことをとせむかくせんとおもひまうくるをいへり○あらましの解はよろしけれとなれぬる物は心なりをおもひ儲くるといひては聞えぬ事也　上句の意はあはん／＼と年をへて心に思ひ馴ぬるかひやなき也三句かひもなく又かひそなきなとはあらてやとあるは末つひにかひなくてやゝみなむの意なり○かくのことし猶いはゝ一首の意あはん／＼とおもひて年月へたるかひかたき事かしらぬあらましことにはつねにいつの夕くれ／＼とおもひ馴たるかと也やもしはかひかなき事かしらぬのかもしにあたれり

百首歌の中に忍戀　　式子内親王

玉の緒よ絶なは絶ね長へは忍ふる事の弱りもそする

もそのてにをはの意言葉の玉の緒にいへるか如し

○一首の意百人一首抄にいへるかことし
忘れては打歎かるゝ夕哉我のみしりてすくる月日を
初句は我のみしりて其人はしらぬ事といふことを忘れては也とちめのをはなる物をのこゝろ也○一首の意は戀しうおもふといふ事を人にはえいはてひたすらわか心なる事を忘れては人のしりたる事のやうに夕くれには打なけかるゝと也
我戀はしる人もなしせゝ床の泪もらすなつけの小枕
本歌我こひは人しるらめや敷妙の枕のみこそしらはしるらめまくらより又しる人もなき物を涙せきあへすもらしつる哉○一首の意は我こひは世上にしる人もないもししれゝは涙からしれるてあらうほとにつけの小枕よ涙をもらさぬやうにせよとなり

百首歌よみ侍ける時忍戀　　入道前關白太政大臣
しのふるに心のひまはなけれ共猶もる物は泪也けり
○一首の意は人にかくしのふるに心に油斷はせぬけれともそれても人めにもる物は涙そと也

百首歌奉りしに　　攝政
かちを絶えゆらの湊による舟の便もしらぬ沖つ潮風
本歌ゆらの戸をわたる舟人かちをたえ行衛もしらぬ戀のみちかな　云々湊による便もしらぬといへるのみにてさのみ本歌の意にことなる事もなきはいかにそや○本歌と心はいたく殊なる事もなけれと詞つゝきいと殊なり此歌のめてたきはたよりもしらぬ沖津汐風なといふあたりのめてたき也さる詞本歌にはなきをいかにそやとはいかにそやさてよる舟のはよらんとする舟のといふ事沖津汐風は湊へよりかたき趣初句此句に相應せり沖津汐風にてかちをたえてゆらのみなとによる舟のことくいひよるへき便もなしと也五一二三は序こゝろは四の句にあり五句はいひよるへきことかたきいきほひをみせ初句は便なき趣をそへたり

題しらす　　式子内親王
知へせよ跡なき浪に漕船の行へもしらぬ八重の潮風
本歌しらなみの跡なき方に行船も風そ便のしるへなりけるこれも本歌とことなる意なし○けにこの歌をとりたれは詞は似たる所あれと趣は淸く別義なるをいかにいはるゝにかあらんとにかくに本歌

によりたる歌には子細をいはるゝ也　ものうへ本歌は三句もゝしにて戀の歌ときこゆるを此御歌は戀ときこゆへき詞なし○三句の下にことくといふ詞をそへて心うへしすへて序歌はよしの川岩なみ高く行水のはやくそ人をおもひ初てきといふたくひのもしの下に如くといふ詞をそへてきく例なり何事をいはるゝにかあらん一首の意は八重の汐風に跡なき浪を行舟はたよりなき物なるかその如くたよりなきほとに我ためにしるへして此思ひをしらせてくれよと也

和歌所歌合に忍戀　　攝政

難波人いかなるえにかくちはてんあふ事なみにみをつくしつゝ

二三の句江を縁のこゝろにとりて終にいかなる縁にか朽はてんとなり○くつるとはみをつくしの縁にて死る事なり　初句は江と云浪といひみをつくしといはん料に戀する我身をさしていへるなれと難波人のくちはつるといふ詞のいかにそやきこゆる也○不朽といふは死なぬ事なれはくつるといふは死の義なる事論をまたす人といひしぬるといはんにいかゝなる事もなしまつ難波人はみつからの上のたとへ二三の句はいかなるくされ縁にて命をうしなふ事やらんといふ意みをつくしは口にくちはつるとかけ合たる詞にてみをつくしは身力をつくす事俗に骨を折といふ意一首の意は我身はあひかたき戀にちからをつくしていかなる因縁にておもひ死に死もする事やらんと也一四五二三とつゝけてみるへし

隱名戀　　俊成卿

蜑のかるみるめをなみにまかへつゝなくさの濱をたつね侘ぬる

二三の句は海邊なる海松めの浪にかくれて見失なひたる意にてたとへたる意は一度あひみつれとも其人宿をも名をも隱せる故に誰といふ事をこめうしなひたる也○初句はみるめといひ名草の濱を尋ぬるといふ縁にいへるにて義はなし二句みるめは相みる事正しく戀の義にて海松は詞の縁のみ也たとへたる意といふへからす　下句はなくさに名といふことをもたせて宿をも名をも尋ねわひぬと也上にそのやともいはてぬるととまりたるは變格に

て尋わひぬる事よと打なけきたる意のてにをは也○一首の意は一たひ逢みし人の又もあひみかたき故に其名を何と尋ねんよしなしと也行すりのこひにてはしめて逢みたりしほとは宿をも名をも顯さゝりし也さて此次に此歌につきてまきらはしき事ありとて議論三條あり的切にもあらぬ事故今これをはふく

戀歌二

五十首歌奉りしに寄雲戀　俊成卿女

下もえに思ひ消なん烟たに跡なき雲のはてそ悲しき

上二句は煙の縁にて忍ふ戀にこひしぬる意烟はなき跡のけふり也跡なき雲とはいつれか煙のなれるともわかれすなへての雲になりはてゝ烟は跡もなくなれるを云一首の意は此世にて思ふ人にもしられすいたつらに消るのみならす煙の末たに跡なき雲となりはてなんことのかなしきと也

攝政家百首歌合に　定家朝臣

靡かしな蜑の藻鹽火たき初て烟は空にくゆりわふ共

くゆるといふ詞をくゆりとはたらかして用ひられたるを難したる俊成の判にうつるうつりとゝまるとゝまりなとを例に出されたるはくはしからすくゆりはこれらとは格の異なる詞たりゆるといふ詞にゆりとはたらく例はなき事也見ゆる聞ゆるを見ゆり聞ゆりなとはいはぬをもてわきまふへし○くゆりはゆは語の體にてりるれとはたらく詞也參る參りまいらせなとはたらくと同格也みゆるきこゆるなとのゆるとは異なるを今擧られたる例もくはしからすみゆきこゆは成語くゆは未成語なるをもて其別をしるへし　されとくゆるは源氏物語なとにもくゆらせともくゆりともいへる例あれは難にはあらす○しかる例あるを以て格の異なる事を思はるへきにや　なひかしなとこなたより定めたるこそいかゝとは聞ゆれ○なひかしなは俗になひくまいそなアといふ詞あやふみてなけきたる也こなたより定めたるにはあらすさはかりあふよしなき人をこひそめたる歌と心うれはいかゝなる事もなし二三ノ句は下のおもひにこかれそめたる事下句は下のおもひのほにあらはれたる事也

百首歌奉し時戀歌　攝政

こひをのみすまの蜑人もしほたれほしあへぬ袖のは

てをしらはや
しらはやといへる似つかはしからす袖のはてをしらはやとねかふは何の意そや○あふへきかあふましきかといふ事を袖のかはくかはかぬにかへてよみ給へるめつらかにめてたし一首の意は戀をする我そてか今あはぬほとはしほたれてほしあへぬが果までもかうか又相みて袖のかはく折もある事かそれかしりたいとなり

戀の歌とて　二條院讃岐

みるめ社入ぬる磯の草ならめ袖さへ波の下に朽ぬる

しほみては入ぬる磯の草なれや○みらくすくなく戀らくの多き　云々磯の草の波の下に入ぬるのみならす袖さへといふ趣意也○此趣意にはあらす上ノ句はみるめこそすくなからめといふ事二三ノ句はたゝ少きといふ事なるを本歌にゆつりてかくよめり大かた本歌は詞はかりをとる物なるをかくさまにはたらきたるもまれにある事にていとめてたし下句は涙にくつる袖なるを入ぬる磯の縁に波の下にくつるといへる也一首はいかに相みる事のすくなけれはとて袖さへ涙にくちたと也一種のこそ也かく譯して心うへし　此ぬるもぬる事よとなけきたるてにをは也

忍戀のこゝろを　前太政大臣

しるらめやこのは降しく谷水の岩まに洩す下の心を

○二三は序岩間をもるとかゝる一首の意はいはすにおもふ下の心を我おもふ人のしるへきやえしるましき事と也四句ノもらすは谷水の事にて戀の方には心なきを下のこゝろをもらすとつゝきたるやうにてすこしあかぬ所あり

左大將に侍ける時家の百首歌合に忍戀　攝政

もらすなよ雲ゐる峯の初時雨木葉は下に色かはる共

○一首の意雲ゐる嶺のはつ時雨のことく心の色かふかくなり行とも必人にもらすなよと也逢て後も忍ふ戀也　二句に忍ひかくす意あり○さまてもなし　三ノ句ははしめて逢たる意○初の字に其義はなし一首あひて後しのふ心にはあれと二三の句にかやうの心はあるへからすたゝ序ことは也　下句は今より後おもひはふかくなりぬとももといふ意もらすなよとは逢たる人にいふ也○みなよろし　此歌

題も忍戀なりし大てい古歌忍戀といふ題はいひ出かねて心ひとつにしのふ意によみたれと又逢見て後猶しのふ意にもなとかよまさらん　歌のさまもいまた逢さる戀のことく聞ゆれとも色かはるともとあるあたりさしゐきこえすやあらん　さてはもらすなよとはいひつくへき人なしみつからいましむるならはもらさしよなとこそあるへけれ○かはかりの自他は三尺の童子といへともよくわきまへたれは此殿のあやまりてかくよみ給へきにあらすたゝ逢て後猶しのふ戀の意によませ給ふ也けり

　戀歌あまた讀侍けるに　　後徳大寺左大臣

かくとたに思ふ心をいはせ山下行水の草かくれつゝ

○一首の意いはせ山の下行水の草かくれたるかことく心にこめてかくおもふといふこゝろのほとをえいはぬ也三句より下序なり序を下へめくらしたるめつらし

　戀の歌　　　殷富門院大輔

もらさはや思ふ心をさてのみはえそ山城のゐての柵

四句やましといふにはそもしてにをはかなはぬやうなれとこれは山城へいひかけたるなれは難なら
し○えそやまぬといふ事をやまと計かゝりてぬといふもしを省きて山城へ轉してつゝけたりしもしまてかけてはみるへからすかくのことき秀句一もしにかゝり三もしにかゝる事もあれとも猶二もしいひかゝりて三もしより轉する歌の通例也　えもといひてよわし○此義にあらすえそやまぬと自決したる義なり一首の意は戀しうおもふ心をかくいはてのみはえやまぬほとにおもふ人にもらさはやといふ義也

　和歌所歌合に忍戀　　　雅經

きえね唯しのふの山の嶺の雲かゝる心の跡もなき迄

初句はひたふるにおもひしねと打すてゝいふ詞にて死ねを雲の縁にてきえねとはいへる也さてかゝる所にいふたゝはすへてひたふるにといふ意にて俗言にいつそのことにといふかことしかゝるはかやうなるにて忍ひておもふを云○かゝるは雲の縁のことは也　心の跡もなきまてとはなき跡に執着の念も殘らぬまてにきえ果よ也○跡もなき雲の縁の詞なり

　千五百番歌合に　　　　通光卿

限あれはしのふの山の麓にも落葉か上の露そ色つく
初句はしのふもしのはるゝ限のありてつひにはしのひはてられぬ物なれはといふ意に云る也禁といへるは落葉のよせにて又忍ふ山をはなれてあらはれたる意をもこめたるへし○ふもとに義はなしたゝ禁にて戀の方にはさせる用なき詞也　さて梢の紅葉にても同し事なるへきに落葉といへるは程をへて果にはといふ意也○これは此心なるへし　又落葉とのみにてもたりぬへきに露をいへるは泪の色のつひには紅になれるよしにて涙の色のかはらぬほとはしのふれとも紅になりてはえしのひあへぬ意なり○一首の意は物には際限かある物て下のおもひを人にかくししのはうとするうちに果には袖の上の露の色かくれなゐにかはりたりと也

二條院讃岐

うちはへて苦しき物は人めのみ忍ふの浦の蜑の栲繩
○うちはへてもくるも繩の緣の詞一首の意は人めをしのふことのみ打つゝきてくるしき事と也

和歌所歌合に依忍増戀　　春宮權大夫公繼

忍はしよ岩ま傳ひの谷川もせをせくに社水増りけれ
○四句瀨をせきたる所にこそ也一首の意は岩間つたひに行水とても瀨をせきたる所には水かますそのことくおもふ事えいはて下につゝむ故におもひのます事なれは今は忍はし打出ていはゝやとなり

題しらす　　信濃

人もまたふみゝぬ山の岩隱れ流るゝ水を袖にせく哉
○一二句いかによめるにかふと心えかねたりもし人にまた逢そめぬ事を山の緣にふみゝぬとよめるにはあらしか三句にいはぬ意をもたせ下句はなみたの事なるへし

西行

遙なる岩のはさまに獨ゐて人めおもはて物思はゝや
○はさまは物の間の事此詞尾張にては今もしかいふ一首の意は人さとに人とゐては戀に物おもふくるしさはつゝみかたけれは遙なる山のおく岩の間にかくれゐて人めに遠慮なしに物思ひをせはやと也

數ならぬ心長閑になし果ししらせて社は人も恨みめ
○數ならぬ心とつゝきたるはふと解えかたけれと數ならぬ身といふ事なるへし一首の意は我身の數

ならぬ故いひ出てもあはれもせしとおもひていはすにゐるがさうはかゝりいふても置ましかうおもふといふ事を人にしらせて人かつれなくはうらみてなりともこらへてみんとなり

思ひ出よたかかね言の末ならん昨日の雲の跡の山風きのふの雲とは風の吹はらひて消うせてけふはなき雲をいひてはやくの契の絶たる譬也○かねことゝ雲とかけあひて楚王の故事になりて朝々暮々陽臺之下といへる事にてこゝは妹妹のかねことにいへゝ跡の山風とは雲は跡なく晴て山風はかゝり殘ゝたるを云一首の意は思ひ出して御らんせよ雲といふ字はたかかね言の末にありし事そその雲もきのふまては少しはみえたれと今では山風の吹はらひたる跡になりしと也かく雲といふかすなはち來あふ事也　跡の山風とは雲をはきのふ吹はらひて其跡に今も殘りてふく風をいひてかねことせし人のつれなくしらすかほにてあるたとへ也さてかくいへるは雲をきのふ殘りなく吹はらひたるはたかしわさにもあらす此山風のしわさなるそといふ意をいはん料なり一首の意は昨日の雲の跡にふく山風につけてもはやくのかねことをおほし出て我かく物おもひするをあはれとおほせ今かく絶はてたる契はたかかねことの末にて侍るそ君かかねことの末にては侍らすやといひてとかめたる也かねことの末とはかねて契置つる事の行末をいひて此歌にては其人のかね言の末とほらすして今契のたえたる所をさしていへり○迂遠にて詞にえかたくや

題しらす　般富門院大輔

忘れなはいけらん物かとおもひしにそれもかなはぬ浮世なりけり

○一首の意はもし人かわすれたならは生てはおるまいおもひ死にしぬるてあらうと思ひしに今かやうに忘られてもえしにもせすそれさへ叶はぬうき世の中にと嘆たるなり

水無瀬戀十五首歌合に　攝政

山賤の麻のさ衣筬をあらみあはて月日や杉ふける庵

本歌すまの海人の鹽やき衣おさをあらみまとほにあれや君か來まさぬ萬葉に杉板もてふける板目のあはさらは○いかにせんとて我ねそめけん　云々

○此二首をとり合せ給へり上句はたゝ間遠なりと

いふ事なるを本歌に讓りてあはてとつゝけさせ給へり本歌をかくさまにとる事もいと稀にはある事也　此二首をあはせて聞遠にあれや君か來まさぬの意もてあはてといひ月日の過るを杉ふける庵といひかけたるなり月日のとあるへきをやと疑ひたるはたゝ語の勢ひをあらせんのみか○かくいはるゝはやにてはあかぬ事のやうなれとなとかかくもいはさらん　やにては行末をかけておもひやる意になる也○一首の意は此やうにくる事の間遠にのみあるか此後もあはて月日を過る事やらんと也

杉ふける庵とゝちめたる本歌の詞にはあれとも庵は上にいさゝかも緣なけれは無用のはなれ物也○衣の緣にかさぬとかうらみとかあるへしと也されと此歌山かつか麻のさ衣を織といふつゝきにては機を織所といはんに子細なしよししからすとも玉樓金殿といはゝこそあらめ杉ふける庵山かつに何の緣なき事かあらん此下に議論一條あり事長けれは別に論注すへし

百首歌奉りし時　　俊成卿

逢事はかた野の里の笹の庵しのに露ちるよはの床哉

しのにはしけくといふ意にてさゝの緣の詞なり○一首のこゝろはあふ事のかたき故に夜半の床にしけく露かおくとなり　此歌初句をのそけは二句より下は戀の歌にあらすいかゝ○二三の句は序下の句は戀のこゝろ也戀の歌にあらすとはいかゝ　さゝの庵とある故にたゝさゝの庵の歌とこそきこゆれ○初句を除けはさゝの庵の事ときこえても逢事のとあれは戀の意にて名歌也五句具足したる歌を四句にて論するやうやはある

入道前關白右大臣に侍ける時百首歌に忍戀

ちらすなよしのゝ葉草のかりにても露かゝるへき袖のうへかは

初句はもらすなよの心なるを露の緣にてちらすなよとはいへる也しのゝといふに忍ふといふことをこめたり○此意はなしこれを忍ふ義としては初句と同し事かさなり二首もときえかたしあなかちに故あらせんとかまへらるゝ故かくの如き失ありもりにてもは假にも也○刈の秀句なるへし　一首の意は何となくてはかりにもかやうに袖に露のかゝるへきならねはかならす戀すと人に云とかめら

るへければ〇その心して人にちらさぬやうにせよと人をいましめたるこゝろ也　心して此露をちらしもらして人に見とかめらるましきぞと也〇ちらすなよと人に仰する意によみたる歌をあなかちにみつからのうへに説なさるゝは其心しりかたしもしは忍戀といふ題は必あはぬさきの事をよむへしと偏執せらるゝにはあらしかそれも一わたりはさる事なれともたま〳〵は活用して逢て後に忍ふ意によみたらむもなてふ事かあらん英雄のうへはさら也正明はかりの者も歌かす多くよむにはかやうの事立ましるも常の事なるをや　然るをちらすなよとあるは人にいひつくる詞なればいかゝこれはみつからちらさしとおもふをいふなればちらさしよとこそあるへけれ〇ちらすなよといへは人をいましむる詞ちらさしよといへは自いましむる詞といふ事は田夫桑婦もよくしる事也俊成卿歌のひしりにてこれしろしめさしとにや

夕戀　　秀能

もしほ燒蜑の礒屋の夕煙たつ名も苦し思ひたえなて

題の夕の意はたらかす〇此難は今時の人よくいふ事也題の意を深切によむも一つの結構なれと必しもこれを守るへきにもあらす古人はたゝ夕といふもしたに入れは事たれりとして歌の秀逸に心をかけたるもの也下句に夕といふもしかけ合なしなといふは今時の論也一首の意上の句は序夕烟たつとかゝる四五の句打かへして心うへし人をおもふおもひのたえすして戀すといふ名のたつかくるしと也

海邊戀　　定家朝臣

須磨の蜑の袖に吹こす汐かせのなるとはすれと手にもたまらす

なれゆけはうき世なれはやすまのあまの鹽燒衣まとほなるらむといふ歌をとりて衣を風にかへて風は袖になれても手にとられすといへるにて大かたには馴たる人の逢かたきをたとへたる也〇上句は序須磨の蜑の袖には馴といふ料吹こす鹽風のは手にもたまらすといふへき料也一首の意は心にてはなるゝけれともとりとめてあふ事のかたしとなり結句は伊勢物語の歌とりとめぬ風にはありともとあるかことし二句吹こすはふくとのみにてもよ

ろしき歌なるをこすといふ事あまりてきこゆ〇これは旅行といひても旅の事なれは行といふもしあまれりといはんかことしかやうの事萬々ある事にてもし數にあはせてよむ也

攝政家歌合に　　　　寂　蓮

ありとてもあはぬ例の名取川朽たに果ねせゝの埋木

本歌みちのくにありといふなる名取川なき名とりてはくるしかりけり名取川瀨々の埋木云々〇あらはれはいかにせんとか逢みそめけんとありありとてもといひ名を取といひくちはつるといひ瀨々の埋木といふみなこれらの歌より出し詞なり　四句のたには死ぬる事をねかひはせねともあはてなき名を立られんよりは〇なき名を立らるゝといふ事は一首のうへにすへてみえす　死なりともせよといふ意也〇一首の意は世になからへて在とても某は誰を戀してえあはぬとあはぬ例にせらるゝやうな名かたつ故夫よりはいつそ死てなりとしまへかしと也

千五百番歌合に　　　攝　政

なけかすよ今はた同し名取川瀨々の埋木くち果ぬ共

今はたおなしとは今も既にうき名を立られたれは朽はてたるも同しことそといふ意也〇朽るとは死る事　しかれは此うへにたとひくちはつるとても歎きはせすと也〇此上此說のことし

百首歌奉りし時　　二條院讃岐

なみた川たきつ心の早き瀨を柵かけてせく袖ぞなき

たきつ心とは戀に心のすゝむ事心のはやりて堪かたき也一首の意は人をこひしとおもふ心かすゝみて泪か川の早瀨のやうになかるゝ淚のしからみは袖なれと中々袖てもたまらぬとなり

攝政家百首歌に　　高松院右衛門佐

よそなからあやしとたにもおもへかし戀せぬ人の袖のいろかは

〇下句は人を戀する故に泪の色かかはりて袖の色まてかかはりし也初句は我をこふとはしらすとも也あやしはあの淚は只の事とも思はれぬ人を戀するやうな泪であるがといふ意一首の意は戀せぬ人のなみたか此やうにくれなゐになるものかそこにめをつけて我をこふるとはおもはすともよそなからもがてんがゆかぬあの人は戀をするそうなとお

もへかしと也かくいひてすなはち我をこふるそうなと思へかしとおもふ也

百首歌に　　式子内親王

夢にてもみゆらむ物を歎つゝ打ぬる宵の袖の景色は

上二句下とかけ合うとし○上二句は夢になりともみえそうな物てあるがといふ事夢にもみえぬかしてしらぬ皃をしてゐるといふ餘情あり一首の意はかくのことくふかくこひわひてなけきながらねる夜の袖はから紅になるこれほとの事なれは人のうつゝにはよしみえすとも夢にはみえそうな物てあるかなアと也　二の句をみせはや人にといひてとちめををとかへはたしかにかけあふへし○かくいひてもきこゆれと詞迫切にて意盡たりみゆらん物をとしては詞のうへも風流に餘情かきりなき物をや　けしきといへる此集のころの歌におほし○文字こゑにあらす

かたらひ侍ける女の夢にみえて侍けれは

後徳大寺左大臣

覺て後夢也けりと思ふにも逢は名殘の惜くやは有ぬ

○一首の意はおもふ人に逢と夢にみて其夢かさめてからさて今あふたのは夢てありしなとおもふそれほとの事てもあふとさへいへははては名殘かおしいと也

千五百番歌合に　　攝政

身にそへる其面影もきえなゝん夢なりけりと忘る計に

夢なりけりといふ詞のいきほひは夢にてありけるよといはんかことし○一首の意は我身に面かけかそふてゐる故わすれられぬがその面かけもきえよかしさては戀する夢みて有たなとおもふて忘れるやうにと也

五十首歌奉りし時　　前大納言忠良

たのめ置し淺茅か露に秋かけて木葉降しく宿の通路

本歌いせ物語秋かけていひしなからもあらなくに木葉ふりしくえにこそありけれ秋かけてといへる本歌の詞なれはなくてかなはされとも此歌にてはかなひ難し其故はすへてかけてとは前より後をかくる事を云詞なれは秋かけては夏より秋をかけてにて俗言に秋へむけてと云詞なるに木葉ふりしくは時節たかへれは也木葉は夏より秋へかけてちる物にはあらさるをやよみぬしの心は木葉は冬の初

ちる物なるか秋の末よりもかつ〳〵ちる意にやされとさやうに後より前をかくる事をかけてといふ例ふるくはなき事にて○けにこれは古くはなき事にやあらん後より前をかけたるをいへる古歌ふともえおもひいてずもしさる例なくて此歌のつみにやあらんいとめてたき歌なるを心くるしき事也ことわりも叶はす○とはりは兼官をかけつかさと云かけにて兼る義也冬ちるへき木葉の秋をも兼てちる也とせはよろしかるへき歟それも秋より冬をかぬるとはいふへく冬より秋をかぬるとはいふましきにやあらん

摂政家百首歌合に　　中宮大夫家房

あふ事はいつといふきの嶺におふるさしも絶せぬおもひなるらん

○いふきの嶺へいつといふといひかけさしも草をさしも絶せぬといひかけたる計の文章なり一首の意はあふ事はいつといふ事もなくて何で此やうにおもひか絶せぬやらんと也おもひに火をもかねたるか

家隆朝臣

ふしのねの烟も猶そ立のほる上なき物は思ひ也けり

○ふしのねの烟てもまだ上かあれはこそやはり立のほる又うへもなきものはわかおもひそと也思ひに火をよせたり

百首歌の中に　　惟明親王

あふ事のむなしき空の浮雲は身をしる雨の便なりけり

○身をしる雨とは我身の数ならぬ事をおもひて落す涙なり浮雲にうきをそへたり便はその縁にてといふほとの事也

通具卿

我戀はあふを限のたのみたに行へもしらぬ空の浮雲

本歌我こひは行へもしらず○はてもなしあふを限とおもふ計そ　云々本歌にはあふを限とおもふとあるを○こゝろはおなし事なからも本歌には云々といはるゝかむつかしき也　そのたのみたになきよし也浮雲はゆくへもしらすきえ行物なれは也○一首の意は我命はあふをかきりとおもふてゐるがまたあはぬうちにしぬるもしれぬとなり

水無瀬戀十五首歌合に春戀　　俊成卿女

面かけのかすめる月こそやとりける春や昔の袖の涙に
面かけのかすめる月とは月をみれは人の俤のかすみてみゆるその月をいふ○子細なし　春やむかしの袖とはつゝめていはゝあひみし人のことを戀しのふ袖といふ意也○主意はさしもたかはねと詞のうへには遠き説さま也一首の意はもろともにみし春はむかしになりぬるかとなけく袖の涙に人のおもかけかそふやうにて月影かうつると也　そは既に春部にいへることく○それも此歌をとれるにはあらすたゝことはゝかり取たるかありき　此集の比かの伊勢物語の月やあらぬの歌の一首の意其歌ぬしのその時の意を春やむかしのといふ一句にこめてとれる例也○かくさたかなる事にはあらねと此歌は春やむかしのといふ上にもろともに月をみしといふ意をそへてみる歌也其もろともにみしといふ事詞のうへになしかの物語より出來る意なれは此説にちかし

冬戀　　定家朝臣

床の霜枕の氷きえわひぬ結ひもおかぬ人のちきりに
きえわひぬとは身も心もきゆることくかなしくわひしきを云きえも結ひも霜と氷との縁おかぬも霜の縁なり○四句をかぬは取とめたる事のなき也中の契を一たひは結ひたれとも取とめたる所なくやかてかはりし也ひたすら結はさるにはあらす一首の意は人か契を結ひたれとも取とめたる事なくかはりし故涙をなかせは床の霜となり枕の氷となるか其霜氷のことく命もきゆるほとそと也むつかしき歌也此注の次第を逐て下句より一々文字に引あてゝこゝろうへし　下句たゝ縁の詞のみにてさせる深き心もなけれは上句のおもひの甚せつなるにかけあはすきこゆ○下句を唯契を結はぬ事と心えられたるにやさては上句をみる事深切に過下句をみる事疎漏にして及はさるなり

攝政家百首歌合に曉戀　　有家朝臣

つれなさのたくひまてやはつらからぬ月をもめてし有明の空
つれなさのたくひとは有明の月はつれなきものにいへは人のつれなきたくひなるをいふ○かくの如し　までとは大かたは月をもめてし○これそ此つもれは人の老となるもの　といふ本歌のことく老

となるかつらきのみならす人のつれなきたくひまてかつらきと也○かくの如きむつかしきとりやうはなし本歌はたゝ月をもめてしといふ一句をとりたるはかりなり二三の句ふと心えがたき句作なりやはを三句の下へめくらしてつれなさのたくひまてつらからぬやはそれほとつらきもの也といふ事まてとは人のつらさはたくひあらしとおもひしに有明の月は人の比類ほとつらきと也まてはほとにあたる一首の意は有明の月は我おもふ人のつれなき比類につらからすやはあるしかつらきほとに今よゝはその月をめてしと也結句を初句の上へめくらして其下に我おもふ人のとそへてみるへし

宇治にて夜戀といふ事をそのこともつかうまつりしに　秀能

袖のうへに誰ゆゑ月はやとるそとよそになしても人のとへかし

四句よその事になしてなりともといふ意人は思ふ人也○一首の意はそなたは誰をこひて袖に涙をかけて月をやとらする事そと我身のうへとはしらすよその事にとてもとふてくれよかしと也　或抄に此涙は君故なれともそれとは君かしるましけれは誰故そとよそことになしてもとへかしと也○此説のことし　といへるはなしてといふ詞にかなはすすへてかやうのなすといふ詞はさはあらぬことをしひてそれになすをいへは○大方は此説のことくなれと此歌なるはしからすなすといふもしいとかろしよそになしてもはよそにしてもにてみつからのうへとはしらすともなり　よそになしてとは我故とはしりなからよそのことになしてといへるにこそあれ○我をこひおもふとはしりつゝ誰をこひて袖の上に月のやとるほとなきぬらし給ふそといはんは其人を弄するにて俗になふるといふもの也しかいひて人のとへかしとこひねかふへき事かは

久戀　越前

夏引の手引の糸の年へても絶ぬ思ひに結ほゝれつゝ

○一二の句は序としといふもしを隔てゝへとかゝるたえぬおもひとはわすれんとしても忘れかたきなり一首の意は年をかさねてもおひかたき故物おもひか胸にふさかりてくるしとなり

家の百首歌合に祈戀　攝政

いく夜我涙にしほれて貴船川袖に玉ちる物思ふらむ
本歌和泉式部物おもへは〇澤のほたるも我身より
あくかれ出る玉かとそみる此歌はこゝに不用也
云々奥山にたきりて落る瀧つせの玉ちるはかりも
のなおもひそ〇此歌はきふね明神の御歌上の和泉
式部か歌の御かへし也此歌の三句貴船川とあるは
此明神の歌をとりて玉ちるとよませ給へるよせな
り　此本歌の玉ちるは物おもふ心をいへるを　和
泉式部かあくかれいつる玉とは人魂の出る事にて
物おもひにしぬへきよし也明神の御歌の玉ちるは
魂散にて即しぬる事をの玉へる也しぬる計物な思
ひそとなためさせ給へる也物おもふこゝろとはか
りにはあらす　こゝの四句は涙を主として〇明神
の御歌は魂ちるなるをこれは涙の玉ちるとよりな
させ給へるなり　それに本歌の意と〇本歌はたゝ
四五の句をとり給へるのみ也魂ちるの意あるにあ
らす　川浪のかゝるとを兼たり〇川浪は唯縁の詞
のみ主意にはあつからす一首の意はいく夜われあ
ひかたき戀を貴船川の浪にしほれて神にいのりて
もしるしなしとて涙の玉の袖にちる物おもひをす
る事やあらんと也

定家朝臣

年もへぬ祈る契ははつせ山をのへの鐘のよその夕暮
下句尾上の鐘なる故によそに遠くきこゆる心にて
よそとつゝけたり〇尾上といふはさしも高き所に
あらす又よそといへはとて國郡へたてたる所をい
ふにもあらすたゝ我ならぬ人の事なれはふもとの
鐘なりともなとかきこえさらん尾上の鐘泊瀬山の
熟語のみ　さてよその夕暮とはよその人の入相の
かねに來る人をまちてあふ意也さてそれは我祈る
ちきりなるにわか祈はしるしなくしてよその人の
あふ契なるよと也〇たかへる事なし　こといとめ
てたき歌なるに年もへぬといふことはたらかすか
け合る意なきはくらをし〇此歌はつふ〳〵と佛に
申つゝくる詞也佛を祈申て年もへぬる事なるにそ
の祈る契はむなしくて尾上の鐘の夕くれ時分には
かよひ來てあふ契もよその人とのうへのみにてわ
か契にはあらすと也一首の意も一旦一夕の事にあ
らすは別に何のかけ合をかまたん

片思

俊成卿

憂身をは我たに厭ふ厭へ唯そをたに同し心と思はん

上句人のいとふにつけておもへる心にていとへたゝといへるたゝはひたふるにといふ意也〇たかひたるふしもなし　うき身とはいやしき身をいふ賤き者はうき事多けれは也〇述懐の歌のうき身の説さま也それすら官位もよろしきほと家もとみ身も榮ゆるか一事一言によりて身をうき物に思入も常なれはうき身を賤き身と定てはいひかたしましてこれは戀の歌にて貴賤の論は物遠しうき身とはいとはるゝ身也人にいとはるゝ故わか身のうき也いとふといひうき身といへはたゝにしかきこゆるわさそ　人のいとふにつきておもへは我はいやしき身なれは我なからみつからすらいとふなれは人のいとふはことわり也よしや此うへは人もいよ〳〵ひたすらにいとへと也〇我はいやしき身なれは我なからみつからいとふといひ又人のいとふはことはり也とおもひくつをれてはうらみ力いとよはくてやかておもひやむへきほとの事也これ歌によむ情にあらす人にいとはるゝわか身なれはこれほと人のいとふは我身はまことにうき身そと人のいとふ故はしめて我もいとふ也身をいとふは戀にあり官位の窮達世途の貧富なとに拘りたる事にあらす此歌かくそをたに同し心とおもはんなとやさしけにいひても人に心くるしとおもはせて思ひよはらせんとの構也戀の歌にはかやうの心はへ多かることそ　下句は我は人をおもふに人は我をおもはさるは同し心ならさるにせめては我をいとふ心をなりとも我と同し心そと思ひてなくさめんと也〇一首の意人にいとはるゝやうなうき身故我さへいとふほとにいよ〳〵いとひ給へ我身をいとふ心はかりは人もわれも同し心なりとて心をなくさめんと也同し心に思はさる故に同し心に我をいとひなりともせんといふ也　たにといふ詞二つあり上なるはすらの意下なるはなりとものの意也

題しらす　　殷富門院大輔

あすしらぬ命をそおもふおのつからあらはあふ夜をまつにつけても

本歌拾遺いかにしてしはし忘れむ命たにあらはあふ夜のありもこそすれ初二句はあすしなんもしられぬ命なることをかなしくおもふ也おのつからあ

らはゝあらはおのつからといふ意にてあらはゝ命のあらは也○命たにあらは逢夜もありもすへけれはそのあふ夜をまつ也一首の意は今はかやうにつれなくても命さへあるならは長い年月の中にはもしヒヨツと逢れるかもしれぬ故其折をまつにつけても命といふ物かあすもしらぬ物故それかきにかゝるとなり　逢夜をまつとはあふこともあらんかと待をいふ

八條院高倉

つれもなき人の心は空蟬の空しき戀に身をや替てむ

○人の心はういとかゝりたりむなしき戀とはあはぬこひを云身をかふるはしぬる事也一首の意はわれになひかぬ人の心かうい故所詮もない戀に命をうしなふ事かと也

西　行

何となくさすかに惜き命哉有へは人や思ひしるとて

○一首の意人にいとはれておしき命にてはないはつなれと何となく命かおしい其故は生て年へてこひするならは終にはいつまてもかはらす我をこふとおもひしる折かあらうかとて也

思ひしる人有明の世也せは盡せす物は思はさらまし

人有明といひかけつきせすに月をいへるいやしきたくみにていとうるさし○大かたはさる事なれと此歌はこれをむねとよみたるなれは一むきにはいひかたし　そのうへ有明の月此歌にいさゝかもよせなき事也○それは作者も心得のうへの事なるへし何のよせもなき有明の月を二つの秀句にいひたるかめつらしとて撰集には入しなるへしさせる深き意はなけれとけにめなれぬ事にてはある也

戀歌三

百首歌に　　式子内親王

逢事をけふ松かえの手向草幾夜萎るゝ袖とかはしる

本歌萬葉一に白なみの濱松かえの手向草いくよまてにか年のへぬらん初二句からうしてはしめてこよひと契りて逢事をまつ也しをるゝは草に縁あり○あふ事を今々とまつとて幾夜袖をぬらすとかおもふ夜をかさねたる事なれは今はあひてなくさめよといふ一首の意也いくよは上よりつゝきたるは幾年の義なれと幾夜の意にとりなし給へり　下句はしめて逢たる時にいふへきさまにてまつ時のさ

まにはうとし○上句にあふ事をまつとあり下にも幾夜しほるゝとあるをはしめてあひたる時にいふさまとはいかなる事ならん

題しらす　西行

あふまての命もかなと思ひしは悔しかりける我心哉

逢見て後いよ／＼おもひのいや增れるにつきておもへはいまたあはさりしほとに死たらんにはかゝるおもひはあるましき物を逢まてあらん命を願しは今おもへはくやしと也○以上みなよろし

二條院御時曉かへりなむとする戀といふ事を

其院讃岐　署名の不敬なる事物にて其院とはあまり也

明ぬれとまたきぬ／＼になりやらて人の袖をもぬらしつるかな

○一首の意は夜は明たれとも別の惜さにまたをのかきぬ／＼にえならすして人のきるものゝ袖さへぬらしたと也二句は古歌の詞

題しらす　西行

面影の忘らるましき別哉なこりを人の月にとゝめて

人のといへる詞いかにそやきこゆ○人のなこりをと打かへしてみるへしのはがの意人がなこりを月にとめしといふつゝき也一首はあひし人が月になこりをとゝめて行し事なれは別て後も月はよなよなみる物故此わかれの面かけは忘らるましといふ事なれはいかにそやともきこえす　袖のとあらは難なく心も深かるへし其故は袖の月といへは泪にうつれる月なるかその月をとゝめてといへはいつまでも涙のかわかぬ意もこもれは也○袖のなみたに月のうつる意はへは今古我人よみふるしたる故それをまぬかれてたま／＼かくいてきたる物を又例のやうに直さんとにや

後朝戀　攝政

又も來む秋をたのむの雁たにも啼てそかへる春の曙

たにもといへるにて戀の歌になる也たのむは賴むに田面を兼たり一首の意は春の曙に又こん秋をたのみてわかるゝ田面の雁すらかなしとて啼てかへる物をまして又いつ逢んと云賴みなき此わかれを也○一首の意は秋は又も來るといふたのみのある雁でさへ曙の別はなきてかへるにまして又はいつ逢といふ事の忘られぬ別はかなしさやる方もなしと也ましてより以下はたにといふもしより出來る

意也

題しらす　　　　　　小侍従

まつ宵にふけ行鐘の聲きけはあかぬ別の鳥は物かは

○こよひは來んといふ契約なれはとて待てゐる夜の鐘の聲が段々時かふけてゆけは身にしみてかなしいとくと打とけもせぬうちにもはや別を告し鳥の聲も悲しうおほえたがこれにくらへては物の數にもあらすとなり

題しらす　　　　藤原知家

是も又長き別れになりやせん暮を待へき命ならねは

これもは此今朝の別もなり又とは此別かやかて又なかき別になりやせんといふ意也○一首の意暮まて命かあらはこよひあはうけれと今朝の別の悲しさに命かあるまいからこれか長いわかれてあらうかと也

西　行

有明は思ひ出あれや横雲のたゝよはれつる東雲の空

四句は横雲の緣にたゝよはれといへるにて意はやすらはれつる意なるへし此歌三句より下ははやく有し事にて初二句はそれを今有明の空に思ひ出たる意なるへし○一首の意は有明の空にたゝよふ雲のやうに別かねてたゝよひし折の事は有明の月みるたひにおもひ出ると也

西行法師人々によませける百首歌に

定家朝臣

味きなくつらき嵐の聲もうしなと夕暮に待習ひけむ

初句は三句の次へうつして心うへし一首の意は待人の來ぬ夕暮には嵐の聲まてつらくうきにつけて我は何とてあちきなくかやうに人をまちならひつる事そと也○一首の意は人をまつ身になれはわけもなくあらしの聲までかつらくういなせに夕くれとなれは人をまつくせに我身をした事そと也　つらきあらしといひて又うしとはわつらはしきいひさま也○此難はいはれたりふといてきてふと撰に入たるを今にいたるまで何ともおもはてふと看過す事也此病なくはいかにめてたき歌ならんを　すへてあちきなくといふは俗言にいらさる事無益の事と云意也○あちきなくは味なくにてうまくもなき意なるを轉してこゝはわけもなくといふ意也わけもなく嵐の聲がつらくうきなれば一二三とつゝ

く三の句の下にうつしてみるに及はす　此歌にてはとても來もせぬ人を待はいらさる無益な事といへる也○此意歌に譜情にあらす

戀の御歌とて　　太上天皇御製

たのめすは人をまつちの山なりとねなましものをいさよひの月

三句とはともの意也結句はやすらひてねぬ事を山の縁にいさよひの月とよませ玉へる也○一首の意は今宵來るとたのみをかけすは人をまつ事はまちてもおもひ切てねるであらうか來るといふた計で久しく見合せていたと也かやうの所に月とよむ事今人はえせぬ事なり

水無瀨戀十五首歌合に夕戀　　攝政

何ゆゑとおもひもいれぬ夕たに待出し物を山端の月

待出しとは此歌にてはわさと月を待て出たるにはあらす物思ひてなかめをするほとに月の出たるを云一首の意は何故とさして思ひ入たる事もなかりしほとたにおのつから月の出るまてなかめはせし物をましてとはおもひ入たる戀になかめをのみして月の出るをみぬ夕くれもなしと也

寄風戀　　宮內卿

きくやいかにうはの空なる風たにもまつに音するならひありとは

聞やいかにとは云々のならひ有といふことを聞及ひ給へりやといふに其風の音を聞ことをもかねたりうはの空なるは俗言にいふもおなし意にて何の心も情もなき風といふ事にて空をふく縁の詞也○一首の意は取しめた事のないうわきな風でもまつときへいへはおとつるゝならひ也といふ事は御聞およひかどうでござると也　契沖云此發句人をことわりにいひつむるやうにて女の歌にはことにいかにそやある也○人をことはりにいひつむるやうにてもこれを聞てはらたつ人はなし意のせちなるか明分なれはいかに〳〵と重ねてもいはまほしき所也　さゝや君といはゝ增らんと申人侍きといへり○君としてもきこゆれと常の事也いかにといひてもよろしきにいかにとそいはまし　まことにいかには少しいひ過して聞ゆる也

題しらす　　西　行

人はこて風のけしきも更ぬるに哀に雁の音つれて行

○二句より下は人をまつ夜の哀なるさま也おもしろし二三句ことにめてたしされと上下かけ合たる詞なき故先生は物ともおもはれす

八條院高倉

いかゝ吹身にしむ色の變る哉たのむる暮の松風の聲

後拾遺松風は色やみとりに吹つらむ物思ふ人の身にそしみけるといへる歌によりて○作者の意は此歌とりたりとはおもはれさりけめとかくさしならへてはけに本歌といはんもにけなからす　松風はもとより物おもふ人の身にしむ物なるかたのめたる暮には又常よりもまさりて身にしむとなり○けふとふへしと約束して人をまつ夕くれの松風の聲はいかに吹かして常とはかはりしと也　たのむるはたのめしとあらまほし○たのめしは過去の事なれはしといふへし又其夕くれは現在只今なれはたのむるともいふへき也　此歌初句のくもしと二句のむもしと重なりてのひやかならすすへてくすつぬふむゆるのもしかやうに重なる時は聞よからす○古今未曾有の難深文刻薄也

長明

たのめ置人も長柄の山にたにさよ更ぬれは松風の聲

たにといへるにて戀の歌となれり我はましてたのめ置たる人のあれはまつ心のせつなることをおもひやれとの意なり○一首の意は今宵來るへしと約し置たることがなきとても夜かふけ行はひとまつ物をまして今宵とたしかに約束のある事なれはまたれて〳〵てならぬと也結句はまつといひかゝりたる計にて松風の聲は一首に用なしまつち山はいさよひの月と同し例也　さよふけぬれはとは夜のふくるまてまつ人の來ぬにつけていへる意なり○夜のふくるまゝに人をまつはたのめたる事もなき常の事にて此歌の反也これをたのめ置てよひよりまつ也

秀能

今來むとたのめし事を忘れすは此夕暮の月や待らん

本歌今こんといひしはかりに○長月の有明の月をまち出つる哉　云々此歌は本歌を打かへして○かくむつかしくいはすとも本歌はたゝ詞はかりをとれる也　こなたよりたのめ置しときこゆ○此説よろし二三一四五とつゝきたり　さるはちかきほと

に参らむとたのめ置つれとも障有てえゆかぬにつきて今宵なとは其人の必我を月出は來んとまちて月の出るをまちやすらんとおもひやれる也○以上みなよろし

待戀　　　　　式子内親王

君待と閨へもいらぬ槙の戸にいたくな更そ山端の月

本歌君こすはねやへもいらし云々槙の板戸もさゝすねにけり〇かはかりの由緒は歌毎にあるもの也古歌をとれりといふまてもなし一首の意は堅いやくそくをしてけふは來るてあらうとおもひて里へもいらすにおきておるものをまきの戸の山端の月はあまりふけてくれるな夜かあけそうて心ほそいとなり

こひの歌とて　　　　西　行

たのめぬに君くやとまつよひのまの更ゆかてたゝあけなましかは

三句以下は更行ことなくよひの間のまゝにて早く明たらはといふ意にて其下へ嬉しからむといふ意をふくめたる格也うれしからむと思ふゆゑはたのめもせぬ人なれはとても來る事はあるましきに來や〳〵と夜更る迄かやうに待んことといとくるしかるへきに早く明たらは待心のやむへけれはうれしかるへき也○待心のせちなる事みゆ　此歌戀の情にあらす趣意のよろしからぬ歌也○ふくるを恨むるやうによむも一つの趣也かくよむも一つの趣なりいつれを戀の常情といはん

定家朝臣

歸るさの物とや人の眺むらん待夜なからの有明の月

我はまつ夜なからにむなしく明ゆく此有明の月をよその人は〇我まつ人をさして人といへり大かた世上の人をいふにあらす　思ふ人に逢てかへるさの物とやみるらんとうらやみたる也〇我おもふ人がわれをばとはて外の人のもとにかよひて其歸るさにつれなき物と詠るやらんわかかやうにまちあかしてみる有明の月をと也

片思　　　入道前關白太政大臣

我計つらさを忍ふ人やあると今世にあらは思合せよ

〇一首の意はそれほと人のつれないにこらへるものかあるかないか今わか戀しにて後人にこひられん時におもひあはせよとなり四句今我こひ死たる

跡に君か世にあらは也

攝政家百首歌合に契戀　　慈圓大僧正

唯たのめたとへは人の僞を重ねてこそは又も恨みめ

たゝたのめはとやかくと人を疑はすたゝひたすらに我云ことをたのめと契る人に云なりたとへはといふはいまた其事のなき時にもし左か〳〵の事あらん事といふ時につかふ言也此つかひさま此ころの物にはたゝの文にもをり〳〵みえたり此歌にてはいまた僞をも重ねはせさるにもし此後いつはりの重なる事あらは其時にこそといふ意なり人はこゝにては我をいふかなたのうへよりいへは我は人なり結句又とは上のかさねてといふにかけ合たり然れは此歌は人の恨むるにつきていへる意にて今までの事はともかくまもれ今より後はたゝ我をたのみ給へ此うへ我僞のかさなりたらんにこそ又もうらみ給はめといへるなり○たとへはは俗語にも常いふ假令とかきて漢文よみにはつねの事也尾張あたりの俗語には字音に假令ともいふなり人は誰となく人也たとへに事を設ていふなれはさす人はなしみのゝ家苞の說もたかはねと迂也一首の意はよくいさゝかの事にもうらみ給ふがそれをやめてひたすらたのみ給へ我に僞はなき也假令人か僞ことを重ねし事ある時あらは又も恨み給へと也又とは今恨むるに對して後に恨むる時あるを又といふなり

題しらす　　小侍從

つらきをもうらみぬ我にならふなようき身をしらぬ人もこそあれ

我こそわかうき身のとかに思ひなして君かつらきをもうらみねそのうらみさるにならひてよき事とおもひて人につらくあたり給ふなよ人は我ことくにはおもひなためぬ事もあらんにと也○かくの如し　うき身をしらぬは我はうき身なれは○人のつらきかことはり也といふ事を也　といふ事をわきまへぬをいふ○かくいふがみつからのうらみなり

殷富門院大輔

何かいとふよもなからへしさのみやはうきにたへたる命なるへき

人のつれなきまゝに死はやとおもふにつき又おもひかへしてさやうに何かは我身をいとはむ○みつ

からおもふ事ならは初句何かいとはんといふへき
なり　かはかり人のうきには堪て長くはえあるま
しき我命なれはいとはすとてもよもなからへはせ
し物をと也○初句の説あたらず二句以下は事もな
し　或抄に初句を何かは我をいとひ給ふとつれな
き人にいふ詞也○此説のことし　と註せるはたか
へりさては命といへる事つたなし○命といはては
死る事とたしかにきこえさる故かくいへる也命と
いひたらんに何かつたなき　我身なとこそあるへ
けれ○さては死る事ときこえす　命といひては我
命を人のいとふ心になるをや○さはあらす一首の
意は何故その様に我をいとはるゝそさのみいとひ
給はすともよもなからへてはおるまじしはしの程
こそつらいのをくらへてもみたれそう〳〵は命か
えこらへまいからと也戀死にしなんと云々

西　行

哀れとて人の心の情あれは數ならぬにはよらぬ嘆を

○一首の意戀をするには[illegible]との有て我身の數
ならねは高き人はおもはぬ物ならはよけれとそれ
にはよらて物おもひをしてなけくをアヽハヤこの
人もそれほとにおもふかとて情をかけてくれよと
也

身をしれは人の科共思はぬに恨み貌にもぬるゝ袖哉

かこちかほなる我涙かな○なけゝとて月やは物を
おもはする　といへる歌とおなしさま也○下句の
似たるをいはるれと歌の主意は上句にある故清く
別義也一首の意は我を人かいとへとそれは我身の
數ならぬ故の事としれは人のとかとはおもはすう
らみはせぬを袖の涙はわけもしらす人うらみかほ
にぬるゝとなり

女につかはしける　　俊成卿

よしさらは後の世とたにたのめおけつらさにたへぬ
身ともこそなれ

我は君かつらさにえ堪すて死ぬる事もあるへけれ
はよしや此世にてはつれなくともさらは後の世に
あはんとたに契おけと也○すてにあひたる女の事
のさはりありてあひかたけにしたるをうらみたる
歌也

かへし　　定家朝臣母

たのめ置む唯さ計を契にて憂世の中の夢になしてよ

然らは後の世を契置へきほとにたゝそれはかりを此世にての縁にはして今まて逢みし事は夢に思ひなして今逢かたき事を恨給ふなと也契は俗にいふ縁の意也此歌によりてみれは思なから逢事のなりかたかりし中と聞えて哀なり

# 尾張廼家苞四之下

## 新古今集

戀歌

題しらす　後徳大寺左大臣

うき人の月はなにそのゆかりそとおもひなからも打なかめつゝ

何ぞのは何のにて○そもし濁りてよむはわろしいくはくといふ事をいくそはくと云そにて清てよむ例也何のゆかりにてといふ事なり　月はうき人の何のゆかりそ何のゆかりにてもなきにとは思ひなからもうちなかめつゝかこたるゝ事よと也

西行

月のみやうはの空なる形見にて思ひも出は心通はむ

月はうはの空なる形見にて○二句うはの空なる契ともしをくはへて見るへし契し人の心はかはりこれと契にかけし月かけは變らぬがすなはちうはの空なる形見也　さてたかひに思ひ出たらん時に○かはりし人か月を見て其契を思ひ出す事也互にと云意はなし我は忘れさる事勿論也　心の通はむ形

見は其月のみにやあらんといふ意也○心かよはむを主としてよみたる歌也　にてといふに心をつくへき歌也○一首の意月にかけて契たりし事ある人々か忘れ果たれはその月はうはの空なる形見にてあれともしかく契りし事よと思ひ出たらは其時はかり心かかよふてかなあらうとなり

隈もなき折しも人を思ひ出て漫に月をやつしつる哉
○隈もなき折しもは月影のくまもなき折しも也やつすとはそこなひてわろくする事一首の意くまもない月影も戀しい人をおもひ出して涙かこほるゝ故にわけもなく月をくもらしたと也すゝろは俗にわけもなくといふ

物思ひて眺むる頃の月の色にいか計なる哀そふらん
○一首の意戀に物おもひをしてなかむれは月が身にしむこれはとれほとの哀かそふてゐることとそとなり

八條院高倉

曇れかし詠むるからに悲しきは月におほゆる人の俤
○いつそくもれかし詠るにつけて身にしみて悲しいは月影に戀しい人の俤か立ていとゝおもひ出さるゝとなりおほゆるとはおもひ出す事

百首御歌の中に　太上天皇御製

忘らるゝ身をしる袖の村雨につれなく山の月は出鳧
下句は村雨には空かきくもりて月はみえぬ物なるに我袖の村雨にはさはらすさりけもなく出たると也○身をしる雨とはうきは我身とおもひしるにつけてこほるゝ涙をいふ一首の意は人にわすられて身のうさにこほるゝ袖の泪の村雨にしんほうつよく月かけは晴て出ると也　つれなくとあるに我袖の涙をあはれとも思はすしらすかほに出たる月をもかこつ心あり○つれなきに此心はなし

千五百番歌合に　攝政

廻り逢ん限はいつとしらね共月な隔てそよその浮雲
忘るなよ程は雲井になりぬとも○そら行月のめくりあふまて　云々結句は我ならぬ人にあふたとへなり○五句は戀のさはりをたとへいふ他人にあふ事にあらす　うき雲といふも用ありてきこゆ○うきといふもしはうきさはりといふこと　さて四句はこと人にあひて我中のさはりとなるなといふ意にて下句の落着はこと人になあひそといふ意也○

其意はなし四句は當月のうちにはとへと云事月光に月次の月をそへたり一首の意はめくりあはん際限は人のゆるさぬ事なれはきといつあふへしといふ事はなけれともよしさはり有とも當月をへたつるな必みそかまてには逢へしと也

我涙もとめて袖に宿れ月さりとて人の影はみえねとさりとて人にそはぬものゆゑ○古今戀すれは我身はかけとなりにけりさりとて人にそはぬ物故　さりとて人のしらぬ物故○拾遺遙なるほとにも通ふ心哉さりとて人のしらぬ物故此歌此二首によしなしさりとてと云詞例をまつへきにあらす　二三の句いうならす○二三の句いと〳〵めてたし此頃は一々に姿のかはれるをめてたしとしたる物也下句詞めてたしとある下句は猶尋常也一首の意わか涙を求め來りて袖の上に月はやとれかししかりとて我おもふ人の影のみゆるにはあらねともと也

權中納言公經

こひわふる涙や空に曇るらん光もかはるねやの月影

光もとは人の契のかはりたる意をふくめたる也○一首の意戀わふる涙にくもるやらんねやの月が常よりも光かかはりしと也　光と影とはいかゝ○月影はなほ月のことし影とはたゝいひなれたるまゝにいへる也此難は人々いふ事なれとこれらを例として同心をまぬかるゝ故ありとさためまほしきわさなりかし

通光卿

幾めくり空行月も隔てきぬ契し中はよそのうき雲

本歌のことく空行月のめくりあふ迄と契置しはよその契になりて我との中は隔りて其月も幾めくりかへぬれとも逢事もなしと也○本歌忘るなよほとは雲井にへたつとも空行く月のめくりあふまて一首の意は空行月のめくりあふ迄わするなよと契たる中なれとも今はよそのうき雲と隔りて幾めくりも月日をへたてぬる事よとなり　雲は月を隔きぬの縁也

通具卿

今來んと契し事は夢なからみし夜にゝたる有明の月

本歌今來んといひしはかりに○長月の有明の月をまち出つる哉云々と　讀る時の意にて有明の月を待出て見てよめる意也かやうに見されは初句詮な

し○本歌は詞をとるもの也それを詮とてかくむつかしくとる物にはあらす　夢なからとは跡もなく夢のごとくになりぬれともといふ意也みし夜とはあひし夜といふ意なるを夢の縁の詞にてみしとはいへる也○一首の意今來んと契たりし事は夢のやうになりてたかひ行事なれとも有明の月かさきにあひし夜に似たる故たのまるゝと也

有家朝臣

忘れしと云し計の名殘とて其夜の月は巡り來にけり

忘るなよ程は雲井に云々此本歌の初句もわするなよ我も忘れしと互にいへる意こもりたれはそれをとりてわすれしといひてもたかへる事なし○本歌はかやうにむつかしく取ものにあらす忘るといひ月といひめくりといふか本歌の詞なりさてわするなよをわすれしとよめるは一首の活用にていかやうにも取なす也一首の意は月を見て忘れしといひし事のある其なこりなりとてかの契し夜の月かめくり來たる事よとなり　二句のはかりは月の所へもひゝきておのつから其夜の月はかりはといふ意に聞ゆ

題しらす　攝政

思ひいてゝよな〳〵月に尋ねすはまてと契りし中や絶なむ

初二句は打かへしてよな〳〵月におもひ出ての意也尋ぬとは月を見てまてといひし人の許へおとろかしやるを云そは月夜には必來へきほとにまてとの玉ひしかいかに來給ふへしやとやうにいひやる也さてさやうに折々驚かせはこそ其人も思ひ出て問來る事もあれさもせすは人は忘れはてゝ絶やせんと也如此

家隆朝臣

忘るなよ今は心のかはる共なれしその夜の有明の月

有明の月を忘るなよといへるにて然いふかすなはち昔の契をわするなといふ意也○なれしはあひ馴し也二三四五一とつゝく

法眼宗圓

其儘に松の主もかはらぬを忘れやしぬる更しよの月

○さきにあひて諸ともにふけ行月をみてあはれとおもひしにこよひの月はもとより松のあらしさへかはらぬを君はわすれやし給ひしと也

秀　能

人そうきたのめぬ月はめくり來て昔忘れぬ蓬生の宿

初句はうき物は人なりといふ意にてそもしおもしめくり來てとは本歌のめくりあふまての詞にて〇本歌はわすれてみるへし　人は昔の契のかはりたる意をこめたるもの也〇一首の意はたのみをかけもせざりし月はむかしにかはらす蓬生の宿をとひ來るにたのみをかけし人はかへりて尋こぬ心故その人かうきと也

八月十五夜和歌所にて月前戀　　攝　政

わくらはに待つる宵も更にけりさやは契し山端の月

初二句はまれにたま／＼來むと契て待宵も也四句は月の山端にかたふくまてとは契らざりし也〇わくらはにはたま／＼に也

有家朝臣

こぬ人を待とはなくて待よひの更行空の月も恨めし

月ものもゝしはまつとはなくてといふよりをうけたりまつとはなくて待よひにも更行月はうらめしといへる意也〇今は中絶て契もなければまつ故はなけれともしやと待るゝ夜の月もふけ行はうらめしと也

定家朝臣

松山と契りし人はつれなくて袖こす波に殘る月かけ

上句は君をおきてあたし心を我もたは〇末の松山浪もこえなん　云々と契りし人はつれなく其契のかはりて也四句は涙にてかの本歌の詞也〇かくの如し　又かたみに袖をしほりつゝの歌をも思はれたる也〇本歌一首にて事たれりしか末々まて尋ぬへき事に非す　又こす浪といふ詞に契のかはりたるよしをこめたり〇よろし　結句のこるといへるはたらきたる詞也契はたえて月影のみ殘りて忘られぬさまとなるよし也〇一首の意松山をためしに契りし人はつれなくて契約もたかひたれはかの松山を浪のこす如く袖に涙かかゝる故その泪に月かうつりてなこりもかなしくおもふとなり

千五百番歌合に　　俊成卿女

習ひ來したか僞もまたしらて待とせしまの庭の蓬生

千五百番歌合に四句のゝもしにと有さてはこよなくおとれり上句ならひ來しとは世のならひとなり來しと云意にて契をたがふる僞は世のならひにな

り來しことなれども我はそのならはしのたか僞もいまたしらすして也またしらてとはその僞にいまたあはぬをいふ〇むつかしき歌なりしはらく此分に心うへくや一說通例世上の人は契もたかへいつはりするも常の事也我おもふ人は契はたかへし僞はあらしとおもひしにやはり世のならひに僞して契をたかふるともしらてけふあすと人まつほとに庭は蓬生となりたりと也　下句はそれ故人の契りしことをまことゝおもひて待とせしまにはやく人は僞にてとひも來すしてかくの如く庭は蓬生とあれたりと也〇めてたしともめてたしとあるは庭の蓬生上句によせなきをいかにゆるさるゝにか雪けにくもる春のよの月のためにわれ寃をうたふ

經房卿家歌合に久戀　　二條院讃岐

跡たえて淺茅か末に成にけりたのめし宿の庭の白露

二三の句は後拾遺に物をのみおもひしほとにはかなくて淺茅か末に世はなりにけりといふをとりて〇詞の先例也　庭のあれたるさまをかねて露も淺ちか末におくやうになりたりと也〇一首の意は又もとはんとたのめ置し此宿の庭は人跡はたえて淺ちか末となりて露さへしけいやうになりしと也

攝政家百首歌に　　寂蓮

こぬ人を思ひたえたる庭の面の蓬か末そ待に增れる

すへてはたのめつゝ來ぬ夜あまたになりぬれはまたしとおもふそまつに增れるとあるを本歌として其歌の心なるを三四の句は心えかたし〇たえはてたる後待れし時よりも物おもひか增ると云事よく聞えたり一首の意は此人は今は來ぬ物なれはまたしと思ひ絕たる我宿の蓬の末が高く成行をみるそ待れしほとの物思ひより增ると也　もし庭の蓬のいたく立のひて松よりも高くなりたる意にいひかけたるにやもし其心ならはいかゝすへて物を甚しくいひなすは常のことなから蓬の松よりも高くなれるとはあまりなるいひさま也〇此心にはあらすされと三四の詞つゞきいかにそやきこゆるなり

題しらす　　通光卿

尋ても袖にかくへき方そなき深き蓬の露のかことは

蓬生卷に尋ねても我こそとはめ道もなくふかき蓬のもとの心をといへる歌をとれり尋ぬるは上にいへることとく昔の事を求め出ていひ出る也本歌にも

との心をとあるにてもしるへし蓬といふから露といひ露といふから袖にかくへきとはいへるにて二三の句はかこち恨へき方そなきといふ意也深き蓬の露のかことは深き蓬生の宿とあれて露しけきことをいひたてゝ恨むるを云一首の意は今は早くかよひし跡もなく蓬生となれる宿にて其人はたえてとひも來すたよりも絶ぬれは昔の契をいひ出て君かつれなくなれるによりてかく宿はあれ果侍ぬとかこちうらむへき方もなしと也○此説すへてきこえず心なかくて詞に得かたくや正明も心を得さりしをからくして一說を得たりたつねてもとはとひ來る事深き蓬とは人のとひこで庭のあれたる事露のかことゝは其うらみをいふ事袖にかくへきかたそなきとは淚のみ袖にかゝりうらみのふしをえつゝけやらぬ事一首の意はたまへとひ來たれ共深き蓬となるまてとはさりしくせちをいはんとすれとも淚のみ袖にかゝりてえいひやらぬとなり

藤原保季朝臣

形見とてほのふみ分し跡もなしこしは昔の庭の荻原

二句のほのは三句へかゝれしほのかなる跡もなしの意也○猶ほのかにふみ分しとつゝくなるへし昔のは昔になりしといはんか如し一首の意は人の通ひ來しは昔になりぬる庭の荻原なれはふみ分し昔の形見とてほのかに殘れる跡たにもなしと也○一首の意形見にとてみる庭の道がほのかにふみ分た跡もないかよひ來たは昔にて庭の道はことへく荻原に成たと也　荻原といふに古歌のより所なとあるか考へすもしさることもなくは蓬生とならんそまさるへき○荻原は荻のしけりて道を侵したるなり

法橋行遍

名殘をは庭の淺ちにとゝめ置て誰ゆゑ君か住うかれけむ

○人のかよはぬやうになりて淺ちも生しなれは庭の淺ちは來ぬ人のかたみ也すみうかるゝとは我方に人のゐつかぬ事庭の淺ちを名殘にのこして我方に君かゐつかぬは誰をおもふ故そと也

攝政家百首歌合

定家朝臣

忘れすは馴し袖もや氷るらむねぬ夜の床の霜のさ莚

床の霜の寒きさ莚にひとりねられぬにつけておも

ひやれる意にて我を忘れすは馴し人の袖も此わかそてのことくこほりやすらんと也○大かたはかくの如し袖のこほるといふは正しく涙をおもはせたるへけれとも猶なきねのなみたとみるへし　我袖のこほる意下句にそなはれり○一首の意はめもあはぬ我なきねの泪の霜のさゆるにつけておもへは我おもふ人も我をわすれすは我とかさねなれた袖のなみたがこほりやすらんとなり

家隆朝臣

風ふかは嶺に別れむ雲をたに有し名殘の形見共みよ

上ノ句風ふかは嶺にわかるゝ白雲の○たえてつれなき君かこゝろか　とある古歌の詞によれりありし名殘は別し曉の横雲の名殘也ゝありし名殘のはありし別のなり此詞此集の比より此意につかふ事也

但上にいへるわかれむ雲は横雲の事にてあらす○横雲の事にはあらねと其意はへをよめる也　いつにても風ふけは嶺に別れむ雲を見はそれをたに也たにといへるは今はあふへきよしもなけれはせめてはそれを見たにせよの意也○一首の意は風が吹て雲が嶺に別るゝならはせめてそれなりともあひし夜の別に横雲が嶺に別れたが其形見とも見給へと也上句の雲はいつにてもあれ風にて嶺に別るゝ雲也其雲にて横雲をおもふ也　名殘のかたみとは名殘とおもひて形見ともみよといふ意也されと何とかや同しことの重なりたる如くきこゆ○なこりは別なり此ころよりみゆる詞也

百首歌奉し時　攝　政

いはさりき今こん迄の空の雲月日隔てゝ物思へとは

いはさりきは人のいはさりし也然れともわかいはさりしやうに聞えていかゝ○何の子細かあらん二三ノ句むつかしきやうなれとよくきこえていとたくみなるいひさま也そはまつ月日へたてゝといへるは月日をへて久しくあはぬことなるをそれに空なる月日をへたてさふることをかねて空の雲とはいへるなり雲は月をも日をも隔つる物なれは也さてそれを今こむまてのといへるは今ちかき程にこんとこその玉ひつれそれまてのあひたの空の雲に月日をへたてゝ待久しく物おもへとはの玉はさりし物をといひかけてうらむる意也○二三の句は今又來んまては雲を見てなくさみ玉へと契りし也雲

をしか云は楚王の故事によりて也一首の意はかく別をしても今又來逢へしそれまては雲をみてなくさめとの玉ひし其雲て月日をへたてゝ物おもひをせよとはの玉はさりし物をと也　さて又雲に物おもふといふよせ有夕くれは雲のはたてに物そおもふなと有ことく○あなかちなる緣の詞なり月日へて夕くれことにまちて物思ふ意也

水無瀨戀十五首歌合に　　　攝政

草深き夏野わけ行さをしかの音をこそたてね露そこほるゝ

○草深きは露そこほるゝといはん料夏野とは音をたてぬといはん料なり一首の意は上の句は序人をこふるとて聲たてゝなきこそせねなみたはこほるゝと也

入道前關白右大臣に侍ける時百首歌人々によませ侍けるに忍戀　　太宰大貳重家

後の世をなけく涙といひなしてしほりやせまし墨染の袖

○一首の意かくれなし墨染の袖に戀の涙をつゝまん事破戒の比丘なり事のさま殺風景なるを集に入し事不審

千五百番歌合に　　通光卿

眺め侘それとはなしに物そ思ふ雲の旗ての夕暮の空

本歌夕くれは雲のはたてにものそおもふ○あまつ空なる人をこふとて　云々それとはなしにとは本歌のやうに天津空なる人をこふとにはあらてといふ意なり○大かた本歌のことく云々ととくはむつかしきを此先生の一癖にて常かくさまに說るゝ事也二句それとはなしにとは俗に何といふ事はなしにといふ意戀に心をいたましめてみる物きく物何故となく物おもひをするなり下の意は其中の一ヶ條にてたとへは雲のはたての夕くれの空なとにても物おもひをする事となり

雨の降日女に遣しける　　俊成卿

思ひ餘りそなたの空を眺むれは霞を分て春雨そふる

四句たゝなんとなくいへる事とも聞えすされと其意いまた思ひえす○本歌なとありやとおもはれたる也されとこれはさもあらす　殊なるよしなくは詮なき○雨の緣に空とはかりにてはあかすとにやいひことと也○下句は空のけしきさへかなしと也

雲のはたての夕くれのそら霞を分て春雨そ降なとやうの歌は此二句に物の哀をかくしてみせたるよみさまなるを詮なしといはるゝ情なき事也

うとくなる人を何とてうらむらんしられすしらぬ折もありしを

○一首の意今更に疎くなるとて人を何ゆゑに恨むる事ならんあなたもこなたもしらぬどうしの事さへも有た物をと也

今そしる思ひ出よと契りしは忘れむとての情也けり

おもひ出るはわすれたるうへの事也もし忘るゝことなければは常におもふなれは思ひ出るといふ事はなき故にかくはよめり○以上したゝかにて老荘なと説らんか如き至理也一首の意初相おもひし時おもひ出よと契しはかくわすれんとての情にてありし事と今そ思ひしると也　此歌の趣にては二句おもひ出んといはては聞えす出よにてはたかへり○おもひ出んには人のみつからのうへの事おもひ出よにては我うへの事にてともに聞えたり

建仁元年三月歌合に逢不過戀

土御門内大臣

逢見しは昔語のうつゝにて其かね言を夢になせとや

逢見し事はむかし語になりて今は名殘もなけれとそれは猶うつゝにてありし物を其時のかね言をは夢になせとにやとなり二三句たゝうつゝといひては今も逢みる事のあることく聞ゆるを昔語のうつゝといへるおもしろし○此說のことし

權中納言公經

哀なる心のやみのゆかりともみし夜の夢を誰かさためん

君や來し我や行けむ○おもほえす夢かうつゝかねてか覺てか　云々かへしかきくらす心のやみに○まよひにき夢うつゝとは世人さためよ　云々此二首をとれり○君やこしの歌はこゝに用なしかきくらすの歌は夢とかひてさたむるといふ出所也　あはれなる心は人をあはれとおもふ心也夢を心のやみのゆかりといふはまつ逢とみる夢はあはれと思ふ心からみれは心のゆかり也さて夢はよるみるものなれは闇のゆかり也○みな此說のことくなるへけれととかれたるさましたゝかにて老莊なといふ書もてあつかふらんかことく至理に出てかゝる物

には似合しからす　四句は一夜逢見し事也○さる事也　結句は本歌には世人定めよとあれとも○かやうにむつかしき古歌のとり様はなき事也　此夢をわか人をあはれとおもふ心のやみのゆかりそとは誰か定めむといへるにて落着は我かくふかく思ふ心のやみを思ふ人のおしはかりてまたあへかしとねかへとも人はさもあらしと歎たる意也見し夜の夢をさたむるは本歌に夢うつゝとはこよひさためよとあるを以て又逢事にとれるにて心のやみのゆかりと定むるは人のわか深くおもふ心をおしはかりて又逢をいへり○一首のこゝろは一夜逢見し夢のやうなる事はアヽハヤいとをしいと心か闇になる縁て有たと人にいはぬ事なればたか判斷せうそ君こそしりてうつゝとはおほさめと也

通光卿

ちきりきやあかぬ別に露置し曉はかり形見なれとは

露おきし云々とは別れし時の涙のことく今も曉ことに袖をぬらすそれはかりか形見にてあれとは契らさりし物をと也○一首の意說得られたり　おきしといへる詞形見に殘し置し緣あり○けにこれはよくひゝきたり

寂蓮

恨みわひまたし今はの身なれ共思ひ馴にし夕暮の空

上句恨わひぬれは今は待ましき身なれともの意也二句は今はまたしを打かへしていへる也すへて詞をあるへきまゝにいひ下してよきと下上に打返していひてまさるとのけぢめあり心はおくへし○打かへしていふは曲折にて此比の一つのすかた也四句待なれにしといふ意なるをおもひ馴にしといへる待といふこと上にある故に詞をかへていひて上なるまつをこゝへもひゝかせて聞せたる格なり下句は待馴たる夕暮なれは今もまたすにはえあらすといふ意也

宜秋門院丹後

わすれしのことの葉いかになりにけんたのめし暮は秋かせそふく

二三句秋風のふけは木葉は散うする物故にいへり○いひし言葉のしるしなきをよせたり　秋風は人のこゝろに秋の來てとひこぬよしなり○かくのことし

家の百首歌合に　　攝政

思ひかねうちぬるよひも有なまし吹たにすさへ庭の松かせ

初句はまちわひての意なるを下にまつかせとある故に例のことはをかへたる也〇常はおもふにたへ兼の意に用るをこれはめつらか也　四句は吹ゆるひたにせよ也〇すさひは進む方にいふが常なるをこれもめつらし手すさひ口すさひなどいふもあれと吹すさふとは異なるか如し隨筆にみゆ　庭の松風の音にしきりに待心を催す故にねられもせぬよし也

有家朝臣

さらてたに恨みむとおもふわきもこか衣のすそに秋かせそふく

わきもこか衣のすそを吹かへし〇うらめつらしき秋のはつかせ　云々の歌をとりて裾を風の吹かへせは裏のみゆるを恨みといふにとれる也此歌の詞のうへのたくみのみにて情はなし〇けに戀の情切ならねと一首の姿めてたき歌也

題しらす　　西行

あはれとてとふ人のなとなかるらん物思ふ宿の荻の上風

〇一首の意はこれほとに物おもひをする荻の上風の物かなしき比いつはとはすともかやうの時分になせにとふてはくれぬとなり

式子内親王

今はたゝ心の外にきく物をしらすかほなる荻の上風

二三句こぬまても人のまたれし比は夕くれの荻の上風につけても心をいためしかとも今は來ぬものになりはてゝ待るゝおもひもなけれはたゝ心の外にきく物をと也〇心とは待情の情也今は中絶てとひ來りし人のふるまひかとおもふ心はなきを心の外といへる也　しらすかほなるとはさとはしらすかほに今も無むかしのまゝにふく事よといふ意なり〇一首の意は今では人かとひ來たるかなどやうにはさつはり心にかゝらぬ荻の音なる物をしらぬかほしてやはり秋風そふくと也

家の歌合に　　攝政

いつもきく物とや人の思ふらんこぬ夕暮の松風の聲

こぬ夕くれの松風の聲はことにいつよりも身にし

みてかなしきものをといふ意をふくませたる歌也
○松風の聲をいつもきゝなれたる聲とて人は耳に
もかけぬかしらぬこよひは來るてあらうとてまつ
夕くれにはいかう身にしみていつもとはかはるも
のをと也

慈圓大僧正

心あらはふかすもあらなん宵々に人待宿の庭の松風

一首の意は人まつ宿ては庭の松風かふくにつけて
も人のまたるゝ物なるに其松風に情かある物なら
はふかすにゐてくれよかしと也

和歌所歌合に逢不遇戀　寂蓮

里は荒ぬ空しき床のあたり迄身は習はしの秋風そ吹

手枕のすきまの風も寒かりき身はならはしの物に
そありける此本歌の意は逢し夜はたかひの手枕の
すきまの風たに寒くおほえしを今はひとりねのみ
するにさてもねらるゝをおもへは身はならはしの
物にて有けりとみるなり爰の下句はそれをとりて
逢事も今は絶て獨寢のみする比の秋風也○里はあ
れぬは人のとひ來ぬ故郷なり空しき床はひとりね
のみする床也一首の意は人にとはれぬ故郷と成た
ことかなひとりね計する床のあたりへ人の身はな
らはしの物てあるにちと寒いになれよとて秋風か
吹となり　さて初句は里はあれてと有へきを荒ぬ
といへるは○てといひてもきこゆれとぬといひて
初句にて切るは歎息したる語勢ありてめてたき事
限りなし　床のあたりまて秋風の吹はかりあれぬ
といふ心なるへく○此心は里はあれてといひても
同しかるへし　又てにては三句までのでと重りて
少し調もよろしからぬ故なるへけれと○三句まて
といふ詞也何の子細かあらん　あれぬといひて秋
かせそ吹ととちめては詞かけあはすいかゝ○二段
にきれてとゝのひたり此例は此さし次の院の御歌
も初句ぬとありて結句けりときれたり此比の歌に
は數しらす多かる事なるを何故かくいはるゝ事な
らん　かやうにいひ切てはもしを重ぬる事秋は來
ぬ紅葉は宿に降しきぬ○道ふみ分てとふ人はなし
云々なと一つの格なれとそれとは此歌はやうか
はれるをや○それは三段にきれてとゝのひたり一
段にも二段にも三段にも五段にも自在にとゝのふ
るわさなるをあかぬ事にいはるゝ物かな

水無瀬戀十五首歌合に　　太上天皇御製

里は荒ぬ尾上の宮のおのつから待こし宵も昔也けり

萬葉廿高圓の野のうへの宮はあれにけり云々又高圓のをのへの宮はあれぬとも云々これらをとらせ給ひての此御歌は本歌とらせ給ふにはあらす　此御歌にては尾上の宮は用なけれと○二句は序也尾上の宮のおのつからと詞をかさねさせ給へりすへて序は用なき物なるを何とやらん不審たちたり里はあれぬとあるちなみに此名を出しておのつからと詞をかさねさせ給へるもの也さて此おのつからはたまさかにまれにと云心也○さらはおのづからとゝいふへしともし大切歟おのつからまちこしとは縁ありし比はよし來ねまてもよひのまは自然とたれし也一首の意は我さとはあれ果たる事よなアもしこよひなとは來る事かとよひのまは自然と待れし事もありしか今はおもひ絶てさやうの事もむかしになりしと也

有家朝臣

物思はて唯大かたの露にたにぬるれは濡る秋の袂を

下句秋の袂はぬるれは濡る物をといふ意にてまして我袖は物おもへは也○大かたの露とは世上一とほりの露といふ事をは物をといふに同し嘆辭なり一首の意我ことく戀に物おもひをせぬたゝ一とほりの露ても袂がぬるゝといへはおひたゝしく濡る物をまして戀するわか袂はいかゝあらんと也

雅經

草枕結ひ定めん方しらすならはぬのへの夢の通ひぢ

上句は本歌よひ〳〵に枕さためむ方もなしいかにねし夜か夢にみえけむとある四句はいつ方にいかに枕をしてねたりしか夜かといへる意なりこゝの心は今まてねならはす方角もしらぬ野へなれは枕をさたむへき方もしられすと也結句は故郷の夢をみまほしくおもひての歌なれは也○一首のさまめてたき羇旅歌にて戀にはうとき心地するは正明かいたり淺きにや　通路野へによしあり歌のおもてはたゝ旅宿のこゝろなれとも本歌によりて戀にはなる也○古歌は詞はかりをとる物なれはそれによて戀の歌とならん事心えす　三句いうならす

和歌所歌合に深山戀　　家隆朝臣

さても猶とはれぬ秋のゆふは山雲ふく風も嶺にみゆ

らん
二句秋といへるは雲吹風によしあり又人のあきの意也四句は雲を風のふけはなひく意也嶺にといへるみゆらんによし有一首の意はゆふは山の秋の夕暮に風の雲を吹てなひくけしきもみゆらん物をつれなき人はさても猶なひかすしてとひも來ぬと也○とはれぬは男の忘れたるにて男のつらき也なひかぬは女のうけひかぬにて女のつらき也此說男女混して通しかたし一首の意は夕くれのは山の嶺にて風の雲をふくけしきはおもふ人のもとにもみゆるてあらうにそれてもやはり我はとはれぬといふ事也かくておもへは雲といふもしに必とはるへき事有ことしるし是も楚王の雲雨のことかさらは朝の雲なるへきに夕は山は事たかへれと猶雲をみてしのへといふ事のみをおもひてさしもこまかに朝暮の論はなかりしにやは山は和名抄に麓の字をよめれと筑波山は山しけ山しけゝれとなとあるは麓の字よくあたれりともみえすたゝみ山なといふ事と心えてあるへきにや

秀　能

思ひいる深き心のたより迄みしはそれ共なき山路哉

いとゝき難き歌也○されはさしもあらす三句は此ころの風にてほのかなる詞つかひなれとこれはよくきこえたり便とはおもひ入心をたとふるたよりなり此句の上にたとへにするといふもしをくはへて心うへしそれともなきはそれにあらぬにて似よりもせぬ意一首の意はわかおもひ入心をたとらる便までにみしも似つかす山路は淺き事となり　されと試にいはゝ心のたよりとは我おもひ入たる深き心のほとはたとふるべき物もなきを此み山の深きこと　我心の程をたとふへきたよりとまてかねてはみしといふ意にてさて分入てみれは此山路もさらに我心の深きには及はすさしもなき事よといふ意也たより迄とは便と迄の意にてまてはそれほとにまて深き山路とみしと云意也

題しらす　長　明

詠てもあはれとおもへ大かたの空たにかなし秋の夕くれ

○三四の句戀をせぬ人たにかなしといふ事一首の意は戀をせぬ人ても悲しき秋の夕くれなるに君を

こふる我はいかはかりならんと空をなかめても哀とおもへと也三四五一二とつゝけてみるへしもし此説のことくならは四の句空たにかなしきとあるへきか如し別にゆゑありて正明か僻案にや

千五百番歌合に　通具卿

言の葉の移りし秋も過ぬれは我身しくれとふる涙哉

今はとて我身しくれとふりぬれはことのはさへにうつろひにけりといふ歌をとれり然るにたゝ涙をいへるのみにて其外は本歌にさのみかはる事もなきはいかにぞや○一首を誤解しての論説なれは皆あたらす　そのうへ秋も過ぬれはしくれとふるといふ事時節の次第はさる事なれともたとへたる戀の意の方は過ぬれはといへる何のよしぞや○秋は實事也たとへにあらす　上句言葉もうつろふ人の秋ふけてなとこそあらまほしけれ○かくあれは持法に小器量なる歌になる此集には大器量なる歌をえらひてとられたる物をや一首の義言葉のうつりし秋とは秋あはんと契し事そのほとも過ぬれは我身はしくれの如く涙かふるとなり

定家朝臣

消佗ぬ移ろふ人の秋の色に身をこからしの杜の下露

本歌六帖に人しれぬおもひするかの國にこそみをこからしの杜はありけれ初句は露の縁語にて思ひきえてわひしき意也○初句消るは死る事一首の意は人の心かあきにうつろふ故身をこかしてしにもやらて物おもふとなり

攝政家歌合に　寂蓮

こぬ人を秋のけしきや更ぬらん恨みに弱る松虫の聲

初句のをもし六百番歌合にのとありのなれはこともなし此集に改めて入られたるにやをにては四の句へかゝれり○をにもてもきこゆれと猶のとある歌合によるべし一首の意こぬ人が我を厭たけしきか段々ふかくなるとみゆるゆゑうらみてまちよわると也まつ虫に待意をもたせたり　此歌はやといひらむといへるたゝ松虫のうへをよめるになりておのか戀の意をよそへたるにはなり難しいかゝ松虫の聲もともゝしを加ふれは戀の歌になれとももゝしを置へき所なけれはせんかたなし○やといひらんといへるはをとこの上の事なれはをとこのわれをあきたる意のすゝみやしつらんといふ事なれ

はいかてか戀の意になり難からん下句はまちよわりたる義にて松虫は我身のたとへ聲といふもしになく意はあるべし一首の意は來ぬ人かいよ〳〵われをあいたのかしらぬとおもふ故うらみて此ころは待よわりて泣てはかりをると也もゝしをまたすして戀の歌なる物をよ

戀の歌とて　慈圓大僧正

我こひは庭の村萩うら枯て人をも身をも秋の夕くれ

此歌はいかに思ひめくらしても心得かたし其故は下句秋といふをあく心にとらざれば二のをもといふ詞落着なし然るに身をあくといふはさる事なれども人をもあくといふ事あるべくもあらされば也○是は一わたりさる事のやうに聞ゆれと考るにさにはあらじそは秋といふもじを人をも身をもあくと秀句に見られたるゆゑの事なりこゝは秋は物のわびしき時なれはわびしき事に用ひたる秋の字にて俗にこまつたといふ事也　一首の意は秋の夕くれにうら枯たる庭の萩をながめておもへらく我戀はあのむら萩のごとくかれぬる中なれば人をも身をもうらみしほれたりとなり○一首の意は我戀する中は庭前のむら萩のことくかれ〳〵になりて其人のこゝろのかれたるをもまた我身のうき事をもわひしくこまり入たる秋の夕ぐれかなとうちなげきたる心はへなり　三の句契のかれたる意とうらむる意とをかねたるべし○三の句にうらむる意はなしたゞ我おもふ人のこゝろのかはりたる事を萩のうら枯しにたとへたる也其うらむる意は人をも身をも秋の夕暮といへる下の句の餘音にこもりてきこゆる歌道の妙なり　萬葉十一我せこにわが戀をれは我君の草さへおもひうら枯にけり○是はたゝ草のうら枯たりといふ詞の出所にて此歌を本歌にもとづきてよみたるにもあらねばさせる用なし

被忘戀　太上天皇御製

袖の露もあらぬ色にぞ消返る移れば變る歎せしまに

四の句は人の心のかはれるをの給へり○これはさる事なり　二三の句はあらぬ色にかはりてぞきへかへる也○あらぬ色とは我袖のうへに血のなみたのかゝる事　下なるかはるをこゝへもひゝかせて○こゝにかはるといふへきを下にうつれはかはるといはんとて詞をかへたる也　聞へしさて消るは

露の縁にて思ひきゆる事かへるはきゆる事をつよくいへる詞なり〇一首の意は我袖のなみたの色もくれなゐになりて消るそれは年月かうつるほとに人のこゝろかかはるとてなけきするほとにとなり

定家朝臣

むせふともしらしなこゝろかはらやに我のみけたぬ下のけふりは

かはしやは瓦をやく屋也人の心のかはれるにいひかけたり〇瓦屋はかはりし故にといひかけたり我のみとは人は心かはれる故にいへり〇一首の意は人のこゝろかかはりし故われひとりきゆる時なくおもひの煙にむせふともしるまいなアとなり後拾遺に我心かはらん物か瓦屋の下たく烟したむせひつゝ

家隆朝臣

しられしな同し袖には通ふ共たか夕暮とたのむ秋風

おなし袖とはむかしも今もひとつの我袖にて人の契のかはれるにむかへて我おもふ心のむかしにかはらす同しき意をこめたり〇此説詞に得かたしおなし袖とは我袖にも人の袖にもといふ事同しく袖にはかよふともといふ義也　かよふとはかよふと云事をもの意也下句は思ふ人の我には疎く成てよその人を頼みてまつ夕暮の秋風といふ意にて秋といふに我かたのちきりのかはり事を持せたり〇厭(アキ)をもたせたるにはあらすたか夕暮と憑む秋風なるそわか夕暮とたのむ秋かせなる物をとうらにかへる意也　一首の意は此秋風は昔相みし時の同し袖に今もかよひて我は昔と同しく戀しくおもへは身にしむ物をおもふ人はかくともしらしな心かはりてよその人を頼みてまつ夕暮なれはといふ意也〇此心一首の詞つゝきのうへにえかたくやあらん一首の意は此秋風はたか夕くれとたのむ秋風なるそ我人まつとてたのむ夕くれの秋風なる物を同し樣に袖にはかよふともわかこの待心のやるせなさを人しられぬてあらうなアといふ事なり四五二三一とつゝきたり秋風に人の心のかはりたる心はなし秋とたにいへは人の心のかはりたりと說なれと秋も秋によりたる事たのむ秋風とつゝきたるにいかてか厭の意あらん　此歌たりといふ事いかゝ〇同し袖にはといひたか夕くれとといへることはの奇

偉なるなれといとよくきこえたり此ころの歌に多くあり

俊成卿女

露はらふね覺は秋の昔にて見はてぬ夢に殘る面かけ

露はらふは涙にて露といへるは秋の縁なり秋の昔とは秋は人にあかれたるとの事にて其今よりいへはいまた人のかはらて逢見し事はむかしなるよし也○しからすむかしのまゝにてといふ義夢に人にあふとみて覺たれは人にあかれし昔のまゝにてといふ事本說いとむつかし　然らはたゝ昔とのみいひてもよかるへきに秋のといへるは此歌にては秋のといふ事なくては逢見し事は昔にて今はあかれたる意あらはれかたけれは也一首の意は人にあかれ忘られたる此夢に又あふとみたるか見はてもせす早くさめたる時によめる意にてその夢かさめたれはもとのあかれたる時にて夢に見たる逢事はむかしの事にてたゝ其夢のおも影のみ殘りて涙をなかすとなり○此說のことし猶いはゝ床も枕も涙の露かおひたゝしく置ねさめをしておもふてみれは我身はやはり人にあかれし昔のまゝの我身にて末もとほらぬかりそめの夢にあふとみておもかけはかりか殘りて傍さらてかなしとなり　後撰はらふはかりの露や何なり○涙川なかすね覺もある物をはらふ計の露や何なり此歌引に及はす　古今みてぬ夢の覺るなりけり○命にも增りてをしく有物はみはてぬ夢の覺るなりけり

攝政家百首歌合に尋戀　　慈圓大僧正

心こそ行へもしらねみわの山杉の木末の夕暮のそら

本歌わか庵はみわの山本云々上二句は人の心の外へうつりゆきていかになれるをしられぬを云心こそといへるてにをはゝ宿をは尋來つれとも心はいかになれりともゆくへしらぬよし也○女の心の底のしられぬ也今宵引入てあふへきか障をいひてかへすへきかそこのしられぬをいふなり　三の句より下は夕くれに其宿へ尋ね來たる意也○一首の意こよひ逢へきかあふましきか心底はしらねと敎置たる宿へ此夕くれ通來たりし事と也

百首歌の中に　　式子內親王

さりともと待し月日そ移り行心の花の色にまかせて

本歌色みえてうつろふ物は○世中の人の心の花に

そ有ける　云々二句そもしもといふへき所なれと
ももうつりゆくといひてはしらへいといやしくな
る故そとよみ給へる也○もといひても調いやしと
もきこえすこゝはそといふか三句にてきるゝにち
からある故なり　下句は人の心の花の色のうつろ
ふまゝにといふ意也○人のけしきのよきにまかせ
てさりともあふ時あらんとまちし月日もいたつら
にうつり行事よと也上下打かへしてみるへし
いきてよもあすまて人はつらからし此夕くれをとは
ゝとへかし
上句は人のつらきに堪かたけれはあすまてもえい
きたるましけれは此世にありて人をつらしとおも
ふもけふかきりなるへしといふ意なり○かくの如
し　然るをあすまて人はつらからしとよみ給へる
詞のはたらきいはん方なし○けに同し心にても文
章ある詞はめてたくてめさむる心地する物也此歌
もいはん方なくめてたけれとけさやかに耳にたち
たるは第二義なり花も紅葉もなかりけりといひ空
しき枝に春風そ吹なとやうにいへるそ第一義には
ありける　下句はとはんとならは此夕くれにとへ
かしとなり○一首の意は人のつれなさにしわひて
おもひ死にしてあすまての命はあるましきにもし
とふ心か有ならはこよひとふて給はれと也

曉戀　　慈圓大僧正

曉の涙や空にたくふらん袖におちくる鐘の音かな

曉のかねのおちくるにつきておつる涙なるをおち
あひたる事のやうにしてよみ玉へり一首の意は此
あけの別をかなしむ涙にかねの音か空からそふか
して鐘の音か袖に落來る樣なはと也

千五百番歌合に　　權中納言公經

つく〳〵と思ひあかしの浦千鳥波の枕に泣々そきく

明石卷ひとりねは君もしりぬやつれ〳〵とおもひ
あかしのうらさひしさを○二の句の詞の出所なり
波の枕とは涙のかゝるよしなるへけれと○なみ
たにぬれたるまくら也此歌あかしの浦に旅ねして
都の人をこふるこゝろなりよみくたしたるまゝ也
かくれたるところなし　三句以下なにとかや旅泊
めきて戀の歌ともきこえす○旅泊の戀のこゝろな
れは旅泊めきたるは子細なし三の句以下戀の歌と
聞えすとも一首戀の歌ときこえたれはよろし上下

かけ合すといふは爲家卿の風也

　　　　　　　　　　　定家朝臣

尋ねみるつらき心のおくの海よ汐干の潟のいふかひもなし

上句はしのふ山忍ひてかよふ道もかな云々の意○此歌はすへて似よりたる所なきを何事をいはるゝにかあらん　おくの海は萬葉三に飫海とあるは四巻にも同人の歌に飫宇能海とあると同しくて出雲國意宇郡の海なるを宇の脱たる也然るを飫宇はよくの音なる故に昔誤りておくとよめる本のありしによりてかくはよみ給へるなるべし下句は須磨巻にいせしまや汐干のかたにあさりてもいふかひなきは我身也けり○四句は人の心の淺き意五句に貝をよせたり一首の意人の心のおくを尋ねみれは淺き事ゆゑいふかひなく口をしく思ふと也

　水無瀬戀十五首歌合に　　　　雅經

みし人の面影とめよ清見潟袖に關もる波のかよひ路

とめよは關の縁の詞四句は袖の涙を波といひて清見潟の縁に關もるといへるにて畢竟はたゝ袖の涙也○みなよろし　通路といへるは關といひとめよといへる縁なれとも歌の意に用なくていかゝ○通路とはなみたのなかるゝ道なり下ににといふ字をそへて心うへしさてはいかゝなる事もなし一首の意はわか袖にかゝる涙のなかれ行所にあひみし人の俤をとゝめ置てみせよと也　拾遺にむねはふし袖は淸見か關なれや烟も波もたゝぬ日そなき

　　　　　　　　　　　俊成卿女

ふりにけり時雨は袖に秋かけていひしはかりをまつとせしまに

本歌秋かけていひしなからもあらなくに○木葉ふりしくえにこそ有けれ　云々初二句は袖にしくれはふりにけりの意也○秋かけてとは秋の日比にはあはんといひし也其契を待てあふ事もやと思ふうちに袖に泪をかくると也　秋かけていひしは本歌の如く秋と契りし事也○本歌の如くと云心はなし一首の意は秋と契しか空しく秋も過て時雨はふりにけりにて其しくれは涙をいへり○一首の意たかひたる所なし

かよひ來し宿の道芝かれ〳〵に跡なき霜のむすほゝれつゝ

三句は人のかれ〳〵なるを兼て跡なきは其人の通

ふ跡もなき也　結句は我心のむすほゝるゝ事をかねたり一首は我おもふ人の此比は宿の道芝と共にかれ〳〵になりてふみ分たる跡もなき霜のむすほゝるゝやうに我こゝろもむすほゝるゝと也

戀歌五

水無瀬戀十五首歌合に　　定家朝臣

白妙の袖の別れに露落て身にしむ色の秋風そふく

初二句は萬葉の詞なり三句は涙なるを露といへるは秋風の縁なり四句は紅の涙をいふ身にしむとは秋風の身にしむ方を兼たり六帖に吹くれは身にもしみける秋風を色なき物とおもひける哉下句のこゝろは紅の涙の落るを吹風なる故に風の色の身にしむ色にみゆるよし也○袖のわかれは曉のわかれ也秋風そ吹は露落てのよせなり一首の意はあかつきの別に白たへの袖に涙か落る其涙か紅涙なるに秋風か吹て身にしむ色そと也　落花の歌に嵐も白しなとよめるはさることとなるを戀の歌にかく風のけしきをたくみによまれたるはあはれなる情はなく聞ゆ○しらへいとめてたくてしかもあはれふかき歌なるをいかゝおもはれけん

　　　　　　　　　　　　　　　　　家隆朝臣

思ひ入身は深草の秋の露たのめし末やこからしの風

深草といへるは伊勢物語の深草の女の意か又思ひ入事の深きよしをもかねたるへし○伊勢物語はこゝによしなしたゝ思ひ入身は秋の露深しといふ事を詞を文なしたる歌也　三句は我身は草葉の露の如くはかなく消ぬへしといへる也たのめし末とはかねてたのめ置し如くにもあらす心のかはりたる所をいふ○たゝ契のはてといふ事かはる意は木枯の風にあり　さまやとうたかひたるはたのめし末か木枯の風かといへる也草の露を消しむる物は風なれは也○一首の意はおもひ入事の深き我身は深草の秋の露のやうな物ありし契のかはり行はこからしの風のやうにて命もえ堪ましきと也

　　　　　　　　　　　　　　　　　慈圓大僧正

野へての露は色もなくてやこほれつる袖よりすくる荻の上かせ

初句例のもしあまり聞くるし○もしあまり例なる事もなくきゝくるしきこともなしこれらはことに耳にもたゝさるをあいうおといふもしたになけれ

はかくのみいはるれとことわりなき事也　袖は例の紅の涙のかゝる袖なるをさはいはて初二句にて夫ときかせたるもの也一首のこゝろは我この袖の紅の涙を吹こほし過て行荻の上風は野へまてふき行つらんを其野への露は我袖の涙の如くなる色はなくたゝよの常の色の露にてこほれたるかいかゝならんと也より過るといふ詞にて野へ吹行意聞えたり○一首の意荻の上風の我袖過るころは戀する身故紅の露かこほれたが野へ過るには戀せぬらの故紅の色ではなくたゝよの常の露かこほれたかと也　此歌事をたくみてあるのみにて戀の哀なる情はなし○戀の情なとかなからん

題しらす　左近中將公衡

戀侘て野への露とは消ぬ共誰か草葉を哀れとはみむ

○上句はおもひ死にしぬる意下句はその墓所の草草をみてあはれともおもはしと也誰かといひてもおもふ人の事なり

通具卿

とへかしな尾花かもとの思ひ草しをるゝ野への露はいかにと

○本歌道のへのを花かもとのおもひ草いまさら何の物かおもはむ一首の意は人のつれなさにおもひしをるゝわか袂の露はいかはかりしけき物そとおもふ人のとへかしと也

寂蓮

泪川身も浮ぬへきね覺哉はかなき夢の餘波はかりに

下句に川の縁あらまほし○けにこれは川といふもしなくてそあらまし

百首歌奉りし時　家隆朝臣

あふとみてことそともなくあけにけりはかなの夢のわすれかたみや

忘れかたみとは即夢をいへる也○夢を形見にするなり　夢はむかしあひし時のかたみなれは也○此注は聞えかたし猶たしかなるかたみもあるへきにたゝゆめ計をかたみにするかはかなき也一首の意はまれにあふとみて何の間もなく夜の明し事わすれかたみといふ物もあたなる夢故さめて後か悲しいと也

千五百番歌合に　俊成卿

哀なり轉寐にのみ見し夢の長き思ひに結ほゝれなん

初句いうならす○結句にはもしをそへてみる歌也さる時は初句もいうなるへし　結句むすほゝれなん事はあはれなりと上へかへる意なるへけれと何とかや拍子のたかひたる心地す○結句に至要のはもしを省きたる歌故しかおもはるゝ也めつらしき事にはあれと千載百首の中の一つの趣なり　二三句ははかなく逢見し意をいへり○二三の句はうたゝねの夢にはかりみし故にといふ意のもしたゝよはしきか如くなれと其故を以てといふ事をふくめたり此集に此例多し隨筆に云　のみはたゞうたゝねにみしはかりのといふ意也○先生は此歌の二三の句をうつゝに逢し事なれとも夢といへるははかなきたとへ也と心えられたりそは誤解也詞のごとく轉寝の夢にはかりあふとみし也　されと此のみてふ言見しの上にある故にいつも〳〵うたゝねにのみ見しといへるやうに聞えていかゝ○いつも轉寐の夢にみしといふ事なれは何のいかゝなる事もなし　其心にては下句にかけ合あしき歌なり○誤解しての論なれはあたらす一首の意はこの比はうたゝねの夢はかりにあふくみてうつゝにてはあはぬ事なれはいよ〳〵いつまてもおもひかむすほゝれうとおもへばあはれなる事となり

題しらす　　定家朝臣

かきやりし其黒髪の筋ことに打ふす程は面影そたつ

初二句は共に寢し夜かきやりし女の髮也すちことにはくはしくこまかにといふ意其女の面影の委しくこまかにみゆるよし也○することには俗に一すち〳〵にといふ一首の意はさきに共寢せし夜長き髮をかきやりて打ふしたりし也黒かみが一すち一すちに面かけにたつと也

和歌所歌合に逢不遇戀　　俊成卿女

夢かとよみし面影も契しも忘れすなから現ならねは

結句は今は面影もみることなく○今は面影はかりみえてわすれぬ也みることなくてとはいかゝ　ちきりしことも跡なくなりぬるをいふ○さきにあひし時契りしことの耳に殘りて今もわすられぬ也さて此歌にては面影は常にいふとは聊かはりて其人の顏姿を云也○俤常と何か殊ならん一首の意先に相見し時のおもかけも身にそひてわすれす其時契りし事も耳に殘りて忘れすなから人の心のかは

りてうつゝともおもはれねはもし是は夢かもしらぬと也

戀の歌とて　式子內親王

はかなくそしらぬ命を歎こし我かね言の現ならねは

上句は人のかね言の末のしられぬことをはおもはすしてたゝ我命の程のしりかたきことをのみなけきこしははかなかりけりと也○はかなくは俗にばかなといふおもひはかりのなき事なり今一種あへなき意にもいひて二義也一首の意は人の契のかやうにかはる世の中にそのかね言をたのみて命のほとのしられぬをなけきしはおもひはかりなかりし事と也　結句はかくの如くかね言の末とほらさりける世なるにといふ意也四の句我とある事いかゝたゝいたつらなるのみならすわか人にいひしかね言のことく聞ゆるをや○我かね言は我中のかね言也さるはわれも人も契りし事なれと我身にとりては人のかね言をおもひをゝ事なれはこゝは人の契なりさて我といふもしにかはるましきためしにたのみおもひし勢ありわか中のかね言にてさへかくかはりける事よといふ語勢也すへて語勢と文章とをおもはすしては古歌の正義もえかたく自よむもあさまなるのみそいてくるさてこの難は文章しらぬ童子輩の難すへき事なるを世にめてたき我先生のいはれん事ともおもはれす不審萬々なる事なりすへて文章といふものはたゝ打いひたる詞のうへの義にはあらておもひて後に其義をうるやうなるかある事は和漢古今の常なるをそれしりなから此說あるはいかなる事そたとへは孟子に以燕伐燕何以勸之とある上の燕は齊の事也かく文章のうへにて一句切いてゝは自他のたかふやうなるも一段の勢にては一つの燕は齊の事なりとしるきかことくこゝもわかかね言は人のかねことなる事あきらかにてことはつかひ群に拔いてめてたしともかきりなきをや

辨

過にけるよはの契もわすられていとふうき身のはてそはかなき

過にけるは契の絶てむかしになれるよし也○よゐし　よくは世々にても夜々にてもよし○世々也今生後生をかけて契りし事三四の句は今生にてわす

れし事にていはゆるかけ合也　わすられては今は契のたえぬる事をもおもはすして也○此注はきこえかたし此句は四の句へつゝきて人にわすられてわか身をいとふ也わか身をいとふとは今は命もたえよかしとおもふなり　結句はてとは今をいふ也契のかはりしことをうらみ〳〵てはてには其事をも思はすたゝひたすらうき身をいとふやうになりたる也然らは四の句うき身をいとふとあるへきにいとふうき身のといへるは我身をいとふやうになりたるうき身のはてといふ心にかねたる也○うき身をいとふと云へき詞つゝきにあらすいかゝ過にしほとの今生後生をかけたる契も今人に忘られて此世から命しなはやといとふやうになりたるうき身の果のはかなき事と也

崇徳院に百首歌奉りし時　　俊成卿

思ひ佗見し面影はさて置て戀せさりけん折そ戀しき

初句わひといへること一首の趣にわたりて殊に力あり○此注よろし二三の句の注なしむつかしき所なれは説るへき也みし面影とは忘れし人の俤也みし人の俤の戀しさはしはらくさし置て也戀しさはといふもしは結句よりひゝき來る也さておきてといふ詞けさやかに耳にたちて玉葉風雅のなかれをなしゝ濫觴也　下句は云々其人をこひさりし時といふ意也○一首の意は思ひ佗てはみし人の姿かたちの戀しき事はしはらくさし置て一向に人をこひさりし時かこひしい其時分は物おもひかなかりしにとなり　けむと疑ひたるいかゝこれは人のうへをいへるにもあらす我身の昔の事なれはけるとこそいふへけれ○此難はいはれたりけむといふ方しらへ勝れゝとかやうの事はしらへに拘りて事を極かたし　又結句のをりもいかゝすへてをりとはたしかにさす時のある時をいふなれは戀せしをりとはいふへくせさりしをりとはいふへからすこゝはほとゝこそいふへけれ

# 尾張迺家苞五之上

## 新古今集

雜部上

入道前關白百首歌に立春　俊成卿

年くれし涙のつらゝ解にけり苔の袖にも春や立らむ

年暮し涙は年のくるゝををしみし涙にておのつから老後の意もあり○老後の意はなしつらゝとは涙の袖にかゝりたるか袖一面に氷りたるを云一首の意は年のくるゝををしみて落したる涙か苔の袖にとまりてつらゝとなりたるが解たるほとにこれは春かたつ事かしらぬと也

土御門内大臣家にて山家殘雪　有家朝臣

山陰やさらては庭に跡もなし春そ來にける雪の村消

庭の雪の村消たるを春の來たる跡とみてそれより外にはとひくる人の跡もなきよし也春そといへるにて人は來ぬ意あり此歌三四句もなしといひてそ來にけるといへるてにをはのかけ合わろし○二段にきれてとゝのひたりかくの如き歌は上句にてきれたるか豪氣あり此集の比の歌に此姿多し　二三句をさらては跡もなき庭になとやうにあらはてにをはのかけ合よろしからんを○かくしても聞ゆれと詞つかひ委曲にてつよからすさらてはとは雪の村消ならてはといふ事一首の意かやうな山陰はさうてなうては庭の雪に跡はないさては春か來たとみゆるあの村消の雪が人の來た跡のやうなはと也

近衞つかさにて年久しくなりて後うへのをのことも大内の花見にまかりけるによめる

定家朝臣

春をへてみゆきになるゝ花の陰ふり行身をも哀とやおもふ

初二句は春ことの行幸に供奉してなれたるよし也○左近衞の中少將は行幸の時鳳輦に乘御の間階下のさくらの木の下にたつ事也　三句陰なるゝといふによしあり○なるゝとは陰の事也よしありなとよそ／＼しけなるはいかに　さてみゆきといふに花の雪をかねてその緣にふり行といひて我身の昇進もえせて年のふり行にいひかけたり○此卿は文治五年任少將建仁二年轉中將承元四年辭中將　身をものもゝしはわか花の雪とふり行を哀と思ふに

つけて花も我を哀とやおもふといふ事也
最勝寺の櫻は鞠のかゝりにて久しく成にしを其木年ふりて風にたふれたるよし聞侍しかはそのこともにおほせてこと木を跡にうつし植させし時まつまかりてみ侍ければ數多の年々暮にし春まて立馴にける事なとおもひ出てよみ侍ける

雅經

馴々てみしは餘波の春そともなとしら河の花の下蔭

此餘波は今俗言に云なこり也此詞いにしへはかやうに用ひたるはなかりしを此集の比より折々みえたり○此たくひ猶何くれと數あり世々因循して用ひ來る事也　白川は最勝寺のある所の名なるをなとしらさりしと云事にいひかけたる也されとなとゝいふ事こゝには正しくはあたらす正しくいはゝなこりの春そともしらさりしとあるへき也其うへしらさりしといふ事をしら川といひては詞たらすしら川にてはしらんといふ意になる也もし其心かともおもへとなとしらんといひては此歌はよろしからすかにかくにこれはつたなきいひかけ也○なとゝいへとしらさりけんときこゆすへて一首の語勢による事也一首の意は花の下陰になれ〳〵て此春みた花か別の春て有たとその時何故しらなんた事そと也

建久六年東大寺供養に行幸の時興福寺の八重さくら盛なりけるをみて枝にむすひつけて侍ける

讀人しらす

故郷と思ひな果そ花櫻かゝるみゆきに逢世ありけり

○舊き都の跡を故郷といふ也一首の意は奈良を今は故郷に成たとおもひ捨てしまうな花さくらよかやうにみゆきにあふ時もある世なるにと也

こもりゐける比後徳大寺左大臣白川の花見にさそひければまかりて讀侍ける

源師光

いさやまた月日のゆくもしらぬ身は花の春ともけふこそはみれ

初句のまたは昨日まては花の春ともしらさりし意也されと月日の行もまたしらすといへるやうに聞えていかゝ○二三の句は年月のたつもしらぬといふ事物にあはすして籠居せし程なれは物思ひにて月日の行もしらさりし也下句は花さかりの春そといふ事はけに此しら川のさくらをみてしりしとな

り　又としてはいよ〳〵いかゝ○またにてはあるへし

世をのかれて後百首歌よみ侍けるに花のうた

俊成卿

今は我吉野の山の花をこそ宿の物共みるへかりけれ

世をのかれたる身なれは吉野の山にこもり住へき事そと也○世をのかれてとは出家し給ひし事なるへし一首の意は今は我世をのかれたれは吉野の山にかくれこもりてその山の花をわか宿の物にしてみるへき身となりしと也

入道前關白家歌合に

春くれはなほ此世こそしのはるれいつかはかゝる花をみるへき

下句死なは又いつかはかゝる花をみるへきとおもへはといふ意なるへけれと○上句下句各きれて二段にとゝのひたりと思へはといふ詞をそへてみるにはあらす　たらぬ詞多くていかゝ○たらぬ詞もなくそへてみる詞もなし一首の意世はいとはしき物なれと春か來れはやはり此世かなつかしいいつ又此やうな花をみるてあらうと也

同家の百首歌に

照月も雲のよそにそ行めぐる花そ此世の光なりける

世に月花といへ共月は雲のよそなる物なれは此世界の光はたゝ花にこそ有けれといへる也○光は漢文にて光輝と云此世のはれになる物はと云義也ひかりとは月にくらへていふ故に其よせ也此歌上にもそるといひ下にそけるといへるてにをはかけ合わろし○世上の人の詠歌上にきるゝてにはあれは下にかへるてには有て一首一段に調ふる事にて二段三段に調る事なしてにをはの調ふすちを心えねは危き故也世上碌々たる歌よみはさてもいかゝせん此先生は卓出にててにをはには各別の見解ありなから二段三段にとゝのふるを強にきらひて花も紅葉もなかりけりを難波潟と直して下へつゝけいつかはかゝる花をみるへきにとおもへはといふ詞をそへて上へめくらしなとひたすらに一段にとゝのふるを好まれたるはいかなる事ならんさてかくの如く分明に二段にきれてつゝくへき詞なきはてにをはかけ合わろしといはるゝ也二段切三段切は連歌道は勿論にて俳諧専門の輩にすらかつ心えを

るもあるそかしおくらゝも今はまからん子なくらんそのこのおやもわをまつらんそらんといふもし三つありて三段にきれたり北へゆく雁そなくなるつれてこし數はたらてそかへるへらなるそもし二つありて二段にきれたり此雁の歌此うたの的例なるへきをいかゝ

春のころ大乘院より人につかはしける

慈圓大僧正

見せはやな志賀の唐崎麓なる長柄の山の春の景色を

心あらん人にみせはや云々の歌より出たり○別に一首の歌なるへし多かる中には趣の似たる事もなとかいてこさらんさるまゝにそれは何の歌によりくれは其歌に本つけりといひ立ん事よさる事しりてもやくなしと我はおもふ也　二三句志賀の辛崎を麓にみるよしなれともをもしなきゆゑに○をもしの用なる同つゝきにはあらすなるはにあるの約志賀の辛崎かふもとにあるといふ事也　さは聞えかたくて志賀の唐崎といふて山のふもとなる長柄の山ときこえていかゝ○一首の意はしかの辛崎かふもとにある長柄の山の春のけしきの面白さを心ある人にみせたいなアと也

題しらす

柴の戸に匂はん花はさもあらはあれなかめてけりなうらめしの身や

咲る花に心のとまれるをあるましきことゝおもひかへして花はいかはかりおもしろく咲にはへりともさもあらはあれ世をすてゝ柴の房にすむ身の心をとゝむへきにはあらさるにはかなくなかめてけりなといひて花に心をとゝめし我身を恨みたる也○みな誤解なり○三句はよしゝかするにもせよといふ意柴の戸に匂はん花をなかむるはよしなかむるにもせよと也こゝに浮世のことに物おもひをして空をはなかめしとおもふにといふ事をそへてみるへし三句の語勢と四句の語勢よりいてくる意はへ也四句は物をおもひて空をなかめし事哉と歎きたる意五句はさてもくちをしき我身よと歎きたるこゝろ　上句と下句との間に何とかや詞たらぬこゝちす○もし正義をえられたらん事は三四間にそへてみる詞はたやすくうかひ來るわさなるを誤解せられたる故ことはたらす　又うらめしの身やと

いへるも此歌にはいかゝなるいひさま也○例のてにをはをそへて上句へつゝけて一段にしてみんとするにこれは清くきれてつゝかさる故かくいはるゝなるへしよき歌は二段にも三段にも四段にも五段にも自在にきれていとよくとゝのふ物也此歌は上句一段四句一段五句一段三段にきれてめてたくとゝのひたり就中四句五句は嘆辭にてくり言なといふらんやうにていとおかし一首の意は柴の庵の花に心のとまるほとの事はどうてもよいかうき世の事に物をおもふさて／＼にが／＼敷事そと也うらめしは慨字の義にあたる

西行

世の中をおもへはなへてちる花の我身をさてもいつちかもせむ

三句の下へことく也といふことはをそへ四句はさてもわか身をと打かへして心うへし扨もはさりとても也詞たらすしてとゝのはぬ歌也○三句の下にそへてみる詞はありされとさやうの事歌の常也いつちかもせんとはいつちへ行ていかにかもせんといふ意とは聞えたれと○此意にはあらすたゝいかにかもせんといふ意也されといかにせんといふ事をいつちかもせんとよまん事いかにそやおほゆるなり　これも詞たらてとゝのはす○いかにといふへきをいつちといへるのみにて詞のたらぬ事はなし一首の意世の中をおもひまはしてみれはなへてちる花の如くはかなき物也されはとて我身をいかにすへき物そたゝ死をまつのみ也となり

題しらす　法印幸清

世をいとふ吉野の奥の呼子鳥深き心の程やしるらん

○ふかき心とは世をいとふ心の深きをいふ上句のおくとかけあひたり

百首歌奉し時　忠良公

をりにあへはたれもさすかに哀なり小田のかはつの夕暮の聲

二三句は常には哀なるくさはひには思はさりしに小田のかはつの春の夕くれの折にあひてさすかにあはれをもよほすとなり

千五百番歌合に　有家朝臣

春の雨の普き御代を頼む哉霜に枯にし草葉もらすな

四句にしをゆくとかける本もあり○印本行とあり

行といはんよりもにしとある勝れり　これは我身をたとへたるにて次第におとろへ行意なれはゆくもさることなれとも上句とのかけあひを思ふににしとあらされはよろしからす○霜にかれ行といひては九月十月の事にて上句の春の雨のあまねきにかけあはす　三句かなといへる近き世の歌ならは必そよといふへしすへて近き世にはたのむそよいのるそよ思ふそよ歎くそよなとよむ事いと多しこれもといやしけなる詞なれは此集のころの人はをさ／＼よまぬことにて此歌もかなとはいへる也○以上めてたきおしへ也　然れ共此歌は結句の終にとゝいふ詞をそへされはかけ合かたし○しからす此歌は上は上にてきれ下は下にてきれて二段にとゝのひたり此注は一段に引つゝけてみるこの先生の一癖なり　されと此集の比には終に置へきてにをはをはふき或は一言二言をも添て心得るやうによめる事常なり○さる事もありそれは必しかみゆるやうなるいきほひあり

五十首歌奉し時　慈圓大僧正

おのか波に同し末葉そしをれぬる藤さく田子のうらめしの身や

おのか波とは藤は藤波といふ故に藤のおのか波といふ事なれ共聞え難し○初句は藤原氏の事藤波といふ故おのか浪と有　同し末葉とは此僧正藤原氏にとりても法性寺殿の御子にて攝政關白にもなる人と同し流なるを云○すゑ葉といへるは末葉といふ義一二句のつゝきは我は藤原氏の末流なれ共と云事　しをれぬるとは我身は無才無能にて世に何の勤功もなき事を歎きたるよしなるを波の縁にしをるゝとはいへる也○此心にはあらす三句は沈淪零落したる事座主僧正なとの先途をとけ給はぬ前法印なとにておはしましゝ比の歌なるへし藤さく田子のは必榮給ふへき御俗姓なる事なるへし一首の意は藤原氏の末流も我にいたりておとろへ盡たる事かな必榮ゆへきすちにはあれと沈淪せしわか身のうらめしき事と也

いつきの昔を思出て　式子内親王

杜宇その神山のたひ枕ほのかたらひし空そ忘れぬ

○加茂の齋院におはしましゝ時の事を思し出る也その神山は加茂山也齋院は紫野にて程ちかし杜宇

の神山を出て齋院あたりまてなきわたりし事をえ忘れ給はすと也

述懐百首歌の中に五月雨　　俊成卿

五月雨はまやの軒端の雨そゝき餘なる迄ぬるゝ袖哉

○上句は序あまそゝきあまりとかゝるぬるゝ袖かな雨に緣あれは有心の序也本歌東屋のまやのあまりの雨そゝきわれ立ぬれぬ此戶ひらかせ

題しらす　　七條院大納言

思ひあれは露は袂に紛ふかと秋の初を誰にとはまし

○まよふはまかふと同義かしからは露のおひたゝしく置事也初句は物思ひのある事なるへし一首の意物おもひかあれはたもとに露かおひたゝしく置物かと秋の初の事を誰にとはんと也もし此歌戀のうたにはあらさるか

八月十五夜和歌所にてをのことも歌つかふまつり侍りしに　　民部卿範光

和歌の浦に家の風こそなけれ共浪吹色は月にみえ皃

下句は歌の道の家にあらさる我らまてをすて給はぬ君のめくみは今宵この和歌所の集にめしくはへられたにてしられたりといふ意にや○此說こゝろはさる事なから詞にえかたし或人云浪ふくに人並の義をそへたり人なみ〳〵なるわれらをもくはへられたるにてめくみあまねき事はみえたりと也といへりこれもこそといふもしに相應せす又或人は下句今宵の月に我才藝の顯れたるをいふといへりこそにはよろしけれと此心いかゝ

和歌所歌合に湖上月明　　宜秋門院丹後

夜もすから浦漕船は跡もなし月そ殘れる志賀の辛崎

こき行船は古歌にもよめる如く○此一句不用　跡もなくて○行衞もしらすなる意　その船の過し跡には○此一句もなき方よろし　夜もすからたゝ月のみ殘りて有と也○一首の意浦こく舟は行衞もしらすきえつきて志賀の辛崎には夜もすから月のみ殘りてありと也やすらかにみるへし　よもすから浦こきし船は跡なくて夜のあくれはたゝ月のみ殘れりといふやうに聞ゆれとも○此注は一二とつゝく意　其意にはあらす○勿論　夜もすがらは四句までにかゝりて夜のうちのけしき也○夜もすからは直に四句につゝく二句にはつゝかす此說も四句までにかゝりてとあれはたかへり　此歌二四句跡

もなくて月そ殘れるといふへき詞のはこひなるに跡もなしといひてそ殘れるといへるてにをはのかけ合わろき事上なる有家朝臣の山家殘雪の歌と同し○例の一段につゝけてみる一癖也二段にとゝのふるは豪壯なる事つき／＼いへるか如し　又志賀辛崎はいつれにかへてもおなしことなれは上句に湖のあへしらひあらまほし○これは古人の頤解せさるところ也

永治元年譲位ちかくなりて夜もすから月をみてよみ侍ける　俊成卿

わすれしよ忘るなとたにいひてまし雲ゐの月の心ありせは

雲井の月とは禁中にてみる月をいひて忘れしよは此禁中の月はいつまても忘れはせしと也○今宵今の御代にてみる月を御代かはりて後もわすれしと也　わするなはわかかやうに思ふことを月もわするなといへる也○今宵今の御代にてわかみし事を月もわするなと也　たにとは名殘をしさはつくしかたきをせめては一言かやうにいひなりともせん物をといふ心也抑此御譲位は御心にもあらさりし御事なれは此歌ことに哀深し○崇德院御位をさらせ給ひて近衛院にゆつらせ給ふ也さるは御父鳥羽院の御はからひなりしかは御心にあらさりし也

崇德院に百首歌奉りけるに

いかにして袖にひかりのやとるらん雲ゐの月は隔てゝしみを

○二三句は袖のなみたに月のうつる事下句は殿上ゆるされぬ事かの卿は御堂殿の玄孫いみしき公達なるを時にあひ給はす地下の諸大夫のやうにておはしゝ比の御うたなり

文治のころほひ百首歌よみ侍けるに懐舊の歌とてよめる　左近中將公衡

心には忘るゝ時もなかりけりみよの昔の雲の上の月

○三代のむかしとは高倉院の御事なり

百首歌奉し時秋の歌　二條院讃岐

昔みし雲ゐをめくる秋の月今幾とせか月にやとさむ

○昔みしくもゐとは二條院御時禁中に侍し事一首の意は昔禁中にてみたりしも同し雲ゐをめくる秋の月を老後の涙に今いくとせか袖にやとしてみんと也

百首歌奉し時　　攝政

月みはといひし計の人はこて槙の戸たゝく庭の松風

上句いひしはかりとは今來むといひしはかりに長月の云々の歌の詞にて其下句までの意をこめて有明の月を待出たるほとまても其人は來ぬよし也かやうにみされははかりのといへろ詮なし○或人の說月見はゝ月か出たらは也則本歌の有明の月也一首の意有明の月か出たならはとはうといひたるはかゝりに待々た其人は來すして庭の松風か槙の戸たゝくと也のもしはおたやか也初句素性の歌とはなとやらんやうかはりたりとふと思はる月見は必おもひ出んと契し程の心ふかゝりし人は來すして庭の松風か槙の戸たゝくと也はかりのはほとの也此說も二三のつゝきなほ穩ならす

五十首歌奉しに山家月　　慈圓大僧正

山里に月はみるやと人は來す空行風そ木葉をもとふ

二句とはとてなり○此意なり　空行とは我をとふにはあらさる意にていへり吹といはひゆくといへるも其心なり○みなよろし　木葉をもとふは木葉をとひもするといふ意なり我をもとひ木葉をもとふにはあらす○一首の意はかくの如き山さとにては物のあはれをしる人が月はみるやとてとひ來へきにそれはとひもこてそのかはりにうはの空なる風か心なき木葉をとふと也　此歌下句に月のあへしらひあらまほし○例のかけ合の事なれとかくの如きも立ましるか此集より上の風なり一々かけあふは爲家卿の愚案也　此まゝにては月は何にかへても同しことなれは也○しからはこれを何にかかへん梅萩菊雪なとにかへてみるにすへてゐつかす物には相應といふか有てみたりにはかへ難し月はあはれをそふる物なれはかならす月なり

攝政大將に侍し時月の歌五十首よませ侍けるに

有明の月の行へを眺めてそ野寺の鐘は聞へかりける

月のゆくへは西の方なる故に○よろし　世の無常を觀し○此心はなし　極樂を思ひて曉の鐘をは聞へしと也○一首の意は有明の月をなかめて必その方に生れむとおもひて野寺の曉の鐘はきくへき事そとなり　四一二三五と次第してみへし○句の序よろし

同家の歌合に山月　　藤原業清

山端を出ても松の木間よりこゝろつくしの有明の月
○山端を出やらさりしほとの心つくしなりしが出はなれて後も松のこのまよりもり來てやはり心つくしはありと也　木間よりもりくる月の○かけみれは心つくしの秋は來にけり　云々の本歌とことなる意もなけれは詮なき歌なり○本歌には山端を出てもといふ事なしいかにいはるゝならん四五句も本歌にはなきおもむき也　出ても心つくしのあるといひかけたるか○さる事也

和歌所歌合に深山曉月　長明
夜もすから獨み山の槇の葉に曇るもすめる有明の月
よもすからは槇の葉にくもるといふへかゝれり深山の月は夜もすから槇の木末にさはりてくもりたるか曉にいたりて其槇の梢をはなれて月のひきくなれる故に晴てすめると也○此分か人からをおもふに下句は月輪觀の事にはあらしかしからは一首の意夜もすからみ山の月は槇の葉にくもれとも我觀する眞如實相の心月輪はすめりと也

熊野にまうて侍し時奉し歌の中に　秀能
おく山の木葉のおつる秋風にたえ〳〵みねの月そのこれる
四句木葉のちるまゝにたえ〳〵みゆる也○たえ〳〵に月のみゆる也　殘れるとは殘月をいふにあらす木葉の落るにむかへて殘るとはいへる也○一わたりはさる事なれと猶殘月の心には有へし　二句よわし○實景おほえてをかしき歌也

月すめはよもの浮雲空に消てみ山隱れを行あらし哉
空とみ山かくれとを相むかへて見へし浮雲のありしほとはあらしも其雲を吹て空を行とみえしか雲の殘らす消て後は空をふくとはみえすたゝ山の梢なとを吹音の聞ゆるをみ山かくれを行といへるいとめつらか也又月のすむは嵐の雲を吹はらへる故なるにかへりて月のすめる故に雲もきえ嵐もみ山かくれを行やうにいひなせるもおもしろし○みなしかり

秋の暮に病にしつみて世をのかれ侍ける又の年の九月十日あまり月のくまなく侍けれは
俊成卿
思ひきや別し秋に廻り合て又も此世の月をみむとは
わかれし秋とは去年の此比既に世をのかれて此世

をわかれたる意也○別し秋か出家したる意ならはめくりあひては還俗したる意になるへしさやうの事歌によむへきにあらす出家遁世の事は詞書にはみえて歌の上にはなし詞書は實事にてさる事ありてかけるなれは一々歌の詞に引あはすともくるしからす　それに其時死ぬへかりし意をもこめたるへし○別し秋とは秋に別れたる事にて去年の秋の暮し也めくりあひてはもはや秋にはあはしと思しにことしの秋にめくりあひし也一首の意もはやあふまいと思ふた秋にめくりあひて同し此世の月を又もみるてあらうとは思ふた事か中々なからふへしとは思さりしと也

題しらす　　西行

月をみて心うかれし古への秋にも更にめくり合ぬる

上句は世に在し時の事を云て下句は世を捨たる後又昔にかはらぬ秋に値たる意也○心うかるゝとは他事を忘るゝ事一首の意在俗の時は月に心うかれしか出家して後は月にも心とめさりしに今宵心うかれて昔の秋に廻りあふこゝちかすると也

終夜月こそ袖にやとりけれ昔の秋をおもひいつれは

○上下打かへしてみるへし下句は在俗のむかしの事をおもひ出る也上句は袖に涙をおとしてよもすから月かけのやとるとなり

月の色に心を清く染ましや都をいてぬ我身なりせは

二句の清くは一本には深くと有○今みたる本は清くとあれとさる本も有へし　染といふには深くの方よく叶へり清くは染るによしなき詞也　染るにきよくはなとかよしなからん色にも清くはよせなるへしされと此歌なとは思ふ事眞率にいひなかしたる物にて縁の詞をたのみて一首を結構したる物にはあらす縁の詞か何か心もつかさりし事なるへし　然れとも此ほうしの歌はすへて皆心にまかせて讀つれは○これはさる事也心にまかせてよみ出るにめてたき歌のいてくるは天性の上手なる故也此らゝは此上人にもかきらす後京極殿俊成定家々隆等の卿慈鎮和尚なとみな心にまかせてよみ給ひしかみなめてたかりし事そかしこれを自得といひ縦横といふめてたきためし也此後歌を心に任せてよむ人ひとりもなくすくれたる上手一人もなし建仁建保に人材をつくしたるは氣運といふ物なんあ

やしき物はありける　きよくにても有へし○清く
そむるは道心也ふかくそむるは世上の事なり一首
の意は家を捨都を出て修行する我身にあらすは世
上の榮衰哀樂にひかれて心くもりたり月をもるへ
しかく心を淸く月におもひしむ事はあらしと也
すつとならはうき世をいとふしるしあらん我にはく
もれ秋夜の月
初句もしあまり例の聞くるし○あいうおといふも
しのなきをいはるゝ也されとこれは何事かあらむ
とてもうき世をすつるとならはすてゝ浮世を出
たる○二句うき世を出ると書たる本もあるなるへ
しそれはわろしいとふとある本にしたかふへし
しるしあるへき事なり○此句をよくもとかれす何
故そや上句は世をすつるほとならは浮世をいとひ
果たる證據あるへき也となり其證とは浮世を願も
おもひ出もせぬ事也しかるに月をみれは浮世のお
もひ出されてすへきやうのなきに我ためにはくも
れと也さ然るに秋の夜のさやかなる月をみれは猶
思ひ捨かたし○月をおもひすてかたしと云說なれ
はたかへり　かくては世を捨たるしるしなければ

○月をみるに浮世を執するにあらす世を捨たるし
るしなしとはいかゝ　我にはくもりてみえよ然ら
は月をも思捨らるへき程にと也○月をおもひ捨ん
といふことは不風流なる工夫也

ふけにける我世の影を思ふまに遙に月の傾きにけり

我身の影いかゝ○我世の影とはわかよはひといふ
事世は千代萬代なといふ世なり下句の月のかたふ
くにむかへて我よはひのかたふくをおもふ所なる
故我身を月のやうに我世の影といひなせる也めつ
らかなるよみさまなれと人の物いひには常ある事
也齊明紀の童謠におさへ田といふことを說れたる
見にては是をいかゝといはるへくもあらす　月と
いひふけにけるといふからその緣にひかれて影と
はいへるなれと猶いかゝ○我世のかけを主意によ
める歌也緣にひかれて詞を枉たるにはあらす

五十首歌めしゝ時　慈圓大僧正

秋をへて月をなかむる身となれりいそちの暗を何な
けくらん

月をなかむると暗とをたゝかはせたる也四句は浮
世のやみにまよひて五十年をへたるよし也佛經に

生死長夜といふ故也○以上たかひたるふしもなし

上句は世を遁れてまきるゝ事なく心しつかに月をみる身の上となれる物をといふ意也○さては五十有餘にて出家したる新發意の歌也此僧正の御うへにあはす初句秋をへては多年修行してといふ事月をなかむる身となれりは悟道發明したる事いそちの闇を何なけくらんは今かくさとりぬる上は五十年來いまた悟らさりしをなけく事もなしと也されと詞たらす○誤解せられたる故也　三句もいうならす○眞率にてつよし

百首歌奉しに　藤原隆信朝臣

詠てもむそちの秋は過にけり思へは悲し山端の月

初句もゝしはかろし○さる事畢竟は嘆辭なり　下句は月の山端近くなりたるを見て思へは我身も末近しといふ心也○ちかしといふ本によられたる説なり今見あはせし本ともみな悲しとある本は誤なりといはるれと必しもしからす山端の月に近き意はたれゝは近しとある本そ誤にはあるへき一首の意は月をなかめ／＼するほとに六十年の秋をもへたる事我身年老て山端の月のやうなる物なれはおもへは悲しき事と也

題しらす　源光行

心ある人のみ秋の月をみは何を憂身の思ひてにせむ

○三句月をみはゝ月をみる物ならはの意一首の意誰も月はみる物なる故かゝるうき身にても月をなかめて心をなくさむる事なるがもし心ある人はかり秋の月はみるはづの物ならは我らは何をおもひ出にするてあらうと也

千五百番歌合に　二條院讃岐

身のうさに月やあらぬとなかむれはむかしなからの影そもりくる

上句は身のうさまゝに月もむかしのやうにはあらぬかと思ひてみれは也もりくるといへる事よせなしもるとは檐或は軒或は雲間なともる物をいはてはいかゝ○これは軒もる事なれとかくいひてはとゝのはすやあらんいかゝあらん一首の意我身のうきに月かむかしのやうてはないかと思ふて詠れは月は物おもひもなかりし昔のやうなるかけがもり來ると也

世をそむきなんとおもひ立ける比月をみて

寂超法師

有明の月より外に誰をかは山路の友とちきり置へき

月は山端をさしている物なる故にわか山へいらん道の友といひて○よろし　山住して後の友とする意をも兼たり○此意はなし一首の意我世を捨て山にいらんとするに誰も世の捨かたくて伴なふ人はなけれと有明の月は我と同しく山路をさしているものなれはこれを友とちきり置へき事なりと也

長月の有明の比山里より式子内親王におくれりける

惟明親王

思ひやれ何をしのふとなけれ共都おほゆる有明の月

○一首の意はおもひやり給へかく山里にゐて都の事は取たてゝ何をこひしのふといふ事もなけれと有明の月をみて都の事のおもひ出らるゝと也さて都をおもふとは内親王をおほす也内親王は此時齋院におはしましたるへし齋院は都の外なれとほとちかくて山里の遠きにむかへてはそれも都也

返し

式子内親王

有明のおなし詠めは君もとへ都の外も秋の山さと

○同しなかめとは親王のおはします山さとも内親王のおはします齋院も有明の月のあはれはおなしき也　君もとへとはみつからとひ來給へといふ心か○しか也　されと今歌よみてとひ給へるにとへとあるはいかゝ○御使にては有明の月のあはれをみすへきにあらねはみつからとひ給へと也　又都の外と山里とをむかへてよみ給へるもいかゝ○都の外とは都を去る事程遠からぬ意にて山さとのほと遠きといとよく相むかひたり　これは齋院にゐ玉へるほとにて都の外とは都のほとりといふ意か○みな心つかれたる事ともなるを子細ありけにいはるゝ也　されと山里もすなはち都の外なるをや○今洛中洛外といふ洛外は三條五條のかも川の東京をさる事いと近くてたゝ都也白河高野を洛外とはいはすしかれは齋院は都の外といふへくして山里は都の外とはいはぬなるへしたとへは田家に垣の外といふは門田畔のほそ道なと相去る事遠からぬ所をいふ院の里も垣の外なれとそれをかきの外とはいはさるか如し一首の意は有明の月の哀をは君みつから來とひ給へこゝは都の近邊なれともやはり山さとの樣に哀なる詠そと也

春日社歌合に暁月　　　攝政

天の戸をおし明方の雲間より神代の月の影ぞ殘れる

春日の神天兒屋根命の御事よりかくよみ玉へる也○天の岩屋戸に日神こもりおはしましけるを諸神たちなげきて禱申給ひし時天兒屋根命祝詞申給ひしに日神天岩屋戸をほそめにひらきてみそなはしゝかは御光のみえし事ありそれを明方の月におもひよそへたる也　初二句は此集古歌天の戸をおしあけ方の月みれは云々の詞をとれり○似たるはたまく\なるへし　雲間よりといひて殘れるとゝちめたる雲間よりみえてといふ意とは聞ゆれと○此所に此詞を添てみるにはあらす　より殘れるといへる詞かけ合いかゝ○殘れるはこゝはみゆるといはんかことしよく味ひみはさたかにしか聞ゆる事也猶いはく下句は神代の月のおもかけか今も在存してみゆるといふ事也

右大將忠經

雲をのみつらき物にて明す夜の月よ梢にをち方の山

おつるをゝち方といひかけたるは假名ちかひなれは古はなき事なりされと此集のころになりては例多し月につらき物はたゝ雲のみとおもひつるに遠方の山の梢に落るなれはつらきは雲のみにはあらす梢もつらしと也四句のよもしおほくの本にやとあり其時は遠方の山の梢にいりやしなんと後をかけたる意になる也○それも嘆辭なから少しまさらはし　よの方はるかに勝れり

藤原保季朝臣

入やらて夜をゝしむ月のやすらひにほのく\明る山端そうき

上句は我ねやへもいらて月見て夜の明るをゝしみてやすらひ居る也月のやすらひとは月故にやすらふをみ月のやすらふにはあらす下句は我はねやへもいらてやすらひゐるにやすらひもせて山端にいるかうきと也

月あかき夜定家朝臣にあひ侍けるに歌の道に心さしふかき事はいつはかりよりの事にかと尋侍けれは○定家卿の行遍法橋にとひ給ひし詞也わかく侍し時西行に久しく相ともなひてきゝならひ侍しよし申て○行遍法橋の返事なり　そのかみ申し事○西行上人の行遍法橋に歌の心えな

とをしへられし事とも也　なとかたり侍てかへりてあしたにつかはしける　　法橋行遍

あやしくそかへさは月の曇りにし昔かたりに夜や更にけん

○月の清き夜とおもひしにかへるさには何故かはしらす月のくもりし事これはむかしの物語に夜をふかして心のくもりし故にやあらんと也西行上人の物語して心のくもりし也上人滅後の事也

故郷月　　寂超

故郷の宿もる月に事とはん我をはしるや昔すみきと

○出家して後に在俗のころ住たりし家に行てよめる歌也むかし我こゝに住たりし事を宿もる月はしりたりやと也

和歌所歌合に海邊月　　慈圓大僧正

和歌の浦に月の出しほのさすまゝによるなく鶴の聲そ悲しき

○二三句は月の出しほの汐のさすまゝにと云秀句也よるなく鶴の聲とは白詩に夜鶴憶子籠中鳴とあるによしありけなれとこゝはたゝ鶴のよるなく聲といふ事也月の出しほに汐のみちくれは立所なしとて鶴のよるなくこゑのかなしと也

定家朝臣

もしほくむ袖の月かけおのつからよそにあかさぬすまの蜑人

もしほをくむすまの浦人は袖に月をやとしてみむとはおもはねともおのつからやとりてよそならす月を袖にみてあかすと也

秀能

明石潟色なき人の袖をみよすゝろに月も宿る物かは

此歌くさ〳〵論ありまつ色なき袖とは例の紅の涙にぬれぬ袖なれと此歌にては紅の色のことはさらに用なければたゝぬれぬ袖といふ意なるへきを色なきといへるはあまりなる事なり○一首を誤解していはるゝ事なれは諸論みな當らす二三句は蜑のなみにぬれたる袖をみよなりそれにも月はやとれとも物をあはれとおもひ入たるにあらされは色なくうつる也さてわか月をあはれとおもひ入たる袖には紅にうつる事をきかせたり月を哀とおもはぬ人の袖には色なくやとる反なれはおのつからしか聞ゆる也下句は月をあはれとおもふ人の袖には紅

にやとりあはれとおもはぬ人の袖には色なくやとりて必差別ある事也すゝろに心もなくやとる物にはあらすと也　又明石かたも下にかけ合たる事なけれははなれて聞ゆ　なみにぬるゝぬれぬも月のやとりやとらぬもみなあかし潟にての事也岡への松となからんからにいかてかはなれて聞ゆへき一首の意は明石かたの人の袖をみよしほくみなとして濡たる袖にこそ月もやとれ同し所の人にてもぬれぬ袖には月もすゝろにはやとりはせす然れはすへて月の袖にやとる事はあはれと見て涙をこほしてぬらす人の袖にこそやとれあはれともみす涙にぬれぬ袖にはすゝろにやとる物にはあらすといふ意なるへし○以上誤解也　人の袖をみよといふ詞上なる慈圓大僧正の歌にもあり○羇旅の部に立田山秋行人の袖をみよ木々の梢は時雨さりけりいつれか先なりけむしらねともすへて人のめつらしき詞をよみ出れはうらやみて事のさまをかへて又其詞をぬすみよむこと此集の頃の人々のくせにていとよろしからぬことなりかし○これは古へのためこゝろくるしきいひことなり今我其寃を洗へ

しまつ人の歌を盜む事は初まなひのさかし立たる人によくある事なれと一家といはるゝ歌よみには今時とてもをさ〳〵なしまして此比の豪傑縱横自在にいはるゝ才器にていかてかさる心きたなき事はあらん爲家卿よりこなたは上下に縁の語を置て結構したつる歌なれはめつらしき詞といふはなし此集のころは新歌をつとめたる物なれは世にめつらかなる事も時々はいてくるを某卿のよみし詞某朝臣のいひし事と所さりてふたゝひよみたる事はなし六百番歌合の難陣に當時の人の歌の百首歌合なとはれかましき時の歌にもあらすたゝ何となくよみ出たる歌をも引出て云々の歌に似たりと難したる事ともあるはその比のならひさるうち〳〵の歌まても等類をさけし故の事也さ計用意深き人々をぬすみよむといはるゝはあまりに心くるし此比の家集百首歌合なといと多かるを引出て等類を求みるへし自の歌にはまれ〳〵有人の歌には絶てなき事也雅經卿の人の詞をとられしといふ事有そはたま〳〵人の歌を忘却しての事なるへきをいみしき事にして談柄にしたるにても當時等類を避し事

をしるへしさて袖をみよはうつるもくもる初雪白しなとやうにめつらしき詞にもあらねは所さらすしてよみたる也正明もさきに一度よみつ今人のいくたひよまんも難なき事也
熊野にまうて侍し時切目宿にて海邊眺望といふ心をゝのこともつかうまつりしに　具親

なかめよと思はてしもや歸るらん月待波の蜑の釣舟
海邊にて月をまつほと月の出へき方の波の上を釣舟のかへるをなかめてよめる意也あの釣舟は我にかくなかめよと思ひて今かへるにてもあるましきにやあらんされと月もまた出ぬほとなれはおのつから先なかめらるゝ事よとよめる也二句しもといふ詞は必しもさやうにてあらさらめともといふ味なり歸るといへるも月まつ比にかなへりすへてかやうの所に心をつけてかけ合をおもふへき事也
八十に多くあまりて後百首歌めしゝによみて奉し　俊成卿

しめおきて今やとおもふ秋山の蓬か本に松蟲のなく
いたく老ぬれはかねて墓所をしめ置て今や〳〵とおもへ共また死もせすかくなからへて居れは其しめ置たる所の蓬か許に松蟲も我をまちわひてなくと也○さる老人の情いかに心ほそかりけんと哀なり　秋山は松蟲の縁なり結句詞よわし○いくたひも打吟すれはよわきかよわからぬかはしらるゝ物なり
千五百番歌合に

あれわたる秋の庭こそ哀なれまして消なん露の夕暮
下句は今たにかくあれたる庭の我露と消なはましていかにあれなんと也夕くれは露のあへしらひにて○これは縁あり　死にもよせあり○夕くれを死る縁也とは秋風を雁の縁也といはるゝと同し事也縁語にはあらねと折からの似合しき也人の死るにいつといふ事はなけれと夕くれよはなとは似合しくて昧旦正午なとは似合しからすこゝも其似合しきにとりて夕暮とよみ給へる也
題しらす　西行

雪かゝる遠山畑の秋されは思ひやるたに悲しき物を
○此歌心えかたしもしは初二句は親しき友の墓所にはあらさるか下句いとかなしけ也下の古畑云々

友よふ聲のとある所とひとつなるへきか

五千首歌人々によませ侍けるに述懐

守覺法親王

風そよくしのゝ小篠のかりの世をおもふね覺に露そこほるゝ

○初二句は序よとかゝる初句は露そこほるゝに應したり結句は涙のこほるゝ事なるを初二句のよせに露とよみ玉へり此世をかりのよとおもふね覺に涙を落すと也

寄風懷舊　　通光卿

淺ちふや袖に朽にし秋の霜忘れぬ夢をふくあらし哉

二三句は涙の露の霜となりてつひに其霜に袖も朽果ぬれは霜もともに跡なくなりぬるよしをつゝめていへる也忘れぬとは詞のうへは霜をわすれぬにて意は昔の事を忘れぬ也霜は即昔を忍ひし涙の緣なれは也夢をふく嵐とは秋ふけて枯たる淺茅の上の霜を嵐のふく緣より出て今は其霜を忘れぬ夢とふくといへる也一首の心は淺茅生とあれたる宿に昔をしのひてなく涙の秋ふけて霜となりつひには庭の淺茅と共に袖も其霜に朽て霜も跡なくなりぬる後までも猶昔を忘れもやらすして夢に見たるにその夢をさへ又あらしの吹てはかなくさめぬる事よと也○以上注の其歌のうへに得かたくてよき說なめれとおのれにはやくなしさて正明は此歌を解えすもし稚子なとに別給ひし事有てそれをしたひ給ふ歌にはあらさるかしはらく其趣にとかは袖にくちにしは撫育したる子のなくなれる事一首の意は淺ちふの秋の霜にくつるか如くなて養ひし子を失ひてわすれかたけれは夢にみたるを其夢をさへあらしか吹て覺したる事と也上の歌とも無常の歌たちたるついてにても有

俊成卿女（正明かもたる古寫本には女ノ字なし）

葛の葉の裏みに返る夢の世を忘れ形見の野への秋風

二三の句はうらみにかへる夢の如くなる世なる物をと云意也うらみにかへる夢とは常にはあかす恨めしと思ふ事も夢にはしはし思ふ如く心に叶ひてみゆる事あるをほとなく覺ぬれは又もとのことくうらめしきにかへりて其夢にみしことは後にこひしのへともかひなきよし也葛の葉はうらみにかへるをいはんためにて結句の野への秋風すなはち葛の

葉を吹風なり一首の意野への葛葉をふく秋かせは物悲しきまゝに過し昔の事のおもひ出られて玄のはしけれは昔の忘れ形見にて有けるよ昔の事はゆめの如くにて戀しのひてもかひなき世中なる物をと也○うらみにかへるといふ事此説のやうにも思はれすさておのれには考なし

山里に住侍ける比あらしはけしき朝前中納言顯長かもとにつかはしける　後德大寺左大臣

夜半にふく嵐につけて思ふ哉都もかくや秋は淋しき

○山里にて嵐の夜半にふく音にてね覺て堪かたくさひしきにつけて都にても此やうに秋のね覺は淋しき物かとおもひやると也

返し　前中納言顯長

世中にあきはてぬれは都にも今は嵐の音のみそする

○あきはてに秋果をそへたり三四句は都にも今はあらし山住せんとおもふと也

百首歌奉し時　土御門內大臣

朝ことは汀の氷ふみ分て君につかふる道そかしこき

○戰々競々如レ履ニ薄氷一とあるによりて上句は愼む事のたとへか猶故事本說ある歟一首の意よゐつに心を用ひつゝしみて君につかふまつるがかしこき事となり

最勝四天王院障子にあふくま川かきたる所　家隆朝臣

君か代にあふくま川の埋れ木も氷の下に春を待けり

三の句もゝし君か代にあふといふ所よりのこゝろははといふへけれと埋木につきてはもといはてはわろし○三の句のもゝしはうもれ木なれともといふ意にてはといはんよりは意まされり　結句は我身のうへをいはんには春をこそまてといふへけれとこれは我身の上の意はうらにかくれて埋木をおもてにしていへるゆゑに待けりとはよめる也○此歌春をこそまてとしては表裏の論にかゝはらすおとれり待けりといふ詞を過去にみらるゝ故此說あり此けりは現在也春を待けりは春を待ますといふ意にてあはれ官さくをも給へかしと訴訟する意あり一二のつゝきは明時にあふといふ事三句は身の不遇なる事一首の意かゝるめてたき世にあひたれはかやうにうつもれたりし身もつかさくらゐなと給りてうれしき時にあはんと也

雪によせて述懐の心を　俊成卿

杣山や梢に重る雪をれにたへぬ歎の身をくたくらん

なけきに木をそへたりくたくは雪に折て裂くたくるによせたり三句のにもし少おたやかならさるか如くなれといひまはせはきこゆるなり○雪折にたへすくたくるといふつゝきなれはかならすにといふへき所なるをいかにいはるゝならん　此歌かなととちむへきをらむとゝちめたるは哉にかよふらん也○らむは心はへを疑ふらん也此たくひのらむ言葉の玉緒にみえたりこゝは何の因果て身を砕くほと物おもひをする事やらんと也　然れとも此歌はかなといはてはたしかならさるをらむとよまれたるはしらへをおもひてなるへし

題しらす

老ぬとも又もあはんと行年に涙の玉をたむけつる哉

下句旅行人の手向の物をおくる意にてよまれたるなるへしされとそれはゆく／＼手向の神にたむくへき料に贈るにこそあれ其旅行人にたむくるにはあらさるを此歌は行年にたむくるといへることたかへり○たむけつる哉はたむけしつる哉也此歌はまきらはしけれと猶かくもよむへきにこそ其例引勘へし旅へ行人に物を贈るを手向すといふ夕かほの巻にいよの介神無月ついたち比に下る女なの下らんにとてたむけことにせさせ給ふと有道々の神に手向る料の物を贈るよりうつりて何にもあれ旅へ行人に贈る物をたむけといふ也　又神に手向るに准へて年にたむくといへるならはゆくといふ言にかなはす○さる事也旅行人に准へたる也神に准へたるにはあらす一首の意老人には成たれとも又も逢ませうとて泪の玉を餞別にしたと也

雑歌中

なからの橋を讀侍ける　後徳大寺左大臣

朽にける長柄の橋をきてみれは芦の枯葉に秋風そ吹

○實事の歌めきたり治承の比福原遷都のさわきにて公卿みなかしこにうつり給ひし事ありさやうの序に長柄の橋の遺趾をみてやよみ給ひけん一首は家物語にみえたるいつくしま詣のころか一首の意かくれたる所なし

五十首歌よみて奉しに　慈圓大僧正

須磨の關夢を通さぬ波の音を思もよらて宿を假ける

とほさぬは關の縁よらては浪の縁なり結句は宿をかりけることよといふ意なり○夢をとほさぬは夢の末とほらぬ事一首の意須磨の關て旅ねをすれは夢もなかはでさむるやうなる浪の音をおもひもかけすして宿をかりけるよと也

和歌所歌合に關路秋風　攝政

人すまぬ不破の關屋の板庇あれにし後はたゝ秋の風

此結句むかしよりめてあへる事なりまことにめつらかなるいひさまにてめてたき方もあれともさせる意もなきにいうならさる詞也○結句はたゝ秋の風のみありといふ事也此御歌唐詩の七言の落句のしらへをおほしたるにてめつらかにいとめてたしいうならさる詞とは何からの非尋常なるをいはるゝなれと其非尋常なるを見ても必おほす所ありてよませ給へるなる事はしるからすや　此おとゝのよみ玉へはこそあれ今の人のかくよみたらんにたれかよしといはん○先生の詞にはつたなき事也誰にてもよしあしをいふは歌にあり人にはあらす

眺望の心を　寂蓮法師

和歌の浦を松の葉越に詠れは梢によする海人の釣舟

○海人の釣舟の松の梢によするやうにみゆる也

千五百番歌合に　正三位季能

水の江の吉野の宮はかみさひて齢たけたる浦の松風

風より所なし○吉野の宮のかみさひたるは浦の松風の神さひてきこえし也よはひたけたる松風はいかにかう〳〵敷聞えたりけん風といふもしなくても聞ゆといふ事か聞えはすれともある方味ひまされり　水の江のよし野の宮とは丹後國熊野郡熊野神社あれは此熊字を能に誤れる本なとを見て與謝郡も同國なれはおしてよまれたるかと契沖かいへるさもあるへし○既にもしもたかひ又部もたかひたれは此説もうけかたしさる由緒の地此外にも有なるへし一首の意は水の江の吉野の宮は年ふりたる浦の松風なとかう〳〵しく聞しとなり

海邊の心を　秀能

今さらにすみうしとてもいかゝせんなたの鹽屋の夕くれの空

初二句打かへして心うへし○一首の意なたの鹽屋の夕くれの空はかなしけれと都をいとひて來住む事なれはすみうしとて今更いかゝせんと也　二三

句我身の事をいへるなるへきに此人なたの鹽屋にすめるよしもなけれはいかゝ○なたの鹽屋は攝津國也述懷の歌に實事をのみよむ例なれは此人つのくにゝ下りすみし事ありしなるへし五位六位はかりの人國に下りすむ事そのかみは常多かり當時をおもひてなしとは定めかたし又五六位はかりの人の始末は悉くは知かたけれはふと物にみえすともさる事なしとも定難し又題詠と覺しけれはかゝる人を儲てよめるも難ならし

百首歌奉し時海邊　　越前

おきつ風夜寒になれや田子の浦の蜑のもしほ火たき増るらん

○沖の風か夜寒になりしやらん海人のもしほ火をたきまさるといふ事なれはらんといふもし少しゐつかぬ心地す

海邊霞　　家隆朝臣

み渡せは霞のうちもかすみけり烟たなひく鹽竈の浦

○みわたせはおしなへて霞の立たる中も取わきてかすみたるは烟のいつもたなひく鹽かまの浦てあらうと也

太神宮にたてまつりける百首事の歌に若菜　　俊成卿

けふとてや磯菜つむらん伊勢島や壹師の浦の蜑のをとめこ

○けふとてやは子日とてや也昔子日遊しては必小松を引若菜をつみたる事也一首の意壹師の浦の蜑のをとめはけふは子日とて磯菜をつみて遊するならんと也

伊勢にまかりける時讀る　　西行

鈴鹿山憂世をよそに振捨ていかに成行我身なるらん

二三句は都をよそになして世をすてゝ行意也ふりもなりも鈴の縁の詞なり○下句心ほそけ也はしめて出家して東國に修行せられし比の歌にや

題しらす　　慈圓大僧正

世中を心たかくもいとふ哉ふしの烟を身の思ひにて

心たかくとはなへての人は執着する世中をいとひはなるゝ事を心たかしといへる也下句はたかくといへるかけ合にふしの煙をいへるにて意はたゝ思ひの絶ぬ故と云事なり○思ひの絶ぬは即執着也此注いかゝふしの烟さる高き嶺より上さまに立のほ

れは高き限なり五句は我見識にしてといふ事一首の意ふしの烟を我見識にして世中をこゝろ高くいとふと也

あつまの方へ修行し侍けるに富士の山を見て　西行

風に靡くふしの煙の空に消て行へもしらぬ我思ひ哉

初句三句例のもしあまり聞くるし○初句こともなし三句はもしあまりにほひとなりて一きはつよくきこゆ　下句おもひの行へもしらぬにはあらず上なる歌のいかになり行我身なるらんと同意にて身のゆくへもしらぬ事をおもふ思ひなり○かくの如し此歌すゝか山の歌なとは初發心の比修行のついてによまれけんいかに心ほそかりけんとあはれ也されと戀の歌と聞えていかゝ○述懐の意ときこえたにすれは其他は何の歌ときこえても難ならす

五十首歌奉し時　慈圓大僧正

花ならて唯柴の戸をさして思ふ心の奥もみ吉のゝ山

初句は此世の事に心をとめぬ意なるを吉野山の縁に花ならてとはいへる也○花ならては花の爲にはあらて世をいとふためにといふ義　花ならてたゝ柴といへる詞のつゝきもにほひ有○此にほひは春ともしらぬ松のたくひにてたとりかたし　二三句は柴の戸をさしこもりゐてたゝ佛の道を觀念する意○柴の戸をさしてこもりゐたらむと心にさしておもふといふ事さしは柴の庵を結ふ事と心にさして思ふ事と二義をかねたる秀句也　下句は世の人はうき世をすつるとては吉野の山にこもるなれとも必しも然らねとも此世の事に心をそめすさしこもりゐて佛道を觀念する心はいつくにありてもすなはち吉野の山そと也○一首の意は浮世をさくるために柴の庵をさして山ふかくこもりをらんとさして思ふ其心底か即みよしのゝ山にて身は都にありとてもやかて遁世者そと也むつかしき歌也句の次第を逐て此注に引あはせて心うへし　四句たゝ心といふ事なるを吉野の縁におくとはいへる也○心のおくとはふかくおもひ入事たゝ心といふとは異なり

題しらす　西行

吉の山やかて出しと思ふ身を花散なはと人や待らん

やかてはそのまゝといふ意也花見に吉野山に入て

そのまゝとゝまり住て二たひ出しと思ふ物を花ちりなは歸るへしと故郷人はまちやすらんと也○かくのことし

藤原家衡朝臣

厭ひても獨いとはしき世也けり芳野の奥の秋の夕暮

うき世をはいとひはなれて吉野山に住とも秋の夕暮にはかなしさの堪かたけれは猶いとはしき世そと也

千五百番歌合に　通具卿

一筋になれなは扨も杉の庵によな／＼變る風の音哉

一すちになれなはとは風の音のいかにはけしくとも始よりかはらすいつも同し事にて馴たらは也○一首の意一樣にて聞なれたらはこれても過らるゝてあらうによな／＼風の音かかはる故事あたらしうさひしいとなり

守覺法親王家五十首歌に閑居　有家朝臣

誰かはと思ひ絕ても松にのみ音つれて行風は恨めし

○三句は誰かはとおもひたえても猶待といひかゝりたる也一首の意は誰かは我をとはんとおもひたえても心よわくやはり人のまたるゝに松にはかり音つれて行は風さへうらめしと也　たれかはとひ來んとおもひたえても風の松に音つるれは待心の催さるゝをさても我を音信てとふ人はなくてたゝ松にのみおとつれて行風はうらめしと也○風の松に音つるれはもよほされてといふ事あまれり　風はといへるに人は來ぬ意をもてり○此義にはあらすはの字は松にのみ音つれて我に音つれぬは恨めしといふこゝろ也　又待心の催す意はなくてたゝ我をはとはすして松にのみともみるへけれとさては初二句とかけ合よろしからす○此說も三句を秀句とみさる故わろかるへし　結句いうならす○心のゆくに任せてよみたれはつよくすこやか也詩人のいはゆる豪壯なり

鳥羽にて歌合し侍しに山家嵐　宜秋門院丹後

山里は世のうきよりも住佗ぬことの外なる嶺の嵐に

本歌山さとは物のさひしき事こそあれ○世のうきよりはすみよかりけり　云々ことの外なるといふ詞歌にはをさ／＼よまぬ事なるをよく使ひえてめてたし○此たくひ此集のころにある事にていつれもめてたし

百首歌奉し時　家隆朝臣

瀧の音松の嵐も馴ぬれは打ぬるほとの夢はみせけり

四句おもしろし猶とけてのとかにぬることはえあらねともいさゝかまとろむほとの也○四句詞のうへはたゝぬる事なれと打といふ發語をそへたるにて只しはしまとろむ事ときこゆ詞のはたらきといふ物なんあやしきものは有ける

題しらす　寂然法師

事しけき世を遁れにしみ山邊に嵐の風も心してふけ

事しけきといふをさわかしき事にとりて嵐の風もさわかしき物なれは心してふけとよめる也○事しけきとは煩しき事一首の意は世の中の煩はしきを遁れて入しみ山にてはあらしの風も心してふくへき事也それもあまりつよく吹たらは又其煩はしさにえ堪し物をと也

西行

山深くさこそ心はかよふ共すまて哀はしらん物かは

山住してあはれなるまゝにおもへるやう世にある人の山のおくをおもひやりてあはれなるへしといかに心はかよふとてもすみて見ては此あはれさはしるへきにあらすと也

山陰にすまぬ心はいかなれや惜れて入る月も有世に

云々又上句を世中の人の事として山陰はかく住よき物なるに世の人の遁れ來て住ぬはいかなる心そや月は人に惜まれてすら入山なるをといふ意にても有へし○かくの如し此上に一義ありわろけれは今はふく

山家送年　寂蓮

立出てつま木折こし片岡の深き山路となりにける哉

始はつま木に折しほとの小き木も立のひて大木になりて生しけりたる山路となりぬといへるにて題の送年といふ意をめつらかによくよみ出たり立出て爪木をるといへるにて山家ときこえたり二句のこしは庵にかへりし意と年來の意とを兼たりかた岡と深き山路とをたゝかはせて見へしはしめのほとは山路といふはかりの所にもあらすたゝ岡といふほとの道なりしも大木の生しけりて深き山路といふほとになれるよし也○一首の意時々は立いてゝ爪木を折て來たりしかた岡かあのやうに木深き山路となりし事かなさては我この山居も年へたる

事よと也

住吉歌合に山を　　太上天皇御製

奥山のおとろか下も踏分て道ある世そと人に知せむ

おく山の棘か下の道なき所までをふみ分尋ね入て道ある世なりといふ事を世の人にしらせんといふ詞の表にて意は奥山にかくれすむ賢人隱士までを尋ねてめし出て用ひて其人に道ある世なる事をしらせんと也○上句は北條の事をの玉へるなるへし道もなきものゝ世にはひこるを追討して道ある世なりと天下萬民にしらせんと也

百首歌奉し時　　二條院讃岐

長へて猶君か代を松山の待とせしまに年そへにける

猶はなからへての上におきて心うへし松山のまつといひかけたり○君か代をは君か永年をといふ事三句松山に待をいひかけたりまつは祈る意四句は松山の松と詞をたゝみていのるとする程にといふ義一首の意は年老たる身も猶なからへて君か永年をいのる事かくいのる〳〵とするほとにはや多くの年をへたる事と也　年そへにけるも松によせあり

山家松　　俊成卿

今はとて爪木こるへき宿の松千代をは君と猶祈る哉

住わひぬ今はかきりと山里につま木こるへき宿もとめてんといふを本歌にて詞はかりをとりて○まへて古歌をとるは古歌の詞はかりを取ものなる事つき〳〵いへるかことし〃こゝろはこれはすてに山住しての歌なり○今はとてとは今おもひ立しはとの事也此説いかゝ　我よはひも老て末のほとなければ宿の松も殘し置て用なければ今はつま木にこるへきなれとも○さらは我身は老ていつ死る事かもしれす死後に人に讓るといふ物でもなく殘し置ても費なる物なれは此松の木を切て薪にせうとは思ふけれともと云義歟此意あまり卑俗にて歌によむへしとも思はれす　さはせす猶殘し置て此松の千世を君かよはひにと祈ると也○宿の松を爪木にこるとは隱者の事さて上句は今はとて世を捨て隱者にならんとする身にてもといふ事なるを詞を文にして爪木こるへき宿の松といへる也下句は猶君か代永久にあれかしとおもふといふ事を詞を文にして松を爪木にしても其千代をは君に讓奉れと

猶いのるといへる也猶といふもし鼎をあぐる力ありさるはしか世を捨て山に入らんとするは時に用られすつかさ位もすへてすゝます大やけのよせなくて隠者にもならんとするなれはいはゝ恨ある君なりしか恨ある君をしも永久をいのるなれはあはれなる志のみゆるうた也

春日社歌合に松風　有家朝臣

我なから思ふか物をとはかりに袖にしくるゝ庭の松風

我なからとは我事なからそれかとうたかふはかりにといふ意也 此心なから迂遠にて聞取かたし二句物をおもふかといふことなるを打かへしていへるにてこよなく意も詞もいきほひまさりていとめてたし○これは誠にさる事也　袖にしくるゝとは松風の聲の時雨の音にまかひて袖に吹を云　袖にしくるゝとは袖になみたのふる事松風の音の哀なる故落る涙なるを松風の音は時雨に似たる故詞を文にして袖にしくるゝといへる也一首の意は我なからあやしき事は物おもひでもする事かと思ふほと袖になみたの落くるのは庭の松風の哀なる故そと也　一首の意は松風の音の時雨にまかひて袖にふくが物をおもひて涙のふるかと我なから疑かはるゝはかりなるよと也

題しらす　西行

誰すみて哀れしるらん山里の雨ふりすさむ夕暮の空

○雨ふりすさむは雨のいたくふる事山里の雨ふりすさむ夕くれの空は此世の外までおもひなかさるゝ哀なるを誰ならんその山里にすみてあはれを知人はと也

しをりせて猶山深く分いらん憂事きかぬ所ありやと

○しをりは歸るさに道まよはしとの用意也しをりせて山ふかく入は今は浮世にかへりいてしとおもふ故の事也

殷富門院大輔

かさしをるみわのしけ山搔分て哀とそ思ふ杉立る門

○かさし折はみわの枕詞しけ山は木のしけき所一首の意はみわのしけ山を分入て杉たてる門をみてゐきよくも世を捨し人かなと哀におもふとなり

後白河院栖霞寺におはしましけるに駒牽の引分の使にてまゐりて　定家朝臣

さかの山千代の古道跡とめて又露わくるもち月の駒

詞書駒引の引わけの使の事江次第公事根源なとにみえたり○諸國の牧より貢る馬を紫宸殿にて御覧する儀ありこれを駒牽と云その多かる馬の中をわかちて院宮にも奉られる卿にも給はるこれを引分といふ其院宮に御馬奉らるゝ使は近衛つかさ奉仕する事にてこれを引分の使と云　栖霞寺は嵯峨にあり後撰にさかの山みゆき絶にし芹川のちよのふる道跡はありけり○此歌をとれるにはあらすされと千代の古道といふ事多くもみえぬ詞なれは其出所にては有　三句は本歌の詞にてその昔の行幸の跡とめて也○例字をあとゝよむあとゝめては逐例なりおりゐのみかとの嵯峨におはしましゝは嵯峨天皇宇多天皇なれは天長延喜の先例を以て引分の使を進せらるゝといふ事也後撰なるは野行幸の事也仁和の野行幸の例とめて今引分の使を進せらるゝといふ注説はあまりに事たかひたれと常講せられぬ事にてかゝる疎漏もある也けりすへて學者は博物にあらされは精細なる事をえかたし　露は道の緣にて又時節にも月にもよせあり又露分るといへるはさきにも此使に參りしか又といふやうに聞ゆれとも其意にはあらす又は○天長延喜の後又此度露分參ると也　三句の事につきて昔の跡をとめて○かの仁和の事をいはるゝ也　又今も嵯峨におはします故に參るよし也○一首の意は先例ある事なりとて此たひ又さかの山の千代の古道の露を分て望月の駒をひかせて參ると也

最勝四天王院の障子に布引瀧かきたる所　　有家朝臣

久方の天津をとめか夏ころも雲井にさらす布引の瀧

さらすとは日に曝す事首夏の比今よりきるへき夏ころもを山岡なとに持出てさらしたりしか古の風俗なり一首の意は布引の瀧は天女か夏衣を大空にほしたるやうにみゆるといふ義にていとやすらかなり　布引の瀧にはあらねと何山姫の布さらすらんとよめる山姫は仙女なれはそれをとりて天津をとめとはよめるか○以上むつかし　又さはあらすたゝ雲井にさらすといふにあはせたるのみにもあるへし○かくやすらかなるかいつもよろしきなり夏衣といへるは此障子の繪の歌四季に分たるこ

れは夏の部に入たるか故也○しからす山岡に持出てさらしゝ事は夏衣にかきりし風俗なり然れは夏の字ちからあり　又撫ともいひかけたるか天女のいはほを衣して撫といふ事のあれは也○以上むつかし　もしそのいひかけならんにてもそはたゝ詞の緣のみ也又そのいひかけにはあらぬにもあるへし○さる事也　雲ゐといへるは此瀧のいと高きよしなり○此說いとよろし

天の川原をすくとて　　攝政

むかしきく天の川原を尋ね來て跡なき水を眺む計そ

跡なきは水によせ有結句いとちからなし○なかむとはおもひ入てめをとゝめたる意にていとおもしたゝ打みる事として看過すへからす天の川は河内也伊勢物語惟喬のみこ交野に狩して天の川まておはしましたる事ある其事也一首の意むかし惟喬のみこの狩におはしましたりときゝ天の川を尋來て跡なき浪をなかめて昔をしたふと也

題しらす　　慈圓大僧正

山里に獨なかめておもふ哉世にすむ人の心なかさを

結句なかさ一本につよさとも有それもよし○尤よろし　二句ひとりと云るは下句にあたりて我より外に山里にこもり住人のなきことよとおもふ意あり○なかめてはこゝは世中のことをおもひつゝ空をなかむる事一首の意世をのかれて山里に入てひとり浮世の方をなかめておもふ事さて〳〵世に住人はうき事も危き事も思はぬ心强き物なるそと也

西　行

山さとに浮世いとはん友もかな悔しく過し昔語らん

○一首の意山さとに我と同しく浮世をいとふ友もかなあれかし悔しくもうき世に住てうきめみしことと昔物かたりせんと也みのゝ家苞に夢かとも何かおもはん憂世をはそむかさりけんほとそ悔しきといふ歌をひかれたり何の料なる事をしらす

山さとは人こさせしと思はねととはるゝ事そうとくなり行　　慈圓大僧正

○人こさせしは不令人來といふ事か下句はとはるゝ事のやう〳〵まれになり行と也

草の庵を厭ひても又いかゝせむ露の命のかゝる限は

上二句いとひても猶いとはしき世也けりと上に有

し歌の心にて世を厭ひて草の庵にこもりても猶そのうへにもいとはしき也かゝる限とは命の有限なるを草に露のかゝる緣をもていへる也

西行法師百首歌すゝめてよませ侍けるに

家隆朝臣

いつか我苔の袂に露置てしらぬ山路の月をみるへき

世をのかれんの心さしあれ共かゝつらふ事共有ていまたえ本意をとけぬよし也山路といへるは山へ入事をいふ也

百首歌奉しに山家　　式子内親王

今は我松の柱の杉の庵にとつへきものを苔ふかき袖

右の家隆朝臣の歌と同し心さしの歌なり四句とちこもるへき物をといふ意なるへけれと詞たらすいかゝ○此難はさる事なり三句をといへはとちこもる義になれとをもし重なる故にとし玉へり　苔深きとは松と杉とに緣はありけなれと○作者の心つかさりし事なるへしとおのれはおもふ　袖にはいかゝいかなる袖をか苔深き袖とはいふへきおほつかなし○苔の衣といふは苔の衣を我にかさなんこけの衣はたゝ一重なと皆僧衣也たなはたは苔の衣もいとはすはとあるも法師の歌なればしはらく入道し給はんとの事とすへし苔の衣といはんに苔ふかき袖ともなとかいはさらむ　此下句苔の衣をきてとちこもるへき物をといふ事なるへけれとさは聞え難く袖をとつるといふやうに聞えたるも又いかゝ○此難はよしなし一首の意年老たる事ではあり今は我松の柱の杉の庵にとちこもりておこなひすますへき物を苔深き袖にてと也さてえしかあらぬを嘆給へる也

小侍從

しきみつむ山路の露に濡にけり曉おきの墨そめの袖

昔わかくて世にありしほとは人にあひて曉におきて別の涙にぬれし袖の今は引かへてかくのことしといふ意をこめたる歟○こめたるにはあらす露顯にその心なり一首の義今にてはしきみつむとて曉おきして墨染の袖を山路の露にぬらす事むかしは曉おきの袖は必別をゝしむとてなきぬらしたる物なるにと也曉おきといふ詞さしはへたる戀の詞にもあらさるに此句にて分明にさる事と聞えたるはいと〳〵めつらしきいひなし也

攝　政

忘れしの人たにとはぬ山路哉櫻は雪にふりかはれ共

忘れしの人とは忘れしと契し人をいふ○必とはんといひし人也　下句はふる物のかはれるにて春より冬の末まで時節のうつれる事をいへる也○わすれし必とはんといひしはさくらの比の事也それか夏秋も過雪のふるまでもとはぬ也　上下かけ合たる事もなき歌なり山路もよせなし○雪もさくらも山路にかけ合たりよせなしとはいかにいはるゝ事ならん　山ならぬやとにても同し事なれは也○いつくにいふへくとも山路に相應したらはよろしまして是は野へ海へたよりはみ山そことに相應したる物をや

五十首歌奉し時　　雅　經

影宿す露のみしけく成はてゝ草にやつるゝ故郷の月

君しのふくさにやつるゝ故郷は○まつ虫の音そかなしかりける　云々の詞をとれり○草にやつるゝといふことはの出所なり　露のみしけくとはほかの物はみなおとろへて○此こゝろなり　茂くなる物は露のみなるを云○二句は草の露のみしけく也四句は草の露にやつるゝ也二の草の露を露と草とを二所に置て相たもちてきかせたりこれを影略互見といふ　なりはてゝといふは荒そめてより後ふたゝひとりつくろふこともなく○中間につくろひし事ありてもつひにあるれはあれはてゝと云　ひたふるにあれたる意なりすへてはてゝといふ詞はいつれもかやうの心也○はてゝは俗にしまうてといふこゝは草の露ばかりがしけくなりてしまうてといふ義なり殘なくなりし事としるへし　みとりにそへてはよむへからす○これは何といふ詞にても同し事みたりにはよむへきにあらす　首のこゝろは月の影をやとす草の露のみしけくなりはてゝ其草の露に故郷の月までかやつるゝと也あれたる草の露やとりたるをしかいふ也さて故郷のやつれたるおのつからみゆる歌也

山　家　　慈圓大僧正

山里にとひくる人の言くさは此住居こそ羨ましけれ

○打よみたるまゝの意也結句にといふと云もしをそへてみるへしさらは浮世をのかれてかくの如き山さとのすまひをすへきにさもあらぬは口にはう

ら山しといひて心にはうらやむにはあらすなとい
ふ意もあるへきにや

後白河院かくれさせ給ひて後百首歌に

式子内親王

をのゝえのくちしむかしは遠けれとありしにもあら
ぬ世をもふる哉

結句をも一本にはにもとあり同しこと也遠けれと
ゝは其昔のためしは遠き事なれとも今現に我もと
いふ意也○一首の意は仙人の碁をうつをみてゐて
斧の柄のくちたるにおとろきて宿にかへりてみた
れはあらぬ世にうつりかはりてありしといふ事は
程遠きむかしの事なれと今父みかとにおくれ奉り
てはよろつの事うつりかはりてありし世中のやう
にもなき世をふる事と也　下句は父みかとの世に
おはしましゝほとゝは御身のうへ何事もかはりて
有しにもあらぬよしなり故郷はみしこともあらす
をのゝえのくちし所そこひしかりけるといふ歌を
もてみれは○かやうの歌に引あてまともきこゆへ
し　仙洞を戀しくおほしめす意もあるかかの王質
か斧の柄のくちし所は仙人の栖なれは也○仙の字
になつみたる説はむつかし

述懐百首に　俊成卿

いかにせん賤か園生の奥の竹かき籠る共世中そかし

竹かきこもるとつゝきたるは竹垣といひかけたる
也○垣は此歌に用なし　然らされは竹をいへる詮
なし○園の竹深き處にて世をさくる所なり　世中
は竹の縁の詞なり○これも竹の詮なるへし一首の
意賤か園生の竹ふかき所に引こもりゐて世の人と
ましはらすとも同し世中なれはうき事はきこゆへ
きをいかにせはよからんと也

題しらす　慈圓大僧正

岡のへの里の主を尋ぬれは人は答へす山おろしの風

○岡のへの里とは岡のへにたゝ一つある家をいふ
此例山家を山さとゝいふか如しあるしは隱者也四
句はその隱者は物に行て空しき宿を音つれぬれは
人は答す山おろしの風か答かほなると也訪隱者不
遇といふ詩題をおほしけん下句唐詩の風韻あり

西行

古畑のそはの立木にゐる鳩の友よふ聲のすこき夕暮

○古畑とは古家の事にはあらしか家を畑とよめる

は畑の中なる墓にてしかありしまゝによまれたる實事なるへし上に雲かゝる遠山畑の秋されは思やるたに悲しき物をとあるも古冢の事かとおほしけれは也一首の意古塚のそはの木にゐる鳩か友をよふ我をよふとおもはれてすこき夕くれそと云るか

山賤の片岡かけてしむる野のさかひに立る玉のを柳

初句一本に山かけのとあるは誤なり三句のしむるは山かつのすみかにしめたるをいへは也○其義にても山かけのにても聞ゆ誤ともさためかたしされとこゝは山かつのとある方いたく勝れりさて此所は畑なとにせんとてしめたる也すみかにはあらす

さかひはその山かつのしめたる地と野との堺なり○三句さはきこえす山賤か野をしめて其末かた岡におよへる也これかけての義也　たゝ柳にてもあるへきを玉のを柳とよめる此集の比多し○一首の意山かつか野をかた岡へむけてしめたる其さかひに柳をうゑたりと也眞率なる歌なからすゝろにをかし

しけき野を幾一村に分なして更に昔を忍ひかへさむ

上句はしけき野いくつを一村に分なしてかといふ意也○しからすしけき野一つを一村に分なし又の野一つも一村に分なし茂き野いくつを幾一村に分なしたる也おもひ入心の深きをみ三句の下にかもしを添てみるへし　一村はたゝ一つにといふ意なるを○一村の口を分るやうにたやすく分盡す也野の草につきてむらとはいへる也さて一村に分なすとは俗言に一いきに分行といはんかことくにて多くの野をやすらはす一むらの野の如くに分入をいふ一首の意は深く分入事を本意にしてよめる意にていくつの野を一いきに分入てかとゝまりて昔の事をもおもひかへしてみんといへるなるへし二三句しひことなり○しひことゝもいひかたしなほ思はるへくやむかしとは世にありしむかし也

昔みし庭の小松に年ふりてあらしの音を梢にそきく

二句にもし聞えかたしもの誤なるへし○庭の小松に年かつもりてと云事也　下句は梢にあらしの音をきくほとになれると也○小松に嵐をきくといへるか文章なり一首の意むかし小松とみたりし庭の木に年がつもりて梢にあらしの音をきくやうになりしと也

百首歌よみ侍けるに　　攝政

故郷は淺茅かすゑ（原イ）になりにけり月に殘れる人の面影

○一首の意故郷は人かすまぬ故淺ちか原と成てしまうて月にむかし住し人のおもかけ計か殘りてみゆると也

題しらす　　西行

是やみし昔すみけむ跡ならん蓬か露に月のかゝれる

○みし昔とつゝくみし昔はありしむかし也初句くたけたれと此上人の歌さるいたはりなし蓬の露に月のやとるを見てこれかみし昔住し所にやあらんと哀なりと也

守覺法親王家五十首哥に閑居　　定家朝臣

わくらはにとはれし人もむかしにてそれより庭の跡は絶にき

それよりといふ事あまりていたつらなれとも此詞かへりてめてたく一首のにほひとさへなれり○わくらはたまさか也一首の意たまさかに人に問れし事もありしかそれも今は昔になりて其以來庭に人の跡は絶たりと也それよりといふ詞よくかなひたり

# 尾張廼家苞五之下

## 新古今集

雜歌下

千五百番歌合に　　攝政

船の内波の下にて老にける海人の仕業も暇なの世や

○船のうちなみの下をはなれす年老るまていとまなくつとむるあまの哀なる事と也

最勝四天王院障子に大淀かきたる所　　定家朝臣

大淀の浦にかりほすみるめたに霞にたえて歸る雁金

上二句は序の如くにてすなはち大淀の浦の歸雁也三句たにといへる意は歸る雁のとまらぬなこりをゝしみてせめて空行ほとをなこりとも見おくらんとおもふにそれたに霞にたえて見えぬ意也○皆よろし　伊勢物語に大淀の濱におふてふみるからにこゝろはなきぬかたらはねとも　云々袖濡て蜑のかりほすわたつ海のみるを逢にてやまんとやする○此歌は用なし大淀の浦の浪路は霞絶てそのあなたを雁金は歸るとなり

五十首歌奉りし時　　慈圓大僧正

世の中のはれ行空にふる霜のうき身計そおき所なき

一二句みたれたる世のおさまれる世にかへる事ときこゆ○時の政のくらからぬ事いはゆる明時なり一首の意はかゝる明時にあひぬれとも我ことき愚不肖なる身はかりはより所なしと也　されと世のなかの晴ゆくといへるつゝきことやう也○亂のやむ事とみられたれはさやうにことやうなるにそ有へき世のくらからぬ事とおもへはさしもやうなきことなるをや　ふる霜は身のふりぬるをいへり○壽永の比三四年かほとは亂世といふへけれと亂世に老といふ程の事はなし　されとおくといへる縁のみにて霜のよせなく聞ゆ○これは下におくといはんとて霜といへるにて枕詞も同しやうに意義にあつからす霜の縁を盡さすとも有なん

例ならぬ事侍けるに無動寺にてよみ侍ける○例ならぬ事はわつらひ給し事也

賴み來し我古寺の苔の下にいつしか消む名社惜けれ

○たのみ來しとは寺の爲にしか〳〵の事せんとおほしゝ事四句は其事もならていたつらに死る意一首の意は我此山の法師となりたる上は山の爲にしか〳〵の事せんと佛祖にかけてたのみたりし此寺の苔の下に志願と名と共にくちんかをしき事と也

題しらす　　西行

思はねと世を遁れむと云人の同し數にや我も成なん

世をまことにそむかんとはおもはねと言にのみさいふ人の多きを我もそのおなしなみにやなりなんとよめるにて○心にはおもはぬ事なから口にのみ世をそむかんといふ人あり我はまことにしかおもふ事なから何かとかゝつらひて世をそむかさるほとに其同列に人にもかそへられんがくるしき事と也　わか形のみ世捨人にて○此歌とても法師みな世捨人にあらすまして僧綱なといみしき有職也心はさもえ世を捨ぬことを耻なる意の歌なり形のみ世をすてゝ○此歌にこの心はなし　心にすてぬは言にのみいふとおなし事なれは也○以上よくもかなはす

數ならぬ身をも心のあり顔に浮れては又返り來に鳧

うかれてとはいかなるをいへるにか何にうかるゝ

にか心え難し下句のさまうつし心なき人の折々うつし心になる樣に聞えていかゝ○數ならぬ身とは才德智德もなき事心のありかほとは才智ありけにおもひてといふ事則心のうかるゝ也うかれてはとはほれ〳〵しき事也ともすれは僧綱にもならんと心のうこく義歟一首の意數にもあらぬ身が何そ才德てもありそふにとうかすると都へ歸り來る事よと也

愚なる心の引に任せても扨さはいかにつひの思ひは

結句おもひは俗言に料簡といふ意也おろかなる心の引まゝに常に佛の道にかなはぬ不料簡なる事のみ思へともさやうにて然らは命終の時にも臨みての料簡はいかにそと自いましめたる也○上句は煩惱のおこるにまかせても也さてさばゝさうして夫ならば也夫ならばとはつひのおもひをとかめたる也つひのおもひとは死後の思案はといふ事也一首の意はおろかなる我心にまかせて惡業煩惱をつくる事なるかさうしてそれならは後生の思案は何とせうとおもふてと也

年月をいかて我身に送りけん昨日の人もけふはなき世に

○きのふありし人もけふはなき世の中に此とし迄我身はとうして年月を送りし事やらんと也世中のはかなきなかに身の老たるをいへる也

うけ難き人の姿に浮ひ出てこりすや誰も又沈むへき

十善戒をたもちたる德にて三惡道に沈みたる者も人間に生れ來る物なる故うけかたき人の姿といへりさやうにうけかたき人身に偶うかひ出たる物の常に惡業をして誰も〳〵こりすに又惡趣に沈むへきか哀に淺ましき事と也姿といふもし少いかゝなれと人身の身字にあてゝよめるにそ有へき

守覺法親王家五十首歌に　寂蓮

背きても猶うき物は世也けり身を離たる心ならねは

世をうしと思ひてそむきてもさ思ふ心も身を離るゝ事あたはす其身はもとの同身なれはそむきても猶うき事の絶ぬ世そと也○初句は出家したる事一首の意出家してもやはり世はうき物ぞなあからだは世を離れず心は身をはなれねばみる事きく事に心をいためてあちきなき世そと也

述懷

身のうさをおもひしらすはいかゝせんいとひなから
もなほすくすかな
身のうきほとをおもひ知て早く世をいとひ捨へき事なるにさもえせすて過さは末いかにせんいとはしく思ひなからも猶え捨すして年月を過すことのおろかさよと也○二句は俗にきかつかすはといふ事三句は末いかにせんの義にあらす俗に何とする物そといふ四句は世はあちきなき物とおもひなからも也一首の意此身のうさにきがつかぬならは何とする物そ是非もなき事也其きかついて世をいとひなからも野山ともおもひもいらすやはり都で年月を過すと也　いとひなからもはいとはしく思ひなから也既にいとひ捨ていふにはあらす上句と照して心うへしこはいまた俗にありし程の歌なるべし

慈圓大僧正

何事を思ふ人そと人とはゝ答へぬ先に袖そぬるへき
○物おもひのふかくてこほるゝなみたをからくしてしのひたるに人に何事をさはかり物おもふそととはれたらはえこらへすして洩すてあらうと也

徒に過にし事やなけかれんうけかたき身の夕暮の空
うけかたき人の身に生れなから一生をいたつらに過さは今はの時にいたりて後悔してなけくへしと也○かくの如し　うけかたき身の夕くれといへるつゝきいかゝ○をかしけに聞ゆる言　又命終る時の事を夕暮の空といへるも上にあへしらひなければ○これはなとやらん聞えかぬる心地すいかゝ夕暮といへる事俄にていかゝ○晩年暮年なといふこともあれは年老たる方にはしたしうて臨終の方にはうとし

打たへて世にふる身にはあらねともあらぬすちにも
罪そかなしき
上句我は出家なれはひたふるに世にある俗人にあらねともといふ意とは聞えたれと打たへてといふ詞いかゝ○たへて世にふるとは佛理なとも信せす今生のはかなき事後世の悪趣におもむくへき事をも何とも思はぬ事也うちたへてのうちは發語この發語にて露はかりも心をとめぬいきほひをみせたるなるへきをふとみては打聞の耳にたつ歟のうたかひある故いかゝといはるゝ也さて上句の意は我

は佛道をも修行せす後生をわすれて何ともおもはて世にふる身にあらす出家して修行する身なれともと云意也　下句は出家の身なからも世のならひにて自罪を犯す事のあるを悲しみたる意とはきこゆれとも○下句は三悪道の罪報をやえんと危くかなしくおもふと也　あらぬすちといふ事もあたらす○出家に不相應なる悪報をいふ出家して修行する身なれは後生佛身をうるはすちのまゝ也されとおのつから犯しあるにひかれてすちにもあらぬ地獄餓鬼の罪報をやえむとおもひて危く悲しき也又罪の下におかすとかつくるとかいふやうの詞なくては語とゝのはす○あらぬすちにも罪つくるとは何といふ事そさてはとゝのふにや萬々不審なる事也　すへて此僧正の歌西行か心にまかせてみたりによみちらしたるふりを○此上人の歌時世にかなひて流麗なるもましれゝと眞率にかさりなきか數ありこゝによみちらしたりとは其かさりなきをいはるゝなるへしされとその眞率なるも一つの姿なり上下に縁語なしとてあなかちよみちらしたりともいひかたし定家々隆何くれの英雄たちの此上人をうたよみとして許されたりしをみてもさのみはいかてかあしからんなうらやみて讀れたりとみゆるか多しその心して見るへき也○建暦建保の比歌道の英雄の出現したるか數多かりし事前後たくひなし其中に此僧正は四五人を出さる上手にておのつから一家也人のふりをうらやみまねふ人にはあらす大かたは調高く心深くて此時世の姿也此歌も四句幽玄にて露顯ならす猶此時世の風にて西行上人にはをさ／＼みえぬ事也しかしらへ高く心深き中にこまやかにたくみなる方のましれるか此僧正の姿也これを後京極殿の高遠俊成卿の淸新にくらへては品いさゝかおとる様にて時世第一の歌人ともいひかたかるへし左様に流麗新奇なる中に眞率にかさりなき歌もましれるこれ此僧正の一つの姿也先生の西行上人の歌をうらやみ給へりといはるゝは此かたの歌の事なるへしうらやみ給ふにはあらねと道心深き人の歌かゝる物にそあるへき

和歌所にて述懐のこゝろを

山里に契し庵や荒ぬらん待れんとたに思はさりしを

はやく遁世をおもひたちて山里の庵にこもらんと

おもひて契置しかとも其後ゑ本意をもとけすして年をへぬれは其庵もさゝ荒やしぬらんそのかみおもひ立て契りし時にはすみやかにこもらんとおもひしかはしはらくも待れんともおもはさりし物をと也○二句はさきより山さとに住人にわれも同しくこもらんといひて庵しめたるか荒やしぬらんといふ事なるへししかみされは契なといひまたれんといふことおたやかならす　四句たにといへるはあれぬらんといふに對へていへるにてあれぬらんといふはあまたの年をへたる事またれむとたにといふはしはらくもおそきを云されはしはらくも待るゝほとも○庵の人をまつと云事あるへきにあらす　やすらひはせしと思ひし物を思ひの外にあまたの年をへて庵の荒ぬへきほとになれりと云意也

通具卿

袖に置露をはつゆとしのへ共馴行月や色をしるらん

上句袖の涙を露そといひてしのひかくせともといへるにて涙を露といふか泪をしのふ也結句は例の涙の紅になれるをいふ人には猶涙をかくして露といひなせともはしめよりやとりてなれきつる月は色のかはれるにて涙としるらんかと也四句なれこしといはて行といへるは今より後をもかけていへるなり秋夜の露をはつゆと置なから○かりの涙や下葉そむらん　云々○二句の出所也

定家朝臣

君か代に逢すは何を玉の緒の長くと迄はをしまれし身を

あはすは何を玉の緒にせん○かた糸をかなたこなたによりかけてあはすは何を玉の緒にせむ　といへる歌をとりて君か代にあはすはなにを玉の緒にしてなからへむ○なからへんといふ意此歌にはなし　もし君か代にあはすはその玉の緒の長くもかなとまてはをしまれしと也何をといへることはの結ひはなけれともこれは本歌の詞にていひくたしたるなれはくるしからす○本歌の詞にてもむすひなくてはわろかるへし何をの結ひはのもし也のもしはあはすは何を玉の緒にせんといへる其といふことを此一字にふくめたる也いさり火のむかしの光とあるのもしと同しくて古歌をうけたる也一首の意はかやうにめてたき御代にあひたれはこそ長

生も望まるれもしかやうの御代にあはすは命長くとまては惜まれしと也　かくさまにいふそ此集の比のすくれたる所には有けるとちめのをはなる物をの意にて下句卑下のこゝろ又述懐の意ありて君か代にあひたれはこそ命も長くと惜まるれと云意におつる也○和歌の道並に行れて父卿と共にやう〱世に用ひられ給ふを悦給ふなるかやことなき公達にて沈淪し給ひし事しるけれは猶述懐の義也

家隆朝臣

大方の秋のね覺の永き夜も君をそ祈る身を思ふとて

ふしておもひおきてかそふる萬代は神そしるらん　我君のため二三句本歌の初二句をおもしろくとりなしたり長き夜のね覺にはふしつおきつする物なれは也○ね覺とはふしなから目の覺たる事也おもひの外なる本歌を引れたるは二句の料也けりされとさやうに本歌をとる事おもひよらぬ事也むつかしくやあらん　大かたのとはかならすしも君をいのるへきをりにもあらさる何となき寐覺にまてといふ事也○君をいのるへきね覺たゝ何となきね覺といひて別にあるへきにあらす初句をこゝろえかねられたるにや初句は秋の永き夜には大かたね覺するならひなるをいふかろくみるへし　身をおもふとてとはめくみあまねき御代なれは其御代の長けれはわか身もなかく御めくみをかうふる故にいふ○此説の如し　さて此詞おのつからねさめによしありね覺には身のうへをいろ〱とおもふ物なれはなり○これもよろし一首の意は秋のなかき夜にはならはしのことくねさめをする其寐覺にもわか身つひになり出へきは此君なれは身をおもふにつけても君か代なかゝれといのると也さて三の句のもゝしはねてをるほとはしはし此ことをおもはねとね覺をすれはやかて此事をおもふにて日夜おもふ事をきかせたる也ねさめにも他事はおもはてまつ此事を思ふ也

わかの浦や沖つ汐合に浮ひ出る哀我身の寄へ知せよ

本歌わたつ海のおきつしほあひにうかふ沫のきえぬ物からよる方もなしうかひ出る沫といひかけたるかなちかひなれと此集のころはつねなり○これはさる事咎にはあらす　本歌の下句の意をもちて○本歌をこゝろにもつといふにはあらねとよる

へしらせよとはよるへなき故の事なれはおのつからしかきこゆるなり　我身歌よみの數にて○初句にわかのうらやとあるによりてしかきこゆるなり

年をへてなからへゐなから其しるしとていまたよる方もなし此うへよるへをしらせよとよみて身のなりいてん事をねかへる意也○うかひ出るは身のなり出る事一首の意歌の道の行はるゝ世に歌よみといはるゝ我身のしつみたるかうかひ出へき便をしりたい物なるに其たより所をしらせよとなり

**其山と契らぬ月も秋風もすゝむる袖に露こほれつゝ**

その山と契らぬ月とは世をすてゝそこの山にて見へしとは契らぬ月といへる事にてちきらぬは月に契らぬ也すゝむる袖とは袖に月のうつり秋風のふけは物かなしくて世をいとふ心のいよ〳〵もよほさるゝを月と風との遁世をすゝむるといひなせるにてたくひなくおもしろし露のこほるゝはそれにつけてもいよ〳〵涙のおつるをいひて風の縁なり一首の意いまたその山とさして月をみるへき所をは契おかねとも其月も秋風も袖に來て早く山へこもれとすゝむるよし也

**君か代に逢る計の道はあれと身をは賴ます行末の空**　雅經

道はあれとゝは立身すへき道はあれとゝ云意也○めてたき君にあひ奉ると云か身のなり出へき道にはあれともなり　四句は我身はおろかなれは其立身のたのみもなきよし也行末といへる詞道によせ有空とはたゝ輕くそへたる詞也○一首の意めてたき君にあひ奉るといふ計か立身の道にはあれとも身の不肖なる故に行末もたのみかたしとなり　二句はかりは我身のおろかなる故に立身すへきことわりはなけれと惠ふかき君か代にあへるのみは其たつきあるよし也此詞に身を深く卑下したる意こもれり○はかりは誠に此こゝろ也

**をしむとも涙に月も心からなれぬる袖に秋を恨みて**　俊成卿女

月のかたふくをゝしむとて我心から涙にぬらして其月も馴ぬる袖なるに秋をうらみて袖のぬるゝを秋のとかのやうに思ふことよとよめるなるべし○此説にては歌のとまりなしてとゝまりては必多くの意をふくむる物なるに秋のとかのやうにおも

と書とゝめられたるは恨むといふもしの事なれは歌のうへのみにてふくめたる義ありともみえす然れとも此歌すへて題の述懐の意にうとく○述懐の意はなみた也女とてもほと／＼に心にかなはぬ事ありてとあらはやかくあらはやとおもふに涙のおつるこれ述懐の泪也戀の歌にもなみたはかりをよむ事あるを此歌はそれにまきれす分明に述懐の泪と聞えたれはいかてか述懐の意にうとからん時をなけき世をいきとほるは大丈夫の上の事也深き窓の中にては述懐といへともかくの如くなるに過す　其うへ月はもとより哀なる物なれはをしむほとならてもみれは袖ぬらすは常の事なれはをしむとてといふ事詮なくきこゆ○たゝみる月もあはれなれはとて惜みて袖ぬらすともなとか讀さらんされは此初句をなかむとてといはゝ述懐の方にもしたしかるへく又詮なき難もまぬかるへきか○此二つの難は上にときつ　此初句のとてを多くの本にともと有さては心え難し○とてとある本中々わろしと正明はおもふ　然れ共其本につきてしひていはゝをしむともなしといひかけたるにて然いへる意は暮行秋をは世にをしむならひなれとも我はうらみてをしむともなしといへるにや二三の句の意は上に同しされと惜むともなみたに云々と下へつゝきたれは○をしむともなとかゝるなはなしの意にてこゝにてきるゝ也　秋を恨みてをしむともなしといふ意にはなりかたく詞とゝのはす○なしときるゝとみれはよくとゝのひたるを下へつゝくといはるゝ故とゝのはさるか如し秀句といふものみな此定なるをいかゝおもはれけん　そのうへ恨むるによりて秋を惜ますといふは歌人の情とも聞えす○一首の意物おもひをして心から袖の涙に月を宿し馴て秋ならすはかうまて身にはしむましとおもふに秋のうらめしくて傾く影をゝしむともなしと也秋を惜ますとは不風流なるやうなれと物おもひの秋に堪かたきを主としていへるなれはこれも一つの趣也　されは今は一本にとてとあるによれり○さる本もなしなるへけれとそれはわろし

初句と結句のてもし○初句にはてもしなしわろき本をとられし也　二句と四句のにもし共に重りてよからぬ歌也○二三の句高調ともいひかたし

千五百番歌合に　　　　　　　　摂　政

浮沈みこん世は扨もいかにそと心に問て答へ兼ぬる

○初句はうかふ事か沈む事かといふ義此詞常の用ひさまと少し異なり一首の意は來ん世はうかふ事かしつむ事かさていかゝあらんと心にとひたれは返答しかぬるは淺ましき事と也さるは悪趣の業は多くして出離の縁にはうとき故なり

題しらす

我なから心の果をしらぬ哉捨られぬ世の又厭はしき

下句はしかりとてそむかれなくに事しあれはまつ歎かれぬあなう世中といへる歌の意也　此歌に近くはあれと本歌にあらす引へからす　この世を厭はしく思なからさすかにえ捨もせす捨はせね共又いとはしく思はれてとかく一方に思さため難きを此心のつひには何方におもひ定るへき事そ我なから其はてをえしらぬと也三句哉ととちめて下句をいとはしきととちめたる詞かけあはす聞くるしいとはしきはとはもしを添て心得へし此集の比かゝる例多しこのましからぬことなり○注も論も皆よろし

おしかへし物をおもふはくるしきにしらすかほにて世をや過まし

此歌右の歌にこたへたるやうなり同時によみたまへるなるへし○さる事ならんもしりかたし　初二句右の歌のことく○以上不用也たとへ同時の御歌にても右のうたの如くといふ意はなしまして各一時の御歌ならんもいかてかしらむ　いろ〳〵とおしかへして考れはくるしきにと也しらすかほとは此歌にては心にかけぬ意也○一首の意はくり返し物思をするはくるしき物なるに世の中を何ともおもはすしらぬ顔をしてくらさうかといふこゝろ也

五十首歌の中に述懐　　　　守覺法親王

長らへて世に住かひはなけれ共憂にかへたる命なりけり

うきかはりに命のなからへてあるといへる也○此上に繪合若紫下の文をひかれたりもとより此歌それらをとりてよめるにはあらすすこし似かよふ所あれば必引出て弁立る例のこと也文長けれは今は省くへし一首の意かやうにうき身はなからへて世にあるかひはなけれとも其うきかはりに命かある

といふ物なれはせん方もなき事と也
　　　　　　　　　　權中納言兼宗
世を捨る心は猶そ無りける憂をはうしと思ひしれ共
○世の中のうき事はうき物と思ひしりてはあれと
もさても猶遁世出家なとする心はなしと也かやう
の事人のうへには常ある事也されと歌によむ情に
はあらす
　述懷　　　　　　　　　左近中將公衡
捨やらぬ我身そつらきさり共と思ふ心に道を任せて
○三四句は今はかくうくともさりともうれしき世
もあるへしとおもふ也五句は身の行末をまかする
事さりともとおもふ心に身をまかせてうき世をも
え捨すしてある我身のつらき事と也
　　　　　　　　　　　源師光
うきなから猶惜まるゝ命哉後世とても賴みなけれは
○よくきこえたる歌也されと歌はかやうに心よは
くもよむ物にやあらん此集は精選なるにかゝる事
もあるよ上に吉水僧正の歌打たへて世にふる身に
はあらねともあらぬすちにも罪そかなしきとある
此僧正は外よりみては上品上生のひしり也三途の
底と罪をかなしひ給ひけるはいかなる犯ありけん
と情さむる心地す後京極殿の御歌にうきしつみこ
ん世をさてもいかにそと心にとひて答へかねぬる
とあるも一人に師範し四海に儀刑たる御身なれは
いかなる御罪ありて後世をおそろしとおほすとも
當職にておはしますほとはしのひてもおはせかし
なもと詞のゆくにまかせてよみ給へるにて御心に
はさしもおほさゝりけんを只詞花言葉のためなら
はさまあしき事也近來かやうの心を實情なりとて
事の本義とするものあり似よりたる事にてよく人
の信することなれといたくひかこと也歌は人の情
にもとつきたる事は勿論なから必風流をおひたる
もの也今時歌まなふといふも人情には人々の情に
てその風流なる所をまねふ也そも〳〵此歌限ある
命を〻しと思へるか大なる惑なるに後世賴みなし
とおもひくつほれ給はむいとをしくあはれ也
　入道前關白家百首歌に　　　　刑部卿賴輔
河船ののほり煩らふ綱手繩苦しくてのみ世を渡る哉
○のほり煩らふとは官位の昇進せさる事つなて繩
くるとかゝるわたるは船の緣の詞

読て侍ける百首歌を源家長かもとにみせにつかはしけるおくに書付て侍ける　藤原行能

かきならすことの葉をたにしつむなよ身こそかくても山河の水

○家長は和歌所の開闔なりけれは院にも御らんせよとてつかはしたる也三の句は叡覧に入れよといふ事二の句たには身は沈淪しても此詠歌をたに聞えあけよと也下句は身こそかくてもやまめといひかゝれり我身かくの如く沈淪したりとも此ことの葉をなりとも沈めすしてきこえあけよと云こと也

身の望かなひ侍らて社のましらひもせてこもりゐて侍けるに葵を見て　鴨長明

みれは先いとゝ涙そ諸葛いかに契てかけはなれけん

○なみたそもろきといひかゝりたり四の句はいかなる因縁にてといふ事かけはかつらの縁の詞一首の意此あふひをみれは涙かもろくこほるゝいかなる因縁にて氏人のましはりもかけはなるゝやうになりし事そと也あふひと云もしのなきはいかたしよまてことゝはんのたくひ也もろかつらとはあふひにいふ事也二葉あるものを二葉なからかさす義歟又葵とかつらと相具してかさす義にても有へし

題しらす　西行

いつくにもすまれすはたゝすまてあらん柴の庵のしはしなる世に

○柴の庵のしはしとは詞をたゝみたる文章也一首の意は人間はたゝしはしなる世なるにいつくに柴の庵を結ひても同し憂世なれはうき事はあるへきにさて住うくはそこにはすますやかて所をかへなとして住所に頓着せしとよめる也

月の行山に心を送いれて暗なる跡の身をいかにせむ

○月の行山は西也上句は西方彌陀如來に一念歸命したる事下句はさても猶此苦界に殘る身をいかにせんといへるなるへし

五十首歌中に　慈圓大僧正

思事なと問人のなかるらん仰けは空に月そさやけき

下句くさ〳〵の説あれとも歌ぬしの意しりかたし其意はいかにもあれかくさまにさかし立たる歌はうるさきもの也○わかかくはかり物おもひするを何事をおもふとてなとゝふ人のなきならんあふけは空に月はさやかにしてたれそとひかほなると云

述懐の歌にはあらしか　結句そといへるてにをは上になかるらんといへるにかけ合わろし○かやうに二段にきれてとゝのひたるも常の事也

いかにして今迄世には有明の盡せぬ物をいとふ心は

○世には有明のとつゝき有明のつきせぬとつゝきたるはたゝ詞の文章のみにて月は意義にあつからすつきせぬといふ詞此歌にては間斷なくいつとなくといふ義此つかひさまめつらし一首の意世中をいとふ心はいつとなき物をいかにして今日までも隱遁はせすして世上にある事そと也此うたも述懐の意なり

西行法師山里よりまかり出て昔出家し侍し其月日にあたりて侍なと申たりける返ことに　八條院高倉

憂世出し月日の影のめくり來て變らぬ道を又照す覽

○上句は出家せし月日のめくり來たる事下句は佛道を修行していよ〳〵徳輝をますにそあらんとなゑへし

太神宮歌合に　太上天皇御製

大空に契る思ひの年もへぬ月日もうけよ行末のそら

初二句は結句とあはせておもふに行末の事をとあるへしかく有へしとかねて思ひさためおくをの玉へる也行末の事はいかにあらんもしられすたしかにとらへられぬ事なる故に大空とはよみ玉へるにてそは月日の縁の詞也○大そらの說いたくむつかし正明か說もおなしやうにむつかしけれと猶いふへし大空に契るとは大御心の底にとせんかくとはかりおほすことと承久の御あらましなるへし契るとにかたくおほし定めたる事なれは也すへて空にとは事の迹にあらはれさる事たとへは手を折てかそふるをそらにかそふとはいはす空にかそふとは心のうちにてかそふる事なるかことしさるは手を折ては既に事の迹にあらはれたる也しか事の迹に顯れさるを空にとはいふ也こゝは御心のうちにはかり定めさせ給へるなれはそらに契るとの玉はすへきを月日の縁に詞を文にして大空に契るとはよませ給ふ也　四の句は日神月神に我かくおもひ定めおく事をうけて守り玉へと也○五の句は今は御心にひとつにおほし掟たる事なれと行末には御軍をも興して天下平均せんと構へ給はする事を神も

うけて守り玉へと也

題しらす　俊成卿

うきなから久くそ世を過にける哀やかけし住吉の松

身はいやしけれとかく命のなかくてある事は歌の道に深く心をよするによりて住吉の神のあはれみをかけて守り給ひし故にやと也○此説のことし松といへるは二三の句の詞の縁なり歌の道に云々の意は詞にはみえされとも住吉にて然聞ゆ○みなよろしき説也　三の句へにけるとこそあらまほしきを○うきなから久しくそ世をへにけるといひては隠遁もせすして憂世にありふる事也年高く積りし事とは聞えす　もしたらて過にけるとあるはくちをし○千世萬代とは千年萬年といふ事なれは世は年也さて日を重ぬるを日を過すといひ時を重ぬるを時を過すといふなれはこゝもうきなから久しくそ年を重けるといふ義なりとせんに何の子細かあらん

春日社歌合に松風　家隆朝臣

春日山たにの埋れ木くちぬとも君に告こせ峰の松風

上句は我身のうへをたとへたり春日山谷のとは藤原氏のかたはしなるよしにて身のえなりいてすして年老たる意なり嶺の松風は山の縁にて風は物を吹つたふるたよりなる故に此よしを君に告申せと也○已上みなよろしこせは俗にくれよと云詞にあたる君に告こせは君に告てくれよ也萬葉集に乞字書る所もある即くれよの意なり　三句もゝしは輕く添たる詞にて常のともとは異なり○是もよろし

宜秋門院丹後

何となくきけは涙そこほれぬる苔の袂にかよふ松風

○上下折かへしてみるへし苔の袂とは此人尼になりて後の歌なるへし松風は哀なる物なるに苔の袂にかよふかいとゝあはれにてきけは何となく涙の落ると也

述懐百首に紅葉　俊成卿

あらし吹嶺の紅葉の日にそへてもろくなり行我涙哉

日にそへてといふは月日のうつり行まゝに其事もそれにたくひてまさり行こゝろ也さて日にそへて涙のもろくなり行はうき事もまさりて年の老ゆく故也○みなよろし

題しらす　宮内卿

竹の葉に風ふきよわる夕暮の物の哀は秋としもなし

竹の葉に風の吹よわる夕くれの哀なる事をおもへは物のあはれは必す秋の夕くれにかぎれる事もなしと也○此說の如くなるへし　竹葉といふにいつともわかぬ意をこめたり○此意はなし　一首の意右のことくにはおしはからるれとも詞のとゝのひあしき故にさは聞とりかたくて此物のあはれなること也秋のやうにもあらすと秋の夕くれによめることくきこえていかゝ○これも故なきにはあらす

　一本に三の句夕くれにとあれとそれもわろし夕暮よとあらまほし○三の句よならんにはよく聞ゆにとある本もしよの誤にはあらしか

西　行

またれつる入相の鐘のおとす也あすもやあらはきかんとすらん

またれつるは表は入相の鐘をまてるにて○何の故に入相のかねをまてるならんいかに詞のおもてにもせよ入相の鐘をまつ主意なくては聞えぬ事也裏に死ぬることを待心をかねたり○表の意裏の意といふ事あるへくもおもはれす　さて下句其意をもちてかくては猶明日も死なすてやあらんの意をかねてよめり○あらはゝなからへてあらはといふ事きかんとすらんは入相の鐘を聞にやあらんといふ事にてかねたる意はなしいかにいはるゝにかあらん　四の句あらはあすもやと打かへして心うへし○上の句はたゝ死期をいそく義日かくるれは我命はよも明るまてはあらし曉のかねを限るとおもひしに猶なからへて夜も明夜か明れは我命はよも今宵ともいはし入相の鐘を限りとおもひしに其限とおもひてまたれし入相のかねの音を聞事かなもしかくなからへてあるならはあすもかく入相のかねを聞にやあらんと也

曉のこゝろを　　俊成卿

曉とつけの枕をそはたてゝきくもかなしき鐘の音哉

上句白樂天か遺愛寺鐘欹枕聽四の句上句にあはせては力なく何の味もなし○四の句もゝし大切也すへては夕くれはかなしく曉はいさましき物にいひなれたるを老ぬれは曉つくるかねの音を聞さへもかなしと也これ老後の述懷なり

百首歌に　　式子内親王

曉のゆふつけ鳥そあはれなる永き眠を思ふまくらに

生死長夜の眠をおもふ寤覺の枕に雞のなくを聞てよみ給へる意なり曉の鳥のなけは目のさむる物なる故に今それを聞につけて長夜の眠はいつかさむへきそと哀におもはると也〇一二の句やかて夜のあくる意あり一首の意はとくねさめして長夜の眠をおもふ枕に曉の鳥の聲かきこゆれは生死の闇をいてゝ白日のさとりをひらくへきほとの近よりしかとあはれ也と也

百首歌奉し時　土御門内大臣

くらゐ山跡を尋ねて登れとも子を思ふ道に猶迷ひぬる

〇上句は先祖の例を逐て大臣にまてなり給ひて御心やすき也下句は御子の昇進に滯る所あるをなけきおほすと也跡尋るのほる道まよふみな位山の縁也

百首歌に懷舊　俊成卿

むかしたにむかしとおもひしたらちねの猶戀しきそはかなかりける

たらちねは今のことくあまたの年をへさりしほとたに昔の人にてありしを〇初句は我わかゝりしほとたに也二の句はなき人にてありといふ事詞文にてめてたし　今はまして遠きむかしとなりぬれはいかに戀したひてもかひなきことなるに猶戀しくおもはるゝかはかなき意なると也〇いたくもたるはねと親切ならす下句年かよりてもやはり戀したはるゝかはかなき事となり

やまひかきりにおほえけるとき定家朝臣中將轉任のことまうすとて民部卿範光もとにつかはしける

小篠原風まつ露の消やらてこの一ふしを思ひおく哉

二の句はやまひかきりなるさまのたとへ三の句は此世に心殘りてえ死やらぬ意この一ふしは此中將轉任の一事をいひて子をそへふしは篠の縁なりおくは此世におもひおくにて〇此世に念の殘る事露の縁の詞也かせまつ露といふは風の早くふけかしとまつ意にはあらす露は風のふけは消る物なれは風のふくまての露といふ意なり〇此時範光卿は水無瀨殿の院司にてありしなるへし

題しらす　慈圓大僧正

世中を今はの心つくからに過にし方そいとゞ戀しき

○上の句は今は世を遁れんとおもひ定たる意下句はさやうの時は世に交りし年月の事をいよ〳〵戀おもふと也

世をいとふ心の深くなる儘に過る月日を打數へつゝ

○いつのほとは遁世すへしとかねておもひ定し月日ありてその月日をかそへてまつとなり

一方に思ひ取にし心には猶背かるゝ身をいかにせむ

一かたにおもひとるとは世をいとはしくおもふ心のひたふるなるをいふ猶そむかるゝはそむきて出家せしうへにも猶いとはしき也一首の意はもとよりひたふるに世をいとひし身なれはそむきたるうへにも猶いとはしくおもはるれは也既にそむきたるうへなれは此うへいかにともすへき方なきよし也

何故に此世を深く厭ふそと人のとへかし易く答へむ

おもふへきわか後世はあるかなきかなけれはこそは此世にはすめ

これらは世にいはゆる道歌なと云物のたくひにていとうるさし撰集に入へき歌ともおほえす○これはさる事也禪宗のはしめてわたりし比にてかやうの事めつらしかりしなるべし

西　行

世をいとふ名をたにもさはとゞめ置て數ならぬ身のおもひ出にせむ

○今は世を遁るへきにつきておもへは世にありしほとに何事もおもひ出のなかりし事此上は某は清く世をいとひ捨つる人そといふ名を浮世にとゞめ置て數ならぬ身の此世のおもひ出にせんと也此上人の初發心の比よまれし歌なるへし

身のうさを思ひ知てや止なまし背く習の無世也せは

○かやうに世の中か憂けれは遁世するといふ事かある故よけれと遁世といふ事のない世の中ならは憂き事もおもひしらぬ躰にて過してまうのてあらうと也

いかゝすへき世にあらはやは世をも捨てあなうの世やとさらにおもはん

初句三の句もしあまり例のいと聞くるし○此難常の事也陳答も又例のことしさてかく字あまりを自在によみても耳にたつ事もなきに玉葉風雅にはい

たく聞くるしきもあり作者の下手なる故にもあれと字あまりの歌をよき事と心えてわさと相かまへてよめりし物のやうにてある　二の句やは丶あはれなといふことく歎息の詞也此詞歌にはめつらしけれと此ころの書ともに折々みえたる詞也○然らは證文を引るへき也やはといふてには哀と同し歎辭なるへくも非す◎一本に此やはをこそとちめをおもはめとあれは○しるある本は用ひすとも此所より結句へつゝく證にてはあり　聞えやすけれとそはやはにて聞えかたしと思ひて後の人の改めたる成へし○異同といふ物みなしかのみあるわさなり外にもふときこえかたき歌は數々あるを後人の改めたる所もなけれはしかある本あらは一本とすへし正明か見あはせたる本にはなし二の句はもしいとかろし世にあらはやにてやもし疑ひのや也結句のんもしと始末せり常の事なるをいかにまかへてむつかしくいはるゝならむ　一首の意は我猶世にある身ならはあなうの世やといひてあはれ今世をすつへき物を一たひすてたるうへなれはいまはすへき方なしいかゝすへきと也かくおもふは捨た

るうへにてもなほうき事のある故也○一首の意出家をしてもまた世の憂きをいかゝしたる物てあらうそ世にある身ならはかやうの時に世でもすてゝアゝ世の中はうき物よとおもふてもあらうかなれど今はせん方なしと也二の句のやはあらうかのかにあたるすへて疑のやは詞の切る所にめくらしてかもしにかへてみる例也　結句更にといふ事は既に世を捨たるうへにてさらに捨まほしくおもふ心にていへるなれと二句世にあらはといふ歌なれは此心にはあらす　さらにおもはんといひては聞えぬこと也○これは誠にいかゝなり　初にすつる時にしかおもひしか今又さらにおもはんの意也とたすくへけれと○先にわか世を捨たるその時のやうにおもふてあらうといふ意にふとよまれたる也さては世にあらはといへるに叶はす世にあるほとならは初にすてし事はあるましけれは也○以上みな理窟也

何事にとまる心の有けれは更にしも又世の厭はしき

○すてに捨たる世なれは世のいとはしきといふ事はあるましき也しかるにかくいとはるゝは何事か

うき世に心のとまりゐて捨しうへにも又世をいとふならんと也

入道前關白太政大臣

昔より離れ難きはうき世哉かたみに忍ふ中ならね共

かたみにしのひてむつましき男女の中こそはなれかたき物なれそれにはあらねとも昔よりいとひ離れかたき浮世そと也○此義也よく解えられたり

下句我とうき世との間をいへるやうにも聞ゆれとも○誰も此義に心付事也　さては中といふことといかゝなるうへに一首の趣おかしきふしもなし○かにかくに初の義也

百首歌奉しに　　慈圓大僧正

いつか我み山の里の淋しきに主となりて人に問れん

○み山のさとのあるしとなるとは世をのかるゝ事をいふなり

題しらす　　寂　蓮

數ならぬ身はなき物になしはてつ誰ためにかは世をもうらみむ

身のためにこそ世のうきをも恨むへけれ身をなき物になしはてつるうへはたかためにか恨みんと也

○在俗の比の歌なるへし

頼みありて今行末を待人や過る月日を嘆かさるらん

○われは行末たのもしくおもふにもあらねは月日のすくるをおしむことなるか行末にはかくあらんと心にたのみのある人は過る月日を嘆かさる事かしらぬと也

守覺法親王家五十首歌に　　源師光

なからへていけるをいかにもとかましうき身のほとをよそにおもはゝ

わか如く賤き身の分際をよその人のうへにして思はゝかくうきに堪てなからへゐるをいかはかりかもとかしくおもはんといへるにておのかうき身なからもなからへゐることをはちたる意也

題しらす　　八條院高倉

憂世をは出る日毎に厭へ共いつかは月の入方をみむ

いとへとも月の入かたをいまたえみすとこそいふへけれ○かくいへはみともなし　いつかはといへるは上句ととゝのひよろしからす○三の句の下にいまたえ死やらすかくてといふ詞をそへてみるへし三の句にて切るゝ故かくの如き意こもる也上句

は東方の事下句は西方の事にて反對也　下句はいつか西方極樂に生れんの意なり出る日といへるは月の入といふにむかへたる也○これも反對也　此歌句の首ことにいもし四つありて聊かしかまし○是はさもあらす

西　行

情有し昔のみ猶忍はれて長らへまうき世にもふる哉

○初句風流を盡せし也猶は世をすてゝもやはりの意風流なりし昔の立俗の事のみ世をすて家を出てもやはり戀しくて長生する事のきらはるゝ娑婆に年をふる事のあちきなき事よと也

寂蓮法師人々すゝめて歌よませ侍けるにいなひて○西行上人は我はえよましといはし也　熊野に指てける道にて夢に何事も衰へゆけと此道こそ○和歌の道也　世の末にかはらぬものはあれ猶此歌よみ給へと熊野別當湛快三位俊成に申と見侍りて○湛快か俊成卿に此寂蓮かすゝむる百首をよみ給へと俊成卿に申せしと上人の夢にみえし也猶とは俊成卿かの百首を辭し給ひしを湛快しひすゝむる意はへ也さては神慮にかなへりと思ひて上人もよまれし也驚きなから此歌をいそきよみ出してつかはしけるおくに書付侍ける

末の世も此なさけのみかはらすとみし夢なくはよそにきかまし

○なさけは風流にてこゝは歌の事也結句はわれはよましといふ事一首の意何事もおとろへ行末代にも此風流はかりはかはらぬと神のゝ給ふ夢をみすはみつからはよますしてよその事にきくへしと也さて此神の御告の如く詠歌の道此時まては古に劣るともなかりしを爲家卿よりこなたひたくたりに下りて行末いかにと心ほそきはかりなり

千載集えらひ侍ける時ふるき人々の歌をみて

俊成卿

行末は我をも忍ふ人やあらんむかしをおもふこゝろならひに

三の句の下へと今おもはるゝといふことをそへて見るへし然らされは詞たらす○そへてみされはたらねともしりそへてみるへきやうによめるうたなれは詞たらぬことはなし

崇德院に百首歌奉けるに無常

世中を思ひつらねて眺むれはむなしき空に消る白雲
○世の中のはかなさをおもひつゝけて外の方を見出たれはむなしき空にしらくもかきゆる世はみなあのやうにはかなき物そとなり

百首歌に　式子内親王

暮るまも待へき世かは仇し野の末葉の露に嵐たつ也
くるゝまとは露は夕の物なる縁なりあたし野は仇なる意にとる嵐たつなりとよみ玉へるは露の今きえむとするさま也嵐の吹立て露のきえむとするをみて世の人のいのちも此露のことくにて無常の風の吹来なは暮るまてをも待へきにあらす今もきえなむ物をと也二の句のかはといへる詞世人を深くいましめたる意なり四の句草葉といはて末葉といへるも露のあやふきことをつよくいへる也嵐吹といはてたつといへる俄なるさま也吹にてはのとか也すへて歌は一首の趣にしたかひていさゝかの事にも心をつけて詞をつかふへきなり

神祇歌

大将に侍ける時勅使にて太神宮にまうてゝよみ侍ける　摂政

神風やみもすそ川のそのかみに契し事の末を違ふな
三四の句は天照大御神と御先祖天児屋命と君臣の間の御事也結句は君臣の間いつまてもそのかみのことくあらせ給へと也○以上皆よろし　かみといひ末といへる川の縁也○これはさる事にそ有へき

おなし時外宮にてよみ侍ける　定家朝臣

契ありてけふみや川のゆふ葛長き世迄も掛て頼まん
見るといふことゆふかつらにはえたしからぬ詞なり但しこれは見るは宮川のことにて木綿かつらへはかゝらぬにも有へし○一首の意縁かありてけふ此宮川をみたる事其宮川にてゆふかつらをかけて大神の御めくみを萬代まてもたのまんとなり

大神宮歌中に　○此詞書荒涼なり上に太神宮歌合にとありて此天皇の御歌ありこゝも合の字落たるにはあらしか諸本如斯

太上天皇御製

眺めはや神路の山に雲消てゆふへの空にいてむ月影
初句はみまほしくおほしめす也二の句より下はそのかみ東の北條かよこしまなるしわさに障へられ玉ひて天の下の政おほしめす御心にもえまかせ給

はぬことを雲のさはりにたとへてうれたき御心を大御神にうたへ祈り給なるへし○此天皇の御歌に北條をにくませ給事時々みゆことに太神宮にたてまつらせ給御歌なれは其御心はへならんもしりかたし其義ならは二三の句は太神宮の神徳にて北條ほろひうせてといふ事下の句は天か下靜謐して御心淸き御代とならんといふ事也されと詞のうへいとほのか也なを伊勢國に御幸ありて神路山の月をみそなはし給はやとよませ給へるにやあらん姑二義也

神風や豐みてくらに靡くしてて掛仰くといふも畏し

○とよみてくらにかけたるしての神風になひくといふ句つゝきにて上の句は序かけてとかゝる御口のはにかけて神徳をあふくとの給はせんもかしこくおほすと也とよみてくらとよは豐大の義俗にタツフリといふ意はへみてくらは御幣物也倭文五色絁木綿麻なとをはしめ種々神に奉らるゝ物の事しては今もしめなはなとに物するやうに紙をきりてたれて御幣物につけたるを云

題しらす　　西行

宮柱したつ岩ねに敷たてゝ露もくもらぬ日の御影哉

○上句は大祓詞にしたつ岩ねに大宮柱ふとしき立とあるによられたり四の句露もはいさゝかも也雨露の露をかねすして打まかせていへるめつらし五の句は大祓詞に天のみかげ日のみかけとかくりましてとあるによられたりその本文は蔭の字の義なるをこゝは影の字の義にとりなして大神の御神徳をいへるなり一首の意は大宮柱を下つ岩ねに太敷たてゝおはしましていさゝかもくもらせ給はぬ大神の神德そと也

神路山月さやかなる誓有て天の下をば照す也けり

味なき歌なり神にちかひといふ事を多くよむは佛道の心より出たるひかこと也かの佛のことくなる誓といふことはすへて神にはなき事なるをや○一首の意は大神はくもらせ給はぬゆゑある御神德にて天か下をてらしおはしますと也

伊勢の月讀の社に參て月をみてよめる

さやかなる鷲の高ねの雲ゐより影和くる月よみの杜

二の句は天竺の靈鷲山にて佛の事也四の句はこれも佛の道の意にて佛のかりに神とあらはれたるよ

し也すへて神祇の歌に影やはらくる光やはらく塵にましはるなとよむ詞はから書老子に和光同塵といへるより出て意は佛の道の意にてよめるひかこと也神にさることあらんやはそもほうしのよまんは猶さも有へきをほうしのいふにならひてたゝ人もつねによむことゝなれるはいとかたはらいたきわさ也かし

神祇　　慈圓大僧正

和くる光にあまる影なれやいすゝ川原の秋の夜の月

月のいすゝ川にうつれるは神のやはらくる光のあまれる影そと也○影のあまるとは餘光といふもしをおもへるにやあらん

公卿勅使にてかへり侍けるにいちしの驛にて　　中院入道右大臣

立返り又もみまくのほしき哉御裳濯川の瀬々の白浪

○よくきこえたる歌也

入道前關白家百首歌に　　俊成卿

神風や五十鈴の川の宮柱いくちよすめとたて始め劔

四の句すむは宮に住にて○大御神に鎭りおはしませとなり　川の縁の詞

五十首歌奉し時　　越　前

神風や山田の原の榊葉に心のしめをかけぬ日そなき

○神風は伊勢の枕詞なるを五十鈴川とつゝき山田の原とつゝくはいひなれたる上の事にて古く例あり下句は日々に大神に祈をかけ奉るといふ事なり

社頭納涼　　大中臣明親

五十鈴川空やまたきに秋の聲したつ岩ねの松の夕風

空やまたきに秋なるらん松の夕風は秋の聲しけりといふことをつゝめてよめる也三四のつゝきは秋の聲しけりとのいひかけ也下つ岩ねは神の宮にいひならはしたる事にてその神の宮の下つ岩根に松は生る物ならねと岩ねの松といふに下ついはねをかりたる也○此本文の取さまいたくしひたる事にて下といふもしあまりたり松風をまち暑さを避るわさは或は扁舟をうかへ或は高樓に上りなとこそすなれかけまくもかしこき大御神のおはします大宮にしも納涼せられけんいかなる不敬そも大宮に參るには必齋すること也前後齋して納涼するやうのしれ事やはあるへき題詠に何となくよまれたるなるへけれと猶敬神の淺き故也祭主にもなり

し人か引見て猶もいふへし
八幡宮の權官にて○權別當也　年久しかりける事を恨みて御神樂の夜まゐりて榊にむすひつけ侍ける○二月臨時祭の夜の事也詞書の長きを云々とて省かれたるか前後にあり事の樣わきかたけれは今皆注す

法印成清

榊葉に其いふかひはなけれ共袖に心を掛ぬ日そなき

二の句いふに木綿をいひかけたりかなつかひのみたれたるよりかゝることさへある也○そのいふかひはなけれともとは正別當にならさる事下句は大神のめくみにてつゐにはならんと頼む也

文治六年女御入内屛風に臨時祭かける所

俊成卿

月さゆるみたらし川に影みえて氷にすれる山藍の袖

影みえては山藍の衣きたる人の影の月によりてうつる也○山あゐの袖は山あゐといふ草にて蝶鳥なと摺し衣いはゆる小忌なり新嘗會御神樂八幡かもなとの臨時祭にきる物此屛風の繪に賀茂臨時祭かきたる其祭は十一月也　四の句は月の影の氷の如くみゆる故にいふ○月は山あゐの袖の氷にうつりてみゆる影也氷は實の氷也折からを以てたとへにあらぬ事をしるへし　さて山あゐの衣はすりたる物なる故にその緣にすれるとはいへる也○一首の意は月のはれたる夜御手洗川に人影かうつりて小忌衣の梅柳蝶鳥を山あゐて氷に摺たやうにみゆると也

社頭雪　按察使公通

ゆふしての風に亂るゝ音さえて庭白妙に雪そ積れる

○ゆふしてとは榊に木綿をつけたるを云今紙をきりてつくるは其遺風也

十首歌合に神祇　慈圓大僧正

君を祈る心の色を人とはゝたゝすの杜のあけの玉垣

下句あけの玉垣の如しといふ意なり古語にあかき心といひ漢文にも赤心なといひ又世に丹誠といふもおなし○こゝろの色といひあけの玉垣とあれは赤心といふ事也赤心はよき心といふ事なれとこゝはしはらくまことの心としてみるへし

みあれにまゐりて社のつかさおの〳〵あふひをかけゝるをよめる　賀茂重保

跡たれし神に逢日の無りせは何に賴みを懸て過まし

すへて神に跡たるといふも佛法詞なり○兩部神道世に行はれてかゝる事もある也二三句神のめくみに逢日のなかりせはといふ事かけてはあふひの緣の詞

社司とも貴舟にまゐりてあまこひしけるついてによめる　賀茂幸平

おほみ田の潤ふ計せきかけてゐせきに落せ河上の神

○おほみ田はかも神の御田也ゐせきとは川の水を田にせきわくる所河上の神は貴船の神也三四の句つゝきゐせきかけておとせ也ゐせきに水を溢れさせて田へおとし入よとなり

鴨社の歌合とて人々よみ侍けるに月を　鴨長明

石川やせみの小川の清けれは月も流れを尋てそすむ

○清き所をもとめて月のすむとなり

文治六年女御入内屛風に春日祭　入道前關白太政大臣

けふ祭る神の心や靡くらんしてに波たつさほの河風

○してのなひくをみて神の心のなひくやうに思はるゝ也してに波たつとは河風にしてのなひくか波のたつやうにみゆる也

家に五百首歌よみ侍ける時神祇

天の下三笠の山の蔭ならて賴む方なき身とは知すや

○初句を雨にとりなして笠の緣也

俊成卿

春日野のおとろの道の埋れ水末たに神の驗あらはせ

初句は藤原氏の意二の句は大臣の末といふ意に大臣を棘路といふ故也　三の句は我身のうつもれたるよし也下の句は我身こそあれ子孫にたにかく祈るしるしをあらはして榮えしめよと也○御子定家卿中納言御孫爲家卿大納言にて再家の榮しは此歌の應驗あるに似たり　末は水の流れの末といふ緣あらはせもうもれ水の緣なり

最勝四天王院障子に小鹽山書たる所　大僧正慈圓

小鹽山神のしるしを松の葉に契し色はかへる物かは

○神のしるしをまつといひかゝれりかへるは色の淺くなる事一首の意は小鹽山の神の御德をまちてその御德を松の葉に契置つるうへはいつまても色のあする時なしと也

日吉社に奉ける歌の中に二宮を
和くる影そふもとに曇りなき本の光は峰にすめとも
○上句はかゝりに神となりて日枝の坂本におはします事下句は本地の佛は日枝の山上におはしますといふ事某堂の某佛は二宮の本地也といふ傳あるなるへし

述懐
わか頼む七の社のゆふ襷かけても六の道まかへすな
○七の社は日吉山王なり大宮二宮聖眞子客人大禪師三宮八王子等也ゆふたすきは木綿にてつくりたるたすき神饌御幣物なとに預る神なぎのかくる物也六道四生といふ事あり四生は聲聞縁覺佛菩薩さとりたるうへ也六道は地獄餓鬼畜生修羅人間天上なり迷途也一首の意は我たのむ山王七社の御ちからにてきはめて六道の迷の道にかへし給ふなと也七の社六の道と對して力をひとしうしたりこれをかけ合とす
おしなへて日吉の影は曇らぬに泪怪しき昨日けふ哉
結句みたりなり○一首の意をこまかに說てなほみたりならは其ことわりをいはるへきにや或抄に日吉の和光同塵のかけはくもらす衆生迷闇をはらし給ふ利生方便なるに何とて心のくもるそといふ意を泪あやしききのふけふ哉と述懐し給へりきのふけふとはあなかちにさしつめたる日限にあらす只此ころ哉といふ心也と有說を本義として子細をいはるゝにやあらん此歌は讒者の口に此御家の御ためよからぬ事を申者ありて大事なりける時日吉に御願たて給ひて猶御心安くもおほさゝりし程の御歌なるへし下の北野に奉給ふ歌と同時にや一首の意は日吉の神の御影は世上おしなへてくもらぬ故終には罪はかけぬへき事なから世のきこえ物むつかしき昨日今日はあやしく涙のこほるゝ事と也或抄にたゝ此比といふ意也といひてたすけたれと此比の意にても此ころといふへきよしなくてはいかゝ○かの物むつかしくいひさわくほとをいふ
諸人の願ひをみつの濱かせに心すゝしきしての音哉
ひえいふもと湖にそひて御津の濱といふよしかの社の舊記にみえたり七本柳といふあたりの事か今もしかいふにやあらん　下句おのかねかひをみちたらんにこそかくもいはめ諸人にてはいかゝ○

自他たかへりと思はれたる也四の句諸人にかけてみてもねかひみちたらんには心涼しきといはんに子細あるへからすされと是は上の歌の事はてゝ御くもりはれたる比其報賽の御歌にやさらは諸人のねかひのみつといひて我ねかひのみちたる事をもこめたるなり一首の意諸人の願をみてしめ給ふ大神の神力にて我くもりもはれて心すゝしくなりぬる事と也　又してに音も似つかはしからす○してとは木綿してもあれと榊に紙きりかけしをいへるなるへし風の吹て音あらんに似つかはしからすとはいかゝすへて述懐の歌には子細あるか多きを其心してみるへし

　北野によみて奉ける

覺ぬれは思ひ合せてねをそなく心つくしの古への夢

上句或抄に和尚の御身の上に菅家の讒にあひたまひしたくひの事おはしける比の御歌にやと云りさひも有へしさる由詞書になくては聞えぬ歌也○述懐の歌に此類多し子細を注し難きも有物也　下句菅原大臣のみつからよませ給へるやう也いかゝ○菅原大臣の御歌ならはいにしへの夢とはよませ給はし物をや一首の意大神のつくしに流され給ひて心つくし也し昔を夢に見て覺たれは今の我身に思ひ合せてねを泣と也　あはせて夢の縁のことは也

　熊野に參て奉り侍し　太上天皇

岩にむす苔踏ならす三熊野の山のかひある行末もかな

○御一首の意岩にむす苔をふみならしてみくまのゝ山のかひをおはしますしかかひある御世の行末もかなとおもほすと也山の以上序の如し

　新宮にまうつとて熊野川にて

熊野川下す早せのみなれ竿さすかみなれぬ浪の通路

○みなれ竿さすとかゝりてみなれぬと詞をかさねたり度々まうてさせ給ふ程に熊野川の早瀬の波のかよひちもさすかめなれ給へりと也

　熊野本宮燒て年の内に遷宮侍しに參て

契あれは嬉しきかゝる折に會ぬ忘るな神も行末の空

○上句は造營事はてたる事かゝる上は行末の事を神もわすれ給ふなと也此御歌も山のかひある行末もかなとあるも承久の事を下におほしてのこと也

釋敎歌

五月はかり雲林院の菩提講にまうでゝよみ侍ける　　肥後

紫の雲のはやしをみ渡せは法にあふちの花咲にけり

紫はあふちの花の色也○一首の意紫の雲の多くあつまりたる所を見渡せは有難き法にあふといふ樗の花が咲たるよと也

涅槃經よみ侍ける時夢にちる花に池の氷もとけぬなり花吹ちらす春夜の容と書て人のみせ侍けれは夢のうちに返しすとおほえける歌○涅般とは佛の入滅の事ちる花にといひ花吹ちらす春の夜の容といへる佛のかくれ給へるたとへなるへし二月十五日なれは折からよせ有上下ことはつゝかす夢想の歌多くはかくの如し

谷川の流れし清くすみぬれは隈なき月の影も浮ひぬ

○佛の入滅は假初の事にて實は如來常住といひ不生不滅といひて在か如く不在か如なるを谷川の水の流れ清く澄は月影の浮ふか如しと例たる成へし

述懐

願くは暫し闇路に休らひてかゝけやせまし法の灯火

ねかはくはとやせましと意かけあはす○此難はいはれたり　猶もかゝけんなとぞあるへけれ○ことわりはさる事なから一句雄壯ならす

とく御法きくの白露夜は起てつとめて消む事をしぞおもふ

本歌音にのみきくの白露よるはおきて○ひるはおもひにあへすけぬへし　云々とく御法をきゝて夜のほとはおきゐて行ひて明朝はわすれておこたらん事をおもふと也○なほ死る事なるへし忘れ怠る義とはいと物遠し　つとめては明朝也○勤行の義と明朝の義とをかねたり　或抄に夜はいねす勤めての上に死む事を思ふなりといへるはひかこと也○此説も勤行の方のみにて明朝の義を忘れたれはわろし　もし其意ならは三の句よるもとこそいふへけれはといへるはつとめてにむかへたる詞也○はの字はよるは勤めて明朝は死ん事を思ふといふ義朝聞道夕死可矣といふ意はへ也もとすれは或説の如く聞ゆれとゝ迂遠に砕けたりけに此説はひがこと也一首の意はとく御法をきゝてよるはおきゐて苦修勤行して明朝はしなん事をねかひおもふと也これ厭離穢土欣求淨土の義なり又下句を生死不

定の義としてあす死なんもしり難き事をおもふ義ともすへしされと三四五のつゝきよる起ゐてつとむるあすしなん事もしりかたき事をおもへはとひ殘すへき語勢にてはもじぞもしに叶はすなほ初の說やよからん　又ことをしそ思ふといふはきえむ事をうれへおもふ詞なり〇たゝおもふと云詞なれはねかひ思ふもうれひ思ふも所によりて定むへしこゝはねかひ思ふ也たとへは鶴の千年龜の萬代をもて人を祝して君にゆつらん事をそ思といはゝ千年萬代を君に讓らんとねかひ思ふ義なるへしさらはこゝもねかひ思ふ義となとか聞えさらんもししなん事をねかひ思ふ心ならは消んとそおもふといはてはかなはす〇事の字の有無にさせる子細なしたゝ同し事也されと語勢に緩急あり世をうき物に思ひて劍にふし水に赴ても死なんことをおもふにはしなんとそ思といふ方まさる語勢急なる故也こゝは後世の樂果をみてあすにもしなはやとおもふなれは其意さしもゑならす事の字ある方勝れり　又つとめてを行ひつとむる意にみたるもつたなし〇つとめては明朝の義又勤行の義二義を兼たりこれ秀句とて和歌の常也何かはつたなからん

極樂にまた我心行つかす羊の歩みしはしとゝまれ

〇或抄に此句は淨土宗の他力の本願に乘して往生極樂する心にはあらす自力の觀念をこらして即身成佛の樂を極るなるへしといへり作者の人品をおもふに台家の義なれはさる事也上句は觀無量壽經の觀念の未成就なる也四の句は屠所に赴く羊の一歩々々に死のちかつく事人間の命のはかなきたとへ也一首の意は我心至心ならさる故極樂にいたり難し年をへて觀念したらは觀念も成就すへきにはかなき命もしはしは延よと也

觀心如月輪若在輕霧中の心を　　權僧正公胤

わか心また晴やらぬ秋霧にほのかにみゆる有明の月

〇金剛界儀軌に復必白言最勝尊我不レ見ニ自心一此心爲レ相何諸佛咸告言心相難ニ測量一授ニ與心等言ニ即誦ニ徹心明一觀レ心如ニ月輪一若レ在ニ輕霧中一如レ理諦觀察と有わか心のかたちをみんと思はゝ徹心の明といふ咒文を誦して觀念すれは月輪のうす霧の中にあるか如くみゆるといふ本文也此歌もその意也初句心の下にはもしをそへみるへしわか心の相

はといふ義なり
家に百首の歌よみ侍ける時十界の心をよみ侍けるに縁覺
奥山に獨うき世はさとりにき常なき色を風に詠めて
題の十界は佛と菩薩と縁覺と聲聞と天と人と阿修羅と餓鬼と畜生と地獄と也二三の句は縁覺を獨覺ともいふ其意なり○自利のみにて利他の功德なき故獨覺といふなるへし　下句は飛花落葉をみて無常を觀する○このたくひ十二ありて十二因縁といふ　縁覺の事也
心經のこゝろをよめる　　小侍從
色にのみ染し心の悔しきを空しとゝける法の嬉しさ
○心經の中に色即是空とあるを文字のまゝによめる也一首の意わかきほとはおもふ人に心をうこかして色に染し事なれは惡趣の縁たるへきを空しくなると說し御經のうれしき事と也
攝政家百首歌に十樂の心をよみ侍けるに聖衆來迎樂　　寂蓮
紫のくもちにさそふ琴の音にうき世を拂ふ嶺の松風
上句は來迎の菩薩の音樂也四の句は此世を忘れ離るゝ意なるをはらふといへるは松風の縁なり○はらふはたゝはなるゝ也　松風琴の音に縁ありされと琴の音にうき世をはらふといへれは峰の松風は用なく重なりて聞ゆ○にもしになつみて琴は琴松風はまつ風別物とおもはれたるにやこれは嶺の松風すなはち琴の音にて一物也一首の意嶺の松風は紫の雲路にさそふ聖衆來迎の琴の音にて浮世はなるゝおもひがするど也にもしはにての意なり五の句を初句の上へ廻らしてみるへし　よみ人の心は琴の音は嶺の松風にかよひて浮世をはらふといふ意なるへけれとさはよみえさりしか○嶺の松風は琴の音にかよひて浮世を拂ふといふ事にてしかよみえたり　又おもふに三の句のにもしはもしははもしを誤れるにあらさるか聖衆來迎の琴の音は浮世をはらふ松風そといふ意也○三の句はもしに直したる說也
蓮華初開樂
これや此うき世の外の春ならん花のとほその曙の空
題は極樂の蓮花の內に生れて其花のはしめて開けたる時の樂也　それは化土往生といふこゝは報土

往生の義にてたかへり信士の臨終に佛菩薩來迎するこれを聖衆來迎樂といふさて極樂に引接せられたる時其人の蓮座はしめて開くこれ蓮花初開樂也

すへてこれや此これそこのといふこのはかのといふ意なり○かならすさす所ありこゝは彼極樂淨土の春ならんと也　物語なとにもかのといふへき所をこのといへること多し此歌にてはうき世の外の春とは極樂のさまをいへるにて其極樂のさまを始てみてこれや常にねかひしかの極樂ならんといふ意也下句は蓮花の初てひらけたる事を花の咲る所の戸をい曙にあけたる事にたとへていへる也○下の句にひかれて春ならんといへるなれと題の意には物遠くやあらん

快樂不退樂

**春秋も限らぬ花におく露は後れ先たつ恨みやはある**

上句は極樂のたのしみの不退なるをたとへたる也○不退とはかはる事なくかきりなき事極樂は無量壽にて其たのしみも不退轉なる也　四の句は末の露もとの雫や○世中のおくれさきたつならひなるらん　云々の歌の意にて極樂の樂はさやうの事もなしと也○極樂は無量壽なれは春秋といはぬ花の樂におもふへき人に死別するうらみもなしと也

引接結緣樂

**立返り苦しき海におく網も深きえにこそ心ひくらめ**

上句は歸二來穢國一度二人天一といへる文の意にてそれを網をはり置にたとへたり○二の句は生死の苦さといふ娑婆世界の事也題は衆生を引接して出世の緣を結はしむる事すなはち利他の義也極樂に生るれは自度するのみにあらす人をも度する也　下句は其中にも取にき緣ある者をまつ度せんとする意なり世々生々恩レ所二知識一隨レ心引接と往生要集にもいへるか如し深き江に緣をかねたりひくは網によしある詞なりこれまて同し十樂の内なり十樂といふことは往生要集といふ書に出○一首の意極樂に往生して又娑婆に歸來てまつ緣ふかき人に心をよせて濟度するとなり

法華經廿八品の歌よみ侍けるに方便品唯有一乘法の心を

慈圓大僧正

**いつくにもわか法ならぬ法やあると空ふく風にとへとこたへぬ**

題の文は十方佛土中唯有二一乘法一無レ二亦無レ三とあり四の句は同經の中に如下風於二空中一一切無中障得上といへる文によりて空ふく風はいつくまても行物なる故にいつくにも云々といふに合せたり答へぬとはいつくにも此法ならぬ法はなき故にありとはえこたへぬと也

化城喩品化作大城郭

思ふなよ憂世の中を出果て宿る中にも宿はありけり

思ふなよとはうき世をいてゝやとりたる所をこゝはかりとおもひてこゝろをとゝむなよ猶關にも宿は有と也其事は法華經を見てしるへし○或抄に化城喩品とはかりに大城廓を作るといふ義なりたとへは寶をもとめに人々をつれて上るに其人々つかれたるを五百由旬上るへき山路の半にかりの城をあらはして汝か尋る所はこゝなりと示せは人々悦ひてつかれをわするゝ時此導師又云こゝはかりの城なり今二百五十由旬上りて實の寶所の城につくへしといひけれは其時かの諸人今は安く二百五十由旬を上りて實の寶前に着たりかくの如く聲聞を導給ひて先生死をいとはせて羅漢果を證せさせ給ひて其後實大乘の法花經を說て即身成佛を證せさせ給ふ云々とあり此たとへなりとあり　此歌おもふなよといふ事ことはたらさる故にとゝのはず

分別功德品或住不退地

鷲の山けふきく法の道ならて歸らぬ宿に行人そなき

わしの山は法華經を說たる所也かへらぬ宿とは題の不退地なり山といひ道といひ行といふみな緣の詞也一首の意はかへらぬ宿にゆくには此妙法の道ならて外に道はなしと也

普門品心念不空過

おしなへてむなしき空と思ひしに藤咲ぬれは紫の雲

聞名及見身心念不二空過一能滅諸有苦といへる文の意なり名といひ身といへるは觀音の名身にて觀音の功德をいへる文也○觀音の名をきゝ觀音の現身を見てさて心念もふかくおもへは其功德にてよく娑婆の苦を滅すといふ義なり　上句は經文にはなき意なれともかの文の空の字によりて意は異なれともむなしき空といひて結句の雲とかけあはせたるなり○さる事にやあらんされと聞名及見身といふ本文にむけに似つかすいかなる事ならん　四の句は心念にたとへ○さる事なるへけれと常に念す

といふ事を藤さくといひてはいと／＼物遠し　紫の雲は觀音の感應によりて能滅二諸有苦一のたとへ也○さる事なるへけれと紫の雲は與樂のたとへと聞えて抜苦には物遠し　よくよみえたりともみえぬ歌也○本文にかなはぬやう也別に說ある事歟

家に百首歌讀はへりける時五智の心を妙觀察智

入道前關白太政大臣

底清く心の水をすまさすはいかゝ悟りの蓮をもみむ

○妙觀察智とは諸法を觀念する妙處の智惠也一名蓮花智といふ蓮花は百花にすくれたるを以妙觀察智の諸智にすくれたるたとへとせし也心の水をすますとは觀念する事さとりの蓮とは智惠の妙所といふ事一首の意は觀念の心の水を底清く澄さすしてはいかてか悟の妙所のはちすを見んとなり

勸持品　正三位經家

さらすとて幾世もあらしいさやさは法にかへつる命とおもはん

○本文我等敬二信佛一當レ著二忍辱鎧一爲レ說二此經一故忍二此諸難事一我不レ愛二身命一但愛二無上道一我等於二末世一護二持佛所一レ囑云々とあるをそのまゝによめる也さらすとてとは此無上の道の爲に命を捨すとも也幾世もあらしは此世に此身何ほともあるへき物にあらす也さはかりはかなき命はおしますとも此無上の法にかへて護持せんと也

法師品加刀杖瓦石念佛故應忍の心を

寂蓮

深き夜の窓うつ雨に音せぬは憂世を軒の忍ふ也けり

初二句は加刀杖瓦石にたとへ○本文若說二此經一時有レ人惡口罵加二刀杖瓦石一念レ佛故應レ忍と有　三の句は應レ忍にたとへ○雨の音を忍草にてたへしのひたる義字義の如し　下句は念佛故といふにたとへたり○うき世をのきとはうき世をさくるか故也といふ義にて出家して世を避て念佛して居るか故也と云義になる也　さて結句は詞の表は忍草の生たる故也といふ事にてしのふといふに題の忍字をよせたるなれ共○しからす忍字は三の句にありてしか／＼をしのふはうき世を避たるか故なりといふ意結句は一首のしたてにいへる計也忍草にて窓うつ雨の音せぬなとの意にはあつからす　題の忍字の意は三の句にあれは此所彼文の意とことさしく

はあたりかたし○此所は本文の忍字の義にあらす上にいへるかことし　されとすへて佛經の文の意をよめる歌はさまてこまかにはいふへきにあらす○よみかたき故の事なるへけれと佛教の歌なれはとて別にゆるすへきにあらす此歌加刀杖瓦石を惡うつ雨にたとへたるは似合しからぬ心地す

五百弟子品内秘菩薩行のこゝろを

慈圓大僧正

古への鹿なく野への庵にも心の月はくもらさりけり

上句は釋迦の荒野園といふ所にて阿含經を說しを聞て富樓那か小乘空理をさとりて聲聞となりし事下句は其後法花經にいたりて內秘二菩薩行一外是現二聲聞一とてかの荒野園の時のさとりも外は聲聞なれとももとより內には菩薩の行を秘したる也と說たる意なり

人々すゝめて法文百首歌よみ侍けるに二乘但空智知螢火

寂然

道のへの螢はかりをしるへにて獨そいつる夕闇の空

題の二乘は聲聞と緣覺となり此二乘は小乘にて其智大乘よりみれはたゝ暗夜の螢火の如しといへる事也歌の意はしめにこの小乘をまつさとるを云夕やみの空とはいまた大乘の月の出さる意なりさてこれも上なる內秘菩薩行と同し事にて大乘の月出てこそ螢火はいふにたらされいまた其月の出さるほとはまつ螢火の光をしるへにせし意也獨といへるは獨覺の意をこめたるへし緣覺を獨覺ともいへは也一首の趣いてゝ行ところなれは初句もはたらきたり釋教にはよくとゝのへる歌也○かくの如し

菩薩淸涼月遊於畢竟空

雲晴てむなしき空にすみなから憂世中をめくる月影

菩薩は淸涼なる月の如くにて畢竟空にあそへとも衆生にましはる意也

旃檀香風悅可衆心

ふく風に花たちはなや匂ふらん昔おほゆる法の庭哉

此題は釋迦の法花經を說んとする時に衆喜瑞とてまつ衆生の心何となく悅はしくおほゆる瑞相のある是也二三一四五と次第して心うへし吹風にはむかしおほゆるといふへかゝれり下句はむかし日月燈明佛の法花を說んとせし時にもまつ此瑞相をあらはしたりしことを文殊のおもへる意にてさて今

釋迦佛もさためて法花を說給はんとするなるへしと思へる所か二三の句也昔おほゆるの緣に花たち花云々とはいへり

作是敎已復至他國

やみ深き木の下毎に契おきて朝たつ霧の跡の露けさ

題は壽量品の文にて醫師の譬とて醫師の子共に藥をあたへ置て他國に行しこと也こまかなる事は經を開き見てしるへし○經の大略醫師あり數多の子をもたり此子とも親のみぬほとに毒藥をくらひてなやめり親良藥を調してこれをあたふるに毒氣ふかく入てこれをのます其時おや其藥を子ともにあたへ置て我は他國へ行さて子のもとへ使をつかはして汝か父は死たりと告しかは此子ちからを落してかの藥をのみてたち所にいへしとなん毒藥を煩惱にたとへたる敎也此歌はその譬の大略をよめるにてよくも聞えす　初句は父の子を思ふ心のやみにて經のたとへの煩惱の深き意もあるへし○それまてはなしたゝ譬の上をあらく〵とよめる也　二の句は子共なり○三の句は是好良藥今留在レ此汝可ニ取服一勿レ憂レ不レ差作ニ此敎一已復至ニ他國一とあることなり　霧といへるは朝たつと聞ふかきと露けさとの緣也結句は其父死たりと聞て跡に小共の泣歎く意なり

此日已過命即衰滅

けふすきぬ命もしかと驚かす入相の鐘の聲ぞ悲しき

○出曜經に此日即過命即減少如ニ小水魚一斯有ニ何樂一とみえたり一首の意けふはまう過た命も其ことく減少したと人に氣をつける入相のかねは悲しきものそと也

棄恩入無爲　　　寂然

そむかすはいつれの世にかめくりあひておもひけりとも人にしられむ

○悲華經に流ニ轉三界中一恩愛不レ能レ斷棄レ恩入ニ無爲ニ眞實報レ恩者と有初句は棄恩佛道に入たる意二三の句は三界中を流轉する意四の句恩をおもひけりとも也一首の意は恩をすてゝ佛道に入すはわれも三界の中に流轉して父母を濟度する事もなけれはまことに恩をおもひたる者と父母にもしられし物を幸に佛道を修行して父母をも濟度して誠に恩をしりし人となりしと也

合會有別離　　源季廣

あひみても峰に別るゝ白雲のかゝる此世の厭しき哉

○涅般經に盛必有レ衰合會有ニ別離一命爲レ死所レ呑無有法常者とあり白雲のわかるとはかく別るといふことの有也一の句を三の句の下にめぐらして心うへし一首の意白雲の峰にわかるゝごとく相あふ事のありても必わかるといふ事のある此世なるかいとはしき事と也

聞名欲往生　　寂然

音にきく君かりいつかいきの松待らん物を心盡しに

○無量壽經に其佛本願力聞レ名欲ニ往生一皆悉到ニ彼國一とあり君かりは君かもとへ也音にきく君とは阿彌陀佛をさす此詞何となく似合しからす一首の意阿彌陀佛の御もとへいつか行へき身ぞ彌陀は我らの爲に種々の發願し心氣をやみて待おはすへき物をと也

心懷戀慕渇仰於佛

わかれにし其面影の戀しさに夢にもみえよ山端の月

○壽量品に當下生ニ於難遭之想一心懷ニ戀慕一渇ニ仰於佛一便種中善根上とあり或抄に歌の意は佛滅度の後こひしたひ奉りて夢にたにみまほしと思ふ心也方便に涅般し給ふを月になぞらへて其面影の戀しきとよりとあり

十戒の歌よみ侍けるに不殺生戒

わたつ海の深きにしつむいさりせてたもつかひある法を求めよ

○或抄に深き罪にしづむ殺生をやめてたもてはかひある佛法をもとめよと也といへり又たもつかひあるに貝と戒とをそへたりといへりさる事なるへし戒はかなたかへれと猶さる事なるへし

不偸盗戒

うき草の一葉なりとも礒かくれ思ひなかけそ沖つ白浪

三の句は人にしのひかくれての意かけそは浪の縁の詞白なみとは盗人のことをつねにいへり○漢の時白波といふ所より黄巾の賊おこりし事有しによてかの國にて盗人を白波といひならへるをうつしてしら波とはいふ也一首の意たとへいさゝかの物なりとも人にかくしてぬすまんとはおもひかくるなと也

不邪婬戒

さらぬたにおもきかうへのさよ衣我つまならぬつまなかさねそ

さらぬたにおもきとは佛法にては邪婬のみならすすへて女犯をは重き罪とする意なり重きもつまもかさねもみな衣の緣なり

不酤酒戒

花の本露の情は程もあらしゑひなすゝめそ春の山風

二の句のなさけといふに酒をこめたり○なさけに酒をそへたるにはあるへけれと此句露のなさけは酒をのむ風流といふ事にて露といふもしやかて酒にあたる也　三の句此世のたのしみのいく程もなくはかなきよし也四の句長き後の世の罪となることをおもへといましめたる意也春の山は其所をいへるにて風も花と露とにかゝりて程もあらしといへるによくかなへり○かくこまやかなるか先生の風なれとしかあまた所へかけてみては歌の意むつかしくなるをいかゝせん春の山風は醉をすゝむる料也さるは醉たる人の顔に風のふけはあつさやう〳〵にさめていよ〳〵酒のすゝむ物なれは也一首の意は花のもとに酒をのみて風流するもわつか人間五十年の間の事なりともすれは酒は永き世の罪犯す便に成物なる程にあまりに醉をすゝむるなはるの山風よとなり

入道前關白家に十如是歌よませ侍けるに如是報

二條院讃岐

うきも猶昔の故と思はすはいかに此世を恨み果まし

○不便品に十如是といふ事のあるその中のひとつなり報とは今生に我うき事のあるは前世にあしき事をせし報也といふ事一首の意かくの如くうき事のあるもやはりむかしの世にわか惡業せし故也とおもへはこそ少し心もなくさめもしその故とおもはすは何ほと此世のうらめしき事ならんもしりかたしと也

待賢門院中納言人々にすゝめて二十八品の歌よませ侍けるに序品廣度諸衆生其數有無量の心を

俊成卿

わたすへき數も限らぬ橋柱いかに立ける誓なるらん

○たてたるは柱の緣かやうに數かきりもなき人を濟度せんとはいかにめてたくたておはしましたる

誓願ぞとなり
美福門院に極樂六時讃の繪にかゝるへき歌たてまつるへきよし侍けるに讃侍ける時に大乘法を聞て彌歡喜膽仰せんと
今そこれ入日をみても思こし彌陀の御國の夕暮の空
○大乘法を聞て云々は和讃なるへし歌は題の意とは異なるか如し初句は今見奉るすなはちこれ也といふ事極樂六時の繪をみておもへるやう也二三の句は日の入るをみても極樂はかしこそとおもひつゝ年をへたりしといふ意その彌陀の御國の夕くれの空を今まのあたり見奉るか尊き事と也
曉いたりて波の聲金の岸によする程
いにしへの尾上の鐘に似たる哉岸うつ波の曉のこゑ
○いにしへのは婆婆にゐたりしほとゝいふ事岸うつなみの曉の聲か婆婆にて聞し尾上のかねの音に似たりと也
百首歌の中に毎日晨朝入諸定　式子內親王
しつかなる曉毎に見渡せはまた深き夜の夢そ悲しき
三の句定に入て觀念する意也○おもひわたせはといふ義とよみ給へるなれと下に難せられたることくにていかゝ　初句のしつかなるといへるにも定の意あるへしまた深き夜の夢とは煩惱の夢のいまたさめやらぬを云見わたせはといふ詞に夢は似つかはしからすいかゝ見渡す物をこそいふへきことなれ此題は地藏經といふ物にみえて地藏の事なるを此歌はみつからの事にしてよみ給へるは經の意にはかゝはらすたゝ文面によりてよみ給へる也○釋敎の歌には此たくひ多し　かの經には毎日晨朝入ニ於諸定ニ遊ニ化六道ニ拔レ苦與レ樂とも我毎日晨朝入ニ諸定ニ入ニ諸地獄ニ令レ離レ苦ともあれは也○みなよろし
西行法師をよひ侍けるにまかるへきよしは申なからまうてこて月のあかゝりけるに門のまへを通ると聞てよみてつかはしける　侍賢門院堀川
西へゆくしるへとおもふ月かけの空たのめこそかひなかりけり
○初句は極樂へ行道しるへにせんとおもひしといふ事月かけに上人をたとへたり一首の意は極樂へゆく案內者とおもふ人かひき合をちかくて門のと

のを通なから立よらぬがおもふかひなき事と也西へ行も空も月の縁の詞空たのめは俗に引合ちかへといふ詞にあたる

返し　　　　　　　　　　　　西行

立いらて雲間を分し月影は待ぬ景色や空にみえけん
○初句は門前を通なから立よらさりし事二三の句は影をもみせず行過し事下句またぬけしきをそらにみるとは我を待にはあらしとおし推量せし事やといひけんといひてよそけなるがをかしきなるへしいるまつそらにみゆるみな月の縁のことはなり

観心をよみ侍ける

暗はれて心の空にすむ月は西の山邊やちかく成らむ
○初句は煩悩のやみはるゝ也二三の句は菩提の心月輪のすめるなり下句は極樂往生の期のちかつく也

尾張廼家苞大尾

室松岩雄
古内三千代　校
保持照次

明治四十二年五月廿五日印刷
明治四十二年五月廿八日發行

定價金參圓



編輯者　室松岩雄
東京市麴町區飯田町五丁目八番地

發行所　目黑和三郎
東京市神田區三崎町三丁目一番地

印刷者　小西幸吉
東京市神田區三崎町三丁目一番地

印刷所　日本印刷株式會社

東京市麴町區飯田町五丁目八番地
發行所　國學院大學出版部